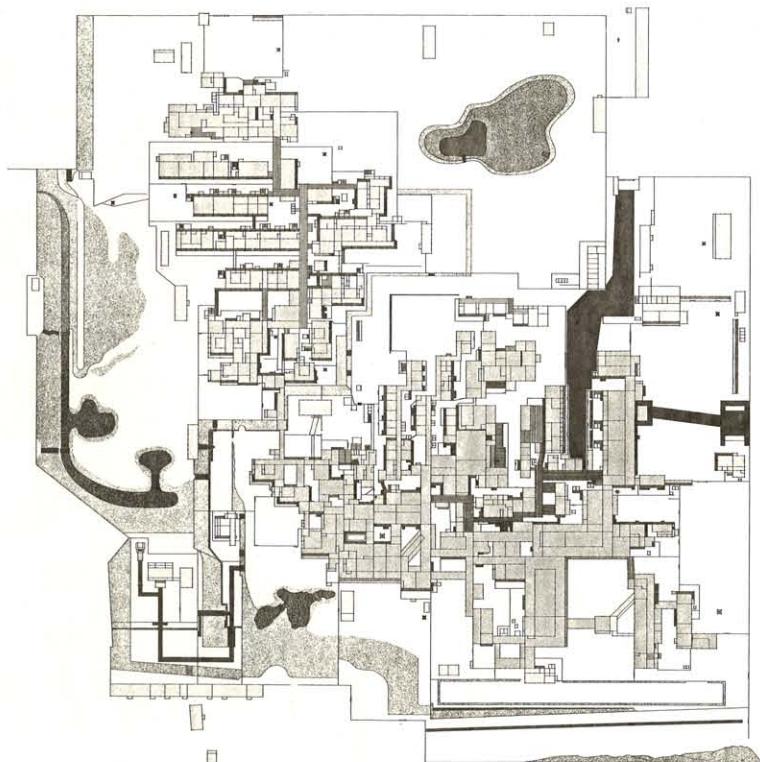


東北大学埋蔵文化財調査年報9

仙台城二の丸跡第10地点の調査

芦ノ口遺跡第2次・第3次調査

考察編—仙台城二の丸跡の考古学的調査—



東北大学埋蔵文化財調査研究センター

1998

東北大学埋蔵文化財調査年報9

**東北大学埋蔵文化財調査研究センター
1998**



1. 仙台城二の丸跡第10地点Ⅲ層出土陶磁器



2. 仙台城二の丸跡第10地点Ⅲ層出土土師質・瓦質土器



1. 仙台城二の丸跡第10地点Ⅲ層出土陶磁器



2. 仙台城二の丸跡第10地点Ⅲ層出土土師質・瓦質土器

序

東北大学の構内には、10万年前をはるかにこす前期旧石器時代から近世まで、永い歴史の貴重な遺産が多数地下に眠っている。本センターは、昭和58年から平成9年まで大小100件をこす構内遺跡の調査を進めてきた。

その結果、青葉山キャンパスや三神峯地区では、前期・後期旧石器、縄文時代の土器、住居跡などが発見されている。ことに青葉山は厚く堆積した火山灰層中に旧石器時代の数時期にわたる生活痕跡が保存されており、重要な埋蔵文化財包蔵地である。また、文科系四学部や図書館、記念講堂の立ち並ぶ川内南キャンパスは、仙台城二の丸や御勘定所の遺跡であり、複雑に重なりあう多数の遺構と膨大な量の遺物が発掘されている。さらに川内北キャンパスは、仙台藩の上級藩士の屋敷跡にあたり、多数の遺構と様々な生活資材が出土する。

発掘調査、その後の出土資料の整理、分析、報告書作成といった一連の作業における調査研究員の忍耐強い努力によって、最近、この構内遺跡の様子が全体的に推測できるようになってきた。ことに二の丸跡では、明治15年の火災で生じた厚い焼土の下に、詰門、玄関、小広間、御書院といった中枢施設、そして中奥がよく保存されていることが明らかになった。

地道な調査の蓄積によって、二の丸中枢施設、武家屋敷跡など構内遺跡の状況がよく把握できるようになってきたことで、近世城郭の中でも重要な文化遺産である仙台城二の丸跡をどのように将来に伝えていくのか、東北大学の教育・研究環境を整備する計画のなかに、こうした貴重な埋蔵文化財をどのように取り込んで活用していくのか、といった課題を検討していく必要が生じてきたといえる。

本年報では、仙台城古絵図や歴史史料との対比を行いながら、これまでの発掘調査成果にもとづいて、二の丸建物跡の配置と変遷を検討し、その復元を試みた。作成した二の丸建物配置推定図は、仙台城研究の手掛かりとして極めて重要な資料となるものである。さらにこの資料を通じて、仙台城二の丸跡という掛け替えのない埋蔵文化財に対する理解を深めて頂くとともに、構内施設の整備と充実をすすめていくうえで、遺跡との共生をはかる手掛かりとして活用して頂きたいと考えている。

本年度調査の実施、報告書刊行にあたって、施設部をはじめ関係部局には多大な支援と協力を頂いた。関係各位に心から謝意を表する次第である。

東北大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長 須 藤 隆

例　　言

1. 本年報は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査委員会が1991年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。また、これまでの仙台城二の丸跡の調査成果全体をとりまとめた研究成果を、考察編として掲載した。あわせて、「伊達治家記録」等に見える仙台城二の丸に関係する造営・修理関係記録の抜粋を、付編として掲載した。

2. 報告される遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下の通りである。

仙台城二の丸跡第10次調査地点　　1992年2月17日～3月5日　山田しょう・藤沢敦
(NM10)

芦ノ口遺跡第2次調査(TM2) 1989年10月23日～11月22日　佐久間光平・山田しょう

芦ノ口遺跡第3次調査(TM3) 1991年5月13日～5月31日　山田しょう・藤沢敦

3. 調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査委員会の委嘱を受け、埋蔵文化財調査室が行った(1994年度からは埋蔵文化財調査研究センター)。

4. 本年報の編集は、須藤隆の指導のもとに、藤沢敦・関根達人・菊池佳子が担当した。

5. 本文は、須藤隆・藤沢敦・関根達人・菊池佳子が分担執筆した他、第Ⅲ章4については、以下の方々に分析を依頼し、原稿をいただいた。

(2) 遺跡周辺の地形と地質：中川久夫(元東北大学理学部教授)

(3) C14年代測定：木越邦彦(学習院大学)

(4) テフラ分析：古環境研究所

(5) 花粉分析：竹内貞子(斎藤報恩会自然史博物館)

(6) 昆虫遺体：保谷忠良(宮城県立石巻養護学校)

これ以外の本文執筆分担は、以下の通りである。

考察編1・7：須藤隆

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章1～3・4(1)・5、考察編2・4・6(2)：藤沢敦

考察編3・6(1)：関根達人

考察編5・6(3)：菊池佳子

6. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる(敬称略)。

蟹沢聰史(東北大学理学部)・阿子島香(東北大学文学部)・本田泰貴(東北陶磁文化館)

仙台市教育委員会・東北大学考古学研究室・宮城県図書館

7. 出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターで保管・管理している。

東北大学埋蔵文化財調査研究センター設置規程

(平成6年5月17日 規第56号)

(設置)

第一条 東北大学（以下「本学」という。）に、東北大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

(目的)

第二条 センターは、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査及び研究を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

(職員)

第三条 センターに、センター長、調査研究員及びその他の職員を置く。

- 2 センター長は、本学の専任の教授をもって充て、総長が命ずる。
- 3 センター長は、センターの業務を掌理する。
- 4 センター長の任期は、二年とし、再任を妨げない。
- 5 調査研究員は、本学の専任の教官をもって充て、総長が命ずる。
- 6 調査研究員は、センターの業務に従事する。

(運営委員会)

第四条 センターに、センターの組織、人事、予算その他運営に関する重要事項を審議するため、東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(組織)

第五条 委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 東北大学施設整備委員会各地区協議会の協議員 各一名
- 二 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授 若干名
- 三 発掘調査地に関連のある部局の教授又は助教授で、その都度委員長が指名するもの
- 四 施設部長

(委員長)

第六条 委員長は、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、必要があると認めるときは、委員会の同意を得て、委員以外の者を委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

(専門委員会)

第七条 委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、専門委員会を置く。

2 専門委員会は、委員長及び次の各号に掲げる専門委員をもって組織する。

- 一 調査研究員
- 二 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授 若干名
- 三 施設部企画課長
- 四 発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

3 委員長は、センター長をもって充てる。

(委嘱)

第八条 第五条第一号から第三号までに掲げる委員並びに前条第二項第二号及び第四号に掲げる専門委員は、総長が委嘱する。

(幹事)

第九条 委員会に幹事を置き、施設部企画課長をもって充てる。

(事務)

第十条 センターの事務は、当分の間、事務局施設部において処理する。

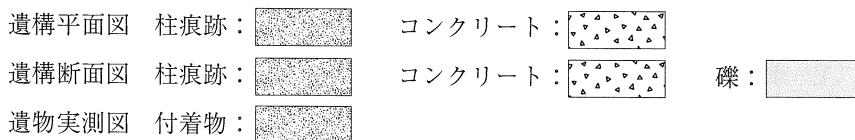
(雑則)

第十一條 この規程に定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項は、センター長が定める。

附 則 (略)

凡 例

1. 方位は、図 8 が磁北である以外は、真北に統一してある。
2. 図 1 と図 2 は、それぞれ国土地理院作成の、2万5千分の1地形図「仙台西北部」と「仙台西南部」、1万分の1地形図「青葉山」を使用した。
3. 川内地区の仙台城二の丸跡、および北方の武家屋敷地区にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」(縮尺500分の1)を使用した。
4. 遺物の実測図および写真の縮尺は、各々に示した。
5. 掃図中のスクリーン・トーンの表現は、特に記した以外は、下記の通りである。



6. 遺物観察表の法量の単位は、特に記載がないものは、cmである。
7. 引用・参考文献は、各項目の末尾に掲載した。また、本文中で、東北大学埋蔵文化財調査年報を引用する場合は、年報 1 という形で略記した。

発掘調査参加者

阿部志う 阿部友衛 伊藤千穂 稲部裕美 歌川喜恵子 梅沢みえ 太田すゑ子
太田はるよ 小川徳子 鎌田敏子 菅野春枝 菊地芳朗 佐伯晴子 庄子一夫 庄司正
鈴木ちよ 鈴木宏行 高木晃 高橋和子 高橋みや子 崔熙柱 千葉かつ 中鉢和子
中鉢司 津嶋知弘 津島秀章 中村衛 新沼よしえ 長谷川チエ子 横山東市

整理作業参加者

青井恭子 今泉八重子 内海薰 大塚玲子 熊谷宏靖 後藤真希子 古山友子
佐々木きみ子 庄司明美 白石浩子 独古史惠

東北大学埋蔵文化財調査委員会（1991年度）

委員長	学 長		西 澤 潤 一
委員	川内地区協議会委員長	(文学部長)	渡 辺 信 夫
	青葉山地区協議会委員長	(理学部長)	櫻 井 英 樹
	星陵地区協議会委員長	(医学部長)	平 則 夫
	片平地区協議会委員長	(遺伝生態研究センター長)	菅 洋
	文 学 部 教 授		羽 下 徳 彦
	文 学 部 教 授	(調査室長)	須 藤 隆
	文 学 部 助教授		今 泉 隆 雄
	工 学 部 助教授		飯 淵 康 一
	事 務 局 長		藤 村 和 男
調査員	文 学 部 助 手		山 田 し ょ う
	文 学 部 助 手		藤 沢 敦
幹事	施 設 部 長		山 本 努
	庶 務 部 長		堀 道 博
	経 理 部 長		山 田 清

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会

(1998年2月現在)

委員長	センター長	(文学部 教授)	須 藤 隆
	川内地区協議会	(文学部 教授)	安 田 二 郎
	青葉山地区協議会	(薬学部 教授)	大 内 和 雄
	星陵地区協議会	(医学部 教授)	大 井 龍 司
	片平地区協議会	(素材工学研究所 教授)	島 田 昌 彦
	文学部 教 授		今 泉 隆 雄
	文学部 助教授		阿子島 香
	理 学 部 教 授		蟹 澤 聰 史
	工 学 部 教 授		飯 渕 康 一
	東北アジア研究センター 教 授		入間田 宣 夫
	施 設 部 長		渡 邊 正 雄
幹事	施 設 部 企画課長		渡 邊 三 郎

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会

(1998年2月現在)

委員長	センター長	(文学部 教授)	須 藤 隆
	文学部 教 授		今 泉 隆 雄
	文学部 助教授		阿子島 香
	理 学 部 教 授		蟹 澤 聰 史
	工 学 部 教 授		飯 渕 康 一
	東北アジア研究センター 教 授		入間田 宣 夫
	調査研究員	(文学部 助手)	藤 洱 敦
	調査研究員	(文学部 助手)	関 根 達 人
	調査研究員	(文学部 助手)	菊 池 佳 子
	理 学 部 事務長		金 田 一 夫
	施 設 部 企画課長		渡 邊 三 郎

目 次

卷頭カラー図版

序

例言・凡例

東北大学埋蔵文化財調査委員会委員（1991年度）

東北大学埋蔵文化財調査研究センター設置規程

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員（1997年度）

目次

図目次

表目次

図版目次

第Ⅰ章 1991年度調査の概要	1
1. はじめに	1
2. 発掘調査の概要	1
(1) 川内地区の調査	4
(2) 青葉山地区の調査	4
(3) 富沢地区の調査	10
(4) 川渡地区の調査	10
3. そのほかの調査室の活動	13
(1) 川内地区測量基準点の設置	13
(2) 第2回東北大学埋蔵文化財展の開催	14
(3) そのほかの活動	15
第Ⅱ章 仙台城二の丸跡第10地点（NM10）の調査	16
1. 調査経緯	16
(1) 川内地区の立地と歴史および1990年度までの調査	16
(2) 調査地点の位置	17
(3) 調査方法と経過	17
2. 検出遺構	19
(1) 1区	19

(2) 2 区	20
(3) 3 区	28
(4) 4 区	30
(5) 5 区	30
3. 出土遺物	31
(1) 陶磁器	31
(2) 土師質・瓦質土器	33
(3) 瓦	36
(4) その他の遺物	48
4. まとめ	48
第Ⅲ章 芦ノ口遺跡第2次・第3次調査 (TM2・TM3)	50
1. 調査経緯	50
(1) 遺跡の立地と周辺の環境	50
(2) 調査方法と経過	50
2. 基本層序	55
3. 検出遺構と出土遺物	56
(1) 第2次調査	56
(2) 第3次調査	62
4. 8層（泥炭層）についての検討	72
(1) 8層の分布と層相	72
(2) 遺跡周辺の地質・地形	74
(3) 放射性炭素年代測定	77
(4) テフラ分析	78
(5) 花粉分析	81
(6) 昆虫遺体	84
5. まとめ	87
考察編－仙台城二の丸跡の考古学的調査－	89
1. 仙台城の考古学的調査の歴史	89
2. 考古学的調査から見た仙台城二の丸地区の変遷	93
3. 仙台城における陶磁器の変遷	121
4. 仙台城における土師質・瓦質土器の変遷	148

5. 仙台城の瓦とその変遷	173
6. 木製品・漆器	208
(1) 供膳具	208
(2) 下駄	218
(3) 桶・樽類と円板状木製品	225
7. 総括	232
付編 文献にみえる仙台城二の丸修造関係記録	235

英文要旨

写真図版

図 目 次

図 1 東北大大学と周辺の遺跡	2	図19 仙台城二の丸跡第10地点 出土土師質土器(2).....	41
図 2 仙台城と二の丸の位置	3	図20 仙台城二の丸跡第10地点 出土土師質土器(3).....	42
図 3 仙台城二の丸跡・武家屋敷跡 調査地点	5	図21 仙台城二の丸跡第10地点 出土瓦質土器(1).....	43
図 4 青葉山地区調査地点	7	図22 仙台城二の丸跡第10地点 出土瓦質土器(2).....	44
図 5 工学部機械工学科地点 平面図・断面図	9	図23 仙台城二の丸跡第10地点 出土瓦質土器(3).....	45
図 6 川渡農場と周辺の遺跡.....	11	図24 仙台城二の丸跡第10地点 出土瓦(1).....	46
図 7 川渡農場試掘調査地点 基本層序模式図.....	11	図25 仙台城二の丸跡第10地点 出土瓦(2).....	47
図 8 川渡農場試掘調査地点 調査区の位置.....	12	図26 仙台城二の丸跡第10地点 出土硯.....	48
図 9 第2回埋蔵文化財展開催状況.....	14	図27 富沢地区調査地点.....	51
図10 仙台城二の丸跡第10地点 調査区の位置.....	18	図28 芦ノ口遺跡調査区配置図 (1. 実験施設北側).....	52
図11 仙台城二の丸跡第10地点 1区平面図・断面図.....	21	図29 芦ノ口遺跡調査区配置図 (2. 研究棟北側).....	53
図12 仙台城二の丸跡第10地点 2区平面図.....	24	図30 芦ノ口遺跡調査区配置図 (3. 研究棟南側).....	54
図13 仙台城二の丸跡第10地点 2区断面図.....	25	図31 芦ノ口遺跡基本層序模式図.....	57
図14 仙台城二の丸跡第10地点 3・4・5区平面図・断面図.....	29	図32 芦ノ口遺跡AC・D-6・7区、 AI-7区平面図・断面図.....	59
図15 仙台城二の丸跡第10地点 出土磁器(1).....	37	図33 芦ノ口遺跡AR-5区、AR-12・13区 平面図・断面図.....	61
図16 仙台城二の丸跡第10地点 出土磁器(2).....	38	図34 芦ノ口遺跡N2・5区断面図.....	63
図17 仙台城二の丸跡第10地点出土陶器	39		
図18 仙台城二の丸跡第10地点 出土土師質土器(1).....	40		

図35 芦ノ口遺跡N 7・8区 平面図・断面図	65	図54 仙台城二の丸跡第9地点 IV期・V期の遺構配置図	111
図36 芦ノ口遺跡N 10・11・14区 平面図・断面図	66	図55 仙台城二の丸跡第9地点と 絵図との対比(1)	112
図37 芦ノ口遺跡N 12区平面図・断面図	68	図56 仙台城二の丸跡第9地点と 絵図との対比(2)	113
図38 芦ノ口遺跡N 15区平面図・断面図	69	図57 肯山公造成木写之略図	114
図39 芦ノ口遺跡第2次・第3次調査 出土遺物	71	図58 肯山公造成木写之略図の 台所門付近	115
図40 芦ノ口遺跡8層(泥炭層)の 分布範囲推定図	73	図59 享和二年之御家作御絵図写の 二の丸西端部分	116
図41 芦ノ口遺跡周辺の地形と地質	75	図60 仙台城二の丸跡出土磁器の 器種組成比率の推移	123
図42 芦ノ口遺跡8層における 花粉ダイアグラム	83	図61 仙台城二の丸跡出土陶器の 器種組成比率の推移	123
図43 仙台城二の丸地区変遷模式図	94	図62 仙台城二の丸跡出土 供膳具(碗類)の材質	124
図44 仙台城二の丸跡第9地点 I期の遺構配置図	96	図63 仙台城二の丸跡出土 供膳具(皿類)の材質	124
図45 仙台城二の丸跡第9地点 II期の遺構配置図	97	図64 仙台城二の丸跡出土磁器の 産地別比率の推移	126
図46 仙台城二の丸跡第4地点 下層検出遺構	98	図65 仙台城二の丸跡出土陶器の 産地別比率の推移	126
図47 仙台城二の丸跡第9地点周辺の 二の丸造営以前の遺構変遷模式図	99	図66 仙台城二の丸跡第9地点 8層出土陶磁器	128
図48 伊達宗泰の屋敷と西屋敷の遺構	101	図67 仙台城二の丸跡第9地点 16号溝・7層出土陶磁器	129
図49 享和二年之御家作御絵図写	104	図68 江戸時代初期の陶器の 産地別比率	130
図50 仙台城二の丸地区検出 礎石建物の柱間間隔	105	図69 仙台城三の丸跡 5・6・9号土坑出土陶磁器	132
図51 仙台城二の丸跡第10地点と 絵図との対比(文化元年図)	108		
図52 仙台城二の丸跡第10地点と 絵図との対比(水抜御絵図)	109		
図53 仙台城二の丸跡第9地点 III期の遺構配置図	110		

図70 江戸時代初期の焼物の 材質別比率	135	図85 仙台城跡出土 土師質土器皿の法量分布(1)	159
図71 仙台城二の丸跡第9地点 15号土坑出土陶磁器	137	図86 仙台城跡出土 土師質土器皿の法量分布(2)	160
図72 仙台城二の丸跡第9地点 16号土坑出土磁器	138	図87 仙台城二の丸跡出土土師質土器皿の 糸切り技法と回転方向	161
図73 仙台城二の丸跡第9地点 16号土坑出土陶器	139	図88 仙台城二の丸跡出土土師質土器皿の 糸切り技法と回転方向の比率	161
図74 18世紀中葉～後葉の陶磁器の 産地別比率	140	図89 仙台城二の丸跡出土 土師質土器皿のスヌの付着割合	162
図75 江戸における18世紀中葉～後葉の 陶磁器の器種組成	140	図90 仙台城跡出土の皿類以外の 土師質・瓦質土器の変遷	165
図76 仙台城二の丸跡第9地点 I期の土師質・瓦質土器	149	図91 火消壺の類例	168
図77 仙台城三の丸跡 I期の土師質・瓦質土器	150	図92 蚊遣りの類例と推定復元	169
図78 仙台城二の丸跡第9地点16号土坑 出土の土師質・瓦質土器	151	図93 佐沼城跡出土七輪	170
図79 仙台城二の丸跡第9地点15号土坑 出土の土師質・瓦質土器	152	図94 仙台城二の丸跡第9地点 I期の瓦(1)	177
図80 仙台城二の丸跡第9地点2号池・ 3c層・3b層出土の土師質・ 瓦質土器	153	図95 仙台城二の丸跡第9地点 I期の瓦(2)	178
図81 仙台城二の丸跡第9地点 1号池出土の土師質・瓦質土器	154	図96 瓦の計測部位	179
図82 仙台城二の丸跡第10地点 Ⅲ層出土の土師質土器	155	図97 仙台城跡出土軒丸瓦類・ 軒桟瓦小巴の文様	180
図83 仙台城二の丸跡第10地点 Ⅲ層出土の瓦質土器	156	図98 仙台城跡出土菊丸瓦の 文様と形態	182
図84 仙台城跡出土 土師質土器皿類の変遷	157	図99 仙台城跡出土鳥伏間の形態	182
		図100 仙台城跡出土軒丸瓦の形態	183
		図101 仙台城跡出土軒平瓦・ 軒桟瓦の瓦当文様(1)	185
		図102 仙台城跡出土軒平瓦・ 軒桟瓦の瓦当文様(2)	186
		図103 仙台城跡出土丸瓦・谷丸瓦	188
		図104 仙台城跡出土平瓦	189

図105 仙台城跡出土棟瓦	191	図116 仙台城二の丸跡第9地点	
図106 仙台城跡出土		I期の下駄	219
丸瓦素材の小型製品	195	図117 仙台城三の丸跡	
図107 仙台城二の丸跡第7地点出土		6号土坑出土の下駄	220
凸面に叩きのある輪違い	196	図118 仙台城二の丸跡第5地点および	
図108 仙台城跡出土平瓦素材の製品	198	第9地点15・16号土坑出土の	
図109 若林城跡2号土坑出土熨斗瓦	198	下駄	221
図110 仙台城跡出土		図119 仙台城二の丸跡第9地点	
反りをもたない製品(1)	200	1号池出土の下駄	222
図111 仙台城跡出土		図120 下草古城跡出土の下駄	223
反りをもたない製品(2)	202	図121 仙台城跡出土円板状木製品	225
図112 仙台城跡出土棟瓦	204	図122 仙台城跡出土	
図113 仙台城跡出土その他の瓦	205	円板状木製品の法量分布	226
図114 仙台藩領内出土の漆器の変遷	210	図123 仙台城跡出土曲物	227
図115 仙台城二の丸跡出土		図124 仙台城跡出土桶・樽類(1)	229
箸状木製品の長さ	215	図125 仙台城跡出土桶・樽類(2)	230

表 目 次

表 1 1991年度調査概要表	1	表13 仙台城二の丸跡出土供膳具 (碗・皿類)の材質別出土点数	124
表 2 川内地区測量基準点測量成果表	13	表14 仙台城二の丸跡出土磁器の 産地別出土点数	126
表 3 仙台城二の丸跡第10地点出土 陶磁器集計表	32	表15 仙台城二の丸跡出土陶器の 産地別出土点数	126
表 4 仙台城二の丸跡第10地点出土 土器・瓦・その他の遺物集計表	33	表16 江戸時代初期の一括資料における 陶器の産地別出土点数	130
表 5 仙台城二の丸跡第10地点出土 磁器観察表	34	表17 江戸時代初期の一括資料における 焼物の材質別出土点数	135
表 6 仙台城二の丸跡第10地点出土 陶器観察表	34	表18 18世紀中葉～後葉の 一括資料における 陶磁器の産地別出土点数	140
表 7 仙台城二の丸跡第10地点出土 土師質・瓦質土器観察表	35	表19 江戸の18世紀中葉～後葉の 一括資料における陶磁器の 器種別出土点数	140
表 8 仙台城二の丸跡第10地点出土 瓦観察表	35	表20 仙台城二の丸跡第9地点 I期の瓦集計表(改訂版)	176
表 9 芦ノ口遺跡8層における 花粉百分率表	82	表21 仙台城二の丸跡第9地点 I期の瓦観察表	178
表10 仙台城二の丸跡出土 一括資料一覧	121	表22 仙台城二の丸跡出土 箸状木製品の先端形状	215
表11 仙台城二の丸跡出土磁器の 器種別出土点数	123		
表12 仙台城二の丸跡出土陶器の 器種別出土点数	123		

図版目次

図版 1 仙台城二の丸跡第10地点 1区・2区全景・遺構 249	図版12 芦ノ口遺跡第2次調査 調査状況(1) 260
図版 2 仙台城二の丸跡第10地点 2区遺構 250	図版13 芦ノ口遺跡第2次調査 調査状況(2) 261
図版 3 仙台城二の丸跡第10地点 2～5区全景・遺構 251	図版14 芦ノ口遺跡第2次調査 調査状況(3) 262
図版 4 仙台城二の丸跡第10地点 出土磁器 252	図版15 芦ノ口遺跡第2次調査 調査状況(4) 263
図版 5 仙台城二の丸跡第10地点 出土陶器 253	図版16 芦ノ口遺跡第3次調査 調査状況(1) 264
図版 6 仙台城二の丸跡第10地点出土 土師質土器(1) 254	図版17 芦ノ口遺跡第3次調査 調査状況(2) 265
図版 7 仙台城二の丸跡第10地点出土 土師質土器(2) 255	図版18 芦ノ口遺跡第3次調査 調査状況(3) 266
図版 8 仙台城二の丸跡第10地点出土 瓦質土器(1) 256	図版19 芦ノ口遺跡第3次調査 調査状況(4) 267
図版 9 仙台城二の丸跡第10地点出土 瓦質土器(2) 257	図版20 芦ノ口遺跡第2次・第3次調査 出土遺物 268
図版10 仙台城二の丸跡第10地点 出土瓦(1) 258	図版21 仙台城二の丸跡第9地点 I期の瓦(1) 269
図版11 仙台城二の丸跡第10地点 出土瓦(2) 259	図版22 仙台城二の丸跡第9地点 I期の瓦(2) 270

第Ⅰ章 1991年度調査の概要

1. はじめに

東北大手中には、川内・青葉山・片平・星陵・雨宮の各キャンパスに加えて、他に多くの研究施設があり、その敷地は10県にわたる広大なものとなっている。これらの各地区の構内には、多くの埋蔵文化財があり、特に川内地区は、近世の仙台城二の丸跡と武家屋敷跡にあたり、青葉山地区には旧石器時代から古代の遺跡が存在する（図1・2）。

これらの大学構内の埋蔵文化財の調査・保護を組織的に行うために、1983年度に東北大手埋蔵文化財調査委員会が組織され、その実務機関として埋蔵文化財調査室が置かれた。調査委員会および調査室は、1994年度に東北大手埋蔵文化財調査研究センターへと改組され、現在に至っている。1983年度以来、調査委員会・センターは、大学構内の埋蔵文化財調査を実施するとともに、調査成果を『東北大手埋蔵文化財調査年報』1～8において報告してきた。

1991年度においても、仙台城二の丸跡などの調査が行われ、新たな資料を提供することとなつた。本報告書は、これらの調査成果についてとりまとめたものである。

また、1983年度以来実施してきた仙台城二の丸跡の調査については、前号の年報で報告した第9地点、本年報で報告する第10地点の報告をもって、江戸時代の遺物がまとまって出土している調査の報告としては、一応の区切りをむかえる。そのため、1983年度以来実施してきた二の丸跡の考古学的調査の成果全体を検討する形で、その調査成果をまとめたものを考察編として本年報に掲載することとした。

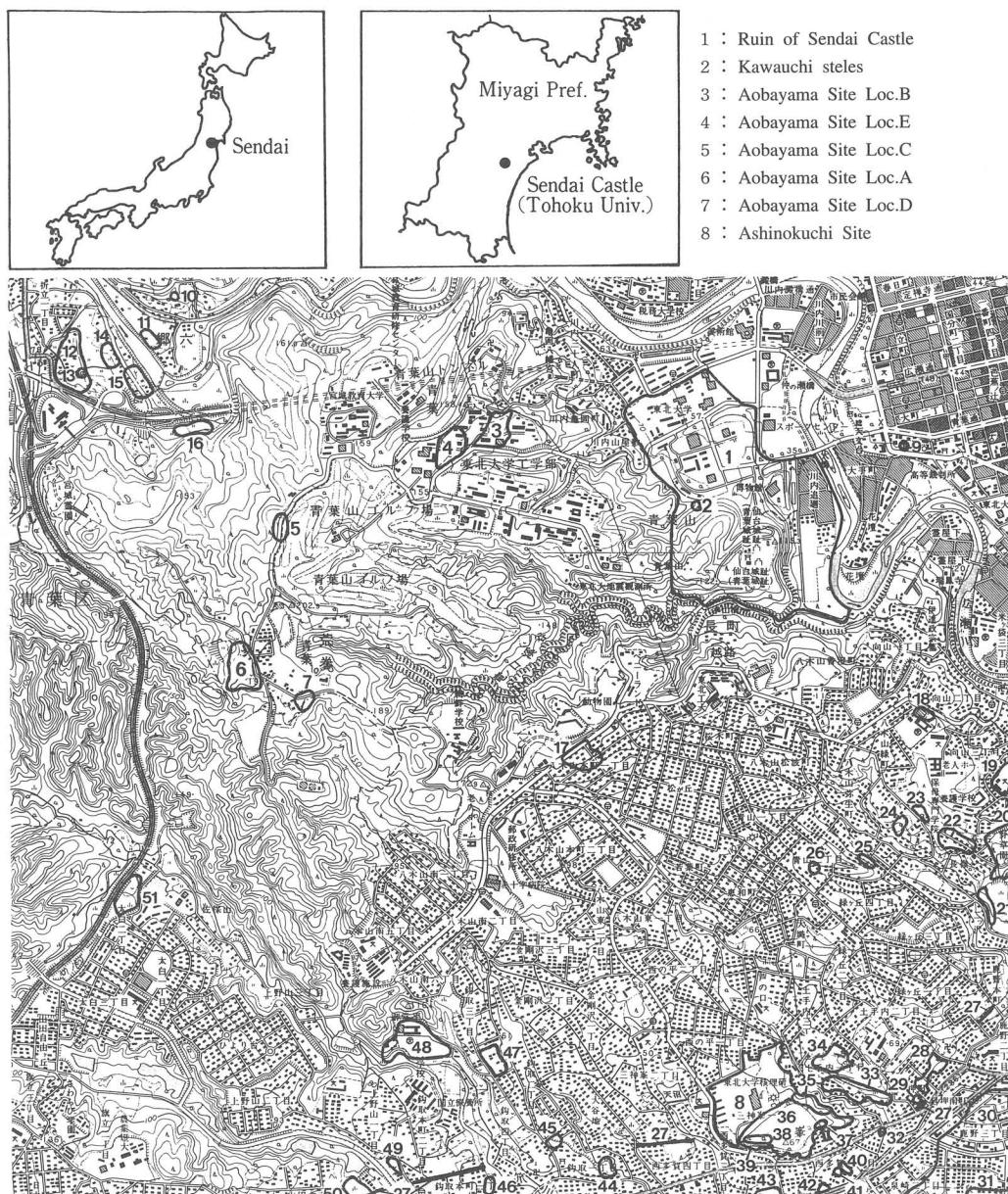
2. 発掘調査の概要

1991年度は、川内地区・青葉山地区・三神峯地区・川渡地区において、本調査1件、試掘調

表1 1991年度調査概要表

Tab. 1 Excavations on the campus in the fiscal year 1991

種類	調査地点（略号）	原因	調査期間	面積	時期
本調査	仙台城二の丸跡第10地点（NM10）	中善通り外灯取設	2/17～3/5	10m ²	近世
試掘調査	芦ノ口遺跡第3次調査（TM 3）	原子核理学研究施設 放射光リング等新設計画	5/13～5/31	159m ²	縄文・古墳
	川渡農場第2次調査（KW 2）	川渡農場職員宿舎新営	10/14～18	63m ²	—
	工学部機械工学科地点	航空工学科クリーンルーム新営	10/29・30	3 m ²	—
立会調査	理学部附属植物園地点（91-1）	附属植物園囲障取設	4/16・17	—	—
	工学部特高変電所地点（91-2）	特高変電所排水整備	4/24	—	—
	文学部南側地点（91-3）	共同溝換気・出入口取設	7/30・7/31	—	—
	文学部東側・北側地点（91-4）	電気ケーブル埋設	8/3・4	—	—
	文学部南側地点（91-5）	ガス管理設	8/19	—	—
	法学部北側・南側地点（91-6）	火災警報ケーブル埋設	8/26	—	—
	教養部厚生会館前地点（91-7）	通信ケーブル改修	3/18	—	—
	法・経2番講義室西側地点（91-8）	冷房施設整備取設	3/18	—	—
	工学部管理棟北側地点（91-9）	ガス管改修	3/25	—	—
	教養部基準点地点（91-10）	埋蔵文化財調査室基準点設置	3/30・4/6	—	—



- 1 : Ruin of Sendai Castle
 2 : Kawauchi steles
 3 : Aobayama Site Loc.B
 4 : Aobayama Site Loc.E
 5 : Aobayama Site Loc.C
 6 : Aobayama Site Loc.A
 7 : Aobayama Site Loc.D
 8 : Ashinokuchi Site
- 1 : 仙台城跡 2 : 川内古碑群 3 : 青葉山遺跡B地点 4 : 青葉山遺跡E地点 5 : 青葉山遺跡C地点
 6 : 青葉山遺跡A地点 7 : 青葉山遺跡D地点 8 : 芦ノ口遺跡 9 : 片平仙台大神宮の板碑 10 : 郷六大日如來の碑
 11 : 葛岡城跡 12 : 郷六城跡 13 : 郷六建武碑 14 : 沼田遺跡 15 : 郷六御殿跡 16 : 郷六遺跡 17 : 松ヶ岡遺跡
 18 : 向山高裏遺跡 19 : 萩ヶ丘遺跡 20 : 茂ヶ崎城跡 21 : 二ツ沢横穴墓群 22 : 萩ヶ岡B遺跡 23 : 八木山綠町遺跡
 24 : 二ツ沢遺跡 25 : 青山二丁目遺跡 26 : 青山二丁目B遺跡 27 : 杉土手(鹿除土手) 28 : 砂押屋敷遺跡
 29 : 砂押古墳 30 : 富沢遺跡 31 : 泉崎浦遺跡 32 : 金洗沢古墳 33 : 土手内窯跡 34 : 土手内遺跡
 35 : 土手内横穴墓群 36 : 三神峯遺跡 37 : 金山窯跡 38 : 三神峯古墳群 39 : 富沢窯跡 40 : 裏町東遺跡
 41 : 裏町古墳 42 : 原東遺跡 43 : 原遺跡 44 : 八幡遺跡 45 : 後田遺跡 46 : 町遺跡 47 : 神滌山遺跡
 48 : 御堂平遺跡 49 : 上野山遺跡 50 : 北前遺跡 51 : 佐保山東遺跡

図1 東北大大学と周辺の遺跡

Fig. 1 Archaeological sites and Tohoku University

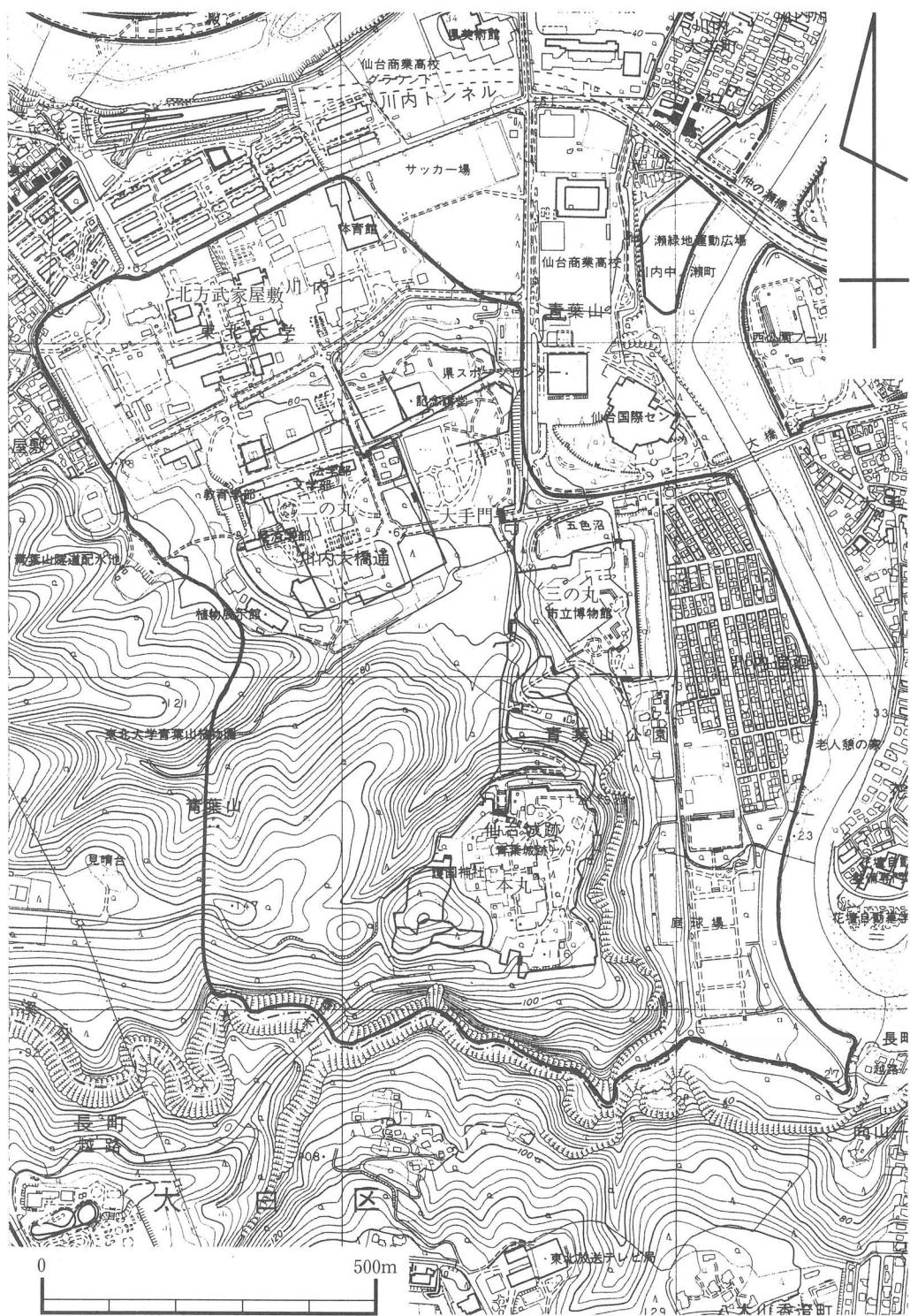


図2 仙台城と二の丸の位置

Fig. 2 Distribution of Sendai Castle

査3件、立会調査10件の、合計14件の調査を実施した（表1）。

（1）川内地区の調査

川内地区では本調査1件と立会調査7件を実施した（図3）。

仙台城二の丸跡第10地点は、川内南地区を南北に走る道路（通称中善通り）に、外灯を設置するのに伴う本調査である。外灯基礎およびハンド・ホール設置部分と、埋設ケーブルが道路を横断する部分だけが、二の丸面までの削平がおよぶと予想されたため、重機による掘削時に立ち会い、精査が必要な部分から、随時本調査に切り替えた。道路横断部分以外のケーブル埋設部分については、掘削深度が浅いため、立会調査のみで調査を終えている。調査面積がかなり狭いにもかかわらず、石敷遺構・石組溝などが検出され、幕末～明治初頭の遺物がまとまって出土した。これについては、本年報で報告する。

7件実施した立会調査のうち5件は、二の丸跡にあたる川内南地区での調査である。その内4件は、前年度に本調査を実施した、文・法学部合同研究棟新営に伴う付帯施設の工事に関するものである（91-3～6）。残る2件は、武家屋敷にあたる川内北地区での調査である。この内、共同溝換気・出入口取設に伴う調査（91-3）では、石組の溝が発見され、手掘りで全体を検出したが、底面にコンクリートを敷いた明治以降の陸軍第二師団期のものと判明したため、それ以上の調査は行っていない。その他は、いずれも掘削深度が浅く、新しい盛土の範囲内におさまるものであった。

（2）青葉山地区の調査

青葉山地区では試掘調査1件、立会調査3件を実施した（図4）。

試掘調査を行ったのは、工学部航空工学科のクリーンルーム新営に伴うもので、工学部構内でも東端に近い所である。旧石器時代の遺構・遺物が発見されている青葉山遺跡B地点・E地点からはかなり距離があるが、段丘上の火山灰層の保存状態が良好であると予想されたことと、この区域での調査はそれまでに全く行われていないことから、限定した規模で試掘調査を行うこととしたものである。建築される建物の基礎が、柱の部分のみ深く入る構造であったため、柱の位置にあわせて、1m×1mの試掘区を3ヶ所設けた（図5）。西区・中区では、火山灰層が比較的良好に保存されており、川崎スコリア層も確認できた。東区では、ローム層が認められるものの、西区・中区と比較すると、全体にしまりがなく、斜面の堆積物である可能性がある。また、西区では、戦前の陸軍演習場時代と推定される、大規模な掘り込みが認められた。いずれの調査区でも、遺構・遺物は発見されなかった。

立会調査の3件は、いずれも掘削の範囲が小規模で、深さも浅いため立会調査としたもので

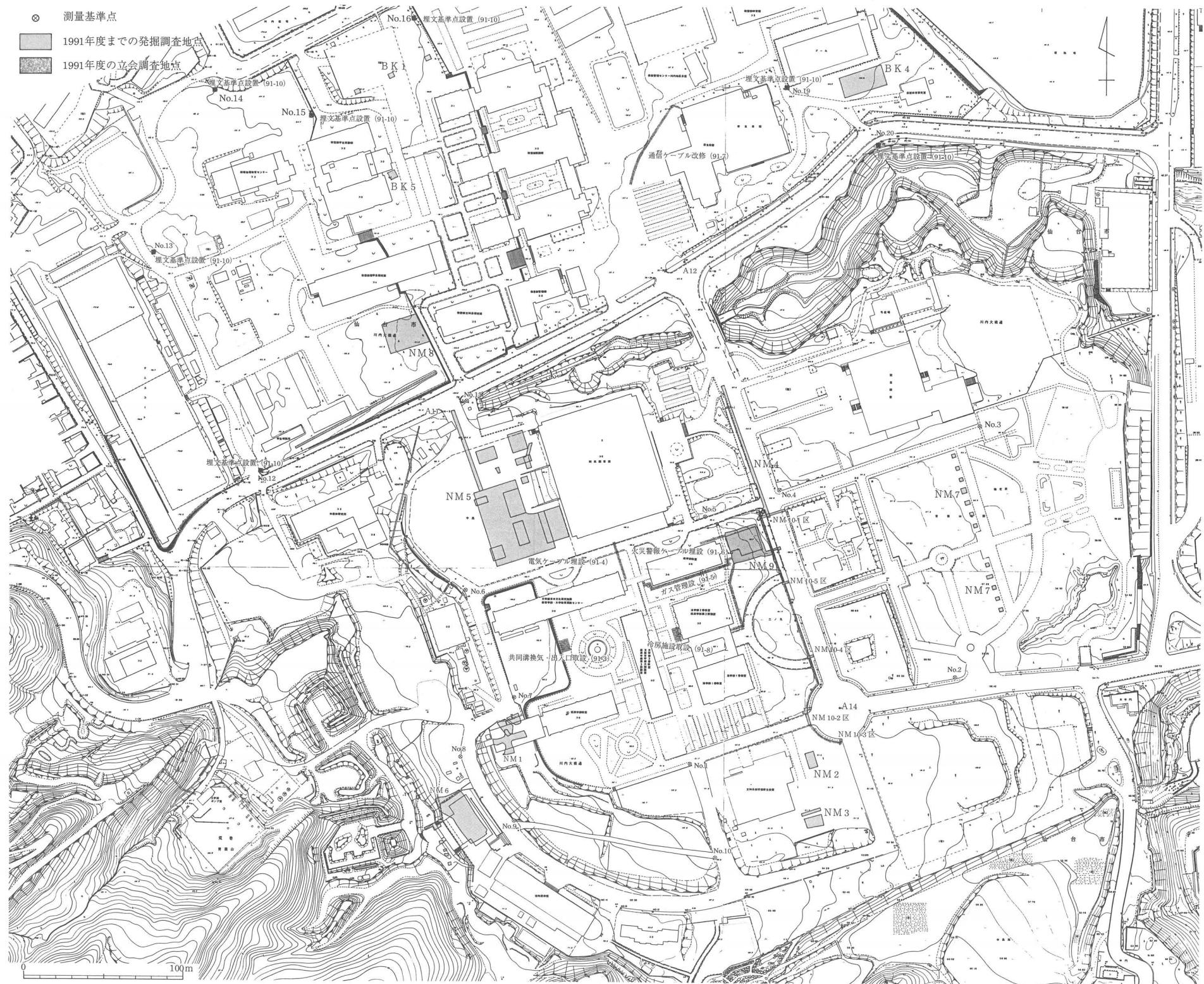


図3 仙台城二の丸跡・武家屋敷跡調査地点

Fig. 3 Location of excavations until 1991 at Ninomaru (NM i.e. Secondary Citadel) and samurai residence (BK)

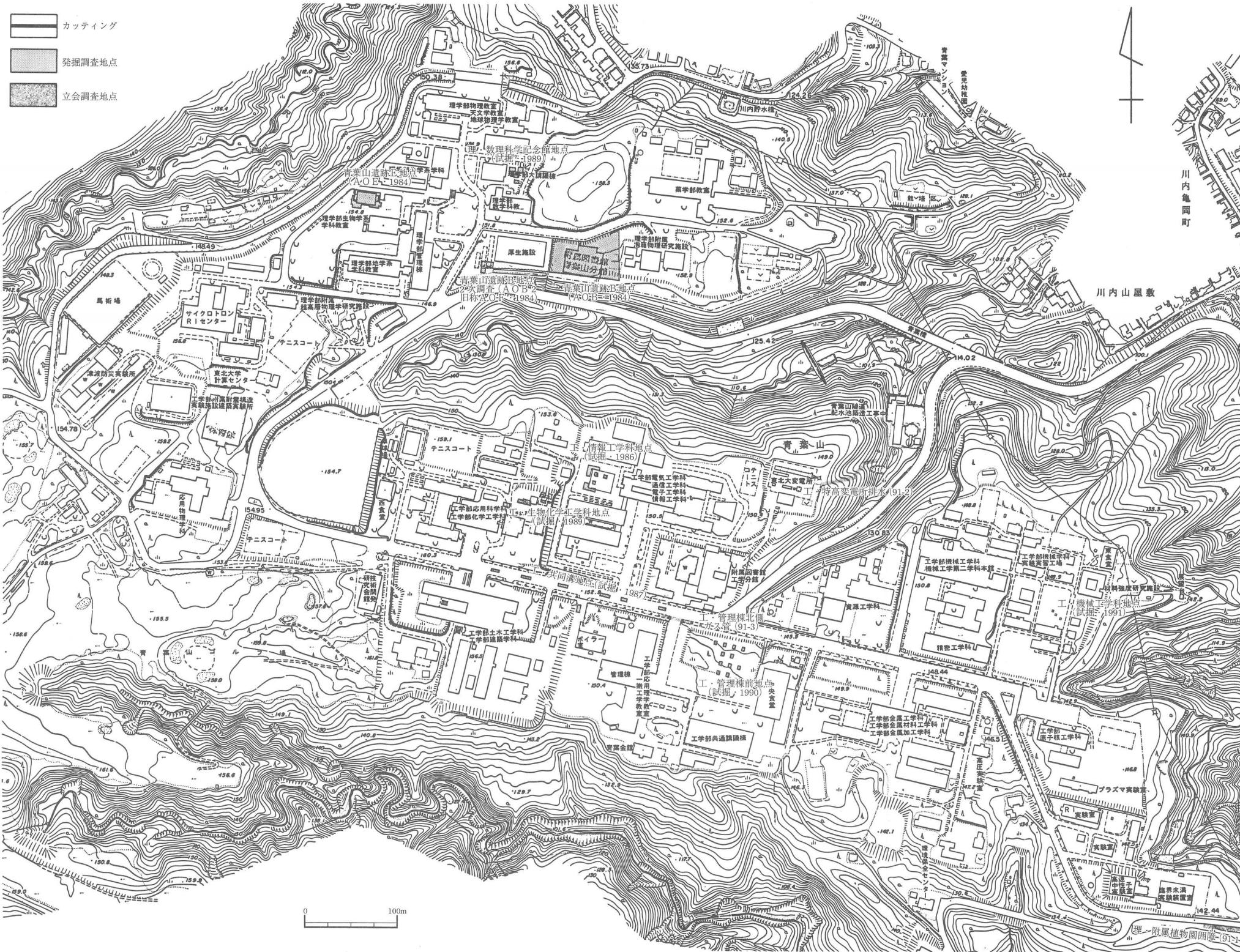


図4 青葉山地区調査地点

Fig. 4 Location of excavations at Aobayama campus



西区南壁土層柱状模式図

1	1層 大学による盛土
2	2層 盛土以前の旧表土
3	3層 黄褐色シルト質粘土 硬質
4	4層 黄褐色粘土質シルト 粘性強い 3層との境は漸移的 場所によっては上面に川崎スコリアが認められる
5	5層 やや青みを帯びた黄褐色粘土質シルト 粘性弱い
6	6層 やや赤みを帯び岩片を含む火山灰層 やや硬質

図5 工学部機械工学科地点平面図・断面図

Fig. 5 Plan and cross section of test trenches at the campus of Faculty of Engineering

ある。調査の結果、遺構・遺物は発見されなかったので、それ以上の調査は行っていない。

(3) 富沢地区の調査

三神峯丘陵の北側にある富沢地区の理学部附属原子核理学研究施設では、試掘調査1件を実施した（芦ノ口遺跡第3次調査、TM3）。

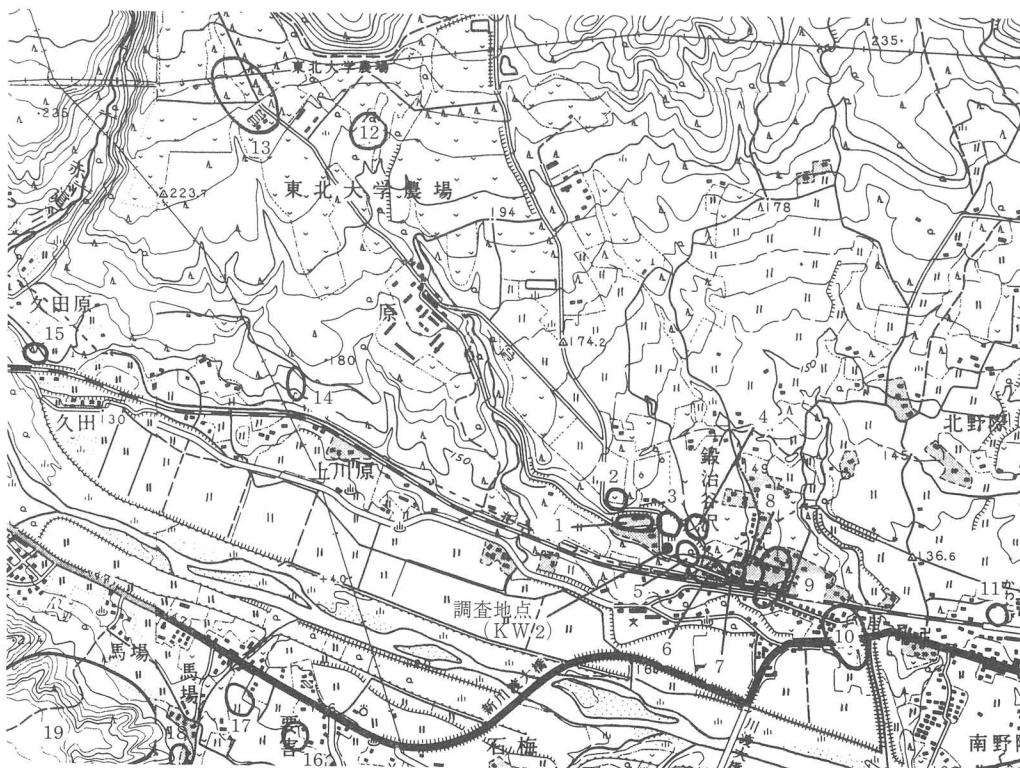
原子核理学研究施設では、従来より、放射光リングをはじめとした、大規模な施設拡充の計画を有している。1985年度に試掘調査を実施したところ、平安時代の遺構・遺物が発見され、周知の遺跡の範囲も、芦ノ口遺跡の範囲を拡大する形で、研究施設全域にまで拡大されている。そのため、施設整備計画との調整のデータを得る目的で、1985年度の調査の際に調査を行っていない区域の遺構・遺物の有無と、その分布状況を把握することが必要となり、さらに1989年度と1991年度の2ヶ年にわたって試掘調査を実施することとなった。調査の結果、縄文時代・古墳時代・平安時代の遺構・遺物が若干検出された。また、水成堆積層を下げた、現地表下1～1.5m程のところから、約3万年前の泥炭層が検出され、樹木・種子などの自然遺物が大量に出土したが、人工遺物は発見されていない。本年報では、この2ヶ年分の調査をまとめて報告する。

(4) 川渡地区の調査

川渡地区では、試掘調査1件を実施した（KW2）。

川渡地区に所在する農学部附属農場は、宮城県北部の玉造郡鳴子町大口字蓬田ほかに所在し、合計2,215haという広大な面積を占めている。農場の入口は、JR陸羽東線川渡駅の西にあり、この農場入口に入った所に職員宿舎や宿泊施設が置かれている。今回の調査は、この職員宿舎の建て替え計画に伴う試掘調査である。宿舎の予定地が、北西を1989年度に本調査を実施した町西遺跡（弥生・年報7）、北側を町A遺跡（縄文後期・古代）、東側を修驗院善教坊跡（近世寺院跡）に囲まれる場所であり、これらの遺跡の範囲が広がってくる可能性が考えられたため、遺構・遺物の有無を確認する目的で試掘調査を行ったものである（図6）。

建物と排水溝の予定範囲に合わせて、3m×3mの試掘区を7ヶ所設定して調査を行った（図8）。人為的に動かされていると判断された2層までを重機で除去し、その後、手掘りで精査した。旧石器時代の遺構・遺物の存在も考慮し、全ての調査区で深掘り調査を行った。クロボク土は厚く良好に保存されていたが、ローム層は薄く、再堆積の可能性が考えられる（図7）。いずれの層序からも、遺構・遺物は発見されなかった。



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	町西遺跡	包含地	弥生	11	中女寺跡	寺院跡	近世
2	東北大農場 2、3号烟遺跡	包含地	縄文	12	丸森遺跡	包含地	縄文
3	町A遺跡	包含地	縄文後、古代	13	上川原遺跡	包含地	縄文晩、弥生
4	町B遺跡	包含地	縄文後	14	大室院跡	寺院跡	近世
5	修験院善教坊跡	寺院跡	近世	15	久田遺跡	包含地	縄文
6	鍛冶谷沢町宿駅跡	宿駅跡	近世	16	石の梅古墳	前方後円墳？	古墳
7	鍛冶谷沢町検断跡	検断跡	近世	17	住吉神社跡	神社跡	中世
8・9	町C遺跡	包含地	縄文、古代	18	行蔵院跡	寺院跡	近世
10	観音館跡	城館	中世	19	大西館跡	城館	中世

図6 川渡農場と周辺の遺跡

Fig. 6 Archaeological sites and University Farm

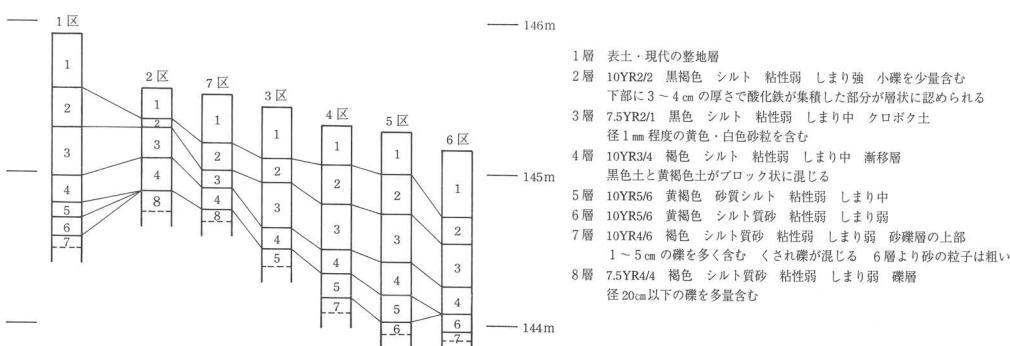


図7 川渡農場試掘調査地点基本層序模式図

Fig. 7 Schematic profiles of test trenches at University Farm

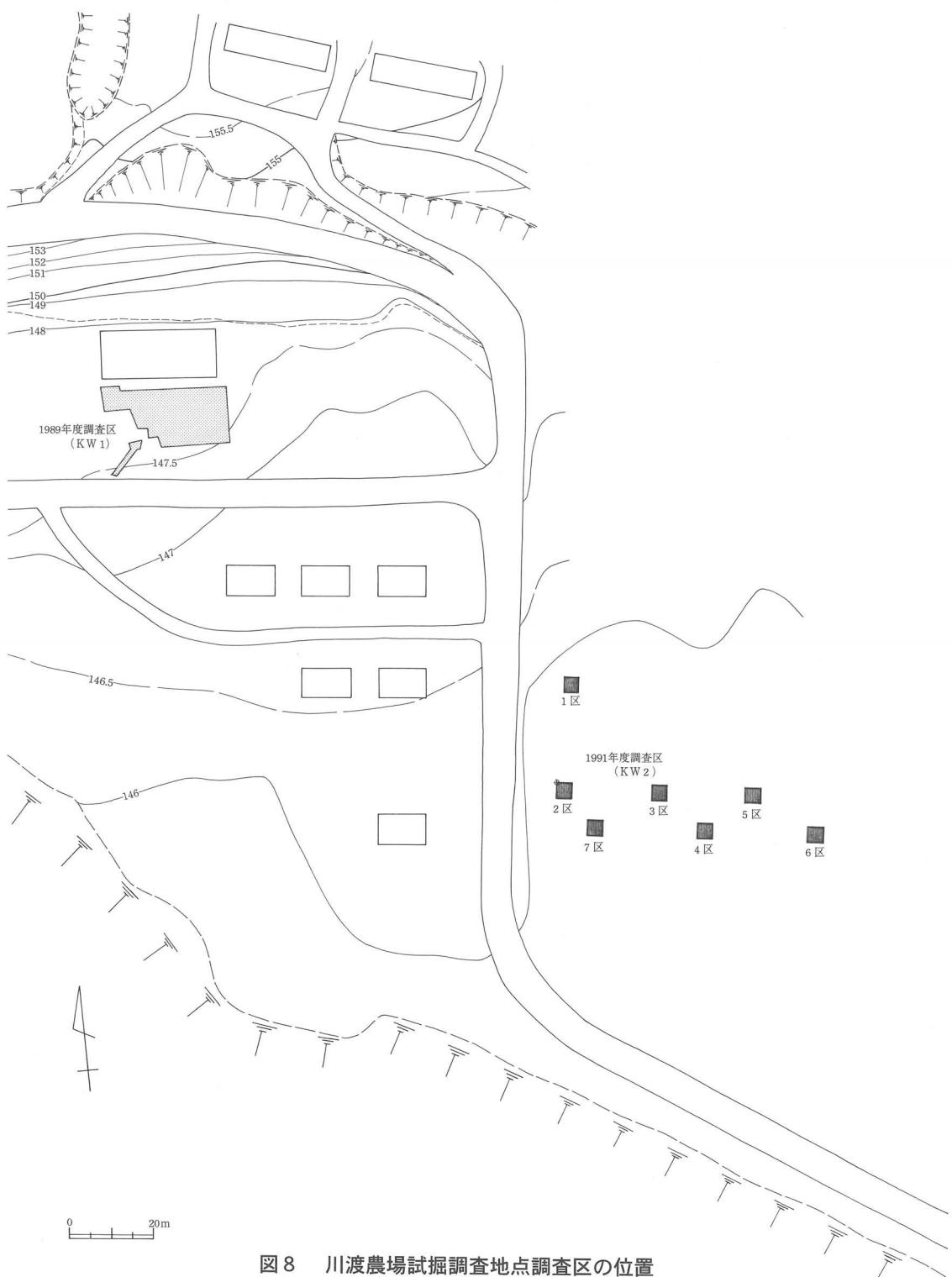


図8 川渡農場試掘調査地点調査区の位置
Fig. 8 Location of test trenches at University Farm

3. そのほかの調査室の活動

(1) 川内地区測量基準点の設置

これまでの川内地区の調査では、調査の度に基準杭を設定し、調査区の位置は、恒久建造物との位置関係を計測することによって、縮尺500分の1の構内地形測量図に記入してきた。しかし、このような方法では、調査地点が異なる遺構の方位や、遺構間の位置関係を厳密に計測し、比較することは困難である。特に、二の丸跡のような、計画的に造成されたと考えられる遺跡を調査するにあたっては、それぞれの調査において検出された遺構の位置を、国土座標上に位置づけ、離れた調査区で発見された遺構の、相互の位置関係を正確に把握することが不可欠であることは言うまでもない。とりわけ、絵図との対比にあたっては、正確な位置関係の把握が欠かせない。このような観点から埋蔵文化財調査室では、以前から測量基準点設置の要求を行ってきた。その結果、1990年度に川内南地区の11点分が、1991年度に川内北地区の9点分が予算化され、基準点の設置と国土座標値・標高の測量を測量会社に委託した。

基準点設置にあたっては、道路に沿って仙台市が設置している基準点（A-11、A-12、A-14）を利用し、それに結合させる形で、北地区・南地区それぞれ別にトラバースを組んでいる。各基準点のデータは、表2の通りであり、基準点の位置は図3の中に示した。国土座標は第X座標系である。

この測量基準点の設置を受け、二の丸跡の第4地点・第5地点・第9地点については、調査時の基準点が保存されていたため、基準点測量を行い、国土座標値を算出した。これらについては、すでにそれぞれの報告の際に、基準点の国土座標値を報告している（年報5～8）。

表2 川内地区測量基準点測量成果表

Tab. 2 List of datum points for measurement at
Kawauchi campus

基準点	X座標	Y座標	標高 (m)
A11	-193 603.580	+1 817.487	61.368
A12	-193 508.636	+1 974.100	56.610
A14	-193 785.416	+2 073.402	61.262
No.1	-193 820.846	+1 978.763	61.871
No.2	-193 766.070	+2 145.738	58.907
No.3	-193 610.064	+2 160.848	56.588
No.4	-193 650.729	+2 034.689	59.249
No.5	-193 666.933	+1 987.399	61.495
No.6	-193 714.234	+1 836.565	63.554
No.7	-193 780.877	+1 867.090	65.929
No.8	-193 817.860	+1 833.963	69.759
No.9	-193 857.471	+1 867.810	70.123
No.10	-193 879.068	+1 994.749	64.450
No.11	-193 595.326	+1 836.592	60.702
No.12	-193 639.654	+1 707.075	66.892
No.13	-193 504.543	+1 638.941	66.561
No.14	-193 403.276	+1 677.377	64.932
No.15	-193 418.655	+1 738.247	64.514
No.16	-193 358.079	+1 802.582	60.656
No.17	-193 342.446	+1 882.509	57.778
No.18	-193 309.821	+1 966.962	57.152
No.19	-193 400.152	+2 039.003	56.784
No.20	-193 435.320	+2 096.652	54.318

(2) 第2回東北大学埋蔵文化財展の開催

第2回東北大学埋蔵文化財展を、6月24日から7月6日までの期間で、附属図書館の協力を得て、図書館本館のエントランス・ホールで開催した（図9）。今回の展示は、「仙台城二の丸跡の出土遺物」と題し、本学構内の埋蔵文化財の中でも、川内南地区にあたる仙台城二の丸跡に焦点を当てて開催した。昭和60年7月に開催した第1回の埋蔵文化財展からは、6年ぶりの開催である。この間に、二の丸跡では第5地点、第9地点などの調査によって、多くの遺物が出土しており、これらの調査で出土した主要な遺物を紹介することを目的として、展示を構成した。

展示にあたっては、B4版・二つ折で片面カラーの解説リーフレットを作成した。リーフレットは会場に置き、自由に取ってもらうようにしたが、期間中に合計535部が配布された。リーフレットを取らずに観覧された方も多かったため、実際の観覧者数は、この数を大きく上回るであろう。新聞などの報道を見て、学外から来られた方々も多かった。また、今回初めて英文解説を作成し、50部を準備したが、早々と全部なくなり、関心の高さが示された。東北大学に海外から来られている方々に、東北大学をめぐる歴史環境の豊かさを知ってもらい、それをして日本の歴史や文化への理解を深めていただくためにも、このような展示は有効であると思われる。

会場でアンケートをお願いしたが、93名から回答を得た。約4分の3の方が、川内南地区が仙台城二の丸にあたること、構内で発掘調査が実施されていることを知っていた。その一方で、学生には、二の丸跡を知らない方が多い傾向が見られた。やはり、繰り返し公開していく必要性があると思われる。

アンケートの最後には、自由に意見を記入してもらう欄を設けた。回答の中で最も多かったのは、このような展示を今後も開催して欲しいという希望であった。常設展示を希望された方も多かった。また、展示や宣伝の方法を工夫すべきだと厳しい指摘や、他大学の研究者や学生が東北大学を訪れたときに案内できるように、キャンパス内に二の丸の建物の位置をわかりやすく掲示して欲しいという、積極的な提言もあり、今後のためには大いに参考となった。



図9 第2回埋蔵文化財展開催状況

Fig. 9 Second exhibition of archaeological remains from the campus

(3) そのほかの活動

学会での発表としては、6月29・30日に東京において『発掘された江戸時代』を大会テーマにして開催された、江戸遺跡研究会の第4回大会での発表依頼を受け、「仙台城二の丸跡の調査」として、これまでの調査成果の概要を発表した。

学内への広報活動としては、上記の第2回埋蔵文化財展の案内を『東北大学学報』第1296号に掲載し、展示の報告を「東北大学構内の埋蔵文化財とその活用」として『東北大学学報』第1301号に投稿した。また、刊行は翌年度になったが、「仙台城二の丸跡第10地点の調査」と題して、二の丸跡第10地点の調査成果の速報を、『東北大学学報』第1324号に投稿した。

また、東北大学教育学部附属大学教育開放センター主催の、放送による東北大学開放講座『中世みちのくの城館』の第18回（最終回）の担当依頼を受け、「仙台城二の丸を掘る」として二の丸跡の調査の概略を解説した。

《引用・参考文献》

- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 1
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1986 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 2
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 3
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 4・5
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 6
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1994 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 7
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 8
山田しょう 1991 a 「仙台城二の丸を掘る」『中世みちのくの城館』 pp.177~186
東北大学教育学部附属大学教育開放センター
山田しょう 1991 b 「仙台城二の丸の調査」『発掘された江戸時代』
江戸遺跡研究会第4回大会発表要旨 別紙

第Ⅱ章 仙台城二の丸跡第10地点（NM10）の調査

1. 調査経緯

(1) 川内地区の立地と歴史および1990年度までの調査

東北大学の附属図書館、および文系4学部、記念講堂、国際文化研究科などが置かれている現在の川内地区は、江戸時代の仙台城二の丸跡、周辺の武家屋敷跡などに相当する。

仙台城は、仙台市街地の西方、広瀬川を渡った、通称青葉山の東端に位置している（図1）。本丸は、北・東・南の三方を広瀬川と竜の口渓谷に囲まれた海拔115～140mの急崖上に位置しており、また北側の二の丸、北東の三の丸も、それぞれ海拔61～78m、40mの階段状の河岸段丘上にある。この中で二の丸は、東方を蛇行する広瀬川に向かって緩やかに傾斜する上町段丘上（武蔵野面相当）に位置する（図2）。

仙台城は、慶長5年（1600年）、仙台藩初代藩主の伊達政宗によって、本丸の造営が開始される。川内地区の後に二の丸が造営される区域には、伊達政宗の四男である伊達宗泰の屋敷が置かれていた。元和6年（1620年）には、この伊達宗泰の屋敷の北側に、政宗の長女五郎八姫の居館「西屋敷」が造られる。

寛永15年（1638年）、二代藩主伊達忠宗は、もとの伊達宗泰の屋敷地において、二の丸の造営を始める。幕藩体制の安定とともに、本丸の山城的な立地が不便となったことが、二の丸造営の理由と考えられている。二の丸完成後、仙台藩の政治・諸儀式の中心はここに移され、二代藩主以降はその居館ともなる。二の丸の北隣には、五郎八姫の「西屋敷」が存続する。

寛文元年（1661年）には五郎八姫が死去し、西屋敷のあった場所は「天麟院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵や作業場、下級藩士の居所など、実務的な空間となる。さらに17世紀末から18世紀初頭の元禄年間には、四代藩主伊達綱村によって二の丸は大改造され、もとの西屋敷の敷地を取り込んで拡大される。その後いくたびかの災害や火災を被るが、その度に再建され、二の丸は幕末まで、事実上仙台城の中核として機能していく。

版籍奉還の明治2年（1869年）には、二の丸に勤政庁が置かれ、明治4年（1871年）の廢藩置県後は、仙台城が明治政府・兵部省の管轄下に移り、東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。この頃に本丸の建物群は取り壊されるが、二の丸建物群は依然として残っている。しかし、明治15年（1882年）の火災によって、二の丸建物群はほとんどが焼失する。その後陸軍第二師団が置かれ、敗戦まで続くことになるが、敗戦間近の昭和20年（1945年）7月、仙台空襲の際に大手門などわずかに残った建物も焼失してしまう。戦後は米軍の駐留地となり、昭和32年（1957年）、米軍より返還後、東北大学が川内地区に移転し、現在に至るのである。なお、川内

地区的変遷については、これまでの調査成果を合わせて本書の考察編において詳述している他、『伊達治家記録』記載の二の丸に関する災害・造営・修理関係記録も付編に掲載したので、あわせて参照されたい。

仙台城二の丸跡・武家屋敷跡である川内地区の発掘調査は、仙台市教育委員会、東北大学考古学研究室によって小規模な調査が行われたことがあるが、組織的・継続的に行われるのは、東北大学に埋蔵文化財調査委員会が設置された1983年度以降のことである。以来、委員会による二の丸跡の調査は、1990年度までで9地点を数える。これらの調査成果については、『東北大学埋蔵文化財調査年報』1～8において報告してきたところであり、本書の考察編においても、これまでの調査の歴史がまとめて詳述されているので、そちらを参照いただきたい。

(2) 調査地点の位置

今回の調査は、川内南地区を南北に走る道路（通称中善通り）に外灯を設置することに伴う調査である。中善通りの南端は、ロータリーとなっており、ここから東側に伸びる道路を150mほど進んだところが大手門にあたる。今回の調査は、中善通りの主に西側に外灯を設置するに伴う調査で、このロータリーから北側にかけての部分が対象となった（図10）。それぞれの調査区の面積は狭いものの、南北両端の調査区の間隔は、直線距離で150mになる。この内、南端のロータリー付近の2区・3区とした調査区は、1983年度に調査を実施した第2地点に近い所に位置する（年報1）。第2地点は、絵図との対比から、「小広間」と呼ばれた建物の周囲をめぐる廊下とその周辺に相当すると考えられている。「小広間」は、本丸の「大広間」に相当するもので、二の丸建物群の中でも、もっとも重要な儀式などで使用された、中心的な位置を占める建物である。一方、今回の調査区の北端にあたる1区は、1990年度に調査を行った第9地点に隣接する場所である（年報8）。絵図との対比では、この第9地点の調査区の北東隅に近い場所に、二の丸の裏門である「台所門」が存在したと考えられる。したがって今回の調査地点は、二の丸の中枢部分から、裏門に至る区域に相当することとなる。

(3) 調査方法と経過

道路横断部分以外のケーブル埋設部分については立会調査としたが、掘削深度が浅く、明治以降の盛土内におさまり、特に問題となる箇所は認められなかつたため、それ以上の調査は行っていない。掘削深度が深いのは、ケーブルが道路を横断する部分と、外灯本体の基礎が入る部分、ケーブルの分岐・接続用のハンド・ホール設置部分であった。これらについては、重機による掘削時に立ち会い、精査が必要な部分は随時本調査に切り替えた。

これらの掘削深度が深く、調査が必要であると予想された部分が、おおむね5ヶ所のグルー

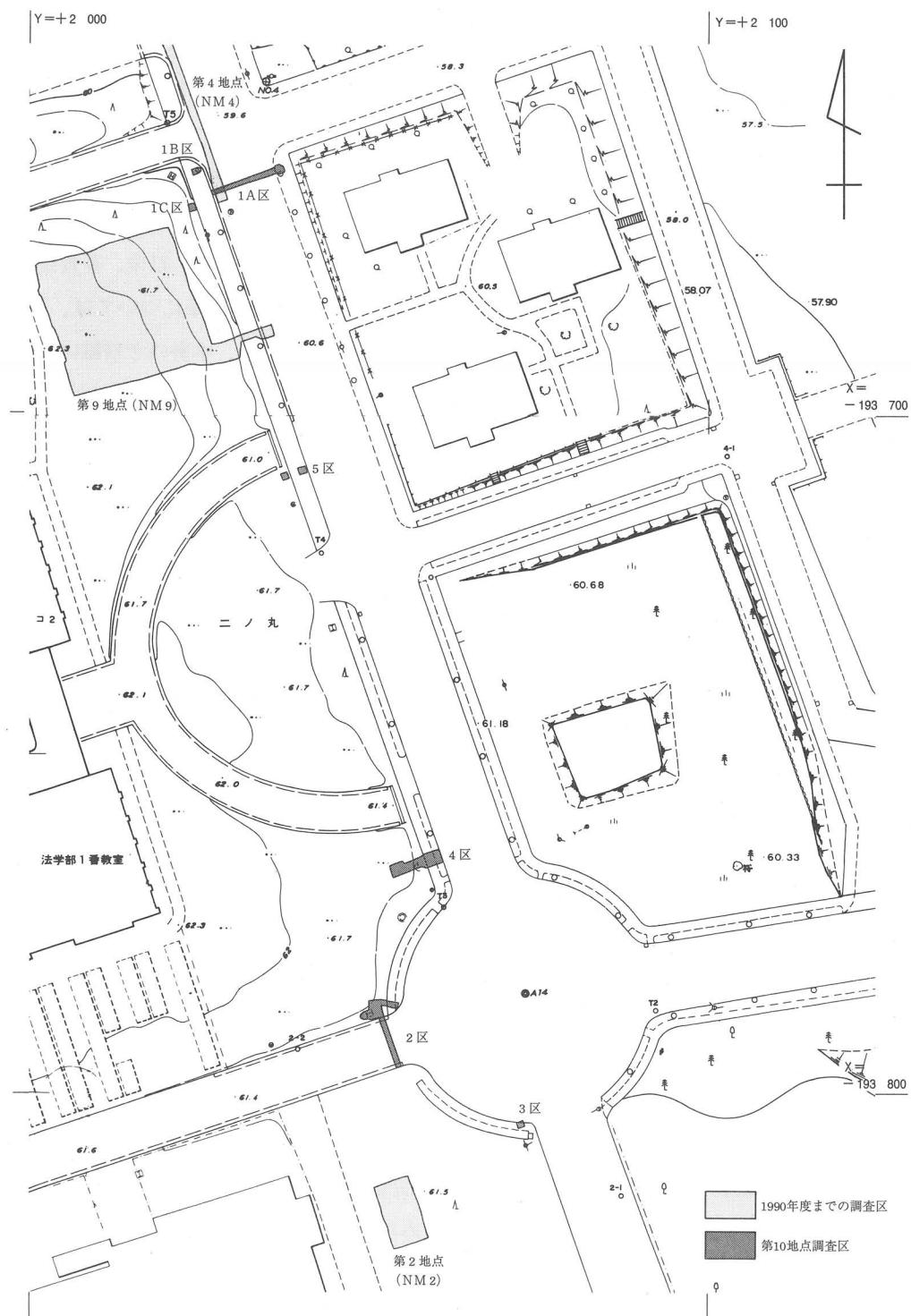


図10 仙台城二の丸跡第10地点調査区の位置

Fig. 10 Location of NM10

NM10 i.e. Location 10 of *Ninomaru* (the secondary citadel of Sendai Castle)

に分かれていたため、工事の進行に合わせて調査に着手した順番に、1区から5区とした。1区と2区については、1A区～1C区、2A～2D区と細別した。1A区と2区については、縮尺1/10で平面図・断面図を作成した他、4区の平面図と、3区・4区・5区の断面図は、縮尺1/20で作成した。遺構の検出されなかった調査区については、平板測量によって、調査区の位置を縮尺1/100で記録した。遺構が検出された、1A区・2区・4区の測量基準点の国土座標値は、それぞれの平面図中に示してある。

2. 検出遺構

1区から5区までの調査区の位置が、それぞれで離れており、層序を対比し共通の層名を付けることができなかつたため、それぞれの調査区ごとで層名を付けている。なお、検出遺構の絵図との対比や、出土遺物については、考察編で二の丸跡の他地点の調査成果とあわせて検討する。

(1) 1区(図11、図版1)

1区は、今回の調査では最も北側の部分で、1990年度に調査を行った二の丸跡第9地点の調査区の北東側に位置する。ケーブルが道路を横断する部分と、道路東側のハンド・ホール1ヶ所、道路西側の外灯基礎1ヶ所とハンド・ホール1ヶ所が、工事による掘削が深い部分であった。道路横断部分は、道路東側のハンド・ホール設置部分をつなげ、1A区とした。道路西側の外灯基礎とハンド・ホール部分は、位置がそれぞれ離れているため、別々に対応し、それぞれ1B区、1C区とした。

1A区の道路横断部分は、道路を全面通行止めにできないため、東半分と西半分に分けて調査を行うこととし、西半分から調査を開始した。西半分は、給水管設置の際に一度掘削された部分(二の丸跡第4地点、年報5)をまたぎ、それ以外の部分でも、掘削深度が明治時代以降と考えられる3層以上に収まるため、精査は行なわなかった。東半分では掘削予定深度まで掘ったところで、石組の溝などが検出され、また道路東側ハンド・ホール設置部分では、石組溝より深い所まで掘削されるため、手掘りによる精査を行った。また、ハンド・ホール設置部分では、より下層の状況を確認するために、南壁沿いに小規模な深掘り部分を設けた。

基本層序は8層が確認され、1層は大学によると考えられる、ごく新しい整地層である。2層と3層も、後述する石組溝を埋めており、石組溝の一部にコンクリートが使用されていることから、明治以降のものである。4層以下が江戸時代の整地層と考えられる。4層～6層は、隣接する第9地点との対比から、二の丸造営時の整地層の可能性がある。7層の暗褐色土と8層の焼土は、二の丸造営以前の伊達宗泰の屋敷が置かれた時代の地層である可能性が高い。

検出された遺構としては、石組溝・暗渠が各1条ある。

石組溝は、調査区の東寄りで検出された。調査区が狭いため60cm分を検出したにすぎないが、方向はN-14°-Wである。4層上面から掘り込んで構築されているが、3層上面がほぼ石組の上面のレベルと合致する事から、石組溝の構築が3層の整地と一連に行われた可能性もある。幅30cm、深さ20cmで、東側は三角形に整形した石を側石として一段並べ、石の間はコンクリートで補強されており、明治時代以降に造られたことが確実である。西側は、かなり大きな扁平な円礫を一段並べて側石としている。底面には扁平な礫を敷き、隙間を小礫で埋めている。溝内の堆積土からガラス容器片が出土している。

暗渠は、調査区の西端に一部がかかっているだけなので、幅は不明。掘り上げていないため深さも不明である。方向はN-約55°-Eである。3層上面から掘り込んで構築されている。溝状に掘った中に、礫を詰めたものである。

また南壁の断面で、石組溝の掘り方の南端にあたる位置に、5層上面から掘り込まれた遺構かと思われる落ち込みが確認されたが、石組溝の下に入り込み、全体を調査できなかつたため、確認できていない。

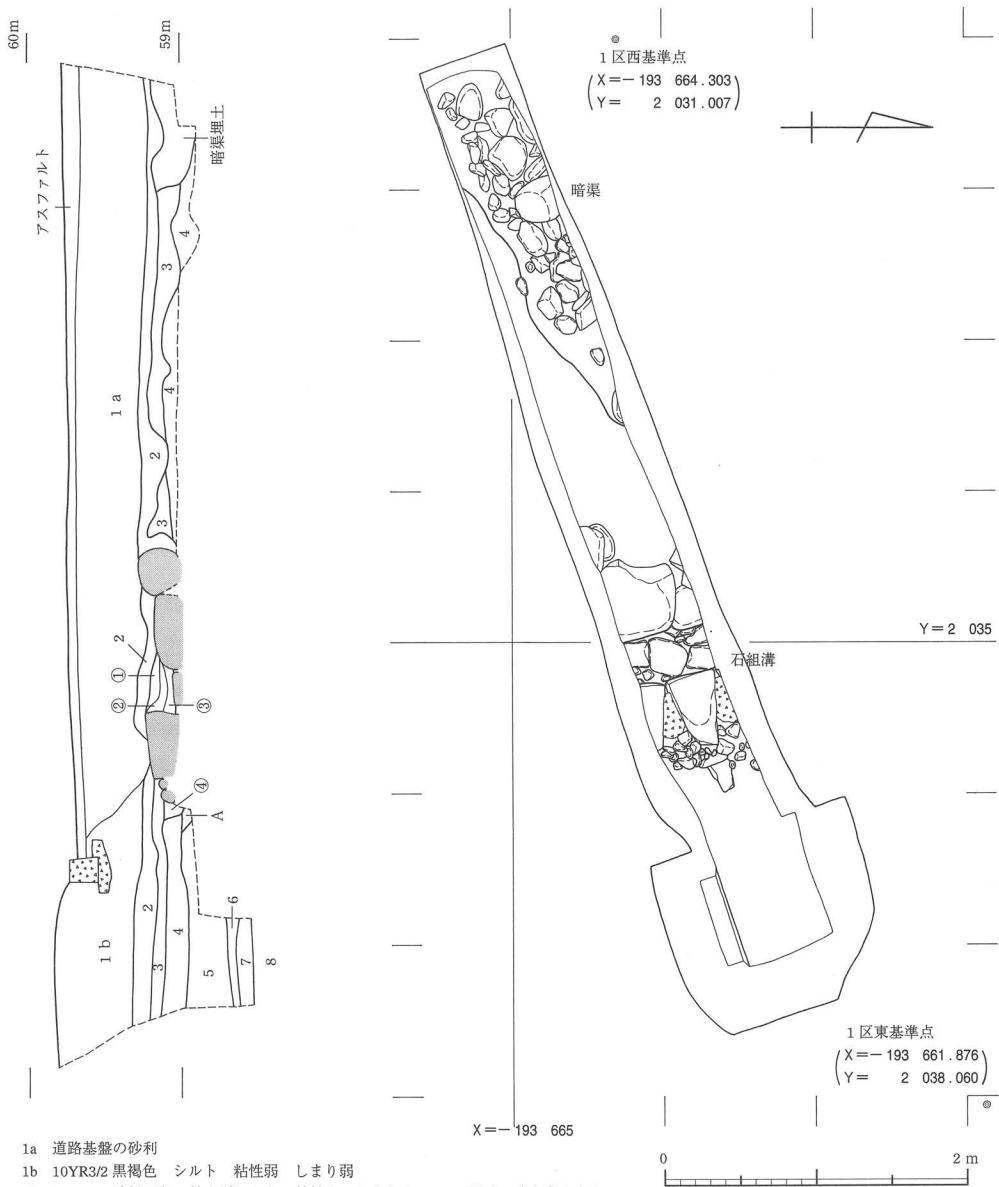
出土遺物は極めて少なく、図示したものは無い。江戸時代の層位・遺構から出土した遺物は、4層と5層から土師質土器皿の小片と、瓦の小片だけである。それ以外の出土遺物は、全て明治時代以降の層位・遺構からのものである。

1B区と1C区では、機械での掘削の際に立ち会ったところ、掘削深度まで既に攪乱を受けたため、それ以上の調査は行っていない。遺物も出土していない。

(2) 2区(図12・13、図版2・3)

埋設ケーブルが道路を横断する部分と、道路の北側に外灯基礎1ヶ所、ハンド・ホール2ヶ所を設置する部分をつなげて調査区を設定した。ケーブルの道路横断部分を2A区、その北側のハンド・ホール設置部分を2B区、西側の旧外灯を撤去し、旧ケーブルと新しいケーブルを接続するためのハンド・ホール設置部分を2C区、東側の外灯基礎設置部分を2D区とした。調査は、工事の進行にあわせて進めることとしたため、この2Aから2D区の順に、順番に調査することとなった。

2A区については、後述する石敷遺構上の堆積土を掘り上げた、石敷上面のレベルが、ケーブル埋設予定の深さまで達していたため、山砂を入れて埋め戻し、ケーブルを埋設する措置をとった。また、2B区と2C区に予定されていた2ヶ所のハンド・ホールは、明治時代の暗渠の部分に場所を移動して設置することとした。これらの措置によって、2A区・2B区・2C区の検出遺構は、全て保存することが可能となり、2B区で検出された石組溝は山砂と土納で埋め戻した。そのため、石敷遺構・石組溝については、石を取り外して裏込めなどの調査は行っていない。



- 1a 道路基盤の砂利
 1b 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
 2 10GY4/1 暗緑灰色 粘土質シルト 粘性中 しまり中 20cm以下の礫を多く含む
 3 10Y5/1 灰色 粘土質シルト 粘性中 しまり中 4 cm以下の礫を含む
 4 10YR7/8 黄橙色 シルト 粘性中 しまり中
 5 10YR4/6 褐色 シルト 粘性中 しまり中 斑状の白色粘土を少量含む
 6 2.5Y8/6 淡黄褐色 粘土 粘性強 しまり中
 7 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性中 しまり中
 8 5YR5/6 明赤褐色 シルト 粘性弱 しまり強 焼土
 A 10YR5/3 にぶい褐色 粘土質シルト 粘性中 しまり中 酸化鉄が斑状に入る 遺構埋土?
 ① 石組溝埋土 1層 7.5GY5/1 緑灰色 粘土質シルト 粘性中 しまり中
 ② 石組溝埋土 2層 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト 粘性中 しまり強 酸化鉄が斑状に入る
 ③ 石組溝埋土 3層 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 しまり弱 5 cm以下の礫を少量含む
 ④ 石組溝掘方埋土 10GY5/1 緑灰色 粘土質シルト 粘性中 しまり中
 暗渠埋土 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト 粘性中 しまり強

図11 仙台城二の丸跡第10地点1区平面図・断面図

Fig. 11 Plan and cross section of Grid 1 at NM10

① 基本層序

基本層序は大別で I ~ VI 層が確認された。この内の III 層は、細かく細分され、しかも各層の分布範囲が狭く、直接重なり合わない層も多い。また、工事の進行にあわせて調査を進めた関係上、層序の検討は全て調査区の外壁セクションで行うこととなり、任意にセクションを設定し検討することができなかったことや、2B 区と 2C 区の間が明治時代以降の暗渠によって分断されていたことなどから、相互の関係は十分にはとらえられていない部分が残っている。

基本層の層相は、以下の通りである。

I 層	盛土・舗装下の碎石
II 層	明治時代以降の盛土層
III - 1 a 層	10YR4/4 褐色 砂質シルト 粘性小 しまり中 明黄褐色粒と炭化物を比較的多く含む
III - 1 b 層	10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粘性小 しまり中 明黄褐色粒と炭化物を比較的多く含む
III - 1 c 層	2.5Y6/4 にぶい黄色 シルト 粘性小 しまり中 炭化物を少量含む
III - 1 d 層	7.5Y4/2 灰オリーブ色 砂質シルト 粘性小 しまり中 炭化物を少量含む
III - 2 a 層	7.5Y4/1 灰色 シルト 粘性中 しまり中 炭化物を含む
III - 2 b 層	10Y5/2 オリーブ灰色 シルト 粘性中 しまり中 炭化物・明黄褐色ブロックを少量含む
III - 3 層	10YR1.7/1 黒色 砂質シルト 粘性小 しまり小 橙褐色粒・炭化物を多く含む 場所によっては純粹な炭の層
III - 4 層	2.5Y5/1 黄灰色 シルト 粘性中 しまり中 炭化物を多量に含むが III - 3 層よりは少
IV - 1 層	10YR4/6 褐色 シルト 粘性中 しまり強 白黄褐色・明黄褐色粒・炭化物を多く含む
IV - 2 層	10YR5/8 黄褐色 シルト 粘性中 しまり強 白黄褐色・明黄褐色粒・炭化物を多く含む
V - 1 層	2.5Y5/1 黄灰色 粘土質シルト 粘性中 しまり中 V - 2 層起源のブロックを少量含む
V - 2 層	10YR5/8 黄褐色 シルト 粘性中 しまり強 白黄褐色ブロック含む
VI 層（地山）	2.5Y7/3 浅黄色 シルト 粘性強 しまり小 橙黄褐色脈が多数入る

この内、I 層と II 層は、明治以降の盛土層である。III 層は合計 8 層に分けられたが、大きくは III - 1 層、III - 2 層、III - 3 層、III - 4 層にまとめられる。

III - 1 層は、明治 15 年の火災によると考えられる焼土や溶融板ガラスを含む III - 1 b 層と、

これと同じ段階と考えられる層をまとめた。Ⅲ-1b層とⅢ-1a層は2D区から2B区を中心には分布するのに対して、Ⅲ-1c層とⅢ-1d層は2A区を中心に分布することから、厳密な前後関係はとらえられていない。

Ⅲ-2層は、このⅢ-1層と次に述べるⅢ-3層との間に入る層をまとめたが、a・bに細分された。Ⅲ-2a層は、2D区を除く調査区のほぼ全域に分布するのに対して、Ⅲ-2b層は2A区と2B区の石敷遺構上と石組溝内部を中心に分布する。Ⅲ-2b層からは比較的多くの遺物が出土している。細分以前の段階に取り上げた遺物はⅢ-2a・2b層としたが、ほとんどはⅢ-2b層に帰属する可能性が高い。また、Ⅲ-2b層から溶融板ガラス片2点が出土しており、明治15年の火災によるもの可能性がある。しかし、このⅢ-2b層出土の遺物は、次に述べるⅢ-3層出土の遺物と接合し、また両者から出土した遺物の様相に相違点が見られない。Ⅲ-3層は、層の様相から火災に伴う後かたづけとは考え難いえ、陶磁器の様相からも明治15年以前に廃棄された可能性が高く、この溶融板ガラスは混入の可能性も否定できない。

Ⅲ-3層は、炭を大量に含む層で、場所によってはほとんど純粹な炭層に近い状態を呈する。2A区の南端と2B区の北半、西側の2C区には分布しないが、それ以外の範囲に分布する。特に2A区から2B区南半の石敷遺構の上に厚く分布している。遺物を大量に含んでおり、2区の出土遺物の大半は、この層からの出土である。Ⅲ-2b層出土の遺物を含めると、2区出土遺物のほとんどを占める。Ⅲ-3層の炭の成因を検討するために、コンテナ1箱分を採取して水洗選別を行ったが、炭の大きさが大きいものでも5cm以下で、2~3cm程度の大きさのものに比較的そろっている。火災によって建築材が炭化したようなものは含まれていない。また、動物・植物遺存体も全く含まれていなかった。以上のことから、燃料として使われていた炭が、まとめて捨てられた可能性が高いものと考えられる。

Ⅲ-4層は石敷遺構を覆う層で、Ⅲ-3層とほぼ似通った分布を示す。しかし、Ⅲ-3層と接する上面や上部を除けば、遺物はほとんど出土していない。

IV層は東側の2D区にのみ分布する。西側の2C区に分布するV層との関係は不明である。2D区東端において、このIV層上面で径40cm程の礫が検出されている。この礫は上面がほぼ平坦で、柱の礎石かと思われたため、慎重に検討を加えたが、掘り方は検出できなかつた。もし、礎石であるとするならば、IV層は二の丸期、あるいは二の丸造営時の整地層の可能性がある。ただし、IV-2層から1点だけではあるが幕末~明治初頭と考えられる陶器皿が出土しており、この点からは二の丸期の整地とは認められない。しかし、なにぶん小片であるので混入の可能性も残り決定し難い。

V層は西側の2C区にのみ分布する。このV層上面から地中に礎石を埋めた柱穴が掘り込まれている。今までの二の丸跡の調査所見では、同様の構造の柱穴は、江戸時代の遺構でのみ使

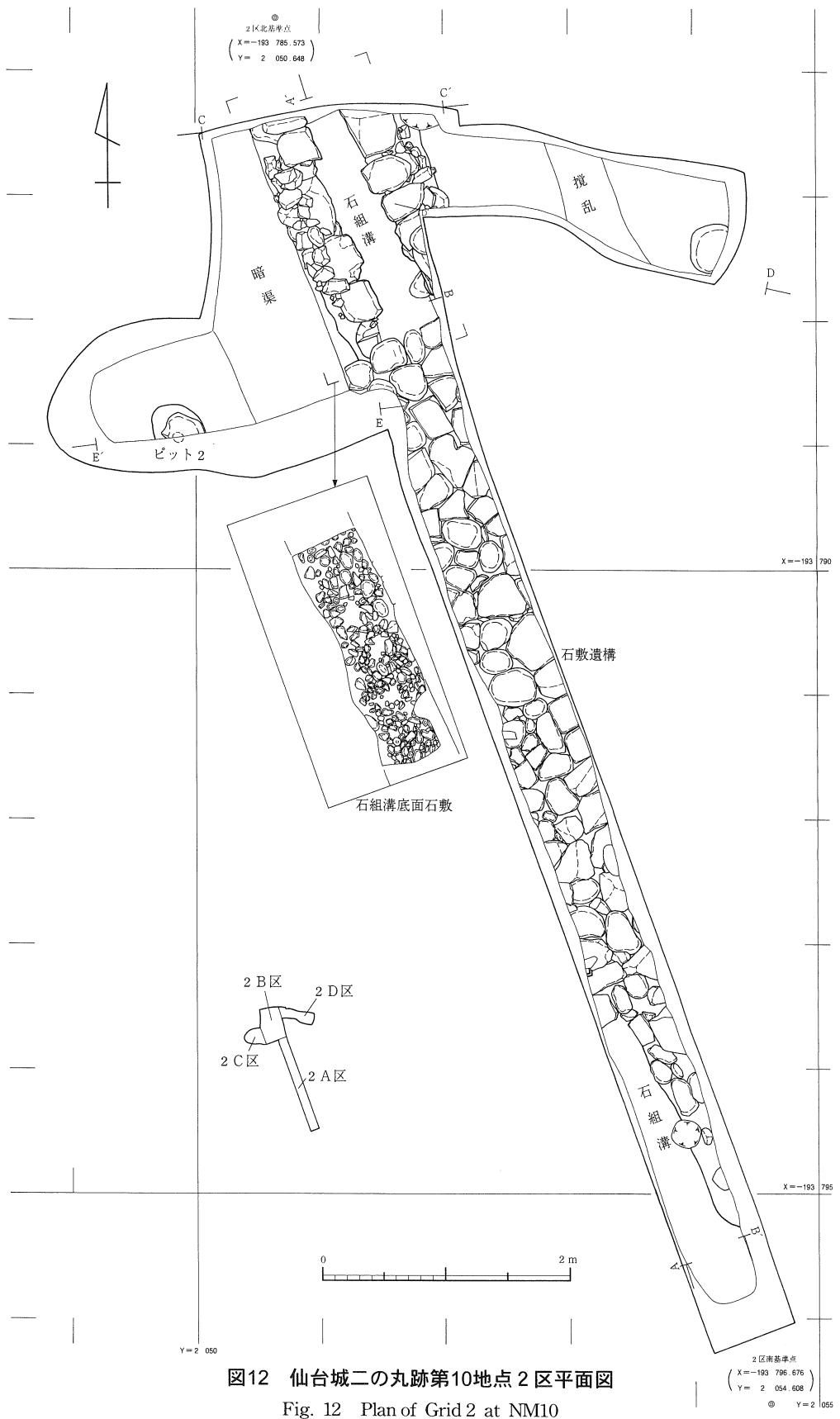


図12 仙台城二の丸跡第10地点2区平面図

Fig. 12 Plan of Grid 2 at NM10

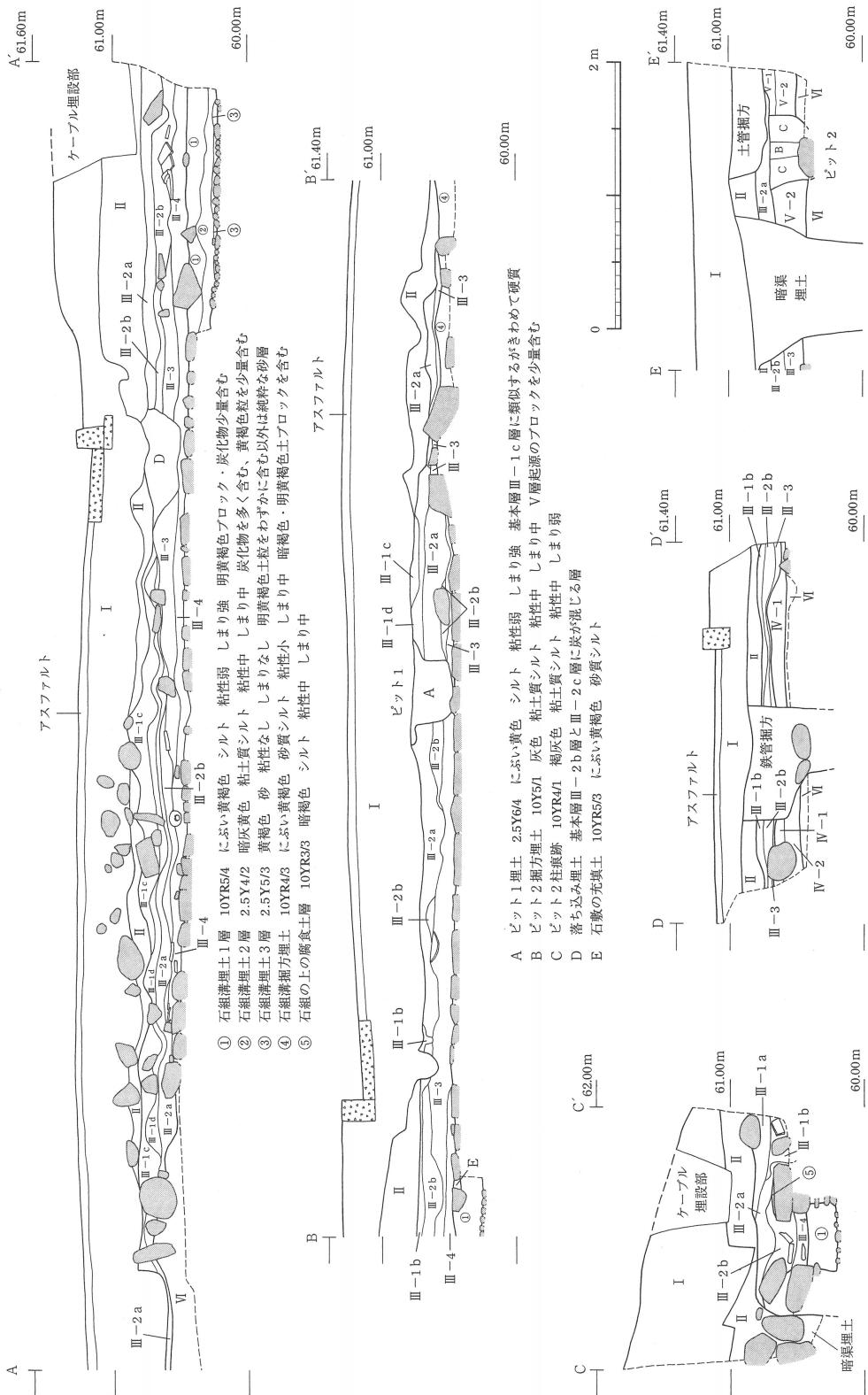


図13 仙台城二の丸跡第10地点2区断面図
Fig. 13 Cross sections of Grid 2 at NM10

用されており、明治以降には使われていない。このためⅤ層は、二の丸存続期、あるいは二の丸造営時の整地層と考えられる。

② 検出遺構

2区において検出された遺構としては、石敷遺構・石組溝・ピットがある。

【石敷遺構】

2A区から2B区にかけて検出された。後述する石組溝を埋め、石組溝の側石をはずして造られている。南北端で後述する石組溝にほぼ直交する。南北の幅は5.7mである。扁平な河原石や、扁平な亜角礫をそのまま利用しているが、少數ながら、一部を打ち欠いて使用している例がある。ほとんどの礫は、本来の形を巧みに利用して、石と石の間に隙間ができないように敷き詰めるが、場所によっては、隣の石にあたる部分を、その部分だけ打ち欠いている。石敷の上面レベルは、北端が南端より5cmほど低く、わずかに北側に傾斜している。北端の石がほぼ似通った大きさのものが一列に並ぶ他、これとほぼ直交する方向に石の目地が通る場所があり、作業工程を示すものと考えられる。

【石組溝】

2B区において、両側に石を組んだ溝が検出された。2B区検出の溝は、その南端が石敷遺構によって破壊されているが、2A区の南端の、石敷遺構の南側にも、石敷遺構上面より高いレベルから礫が並んで検出された。この石列の方向が、2B区検出の溝と一致することから、石組溝の延長であり、その西側の側石から裏込め部分であると考えられる。検出された長さは、北側で2.0m、南側で1.9mであるが、本来は石敷遺構の部分も一連でつながっていたと考えられることから、合計9.6mとなる。南北とも調査区外に伸びて行く。方向はN-25°-Wである。幅は上端で30~40cm、下端で50cmと、ややオーバーハングしている。深さ60cmを計る。上幅120cmの掘り方の中に、下半分は小振りの石を積み、上半分は30~50cm前後のやや扁平な石を2段積んでいる。底面は径数cm~拳大の円礫や扁平な河原石を敷いている。側石の上面には、地表に露出していた時に形成されたと考えられる腐食土の薄い層が認められた部分があった。西側の現存する側石の南側に、側石の抜き取り痕が検出されている。この抜き取り痕の一部は石敷の石に覆われており、石敷遺構が造られる際に邪魔になる側石が抜き取られていることが明らかである。その際に、石敷遺構の上面レベルと同じ高さまで埋め戻されている。遺物は、埋土から土師質土器の皿などが出土しているが、年代の判明する遺物が出土していないので、埋められた時期は不明である。

【ピット】

2A区の中程東壁沿いで検出されたもので、Ⅲ層上面から掘り込まれた、径50cm程のピットである。底面は石敷遺構の石敷面に達している。掘り込み面から、明治15年以降に掘られたも

のである。これ以外にも、いくつかのピット状の落ち込みが、Ⅲ層上面で検出されている。

【ピット2】

2C区のV層上面から掘り込まれたもので、南半分は調査区外となり、北半分だけの検出である。径40cm前後を計る不整円形の柱穴の底面に、径30cm程の、上面が扁平な石を据えて、この石の上に柱を立てている。底面に石を据える構造の掘立柱は、これまでには二の丸期に見られる構造で、明治以降には見られないことから、このピット2は二の丸期の柱穴と考えられる。

また、前述のように、2D区の東端で径40cmの大きな石が検出されている。上面が平らなことから柱の礎石の可能性があるが、礎石を据えるための掘り方は検出されていない。

③ 小結

以上の2区検出の遺構と層序関係を簡単にまとめておく。

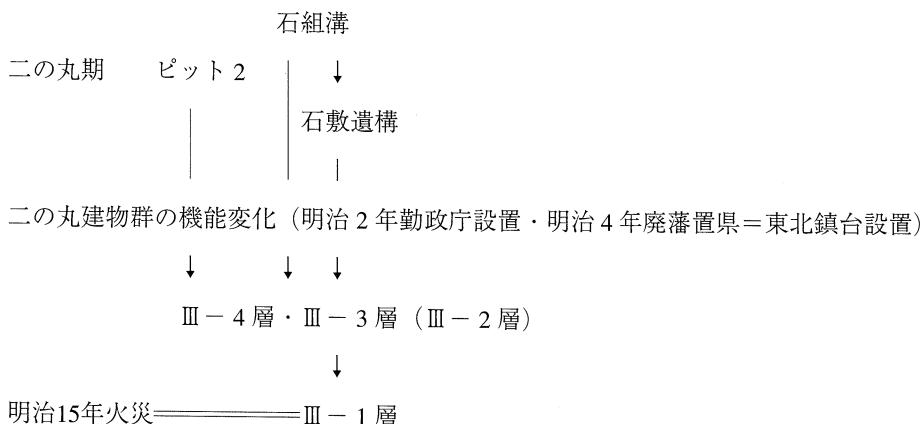
石組溝と石敷遺構との構築の前後関係は、石組溝を埋めて石敷遺構が造られていることから明確であるが、石組溝の機能が全く失われたかどうかについては別である。石組溝は石敷遺構上面のレベルまで埋め戻されており、25cm程の深さが残っている。2C区V層上面・2D区IV層上面の標高が、石組溝の上面とほぼ同じで、石敷遺構の部分だけが25cm程、すなわち石組溝の深さだけ低いことになり、石敷遺構と石組溝が一連のものとして機能することは可能である。また2D区IV層が明治に入ってからの整地であったとしても、地山のVI層上面のレベルは、石敷遺構の上面より、なお10cm以上高い。したがって、石敷遺構にたまつた水を排水するための溝として、石組溝はその機能を残していたものと考えたい。

ピット2は二の丸期のものであることが確実であり、2D区東端の礎石？もその可能性がある。しかし、これらの遺構が石組溝・石敷遺構と同時に存在したのかどうかについては確定できない。

Ⅲ-3層からまとまって出土した陶磁器類は、後に出土遺物の項で詳述するが、幕末から明治初頭ごろのもので占められることから、石敷遺構の機能が失われ、これらの遺物が大量の炭と共に廃棄されたのもこの頃であると考えられる。二の丸が本来の機能を有していた時点で、このような廃棄物が捨てられることは考え難いことから、明治になってからのことであろう。また、Ⅲ-1b層の焼土が明治15年の火災によると考えられることから、Ⅲ-3層の形成はこれ以前の可能性が高い。Ⅲ-3層の大量の炭が明治15年の火災によるものであり、Ⅲ-3層からⅢ-1層にいたる層が、火災の後かたづけに伴う一連の整地層であるという解釈も可能である。しかし、Ⅲ-3層中の炭が、大きさがそろい、火災の廃材のようなものが含まれていないことは、Ⅲ-3層が明治15年の火災とは別に、それ以前に形成された可能性が高いことも示している。このような点を踏まえて、明治初頭から明治15年の間で、二の丸建物群の使われ方が大きく変化するような事象としては、明治2年の勤政庁の設置か、あるいは明治4年の廢藩置

県によって旧二の丸が兵部省の管轄下に入り東北鎮台が設置されたことがあげられる。このいずれかを判断することは困難であるが、明治2年ないし4年以降、二の丸建物群の使われ方が大きく変化した結果、Ⅲ-4層・Ⅲ-3層（Ⅲ-2層も含む？）の整地が行われ、その後明治15年の火災に見舞われたと推定される。

以上の検討結果をまとめると以下の通りとなる。



(3) 3区（図14、図版3）

3区は、ロータリー西南側の、外灯の基礎1ヶ所分だけの調査区である。工事施工業者に対して、調査担当者が不在中の掘削は行わないよう要請してあったにもかかわらず、会議で現場作業を休業していた間に、重機で掘削されてしまった。掘削深度が地山まで達していたため、平面精査は行えず、壁面での検討を行えただけである。

基本層は1～4層が確認され、1層・2層は、現表土と、ごく新しいと判断される盛土である。3層はa～dに細分される整地層である。3層の年代は、遺物が出土していないため不明であるが、二の丸造営時の整地層とは様相が異なるため、明治以降の整地層であると考えられる。4層は地山である。

北壁から西壁にかけて、4層上面から掘り込まれた比較的大きな遺構が確認された。底面に礫が認められる。柱痕跡などは確認できなかった。西壁の南よりの部分で、これとは別の遺構になると思われる落ち込みが、もう一つ確認されている。この2基の遺構の関係については、両者の間に攪乱が入っており不明である。両者とも、地山上面から掘り込まれ、3層に覆われることから、二の丸期かそれ以前の遺構の可能性が高いと考えられる。

前述のように、重機で掘削されてしまったという経過もあり、3a層から平瓦1類の小片が1点出土しているだけである。

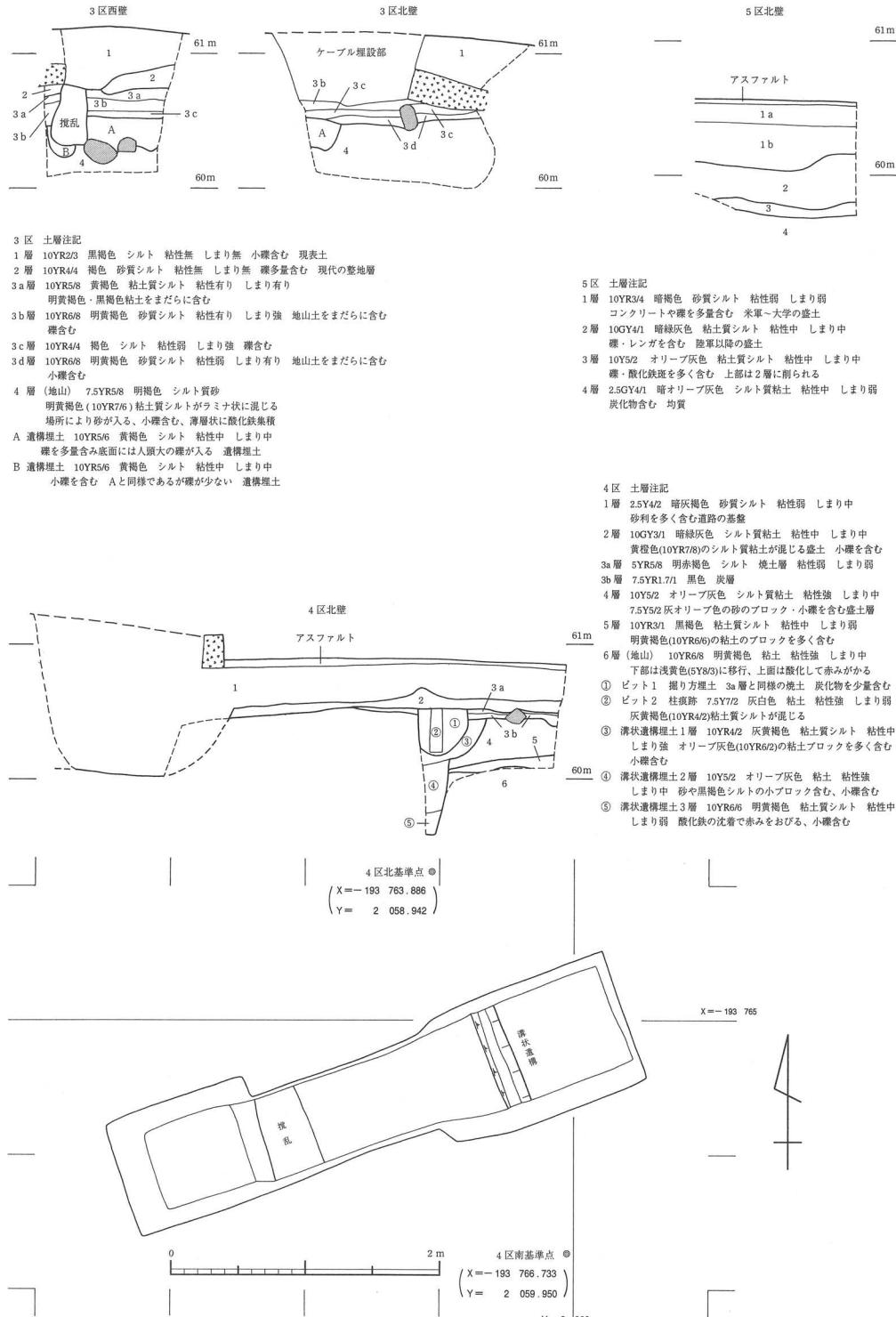


図14 仙台城二の丸跡第10地点 3・4・5区平面図・断面図

Fig. 14 Plans and cross sections of Grid 3, 4 and 5 at NM10

(4) 4区（図14、図版3）

東側の外灯基礎と西側のハンド・ホール部分の各々1ヶ所と、両者をつなぐケーブル埋設部分をつなげて調査を行った。ハンド・ホール部分は、大規模な攪乱によって既に破壊されていたが、外灯基礎部分は、良好な遺存状態であった。

基本層序は、1～6層が確認され、この内の1層・2層は明治以降の整地層である。3層は3a層・3b層に細分され、3a層は焼土層で、3b層は炭の層である。3a層の焼土は、明治15年の火災によるものと考えられる。4層は最大で40cmの厚さの整地層で、第9地点との対比から、二の丸造営時の整地層と考えられる。そのため5層は、二の丸造営以前の伊達宗泰の屋敷が置かれた時期のものと考えられる。6層は地山である。

検出された遺構としては、3層上面から掘り込まれたピット1基と、4層上面から掘り込まれた溝状の遺構が1条ある。

3層上面掘り込みのピット1は、掘り込み面から明治15年以降のものと判断され、柱痕跡が確認されている。これ以外にも2ヶ所、3層上面掘り込みの、浅いピット状の遺構が確認されているが、明治以降のものであることが確実であるため、平面精査は行っていない。

4層上面から掘り込まれた溝状遺構は、二の丸期の遺構と考えられ、N-22°-Wの方向に伸びている。西側はケーブル接続部にあたり、工事による掘削深度が浅いことから調査を行っていないため、幅は確認していない。全体の形態も不明で、とりあえず溝状遺構と呼称する。断面の検討では、埋土の1層と2層の境で段が付き、もともと2段に掘られたものか、あるいは別の遺構が重なっているのか確定できていない。遺物は出土していない。

遺物は、3層から陶磁器・瓦質土器などが出土している。これ以外の層位・遺構からは、ピット3の埋土から土瓶の蓋の小片が1点出土しているだけである。3層出土遺物も、ほとんどが細片で、特徴が判明するものは少ないが、磁器では椀皿類、陶器では土瓶がほとんどで、幕末～明治初頭のものである。図示した遺物は、磁器碗1点のみである（図15-20）。平清水産の中型端反碗で、1983年度に調査した第2地点から同様のものが出土している（年報1）。

(5) 5区（図14、図版3）

東側の外灯基礎と西側のハンド・ホール部分の各々1ヶ所と、両者をつなぐケーブル埋設部分をつなげて調査を行った。ハンド・ホール部分は、雨水樹設置の際の攪乱によって掘削深度まで破壊されていた。外灯基礎部分は二の丸期の層が検出されたため、掘削深度まで、手掘りで精査を行った。基本層序は1～4層が確認され、この内1層・2層は明治以降の整地層である。3層は、その様相から、4区の4層に相当する可能性があり、これが二の丸造営時の整地層であると考えられる。ただし、3層の上面のレベルが低く、層の厚さも薄いことから、2層

の整地が行われる以前に、上部が削平されているものと考えられる。4層は二の丸造営以前の地層の可能性があり、ハンド・ホール部分の攪乱を一部掘り下げた際の所見では、この4層は20cm程の厚さで、その下は地山となっている。

遺物は出土していない。

3. 出土遺物

今回の第10地点の調査においては、2区において遺物がまとまって出土した以外は、1区と4区から若干の遺物が出土している程度である。図示した遺物も、4区出土の図15-20の磁器碗1点を除くと、全て2区出土のものである。2区以外の出土遺物は、図示したもの以外は細片化しており、特に指摘できることは無い。よって以下では、2区の出土遺物についてのみ、述べることとする。

(1) 陶磁器

わずかにⅢ-1b層などから出土している以外は、Ⅲ-2b層とⅢ-3層出土であり、中でもⅢ-3層出土のものが大半を占める。このⅢ-2b層・Ⅲ-3層以外から出土したものは、小片ばかりで、特に指摘できることも無い。図示した遺物も、このⅢ-2b層・Ⅲ-3層から出土のものに限られる。なお、陶磁器の分類基準、生産地同定と年代推定基準については、年報8で示したものに依っている。

磁器では、小型端反碗が大半を占め、中型端反碗がこれに続く。碗以外の器種は、きわめて少なく、皿類もごくわずかである。製作年代は、限定し難い数点を除くと、幕末～明治初頭の19世紀中葉に限られる。

産地ごとに見ると、切込産のものが多いことが注目される。切込産のものには、小型端反碗（図15-2?・3・5・6・図16-10・11?）、小型筒丸形碗（図16-12）、中型端反碗（図16-14）、中型丸碗（図16-15）が認められ、中型丸碗は見込みに蛇の目釉ハギを施す。

平清水産は少なく、中型端反碗（図16-17）、笠文を施す皿（図16-17）が認められる程度である。

瀬戸産の小型端反碗（図15-1・8・9）は、呉須が厚く盛り上がるものである。他には蓋が認められる（図16-19）。図16-18は瀬戸産かと思われる型打の輪花皿で、酸化焼成である。図15-4は、蓋物の身で、高台の形態がやや特殊なため産地は確定できなかった。

陶器では、土瓶が大半を占め、小型碗が続く。小型碗には筒丸形が多く、端反碗は少数である。これら以外の器種は、軟質施釉陶器とした焙烙を除くと極めて少なく、皿類もわずかである。製作年代は、19世紀前葉から中葉のものでほとんどが占められる。

産地ごとに見ると、圧倒的多数が大堀相馬産で占められる。小型碗は、ほぼ大堀相馬産で占められ、半失透系の灰釉を施す筒丸形が多く、鉄絵を施すものもある（図17-21・22）。端反碗には青釉を施すもの（図17-23）が認められる。土瓶の身には、「糠白釉」と呼ばれる半失透の灰釉土瓶（図17-25）、鉄絵筒描き灰釉土瓶（図17-27）、青釉鉄絵灰釉土瓶（図17-26）が認められるが、明治7年（1874年）以降に製作されたと伝えられる鮫肌土瓶（勿来手）は、蓋も含めて全く認められない。土瓶の蓋は、山蓋が多く、平蓋は少ない。白泥鉄絵（図17-28）、鉄絵筒描き（図17-29）、「糠白釉」（図17-32・33）青釉（図17-30・31）などが認められる。

大堀相馬産以外の製品としては、平清水産と思われる皿と、軟質施釉陶器とした堤産の焙烙が確認できる程度である。平清水産の玉縁の小皿（図17-24）は、第2地点でも同種のものが

表3 仙台城二の丸跡第10地点出土陶磁器集計表

Tab. 3 Distribution of porcelains and glazed ceramics at NM10

層・遺構	磁 器										陶 器								軟質施 釉陶器 不 明 焙 烙 不 明	
	中 碗		小 碗		碗		皿		その他	不 明	小 碗	碗 不 明	土 瓶		皿	土 身 蓋	その他			
	丸 形	筒 形	端 形	丸 形	筒 形	端 形	不 明	小 中					土 身 蓋	蓋						
1区																				
2層	2						1				5									
4層											1								2	
5層																				
石組溝埋1層																				
石組溝裏込																				
合計	2						1				6								2	
2区																				
I層			1		1						2						1			
II層																			<th data-kind="ghost"></th>	
III-1a層																				
III-1b層	2			1	6		不明 1			3	1	1			10					
III-1c層																			<th data-kind="ghost"></th>	
III-1d層																			<th data-kind="ghost"></th>	
III-2a層																			6	
III-2a・2b層	5			3	18	3	不明 1	德利 1	3	2	4	小中 3	46	2	湯飲 1	4	2			
III-2b層				2	1	1				1	1	極小 1	9	2	土鍋蓋 1	2	3			
III-3層	1	4	1	1	25	22	2	蓋物 1 蓋 1	3	26	10	小中 2	60	14	瓶 1 德利 1 土鍋 1 湯飲 1	3	44			
III-4層						1		蓋 1												
IV-1層																				
IV-2層						1														
V層																				
石敷遺構石間																				
石組溝埋①層																				
石組溝埋②層												1								
石組溝底面																				
石組溝裏込																				
ピット1埋土																		1		
擾乱		1		1			不明 1							2					1	
不明										1		小中 1	1							
合計	1	12	2	1	33	48	7	3	4	12	31	16	7	129	18	6	9	56	1	
3区																				
3a層																			<th data-kind="ghost"></th>	
4区																			<th data-kind="ghost"></th>	
3層						1	3			7				41	1	壺 1 水入 1	4	4		
ピット3埋土						1	3			7				1	1	蓋 1				
合計						1	3			7				42	2	3	4	4		

出土している（年報1）。堤産の焰烙は、透明釉をかけたもので、仙台城では19世紀に普遍的に出土するものである（図17-34・35）。35は、焼成後に、底面に径0.9cmの小孔を開けている。

(2) 土師質・瓦質土器

陶磁器と同様に、2A区と2B区のIII-2b層とIII-3層出土のものがほとんどを占めるが、土師質土器の皿は石組溝埋土②層でややまとまって出土している。

土師質土器では、皿、焼塩壺、火消壺、火鉢、五徳が確認された。

皿は、ほとんどが石組溝埋②層からの出土で、これ以外のものがIII-2b層・III-3層に集中することと対照的である。破片が多く、図示したものは1点だけであるが（図18-41）、他

表4 仙台城二の丸跡第10地点出土土器・瓦・その他の遺物集計表

Tab. 4 Distribution of ceramics, roof tiles and various implements at NM10

層・遺構	土師質土器					瓦質土器					瓦					その他の遺物
	皿	燒	鉢類	五	不	鉢類	炭	十	不	平瓦	丸瓦	棟	瓦	不		
		塩壺	火	火	播	不	火	不	能	点	重量	点	重量	点	重量	
火	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	数	(g)	数	(g)	数	(g)	
1区																
2層										2	164					
4層	1									1	84	1	395			ガラス容器1貝1
5層	2									8	894	1	41			和釘1
石組溝埋1層										1	52	1	88			ガラス容器4
石組溝裏込										1	64					
合計	3									13	1258	3	524			3貝91
2区																
I層		1					1	1								
II層										1	55					
III-1a層																
III-1b層	3	4	1	8			1			2	375			1	927	2貝27溶融ガラス7
III-1c層																
III-1d層																
III-2a層																
III-2a・2b層	2	3	4	16		4	2	3	3	1	6	538	5	1220	17	574515145珪化木1
III-2b層	4	3	3	5		5	1	4	5	2	11	1658	1	265	8	1153224184和釘3不明金属3溶融ガラス2
III-3層	5	41	5	2	17	1	11	37	37	4	12	9	20	4066	1	186163480623489不明金属2漆片1ボタン1シジミ1
III-4層																
IV-1層	1					1				4	74				5	73
IV-2層										5	138				2	20
V層																
石敷遺構石間										1	112				2	92
石組溝埋①層										1	111					
石組溝埋②層	75	2								10	922					
石組溝底面	2															
石組溝裏込										4	382					
ピット1埋土														1	144	1貝14
擾乱	1					1										
不明					2	2										墓石1
合計	93	2	52	5	10	48	1	24	40	46	13	12	12	65	8431	7貝16714353154741044
3区																
3a層											1	90				
4区																
3層											1					
ピット3埋土																
合計											1					

の破片も含めて、全て口クロ成形で回転糸切のものである。焼塙壺は、石組溝埋②層から2点出土しているが、いずれも細片化しており、特徴などは不明である。

これ以外の大半は、火消壺で占められる。火消壺は、丸みを持って立ち上がる体部に、内弯して大きく内側に屈曲する口縁部を持つものである。口縁端部の形態には、細かな差が認められる。全て、口クロ成形で回転糸切り後、三足を付ける。体部から口縁部の外面は、ミガキによる再調整が行われ、口縁部から体部最大部までと、底部付近が横方向、それにはさまれた体部が縦方向であるのが大半である。これに対して図18-45は、外面のミガキによる再調整が、全面横方向で施されるもので、他と比べるとやや高さが低く、体部の張りが強い。内面にスヌ状の付着物が認められるものがあるが（図19-49・図20-53）、比率としては低い。体部外面

表5 仙台城二の丸跡第10地点出土磁器觀察表

Tab. 5 Notes on porcelains from NM10

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	釉	土	生産地	製作年代	備考	図版
001	2 A区南半 III-3層	小型端反碗	9.0	3.7	4.9	井桁に菊花織文 見込文 貫入あり	やや密	瀬戸	19C中			15 4
002	2 B区 III-3層	小型端反碗	8.3	3.6	4.6	草花文・角幅崩文 見込花文	粗	切込?	19C中			15 4
003	2 A区 III-4層上面	小型端反碗	8.5	3.0	4.6	花文に蝶文 見込花文	普通	切込	19C中			15 4
004	2 A区南半 III-3層	蓋物(身)	8.8	3.7	4.4	白磁	やや密	不明	19C			15 4
005	2 A区南半 III-3層	小型端反碗	8.6	3.6	4.6	山水文 見込「寿」字文	やや密	切込	19C中			15 4
006	2 A区北半 III-3層	小型端反碗	8.2	3.4	4.3	山水文 見込花文	普通	切込	19C中			15 4
007	2 A区 III-3層	小型端反碗	8.9	3.4	4.5	松枝文 見込千鳥文?	普通	不明	19C中			15 4
008	2 B区 III-3層	小型端反碗	8.4	4.4	4.6	窓絵豪散らし「寿」字文 見込千鳥文?	やや密	瀬戸	19C中			15 4
009	2 B区 III-3層	小型端反碗	—	3.8	—	『画』刻草花文 見込「寿」字文	やや密	瀬戸	19C中			16 4
010	2 B区 III-3層	小型端反碗	9.3	3.8	5.0	立桶草花文 見込千鳥文?	普通	切込	19C中			16 4
011	2 B区 III-3層	小型端反碗	8.8	3.4	4.7	立桶草花に雲文 見込花文 貫入あり	普通	切込?	19C中			16 4
012	2 A区北半 III-3層	小型筒九碗	7.4	4.1	5.8	花文に蝶文	普通	切込	19C中			16 4
013	2 A区 III-3層	中型端反碗	11.1	4.8	5.8	源氏香に蝶文 見込蝶文	密	平清水	19C中			16 4
014	2 A区 III-3層	中型端反碗	12.2	5.2	6.4	山水文 見込荒磯文 目跡4箇所	普通	切込	19C中			16 4
015	2 A区北半 III-3層	中型端反碗	11.6	4.8	5.2	草花に鳥文? 見込蛇ノ目袖ハギ	普通	切込	19C中			16 4
016	2 A区北半 III-3層	中型端反碗	10.9	4.4	5.6	山水文	やや粗	切込	19C中			16 4
017	2 A区 III-3層	小・中皿	13.2	8.2	3.5	筆文 見込千鳥文 目跡4箇所 蛇ノ目凹形高台	密	平清水	19C中			16 4
018	2 A区北端 III-3層	小・中皿	11.9	7.4	3.5	山水文 口紅 型打 蛇ノ目凹形高台	やや密	瀬戸?	19C		酸化焼成	16 4
019	2 B区 III-3層	蓋	8.9	—	2.9	つまみ径3.6cm 草に鳥文 見込「寿」字文 つまみ内角福崩文	密	瀬戸	19C中			16 4
020	4 区 3層	中型端反碗	11.4	—	—	割菊文に蝙蝠文	密	平清水	19C中			15 4

表6 仙台城二の丸跡第10地点出土陶器觀察表

Tab. 6 Notes on glazed ceramics from NM10

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	釉	薬	胎	土	生産地	製作年代	備考	図版
021	2 A区 III-2a・2b層	小型端反碗	8.8	3.7	4.3	内面灰皿(淡灰白色)に青釉流し	青釉	やや密	大堀相馬	19C前~中	失透釉			17 5
022	2 B区 III-2b層	小型筒九碗	6.6	3.5	5.2	灰釉(淡灰白色)	普通	大堀相馬	19C前~中	半失透釉	貫入あり			17 5
023	2 A区北半 III-3層	小型筒丸碗	6.8	3.8	5.6	鉄絵(暗緑褐色)文様	灰釉(淡灰白色)	やや密	大堀相馬	19C前~中	半失透釉			17 5
024	2 A区北半 III-3層	小・中皿	13.6	6.8	3.9	楓に松葉文 白掛須彌	灰釉(淡灰白色)	やや密	平清水?	19C中	目跡5箇所 貫入顯著			17 5
025	2 A区北半 III-3層	土瓶(身)	7.4	—	—	木爪形 鉄口	灰釉(淡灰白色)	やや密	大堀相馬	19C前~中	半失透釉	貫入顯著		17 5
026	2 A区北半 III-3層	土瓶(身)	7.2	—	—	鉄絵(暗緑褐色)綠探山水文	灰釉(淡黄灰白色)	やや密	大堀相馬	19C前~中				17 5
027	2 A区北半 III-3層	土瓶(身)	8.8	—	—	鉄絵(暗緑褐色)葡萄に花文	灰釉(淡綠灰白色)	やや密	大堀相馬	19C中				17 5
028	2 A区 III-2a・2b層	土瓶(蓋)	8.7	—	3.0	白泥鉄絵(暗緑褐色)丸に十字巻文	灰釉(淡綠灰白色)	普通	大堀相馬	19C前~中	貫入顯著			17 5
029	2 A区北半 III-3層	土瓶(蓋)	7.1	—	1.2	鉄絵(暗緑褐色)巴文	灰釉(淡綠灰白色)	やや密	大堀相馬	19C前~中	貫入顯著			17 5
030	2 B区 III-3層	土瓶(蓋)	8.9	—	1.7	青釉	やや密	大堀相馬	19C前~中	失透釉				17 5
031	2 A区北半 III-3層	土瓶(蓋)	9.9	—	2.9	青釉	やや密	大堀相馬	19C前~中	半失透釉				17 5
032	2 A区 III-3層	土瓶(蓋)	8.5	—	3.0	—	灰釉(淡灰白色)	やや密	大堀相馬	19C前~中	失透釉	貫入顯著		17 5
033	2 A区北半 III-3層	土瓶(蓋)	9.2	—	3.0	—	灰釉(淡灰白色)	やや密	大堀相馬	19C前~中	失透釉	貫入顯著		17 5
034	2 B区 III-3層	塔	12.9	10.2	5.8	透明釉	やや密	塔	19C	長19.7				17 5
035	2 A区北半 III-3層	塔	12.8	10.0	2.9	透明釉	やや密	塔	19C	底面に掌孔(径0.9)				17 5

の表面が、火熱のためか荒れているものがある（図20-51）。

火鉢としたものには、次に述べる瓦質土器と同様に、口縁の内側を厚くするものと、両側に突出させるものの、大きく2種類あるが、いずれも小片で図示したものは無い。擂鉢は口クロ成形で、内面のおろし目はほとんど摩滅していない（図18-42・43）。

五徳としたものは、上がやや細くなる円筒状のもので（図18-44）、上下の端近くの外面に沈線を各1条めぐらし、その間に円形と逆三角形の孔を開けている。残存している上端に、わずかではあるが、さらに上に伸びる部分が残っており、これが土瓶などを掛ける部分になるのではないかと考え、五徳とした。上下の両端面と、上下端に近い部分の外面に、スヌ状の付着物が認められる。瓦質土器は、火鉢がその大半を占め、鉢類としたものもほとんどは火鉢で

表7 仙台城二の丸跡第10地点出土土師質・瓦質土器観察表

Tab. 7 Notes on ceramics from NM10

登録番号	出土場所	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考	図版
041	2B区 石組溝②層	土師質土器 皿	12.4	7.4	3.1	外表面口クロナデ 底部回転糸切り無調整 回転方向不明 口縁部内外面スヌ付着	18 6
042	2A区北半 III-3層	土師質土器 擾鉢	—	—	—		18 6
043	2B区 III-3層	土師質土器 擾鉢	—	—	—		18 6
044	2B区 III-3層	土師質土器 五徳	20.1	—	—	スヌ付着	18 6
045	2B区 III-2b層	土師質土器 火消壺	—	18.8	—	最大径25.0 三足	18 6
046	2B区 III-2b層	土師質土器 火消壺	19.1	17.4	16.0	最大径25.2 三足	18 6
047	2A区 III-3層	土師質土器 火消壺	21.8	18.5	17.5	最大径28.4 三足	18 7
048	2A区北端 III-3層	土師質土器 火消壺	23.3	17.6	16.7	最大径29.2 三足	19 6
049	2A区北半 III-3層	土師質土器 火消壺	18.5	16.8	—	最大径24.7 内面スヌ付着	19 6
050	2A区北半 III-3層	土師質土器 火消壺	19.4	—	—	最大径25.0	19 7
051	2A区北半 III-3層	土師質土器 火消壺	19.8	—	—	最大径25.0	19 7
052	2A区北半 III-3層	土師質土器 火消壺	18.5	—	—	最大径25.0	20 7
053	2A区 III-3層	土師質土器 火消壺	21.0	—	—	最大径26.1 内面スヌ付着	20 7
054	2A区 III-3層	土師質土器 火消壺	—	15.4	—	最大径24.2 三足	20 7
055	2A区 III-3層	土師質土器 火消壺	—	17.2	—	最大径29.2 三足	20 7
061	2B区 III-3層	瓦質土器 火鉢	24.7	16.4	18.7	三足	21 8
062	2B区 III-3層	瓦質土器 火鉢	19.0	18.7	16.8	三足	21 8
063	2B区 III-3層	瓦質土器 火鉢	—	17.8	—	三足	21 8
064	2A区北半 III-3層	瓦質土器 火鉢	30.0	—	—		21 8
065	2A区北半 III-3層	瓦質土器 火鉢	—	19.1	—	三足	22 8
066	2A区北端 III-3層	瓦質土器 火鉢	—	18.7	—	三足	22 8
067	2A区北半 III-3層	瓦質土器 火鉢	26.6	16.0	—		22 8
068	2A区北半 III-3層	瓦質土器 火鉢	24.7	17.1	16.9	三足	22 9
069	2A区南半 III-3層	瓦質土器 火鉢	—	18.3	—	三足	22 9
070	2B区 III-3層	瓦質土器 火鉢	18.8	14.5	13.9	三足	23 9
071	2A区北半 III-3層	瓦質土器 火鉢	33.1	22.2	12.6	三足	23 9
072	2A区北半 III-3層	瓦質土器 火鉢	33.0	19.1	10.7	三足	23 9
073	2B区 III-3層	瓦質土器 火鉢	29.1	—	—		23 9
074	2A区北半 III-3層	瓦質土器 鉢類	—	—	—		23 9
075	2A区北半 III-3層	瓦質土器 十能	—	—	6.0	長27.3 幅17.5	23 9

表8 仙台城二の丸跡第10地点出土瓦観察表

Tab. 8 Notes on roof tiles from NM10

登録番号	出土場所	種類	長 (cm)	きき足 (cm)	幅 (cm)	きき幅 (cm)	高 (cm)	棟 形状	棟幅 (cm)	溝	備考	図版
001	2B区 III-3層	棟瓦	34.1	30.2	47.7	—	13.5	平	8.7	有		24 10
002	2B区 III-3層	棟瓦	34.5	31.5	47.9	41.0	11.4	平	8.8	有 鈎穴3個		24 10
003	2B区 III-2b層	棟瓦	33.9	27.2	46.8	—	12.0	平	8.0	有 鈎穴3個		25 11
004	2A区北半 III-3層	棟瓦	34.3	31.1	50.5	46.1	13.1	平	8.6	有 鈎穴3個		25 11

あろう。これ以外には炭櫃・十能があるが、量はごく少ない。

火鉢としたものは、形態から大きく2大別できるが、両者ともロクロ成形で底部は回転糸切り後、三足を付ける。2大別の内の一つは、体部の立ち上がりがきついもので、口縁部は内側に厚みを増し突出させている（図21・図22・図23-70）。大きさには変異があり、径と高さの比率でも少なくとも2類型に細別可能である。また、ロクロ成形後、底部付近を削るもの（図21-63・図22-66・68）も認められる。外面にはミガキ調整が加えられるが、口縁端部だけに横方向のミガキを加えるもの（図22-67・68・図23-70）と、口縁端部とその付近の横方向のミガキに加えて、体部に縦方向のミガキを施すもの（図21-61・62・64、図22-65・69）とに分けられる。

火鉢のもう一つは、体部の立ち上がりが弱く、口径に比較して高さが低いもので、口縁部は内外面両側に突出させ、T字状を呈する（図23-71・72・73）。口縁部内面だけを突出させるものに比べると数は少ない。口縁部の細かな形態では差が大きいが、全て口縁部の上面だけに横方向のミガキ調整を加える。図23-71の内面には、体部下半から底部にかけての部分に、細かな縦方向のキズが一面に付いており、火箸の先端によってつけられたキズの可能性を考えられる。

図23-74は、陶器の擂鉢と同様の形態を呈する瓦質土器の鉢である。

炭櫃としたものは、いずれも小破片で、図示したものは無いが、箱状の形態を呈し、口縁部が鎧状となって直角に外側に広がるものである。

十能は平面形が釣り鐘状の本体部に、断面方形の取っ手が付くもので（図23-75）、ちりとりのような形態を呈する。本体部の中央付近は、火熱のためか赤褐色に変色している。

(3) 瓦

瓦も陶磁器や土器類と同様に、Ⅲ-2b層とⅢ-3層出土のものがほとんどを占める。瓦の分類は、これまでの二の丸跡の調査に準じている（年報8）。確認された種類としては、平瓦1類・丸瓦類・棟瓦がある。不明としたものは、いずれも小片である。

平瓦1類は緩く弯曲する平瓦類で、点数が多いが、小片が多く、全体の特徴が判明するものは無い。わずかに、2B区Ⅲ-2b層出土の1点が、長さが25.7cmであることが判明するだけで、幅が判るものは無い。一方、埠棧瓦などになる可能性のある、平坦な平瓦（平瓦2類）は全く出土していない。

丸瓦類はごく少量出土しただけで、いずれも小片である。一辺の大きさが判明する資料も無い。

棟瓦は、今回まとまって出土している。図示した4点は、長・幅ともにきわめて近似した値

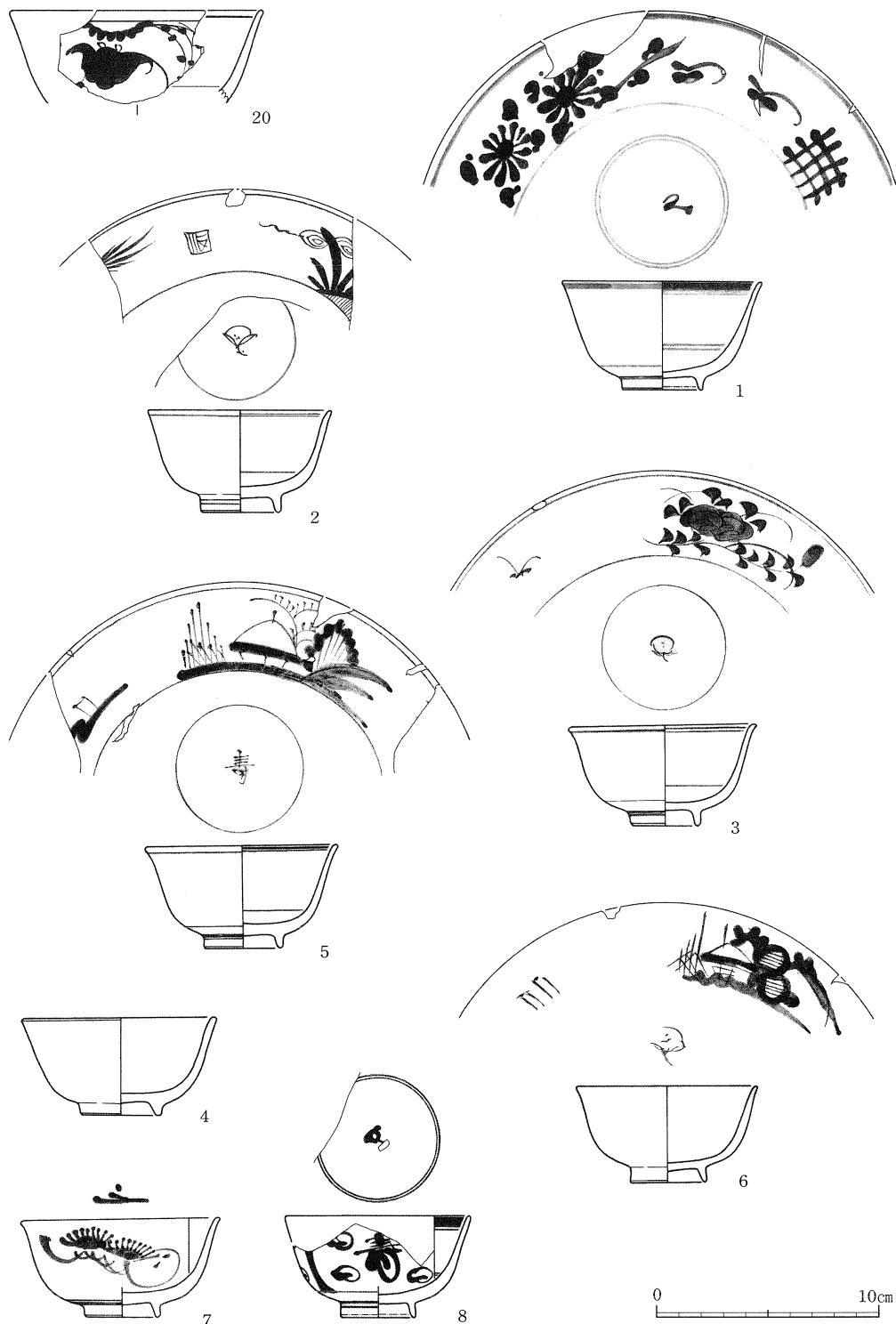


図15 仙台城二の丸跡第10地点出土磁器(1)

Fig. 15 Porcelains from NM10(1)

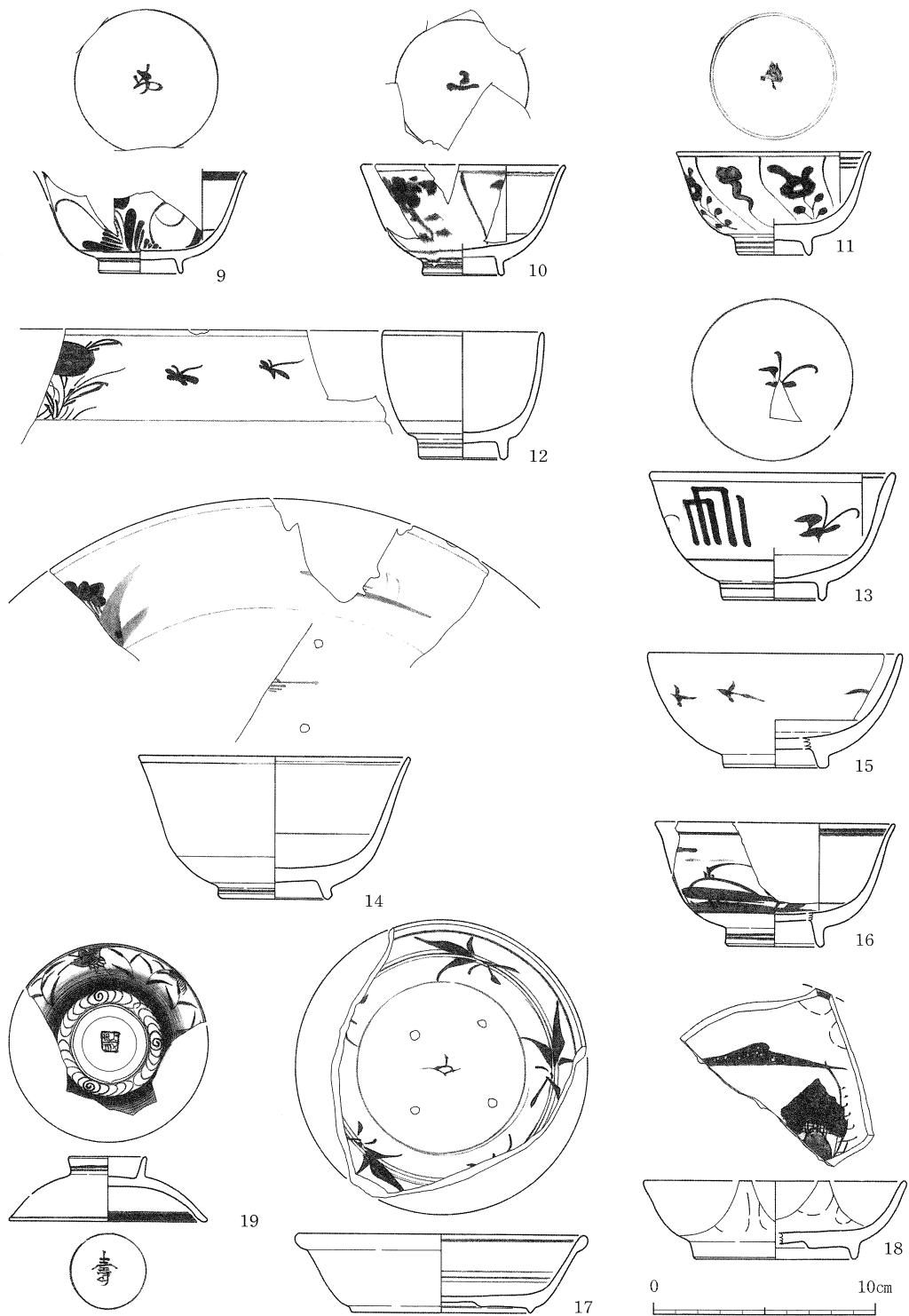


図16 仙台城二の丸跡第10地点出土磁器(2)

Fig. 16 Porcelains from NM10(2)

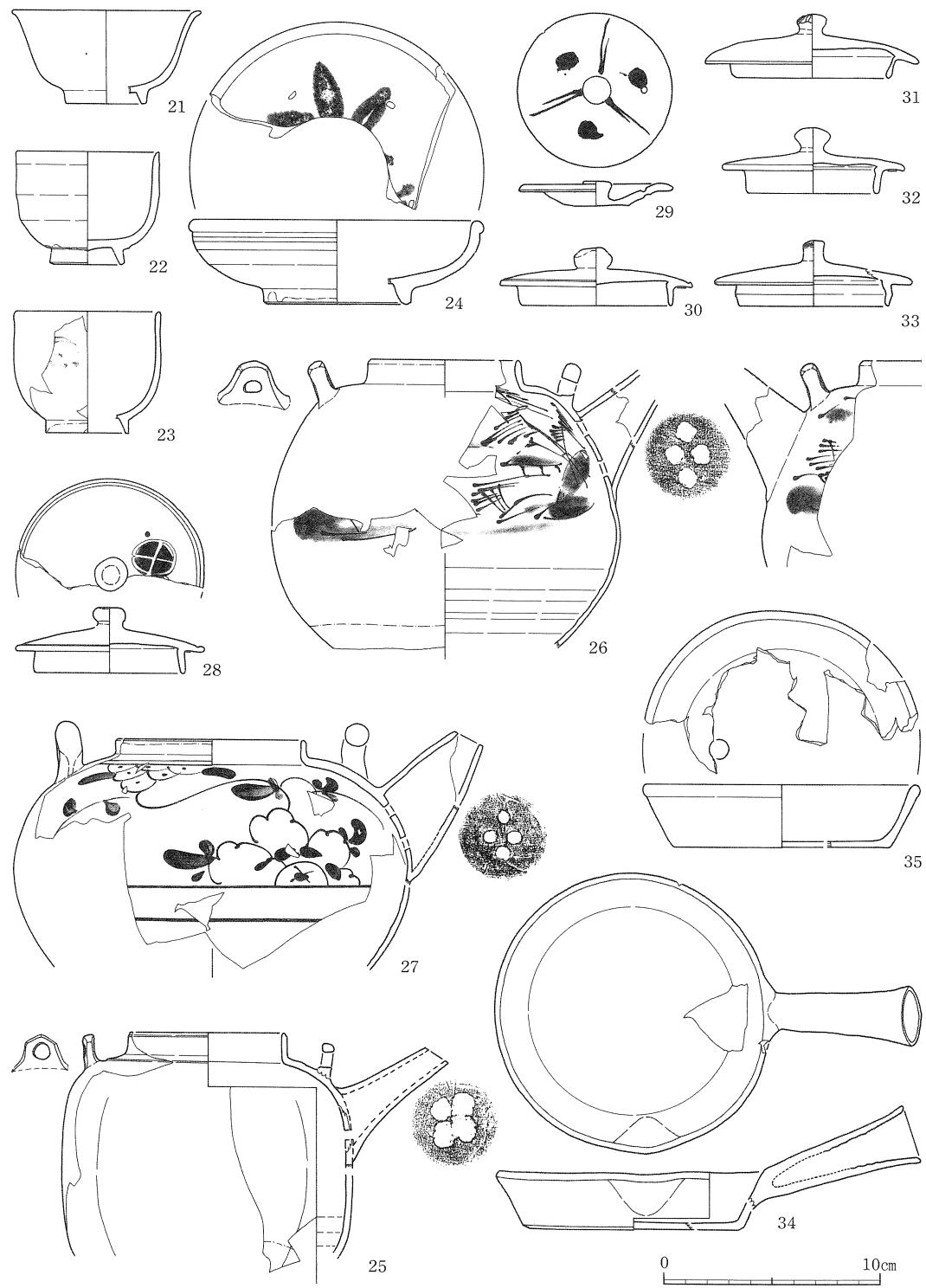


図17 仙台城二の丸跡第10地点出土陶器

Fig. 17 Glazed ceramics from NM10

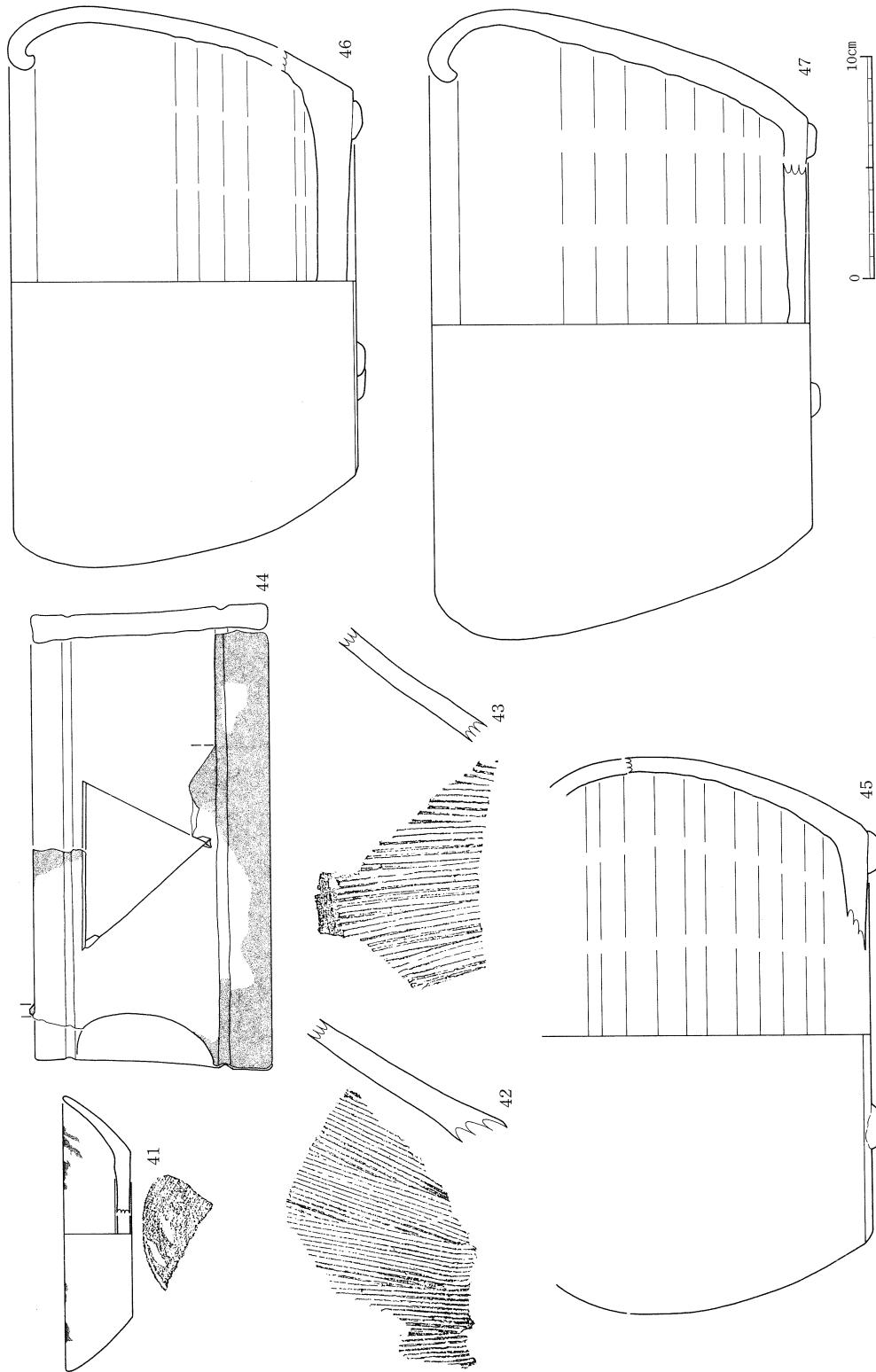


図18 仙台城二の丸跡第10地点出土土師質土器(1)

Fig. 18 Ceramics from NM10(1)

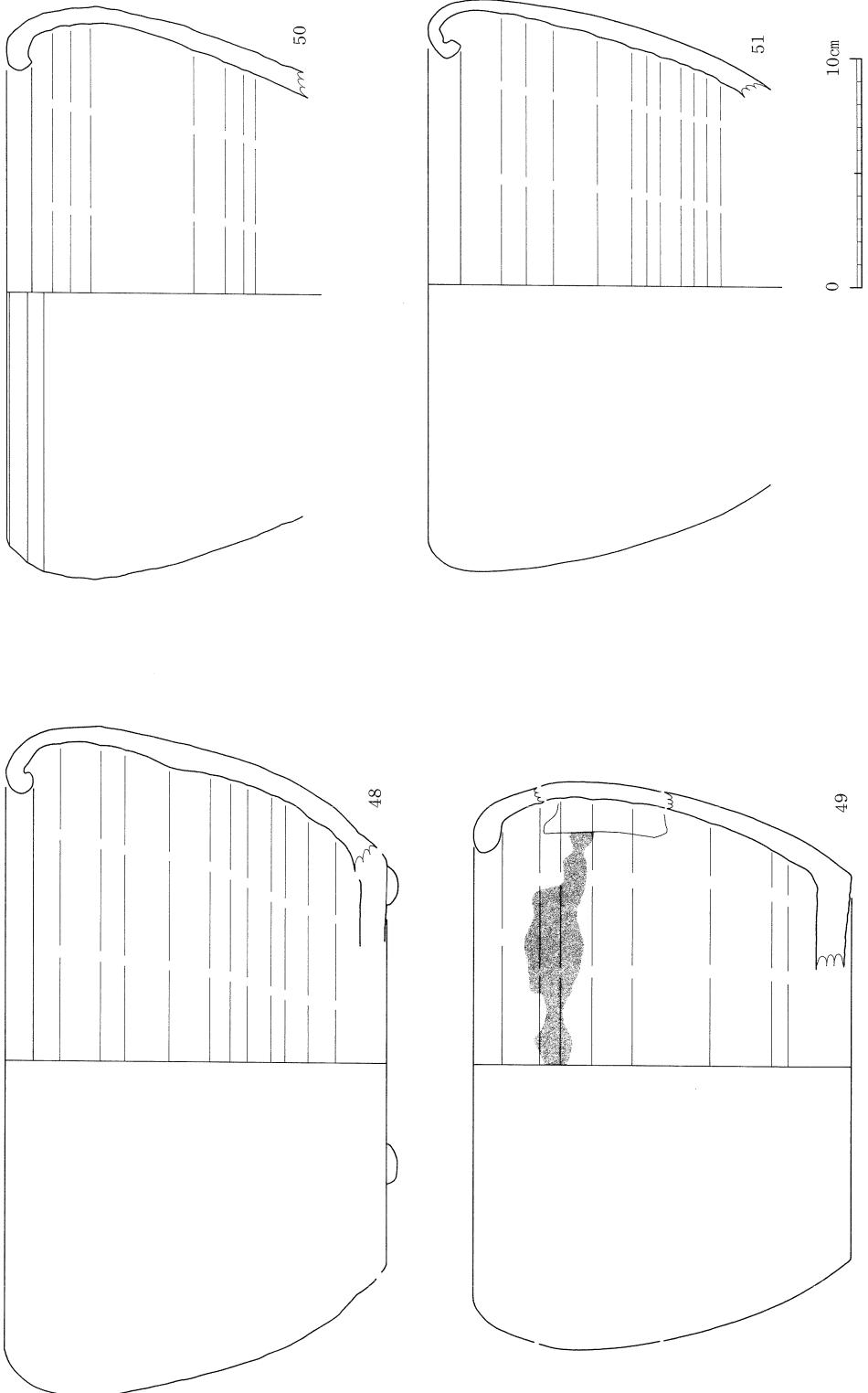


図19 仙台城二の丸跡第10地点出土土師質土器(2)

Fig. 19 Ceramics from NM10(2)

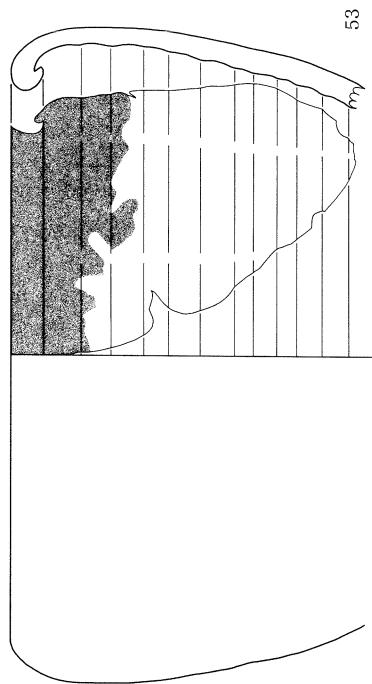
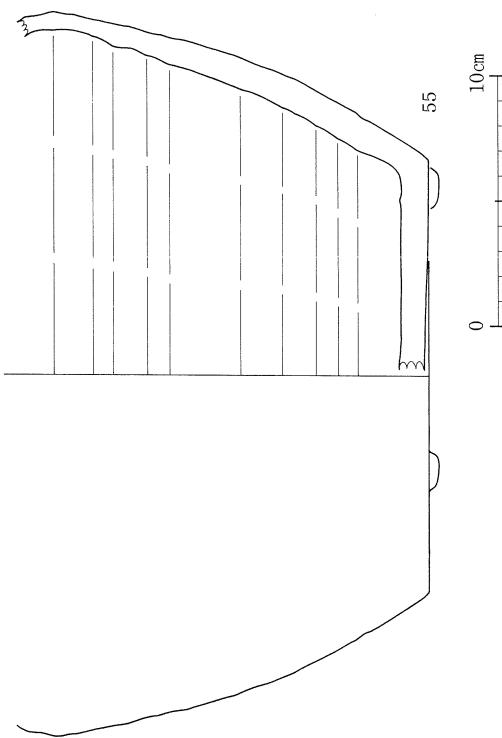
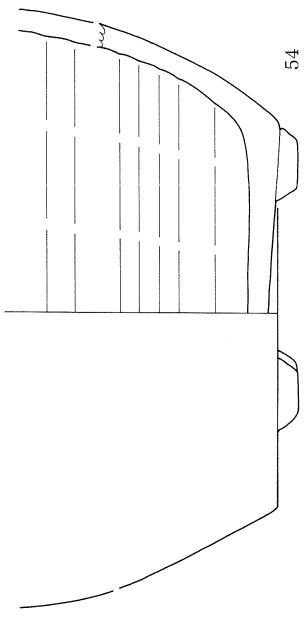
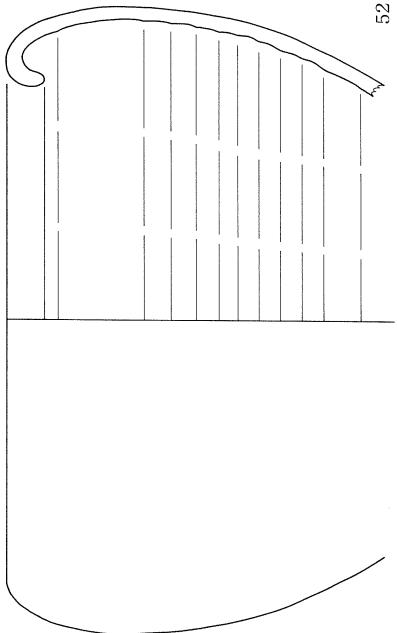


図20 仙台城二の丸跡第10地点出土土師質土器(3)

Fig. 20 Ceramics from NM10(3)

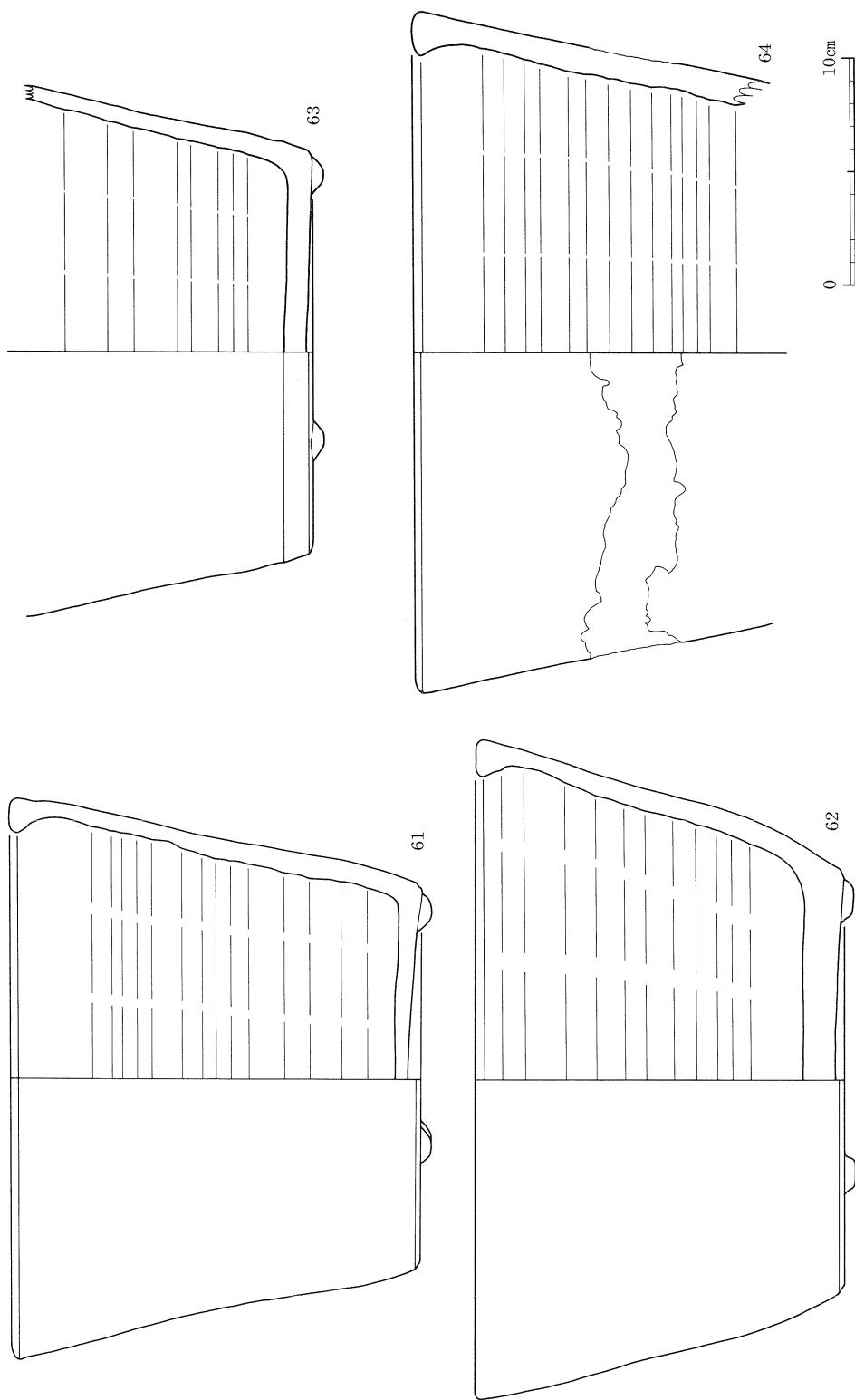


図21 仙台城二の丸跡第10地点出土瓦質土器(1)
Fig. 21 Fumed ceramics from NMI 10(1)

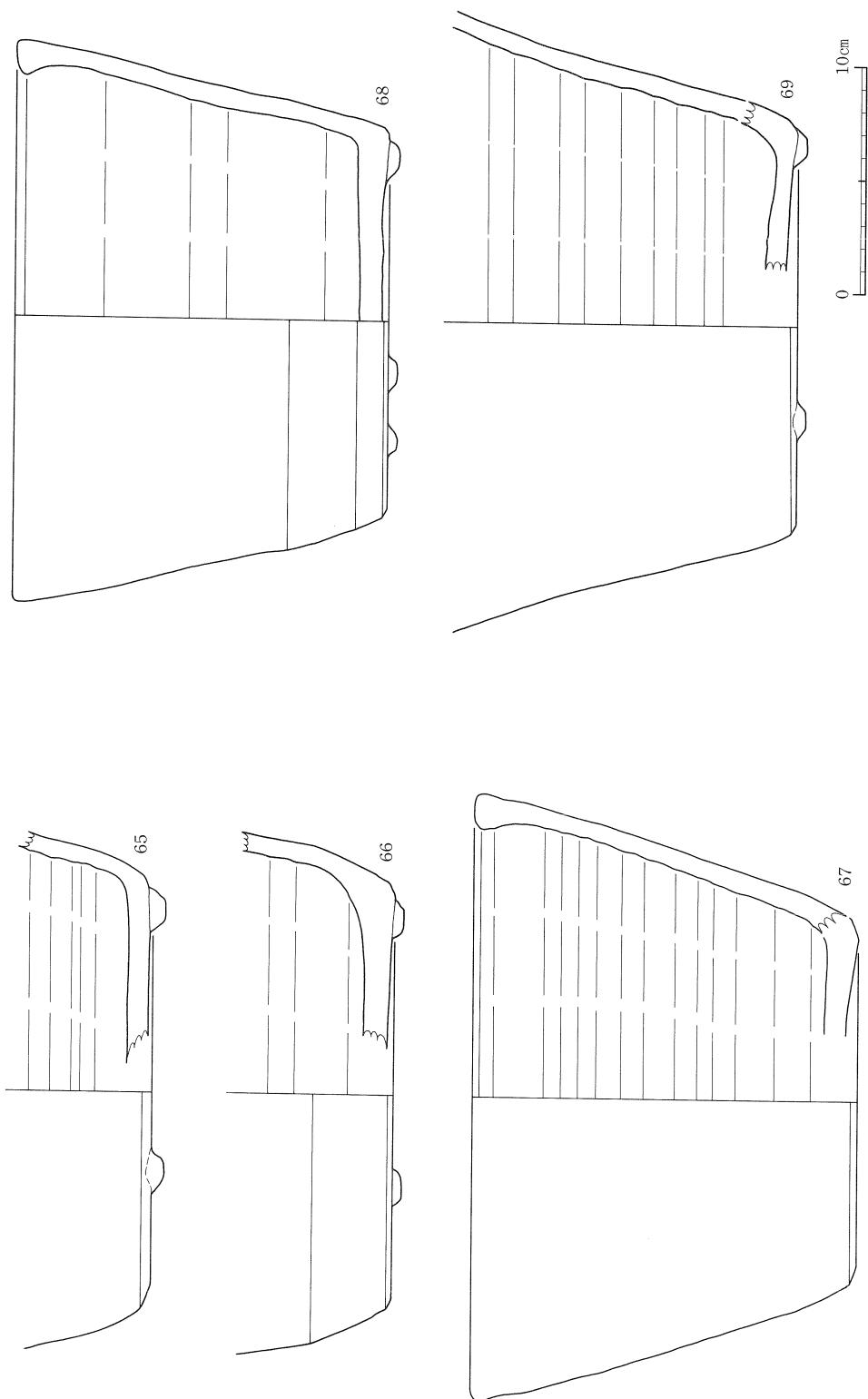


図22 仙台城二の丸跡第10地点出土瓦質土器(2)
Fig. 22 Fumed ceramics from NM10(2)

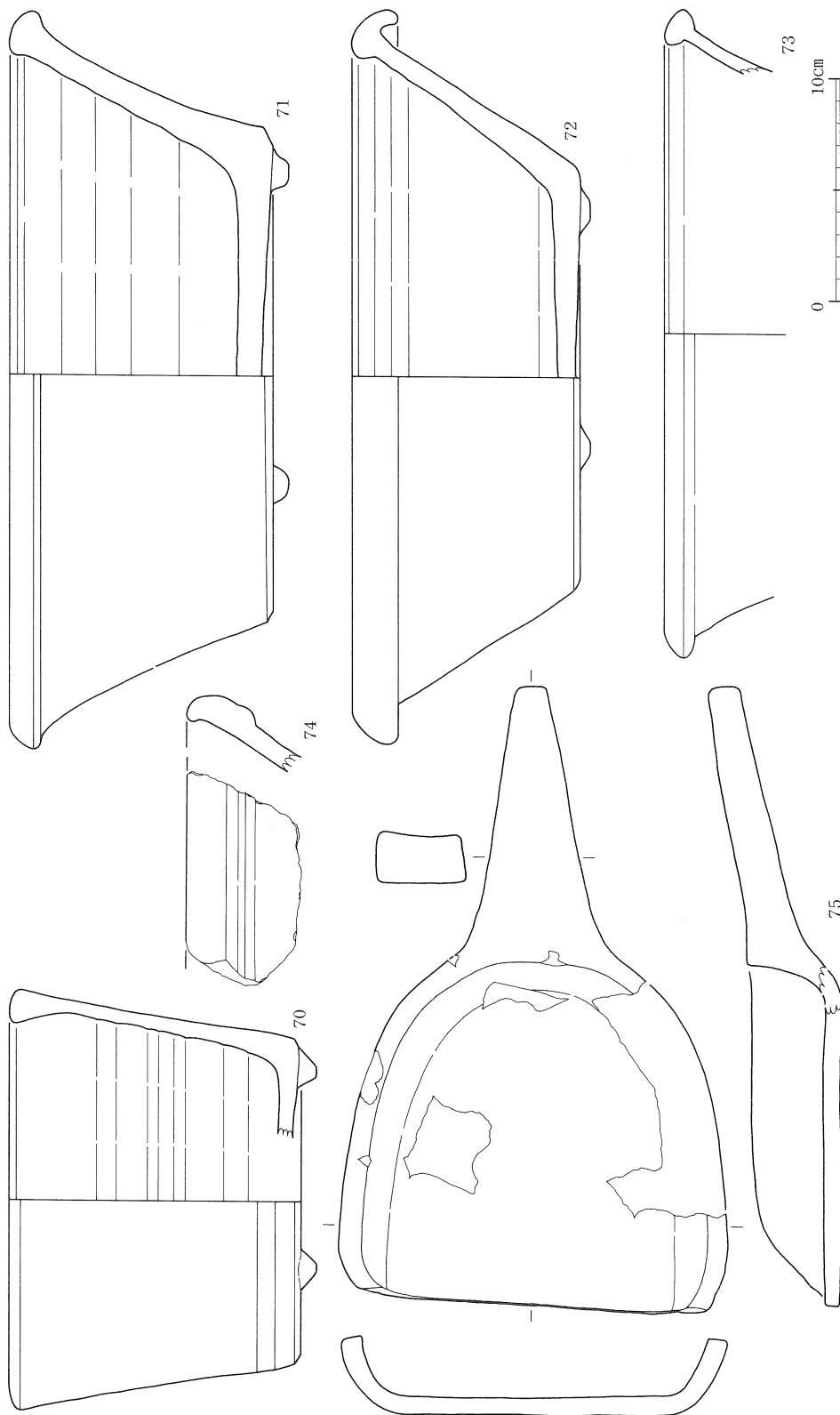


図23 仙台城二の丸跡第10地点出土瓦質土器(3)
Fig. 23 Fumed ceramics from NM10(3)

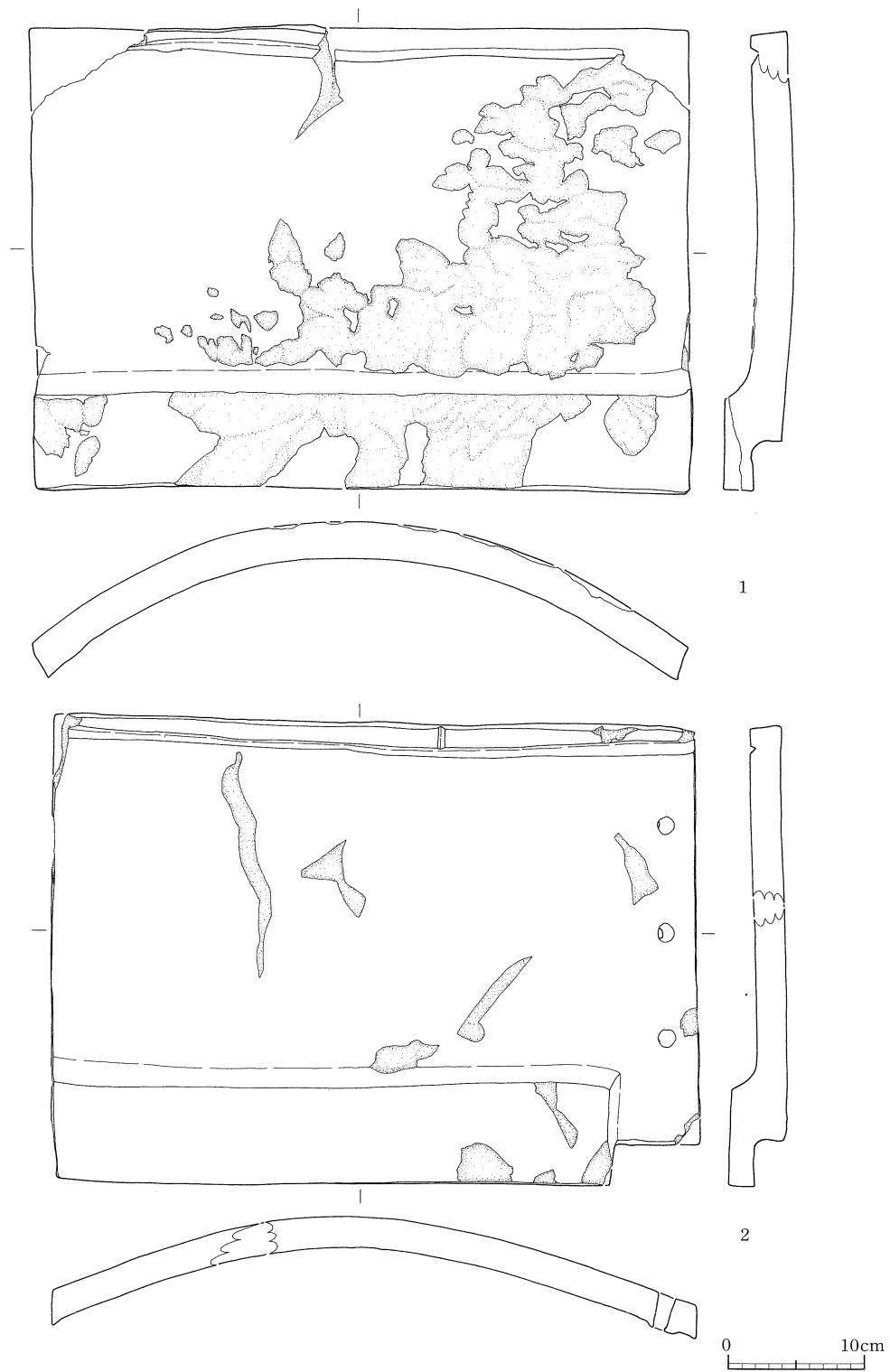


図24 仙台城二の丸跡第10地点出土瓦(1)

Fig. 24 Roof tiles from NM10(1)

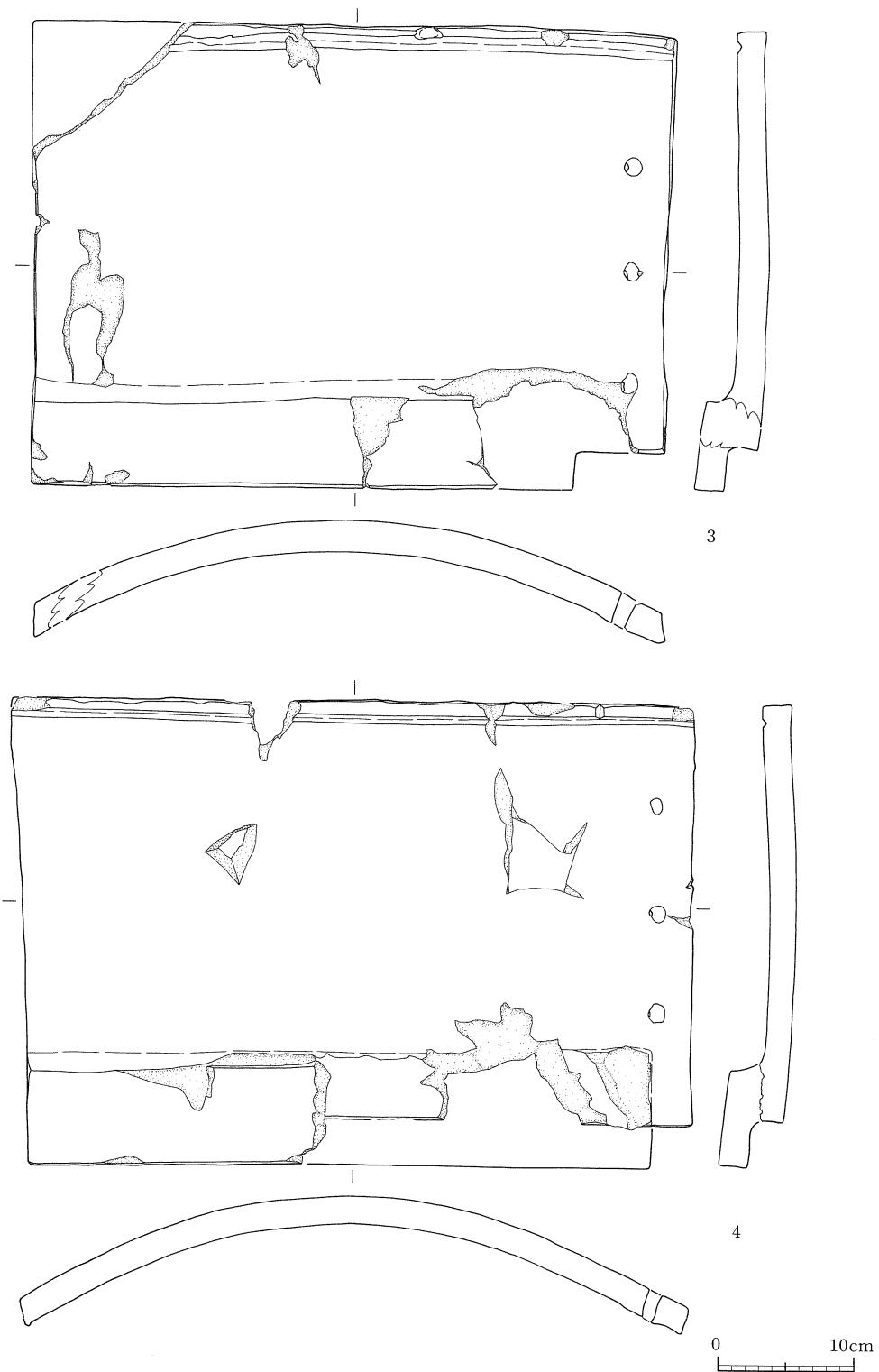


図25 仙台城二の丸跡第10地点出土瓦(2)

Fig. 25 Roof tiles from NM10(2)

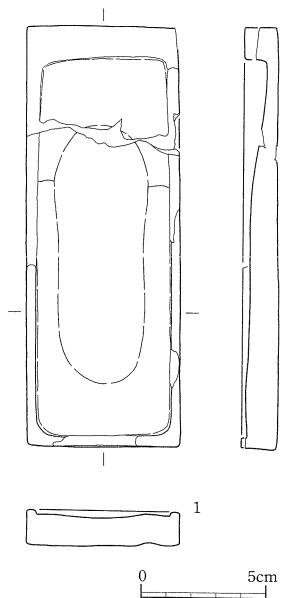


図26 仙台城二の丸跡
第10地点出土硯
Fig. 26 Inkstone from NM10

を示し、同一の場所で使われていた瓦がまとめて捨てられた可能性を示している。図示したもの以外の資料でも、長・幅をはじめ、きき足・きき幅などの数値は、全て図示した4点の分散の内に収まる。図24-1は、棟が左右両端まで至るが、図24-2、図25-3・4は、右側の棟が途切れ、右辺沿いに3箇の孔が開けられている。図24-1と組み合わせて、かなり幅の広い棟を葺くものであろうか。破片資料も含めて検討したが、釘穴が右側に位置する資料は、図示したものも含めて7点あるが、不明のものを除くと、確実に左側に釘穴が位置するものは認められなかった。きき足は図25-3がやや短い以外は、近い値を示す。きき幅については、判明する2点で、やや異なり、図24-2に比べて、図25-4が長い。表面の剥落が激しいものが図24-1などに認められるが、裏面はあまり剥落が認められない。屋根に葺いて使用していた時点での、風化によるものであろうか。

今回Ⅲ-2b層・Ⅲ-3層からまとまって出土した瓦は、堀棟瓦と考えられるものが全く含まれず、棟瓦がかなり大きな棟に使用されたと考えられることから、蔵や門などの、大型の建物に使用されていた瓦が捨てられたものである可能性が考えられるであろう。

(4) その他の遺物

その他の遺物としては、和釘を除くと、あきらかに明治以降の所産と考えられるものがほとんどである。Ⅲ-3層出土のボタンは、型押しガラス製のもので、軍隊で使われていた下着のものと思われる。

図26に示したのは、Ⅲ-3層出土の硯で、長16.8cm、幅6.1cm、高さ2.0cmを計る。灰白色の斑紋が入る凝灰質粘板岩製である。岩手県東磐井郡東山町の鳶ヶ森層のものの可能性がある。同様の石は、紫雲石と呼ばれ、硯として現在も利用されている（註1）。炭を摺る陸の部分がすり減って窪んでいる。

4.まとめ

今回の仙台城二の丸跡第10地点の調査は、小規模な調査ではあったが、2区を中心に、石敷遺構・石組溝などの遺構が良好な保存状態で検出された。二の丸中心部とその付近は、米軍や大学による破壊がおよんでいない部分に関しては、極めて良好に遺構が遺存していることが、

あらためて確認された。特に2D区においては、明治15年の火災層が、現地表より40cm下という浅い所に遺存していることが判明したことから、今後この周辺での開発行為に関しては、十分な注意が必要であることが示された。

2区のⅢ-3層を中心にまとまって出土した遺物は、その廃棄の年代が、明治初頭～明治15年の間に限定できる、良好な資料である。切込産磁器が比較的多く含まれることも、これまでの二の丸跡出土資料には見られなかった特徴である。切込窯は明治に入ると急速に衰退すると考えられており、大堀相馬産土瓶に鮫肌釉が認められないことを合わせて考えると、上記の年代の中でも、その古い方に限定できる可能性がある。

陶磁器全体の器種構成を見ると、湯飲茶碗に使用されたと考えられる小型の碗が大多数を占め、土瓶も数多く出土しているのに対して、皿類をはじめとする他の器種は極めて少ない。土師質土器・瓦質土器では、火鉢などの暖房関係の道具が多く出土しており、この点も特徴的である。考察編で詳述するが、今回の第10地点2区は、絵図との対比から「御奉行衆御留置所」の前に伸びる渡り廊下状の通路脇にあたると考えられる。この御留置所に並んで「御奉行衆狭箱置所」があったことが絵図で判る。「狭箱」とは挾箱のことと思われ、「奉行衆」は藩主などの外出時に用具類を入れた挾箱を持って従ったことが考えられる。「御奉行衆御留置所」とは、このような従者の詰め所のような場所であろう。2区出土の遺物は、このような詰め所のような場所で使われていた暖房具や茶を飲むための道具が近くにまとめて捨てられたものである可能性も想定できるであろう。

また、今回出土した土師質土器・瓦質土器については、これまであまりまとまった資料のなかった、火鉢・火消壺などの良好な一括資料となった。

(註1) この硯の石材の材質は、東北大学理学部蟹沢聰史教授にご教示を賜った。

《引用・参考文献》

- 佐藤広史ほか 1990 『切込窯跡』宮崎町文化財調査報告書第3集
仙台市教育委員会 1967 『仙台城』
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 『東北大学埋蔵文化財調査年報』1
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992 『東北大学埋蔵文化財調査年報』4・5
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1984 『東北大学埋蔵文化財調査年報』7
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 『東北大学埋蔵文化財調査年報』8

第Ⅲ章 芦ノ口遺跡第2次・第3次調査（TM2・TM3）

1. 調査経緯

(1) 遺跡の立地と周辺の環境

東北大学の理学部附属原子核理学研究施設は、仙台市南部の名取川沿いの沖積平野に接する三神峯丘陵の北側に位置している。三神峯丘陵は標高65m前後で、その北側は一段標高が低くなり、調査地点では50～54mである。研究施設の現状はほぼ平坦に造成されているが、本来は三神峯丘陵の裾から北側の金洗沢に向かって、緩やかに傾斜して下っていく地形であったものと考えられる。なお、遺跡周辺の地形・地質については、本章4(2)において詳述されているので、参照されたい。

芦ノ口遺跡は、1986年に今回調査区の北東側に、野球場建設が計画された際、東北大学文学部考古学研究室が発掘調査を行い、遺跡であることが明らかとなった。この調査では、平安時代の遺構や遺物がまとまって出土した他、縄文時代・弥生時代の遺物も出土した（年報3）。

芦ノ口遺跡の周辺は、特に南側の三神峯丘陵から平野にかけて、多くの遺跡が存在する（図1）。ここでは、近接する重要な遺跡について、簡単に触れておく。

三神峯丘陵のさらに南側の沖積地に広がる富沢遺跡では、約2万年前にさかのぼる埋没林とナイフ形石器などが発見され、当時の生活環境の復元にとって極めて重要な資料となっている。南側の丘陵一帯に広がる三神峯遺跡は、縄文時代前期の集落として古くから知られており、住居跡も発見されている。三神峯丘陵の南端には、円墳2基からなる三神峯古墳群が存在し、埴輪が採集されている他、周辺には古墳や横穴墓も多く存在する。三神峯丘陵の周辺は、古墳時代の埴輪窯跡である富沢窯跡や須恵器窯跡である金山窯跡・土手内窯跡などがある。また、富沢遺跡では、弥生時代から近世にいたる、各時期の水田跡が発見されている。

(2) 調査方法と経過

富沢地区の原子核理学研究施設では、従来より放射光リングをはじめとした、大規模な施設拡充の計画を有している。原子核理学研究施設は、南側を三神峯遺跡、北側を芦ノ口遺跡にはさまれた場所にあたるため、遺跡の範囲を確認する目的で、1985年度に試掘調査を実施した（年報3）。この第1次調査では、実験施設の東側と研究棟の南側で試掘調査を実施したが、実験施設の東側においては、古代の遺構・遺物が発見された。また、研究棟南側でも、二次的な移動を受けていたが、縄文土器や石器が出土している。このように、遺跡の範囲が研究施設の

ほぼ全域に広がることが明らかとなり、周知の遺跡の範囲も、芦ノ口遺跡の範囲を拡大する形で、研究施設全域にまで拡大する措置が取られた。そのため、施設整備計画との調整のためのデータを得る目的で、第1次調査の際に調査を行っていない区域の遺構・遺物の有無とその分布状況を把握することが必要となり、1989年度と1991年度の2ヶ年にわたって、さらに試掘調査を実施することとなった（図27）。

第2次調査は、研究棟南側と研究棟北側を対象として調査を行った。研究棟南側では、第1次調査の際に設定したグリッドの基準杭が失われており、新たにグリッドを組み直して調査区を設定した。第1次調査の際の調査区が、南側よりの場所で、東西に長く調査区を設定していたので、第2次調査では、これと直交させ南北に長い調査区を設定するとともに、小規模な調査区を各所に分散して調査を行った。この研究棟南側の調査区は、設定したグリッドの名称で

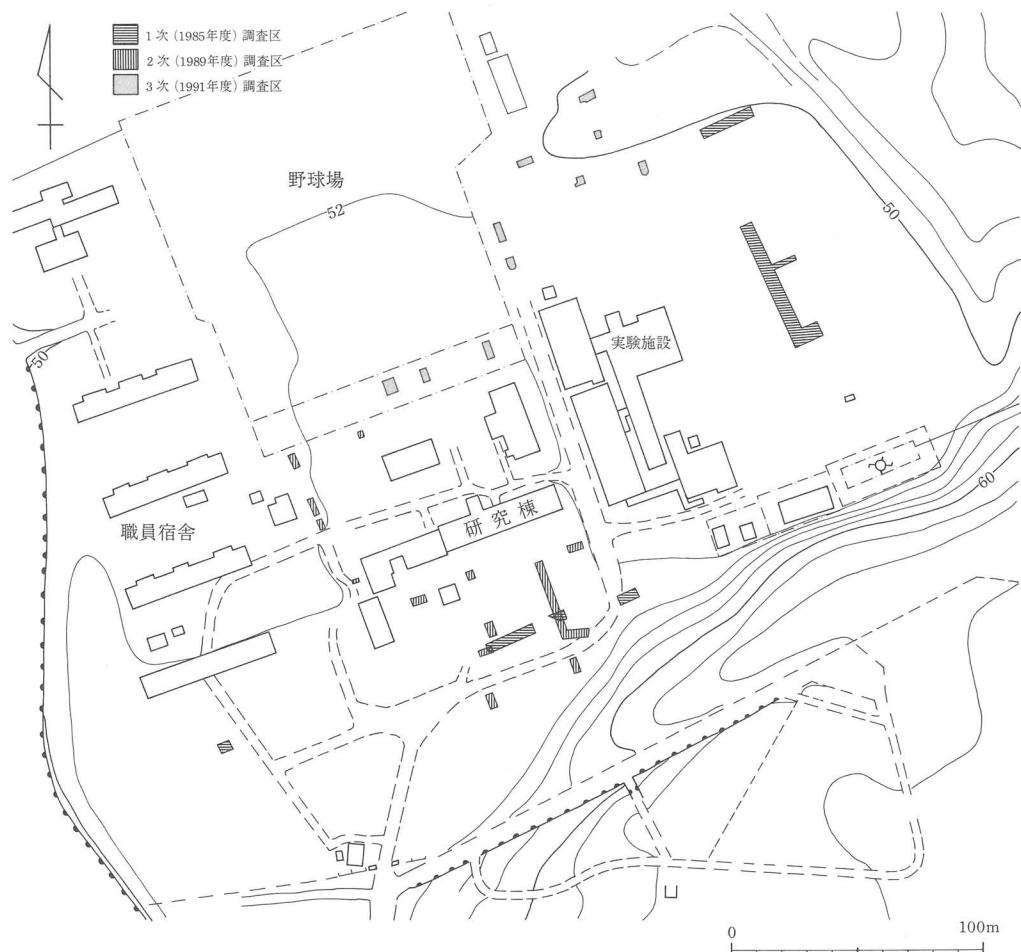


図27 富沢地区調査地点

Fig. 27 Location of excavations at Tomizawa campus (TM i.e. Tomizawa Ashinokuchi site)

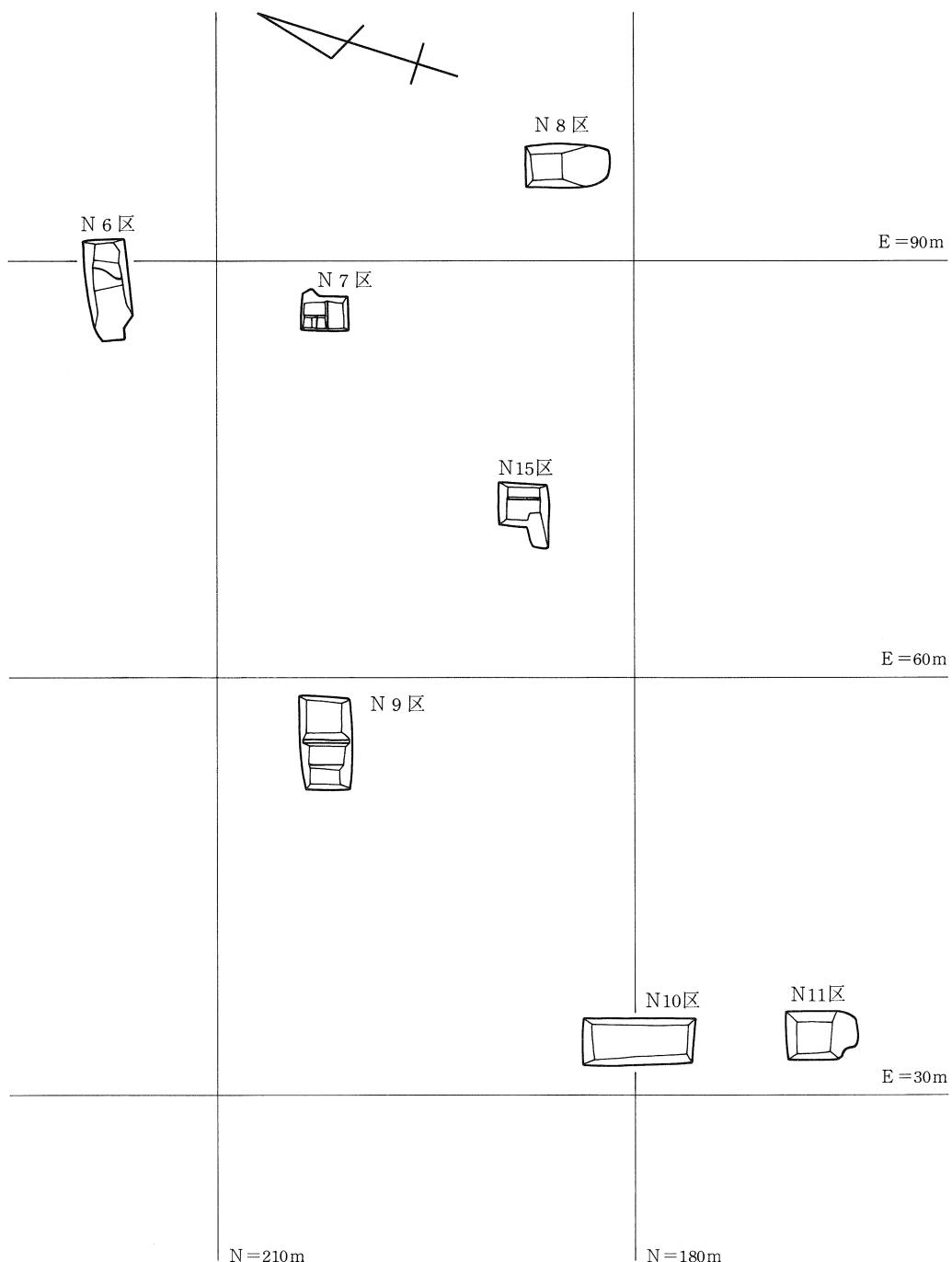


図28 芦ノ口遺跡調査区配置図（1. 実験施設北側）
Fig. 28 Distribution of excavations at Ashinokuchi site(1)

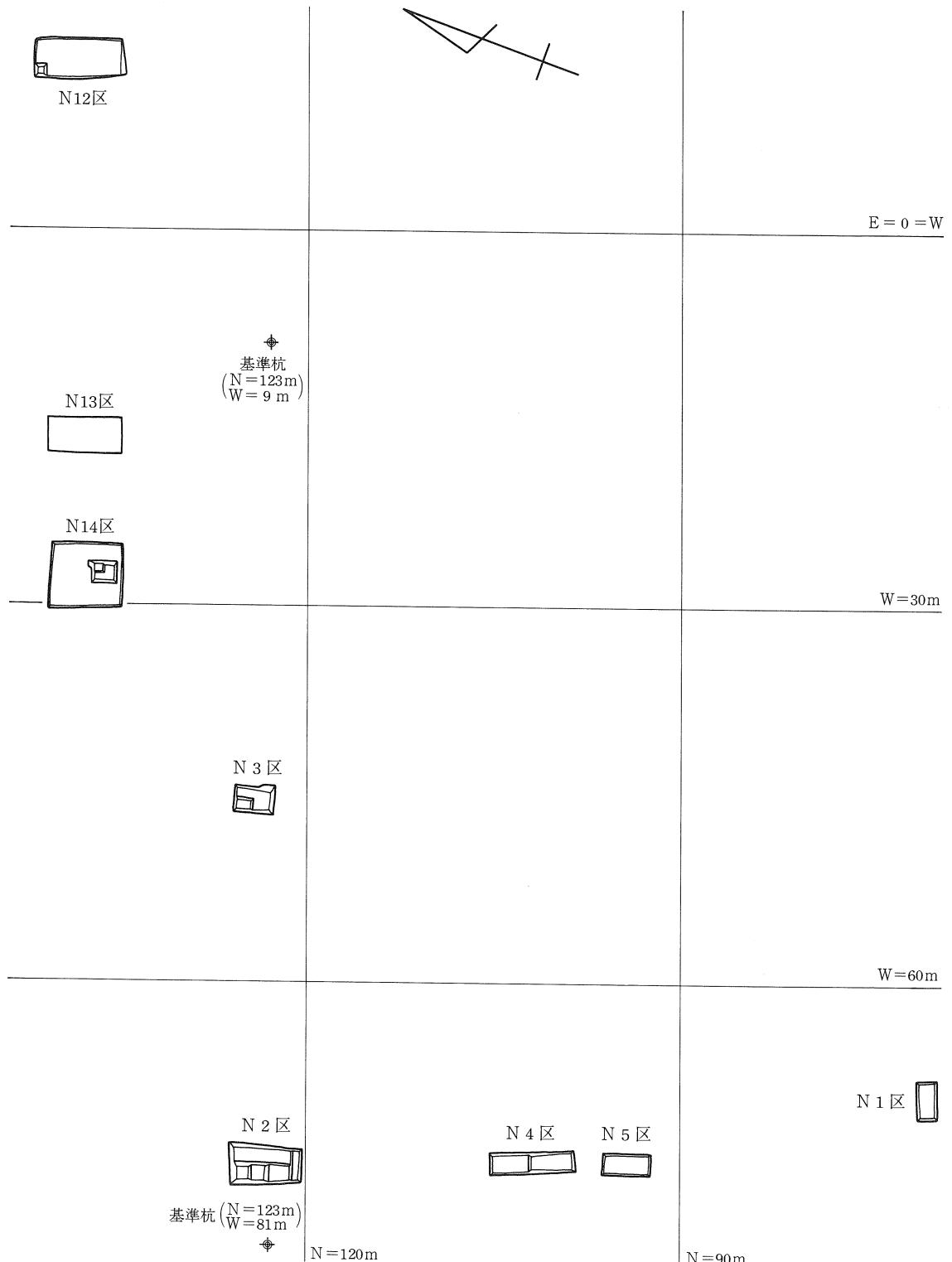


図29 芦ノ口遺跡調査区配置図（2. 研究棟北側）

Fig. 29 Distribution of excavations at Ashinokuchi site(2)

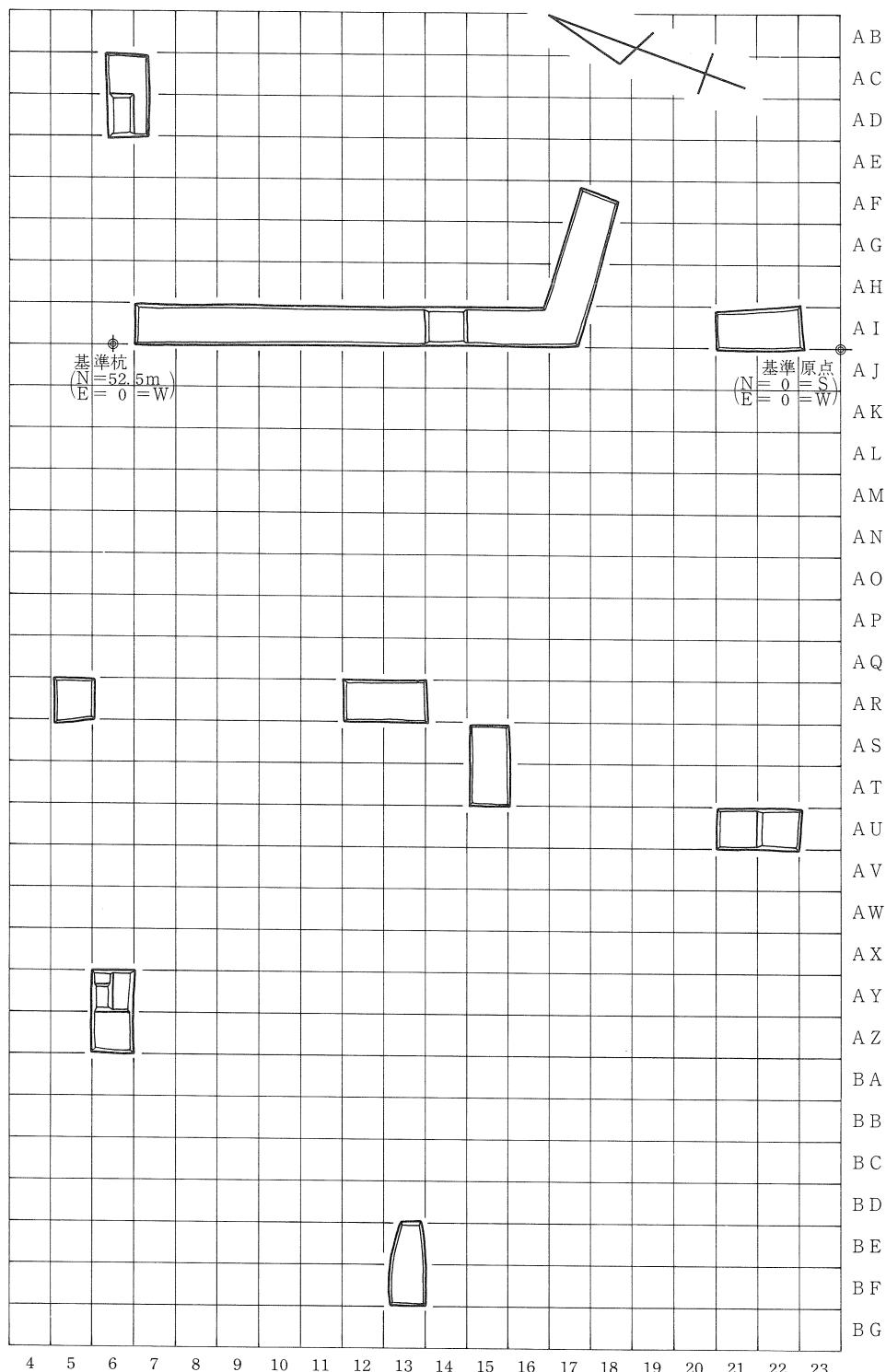


図30 芦ノ口遺跡調査区配置図（3. 研究棟南側）
Fig. 30 Distribution of excavations at Ashinokuchi site(3)

呼称することとした。研究棟の北側は、その西寄りの部分を中心に、任意に調査区を設定し、調査した順にN 1区～N 5区と呼ぶこととした。

調査地点は段丘上に立地し、あまり良好ではないがローム層が堆積しているため、旧石器時代の遺構・遺物の有無を確認するために、各所で深掘り調査区を設定して調査を行ったところ、研究棟北側のN 2～5区において、現地表下1～1.5m程のところから泥炭層が発見され、樹木・種子などが出土した。このため、N 2区・N 3区・N 5区で、一部泥炭層を掘り下げ、泥炭層の堆積状況を確認するとともに、分析のための資料を採取した。

第3次調査は、研究棟北側から実験施設北側を調査対象地区とした。研究棟北側では、野球場に隣接する一段低くなっている部分にN 12～N 14区を設定し、実験施設北側には、N 6区～N 11区・N 15区を設定して調査した。第2次調査で発見された泥炭層の分布を確認するために、全ての調査区において深掘り調査を行うことを基本とした。泥炭層は、N 11区において保存状態の良好な樹木の根株が検出されたため、一部を掘り下げ根株の状況を確認したが、それ以外の調査区では、泥炭層の分布を確認するに留めて、掘り下げはほとんど行っていない。

調査にあたっては、敷地の方向にあわせてグリッドラインを設定した。グリッドラインは、真北から約20°西偏している。調査基準点は、研究棟南側と北側の4ヶ所にコンクリート杭によって設定し、もっとも南側の点を原点（N=0=S, W=0=E）とした。遺構の検出された調査区の平面図と断面図については縮尺1/20で実測図を作成し、遺構が検出されていない調査区については、1/100の縮尺で平板測量によって調査区の位置を記録した。検出された遺構の番号は、各調査区ごとで付け、全体を通した番号とはしていない。

2. 基本層序

調査地点は、戦前には陸軍幼年学校が置かれていた場所で、戦後はこれらの建物を利用して東北大学の教養部として使用され、1963年に現在の原子核理学研究施設が建設された。本来は、南から北に向かって、緩やかに傾斜して下っていく地形であったと思われるが、現状は階段状に整地されている。この過程においてかなりの範囲で削平と盛土による造成が行われたと考えられる。

1層は現在の表土層と、大学によるものと考えられる盛土層である。特に、実験施設北側の東寄りの部分にあたるN 6～8区では、この盛土がきわめて厚い。2層は、陸軍幼年学校時代に相当すると思われる盛土である。主に研究施設南側に分布する。3層はこれらの盛土が行われる前の段階の表土層である。

4層が、本来の遺物包含層に相当すると思われるが、ほとんどの調査区で削平されたのか、AC・AD-6・7区とAI-7区の付近で確認できるだけである。また、N 7区で縄文土器が

発見された層も、大きくはこの4層に相当するものと考えられる。AI-7区では、この4層の下部が漸移層となっている。

5層はローム層であるが、全体に厚さも薄い。調査範囲全体に分布するが、既に削平されて確認できない調査区も多い。6層は水性堆積層で、砂～粘土がラミナ状に堆積したり、土質の異なるブロックや小礫が多く混入する。細かく分けることが可能であるが、様相は調査区ごとの違いが大きい。6層の細分層については、異なる調査区の間での対比は困難なため、調査区ごとに別個の層名を付けている。7層は、混入物のほとんど無い精良な粘土層で、8層の泥炭層が分布する範囲では、N3区を除くすべての地区で確認されている。N11区では、この7層と8層との境で、火山灰が確認されている。

8層は、植物遺体を大量に含む泥炭層である。研究棟北側から実験施設北側に分布する。植物遺体の分解の度合いは、場所による違いが大きい。保存状態の良いN11区では、根株が良好に遺存していた。8層を掘り下げた調査区の中では比較的保存状態の良い、N2区とN3区では、8a・8b・8c層に細分が可能である。3次調査では、この8層は確認に留めている調査区が多く、掘り下げを行っていない調査区では、ボーリング・ステッキによって8層の厚さを確認した。調査区の断面図に、下向きの矢印で示したのが、このボーリング・ステッキで深さを確認した所である。

9層は泥炭層より下位の粘土～砂の水性堆積層をまとめた。場所によっては、褐鉄鉱によると思われる褐色の帶が認められる。泥炭層の分布しない範囲の6層に、この9層に相当する地層が含まれる可能性も残る。10層は基盤の礫層である。ただし、AI-14区では、礫層の下に粘土層がさらに存在し、これらの下にさらに礫層が確認されている。このAI-14区以外では、礫層が検出された段階で調査を終えているので、これらの礫層が、はたして確実に基盤の礫層であるかどうかは確実でない部分を残している。

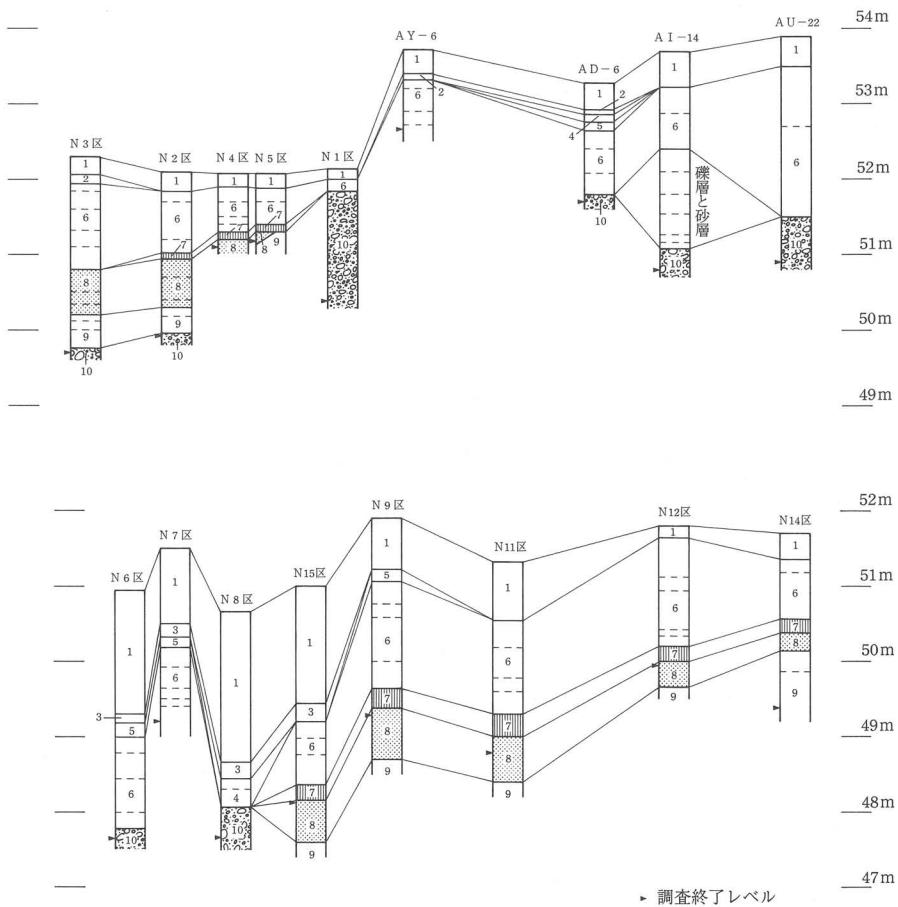
3. 検出遺構と出土遺物

(1) 第2次調査

AC・AD-6・7区（図32、図版12）

表土と2層を除去すると、4層が遺存しており、ほとんど削平は受けていないものと考えられる。4層上面において、溝が1条検出された。上幅40cm、下幅20cmの断面逆台形で、深さ15cm、2.2m分を検出した。ほぼ直線的に延び、方向はN-68°-Wである。遺物は出土していない。

AD-6区において深掘り調査を行った。6層の下は、すぐに礫層になり、7～9層は認められない。



- 1 現表土・大学による盛土
- 2 陸軍幼年学校時代のものと思われる盛土
- 3 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中・しまり弱 盛土以前の表土
- 4 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性中・しまり中 下部は5層との漸移部分
- 5 10YR6/8 明黄褐色 シルト質粘土 粘性中・しまり中 マンガン粒少量含む
- 6 黄褐色～灰白色 シルト・砂を主体にし粘土・小礫が入る ラミナ状の堆積を示す 色調は一般に下部ほど白色がかる、場所によってはグライ化している
- 7 10YR7/3 にぶい黄褐色 粘土 粘性強・しまり中 混入物の無い均質な粘土 場所によってはグライ化し灰白色 (10YR8/1) や明緑灰色 (5GY7/1) を呈する
- 8 10YR2/2 黒褐色 粘土～シルト質粘土 粘性強・しまり強 泥炭層 未分解の植物遺体を大量に含むが、分解の程度によって含有量は異なる 保存の良い部分では、8a・8b・8cに細分される
- 9 10YR8/2 灰白色 粘土～シルト質粘土 粘性強・しまり強 場所によってはグライ化しオリーブ灰色 (2.5GY5/1) や緑灰色 (7.5GY5/1) を呈す
- 10 腐食した礫が主体となる礫層

図31 芦ノ口遺跡基本層序模式図

Fig. 31 Schematic profiles of TM2 and TM3

TM2 i.e. Location 2 of Ashinokuchi site

TM3 i.e. Location 3 of Ashinokuchi site

AI-7～AF-18区（図32、図版12・13）

ほぼL字形に設定したトレンチである。AI-10からAI-16区にかけては、陸軍幼年学校時代の建物基礎などで、大きく破壊されている。全体に、南に行くほど削平により地層の保存状態は悪いが、北側では4層も残っており、ほとんど削平されていないものと考えられる。

調査区の最も北側のAI-7区で遺構が検出されている。ピット1は4層上面から掘り込まれており、一部が調査区外に伸びるが、長軸120cm以上、短軸75cmの不整楕円形を呈し、深さ55cmを計る。遺物は出土していない。このピット1に切られる4層を除去すると、調査区北東隅は広くて浅い落ち込みとなり、その南側は浅い溝状の落ち込みとなっている。2つの落ち込みの間では、焼土が分布しているのが確認されている。

AI-7区の溝状の落ち込み内から、土器が1点出土している。土師器かと思われるが、風化が激しく確実ではない。細かく壊れてしまっているが、出土時は同一個体であったと思われる。これ以外の出土遺物は、全て2層からの出土で、本来の位置を保ったものではない。土師器は、AI-15区2層から小片が8点出土している。この内の1点は内面黒色処理を施した壺の破片であるが、他の破片は保存状態が悪く、詳細は不明である。同じくAI-15区2層からは、石鏃1点（図39-1、図版20-1）と頁岩製剥片1点が出土している。石鏃は1.8cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmの流紋岩製と思われる。AI-7区の2層から土師質土器1点、AI-10区の2層から瓦質土器1点が出土しているが、小片で器種は不明である。近代に入るものかも知れない。AH-17区の2層から和釘かと思われる破片1点、AG-17区から不明鉄製品が2点出土している。

AI-14区において深掘り調査を行った。6層の下は礫層と水性堆積の粘土層があり、さらに礫層に至っている。

この調査区では、AI-7～AI-17区とAI-17～AF-18区の2方向で、調査区の中心を通るように測線を設定し、調査前に（株）応用地質に依頼して地下レーダー探査を実験的に行った。前述のとおり、遺構も少いえ、建物基礎などの攪乱も多い場所で、また1本の測線だけということもあり、建物基礎などの明確なもの以外は、あまり明瞭な結果は得られていない。

AI-21・22区（図版13）

表土を除去すると6層が露出する。遺構・遺物は発見されなかった。

AR-5区（図33、図版13）

1層と2層が1m近くの厚さで、その下は6層となっており、削平を受けていると考えられる。6層上面でピットが7基検出されたが、本来の深さはさらに深かった可能性がある。また、調査区の東半分は攪乱によって破壊されている。

ピット1は西壁にかかっているため全体の形状・規模は不明であるが、長軸80cm以上で、深

AC・AD-6・7区

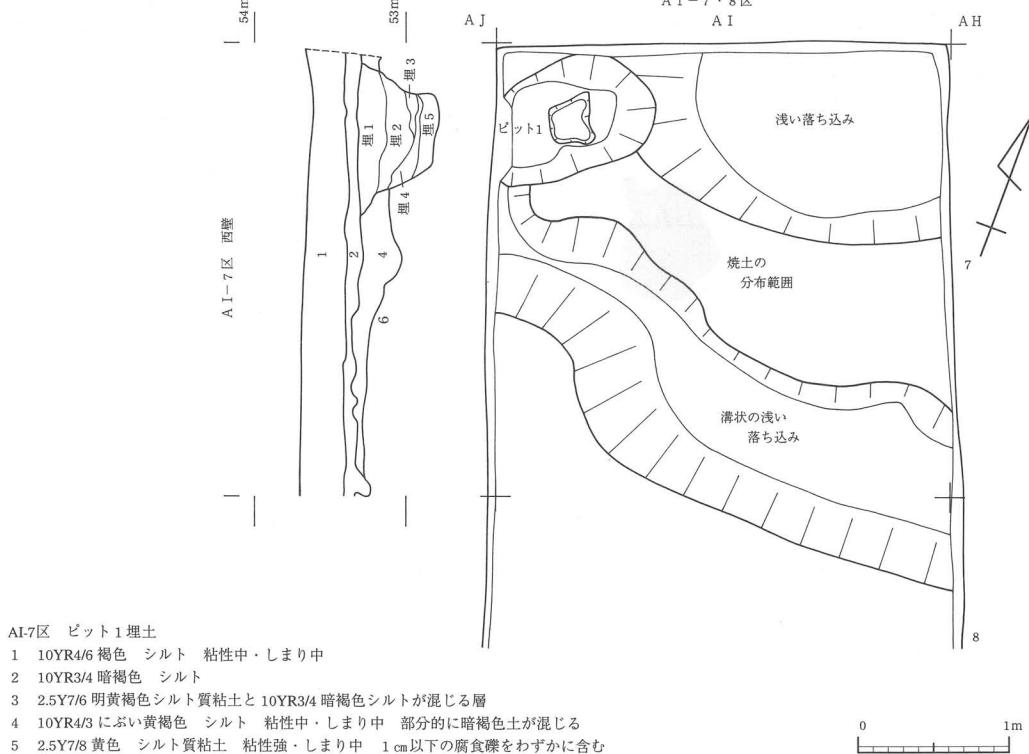
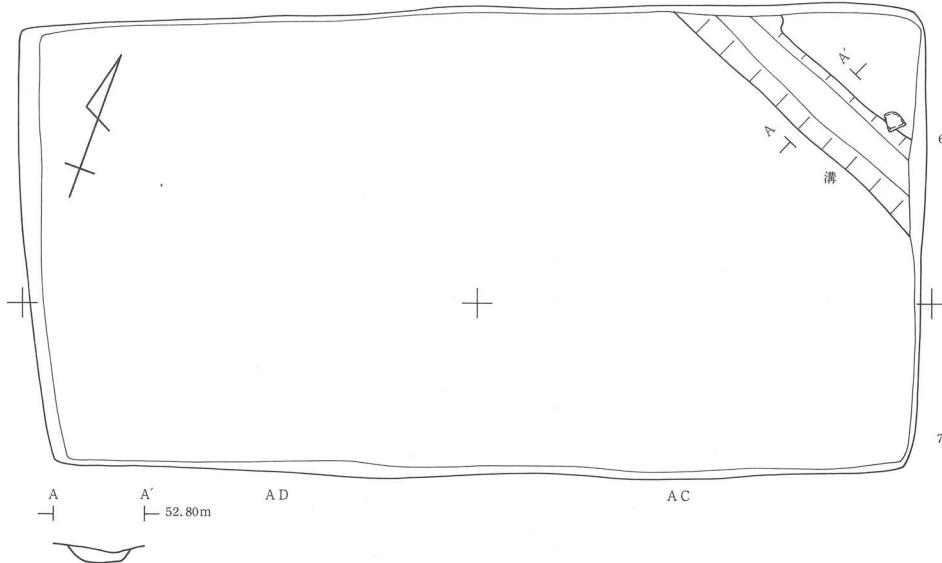


図32 芦ノ口遺跡 AC・D-6・7区・AI-7区平面図・断面図

Fig. 32 Plans and cross sections of Grid AC-D-6*7, AI-7 at TM2

さ40cmを計る。ピット2～7は、ピット1より小さく、長軸30～60cm程、深さ20cm前後の大きさで、円形もしくは不整円形を呈する。いずれのピットからも遺物は出土しておらず、時期は不明である。

AR-12・13区（図33、図版14）

1層と2層を除去すると、6層が露出し、削平を受けていると考えられる。6層上面でピットが4基検出されたが、本来の深さはさらに深かった可能性がある。全体に木の根によるものと思われる攪乱が激しい上、AR-13区には、かつて電柱が立てられていたことによる深い攪乱も存在する。

ピット1は半分が攪乱で壊されているが、長軸80cmの楕円形を呈し、深さ20cmである。埋土から頁岩製の使用痕ある剥片1点が出土している（図39-2、図版20-2）。長5.0cm、幅2.7cm、厚0.8cmの縦長の剥片で、両側縁に微細剥離痕が認められる。

ピット2は、長軸40cm程の不整円形を呈し、深さは15cmである。

ピット3は一部が壁にかかるが、長軸120cmの不整形を呈し、深さは30cmを計る。埋土からは、縄文土器と思われる土器片が出土している。保存状態が悪く細かく壊れているが、本来は同一破片であったと思われる。

ピット4も一部が壁にかかるが、長軸80cmの楕円形で、深さ30cmを計る。底面からは縄文土器の深鉢と思われる土器の比較的大きな破片2点が、埋土からも同様の土器が1点出土している。いずれも保存状態が悪く、細かな特徴は不明である。

この他に、AR-12区2層から縄文土器の口縁部小破片が1点出土している（図版20-3）。突起の部分で、後期のものと思われる。また、攪乱から頁岩製剥片1点が出土している。

AS・AT-15区（図版14）

表土を除去すると、6層が露出し、削平を受けていると考えられる。遺構・遺物は発見されなかった。

AU-21・22区（図版14）

表土を除去すると、6層が露出し、削平を受けていると考えられる。遺構・遺物は発見されなかった。AU-22区で深掘り調査を実施している。6層の下は、礫層となっている。

AY・AZ-6区

表土と陸軍幼年学校時代の2層を除去すると、すぐに6層が露出し、削平されていると考えられる。遺構・遺物は発見されなかった。AY-6区で深掘り調査を実施したが、6層途中で調査を終えている。

BE・BF-13区

1層と2層を除去すると、6層が露出し、削平されていると考えられる。遺構・遺物は発見



図33 芦ノ口遺跡 AR-5区、AR-12・13区平面図・断面図

Fig. 33 Plans and cross sections of Grid AR-5, AR-12-13 at TM2

されなかった。

N 1 区

表土を除去すると 6 層が露出する。6 層の厚さも薄く、かなり削平を受けているものと考えられる。遺構・遺物は発見されていない。6 層の下は、礫層となっている。

N 2 区 (図34、図版14・15)

表土の下はすぐに 6 層となり、削平されていると考えられる。遺構・遺物は発見されない。深掘り調査によって、8 層の泥炭層が比較的良好な状態で検出されたため、一部は礫層まで掘り下げた。8 層は 8a ~ 8c 層に細分される。南側で 50cm、北側で 80cm の厚さで、9 層上面のレベルが下がっていく分、北側ほど厚くなっている。比較的保存状態の良い樹木が多数含まれているが、根株が本来の位置に残ったような出土状況は見られなかった。

N 3 区 (図版15)

1・2 層の下はすぐに 6 層で、削平されていると考えられる。遺構・遺物は発見されなかつた。深掘り調査によって、8 層の泥炭層が比較的良好な状態で検出されたため、N 2 区同様、一部は礫層まで掘り下げた。8 層は 8a ~ 8c 層に細分される。厚さは、南側で 40cm、北側で 60cm を計り、9 層上面のレベルが下がっていく分、北側ほど厚くなっている。

N 4 区 (図版15)

表土の下は 6 層が露出し、削平されていると考えられる。遺構・遺物は発見されなかつた。深掘り調査によって、8 層の泥炭層が検出された。本調査区では、その南半分で、8 層の上面を検出したに留めた。

N 5 区 (図34、図版15)

表土の下は 6 層が露出し、削平されていると考えられる。遺構・遺物は発見されなかつた。深掘り調査によって、8 層の泥炭層が検出された。8 層は、調査区の北西隅に分布し、それより南側には認められない。掘り抜いていないため確実ではないが、厚さも 30cm 程度と薄く、含まれる植物遺体の分解も進んでいる。

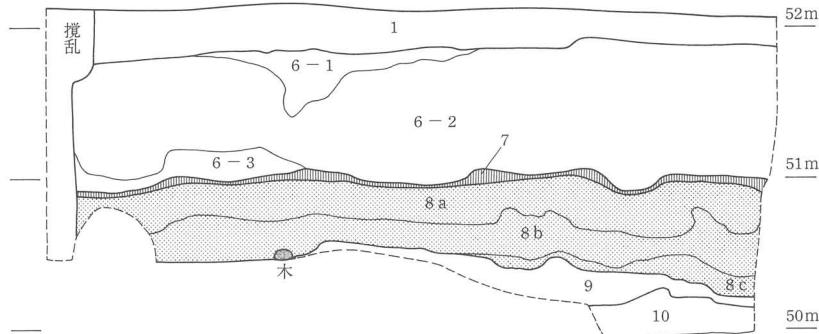
(2) 第 3 次調査

N 6 区 (図版16)

研究施設造成時の盛土が厚く、2 m 近くにおよぶ。盛土の下では、盛土時の表土層（3 層）が確認され、削平されていないことが確実である。3 層の下には 5 層のローム層がある。遺構・遺物は発見されなかつた。重機で 6 層以下を深掘りしたが、6 層の下はすぐに 10 層の礫層となり、泥炭層は分布していない。

N 7 区 (図35、図版16)

N 2 区 西壁



6-1 2.5Y7/3 浅黄色 シルト 粘性弱・しまり中

6-2 2.5Y7/4 浅黄色 砂 粘性無・しまり中 薄い砂・小礫が互層をなす

6-3 2.5Y7/6 明黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり中

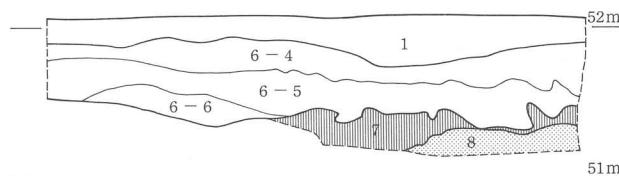
8 a 10YR2/3 黒褐色 粘土 粘性強・しまり強 10YR6/4 にぶい黄橙色粘土が網状に入る
植物遺体の含有量は少ない

8 b 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質粘土 粘性中・しまり強 植物遺体多量含む

8 c 10YR3/2 黒褐色 粘土 粘性強・しまり強 植物遺体を多く含むが8 b層よりは少ない、
小礫をわずかに含む

9 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘土 粘性強・しまり強

N 5 区 西壁



6-4 2.5YR7/3 浅黄色 シルト質粘土 粘性強・しまり中

6-5 10YR8/2 灰白色 粗砂 粘性弱・しまり中 細かい葉理をなす

6-6 10YR7/4 にぶい黄褐色 粗砂 粘性弱・しまり強
2 cm以下の腐食した角礫を多く含む

8 7.5YR2/3 極暗褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり中
有機物の分解が進み肉眼で確認できる植物遺体は少ない



図34 芦ノ口遺跡N 2・5区断面図

Fig. 34 Cross sections of Grid N2, N5 at TM2

研究施設造成時の盛土が厚く、1.5mにもおよぶ。盛土下は、旧表土層（3層）で、削平されていないことが確実である。3層下には5層のローム層があり、この5層上面で土坑が1基検出された（1号土坑）。

1号土坑は、南壁にかかり、全体の形は不明であるが、長軸110cm以上、短軸50cm以上、深さ50cmで、壁面は強く焼けている。埋土にも、炭や焼土が多く含まれている。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

1号土坑を避けて深掘り調査を行ったが、盛土が厚く、現地表からの深さが大きくなるため、6層途中で調査を終えている。

N 8区（図35、図版16）

研究施設造成時の盛土が2mの厚さあり、その下は旧表土層（3層）で、削平は受けていない。3層の下は、水性堆積層かと思われる、グライ化した粘土層があり、A・B2枚に細分される。おそらく、基本層の4層に相当するものと考えられる。その下は、すぐに礫層となり、5～9層は分布していない。

この4層相当と思われるA層中で、縄文土器が出土した（図39-3・4、図版20-4・5）。保存状態が良くなく、小片に分かれているが、全て同一個体である。口縁部・底部ともに欠くが、深鉢の体部である。LRの縄文が施されている。

N 9区（図版16）

表土の下は、5層のローム層が残っており、削平はあまり受けていないようであるが、遺構・遺物は発見されなかった。また、幼年学校時代の建物基礎や、現在使用されている排水管などで壊されている部分がある。調査区東側で深掘り調査を行ったところ、8層の泥炭層が確認されている。

N 10区（図36、図版17）

表土を除去すると、すぐに6層が露出し、削平を受けていると考えられる。調査区の中央部は、攪乱によって破壊されている。

6層上面でピットが1基検出されている（ピット1）。平面形は径90～110cmの不整円形を呈し、南東よりの部分が一段深くなる。深さは40cmであるが、本来はもう少し深かったものと推定される。埋土から頁岩製の使用痕のある剥片が1点出土している。

隣接するN11区で泥炭層が確認され、泥炭層がこのN10区にも存在することは確実と思われたため、ここでは深掘り調査は行わなかった。

N 11区（図36、図版17）

表土を除去すると、すぐに6層が露出する。6層上面では、遺構は検出されず、遺物も出土していない。6層と7層を重機で除去し、8層を露出させたところ、泥炭層中に良好な状態で

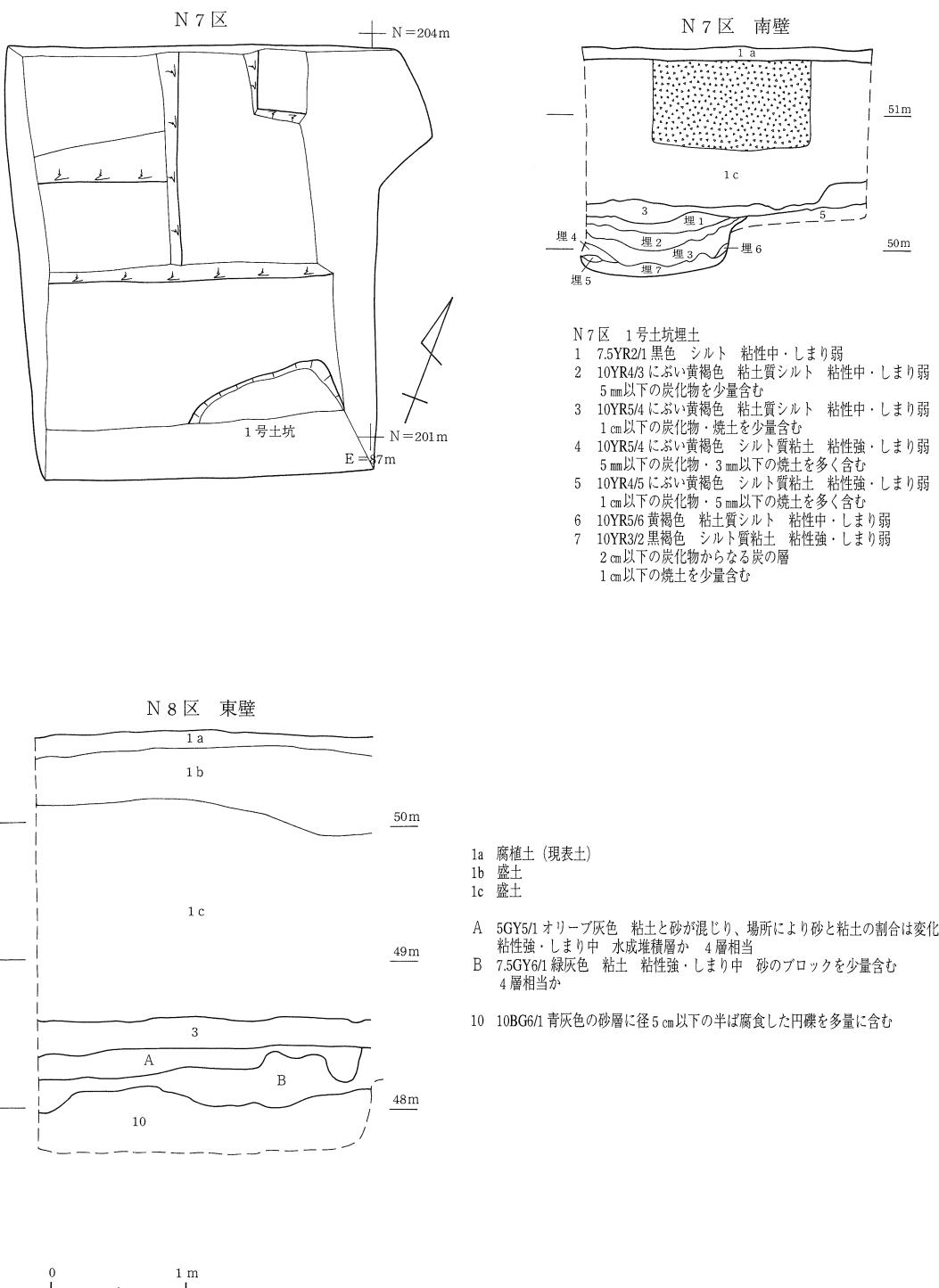


図35 芦ノ口遺跡N 7・8区平面図・断面図

Fig. 35 Plans and cross sections of Grid N7, N8 at TM3

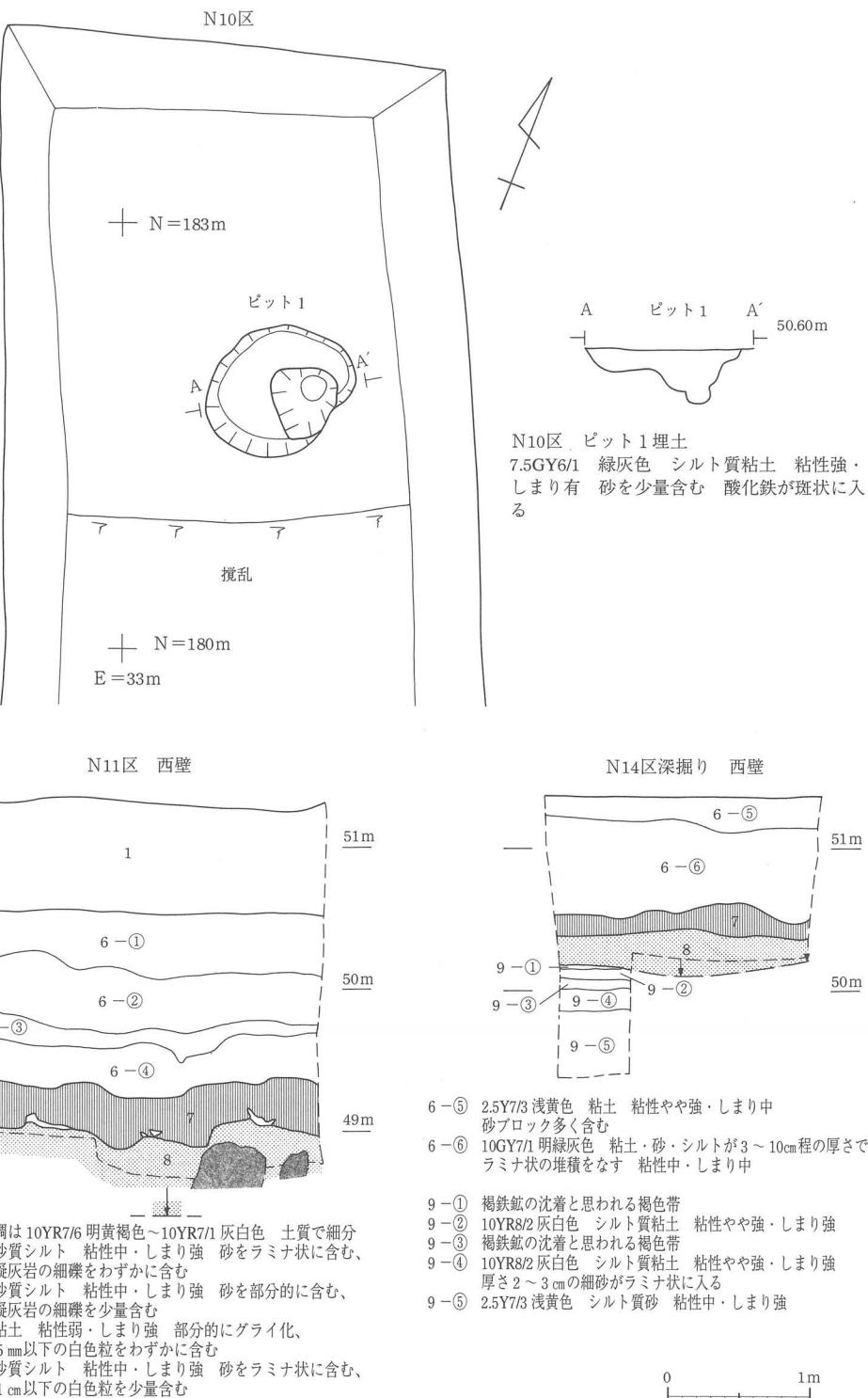


図36 芦ノ口遺跡N10・11・14区平面図・断面図

Fig. 36 Plans and cross sections of Grid N10, N11 and N14 at TM3

根株が残存していたため、根株の周囲のみ 8 層を掘り下げ、根株の状況を確認した。7 層と 8 層の境で、火山灰が確認され、分析のためサンプルを採取した。

N 12 区（図37、図版18・19）

表土を除去すると、すぐに 6 層が露出する。調査区東端は、陸軍幼年学校時代の建物基礎によって破壊されており、幼年学校時代に既に削平を受けているものと考えられる。そのため、検出された遺構の深さは、本来はもう少し深かったものと推定される。

6 層上面で土坑が 7 基検出された。長軸で 70cm から 160cm 程度、深さは 30cm から 60cm と規模の差が大きい。形も円形が多いが、2 号土坑のように瓢箪形に近いものもある。このように、大きさや形態はそれぞれ異なっているが、埋土の状況は全て類似している。これらの土坑はいずれも、当初は黒褐色～暗褐色土の部分をプランとして確認した。内部を掘り進めると、多くの土坑でこの黒褐色～暗褐色の部分が当初は壁と想定した土の下に入り込むのが確認された。結局、黒褐色～暗褐色土の外側の、わずかに変色した程度と考えていた部分までが遺構の埋土になることとなった。このように、遺構の壁の確認が困難であったため、1 号土坑では、調査区の北壁を利用して、一部断ち割りを行って確認した。この埋土の中で、黒褐色～暗褐色の植物遺体を含む層はラミナ状の堆積を示し、自然に堆積したものであることを示している。しかし、その間に入り込む土は、ブロックが混じり合ったような状況を呈し、埋め戻された土のようである。また、当初壁と誤認した層は、ほとんど混入物の認められない地山に近い土である。このような層が混在して埋土を形成しており、埋積の過程を推定することが困難で、土坑の用途も不明とせざるを得ない。

遺物は 2 号・3 号・6 号土坑の 3 基から出土している。

2 号土坑の埋土 9 层上面からは、同一個体の土師器甕が、2 つの破片に分かれて出土している。保存状態が極めて悪く、取り上げ後は、ほとんどが細片となってしまった。本来は、底部を除くとほぼ完形に近いものと思われる。調査時の所見では、基高 20cm 程度のやや小型の甕になり、体部はわずかに縦に長い形態と考えられる。口縁部は、屈折して、わずかに外に弯曲しながら開くもので、端部は丸く收めている。保存状態が悪く器面調整は判然としないが、口縁部はヨコナデである（図版20-6・7）。

3 号土坑埋土からは、同一個体と考えられる土師器の小片 3 点が出土している。その内の 1 点は、壺の底部片で、底部外面が円盤状に突出するものである。

6 号土坑底面からは、完形の土師器鉢が出土している（図39-5、図版20-8）。口径 23.5 cm、底径 6.1 cm、器高 14.9 cm を計り、半球形の体部に屈折して、わずかに弯曲しながら開く口縁部を有する。口縁端部は丸く收める。底部はやや突出する。保存状態が悪く、表面のほとんどの範囲が薄く剥落しているため、器面調整はほとんど判らない。わずかに器面が残されている

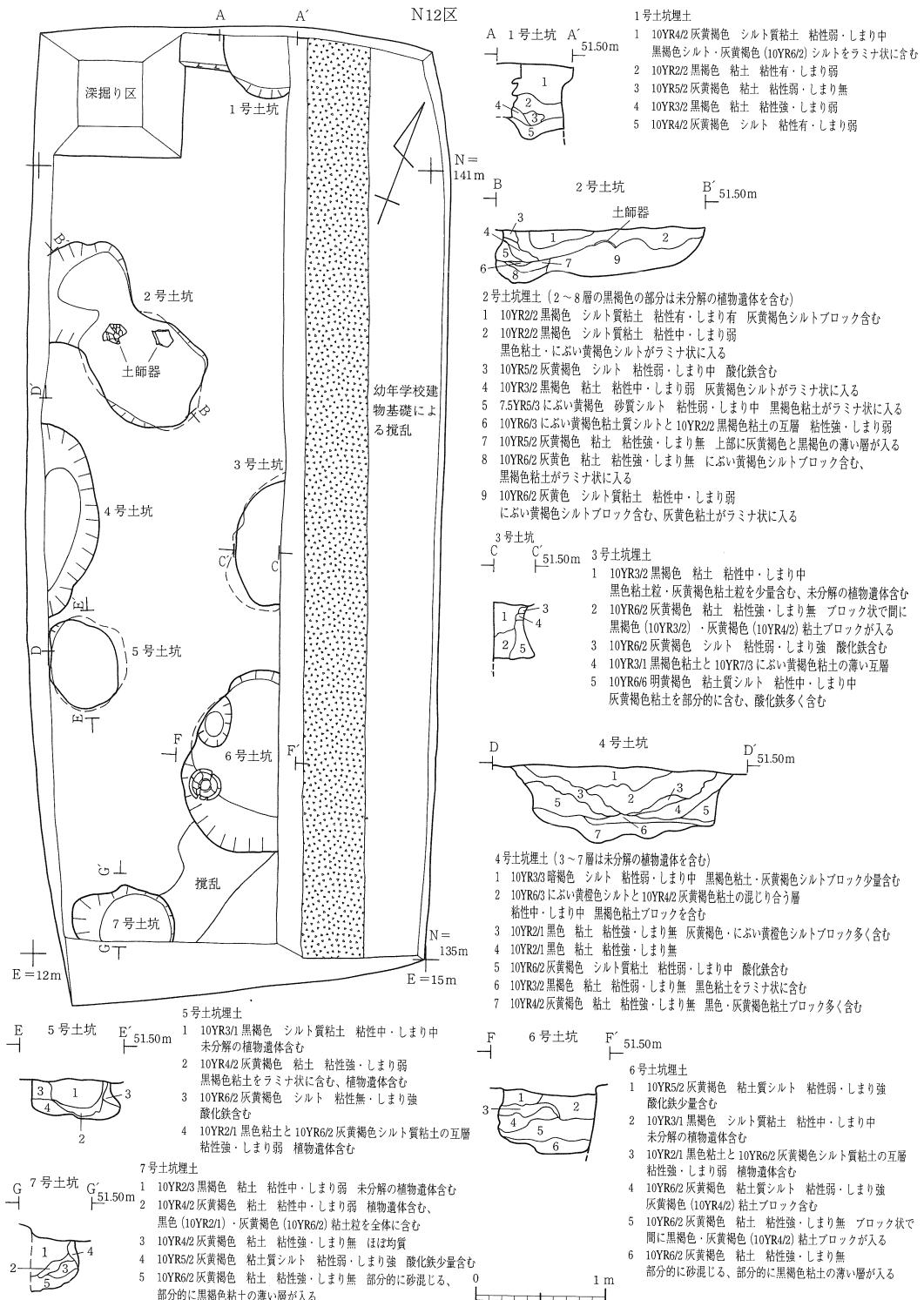


図37 芦ノ口遺跡N12区平面図・断面図

Fig. 37 Plans and cross sections of Grid N12 at TM3

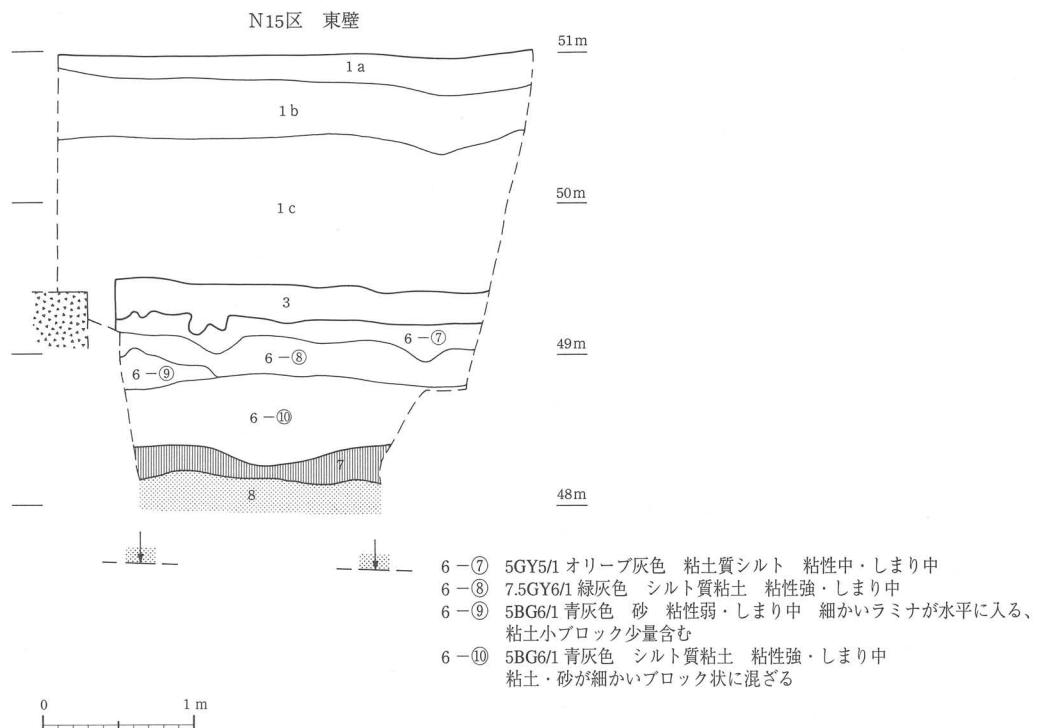
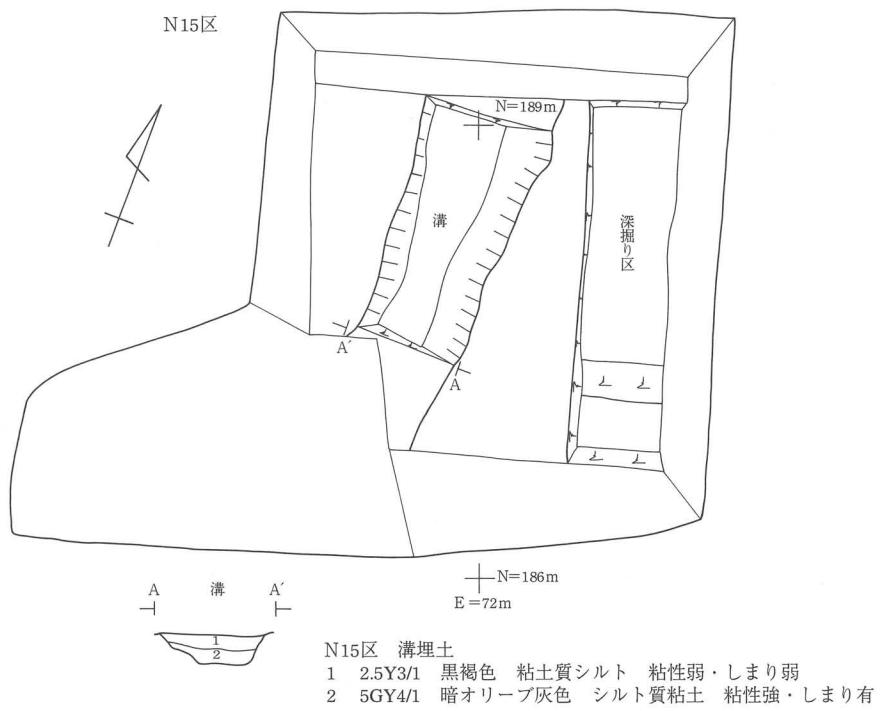


図38 芦ノ口遺跡N15区平面図・断面図

Fig. 38 Plans and cross sections of Grid N15 at TM3

体部外面の下半部は、ナデによるものと思われる。6号土坑からは、他に土器の小片3点が出土している。摩滅が激しいが、この3点は同一個体と思われる。

6号土坑出土の鉢は、あまり類例が無いものである。法量と底部形態を除けば、引田式の半球状の体部に外反する口縁をもつ壺に、類似した形態が認められる。引田式以降、壺は大型と中型に法量分化していくが、大型壺でも口径は20cmを越えることはほとんど無く(藤沢敦1992)、本例とは差がある。形態や法量が比較的類似するものは、福島県国見町下入ノ内遺跡1号住居跡出土の甕とされたものに認められるが(佐藤博重ほか1980)、この例は器高が口径より大きく、本例とは違いが大きい。このように、現状では確実な類例が見出し難いが、他の時期の土師器では、より隔たりが大きい。そのため、壺の形態との類似という、消極的な理由ではあるが、引田式の時期のものと考えておきたい。古墳時代中期、5世紀の中葉頃と考えられる。

これ以外の出土遺物は、細片化しており検討は困難であるが、2号土坑出土の甕は、体部が長胴化していないことから、古墳時代中期かそれより以前のものと思われる。これらの土坑は密集して分布しており、相互に大きく時期が異なることは考え難いことから、6号土坑と同じ古墳時代中期のものと考えておきたい。

本調査区では、調査区北西隅で深掘りを行ったところ、8層の泥炭層が確認されている。

N13区

表土を重機で除去したところ、大量のコンクリートや鉄筋などの建築廃材が捨てられていた。調査区の全面が、この攪乱にあたっており、現地表より2m近くまで重機でこれらの廃材を除去したが、さらに深くまで廃材が続くため、調査を断念した。

N14区（図36、図版19）

表土下は6層となっており、この面で幼年学校時代と考えられる建物基礎があり、幼年学校時代に既に削平を受けているものと考えられる。遺構・遺物は発見されなかった。建物基礎を避けて、調査区中央で深掘り調査を行った。8層の泥炭層が確認されたが、比較的厚さが薄く、泥炭の分解も進んでいる。一部で8層以下まで掘り下げ、9層の状況を確認した。

N15区（図38、図版19）

研究施設造成時の盛土が1.5m以上と厚く、その下で盛土以前の表土である3層が確認される。この面で陸軍幼年学校の建物基礎が確認されるが、幼年学校時代にはあまり大きな改変は加えられていないようである。3層の下は6層となっており、この6層上面において、溝が1条検出されている。上幅70~90cm、下幅30~50cm、深さ25cmで、断面逆台形を呈する。2.6m分を検出した。ほぼ直線的に延び、方向はほぼ真北である。遺物は出土していないため、時期は不明であるが、埋土が極めて軟質であるため、かなり新しい時期のものである可能性も考えられる。

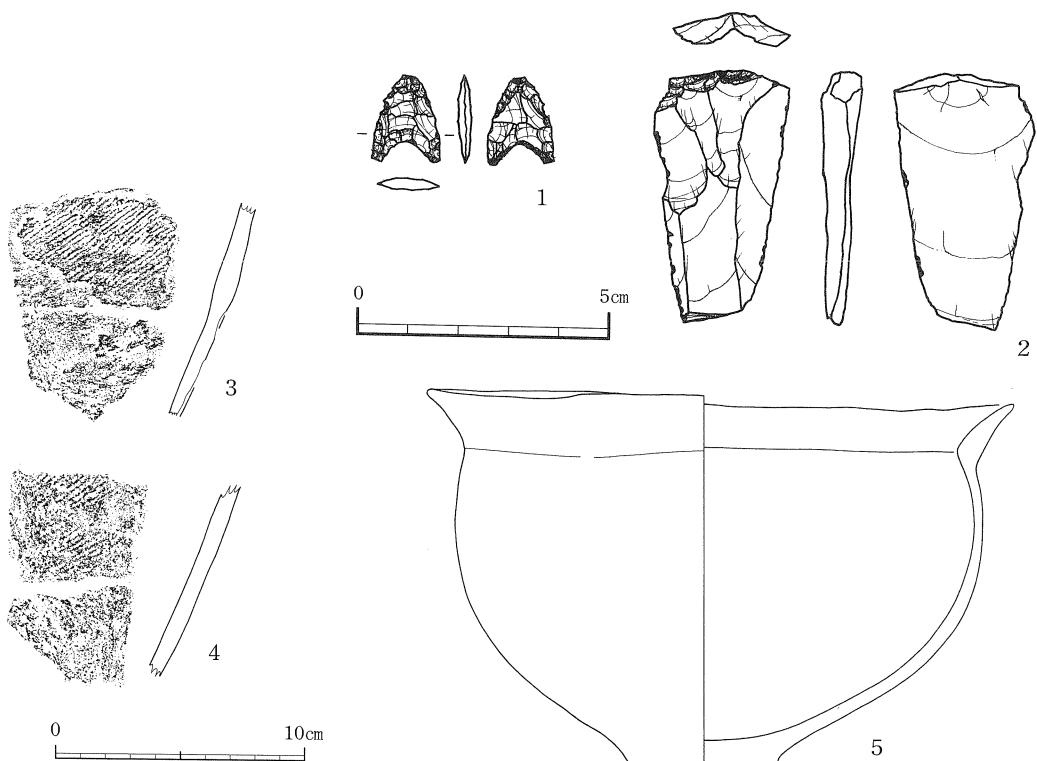


図39 芦ノ口遺跡第2次・第3次調査出土遺物

Fig. 39 Various implements from TM2 and TM3

《引用・参考文献》

- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 pp. 1~14 東北史学会
 佐藤博重ほか 1980 「第2編二重堀跡(含・下入ノ内遺跡)」『伊達西部地区遺跡発掘調査報告』
 福島県文化財調査報告書第82集 pp. 55~108
 東北大埋蔵文化財調査委員会 1990 『東北大埋蔵文化財調査年報』3
 藤沢 敦 1992 「引田式再論」『歴史』第79輯 pp. 68~86 東北史学会

4. 8層（泥炭層）についての検討

研究施設北側から実験施設北側で確認された8層の泥炭層は、層序から、旧石器時代に相当することは確実であると考えられた。この泥炭層から人工遺物は発見されなかつたが、当時の環境を復元する上では、きわめて重要なデータを提供することになると考えられた。そのため、出土した自然遺物の分析、地層の年代や遺跡をとりまく環境を復元するための分析を、専門の方々に依頼した。その分析結果を、ここにまとめて掲載する。事情により、種子と樹種の同定が報告できなくなってしまったが、この泥炭層は、1996年度にも調査を実施しており、その際に採取した資料の分析が進行中であるので、その報告において、改めて検討することで責任を果たしたい。

最初に、泥炭層である8層の分布状況と、層の様相について改めてまとめておくこととする。

(1) 8層の分布と層相

2ヶ年の調査において、8層の分布が確認された調査区は、N 2～5区、N 9区、N 11・12区、N 14・15区である。N 10区は深掘り調査は行っていないが、他の調査区の様相から、8層が分布することは確実と推定される。N 13区は攪乱が激しく、調査は断念した。

この内、N 5区において8層の南端が検出された。このN 5区の南側に設けたN 1区より南側では、8層は確認できず、礫層上面の標高も51～52mと高くなっている。したがって、8層の南端は、N 5区より東に延び、少なくとも研究棟より南には至らないことは確実である。またN 14区とN 12区では、8層が薄く、分解も進んでいることから、その分布の端に近いのかも知れない。東側では、N 9区までは8層が分布するが、N 8区とN 6区では確認されなかつたことから、この両者の間に東端があると推定できる。以上の点から、8層の分布範囲を推定したのが、図40に示した範囲である。細部については未確定な部分が多いが、このように考えて大過無いものと思われる。

基本層序のところでも述べたが、8層は場所によって厚さも異なり、含まれる植物遺体の分解度にも差がある。全体に、厚さが薄いところでは分解も進み、植物遺体の含有量は少なくなっている。8層を掘り抜いた調査区では、N 2区とN 3区の保存状態が良く、ここでは8層は8a・8b・8c層の3枚に細分された。この内の8b層が、植物遺体の保存状態が良く、ついで8c層、8a層の順に植物遺体の含有量は減少する。8a層では、植物遺体はかなり分解が進んだのか、その量は少なくなり、また黄褐色粘土が網状に入っているのが確認されている。N 11区で確認された根株は、8層を全て掘り抜いていないので、細分層との関係は不明であるが、少なくともN 2・3区の8a層よりは下の層に対応する層序に帰属するものと考えられる。

8層の分布する範囲では、N 3区を除く調査区において、8層の直上に7層の粘土層が確認

され、ちょうど泥炭層を粘土層でパックしたような状況を呈している。N11区では、この7層と8層の境の部分で、火山灰が確認されている。

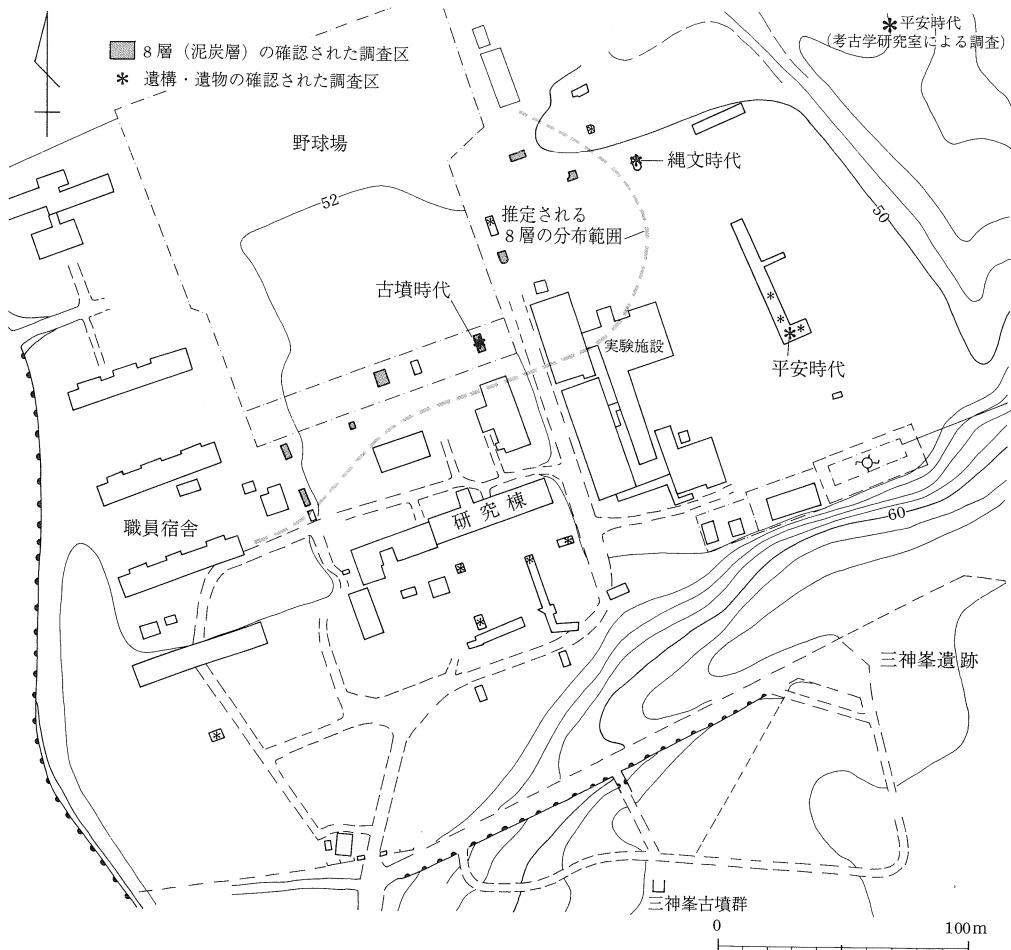


図40 芦ノ口遺跡8層（泥炭層）の分布範囲推定図

Fig. 40 The estimated extent of peat deposits at Ashinokuchi site

(2) 遺跡周辺の地質・地形

中川久夫（元東北大学理学部教授）

理学部附属原子核理学研究施設の電子ライナック研究センター新設予定地は仙台市太白区三神峯一丁目の同施設構内にある。この地点は宮城野海岸平野の内限に近く、仙台南方の丘陵地を流れる名取川が海岸平野に流れ出る所の北側の河岸段丘の分布地域内である。仙台付近の段丘群は、高位から低位へ順に、青葉山・台の原・仙台上町・中町・下町の各段丘に区分されている。

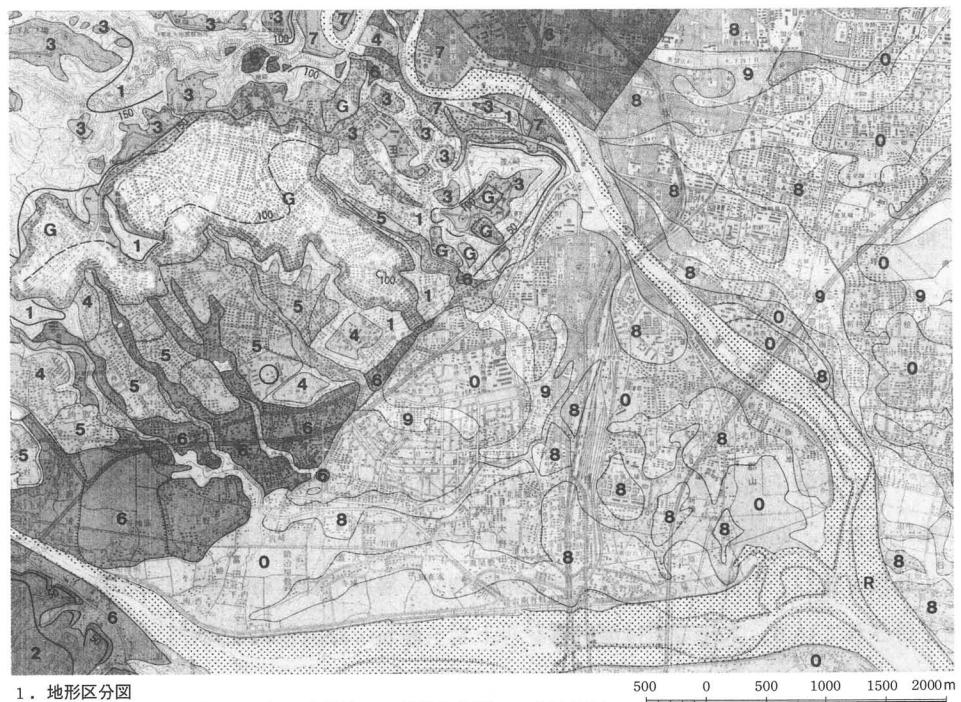
青葉山段丘は青葉山一帯に分布し、頂面の高さは100～200mで、小崖をはさむ4段に細分される。段丘面は、この付近では、奥羽山脈の東麓から拡がる丘陵の頂面とほぼ一致する。段丘構成層は風化の著しい礫層で、その上位に越路・愛島・永野の各火山灰が重なっている。越路火山灰は下位の礫層と共に風化、赤色土化している。青葉山遺跡B地点では礫層最上部から石器が発見されている。三神峯付近では、その北および東方に、三神峯を取り巻くように、青葉山の南部から大年寺山にかけて分布し、青葉山南部で高さ150mから八木山神社を経て大年寺山に至る間に80m余まで低下して、大年寺山で120mになるというように中弛みの高度分布を示す。これは大年寺山の北側を通る二ツ沢断層による変形で、これより低位の諸段丘も同様の変形を蒙っている。

三神峯の高地は高さ67.2mで、平坦な頂面をもつが、この面は二ツ沢の東岸の電気通信学園のある高地（69m）の表面とともに台の原段丘に含まれる。構成層は礫層であるが、その風化度は青葉山段丘に比して著しく低く、さらに低位の段丘構成層と同様である。二ツ沢断層は大年寺山の北側から西南西にのびて三神峯の北側を通る。三神峯の高地の北西斜面はこの断層の影響を受けて急斜面となっている。電子ライナック研究センター建設予定地はこの断層の北西側にある。

三神峯の北西の一帯には緩起伏の平坦面がある。この面は仙台上町段丘に相当する。構成層は礫層であるが、分布は一様ではなく、基盤の鮮新統が露出する所が多い。研究センター建設予定地では礫層と亜炭層がある。

三神峯の南側には宮城野（海岸）平野との間に仙台中町段丘に相当する段丘がある。段丘構成層は新鮮な礫層で、段丘面上に被覆層の永野火山灰が認められる所もある。名取川北岸では下流側から上流側へ段丘面が傾斜する所があり、二ツ沢断層の影響を受けているものと思われる。三神峯の北側一帯の上町段丘（に相当する段丘）に発達する谷底には中町段丘（に相当する段丘）に連続する平坦面が認められる。

宮城野海岸平野の内限線は仙台市東部から名取川までは、東北東－西南西にほぼ直線状にの



1. 地形区分図

G:造成地 R:河道 0:後背湿地 9:自然堤防(微弱) 8:自然堤防(明瞭) 7:仙台下町段丘
6:仙台中町段丘 5:仙台上町段丘 4:台の原段丘 3:青葉山段丘 2:硬岩高地 1:丘陵地
○:芦ノ口遺跡

500 0 500 1000 1500 2000m



2. 地質図

G:盛土 B:台の原段丘構成層 A:青葉山層 D:大年寺層 Y:向山層上部
H:向山層中部広瀬川凝灰岩(部層) K:向山層下部 T:竜の口層 KM:亀岡層 M:三滝層
N:名取層群(茂庭層・旗立層・網木層) TK:高館層
○:芦ノ口遺跡 (段丘・平野構成層は地形区分図参照)

500 0 500 1000 1500 2000m

図41 芦ノ口遺跡周辺の地形と地質

Fig. 41 Geographical and geological features around Ashinokuchi site

びるが、名取川以南では、屈曲を伴ってほぼ南へのびる。この東北東－西南西の直線状の部分は古くから利府－長町線と呼ばれてきた想定断層の影響を受けるものと考えられることが多かつたが、利府－長町線の実態にはまだ判明していないことが多い。

三神峯付近の平野は海岸平野の内最も内陸部に当たる。平野を横切って流れる広瀬川と名取川は三神峯の南東約4kmで合流するが、両河川ぞいに発達する自然堤防に囲まれた後背湿地内には二ツ沢・金洗沢から連続する微弱な自然堤防がある。三神峯の外側（南東側）の自然堤防と後背湿地の範囲には富沢遺跡・郡山遺跡がある。

三神峯付近の基盤は新第三系鮮新統の仙台層群上部より成る。仙台層群は、下位より順に、亀岡層・竜の口層・向山層・大年寺層を含む。青葉山段丘の構成層の青葉山層は第四系の更新統中部に当たる。向山層の下部は礫岩、中部は白色凝灰岩、上部は凝灰質砂岩・シルト岩より成り、亜炭を挟む。中部の凝灰岩は火碎流堆積物で、層厚7～8mに達し、広瀬川凝灰岩の部層名は付されている。大年寺層は凝灰質シルト岩・砂岩・凝灰岩より成り、貝化石を含む。

三神峯の高地の基盤は向山層・大年寺層で、南方へ約30度傾斜している。高地の北縁に前記の二ツ沢断層がある。断层面は南東に中角度に傾斜する逆断層である。その北側には向山層上部が分布する。ここから北方へ青葉山までの間は、一般に低角の南東傾斜であるが、途中軽微な向斜状を呈し、三神峯の北の二ツ沢断層のすぐ北側では向山層上部が北西方へ緩傾斜している。この付近の段丘構成層にも同じ傾向が認められる。

二ツ沢断層は台の原段丘形成後活動し、最近まで運動が継続している活断層である。構造物を設置する際には、構造物が断層を跨がぬように注意すべきである。

(3) 放射性炭素年代測定

木越邦彦（学習院大学）

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1991年12月26日

1991年7月15日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通りご報告致します。
なお年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代です。また資料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値（B. P.）として表示しております。また試料の β 線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C} \%$ を付記しております。

記

Code No.	試料	年代（1950年よりの年数）
----------	----	----------------

Gak-15810	Wood from 茅ノ口遺跡	33,290 ± 2080
		31,340 B. C.

(4) テフラ分析

古環境研究所

① はじめに

仙台市芦ノ口遺跡の発掘調査では、7層下部に火山灰層が検出された（以下7'層と呼称）。ここでは、本研究所に送付されたこの火山灰試料について、テフラ検出分析と屈折率測定を行って特徴を記載するとともに、従来噴出年代が明らかにされている示標テフラとの同定を試みる。

② テフラ検出分析

(1) 分析方法

テフラ検出分析は、次の手順で行われた。

- 1) 試料 5 g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により、泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡および偏光顕微鏡下で、テフラ粒子の特徴を記載。

(2) 分析結果

本試料には、透明で分厚い塊状の中間型火山ガラスが比較的多く認められる。また平板状のいわゆるバブル型火山ガラスもごく少量認められる。火山ガラスの最大径は、約0.3mmである。

③ 屈折率測定

テフラ検出分析により検出された火山ガラスについて、新井（1972）の位相差法により屈折率（n）の測定を行った。その結果、7'層に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、rangeが1.490–1.498、modeが1.490–1.495であることが明らかになった。

④ 考察

7'層に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、かなり低い傾向にある。これまで知られている仙台市周辺に分布し、また従来の研究成果から今後検出される可能性のあるテフラのうち、7'層と比較的類似した火山ガラスの屈折率をもつテフラとして、十和田a火山灰（To-a）、鬼界葛原（とづらはら）火山灰（K-Tz）、三瓶–木次（きすき）火山灰（SK）、洞爺火山灰（Toya）の4層が挙げられる。

To-aは、A. D. 915年に十和田火山から噴出したと考えられているテフラである（町田ほ

か1981)。このテフラは東北地方中部以北の各地で検出されている。このテフラに含まれる火山ガラスには、軽石型が多く少量の平板状(バブル型)ガラスが含まれている。火山ガラスは透明で、ごく少量褐色のガラスも含まれている。火山ガラスの屈折率(n)は、1.496–1.504である(Arai et al. 1986)。

K-Tzは約7.5~8万年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した広域テフラで、北関東地方以西の地域で検出されている。バブル型や軽石型の火山ガラスにとむ。火山ガラスの屈折率(n)は、1.496–1.500である(町田ほか1984)。

SKは、ごく最近男鹿半島周辺で漂流軽石として検出されているテフラである(白石1992)。噴出年代は8~9万年前と推定されている(豊蔵ほか1987)。その層位は、約9~10万年前に洞爺カルデラから噴出した洞爺火山灰(Toya、町田ほか1987)の上位で、約7万年前に阿蘇カルデラから噴出した阿蘇4火山灰(町田ほか1985)の下位にあるらしい(白石ほか1992)。このテフラは、その分布から東北地方で降下テフラとして検出される可能性が大きい。火山ガラスには軽石型のものが多く、その屈折率(n)は、1.494–1.498である(豊蔵ほか1991)。また重鉱物として黒雲母が特徴的に多く含まれる。

Toyaは、透明の軽石型火山ガラスを多く含むテフラで、少量のバブル型火山ガラスを含む。北海道から東北地方の広い地域で検出されている。火山ガラスの屈折率(n)は、1.495–1.498である(Arai et al. 1986)。

今回、芦ノ口遺跡で検出された7'層が降下テフラであるとすれば、従来知られている仙台市周辺の第四紀後期のテフラの特徴とは一致しないようである。

⑤ まとめ

芦ノ口遺跡7'層について、テフラ検出分析を行ったところ透明の塊状の中間型火山ガラスが比較的多く検出された。この火山ガラスについて位相差法により屈折率(n)の測定を行ったところ、rangeが1.490–1.498、modeが1.490–1.495の値が得られた。これらの第5層の特徴は、これまで仙台市周辺で検出されている、また従来の地質学的成果から検出される可能性のある第四紀後期の降下テフラの特徴とは一致しないことになる。今後芦ノ口遺跡周辺において火山灰層位学的調査を綿密に進める必要がある。

《引用・参考文献》

- 新井房夫 1972 「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフラクロノロジーの基礎的研究—」
『第四紀研究』11 pp. 254~269

Arai, F., Machida, H., Okumura, K., Miyauchi, T., Soda, T. and Yamagata, K. 1986

Catalog for late Quaternary marker-tephras in Japan-Tephras occurring in northeast Honshu and Hokkaido-.
Geogr. Rept., Tokyo, Metropol. Univ., no.21, pp.223-250.

町田洋・新井房夫・森脇広 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51 pp. 562~569

町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 1984 「テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテ
フラのカタログ－」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』古文化財編集委員会編
pp. 865~928

町田洋・新井房夫・百瀬貢 1985 「阿蘇4火山灰－分布の広域性と後期更新世示標層としての意義－」
『火山』第2集30 pp. 49~70

町田洋・新井房夫・宮内崇裕・奥村晃史 1987 「北日本を広くおおう洞爺火山灰」『第四紀研究』26
pp. 129~145

白石建雄・新井房夫・藤本幸雄 1992 「秋田県男鹿半島における西日本起源の漂流軽石・降下火山灰の発見
とその意義」『第四紀研究』31 pp. 21~27

豊藏勇・大村一夫・新井房夫・町田洋・高瀬信一・中平啓二・伊東孝 1991 「北陸の海成段丘における三瓶
木次テフラの同定とその意義」『第四紀研究』30 pp. 79~90

(5) 花粉分析

竹内貞子（斎藤報恩会自然史博物館）

三神峯の東北大学原子核理学研究施設構内北西部では、段丘礫層上位のシルト層中に50~70cmの泥炭層が挟在している。この泥炭層の堆積時代および当時の古気候を知るために、花粉分析をおこなった。北2区および北3区の壁面の泥炭層よりそれぞれ試料を採取し、分析に供した。試料の採取層準を図42にしめし、また分析の結果は表9および図42にしめした。

北2区、北3区ともに*Picea*（トウヒ属）、*Abies*（モミ属）、*Tsuga*（ツガ属）、*Pinus*（マツ属）、*Betula*（カバノキ属）などの亜高山帯から山地帯上部にかけて生育する樹種の花粉の出現率が高い。*Larix*（カラマツ属）も安定して出現している。*Cryptomeria*（スギ属）、*Fagus*（ブナ属）、*Quercus*（コナラ亜属）をはじめとする温帶生樹種の花粉も、わずかづつではあるが認められる。*Picea*が泥炭層の下半部でその割合が多く、上半部で少ないのも特徴である。亜寒帯性要素の優勢な花粉組成をしめし、比較的寒冷な気候を指示している。

以上の花粉組成の特徴は、仙台市街地北部に分布する仙台上町段丘堆積物上部に挟在する泥炭質シルト層の花粉組成（竹内1986）に類似している。また、 $33,290 \pm 2080$ Y.B.P.という¹⁴C年代値も仙台市北部の仙台上町段丘堆積物上部のそれと近似の値を示す（竹内同上）。これらの結果は、この段丘が上町段丘であるとする地形学的見地（中川ほか1960）とも矛盾しない。両泥炭層はほぼ同時期に形成されたものである。

《引用・参考文献》

中川久夫・小川貞子・鈴木養身 1960 「仙台付近の第四系および地形(1)」『第四紀研究』vol. 2

pp. 30~39

竹内貞子 1986 「仙台付近の低位段丘堆積物の花粉分析」『北村信教授記念地質学論文集』 pp. 517~526

表9 芦ノ口遺跡8層における花粉百分率表

Tab. 9 Pollen percentage from layer 8 at TM2

木本花粉の総数を基数とした百分率であらわしてある。

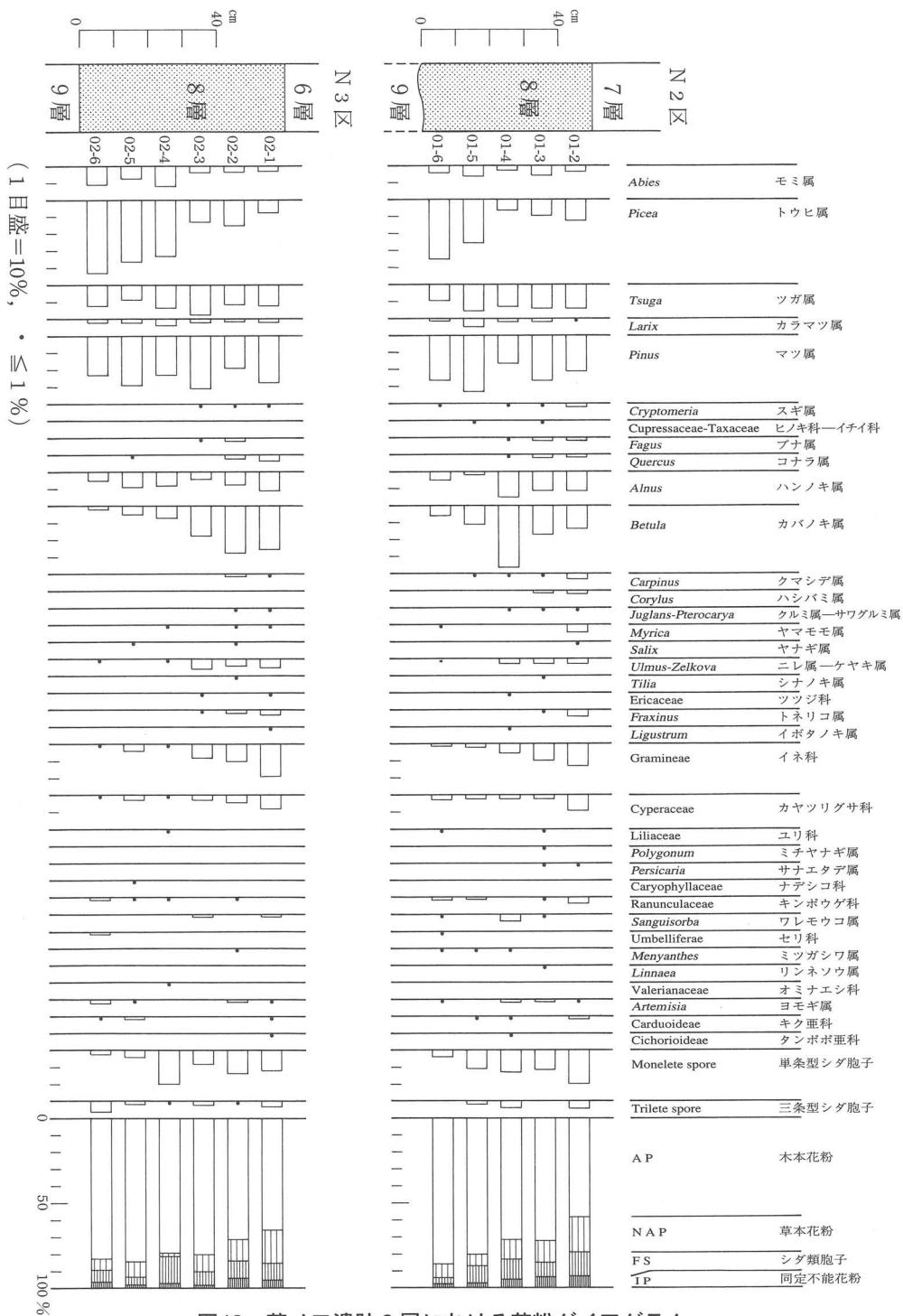


図42 芦ノ口遺跡8層における花粉ダイアグラム

Fig. 42 Pollen diagrams from layer 8 at TM2

(6) 昆虫遺体

保谷忠良（宮城県立石巻養護学校）

東北大学原子核理学研究施設構内の発掘調査において、北側地区で旧石器時代に属すると思われる泥炭層が確認された。この層中には、植物、昆虫遺体が認められた。昆虫遺体を含む8点（No.1～No.8）の泥炭小ブロックが採取され、そこに含まれる昆虫遺体の分析を依頼された。遺体の多くは、上翅の一部、前胸背や腹板の一部が破片になったもので、しかも個々ばらばらに出土しているため、種の同定は困難であった。現生の昆虫標本と比較検討した結果を以下に報告する。

No.1 TM2 N2区 泥炭層（中位）

(a) 鞘翅目の一一種の前胸背

長さ2.5mm、幅（推定）3mmの前胸背が、ほぼ正中線で左右2片に破損している。

①表面は微細刻印があり、②基部にやや弱いシワがあり、③右片基部に縦の溝が認められる。

上記の特徴はあるが種は同定できない。

No.2 TM2 N2区 泥炭層（上位）

植物の種子と思われるものはあるが、昆虫の遺体は含まれていない。

No.3 TM2 N2区 泥炭層（中位）

(a) クロマメゲンゴロウ？ 左上翅の一部・後胸腹板の一部

上翅は翅端約1／3が欠けている。翅長（推定）約52mm、翅幅約22mm、後胸腹板の長さ約23mm、推定幅36mm。

①上翅表面は黒色で微細刻印があり、②3列の弱い疎点刻列があり、③翅の大きさ、後胸腹板の形などからゲンゴロウ科であり、③からクロマメゲンゴロウに最も近似する。

しかし、点刻がやや大きく、より疎であり、翅幅からみて体長がやや細長いように見える点で、現生種と異なっている。

(b) コガムシ？ 前胸背板左側の一部

①表面は一様に点刻を密布し、②前、後縁角に小点刻群があり、③前縁近くに内側に向かう点刻列がある。

これらの特徴からガムシ科であることが考えられる。さらに推定体長は15mmぐらいであるので、コガムシに最も近いが、決定するにはエゾコガムシとの比較が必要である。

(c) キヌツヤミズクサハムシ？ 右上翅端部

①点刻にともなうシワは深く、②第一間室は高く隆起し、③青藍色の金属光沢がある。

これらからミズクサハムシ属と考えられる。②からキヌツヤミズクサハムシとシラハタミズクサハムシが該当するが、上翅の一部からの同定は難しい。

現在両種の分布は、シラハタミズクサハムシは北海道にはかなり分布しているが、本州では、山形県、岩手県に産地があるがきわめて局所的である。キヌツヤミズクサハムシは北海道から本州にかけて広く分布している。

No.4 TM2 N2区 泥炭層（中位）

植物化石のみで昆虫化石は含まれていない。

No.5 TM2 N2区 泥炭層（中位）

(a) エゾオオミズクサハムシ？ 左上翅基部の断片

①第11間室はするどく稜状で、②1、11間室にわずかに弱い横ジワがあり、③肩部はよくもり上がっている。

これらのことから *constricticollis* (オオミズクサハムシ) 種群と考えられる。②から、シナノオオミズクサハムシとエゾオオミズクサハムシが考えられるが、現生種の分布では、シナノオオミズクサハムシが福島・群馬・新潟・長野各県の産地に分布するのに対し、エゾオオミズクサハムシは北海道南部から青森・岩手・宮城・山形・福島と東北地方に厚く分布している。

No.6 TM2 N2区 泥炭層（下位）

(a) ゾウムシ科の一種の上翅断片および腹板の一部

①上翅点刻列は浅い条溝をともない、②最外側の点刻列は基部で2本に分かれしており、間室は小点刻と不規則なシワがあり、③上翅は中央後で強く隆くもり上がっており、④第1・2腹節腹板に粗大点刻がある。

これらのことからゾウムシ科と思われる。推定体長3~5mmの微小種で、種の決定は困難である。

No.7 TM2 N2区 泥炭層（下位）

(a) エゾオオミズクサハムシ？ 上翅片

(b) ゲンゴロウ科の一種 上翅片、後胸腹板の一部

①上翅の縦溝は明瞭で点刻をそなえており、②小点刻を散在し、③等径的微細刻印がある。後胸腹板の形からゲンゴロウ科と考えられるが、上翅に縦スジをもつ種は、セスジゲンゴロウ属と、ゲンゴロウモドキ属である。大きさから考えて前者に属すると思われるが、種の同定は困難である。

(c) ゾウムシ科の一種 上翅片及び腹板の一部

No.6(a)と同一種であろう。

No. 8 TM 2 N 2 区 泥炭層（下位）

(a) エゾオオミズクサハムシ？ 上翅片、腹板の一部

(b) ゾウムシ科の一種 上翅片、腹板の一部

No. 6 (a)と同一種であろう。

ネクイハムシ亜科のミズクサハムシ属や、ゲンゴロウ科、ガムシ科の種が産出したことから、開水面のある、あまり深くない水草の多い池沼とそれをとりまく湿地があり、湿地にはハンノキの疎林と林床にスゲ属の植物が生えているような環境が考えられる。ゾウムシ科の種も、イネ科、スゲ属の植物に関係を持ったものと考えられる。種の同定が出来ていないのが残念である。おおむね、現在の東北地方から北海道南部の平地から低山地に発達した低湿地に相当し、気候もやや冷涼であったと思われる。

5. まとめ

最後に、2ヶ年の試掘調査と、1985年度に実施した第1次調査も含めて、これまでの試掘調査の結果をまとめておきたい。図40に、8層の泥炭層の推定分布範囲と一緒に、これまでの調査で確認された遺構・遺物についてまとめた。

研究施設南側では、三神峯丘陵に近い南側ほど削平が著しく、研究棟に近い北側ではほとんど削平されていない。研究棟北側と実験施設周辺も削平がなされているが、場所によって削平の深さはさほど深くないと思われ、遺構は残存している。実験施設の北東側は、ほとんど削平を受けておらず、盛土が厚くなされており、遺構が存在すれば、保存状態は良いものと推定される。西側の職員宿舎の南側では、第1次調査においてA'区を設けて調査しているが、時期不明のピットが5基検出されただけであり、遺物も盛土内に入っていたもの以外は出土していない。このように、AR-5区やN12区など、ピットや土坑が比較的密集して存在する地区もあるが、全体としては遺構密度は低いと言えるであろう。削平を受けている部分が多いが、深い遺構は残存している可能性があり、その点注意が必要である。

時代別に見ると、縄文時代の遺物はAR-12区とN8区で出土している。残念ながら、遺物の保存状態が悪く、細かな時期は不明である。これ以外の縄文時代の遺物は、全て本来の位置を保っていない盛土などからの出土である。古墳時代の遺構・遺物は、N12区でのみ発見されている。これ以外には、1986年度調査のB'区において円筒埴輪片が1点出土しているが、これは研究施設造成時の大規模な盛土層からの出土であり、かなり動かされているものと思われる。縄文時代・古墳時代の遺構・遺物は、これまでの調査では、広範囲に分布する状況はあまり想定できず、比較的小規模な範囲に分布するのであろう。平安時代の遺物は、1975年の考古学研究室の調査によって竪穴遺構などが発見され遺物もまとまって出土している他、第1次調査においてもB区のピットの中から遺物がまとまって出土している。実験施設の東側から北東側に、主に分布すると見られ、比較的広い範囲に分布する可能性もある。

8層の泥炭層については、人工遺物は発見されなかったが、古環境を知る上では、貴重な資料となった。N11区では、保存状態の良好な根株も発見され、この泥炭層中に森林の跡が生々しく残されていることが確実である。花粉分析結果では、比較的冷涼な気候が想定されており、今後樹種なども含めて検討していきたい。泥炭層の形成年代については、¹⁴C年代測定で約3万3千年前の年代が出ているが、泥炭層直上で発見された火山灰は、この年代では対応するテフラが無く、さらに検討が必要であろう。

富沢遺跡では約2万年前の埋没林と石器などが発見され、当時の環境と生活を考える上で重要な成果となったが、本遺跡の泥炭層は、これより年代が遡る可能性が高く、異なった年代のデータを比較することが可能になったという点でも、意義が深いであろう。

考察編　－仙台城二の丸跡の考古学的調査－

1. 仙台城の考古学的調査の歴史

(1) 仙台城の概容

仙台城は、本丸、二の丸、三の丸からなり、遺跡登録範囲は、二の丸北側の武家屋敷の一部や三の丸東側の追廻馬場を含め、約10万m²におよぶ。この城郭は、仙台市西部に張り出す青葉山丘陵の東縁辺とその裾にひろがる段丘の上に位置する。その地形は、広瀬川の形成した3面の河岸段丘がいく筋もの沢で開析され、複雑である。

本丸は、標高115～140mの青葉山の高位段丘面にあり、東の崖下を広瀬川が流れ、南には深さ90m程の竜の口渓谷がのびている。西には、標高120mを越す青葉山丘陵がひろがり、天然の要害となっている。二の丸は、本丸の北西、約60m下がった標高61～78mの中位段丘にある。三の丸は、さらに一段低い段丘面に位置する。青葉山を背にした防御性の優れた城郭である。

仙台城の東には、仙台平野がひろがり、ほぼ中央を流れる広瀬川の流域には、古代の郡山官衙遺跡、陸奥国分寺跡、国分尼寺跡などがある。さらに北方、20kmほど離れて平野の北辺には多賀城市浮島、市川に国府多賀城跡、その附属寺院跡などがみられる。周辺には、岩切城や新田遺跡のような中世城館跡も遺され、古代から中世、そして、江戸時代へと都市的景観が一貫して保たれていた集住地域、文化拠点といえる。また、奥州街道に沿った交通の要衝でもある。

本丸は、慶長5（1600）年に伊達政宗によって築城が開始され、慶長15年には大広間が竣工し、その完成をみる。本丸は、東西135間（245m）、南北147間（267m）の広がりがあり、大広間を中心に、御書院、懸造の眺瀛閣、良櫓、巽櫓など多数の建物群が設けられた。

そして、二代藩主忠宗は、寛永15（1638）年に幕府に本丸下の「屋敷構作事」を願いでてその許可をえ、二の丸造営に着手する。ほぼ同じ頃、三の丸にも多数の蔵が造営され、御蔵屋敷が設けられる。二の丸は、17世紀中頃には北側にひろがる江戸時代初期の五郎八姫の「西屋敷」を整地し、その敷地を拡大し、元禄年間に最も整備された様相をみせる。その後、火災、地震などによって、造成、改修が繰り返されるが、その主要構造は、幕末まで大きく変化しない。

これらの二の丸の建物は、明治15年に火災で大部分が失われた。さらに、昭和20年には、明治15年の火災を免れ、最後まで残っていた桃山様式を伝える大手門が戦災で炎上、消滅した。

(2) 仙台城調査の歴史

このような仙台城跡については、正保3、4（1645、6）年に作成された「奥州仙台城絵図」（斎藤報恩会蔵）をはじめとして、5つの絵図が残されており、城郭の構造とその変遷を知る

ことができる。城内の基本的建物配置については、これらの絵図が極めて有効な手掛かりである。これらの絵図をもとに、佐藤巧東北大学名誉教授によって精度の高い仙台城復原図が作成されている（仙台市教育委員会編1991）。二の丸の考古学調査には欠かせない重要な資料となっている。しかし、仙台城の大部分の建物については、正確な建物構造、位置、その機能、そして建物配置の変遷を、絵図と記録文書の調査によって復元、再構成するのには限界がある。的確な発掘調査による遺跡構造、その変遷の把握が欠かせない重要な作業といえる。

仙台城において考古学的調査が本格的に開始されたのは、比較的最近のことである。昭和43（1968）年から、東北大学文系四学部と附属図書館の川内地区移転が進められ、その移転にあたって仙台市教育委員会が施設建造予定地の小規模な調査を行っている。ことに、文系厚生施設建設予定地において、焼土層のひろがりの下から江戸時代の溝跡を10m以上にわたって検出した。また、瓦などの遺物が多数出土することを確認している。さらに、昭和53（1978）年には、川内教養部のプール脇排水施設工事の際、東北大学文学部考古学研究室によって芹沢長介教授の指導のもとに、発掘調査が行われ、武家屋敷の井戸跡などの生活遺構が発見された。

これらの調査で仙台城二の丸跡には江戸時代の建物、井戸、水路、溝、庭園跡などの遺構が、比較的良好な保存状態で遺されていることが予想されるにいたった。

昭和48（1973）年に、仙台城の東南、経ヶ峯にある伊達政宗の靈廟である瑞鳳殿の再建が計画され、それに伴って墓所の学術発掘が実施された（伊東信雄編1979）。瑞鳳殿は、江戸時代初期の桃山様式を伝える優れた建造物であり、国宝に指定されていたが、昭和20年に焼失した。墓室も地下の亜炭層の乱掘によって地盤沈下を引き起こし、破壊寸前になるとみられ、保存処置の必要性が指摘され、靈廟の再建への希望も強まっていた。再建工事にあたって、伊東信雄東北大学名誉教授が指導にあたり、入念な計画をたて、調査が行われた。

この調査によって、政宗の墓室の構造、埋葬の方法、状態、武具や、蒔絵筆箱、筆、鉛筆、日時計、ブローチといった政宗の愛用品などの副葬品、遺骨の所見が明らかにされ、考古学、人類学、文化史上の重要な学術資料となり、その成果が公表された。その後、二代忠宗の靈廟、感仙殿、三代綱宗の靈廟である善応殿の調査も同様に進められた（伊東信雄編1985）。歴史的に重要な三代の藩主について、世界的にも稀有な学術調査がなされた意義は大きく、江戸時代の考古学調査の重要性が認識され、積極的な評価をうることができたといえる。

昭和53（1978）年、東北大学では二の丸地区にある図書館の増設計画が立てられ、それに伴って二の丸西北部における広域調査の必要性が生じた。当初計画でも2000m²をこす調査地には、伊達政宗の長女五郎八姫の西屋敷跡と二の丸拡張部（中奥）が重なりあっている可能性が強く、大規模かつ高い熟練度を要する調査が必要と予想された。本学文学部考古学研究室によってその調査体制、調査計画の具体的な検討が行われ、事務局への説明がなされた。

昭和58年、二の丸西地区における文学部、経済学部合同研究棟の建設にあたって、先の文学部の調査体制の検討にもとづいて、埋蔵文化財調査委員会が設けられ、石田名香雄委員長のもとにはじめて構内遺跡の発掘調査が開始された。この委員会では、当初、構内遺跡の考古学的調査についての計画立案、調査、検出遺構、調査内容の評価、検出重要遺構の保存、出土遺物、調査資料の整理、分析作業、関連資料の収集と比較検討、そして、報告書作成、出土資料の公開と活用といった複雑な埋蔵文化財調査の流れに十分に対処できるシステムを検討し、その構築方法と考え方を明らかにし、慎重に調査に取り組んでいった。これまでに二の丸で15地点で比較的規模の大きい調査を行い、全調査数は、大、小取り合わせて100件を超す。

昭和58（1983）年に調査された二の丸跡第2地点では、政庁の中枢部である小広間の北西隅の廊下と小庭石敷が検出され、建物遺構がきわめて保存良く埋没していることが確認された。

昭和60（1985）年には、二の丸西南部第6地点の津田記念館の建設にともなう調査により、二の丸の西側を区画する大規模な石組み溝が検出され、城郭の周辺の実態が明らかにされた。

この年、懸案となっていた図書館増設に伴う事前調査の試掘が実施された。翌、昭和61（1986）年、二の丸北西部の本調査が行われ、1700m²におよぶ範囲が精査された。この調査で7枚の文化層が整地土を挟んで複雑に重なりあって検出された。ことに上層では二の丸拡張時の門柱、土居梁などの遺構、建物群が検出された。また、下層からは西屋敷の長大な建物群、複雑にのびる苑池遺構が検出され、江戸初期の貴重な武家屋敷庭園と屋敷遺構が明らかにされた。また、木簡が出土し、生活物資の動きについて知ることができた。

昭和63（1988）年に、構内遺跡の調査量が増大するにつれ、東北大学埋蔵文化財調査委員会のもとに東北大学埋蔵文化財調査室が設けられ、調査体制の充実が図られた。

平成2（1990）年、埋蔵文化財調査室は、法学部と文学部の合同研究棟を建設するにあたって、その事前調査を実施し、上層では二の丸東北にある台所御門西側の一画を明らかにした。下層では伊達宗泰の屋敷跡、西屋敷との境界となる東西堀を検出し、豊富な遺物が出土した。

昭和58年には、仙台市立博物館の改築にあたり、三の丸跡の調査が仙台市教育委員会により行われ、三の丸が寛永年間から藩の米蔵所として機能し続けたことを裏づけた（仙台市教育委員会 1985）。それとともに、この地に当初、政宗の別荘、茶室と推定される建物群があったことが、遺構と遺物から明らかになった。それ以後、大年寺惣門、北目城跡、養種園、南小泉遺跡の武家屋敷跡など、市内の近世遺跡があいついで調査された。また、宮城県教育委員会によって、茂庭綱元の屋敷、五郎八姫の仮御殿であった仙台市下愛子の西館跡（宮城県教育委員会 1987）、茂庭氏の居城となった松山町上野館跡（宮城県教育委員会 1993）などの調査が行われた。このような調査によって、近世の仙台藩に関する考古学資料が次第に蓄積されるにいたった。

(3) 仙台城跡の考古学的調査の結果

これまでの仙台城とその関連遺跡の調査で、次のような点が明らかになってきた。

- ① 東北大大学文系キャンパスに、二の丸跡と御勘定所跡など、仙台藩政庁とその主要施設の遺構が高い密度で、複雑に重なり合って遺されている。
- ② 東北大大学川内北キャンパスには、上層階層の侍屋敷跡が地下に遺されている。
- ③ 二の丸地区は、表門である詰門から玄関、小広間、書院、御寝所など、仙台城中枢施設の大部分が極めて良い保存状態で埋没している可能性が高い。
- ④ 度重なる火災や大規模な改修・拡張工事で、整地、盛土作業が繰り返され、遺構が厚い整地土に覆われ、また短期間で埋没しているため、その保存状態が著しく良好である。
- ⑤ 二の丸、侍屋敷跡の多くの建物群跡で、整地土、包含層、生活面が層位的に重なり合っており、遺構、遺物の時間的な変遷が明確に捉えられる。
- ⑥ 段丘上部から豊富な湧水があり、地下水位が比較的高く、漆器、木製品、木簡、植物など有機質資料がよく保存され、多彩な生活資料を精緻な調査によってうことができる。
- ⑦ 陶磁器、瓦などについても土壤に廃棄された一括資料が豊富に遺され、近世の物資の流通、消費形態を明らかにできる貴重な基準資料が多数確保される。
- ⑧ 遺構から出土する動物の骨、植物の種子など、豊富な自然遺物の入念な分析によって、仙台藩主周辺での生活様式を追求することのできる新たな手掛かりがえられるようになった。

以上、考古学的調査によって、従来、文書史料と伝世文化財の研究によって再構成されてきた仙台城の歴史はより豊かな膨らみをもつこととなった。仙台城二の丸跡では、東北大大学文系四学部、附属図書館の移転、その後の増、改築で大規模な破壊が行われたにも拘わらず、なお、二の丸建物群が大規模に、かつ良好な保存状態で地下に埋没していることが確実になってきた。今後、この二の丸地区を早急に組織的かつ慎重に調査し、その基本的な構造を確認し、貴重な埋蔵文化財として保存の方策を構築しておく必要があると考える。

《引用・参考文献》

- 伊東信雄編 1979 『瑞鳳殿 伊達政宗の墓とその遺品』
伊東信雄編 1985 『感仙殿 伊達忠宗 善応殿 伊達綱宗 の墓とその遺品』
仙台市教育委員会 1985 『仙台城三ノ丸跡』 仙台市文化財調査報告書第76集
仙台市教育委員会編 1991 『甦る遺産 仙台城 現代複合図』
宮城県教育委員会 1987 『宮城町西館跡、利府町郷楽・天神台遺跡』
宮城県文化財調査報告書第123集
宮城県教育委員会 1993 『上野館跡』 宮城県文化財調査報告書第156集

2. 考古学的調査から見た仙台城二の丸地区の変遷

仙台城二の丸地区の考古学的調査によって検出された遺構と、絵図などの記録との対比については、これまで各報告の際に検討してきた。ここでは、これまでの調査成果全体を、まとめて検討してみたい。

(1) 文献記録等に見える二の丸地区の変遷

最初に、文献記録等に見える二の丸地区の変遷と、これまでの調査地点の時期区分との対応関係を整理しておきたい。二の丸地区の土地利用や建物配置に大きな変化をもたらしたと考えられる事柄を年表風に抜き出せば、以下のようになる。

慶長5年～慶長末年頃（1600年～1614年頃）

伊達宗泰（初代藩主伊達政宗の四男）の屋敷の造営

元和2年（1616年） 地震により本丸櫓・石垣崩壊

元和6年（1620年） 五郎八姫（政宗の長女）の帰仙に伴う西屋敷の造営

寛永15年（1638年） 二代藩主伊達忠宗による二の丸の造営

寛文元年（1661年） 五郎八姫死去、旧西屋敷は天麟院様元御屋敷と呼ばれるようになる

元禄年間（1688～1700年） 二の丸改造、旧西屋敷の範囲に中奥が拡大

文化元年（1804年） 落雷による火災のため二の丸全焼・再建

明治2年（1869年） 版籍奉還

明治4年（1871年） 廃藩置県

明治15年（1882年） 火災による旧二の丸建物群全焼

これら以外にも、地震などの天災による被害と、その復旧の記事があるが、二の丸全体に影響を及ぼすほどのものではないと思われるため、ここでは割愛した。

これまでの調査で、江戸時代を通じた変遷が明確になっているのは、第5地点（年報6・7）と第9地点（年報8）の調査である。この両地点の、出土遺物の年代や土地利用の変化をもとにした時期区分を、文献などで知られる二の丸地区の変遷に対応させたのが、図43である。第5地点・第9地点以外の調査地点でも、個々の遺構や、特定の部分については、大まかな時期が明らかになっているものがあり、それについてには、必要に応じて触れていくこととする。

(2) 二の丸造営以前の遺構

二の丸造営以前の遺構が発見されている調査地点としては、第4地点（年報5）、第5地点（年報6・7）、第9地点（年報8）があげられる。また、第2地点（年報1）でも、二の丸期

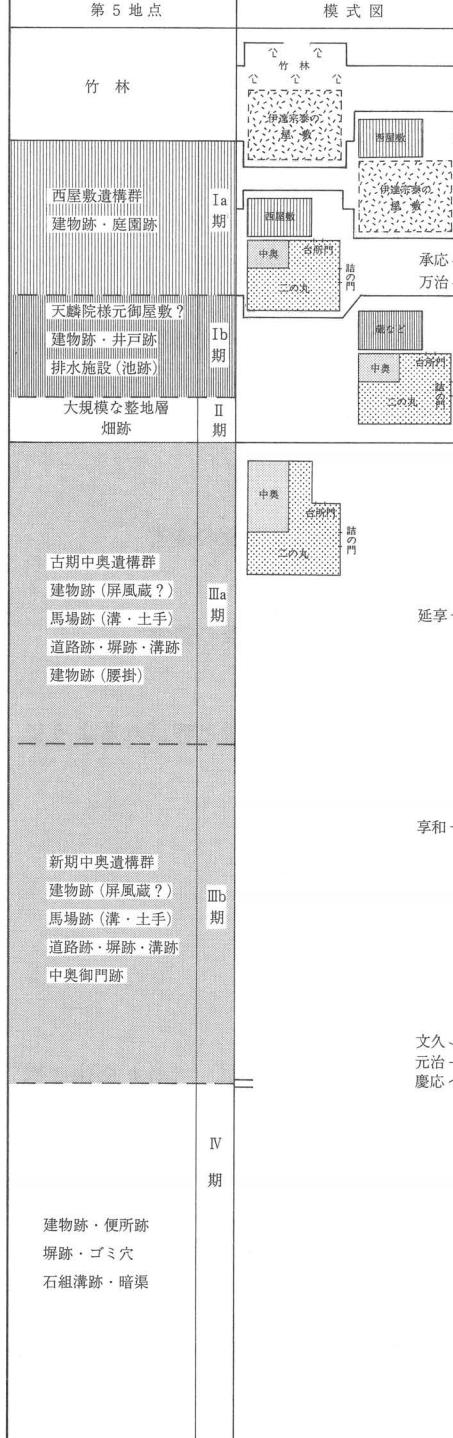
第5地点	模式図	年号	仙台城関連年表	第9地点
竹林				
Ia期 西屋敷遺構群 建物跡・庭園跡		慶長 元和	1600 仙台城本丸築城開始 1616 地震 1620 五郎八姫帰仙、西屋敷造営	I期 宗泰屋敷遺構群 建物跡・溝跡 畠跡
Ib期 天麟院様元御屋敷? 建物跡・井戸跡 排水施設(池跡)		寛永 正保 承応 万治	1638 二の丸造営開始 1661 五郎八姫死去、旧西屋敷は天麟院様元御屋敷と呼ばれるようになる	II期
II期 大規模な整地層 畠跡		寛文 延宝 天和 貞享 元禄	1688 元禄年間の二の丸大改造 1700	
IIIa期 古期中奥遺構群 建物跡(屏風蔵?) 馬場跡(溝・土手) 道路跡・堀跡・溝跡 建物跡(腰掛)		宝永 正徳 享保 元文 寛保 寛延 延享 享和	1804 落雷により二の丸全焼	IV期 中期二の丸遺構群 池跡・溝跡・ゴミ穴
IIIb期 新期中奥遺構群 建物跡(屏風蔵?) 馬場跡(溝・土手) 道路跡・堀跡・溝跡 中奥御門跡		文化 文政 天保 弘化 嘉永 安政 文久 元治 慶応 明治 昭和	1868 明治維新 1869 版籍奉還に伴い二の丸に勤政府設置 1871 廃藩置県に伴い東北鎮台設置 1882 二の丸殿舎焼失	V期 新期二の丸遺構群 池跡・溝跡・井戸跡
IV期 建物跡・便所跡 堀跡・ゴミ穴 石組溝跡・暗渠				VI期 第二師団遺構群 建物跡・便所跡 堀跡・暗渠・溝跡 排水レンガ跡

図43 仙台城二の丸地区変遷模式図

Fig. 43 Generalized figure of transition at Ninomaru area
Ninomaru i.e. the second citadel of Sendai Castle

の礎石建物跡の下層から、溝が1条検出されているが、年代が限定できず、周辺でこの溝以外の遺構が検出されていないため、詳細な検討は難しい。第5地点については、年報7において検討したので、詳しくは取り上げず、最後に簡単に触れることとし、ここでは第9地点の下層遺構を中心に検討してみたい。第9地点では、二の丸造営時と考えられる大規模な整地層の下から、Ia期・Ib期・II期の3時期の遺構が発見されている（図44・45）。まず、これらを検討してみたい。

① 伊達宗泰の屋敷と第9地点下層遺構の関係

寛永15年（1638年）の二の丸造営以前には、その場所には伊達政宗の四男である伊達宗泰の屋敷が置かれていたことが、『東奥老士夜話』の中に見える。『東奥老士夜話』は、成立年代や作者が不明の文献であるが、伊達政宗時代の仙台城や各種施設の造営の経過や由来などが、その中に記されている。関係する部分を抜き出せば、以下の通りとなる。

御二の丸御普請之事

一貞山様御代には。御本丸に被成御座候故。御二の丸には。伊達三河守殿御やしき御座候義山様御二の丸御取立之刻。三河守殿廣間を御用被成。只今の御廣間は。則三河守殿廣間の由。堀江傳七と申者物語承候。傳七は七十六七にて。十ヶ年已然病死仕候。

貞山様とは初代藩主伊達政宗、義山様とは二代藩主伊達忠宗、三河守とは伊達宗泰のことである。堀江傳七なる人物は、二の丸造営時の御作事方小役人に名が有り（坂田啓編1995）、『東奥老士夜話』のこの記述に関しては、事情を良く知る立場にあったとは言えるであろう。伊達宗泰の屋敷については、それを描いた絵図は知られておらず、この記載が唯一の資料である。

伊達宗泰は、伊達政宗の四男として慶長7年（1602年）に伏見屋形にて誕生し、童名を愛松丸と称した。翌慶長8年（1603年）に、玉造郡岩出山城主となる。元服は慶長19年（1614年）。寛永15年（1638年）に37歳で死去している。

岩出山伊達氏家譜（世臣家譜卷一）には、次のように記されている。

宗泰年甫二歳、慶長八年十一月賜玉造郡岩出山城、養于公室者有年、及長寛永三年在江戸邸、列諸侯、以五万石之分、仕將軍幕下、後罷仕還国列一門、仕当家、族譜曰、幕府不賜采地、貞山公請罷仕還国、子孫列一門云

すなわち、寛永3年（1623年）以降、宗泰は江戸に常駐し、幕府の御用を勤め、大名参賀などにも列席している。知行地は賜っていないが、大名の資格で幕府に出仕し、取り扱いも大名並となっていた。政宗としてはやがて采地を与えられ、正式の大名に取立られることを期待していた（平重道編1974）。このあたりの事情は、寛永6年（1629年）3月20日の政宗の書状に、宗泰が江戸詰めで召使われるため、幕府から客分の士に与える知行を賜るよう、内々に交渉しているが埒があかないとの記載があることからも伺える（平重道編1973）。

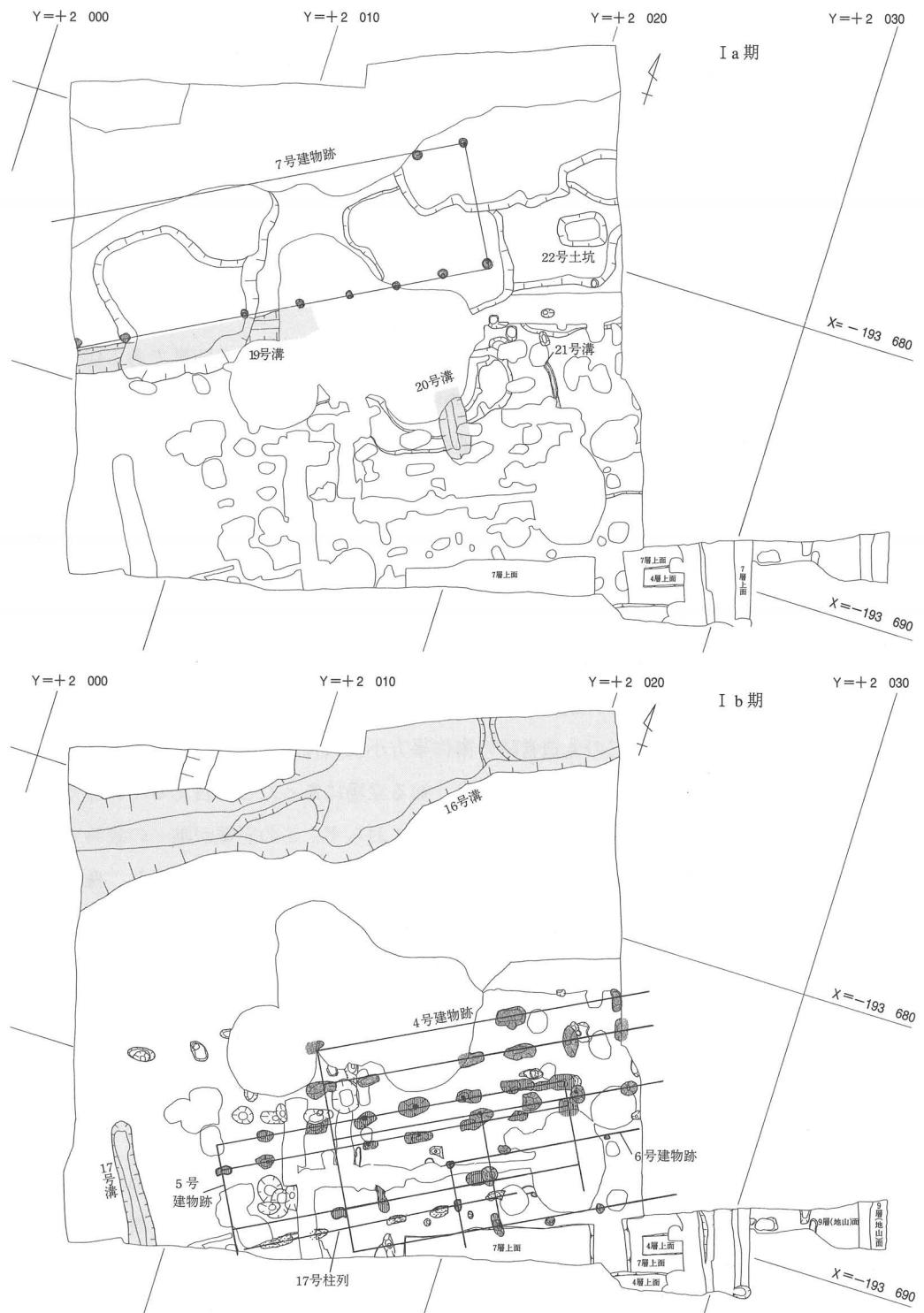


図44 仙台城二の丸跡第9地点I期の遺構配置図

Fig. 44 Distribution of features at NM9 (phase I) NM9 i.e. Location 9 of *Ninomaru* (the second citadel of Sendai Castle)

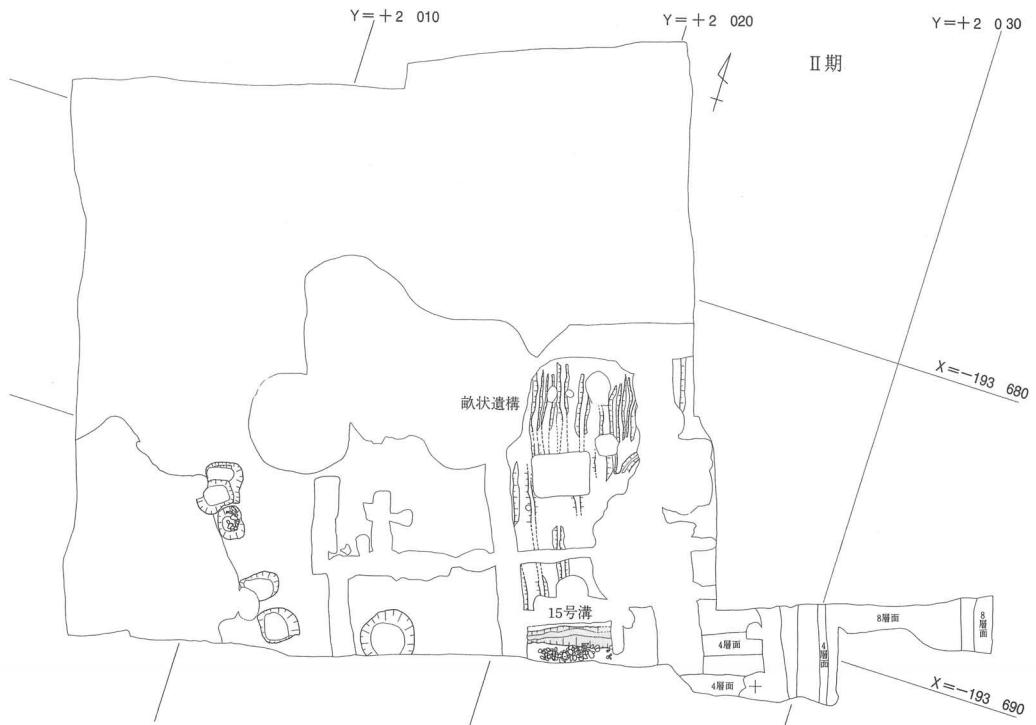


図45 仙台城二の丸跡第9地点II期の遺構配置図

Fig. 45 Distribution of features at NM9 (phase II)

さて、第9地点で検出された遺構群を考えると、III期の遺構は、後に詳述するが、元禄年間の拡張以前の二の丸の範囲内に入るため、二の丸築造以前には宗泰の屋敷地であった可能性が高い。そこでまず、III期以前のIa期・Ib期・II期の年代について検討したい。

Ia期・Ib期の遺構群を埋めている埋土や整地層出土の遺物は、Ia期を埋めるものには織部が含まれず、Ib期では織部が入るという違いがあり、後者の方が若干新しい様相を示すが、いずれも17世紀初頭に限定される。これらの出土遺物の様相から、Ia期の開始時期が、慶長5年（1600年）の本丸築造開始から大きく下ることは考え難く、おおよそ同じ頃に、この地区的屋敷の造営がなされたものと考えておきたい。II期の遺構は、寛永15年（1638年）の二の丸造営に伴う大規模な整地層によって埋められており、その下限は確実である。この間のIa期からIb期、Ib期からII期への移り変わりが、何時であったかについては、出土遺物から限定することは困難である。次に詳述するが、隣接する第4地点の状況を合わせて考えると、Ib期の調査区北端で検出された16号溝は、北側に造られた西屋敷と宗泰の屋敷を区画する溝と考えられることから、この溝が造られる以前のIa期は、少なくとも元和6年（1620年）までは下らないと考えられる。しかし、これ以上、各期の年代を限定することは困難である。宗泰が江戸に上がる寛永3年以前に宗泰の屋敷があり、寛永3年以降がII期に相当する可能性も

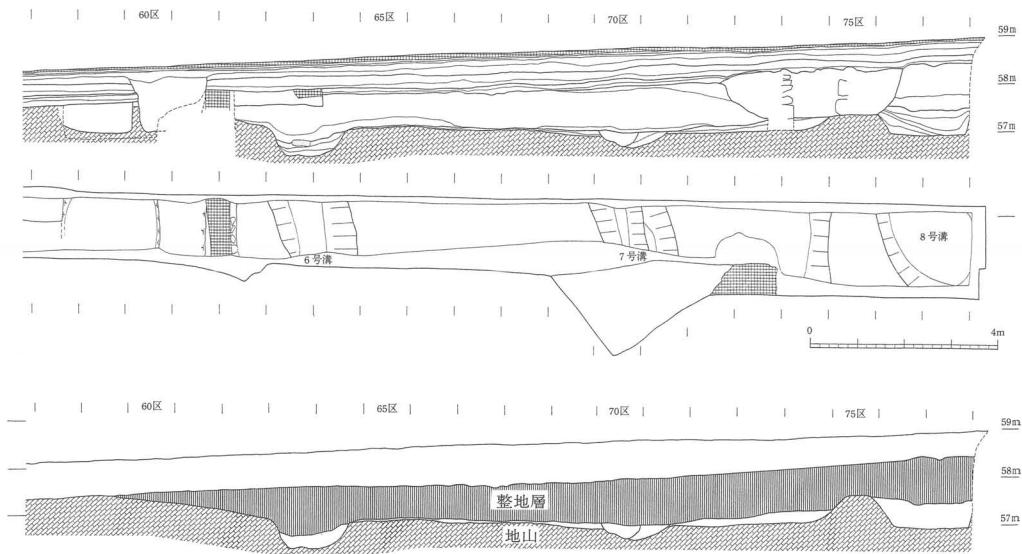


図46 仙台城二の丸跡第4地点下層検出遺構

Fig. 46 Distribution of features at NM4 (earlier phase) NM4 i.e. Location 4 of Ninomaru (the second citadel of Sendai Castle)

考えられるが確実ではなく、その辺りの詳細な状況は不明とせざるを得ない。また、政宗が仙台城本丸の築造を開始した時期は、宗泰の生誕する前であり、もしその頃に施設が造られていた場合には、宗泰の屋敷以外の施設であったことを想定しなければならない。したがって、宗泰の屋敷としてこの場所が使われていたとしても、Ⅰa期～Ⅱ期の全ての期間が、宗泰の屋敷であったとは限らない。しかしながら、宗泰の上記のような立場から、仙台城の近辺に屋敷があった可能性は高く、いずれかの時期に宗泰の屋敷として、第9地点の遺構群が使用されていたものと推定される。したがって、以下では便宜的に、Ⅰ期・Ⅱ期の遺構群を、「伊達宗泰の屋敷」と呼称する。

② 第9地点と周辺の調査地点との関係

この第9地点Ⅰ期・Ⅱ期の遺構を考えるにあたっては、隣接する第4地点の調査成果が重要である。隣接する第4地点でも、二の丸造営時と考えられる大規模な整地層の下から遺構が発見されている（図46）。第4地点の下層遺構としては、調査区南端に8号溝があり、その北側に7号溝・6号溝がほぼ平行して存在する。この6号溝と7号溝を含む幅15m程の範囲は、浅い堀状になっている。2本の溝にはさまれた部分は、低湿な状況であったと推定され、6・7号溝は、浅い堀状の掘り込みの中で、排水を目的とした溝の可能性が考えられる。この浅い堀状の部分と、その南側に平行する8号溝との関係については、ちょうどこの部分が、明治時代の石組溝によって壊されており、時期差があるのか、あるいは同時存在かは、直接は不明である。年報7では、同時存在として検討していたが、再検討の結果、時間差がある可能性が考え

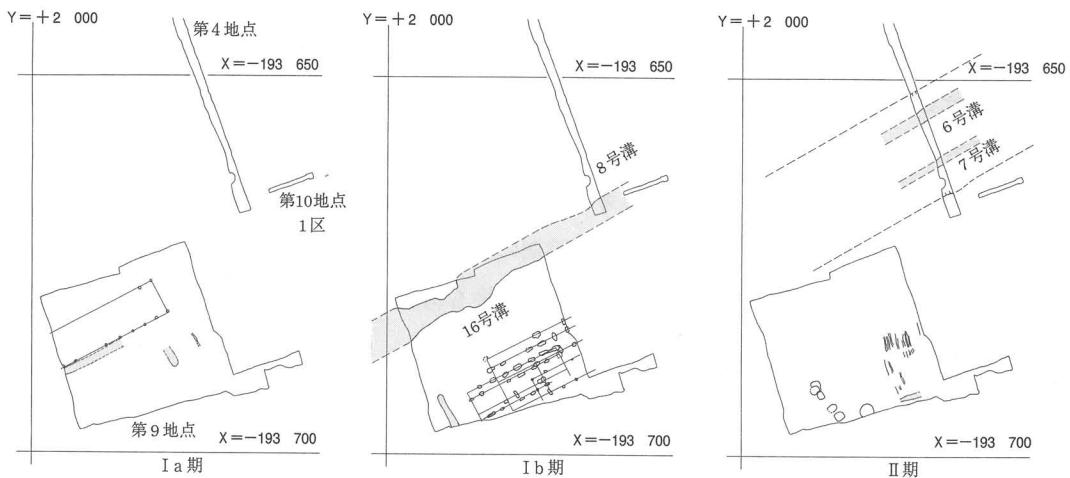


図47 仙台城二の丸跡第9地点周辺の二の丸造営以前の遺構変遷模式図

Fig. 47 Outline of transition of features around NM9 which are dated before 1638

られる。すなわち、二の丸造営時の整地がなされた段階で、8号溝がほとんど埋まっているのに対して、浅い堀状の部分は、あまり埋まっていないことから、8号溝から浅い堀状の部分（6・7号溝）という前後関係が想定できる。また、位置関係から見て、第9地点の16号溝が、第4地点の8号溝に続くと考えられる。第9地点の16号溝は、ある程度堆積が進んだ段階で、7a層の整地がなされ、その上面にII期の遺構が展開する。第4地点8号溝の埋土の最上層としたものは、この7a層に類似し、一連の整地層であると考えて差し支えない。従って、第4地点の浅い堀状の部分（6・7号溝）は、第9地点のII期に相当すると考えられる。したがつて、第9地点とその周辺の遺構の関係は、図47のように整理できる。

Ia期は、第9地点で7号建物跡が検出されているだけである。この7号建物跡より北側の様相は明確ではないが、次に述べるように、第9地点より北側は、五郎八姫の西屋敷が置かれた範囲と考えられることから、これより北側に建物が展開する可能性は低いものと推定される。宗泰の屋敷の中でも、端の方にあたるものであろう。

Ib期は、前述のように、第9地点の16号溝が第4地点の8号溝につながると考えられる。この16号溝（第4地点8号溝）の東側の推定位置には、本年報で報告した第10地点1A区がある。この1A区では、工事で破壊される深さまでしか調査を行っていないため、二の丸期以前の遺構は検出されていない。しかし、東端の南壁際でごく小規模な深掘り調査を行っており、二の丸造営時の整地層の下から焼土が検出されている。これより下は調査をしていないため、不明な点が多いが、16号溝がここでは検出されない可能性もある。しかし、16号溝自体が、両岸とも直線的に伸びず、複雑に屈曲していることから、第10地点の1A区深掘り部分にはかかってこないだけかも知れない。年報7で検討したが、この16号溝、あるいは次のII期の浅い堀状

の部分は、北側の沢との位置関係から、西屋敷の南端にあたる位置に、おおよそ対応すると想定される。そのため16号溝は、宗泰の屋敷の北側を区画する溝と考えられる。このIb期の段階が、元和6年の西屋敷造営後になるかどうかは確実ではなく、北側に西屋敷が成立していたかどうかは不明である。いずれにしても、宗泰の屋敷の北側を画し、西屋敷が成立していれば、それとの間を区画するものであったと考えられる。第9地点では、16号溝の南側には、掘立柱建物跡や掘立柱列が存在し、少なくとも4時期の変遷がとらえられる。これらの建物などの西側には17号溝があり、建物に付随する施設の可能性もあるが、どの建物に伴うものであるかは明らかではない。

II期では、Ib期より北側にすこし位置を変えて、浅い堀状の施設が造られ、その底面に6号溝・7号溝が平行して造られる。このII期は寛永15年の二の丸造営時の整地で埋められているため、この段階には北側に西屋敷が存在したことは確実であろう。したがって、この浅い堀状の施設は、宗泰の屋敷と西屋敷を区画する施設であると考えられる。堀状の部分の南側は、整地が行われ、第9地点ではその上面で、ピットや畝状の遺構が検出されている。Ib期とは、この場所の使われ方が大きく変わっている。宗泰の屋敷全体で、このような状況であったかどうかは判らない。また畝状の遺構は、その形態から、畑の跡と考えた。同様の遺構は、第5地点において、元禄年間の二の丸改造時の大規模な整地の途中で検出されている。この第5地点の例も含めて、何故、このような場所で畑が作られるのか、うまく説明できない。あるいは畑ではなく、別の性格であるのかも知れない。

図48には、これまでに二の丸以前の遺構が検出されている各地点の調査区をまとめて、現地形上に記入した。第9地点・第4地点については、Ib期の遺構である。第5地点については、五郎八姫の西屋敷時代に相当すると考えられるIa期の様相を記入した。必ずしも、この両者が同時に存在したかどうかは不明であるが、伊達宗泰の屋敷と西屋敷の関係を明確にするための便宜的なものである。西屋敷の範囲は、年報7で検討した結果をもとに推定したものである。

③ 第9地点 I期の建物跡

伊達宗泰の屋敷の範囲については、北側の西屋敷との境は判明したが、それ以外の範囲を検討する材料がなく、どれくらいの広がりを持っていたのか、現状では不明である。しかし、第9地点のIa期・Ib期で検出された建物跡が、屋敷北側の境に、かなり近い部分であることは間違いない。また、これらの建物跡は、いずれも掘立柱建物である。第5地点で検出された西屋敷の建物や、第2地点の二の丸中心部の建物跡は、いずれも礎石建物である。後に改めて検討するが、江戸時代の初頭から幕末に至るまで、主要な建物は礎石建物であった可能性が高い。したがって、第9地点Ia期・Ib期の建物跡は、宗泰の屋敷内でも中心的な施設ではなく、周辺の付属的な建物であった可能性を考えておきたい。

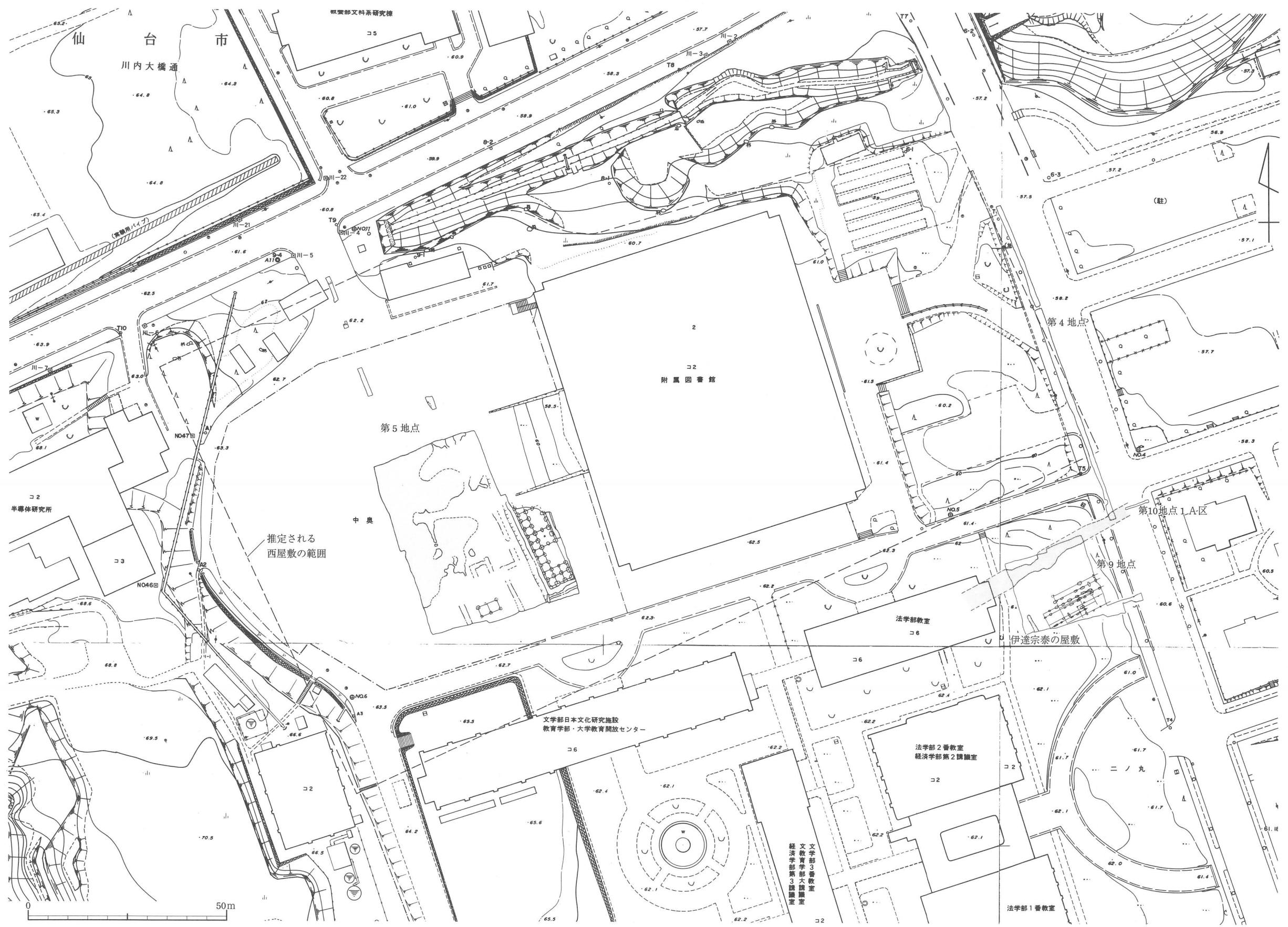


図48 伊達宗泰の屋敷と西屋敷の遺構

Fig. 48 Features estimated to be the residence of Muneyasu and Nishiyashiki, the residence of Iroha-hime

(3) 二の丸期の遺構と絵図との対比

これまでの調査で発見された二の丸期の遺構と、絵図に見える施設との対比については、年報7において、それまでの調査結果に基づいて検討を加えた。ここで、あらためてその概要を記すと以下の通りとなる。

第5地点で発見された門跡は、二の丸中奥北側の門に相当し、門跡の東側で検出された多量の柱穴は、門から東に伸び、中奥北側を画する塀跡と、その脇に造られた「腰掛」に相当する。門跡から北側は、道路や「中奥馬場」を経て、二の丸北側の堀に至る区域にあたる（付図1参照）。この第5地点発見の門跡を基準にして、第2地点・第3地点の検出遺構を再検討したところ、第2地点は「小広間」の西側の、「伺公之間」と「時斗之間」にはさまれた「御櫻通」に相当し、第3地点は「元御書院」から、その南側の部分にあたると推定された（図51）。これまでの調査で検出された二の丸期の建物は、ほぼN-25度-Wの方向を示すことが判明しており、二の丸造営の基準がこの方向であると想定して、検討した結果である。以下の検討でも同様に、N-25度-Wの地割りと考えて検討する。

① 二の丸建物の1間の寸法について

二の丸を描いた絵図の中には、1間ごとの方眼を描き、その上に建物などの施設を描いているものがあり、これを利用すると、距離を算出することができる。その場合、1間の長さが、どれくらいであるかが問題となる。昭和20年（1945年）7月の仙台空襲まで残っていた大手門では、戦前に実測が行われており、1間=6尺5寸であった（佐藤巧1967）。これまでの調査では、1間を6尺5寸と見た方が遺構と良く対応するため、この寸法で検討してきた。しかしながら、1間が6尺5寸あるいは6尺3寸のいずれかではないかとの見解もある（年報1、p.132）。実際、年報7において、1間=6尺5寸と仮定して絵図と対比させた結果、幾分かの誤差が出ている。そこで、年報7で検討した、第5地点と第2地点の遺構間の距離と、絵図から計算した距離との比較を、改めて行ってみたい。第5地点の中奥北側の塀が門跡西端にあたる位置（図49点A）と、第2地点の「小広間」の周囲をめぐる廊下の西側の北端（図49点B）との間の距離を比較する。前回の検討では、1間の寸法を6尺5寸（197cm）とした比較だけであったので、ここでは6尺3寸（191cm）の場合もあわせて比べてみたい。なお、実寸の計測は、二の丸の地割りがN-25度-Wであるとして、縮尺1/500の図上で計測したものである。

遺構間実寸	南北	208.2m	東西	116.0m	
文化元年図	南北	109間	208.19m	東西 63間	120.33m (1間=6尺3寸)
文化元年図	南北	109間	214.73m	東西 63間	124.11m (1間=6尺5寸)
享和二年図	南北	108.5間	207.235m	東西 64間	122.24m (1間=6尺3寸)
享和二年図	南北	108.5間	213.745m	東西 64間	126.08m (1間=6尺5寸)

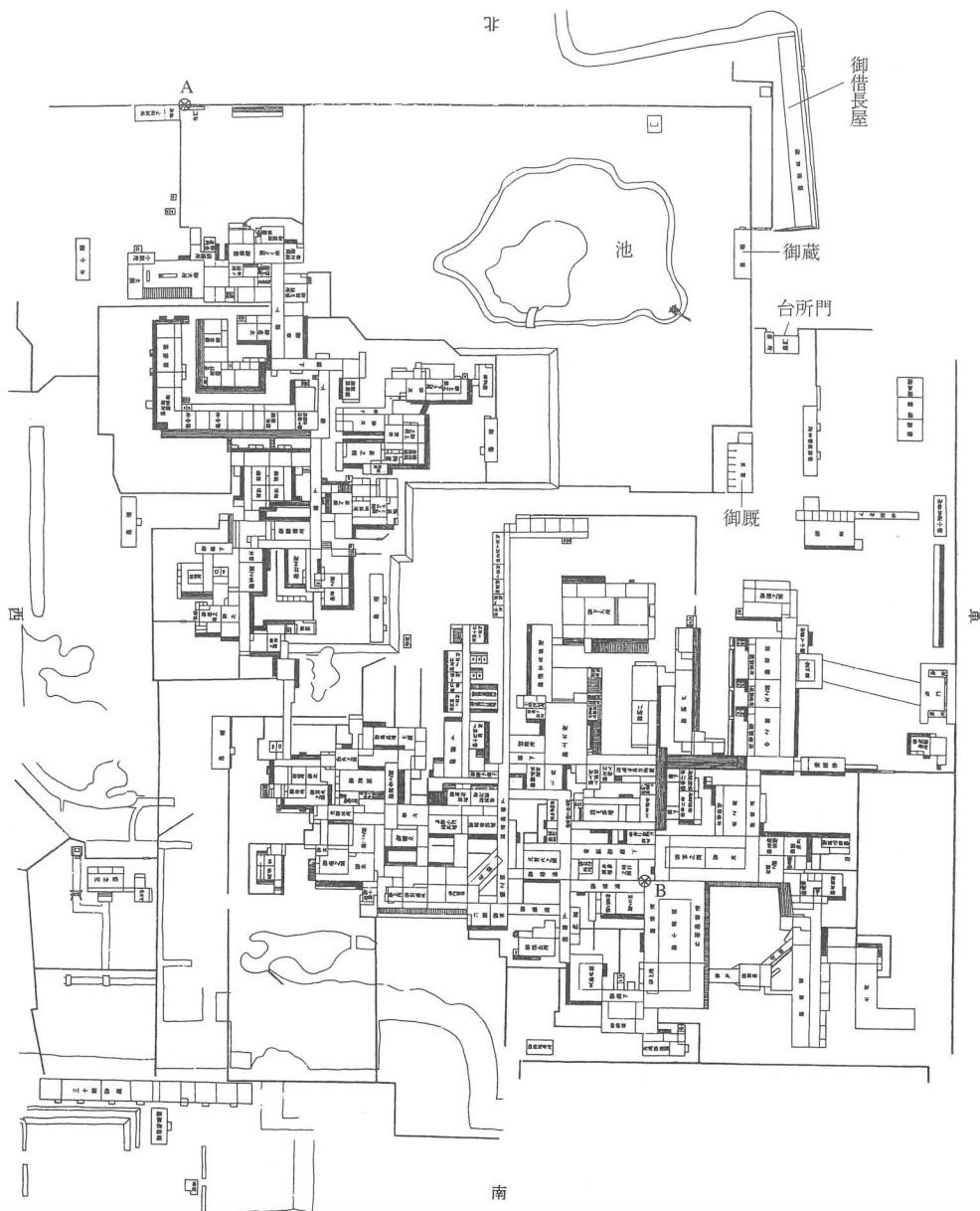


図49 享和二年之御家作御絵図写（『近世武士住宅』より、一部改変）
Fig. 49 A transcript of construction plan for *Ninomaru* (originally drawn in 1802)

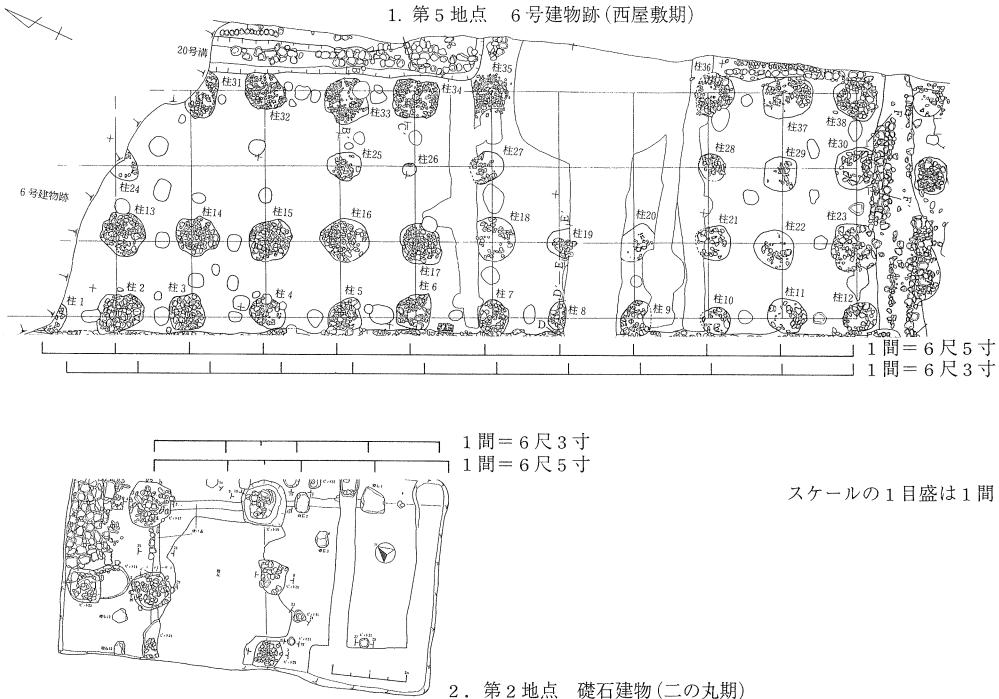


図50 仙台城二の丸地区検出礎石建物の柱間間隔

Fig. 50 Spaces of pillars of the building constructed on foundation stones found at *Ninomaru*

6尺5寸と見た場合、最大で5間ほどの誤差がでる。6尺3寸では、最大で3間ほどの誤差でおさまる。特に文化元年図の場合、南北ではほとんど一致し、東西で2間ほどの違いでおさまっている。これを見る限りでは、1間を6尺3寸と考えた方が良く対応する。

一方、実際に調査で検出された遺構の柱間の寸法は、1間を6尺5寸と考えた方が良く対応する。元和6年に造営された西屋敷の時期と考えられる、第5地点 I a 期の6号建物跡では、西側桁行で11間分の礎石据え方が検出されている。図50に示したように、1間を6尺3寸とするとずれが大きくなりすぎ、1間 = 6尺5寸であることはほぼ間違いない。ただし、この建物は二の丸造営以前の建物であるため、二の丸期とは異なっている可能性も全くないとは言い切れない。二の丸期の建物跡では、塀や門跡は、柱間間隔が1間ごとでは無い場合が多く、検討が難しい。また、掘立柱建物の場合、柱痕跡が明確でないと、正確な検討は困難である。そのため、第2地点で検出された礎石建物跡を検討したい。図50に示したが、6尺3寸ではややずれが有り、6尺5寸とした方が良く対応する。しかし、両者の差は、1間でわずか6cm程度であり、限定された調査区内で検出された遺構群の位置関係だけで確定することは難しい。

このように、6尺3寸とした場合、絵図でのずれはほとんど無くなるが、実際の遺構の柱間寸法とは、あまり合わなくなる。またこの場合、二の丸造営以前と、二の丸期では、柱間寸法

が変化したと考えざるを得なくなる。一方、6尺5寸と考えると、このような問題は無くなるが、逆に絵図とのずれが大きくなる。絵図とのずれは、絵図に記載される際に、微妙なずれが累積した結果と考えられる。現状では、どちらとも決定し難い。以下の検討では、両方の可能性を考慮しながら進めていくこととするが、記述の煩雑さを避けるために、特に記さない場合は、1間を6尺5寸と想定した場合とし、6尺3寸と仮定した場合にのみ、その旨記述する。

なお付図1では、1間=6尺3寸にほぼなるように縮尺した図を使用したが、これは二の丸が6尺3寸を1間としていたと断定したわけではない。絵図のずれが累積した結果と考えた場合、遺構に合わせるために、どの部分でずらして行くべきかの判断が難しいためで、あくまで便宜的な措置である。

また、方眼を描いた絵図の中では、宮城県立図書館所蔵の「文化元年御家造絵図写」(1804年)が、建物の柱配置や、部屋の中の施設まで、一番細かく描かれている。そのため、今後の検討では、この文化元年図を基本的に使用し、必要に応じて、その他の絵図も使うこととする。

② 第10地点検出遺構と絵図との対比

ここでは、前号の年報8で報告した第9地点と、本年報で報告した第10地点について検討する。順序は逆になるが、第2地点に近い場所である第10地点について、まず検討し、次に第9地点について検討を加えることとする。

第2・3地点の絵図との対比をもとに、文化元年図に第10地点2・3・4区の位置を対応させたのが、図51である。第10地点の2区は、「御奉公衆御留置所」と「御奉公衆狭箱置所」の前に東西にのびる2本の廊下に挟まれた部分と、その周辺にあたる。文化元年図では、この2本の平行する施設には名称が書かれていないが、「享和二年之御家作御絵図写」(図49、宮城県立図書館所蔵)では、「廊下」と記されている。

第10地点2区検出の石敷遺構は、2本の廊下に挟まれた、建物のない露地の部分に、ほぼ位置が相当する。ただし、この文化元年図では、2本の廊下の間が、2間半(4.8~4.9m)であるのに対して、石敷遺構の南北の幅は5.7mでほぼ3間である。また、調査区東端で検出された底面に扁平な礫を据えた掘立柱柱穴であるピット2も、2本の廊下の西側で交差する南北廊下の柱の位置から、半間西にずれている。

次に、齊藤報恩会所蔵の「御二丸御家作水抜御絵図」に対応させたのが図52である。この絵図では、文化元年図とは微妙に間数が異なり、第2地点と第3地点の関係では、文化元年図の方が良く対応する。第2地点の位置を基準に合わせると、第10地点2区は、先に見た文化元年図とは、逆に東に半間ずれるところに対応する。この絵図は、名称の通り、二の丸内の排水関係の溝などが描かれている。第10地点2区に対応する部分では、2本の廊下の中央に直交する形で、溝が南北に走っており、これが2区で検出された石組溝に対応すると考えられる。溝の

位置は、絵図の方が東に半間ずれている。絵図ではこの溝は、廊下にはさまれた露地の部分のすぐ北側で、西側に斜めに分岐しているが、検出遺構では、そのような分岐は発見されていない。また、2本の廊下に挟まれる露地の南北の長さは、3間となり、この点は、遺構の実態に良く対応する。

文化元年図と水抜絵図ともに、細かな部分では異なる点も残るが、全体の位置関係としては、良く対応していると考えて良いであろう。文化元年図で建物の柱割付を見ると、必ずしも1間の倍数ではなく、柱間が半間や1間半などになる場合も多い。場所によっては、3間半の距離を4間に割っているような場合もある。絵図と遺構との微妙なずれは、建て替えによって、位置が若干ずれている場合も考え得るが、絵図に記載する際に、微妙に実際とのずれが生じている可能性も考えられる。

3区の壁面で確認された遺構については、平面精査を行っていないので、検討は難しいが、「小広間」の北東にある「御客之間」と「御次」の南側の部分に関わる遺構である可能性が、位置関係からは考えられる。4区で検出された溝状の遺構は、「中之間」の西裏手にある「腰掛」に対応するが（図51）、これも遺構の様相がほとんど明らかでないため、確実ではない。

③ 第9地点Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期の遺構と絵図との対比

第9地点では、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期の遺構が、二の丸期のものと考えられる（図53・54）。この内Ⅲ期は、Ⅳ期・Ⅴ期とは土地利用のあり方が大きく変わるため、Ⅲ期が元禄年間の二の丸改造以前、Ⅳ期・Ⅴ期は元禄年間の改造以降にあたる可能性が高い。また、Ⅳ期とⅤ期の境は、文化元年（1804年）の落雷による火災で、二の丸が全焼し再建されたことに対応する可能性が考えられる。

まずⅢ期の遺構群を、元禄年間の改造以降の状況を示すものではあるが、文化元年図を使い、第2地点の位置を基準に対応させると図55-1のようになる。ただし、第10地点では、東西方向で半間ほど遺構との対応がずれていたため、その分、西に半間ずらして対応させてみた。一方、第5地点の中奥の門を基準に対応させると図55-2のようになる。図56は、1間=6尺3寸となるように縮尺したもので、第2地点を基準に対比したものである。図55の1と2のずれは、前述のように、そもそも第2地点の位置推定と、第5地点の門跡の位置が、最大で10mほどずれることによる。

第5地点を基準にした場合にはずれが大きいが、他の対比では、付帯施設部分で検出された16号柱列が、二の丸裏門である「台所門」の西側に南北に走る堀に、ほぼ東西の位置関係が対応する。この16号柱列は、元禄年間の二の丸改造以前の時期の可能性が高いⅢ期の遺構としたが、Ⅳ期に下る可能性も残っている。第9地点のⅢ期・Ⅳ期については、切り合い関係や出土遺物から時期が確定できない遺構については、遺構の性格を基準に時期を分けた。Ⅳ期・Ⅴ期

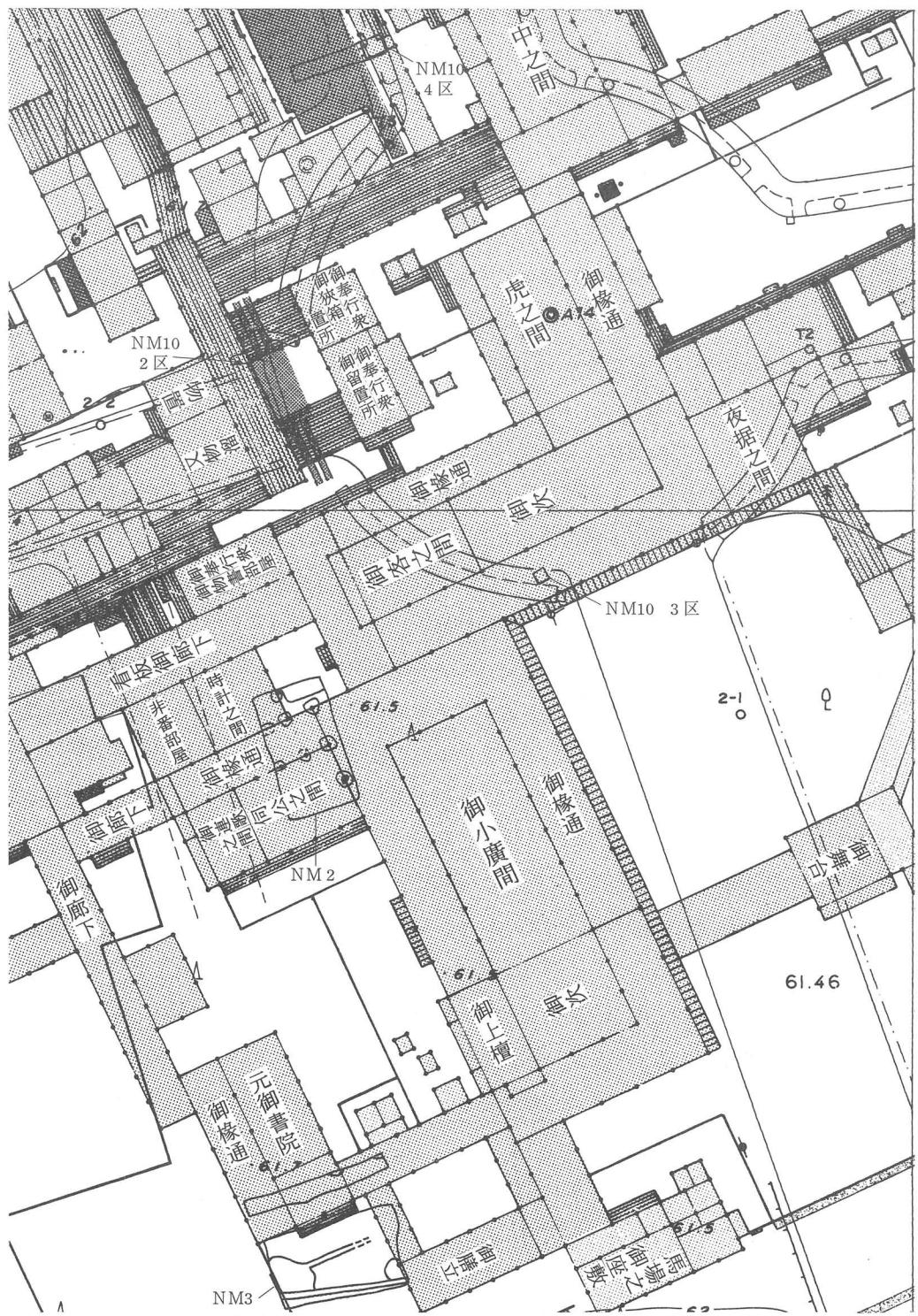


図51 仙台城二の丸跡第10地点と絵図との対比(文化元年図)

Fig. 51 Location of NM2, NM3 and NM10 corresponding to a picture map(1)

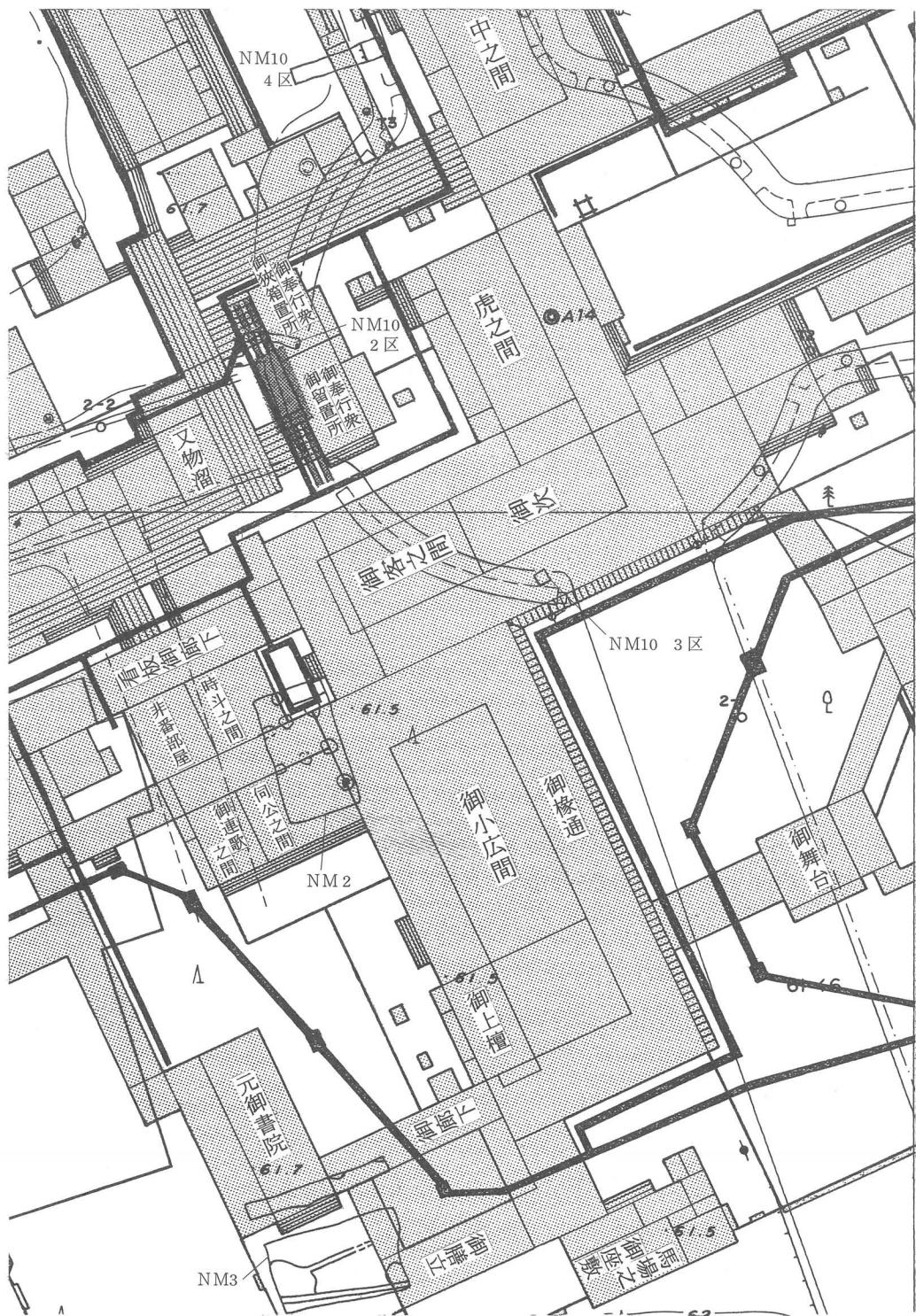


図52 仙台城二の丸跡第10地点と絵図との対比(水抜御絵図)

Fig. 52 Location of NM2, NM3 and NM10 corresponding to a picture map(2)

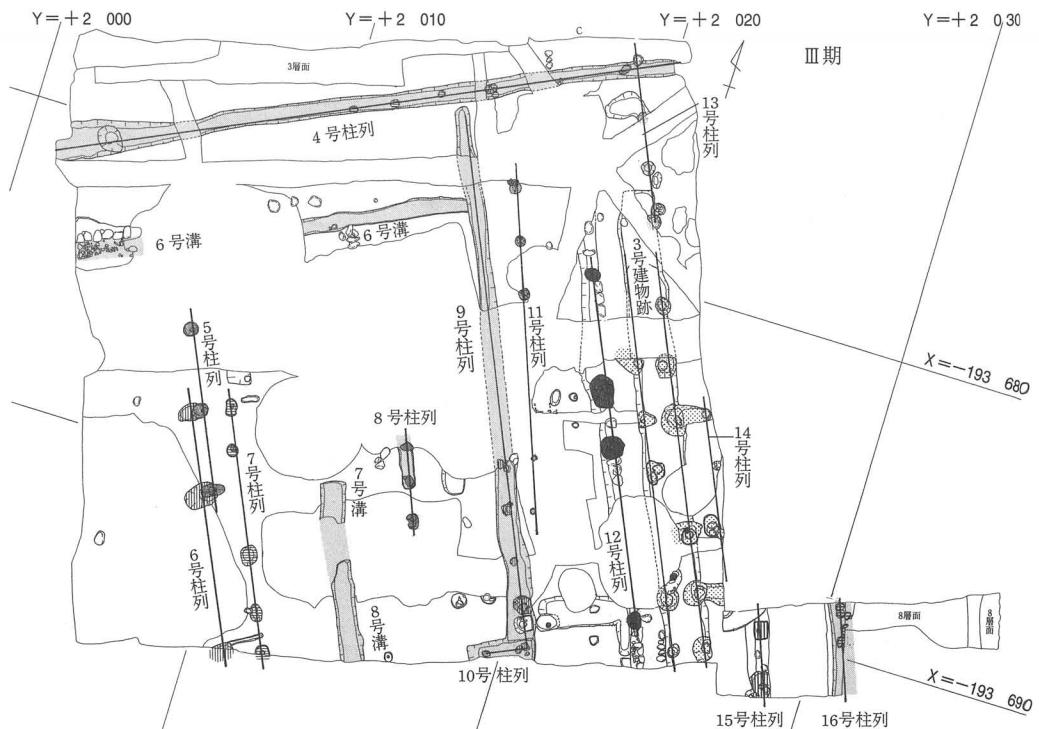


図53 仙台城二の丸跡第9地点Ⅲ期の遺構配置図

Fig. 53 Distribution of features at NM9 (phase III)

では、池や土坑が展開するため、時期の確定できない柱列は、便宜的にⅢ期にまとめた。16号柱列も直接の切り合い等がなく、Ⅲ期に含めたが、Ⅳ期に下る可能性も残っている。そのため16号柱列が、二の丸拡張以降の堀に対応する可能性があるものと考えたい。ただし、16号柱列は3c層に覆われており、V期まで下ることは無い。また、絵図と実際が若干ずれている可能性も考慮すると、16号柱列に位置が近い15号柱列なども、その可能性がある。また、16号柱列より東側の区域は、16号柱列やその西側の南北方向の柱列などの、柱底面の深さまで現代の削平がおよんでおり、この場所に同様の柱列が本来存在した可能性は否定できない。したがって、「台所門」西側の南北方向の堀が、16号柱列より東側に存在した場合も考えられる。いずれにせよ、16号柱列かそれに近い場所に、元禄年間以降の「台所門」西側の南北方向の堀が存在したものと想定しておきたい。

南北の位置関係を決めるための材料は少ないが、第2地点を基準に合わせた場合には、「御廄」を囲む塀が調査区内にかかってくる。一方、第5地点を基準に対応させた場合には、中奥の建物の近くまで続く大きな池が調査区内に入ってくることとなる。いずれについても、対応するような遺構は、IV・V期には検出されていない。両者の中間という位置関係が、妥当な所であろう。6尺3寸で対応させた場合、両者のほぼ中間に對応する位置になる。

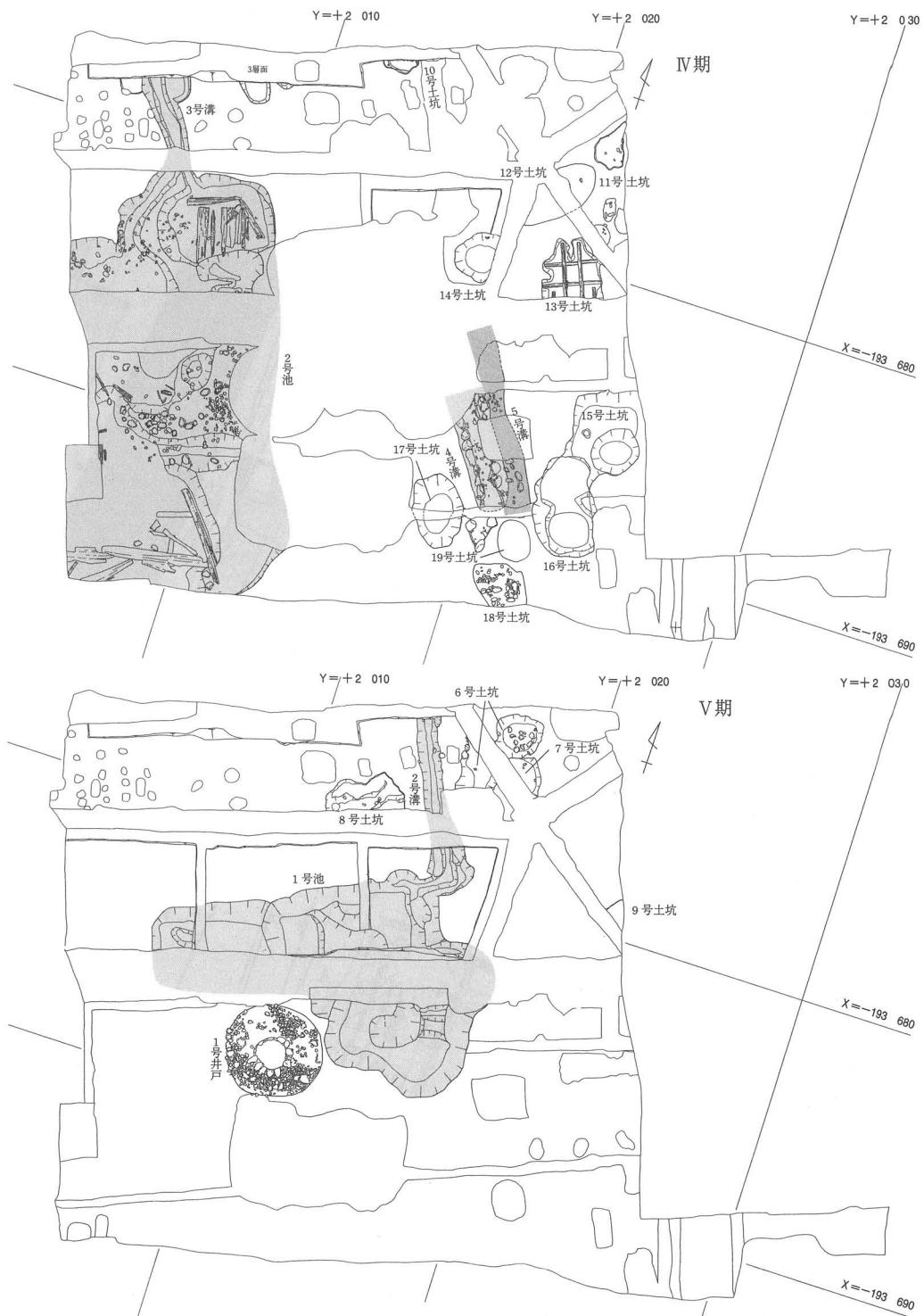


図54 仙台城二の丸跡第9地点IV期・V期の遺構配置図

Fig. 54 Distribution of features at NM9 (phase IV and V)

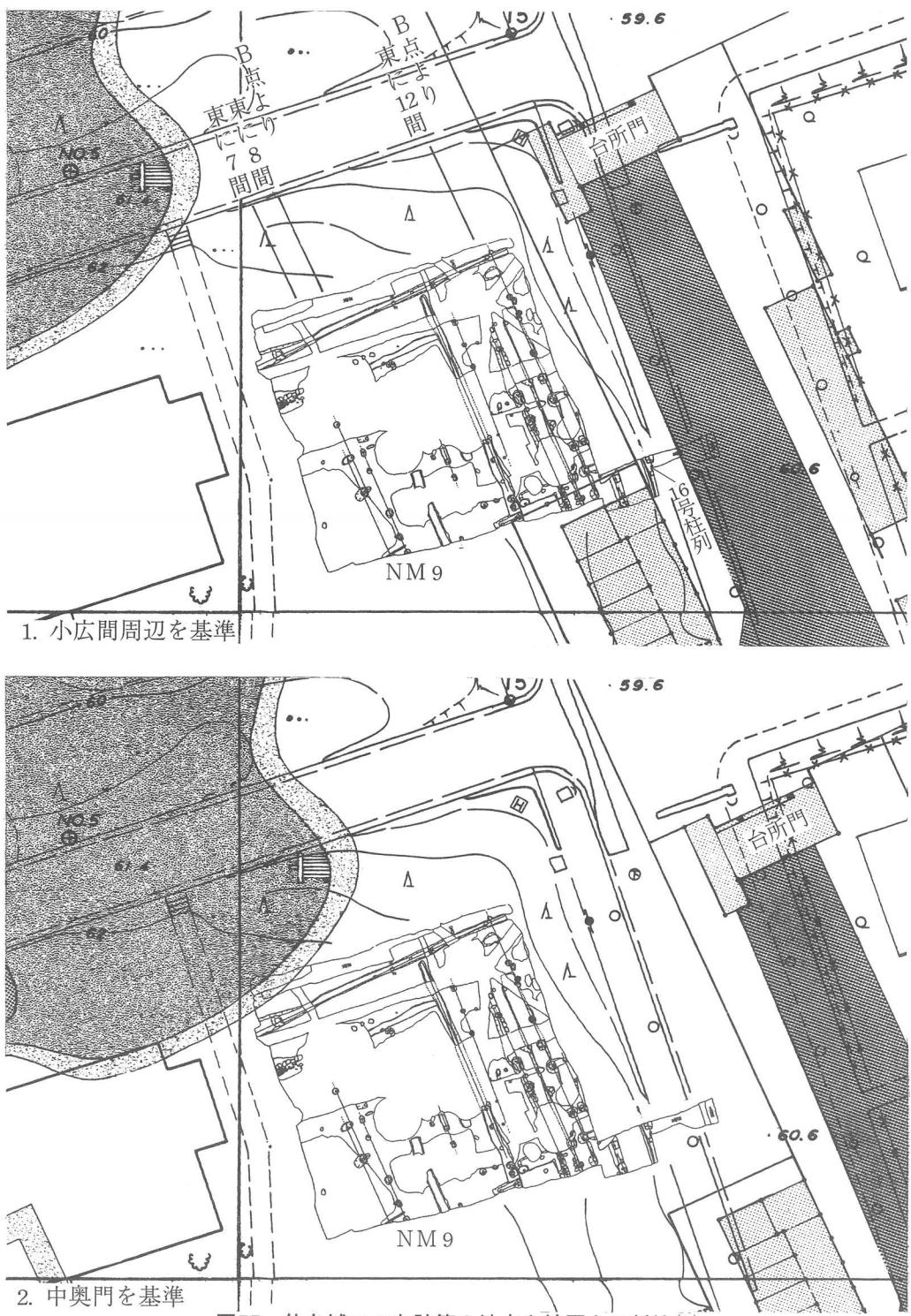


図55 仙台城二の丸跡第9地点と絵図との対比(1)

Fig. 55 Location of NM9 corresponding to a picture map(1)

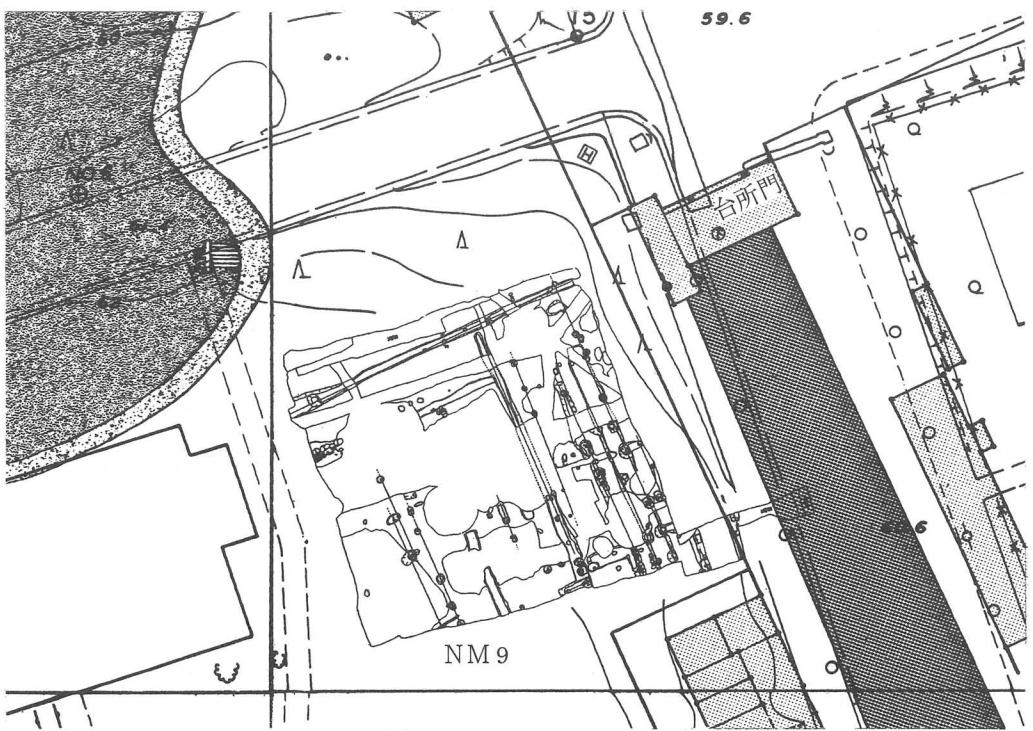


図56 仙台城二の丸跡第9地点と絵図との対比(2)

Fig. 56 Location of NM9 corresponding to a picture map⁽²⁾

一方、元禄年間の改造以前の状況を示す絵図は少なく、この区域が描かれているのは「肯山公造成木写之略図」だけである（図57）。元禄年間頃の絵図と考えられているが、二の丸中奥が元の西屋敷の範囲まで拡大される前の状態を描いている。この絵図を使って、台所門の西側に南北にのびる堀（図58の堀A）を南側にのばし、東西の位置関係を見ると、「小広間」西側の基準点としたB点から、東に14間の位置になる。すなわち、先の文化元年図で見たよりも、2間西側にこの堀がある。また、この南北方向の堀からは、枠形状に2本の堀がのびている。北側を堀B、南側を堀Cとすると、堀Bが南におれるところは、点Bから東に7間、堀Cが北に折れるところは、点Bから東に8間にあたる（図55-1）。したがって、調査区東側の、9号柱列から15号柱列にいたる範囲の、南北方向の柱列が、絵図に見える堀Aに対応する可能性が高い。その場合、3号建物跡は控柱を有する堀か、あるいは堀に取り付く、細長い建物になるものと考えられる。これらの西側で検出された5～8・10号柱列、7・8号溝は、堀Bと堀Cからなる、枠形状の施設を構成する堀になる可能性が考えられる。7・8号溝は、断面形状などから、布掘の柱列になるものと思われる。6号溝は、方向が一致することから、攪乱をはさんだ東西を一連の溝と考えたが、東側は壁が垂直に近く深いため、別の遺構で、東側が堀Bの東西方向の部分に対応する可能性もある。4号柱列については、絵図に対応する記載が無く

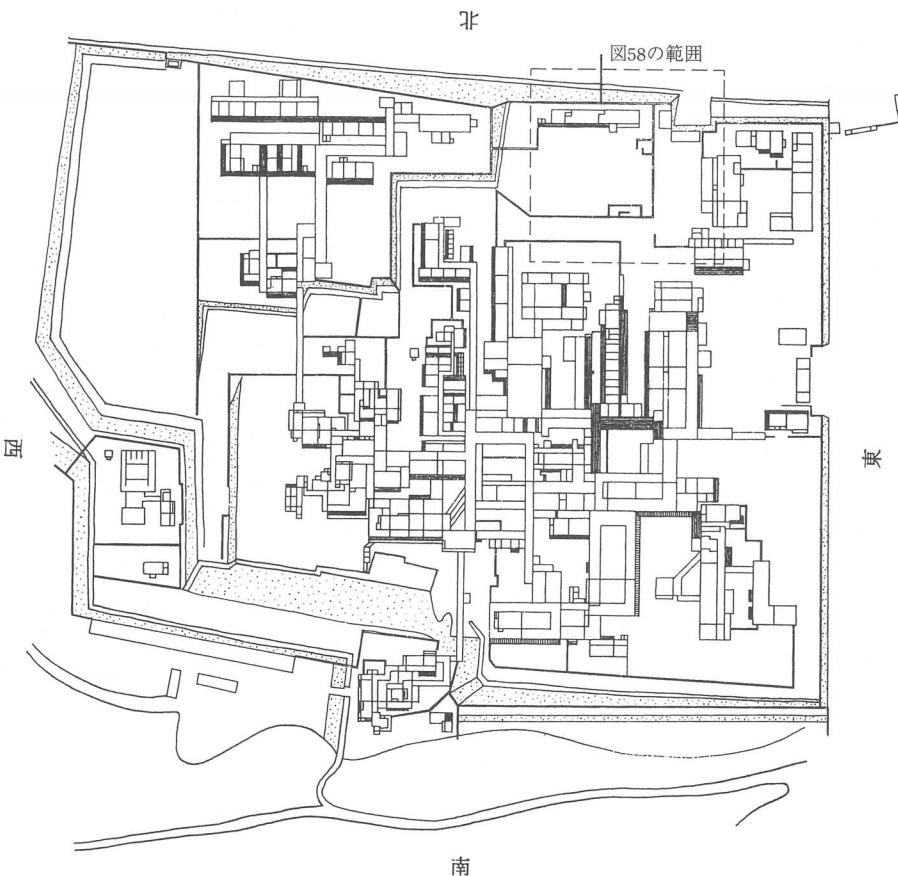


図57 肯山公造成木写之略図

Fig. 57 The picture map called "Mokusya-no-ryakuzu" showing the plot plan of Ninomaru

不明とせざるを得ないが、枠形状の施設の北東側には、東西に長い建物が描かれており、それに付随する施設かもしれない。確実でない部分も多いが、以上のような対比で、大きな矛盾は無いものと考えておきたい。

元禄年間の二の丸改造以降は、「台所門」西側の南北方向の堀は、南側で「御廁」の北東隅に取り付いている。北側にも「御蔵」が存在し、その南東隅に堀が取り付く（図49）。この関係は、元禄年間以降の状況を描いた絵図では、基本的に変化が無く一貫している。上記の検討を踏まえれば、元禄年間の改造以前は西寄りに堀が存在し、微妙に位置をずらして建て替えられていたのに対して、元禄年間の改造以降は堀の位置が東にずれるとともに、堀が他の建物に取り付くため、位置を変えることがほとんどなくなった可能性を考えておきたい。

V期については、堀に対応する遺構が見つかっていないが、上述のように現代の削平で失わ

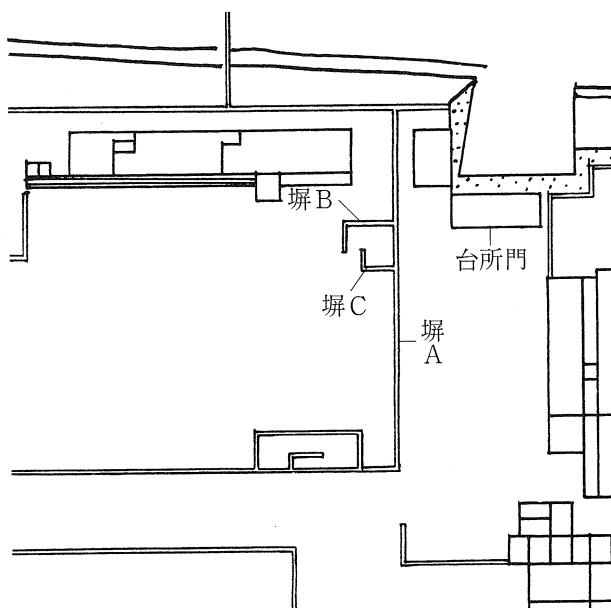


図58 肯山公造成木写之略図の台所門付近

Fig. 58 The plot plan of buildings around *Daidokoro-mon*,
the north gate of *Ninomaru*

れている可能性もあるため、16号柱列に近い位置に、本来は堀が存在したものと考えておきたい。よってⅢ期・Ⅳ期・Ⅴ期の遺構群は、「台所門」西側の堀の、裏手にあたる区域に造られた遺構と考えられる。特に、ゴミ穴と考えられるⅣ期の15号土坑・16号土坑などは、ちょうど堀の裏側にあたる所に造られていることとなる。

第9地点の調査区の中央から東側には、Ⅳ期には2号池が、Ⅴ期には1号池が造られる(図54)。「台所門」の北東から、中奥にかけての区域には、大きな池が元禄年間より後の絵

図には全て描かれており、第9地点で発見された2号池・1号池とそれらに取り付く溝は、この大きな池の南東側にあたると考えられる。第9地点の調査区に近い、池の南東の縁には、いずれの絵図においても、何らかの施設が描かれている。詳細がはっきりするものは少ないが、水門のように見えなくもない。享和二年図では、この水門のような施設から溝が外側に延びている(図49)。2号池に付随する3号溝や、1号池に付随する2号溝は、絵図に見える池につながる可能性が、位置関係から考えられる。よって、2号池・1号池は、絵図に見える大きな池に付随し、水の出入りを調整する役割を考えておきたい。

④ 現地形上での二の丸建物の配置復元

以上の推定を基本として、現状での二の丸施設の推定位置を復元したのが、付図1である。位置関係は、第2地点を基準とし、前述のように文化元年図を使用し、1間=6尺3寸に縮尺したものを使用した。第9地点では、Ⅳ期の遺構に、16号柱列を加えて記入した。第5地点では、Ⅲb期とした二の丸中奥新段階の遺構群を記入した。ただし、二の丸中奥古段階のⅢa期の遺構群も、基本的な遺構の配置関係は、Ⅲb期と同じである。この第5地点でも、中奥北側の堀よりさらに北側には、道路をはさんで「中奥馬場」や「屏風蔵」などが展開する。この範囲を描いた絵図としては、享和2年図と「御修復帳」がある。これらの絵図と検出された遺構については、細かな数値ではずれる部分もあるが、大きな位置関係は対応することが判明している(年報7)。そのため、これらの絵図をもとに、遺構の実寸に合わせて調整して復元して

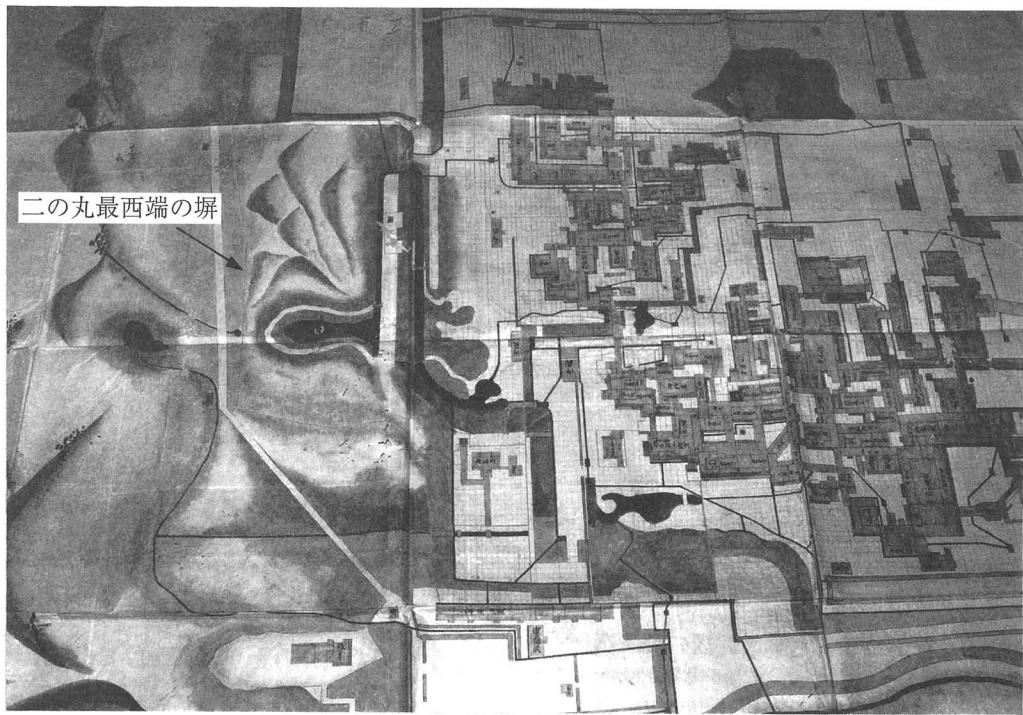


図59 享和二年之御家作御絵図写の二の丸西端部分

Fig. 59 The west part of Ninomaru shown in the picture map made in 1802

いる。

二の丸北側の堀については、南側の落ち際は、第5地点の付帯施設部分の調査区の北端で検出されている（年報7）。一方、堀の北側については、第8地点（年報4）と第12地点の調査において、岸の部分が検出されている。第12地点については未報告であるが、調査の概要と堀の復元については、既に公表している（須藤ほか1997）。第12地点で検出された堀を横切る堰状の施設は、幕末の「安政補正改革仙府絵図」に見える堰と思われる施設であり、この位置関係を基準に、おおよそではあるが、二の丸北側の堀の位置が推定できている。付図1には、この堀の位置も入れてある。

第1地点（年報1）では、西側を大きく削った斜面と、その斜面の下に南北方向の溝が発見されている。絵図では、「因縁殿」の北側に、南北に溝が描かれている。第1地点の溝は、この絵図に見える溝よりは、東側の位置にあたる。むしろ、絵図に見える溝の東側の、「土手」とされている部分が、調査区で検出された地山を削り出した斜面に相当するものと考えられる。

第4地点では、層序関係や出土遺物から時期を限定できないが、3列の掘立柱列が検出されており、「台所門」北側の、「御借長屋」に、その位置がほぼ相当する。これらの柱列は、他の二の丸建物群と比べると、5度ほどさらに西に傾いている。文化元年図では、この「御借長屋」

は、他の二の丸建物群と同じ方向で描かれているが、享和二年図などの絵図では、二の丸建物群よりさらに西に傾いて描かれており、検出遺構の方向とほぼ対応する（図49）。特に、3号柱列は、「御借長屋」の西側の桁行にほぼ位置が対応する。ただし、この3号柱列は、斜めに柱が埋め込まれており、建物の柱とするには疑問が残る。そのため、「御借長屋」か、それに関連する施設と考えておきたい。

第6地点では、本体調査区でV字状につながると推定される2本の溝が検出されている。元禄年間より後の絵図では、埋められたため描かれていないので、付図には入れなかつたが、「肯山公造成本写之略図」には、このV字状の溝が描かれている。西側の調査区で検出された石垣状遺構では、柱穴や礎石などは検出されていないが、大量の板屏瓦が出土していることから、堀の基礎であったものと考えられる。これは、享和二年図などに描かれている、二の丸最西端の堀に対応するものと考えられる（図59）。

第7地点については、二の丸正門の「詰の門」と大手門の間にあたり、蔵などが置かれていた位置にあたる。これについては、狭義の二の丸の範囲の外側にあたることと、すぐ近くを1992年度に調査しており、それを含めて、あらためて検討することとしたい。

⑤ 二の丸造営の基準方位について

先にも述べたように、二の丸期の遺構の方位は、主要な区域から離れる、周辺の区域以外の調査区では、ほとんどがN-24~25度-Wであり、中でも25度傾くものがほとんどである。したがって、二の丸期の地割りは、北で25度西偏するものと考えられる。第5地点で検出された、元禄年間の二の丸大改造以前の、五郎八姫の西屋敷と姫死去後の「天麟院様元御屋敷」と呼ばれた時期の遺構群も、二の丸期と同様に25度西偏する。これに対して第9地点のⅠ期の遺構群、すなわち二の丸造営以前の伊達宗泰の屋敷に関わると考えられる遺構群の方位は、N-30度-Wである。

このように、慶長年間頃と思われる伊達宗泰の屋敷の造営時には、30度西偏して造営され、元和6年の西屋敷の造営では25度となり、それを踏襲して寛永15年の二の丸造営でも25度西偏した地割りが採用されたということになる。前述のように、『東奥老士夜話』の記載では、宗泰の屋敷の「広間」が、二の丸の「広間」として使われたとの言い伝えが記されている。この「広間」とは、二の丸の中では最も中心を占め、本丸の「大広間」に相当する「小広間」のことと思われる。第9地点で検出された遺構の方向が、宗泰の屋敷全体に渡っていたのかどうかについては、現状では不明とせざるを得ない。仮に同じ方向をとっていた場合には、二の丸造営時に、建物の向きを5度程変える必要があったこととなる。『東奥老士夜話』の記載が、事実を伝えたものかどうかは検討の必要があり、建築部材を利用したことを指している可能性も含めて検討していく必要があるだろう。

(4) 二の丸造営時の地形改変について

二の丸造営時の地形改変の様子を検討するために、これまでの調査地点で検出された、二の丸造営時の整地層の厚さを、次に整理してみたい。数値は平均的なところで計測した、おおよその値である。また、整地以前に、人工的な遺構が造られている場合は、それを除いた厚さを概算した。

第2地点（「小広間」周辺）	： 20cm
第3地点（「元御書院」周辺）	： なし
第10地点2区（「御客之間」北側）	： 20cm
第10地点3区（「小広間」周辺）	： なし
第5地点（中奥北端付近）	： 30～100cm
第9地点（「台所門」東側）	： 30～100cm

このように、二の丸の中核である「小広間」周辺では、二の丸造営時の整地層は、検出されないか、あっても薄い。二の丸のなかでも周辺に近い第5地点・第9地点では、厚いところでは1mに達する大規模な整地が行われていることと対照的である。「小広間」などの中心的な建物は、もともと標高の高い部分を選んで配置されていたことを示すのであろう。

また、二の丸の正門である「詰之門」の東外側にあたる第7地点5区では、深さ1m以上の沢を、二の丸造営時に埋めていることが判明している（年報4）。西側の山側の部分に近い第1地点の調査区では、2m以上の高さを、大きく削り落としている（年報1）。調査を行った範囲が限られているため、詳細は不明な点が多いが、もともとの地形は、西から東へ緩やかに傾斜し、小規模な沢などがそこに入ることによって、凹凸があったものと推定される。二の丸造営時には、山側の高い部分を削り、沢や低い部分を埋めることによって、平坦面を広げる工事が、大規模に行われていたものと考えられる。

(5) 建物の基礎構造について

これまでの二の丸跡の調査で検出された建物などの基礎構造を見ると、地点や時期によって様々な構造が見られる。絵図との対比などで、建物の性格がある程度判明しているものを中心に、これらを整理してみると、次のようになる。

礎石

- 第2地点礎石建物 : 小広間周辺の建物
- 第5地点本体区Ia期6・7号建物跡 : 西屋敷の建物群
- 第5地点5区8・9号建物跡 : 屏風蔵

掘立柱

第5地点本体区Ⅲ期4～15・18号柱列、3号建物跡：塀・腰掛

第9地点Ⅲ期4～15号柱列・Ⅳ期？16号柱列：塀

第10地点2区ピット2：廊下？

石垣状の基礎

第6地点西区石垣状遺構：二の丸最西端の塀

掘立柱には、ただ柱穴を掘るだけのもの、柱穴の底面に石を埋め込み、その石の上に柱を立てるもの、布掘の底面に柱を据える石を埋め込むものがある。一連の柱列でも、柱穴によって、石を入れるものと入れないものが混在する場合もあり、地盤の状況などで使い分けられたのであろう。

特殊なものとしては、第5地点で検出された、中奥北側の門跡2がある（年報6）。柱掘り方の底面に、円礫を一面に詰め込み根固めとし、その上の礎石に柱を立てるが、礎石は地表に出ず、地中に埋め込まれている。この門を造り替えた門跡1は、地中に埋めた梁の両端にほど穴を開け、その穴に本柱を差し込んで立てた簡素な構造である。また、第6地点で検出された石垣状の塀の基礎は、この場所が二の丸西端の、丘陵にかかる部分にあたり、斜面に塀が造られていることと関係するものであろう。

このような特殊なものを除くと、上屋構造の加重が軽いと想定されるもの、あるいは建て替えの頻度が高いと思われる施設ほど、簡素な基礎構造となっていると言える。時期別に見ると、礎石建物と通常の掘立柱建物は、17世紀前半から幕末まで存在しており、構造の違いは、時期による変化と言うよりは、建物の性格によって使い分けられていたと考えた方が良いであろう。今後の検証が必要ではあるが、建物の性格を検討する際の、一つの目安にはなるだろう。

(6) 小結

検出遺構と絵図との対比、現況での二の丸建物群の位置推定について、年報7で検討した結論に沿って、今回、第9地点・第10地点を検討した。

二の丸造営以前では、二の丸以前に置かれていた伊達宗泰の屋敷の北端から、宗泰の屋敷の北側に置かれた五郎八姫の西屋敷との境付近に第9地点の調査区が対比できる。また、周辺の調査区を含めて、二の丸造営以前の遺構が、3時期に細分されることが明らかとなった。

二の丸期の遺構では、第9地点は二の丸裏門である「台所門」の西側に南北にのびる塀から、さらにその西側の区域にあたると考えられた。第10地点2区は「御客之間」の北側の、「御奉公衆御留置所」の前の2本の廊下にはさまれた区域に相当すると考えられた。以上の検討を基礎として、これまでの二の丸跡の調査地点で検出された遺構の検討を行い、現状での二の丸建物群の位置推定を行った。これらの絵図との対比において、大きく矛盾する部分は無く、細部

の調整はなお必要であるが、大筋では付図1に示したような対比を考えて、大過無いものと思われる。今後解決しなければならない問題も多く残されているが、二の丸の諸施設の位置関係を、ほぼ推定できるようになったことを、1983年以降の二の丸跡の考古学的調査の今日的到達点としておきたい。

《引用・参考文献》

- 坂田 啓編 1995 『私本 仙台藩士事典』創栄出版
佐藤 巧 1979 『近世武士住宅』
佐藤 巧 1967 「仙台城の建築」『仙台城』仙台市教育委員会
平重道編 1973 『伊達治家記録三』 宝文堂出版
平重道編 1974 『伊達治家記録四』 宝文堂出版
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 『東北大学埋蔵文化財調査年報1』
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 『東北大学埋蔵文化財調査年報3』
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992 『東北大学埋蔵文化財調査年報4・5』
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 『東北大学埋蔵文化財調査年報6』
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1994 『東北大学埋蔵文化財調査年報7』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 『東北大学埋蔵文化財調査年報8』
須藤隆・藤沢敦・関根達人・菊池佳子 1997 「仙台城二の丸跡と周辺武家屋敷跡の調査」
『考古学ジャーナル』417 pp. 17~22

3. 仙台城における陶磁器の変遷

(1) 仙台城二の丸跡出土陶磁器の変遷

仙台城二の丸跡からは、16世紀末・17世紀初頭から近現代にいたるまで、様々な時代の陶磁器が出土している（付図2・3）。さらに17世紀中葉から後葉の時期を除くと、各時期とも、構造や層序関係、紀年銘木簡等から、廃棄された実年代がある程度推定可能な一括資料が存在する（表10）。以下では、これらの一括資料を中心に、陶磁器の器種組成、産地別組成の検討を行い、変遷の概略を述べる。なお数値は全て、接合・同一個体の認定を行った上の破片数である。

表10 仙台城二の丸跡出土一括資料一覧

Tab. 10 List of groups of artifacts from the second citadel of Sendai Castle

出 土 場 所	資 料 の 年 代	推定廃棄年代	特 記 事 項	報告書
第9地点8層	16c末葉～17c初頭	1616年？	磁器は中国産のみ。織部を含まない。	年報8
第9地点7層・16号溝	16c末葉～17c前葉	1638年前後	磁器は中国産のみ。織部を含む。	年報8
第5地点北区VII・VI層	1650～90年代(17c末主体)	元禄年間前半	元禄四年銘の木簡を複数共伴。	年報6・7
第5地点北区V層・4号土坑	1680～90年代	元禄年間後半	中奥拡張（元禄年間）以前。	年報6・7
第5地点3号土坑	18c前葉	18c前葉	中奥拡張以後。	年報6・7
第9地点15・16号土坑	18c後葉主体	18c後葉	天啓赤絵など上手の皿類に伝世品あり。	年報8
第9地点2号池	18c末葉～19c初頭	1804年？	文化元年(1804年)の二の丸火災と関連？	年報8
第5地点1・2号土坑	19世紀前葉～19世紀中葉	1860～70年代	勤政庁や東北鎮台設置時の二の丸整理。	年報6・7
第9地点1号池	19世紀前葉～19世紀中葉	1860～70年代	勤政庁や東北鎮台設置時の二の丸整理。	年報8
第2地点石敷遺構	19世紀中葉～後葉	1860～70年代	勤政庁や東北鎮台設置時の二の丸整理。	年報1
第10地点III～3層	19世紀中葉～後葉	1860～70年代	「御奉公衆御留置所」で使われた遺物？	年報9
第8地点堀埋土III～V層	明治中期～大正初期	19c末～20c初	陸軍第二師団（1888年設置）輜重隊関連。	年報4

① 仙台城二の丸跡出土陶磁器の器種組成の変遷

器種組成の変遷は、磁器については図60・表11に、陶器は図61・表12に示した。磁器は、全体として碗類が増加し、皿が減少する傾向にある。18世紀前葉から19世紀初頭にかけては比較的安定した組成を示しており、変化の画期はその前後の時期にあると考えられる。後述するように、17世紀初頭から前葉の磁器は全て中国産で占められ、いわゆる初期伊万里を含まず、その大部分が皿である。17世紀末葉の段階で碗の比率が高まっているのは、肥前産の磁器碗が普及はじめたためであり、18世紀代により高い比率で安定するのは、いわゆるくらわんかタイプの製品が加わることで、磁器の飯碗がさらに浸透した結果と考えられる。19世紀中葉の資料では、第5地点の1・2号土坑と第9地点の1号池とで組成に違いが見られるが、前者はかなり偏った資料であり、後者がこの時期の一般的な傾向を示していると考えられる。即ち、幕末に、煎茶器として小型の碗が普及したこと、再び急激に碗類の比率が高くなっている。陶器に関しても、17世紀初頭から前葉の段階では、向付を含めた皿類の比率が高い。磁器と同様、18世紀前葉から19世紀初頭にかけては比較的安定した組成を示している。19世紀中葉には袋物の比率が急激に高まるが、これは大堀相馬で多種多様な土瓶類が生産されるようになり、それが普及した結果である（註1）。

以上、磁器と陶器に関して、器種組成の変遷を見てきたが、17世紀初頭から前葉の段階には、磁器と陶器を合わせても碗類の比率は、それ以降の時代に比べ極端に低く、それだけでは日常の飲食器の組み合わせとして不自然さが残る。そこで、漆器・木製品を合わせた形で、改めて供膳具の主体である碗と皿に関して、材質別の割合を検討する（図62・63、表13）。なお、検討の対象には、有機質遺物の遺存状態が比較的良好であった遺構、整地層出土の一括資料を選んだ。

碗類に関しては、17世紀初頭から前葉には漆器・木製品が大半を占め、陶磁器の不足を補っていることが判る。陶磁器と漆器・木製品では耐久性や遺存率に違いがあるため、この比率をそのまま当時の使い分けの実態にあてはめて考えることはできないが、17世紀末葉以降に比べ、供膳具に占める漆椀の比重が高かったことは明らかである。ほぼ同じ時期、京・大坂の都市遺跡で、いわゆる呉州手と呼ばれる漳州窯系の粗製の碗皿類が多量に出土する（上田秀夫1991、森毅1992）のとは対照的である。堺環濠都市遺跡では、輸入陶磁器に比べ木器の出土量の少なさが既に指摘されている（森村健一1984）。江戸時代初期の仙台城においては、供膳具に占める漆椀の割合が高く、このような傾向は、東北地方における中世からの伝統的な日常食器のあり方を受け継いでいると考えられる（註2）。小野正敏氏等により、東国の中世、特にその後半期の15世紀後半から16世紀、東国では焼物の碗がほとんど使われないと指摘がなされているが、今回の仙台城の分析により、そうした漆器椀を中心とする東国に伝統的な供膳形態は、

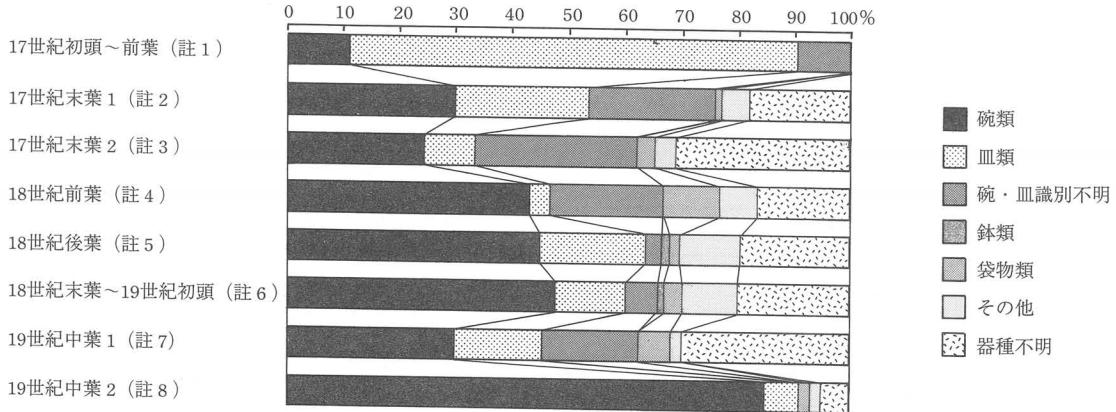


図60 仙台城二の丸跡出土磁器の器種組成比率の推移

Fig. 60 Histograms of porcelains from the second citadel of Sendai Castle

表11 仙台城二の丸跡出土磁器の器種別出土点数

Tab. 11 Count of porcelains from the second citadel of Sendai Castle by shape

仙台城二の丸跡出土磁器器種	碗類	皿類	鉢類	袋物類	その他	器種不明	混入
17世紀初頭～前葉 (※1)	6	42	5	0	0	0	2
17世紀末葉1 (※2)	35	27	26	0	1	6	21
17世紀末葉2 (※3)	54	20	63	0	7	8	69
18世紀前葉 (※4)	13	1	6	0	3	2	5
18世紀後葉 (※5)	117	48	7	3	5	28	51
18世紀末葉～19世紀初頭 (※6)	67	17	8	1	5	14	28
19世紀中葉1 (※7)	16	8	9	0	3	1	16
19世紀中葉2 (※8)	83	6	0	0	2	2	5

(※1) 第9地点7・8号および16号土坑出土資料
 (※2) 第5地点北区Ⅳ・Ⅴ層出土資料
 (※3) 第5地点4号土坑および北区V層出土資料
 (※4) 第5地点3号土坑出土資料
 (※5) 第9地点15・16号土坑出土資料
 (※6) 第9地点2号池出土資料
 (※7) 第5地点1・2号池出土資料
 (※8) 第9地点1号池出土資料

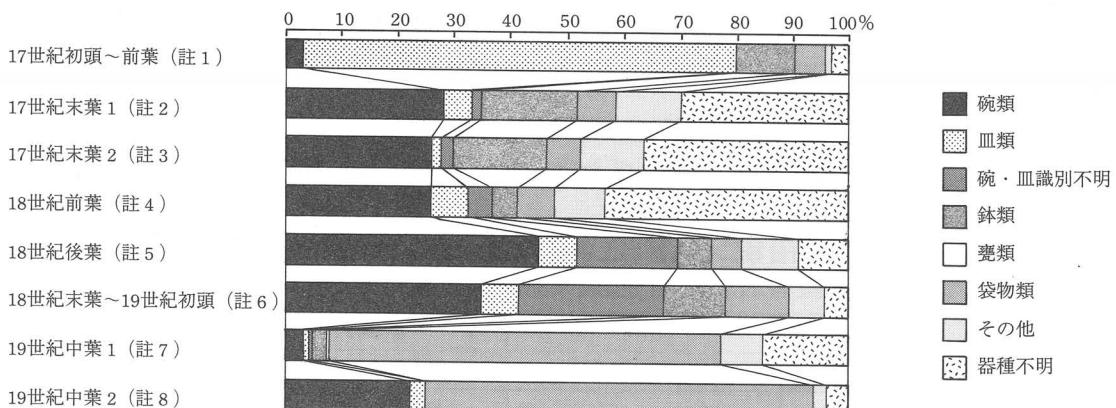


図61 仙台城二の丸跡出土陶器の器種組成比率の推移

Fig. 61 Histograms of glazed ceramics from the second citadel of Sendai Castle

表12 仙台城二の丸跡出土陶器の器種別出土点数

Tab. 12 Count of glazed ceramics from the second citadel of Sendai Castle by shape

仙台城二の丸跡出土陶器器種	碗類	皿類	鉢類	袋物類	その他	器種不明
17世紀初頭～前葉 (※1)	5	118	0	16	0	9
17世紀末葉1 (※2)	17	3	1	10	0	4
17世紀末葉2 (※3)	30	2	3	18	0	7
18世紀前葉 (※4)	12	3	2	2	0	3
18世紀後葉 (※5)	200	30	80	24	2	23
18世紀末葉～19世紀初頭 (※6)	65	12	48	20	0	21
19世紀中葉1 (※7)	10	3	2	6	1	204
19世紀中葉2 (※8)	42	5	0	0	0	128

(※1) 第9地点7・8号および16号土坑出土資料
 (※2) 第5地点北区Ⅳ・Ⅴ層出土資料
 (※3) 第5地点4号土坑および北区V層出土資料
 (※4) 第5地点3号土坑出土資料
 (※5) 第9地点15・16号土坑出土資料
 (※6) 第9地点2号池出土資料
 (※7) 第5地点1・2号池出土資料
 (※8) 第9地点1号池出土資料

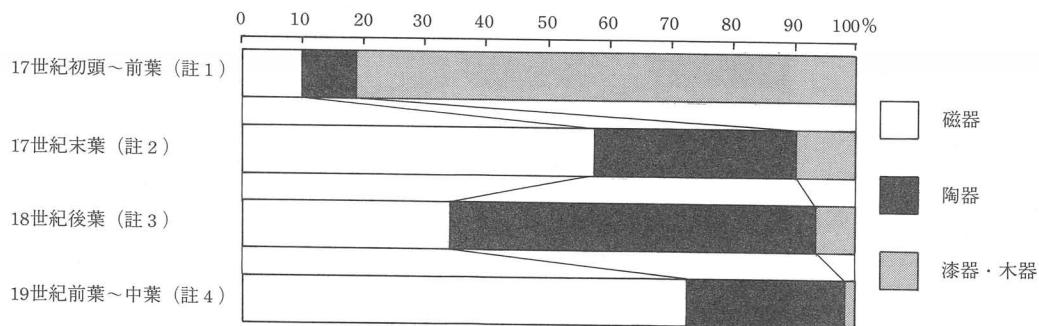


図62 仙台城二の丸跡出土供膳具（碗類）の材質

Fig. 62 Materials of table ware (bowls) from NM9

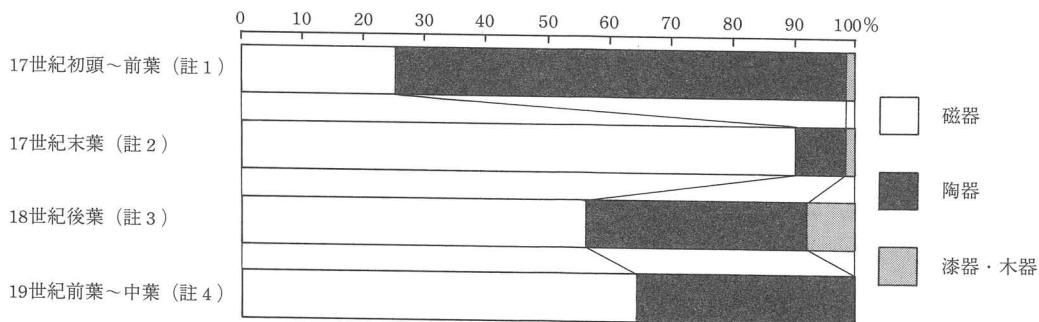


図63 仙台城二の丸跡出土供膳具（皿類）の材質

Fig. 63 Materials of table ware (dishes) from NM9

表13 仙台城二の丸跡出土供膳具(碗・皿類)の材質別出土点数

Tab. 13 Count of bowls and dishes from the second citadel of Sendai Castle

年代	碗 (椀)			皿 (※5)			碗・皿識別不能	
	磁器	陶器	漆器等	磁器	陶器	漆器等	磁器	陶器
17世紀初頭～前葉 (※1)	6	5	48	42	120	3(1)	5	0
17世紀末葉 (※2)	82	46	14	47	4	1(1)	86	4
18世紀後葉 (※3)	117	200	23	48	30	7(4)	7	80
19世紀前葉～中葉 (※4)	638	222	18	208(8)	110	1	51	211

(※1) 第9地点7・8層およびI期遺構出土資料

(※5) 陶器の向付や漆器の椀蓋は皿として用いられる場合が多いと考え皿

(※2) 第5地点北区VII・VI・V層出土資料

の数量に含めている。また、供膳具としての皿を対象としたため、

(※3) 第9地点15・16号土坑出土資料

灯明皿や灯明受皿等の食器以外の皿は含まれない。なお、供膳具と

(※4) 第9地点1号池出土資料

しては、土師質の皿が多量に存在するが、非日常的使用が想定され

るため、日常の食器の材質を問題にした今回の分析からは除外した。

カッコ内の数値は、皿に含めた蓋類の数。

近世初頭まで保持され続けていた可能性の高いことが判った。

仙台城では、伊万里が普及し、漆椀の重要性が減った17世紀末葉以降、時代とともに、漆椀・木製椀の比率は低くなり続ける。碗皿とともに、17世紀末葉から18世紀後葉にかけ、陶器の比率が高まるが、これは、大堀相馬製品が出回り、比較的割高な伊万里の流通量が減少することによる。また、19世紀になり再び磁器の比率が碗皿ともに増加するのは、新たに瀬戸産の磁器が市場に参入した結果と考えられる。

② 仙台城二の丸跡出土陶磁器の産地別組成の変遷

陶磁器の産地別比率は、磁器については図64・表14に、陶器は図65・表15に、各々の変遷を示した。

17世紀初頭から前葉の段階の磁器は、全て中国製であり、初期伊万里を含まない。これら中国製磁器の大部分は青花で、しかも景德鎮製と思われるものが圧倒的に多く、漳州窯系の粗製品は極く僅かである。17世紀末葉以降、19世紀初頭までは、磁器の大部分を肥前産が占めており、それに天啓赤絵や呉州赤絵等、伝世した中国産磁器が少量伴う。19世紀中葉には、瀬戸の新製染付や、切込、平清水といった東北地方の磁器が加わり、肥前製品の比率は急激に低下する。器種との関係では、小型端反碗は切込や瀬戸に多い傾向が認められる。19世紀中葉の資料1と2で、磁器の産地別比率に大きな差異が見られるのは、時期的な違いではなく、場の違いから、使用される器種や、その品質に違いが生じた結果と考えられる。

陶器の産地は、17世紀初頭から前葉には、肥前と瀬戸・美濃に三分される状況にあった。17世紀末葉には、肥前が呉器手の碗などを主体に依然として高い比率を占める一方で、瀬戸・美濃製品は激減する。元禄年間に開窯したと考えられる大堀相馬は、17世紀末葉2の資料群で登場するが、この段階では、器種は灰釉丸碗に限られ、出土量も少ない。18世紀前葉の大堀相馬製品には多様な器種が見られるようになり、比率の上でも、肥前や瀬戸・美濃を完全に凌駕し、陶器の主体を占める。また、大堀相馬と器種的に補完関係にある小野相馬も、大堀相馬、肥前に次ぐ割合を占めている。18世紀後葉から19世紀初頭にかけては、肥前の割合が前代に比べ低下するが、全体としては比較的安定している。即ち、この時期、量的に多い一般の普及品は大堀相馬や小野相馬といった相馬陶器（註3）、少数の高級品は京・信楽、といった使い分けが確立している。19世紀初頭の段階で注目されるのは、小野相馬の急激な減少と、地元仙台の堤の出現である。両者は、器種の上で競合する部分が多いため、堤が小野相馬にとって代わる形で比率を伸ばした可能性が高い。窯跡の調査がほとんどなされていないため、江戸時代の堤の実態はよく判っていないが、小野相馬の減少自体、18世紀の後半には既に生じており、産地不明としたもののなかに、より古い堤の施釉陶器が含まれている可能性もある。19世紀中葉には、さらに大堀相馬の比率が高まる一方、限られた器種にではあるが、堤、平清水の製品も認めら

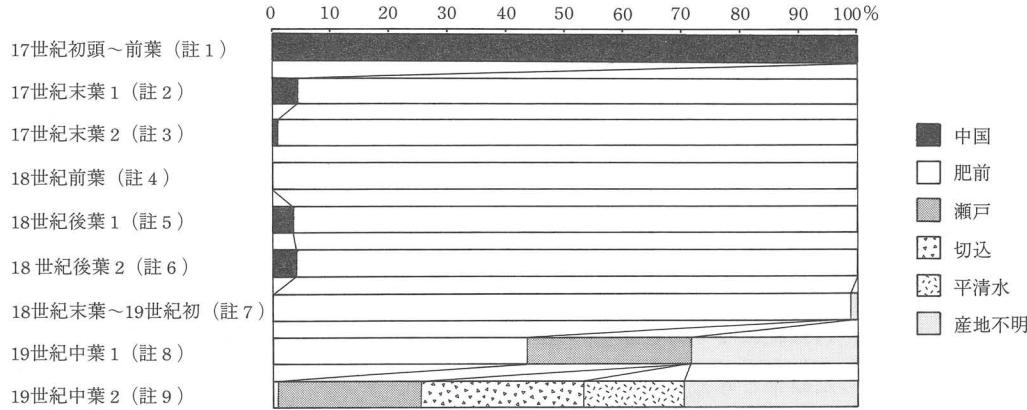


図64 仙台城二の丸跡出土磁器の産地別比率の推移

Fig. 64 Histograms of porcelains from the second citadel of Sendai Castle by producing district

表14 仙台城二の丸跡出土磁器の産地別出土点数

Tab. 14 Count of porcelains from the second citadel of Sendai Castle by producing district

仙台城二の丸跡出土磁器地	中国	肥前	瀬戸	切込	平清水	不明	混入
17世紀初頭～前葉（註1）	53	0	0	0	0	0	2
17世紀末葉1（註2）	5	111	0	0	0	0	0
17世紀末葉2（註3）	2	219	0	0	0	0	2
18世紀前葉（註4）	0	30	0	0	0	0	0
18世紀後葉1（註5）	3	79	0	0	0	0	0
18世紀後葉2（註6）	2	47	0	0	0	0	0
18世紀末葉～19世紀初（註7）	0	138	0	0	0	2	1
19世紀中葉1（註8）	0	23	15	0	0	15	0
19世紀中葉2（註9）	0	1	24	27	17	29	0

(※1) 第9地点7・8層および16号出土資料
 (※2) 第5地点北区Ⅳ・Ⅴ号出土資料
 (※3) 第5地点4号土坑および北区V号出土資料
 (※4) 第5地点3号土坑出土資料
 (※5) 第9地点16号土坑埋土4層以下出土資料
 (※6) 第9地点15号土坑埋土4層以下出土資料
 (※7) 第9地点2号出土資料
 (※8) 第5地点1・2号地点土質料
 (※9) 第10地点2区Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ号出土資料

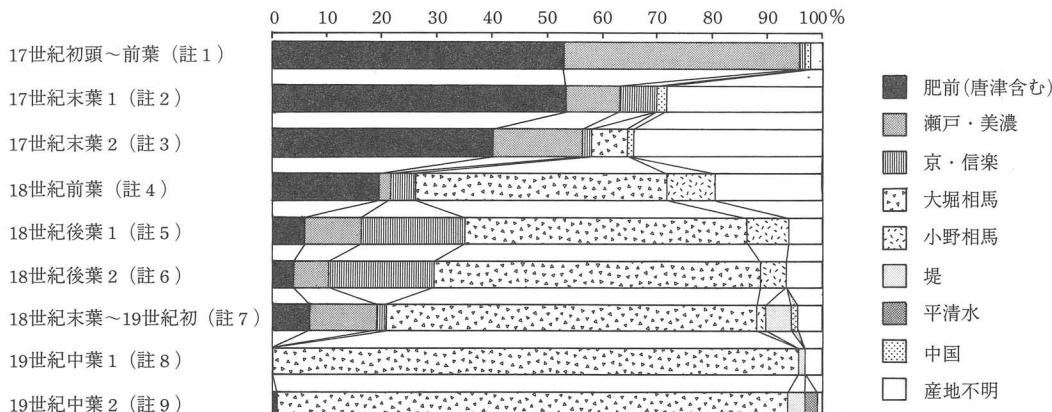


図65 仙台城二の丸跡出土陶器の産地別比率の推移

Fig. 65 Histograms of glazed ceramics from the second citadel of Sendai Castle by producing district

表15 仙台城二の丸跡出土陶器の産地別出土点数

Tab. 15 Count of glazed ceramics from the second citadel of Sendai Castle by producing district

仙台城二の丸跡出土陶器地	肥前	瀬戸美濃	京・信楽	大堀相馬	小野相馬	堤	平清水	中国	産地不明		
17世紀初頭～前葉（註1）	80	65	1	0	0	0	0	1	0	0	4
17世紀末葉1（註2）	32	6	4	0	0	0	0	1	0	0	17
17世紀末葉2（註3）	42	17	2	7	0	0	0	1	0	0	36
18世紀前葉（註4）	9	1	2	21	4	0	0	0	0	0	9
18世紀後葉1（註5）	10	18	33	88	13	0	0	0	0	0	11
18世紀後葉2（註6）	4	7	20	62	5	0	0	0	0	0	0
18世紀末葉～19世紀初（註7）	13	23	3	127	3	9	0	0	1	1	9
19世紀中葉1（註8）	0	1	0	274	0	3	0	0	0	0	9
19世紀中葉2（註9）	0	0	2	173	0	6	4	0	0	0	2

(※1) 第9地点7・8層および16号出土資料

(※2) 第5地点北区Ⅳ・Ⅴ号出土資料

(※3) 第5地点4号土坑および北区V号出土資料

(※4) 第5地点3号土坑出土資料

(※5) 第9地点16号土坑埋土4層以下出土資料

(※6) 第9地点15号土坑埋土4層以下出土資料

(※7) 第9地点2号出土資料

(※8) 第5地点1・2号地点土質料

(※9) 第10地点2区Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ号出土資料

れ、全体としては陶器の大部分が東北産で占められるようになる。

(2) 江戸時代初期の陶磁器に関する問題

これまで述べてきたように、仙台城二の丸跡第9地点下層出土の陶磁器（図66・67）は、その廃棄年代を1600年から1638年に限定しうる良好な一括資料であり、年代的な指標となるばかりでなく、当時の焼物の流通と使用の実態を知る上で基準となる。そこで、①同定が比較的容易であり、かつ多様性がみられる陶器の産地別組成と、②陶器・磁器だけでなく土師質・瓦質土器を含めた焼物全体の材質別組成の2点に着目し、他の消費地遺跡の資料との比較をおこない、東北地方における近世初期の陶磁器の使用のあり方を、全国的な視点から論じてみたい。

① 陶器の産地

仙台城二の丸跡では、二の丸造営以前、即ち寛永15年（1638年）以前には、唐津の製品が瀬戸・美濃産陶器を上回る量出土し、陶器全体の過半数を占めていることが明らかとなった。

これまでに、唐津の流通に関しては、関西から東日本日本海側にかけて多く出土し、瀬戸・美濃製品の流通圏内に位置する東日本太平洋側では極めて少ないと指摘がなされている（大橋康二1984、西田・大橋1988）。仙台城は、大橋氏が唐津の分布が希薄であるとした東日本太平洋側に位置するが、前述の通り、実際には唐津の出土量は少なくない。そこで、仙台城二の丸跡出土の唐津の評価を正しく行い、更にこの時期の陶器の流通の実態を明らかにするため、他の消費地遺跡での陶器の産地別組成を検討する。唐津の生産に関しては、寛永14年（1637年）の磁器生産の保護育成を目的とした佐賀鍋島藩による伊万里・有田地方の窯場の整理・統合事件以後、急激に生産量が減少するとの指摘がなされている（大橋康二1993）。また、堺環濠都市遺跡のように、時代を追って陶器の産地別組成の検討を行える消費地遺跡では、初期伊万里の登場する前後の時期に唐津の比率が最も高まることが確認できる（土山健史1996など）。したがって今回は、唐津の生産・流通が最も活発であったと考えられる17世紀初頭から前葉、即ち、慶長から寛永期に比定される消費地遺跡の一括資料を検討の対象に選んだ。なお、遺跡の性格に由来する要素をできるだけ排除する必要があるため、城館、城下町等の都市遺跡に限定し、一般の集落遺跡の資料は用いなかった。陶器の産地別組成比率は、全国で7遺跡8資料について算定し、その結果を図68、表16に示した。

江戸より西の地域では、二大窯業生産地である肥前地方と瀬戸・美濃地方からの距離によって、唐津と瀬戸美濃の比率が決まる。即ち、肥前に比較的近い富田川河床遺跡（註4）や堺環濠都市遺跡（註5）では唐津の比率が高く、逆に肥前から遠く離れた名古屋城三の丸跡（註6）、駿府城三の丸跡（註7）、小田原城三の丸跡（註8）では唐津の比率が低く、瀬戸・美濃製品の比率が高い傾向が認められる。特に瀬戸・東濃地方に近接する名古屋城三の丸跡ではその傾

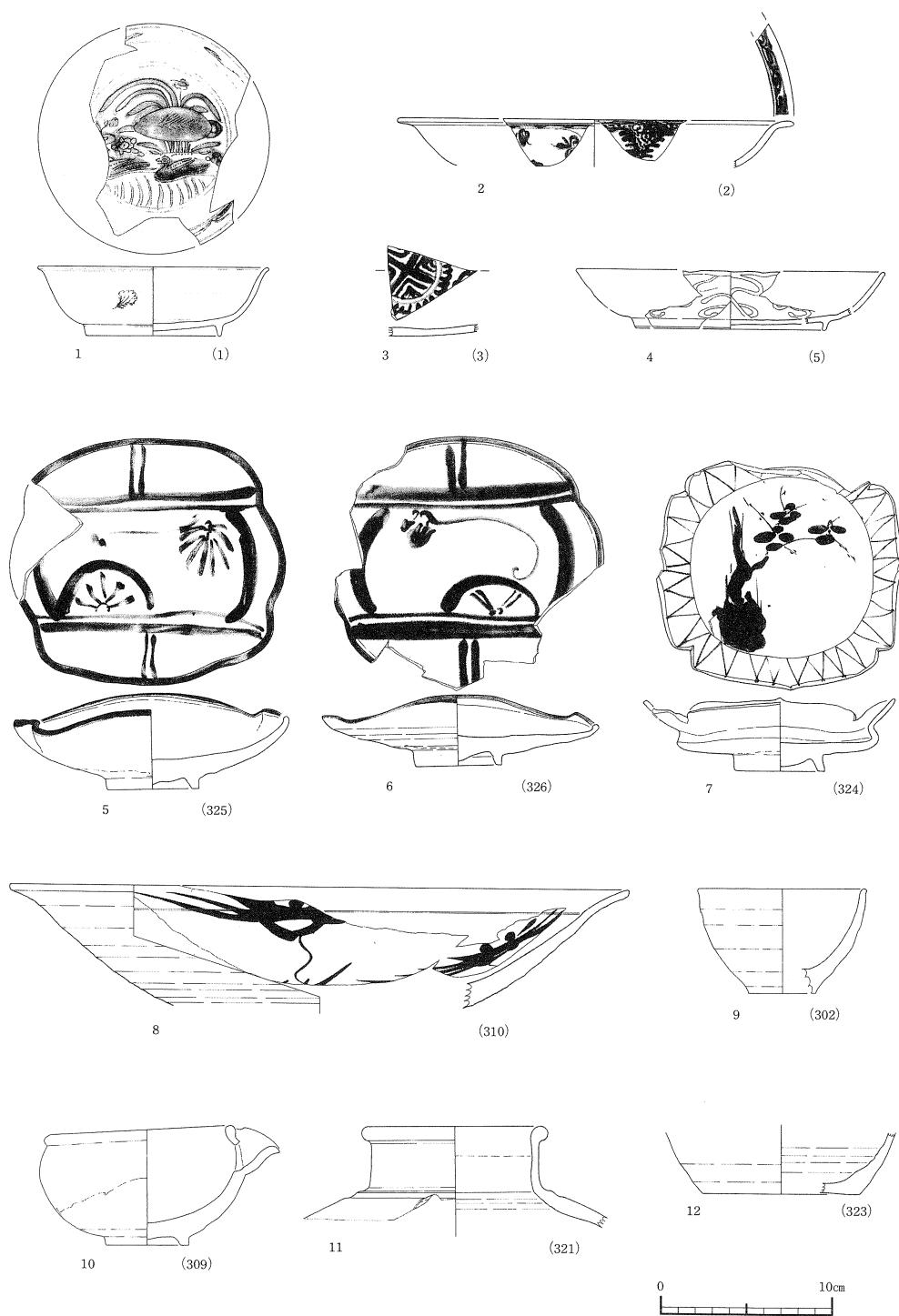


図66 仙台城二の丸跡第9地点8層出土陶磁器

Fig. 66 Porcelains and glazed ceramics from layer 8 at NM9

1～4 中国系磁器 (2と3は同一個体)

5～10 肥前系陶器 (唐津)

11、12 産地不明陶器

the end of the 16th century.
the beginning of the 17th century

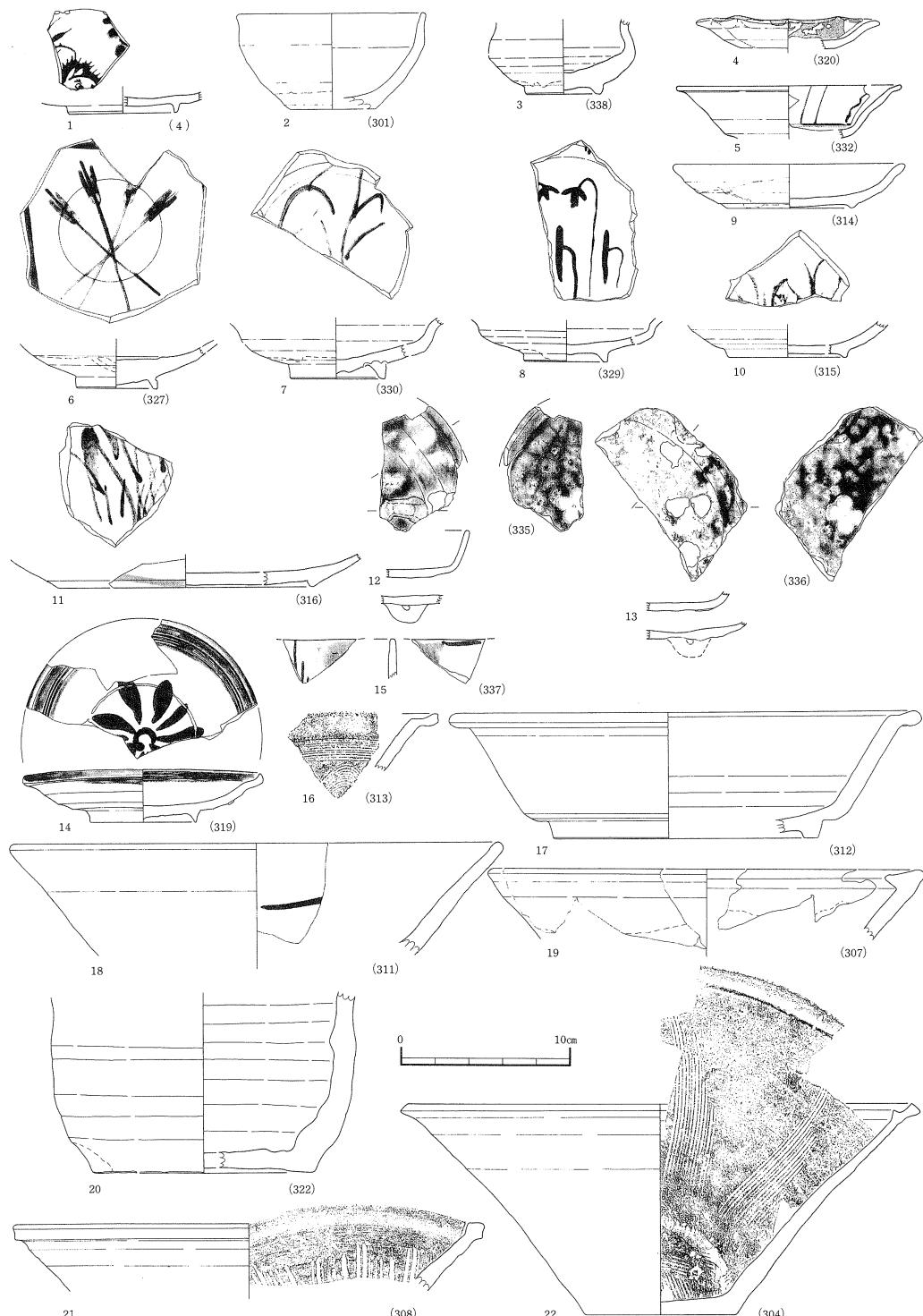


図 67 仙台城二の丸跡第9地点16号溝・7層出土陶磁器

Fig. 67 Porcelains and glazed ceramics from Ditch 16 and layer 7 at NM9

1 中国系磁器
3 ~ 8、19、21 肥前系陶器(唐津)
2、9 ~ 18、22 潤戸・美濃系陶器
(9 ~ 11 志野 12、13 織部 14、15 志野織部)
20 信楽系陶器

the end of the 16th century -
the early 17th century

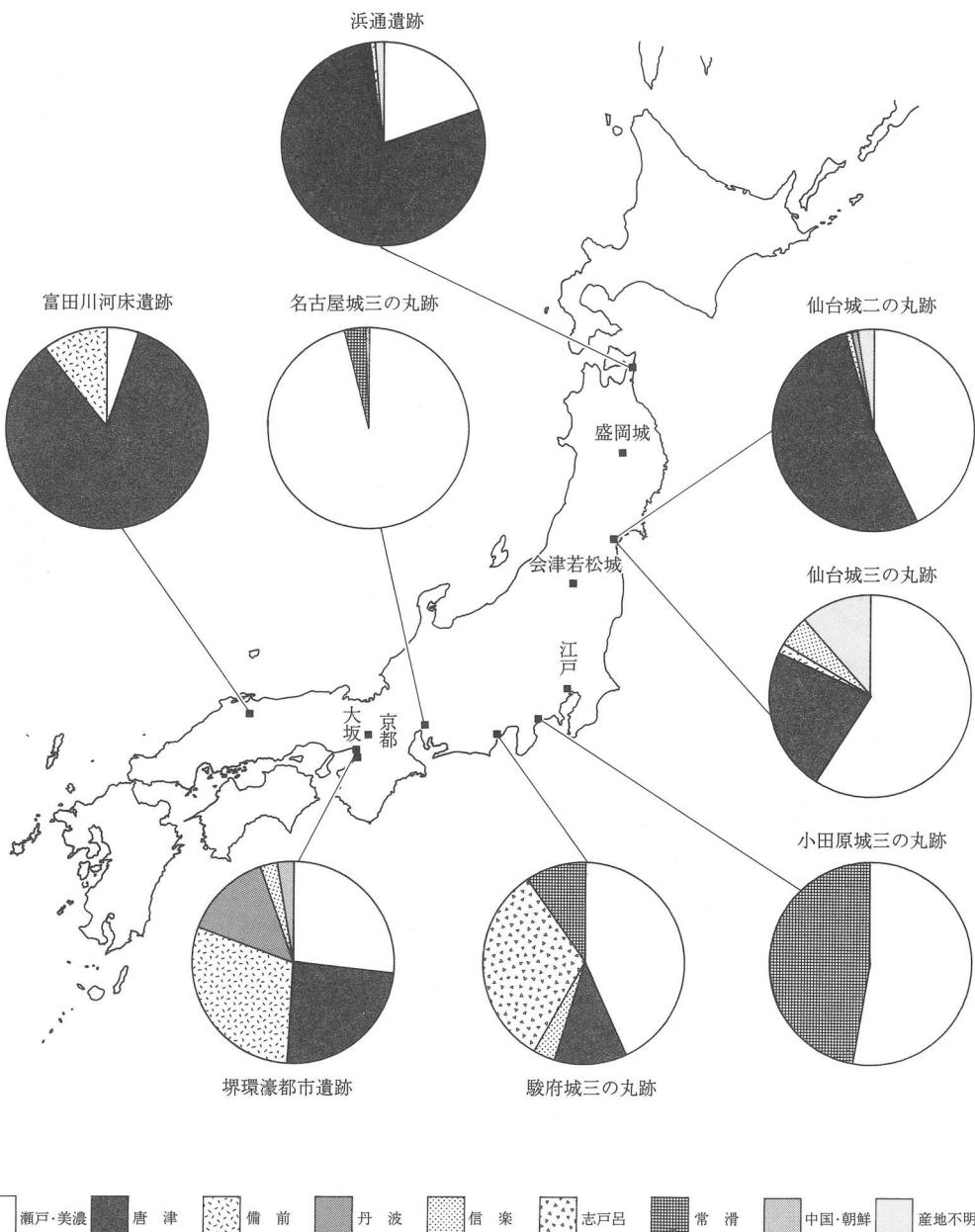


図68 江戸時代初期の陶器の産地別比率

Fig. 68 Histograms of glazed ceramics belonging to early Edo period by producing district

表16 江戸時代初期の一括資料における陶器の産地別出土点数

Tab. 16 Count of glazed ceramics belonging to early Edo period at several sites by producing district

17世紀初頭～前葉（慶長～寛永期）陶器	瀬戸・美濃	唐津	備前	丹波	信楽	志戸呂	常滑	中国・朝鮮	産地不明
浜通遺跡	29	116	1	0	0	0	0	0	2
仙台城二の丸跡第9地点8・7層、16号溝	65	80	0	0	1	0	0	1	4
仙台城三の丸跡I期	142	55	4	0	12	0	0	0	27
小田原城三の丸箱根口3号堀跡	9	0	0	0	0	0	8	0	0
駿府城三の丸跡SX01（大井戸状遺構）	153	41	0	0	10	114	33	0	0
名古屋城三の丸遺跡SK479	507	0	0	0	0	0	17	0	2
堺環濠都市遺跡（SKT）78地点SB001・002	10	9	11	5	1	0	0	1	0
富田川河床遺跡 '81 I P区SB020砂層	2	31	4	0	0	0	0	0	0

向が強く現れている。唐津と瀬戸・美濃以外の陶器の産地は、遺跡による差が大きい。その原因は、碗や皿といった小型の供膳具が唐津や瀬戸・美濃産であるのに対して、江戸より西の地域では、擂鉢・甕といった大型の加工・貯蔵具は、基本的にそれぞれの地方で生産・消費が行われていたことに拠ると考えられる。即ち、擂鉢・甕の産地については、富田川河床遺跡では唐津と備前、堺環濠都市遺跡では備前と丹波、駿府城三の丸跡では瀬戸・美濃と志戸呂と常滑、小田原城三の丸跡では瀬戸・美濃と常滑のものが主体的である。

京・大坂では、京都市内や、大坂城跡および城下町、堺環濠都市遺跡から当該期の遺物が大量に出土しており、唐津の出土量も多い。元和6・7年（1620・1621年）銘の木簡を共伴した大阪市中央区高麗橋1丁目安曇寺跡（大坂城船場魚市場遺跡：A Z87-5）SX201出土資料は、慶長19年（1614年）の大坂冬の陣の焼土層よりも新しく、遺構自体は、文献記録から元和8年（1622年）までこの地にあったことが判る、魚市場に伴う廃棄坑と考えられている。国産の施釉陶器の8割から9割が唐津で、瀬戸・美濃製品を圧倒している（註9）。

江戸では、慶長～寛永期に比定できる時期のまとまった資料は、従来乏しかったが、近年、東京大学本郷構内遺跡（註10）と丸の内三丁目遺跡（註11）で、当該期の廃棄土坑が検出された。どちらの資料でも陶器の大部分を瀬戸・美濃製品が占め、唐津の出土量はごく僅かである。

東北地方では、17世紀初頭から前葉のまとまった資料は、仙台城の他、福島県会津若松城、岩手県盛岡城、青森県下北郡東通村浜通遺跡の資料が知られる程度で、必ずしも多くはない。組成比率は、報告書等で数値データの公表されている、仙台城と浜通遺跡に関して算出した。

仙台城三の丸跡ではⅠ期（仙台市教育委員会1985、佐藤洋1987）の遺構、整地層から当該期の遺物が出土している。仙台城三の丸跡のⅠ期は、幕府からの許可がおりて仙台城の普請が開始された慶長6年（1601年）から、三の丸が造営される寛永15年（1638年）以前に相当する。報告書では、三の丸が造営される以前に、この地が「下屋敷」として利用されていた可能性が指摘されており、検出された遺構・遺物などから、その性格について、「茶の湯や饗応を行った私邸（別荘）」と推定されている。組成比率については、佐藤1987の文献にあるⅠ期の破片数のデータを用いた（註12）。磁器は中国産が多いが（84点）、初期伊万里も少量ではあるが含まれる（4点）。年代の下限が押さえられる肥前産磁器の出土例としては、東日本において最も古い時期の資料であり、流通面からみて重要な資料である。陶器の産地としては瀬戸・美濃が全体の約6割と最も多く、唐津がこれに次ぐ。仙台城二の丸跡の資料との比較では、瀬戸・美濃と唐津の順位が逆転している。両方の資料に時期的な差異はほとんどないことから、この違いは場の違いを反映していると考えられる。すなわち、二の丸跡下層の資料が屋敷内におけるより日常的な器種構成を示すのに対して、三の丸跡Ⅰ期の陶磁器は、「茶の湯や饗応を行った私邸（別荘）」としての非日常的な側面が強く反映されていることが考えられる。三の丸跡

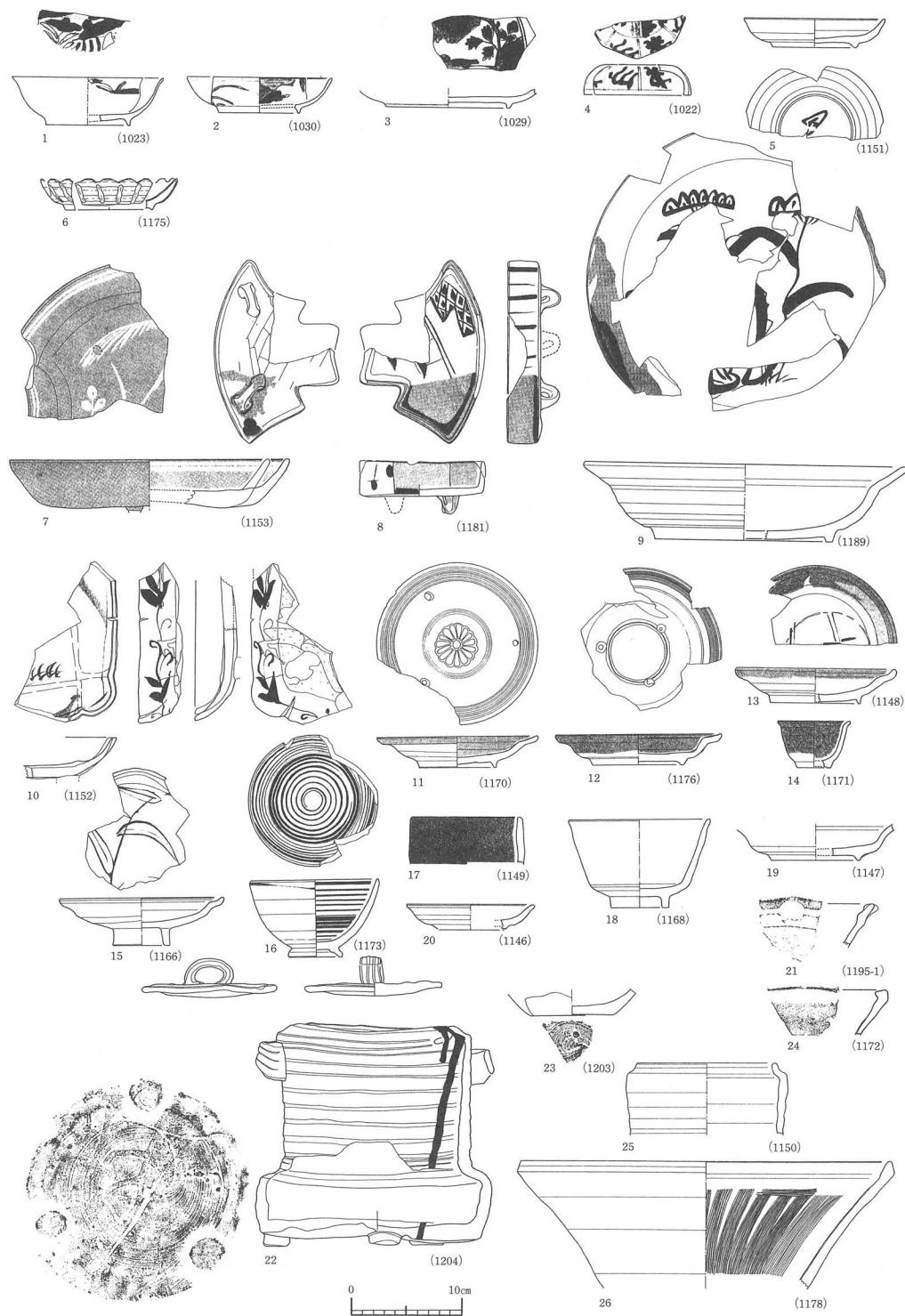


図69 仙台城三の丸跡5・6・9号土坑出土陶磁器
Fig. 69 Porcelains and glazed ceramics from Pit 5, 6 and 9 at the third citadel of Sendai Castle

1~4 中国系磁器 (4は漳州窯系)

5~22 潮戸・美濃系陶器

(5~7 志野 8~14 織部 15、16 志野織部 22 美濃伊賀)

23、24 唐津 25 備前 26 産地不明(常滑?)

the end of the 16th century-
the early 17th century

I期の資料のうち、茶室と考えられる遺構に近接し、美濃伊賀の水指などの茶陶の出土が目立つ6号土坑に限ってみれば、瀬戸・美濃製品の比率はさらに高くなる（註12参照）。このことからも、三の丸跡I期の資料は、茶陶としての瀬戸・美濃製品への偏りを内包している可能性の高いことが判る。上記のような場の違いによる比率の差はあるものの、仙台城における該期の陶器に占める唐津の比率は、江戸や東海地方に比べ高いことは明らかである。

会津若松城三の丸跡では、SK101とSX08から当該期の一括資料が出土している（柳内寿彦ほか1986）。磁器は青花が主体であるが、SX08では初期伊万里も1点出土している。SX08からは、大窯V期の天目茶碗、志野向付、織部碗が出土している。両遺構とも唐津が瀬戸美濃を上回る量出土している。唐津では碗と向付が確認でき、前者が多い。福島県内では他に、田村郡三春町の三春城下町遺跡群B地点からも当該期前後の遺物が多数出土している（平田禎文1995）。遺物の大部分は盛土層から出土しており、二次的に移動しているため時間的な幅を有するが、17世紀初頭から前葉の資料では、瀬戸・美濃製品が唐津に比べ多い傾向は窺える（註13）。

盛岡城跡では、SD910堀跡、3a層、3b1層などから当該期の遺物が出土している（八木・室野ほか1991）。このうち、SD910は、慶長年間（1597～1614年）の南部信直、利直による盛岡城築城期の遺構であり、3a層は腰曲輪を石垣積みにした際の盛土層に、同じく3b1層は、寛永13年（1636年）の本丸火災に伴う焼土層と考えられている。報告書では腰曲輪が石垣積みにされた実年代については直接触れられていないが、元和3年（1617年）から同5年（1619年）にかけて行われた修理普請（盛岡城二期工事）に関連する可能性が高いと考えられる（註14）。これらの資料には伊万里は含まれず、磁器は全て中国産である。陶器は瀬戸美濃製品の比率が高い。瀬戸美濃製品には、大窯II・III期の内ハゲ皿の他、呉須で三ツ巴連珠文を描いた鬚水入や筒型碗、型打菊皿、輪花鉢など、御深井釉製品も認められる。唐津は3b1層から17世紀の第1四半期に位置づけられた灰釉碗が出土している程度で少ない。

浜通遺跡は、下北半島の太平洋に面する河口に立地し、慶長16年（1611年）の大津波により、廃絶された可能性が高い遺跡である（三浦・大瀬1983）。遺跡からは、塙を有する大規模な建物跡5棟、中小規模の建物跡等、各種掘立柱建物跡、製鉄遺構、集団墓地などが検出されており、根城南部氏の目代所、日本海交易に関わる施設、戦国浪人や他国からの流謫の人々の居住地等の可能性が指摘されており、一般の集落の可能性は低い。出土した陶磁器の製作年代からみて、16世紀末葉から17世紀初頭の比較的短い期間営まれた遺跡である可能性が高い。報告書には、出土陶磁器に関して、破片数と個体数の両方のデータが示されているが、組成比率を求めるに際しては、後者の数値を用いた。唐津は陶器全体の8割近くにも及び、瀬戸・美濃の出土量を大きく上回っている。

以上のように、東北地方は、遺跡毎、地域毎に差異はあるものの、東海から江戸の諸遺跡に比べ、陶器全体に占める唐津の比率は総じて高い。なかでも浜通遺跡における唐津の比重は、西日本の遺跡と比較しても変わらないほどである。浜通遺跡には及ばないが仙台城や会津若松城においても唐津は比較的多く出土していると言える。逆に、奥州街道に近い脊梁山脈東側の盛岡城や三春城下町では唐津の比率が低い。このような東北地方における唐津のあり方は、瀬戸・美濃製品の比率が、全国的に見て、生産地からの距離にはほぼ比例するとの対照的である。東北地方出土の唐津製品には、瀬戸・美濃製品の流通ルート、即ち太平洋側ルート以外の経路で搬入されたものが少なくなかったと考えられよう。東北地方日本海側の遺跡のデータがないため明言できないが、分布状況からみて、東北地方から出土する唐津の多くは日本海ルートで入ってきた可能性が高いと考えられる。仙台城や会津若松城には、酒田や新潟といった日本海側の港町に陸揚げされ、そこから最上川、阿賀野川等の河川を利用した水運や内陸の街道を通って運ばれた可能性を考慮する必要がある。この点に関しては、今後、文献史料等による検証を要する。

② やきものの材質

やきものの材質分類に関しては、これまでの仙台城二の丸跡の報告に則り、磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器の4類に大別した（註15）。比較資料は、仙台城二の丸跡第9地点下層出土資料とほぼ時期的に対応する、17世紀初頭から前葉、即ち、慶長から寛永期に比定される消費地遺跡の一括資料とした。なお、遺跡の性格に由来する要素をできるだけ排除する必要があるため、城館、城下町等の都市遺跡に限定し、一般の集落遺跡の資料は用いなかった。やきものの材質別組成比率を求めたのは、5遺跡7資料であり、その結果を図70、表17に示した。名古屋城三の丸跡（註6）、駿府城三の丸跡（註7）、小田原城三の丸跡（註8）、小田原城下町（註16）等の東海から関東地方の遺跡では、瀬戸・美濃地方に近いこともあり、陶器の比率が高い。それと対照的なのが堺環濠都市遺跡（註5）である。堺の場合、磁器（青花）がやきものの全体の6割を超える。すでに森村氏等の指摘（森村健一1984）があるように、輸入陶磁器を日常の飲食器としていた、国際貿易都市・堺の実態をよく表している。大坂城、同城下町でも多量の輸入陶磁器、とりわけ青花の出土が見られるが、唐津の出現以降、国産の施釉陶器の比率が高まり、輸入陶磁器が減少する傾向にあるため（森毅1992）、堺とは異なる様相を示す。仙台城の場合には、豊臣後期の大坂城、同城下町の様相に近い。また、この時期、堺や京・大坂では、鉢、擂鉢、火鉢、香炉などの器種に、在地産の瓦質土器が少ないながらも一定量存在している。名古屋城三の丸跡、駿府城三の丸跡、小田原城三の丸跡・同城下町の組成で示したように、東海から関東にかけての地域では、これらの器種も陶器あるいは土師質土器がほとんどで、瓦質土器は例外的な存在といえる。仙台城では、この時期、瓦質の鉢、擂鉢、火入が出

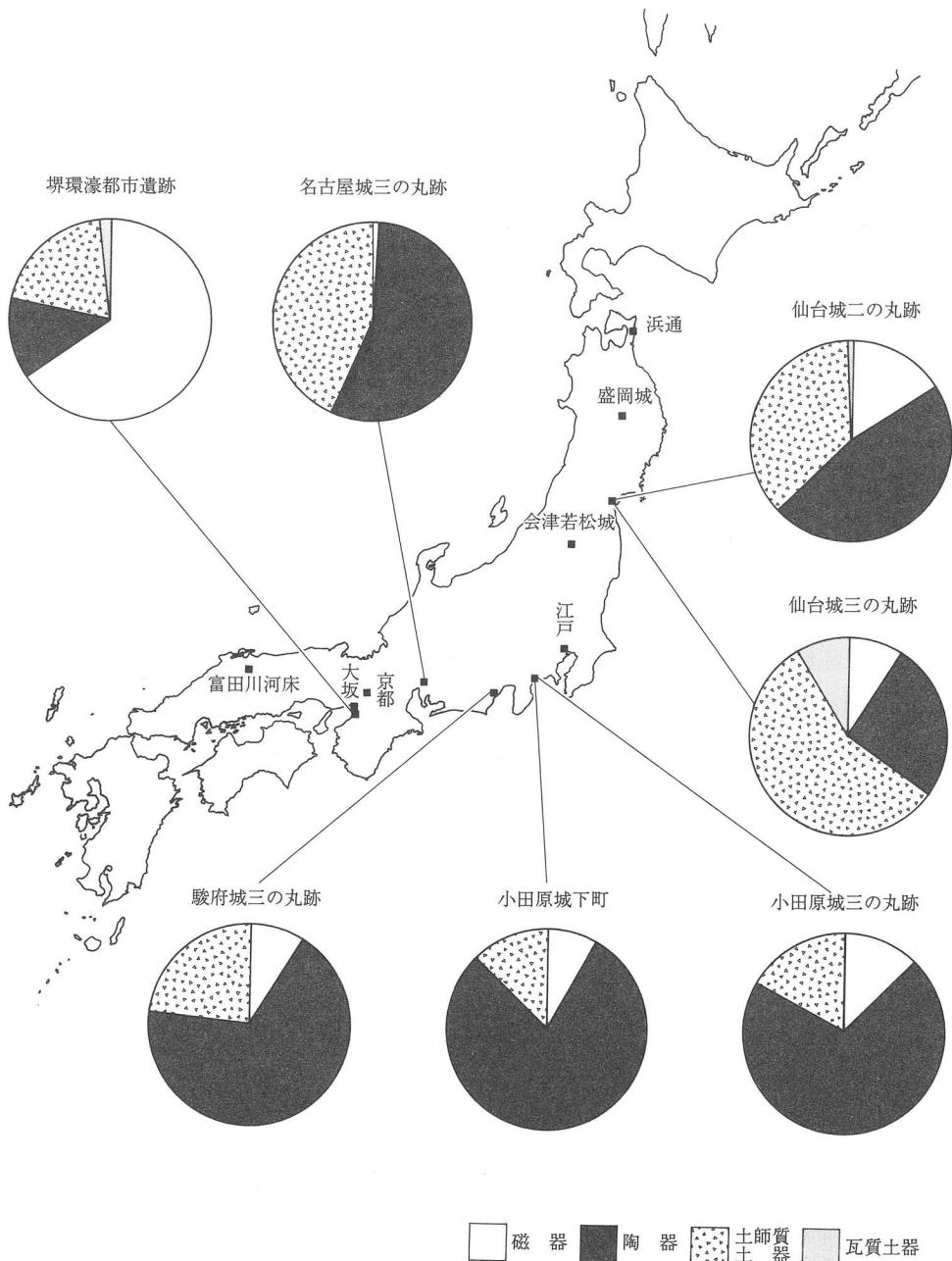


図70 江戸時代初期の焼物の材質別比率
Fig. 70 Composition of ware of early Edo period

表17 江戸時代初期の一括資料における焼物の材質別出土点数
Tab. 17 Count of ware belonging to early Edo period at several sites

17世紀初頭～前葉（慶長～寛永期）焼物	磁 器	陶 器	土師質土器	瓦 質 土 器
仙台城二の丸跡第9地点8・7層、16号溝	53	151	120	2
仙台城三の丸跡1期	88	240	240	81
小田原城三の丸箱根口3号掘跡	3	17	17	0
小田原城下横干橋町遺跡34号土坑	24	220	220	0
駿府城三の丸跡 SX01（大井戸状遺構）	47	351	351	0
名古屋城三の丸遺跡 SK479	13	526	526	0
堺環濠都市遺跡 (SKT) 78地点SB001-002	194	37	37	5

土しており、京・大坂の様相に近い。今後、仙台城出土の瓦質土器が、地元で作られたものなのか、京・大坂方面から運ばれたものなのかを追求する必要がある。

(3) 江戸時代中期の陶磁器に関する問題

ここでは、仙台城二の丸跡第9地点検出の2基のゴミ穴、すなわち15・16号土坑出土陶磁器を取り上げ、東北地方の他の遺跡や江戸遺跡との比較を通して、江戸時代中期の陶磁器の流通を論じてみたい。比較の視点は、陶磁器の産地別組成（図74、表18）である。

東北地方では、東北北半の近世遺跡を対象に、18世紀代の陶磁器の流通と組成が羽柴直人氏によって検討されている（羽柴直人1994）。検討の対象となった11遺跡のうち、江川鉄山跡（註17）以外は、時期的なまとまりに欠け、資料の算定方法にも問題点はあるが、およそその傾向性は捉えられている。羽柴氏は、東北北半を津軽地方、秋田藩領内、盛岡南部藩領、伊達藩領北部の4つの地域に分け、産地毎に陶磁器の流通量を比較している。それによれば、これらの地域は、圧倒的に肥前産の陶磁器の比率が高い津軽、秋田、盛岡領西和賀地方・北郡、大堀相馬産陶器の多い伊達藩領北部、肥前産陶磁器に少量の大堀相馬産陶器が加わる盛岡領北上川流域、瀬戸・美濃産陶器の出土量の多い盛岡領太平洋岸に大別されている（註18）。また、筆者は、以前、大堀相馬産陶器の編年と流通に関連して、大堀相馬の主な市場は相馬藩と仙台藩であり、その地域では完全に瀬戸・美濃を押さえて広く流通している点、盛岡藩や泉藩では大堀相馬と瀬戸・美濃が競合する状況にあった点を指摘した（年報7）。今回は、東北地方からは、仙台城二の丸跡と前述の江川鉄山跡の他、いわき市泉城跡5号土坑（註19）を比較資料に選んだ。

江戸遺跡においては、港区郵政省飯倉分館構内遺跡（港区麻布台一丁目遺跡調査会1986）、港区白金館址遺跡（同遺跡調査会1988）、文京区東京大学構内理学部7号館地点（東京大学遺跡調査室1989）、同医学部付属病院地点（東京大学遺跡調査室1990）、同御殿下記念館地点（東京大学埋蔵文化財調査室1990）、墨田区錦糸町駅北口遺跡（同遺跡調査団1996）等で、出土陶磁器の器種構成や産地別組成の数量的分析が行われている。また、そのような資料をもとに、佐々木達夫氏（佐々木1985・1987）や森本伊知郎氏（森本1989・1991）により、江戸市場における陶磁器の流通が検討されている。しかしながら、屋敷内における遺構の空間的位置や形態（成瀬晃司1994）、出土遺物の内容から、遺構一括出土資料について、それを使用した人々の階層や使用状況がある程度推定できるにもかかわらず、こうした資料の性格づけを充分に行わないまま、単に武家地出土というレベルで同一視し、年代的検討を優先させているケースも少なくない。ここでは、これらの報告書や論考で公表されたデータの中から、江戸市中の武家地出土の性格の異なる18世紀中葉～後葉の一括資料を選び、仙台城との比較を行った。比較対象資料

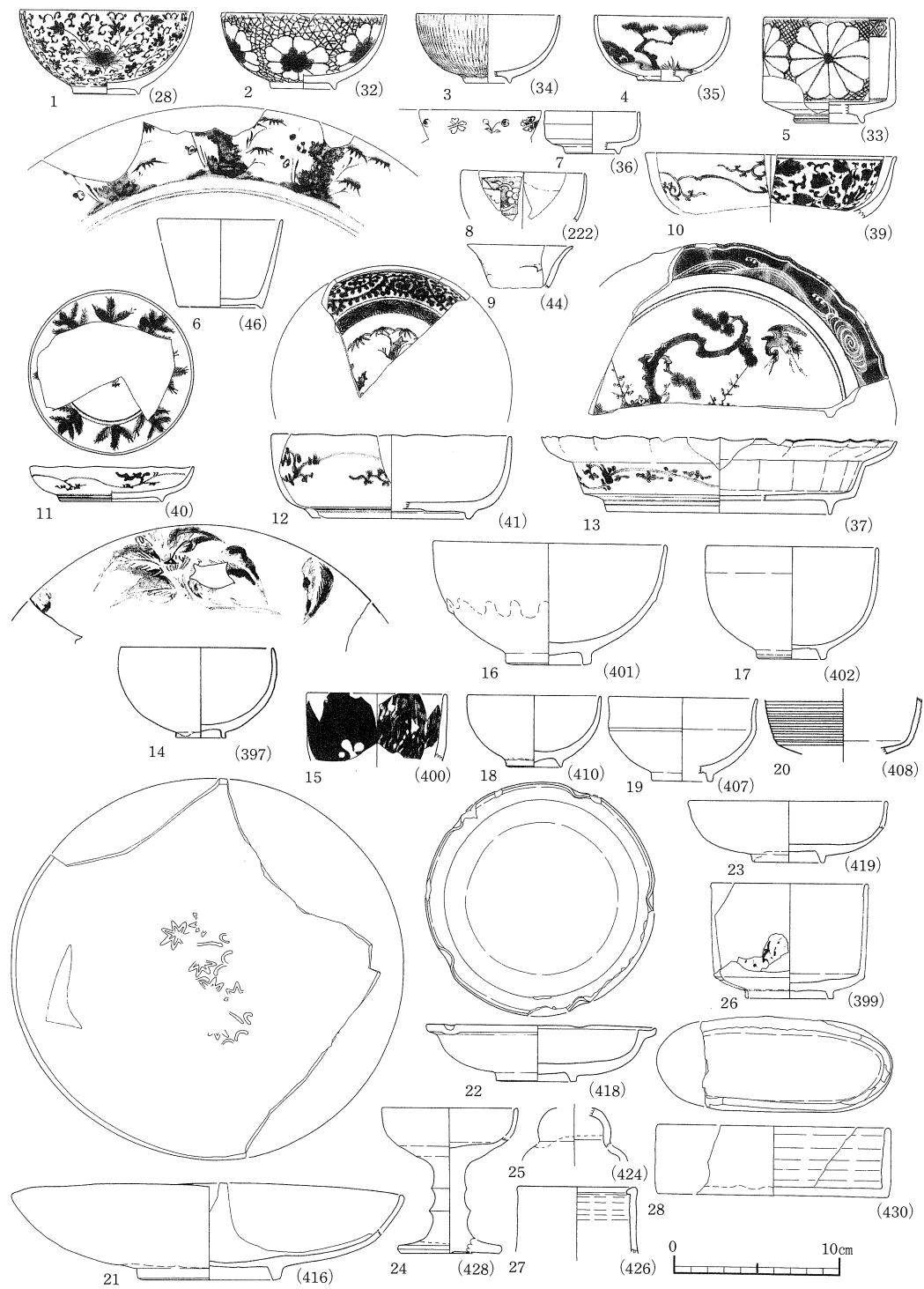


図71 仙台城二の丸跡第9地点15号土坑出土陶磁器
Fig. 71 Porcelains and glazed ceramics from Pit 15 at NM9

1~13 肥前系磁器 14 京・信楽系陶器
15 肥前系陶器 16~25 大堀相馬系陶器
26 濑戸・美濃系陶器 27, 28 小野相馬系陶器

the late 18th century

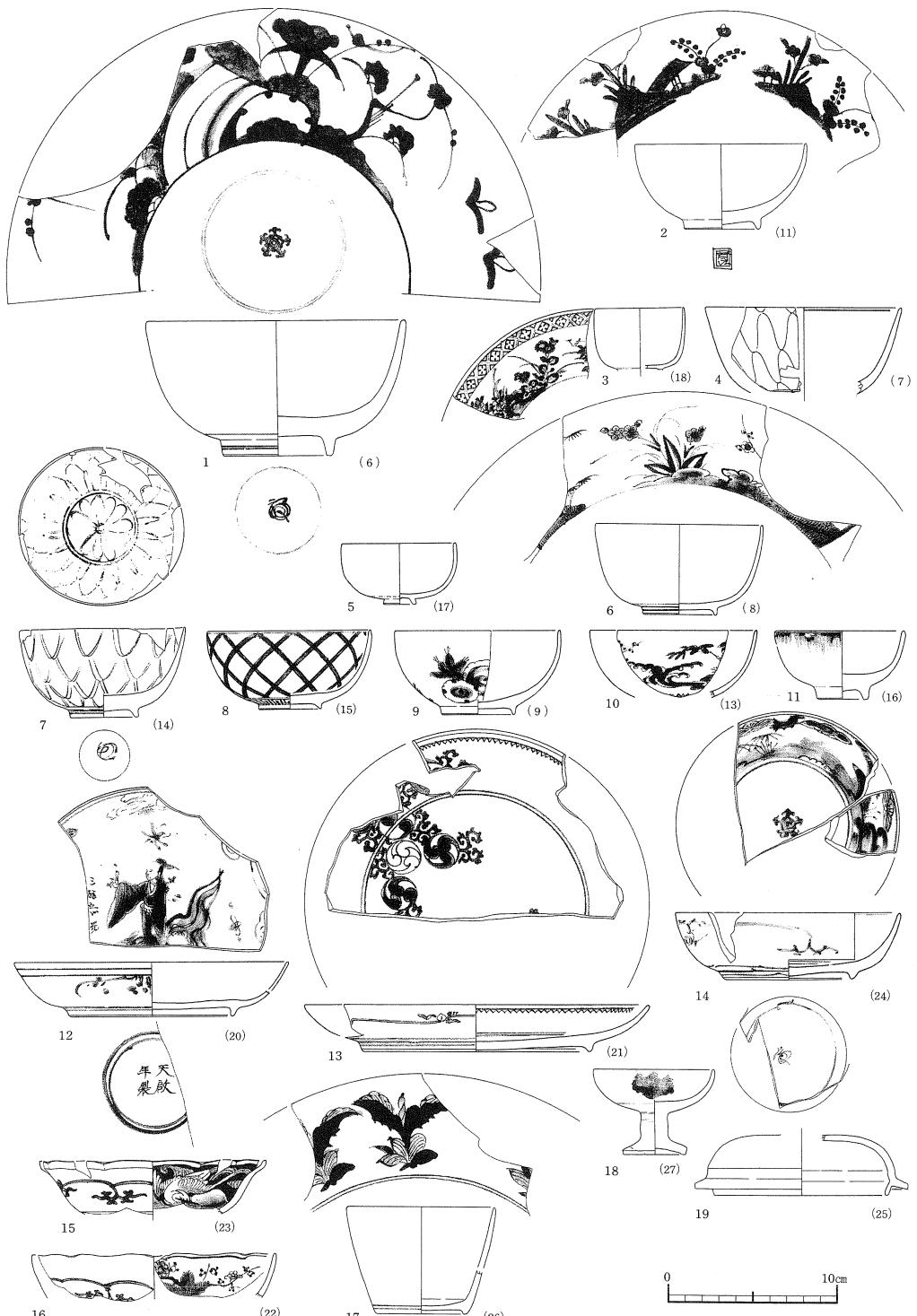


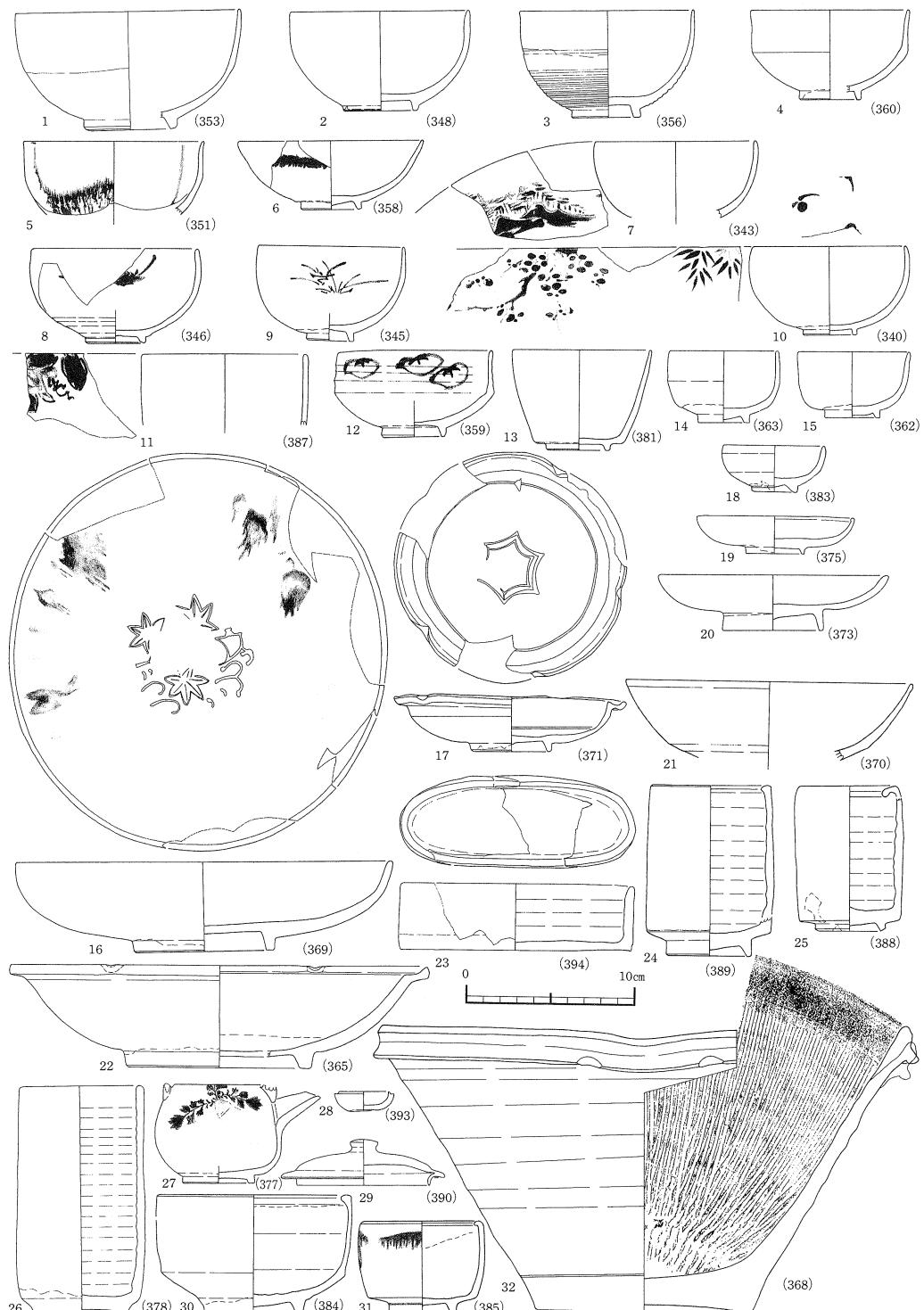
図72 仙台城二の丸跡第9地点16号土坑出土磁器

Fig. 72 Porcelains from Pit 16 at NM9

1~11, 13~19 肥前系磁器

12 中国系磁器

the late 18th century



1 ~ 6, 13, 16~19, 25, 29, 31 大堀相馬系陶器

7~11, 27, 28 京・信楽系陶器

14, 15 潤戸・美濃系陶器

20~24, 26, 30 小野相馬系陶器

12, 32 产地不明陶器

the late 18th century

図73 仙台城二の丸跡第9地点16号土坑出土陶器

Fig. 73 Glazed ceramics from Pit 16 at NM9

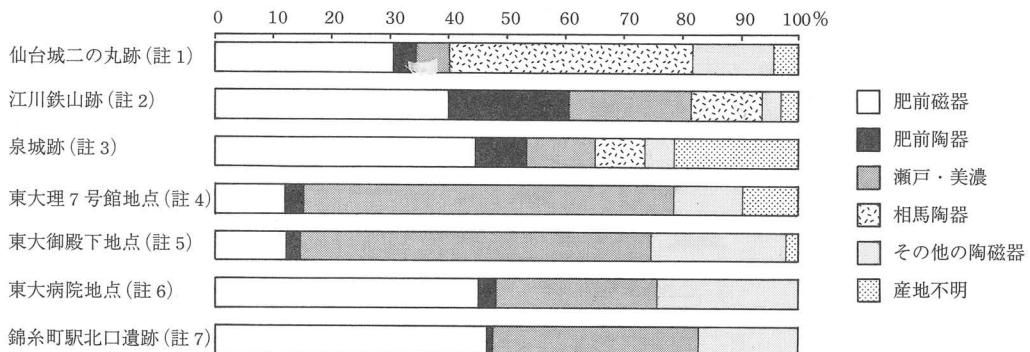


図74 18世紀中葉～後葉の陶磁器の産地別比率

Fig. 74 Histograms of ceramics belonging to the middle-late 18th century by producing district

表18 18世紀中葉～後葉の一括資料における陶磁器の産地別出土点数

Tab. 18 Count of ceramics belonging to the middle-late of the 18th century at several sites by producing district

出土陶磁器の産地別組成	肥前磁器	肥前陶器	瀬戸・美濃	相馬陶器	その他	不明
仙台城二の丸跡(※1)	126	14	25	168	58	18
江川鉄山跡(※2)	140	70	73	42	11	12
泉城跡(※3)	93	17	25	17	10	45
東大理7号館地点(※4)	14	3	71	0	13	11
東大御殿下地点(※5)	91	12	431	0	162	19
東大病院地点(※6)	262	13	160	0	141	0
錦糸町駅北口遺跡(※7)	125	1	94	0	46	0

(※1) 仙台城二の丸跡第9号地点15・16号土坑埋土4層以下出土陶磁器（年報8）
 (※2) 岩手県下閉伊郡岩泉町江川鉄山跡出土陶磁器（羽柴直人1996）
 (※3) 福島県いわき市泉城跡5号土坑出土陶磁器（中山雅弘1992）
 (※4) 東京大学理学部7号館地点4・5地下式土坑出土陶磁器（東京大学遺跡調査室1989）
 (※5) 東京大学御殿下記念館地点416号遺構（東京大学埋蔵文化財調査室1990）
 (※6) 東京大学医学部付属病院地点E22-1とY34-4の両遺構出土陶磁器（同上1990）
 (※7) 錦糸町駅北口遺跡第61号土坑（池）出土陶磁器（同遺跡調査団1996）

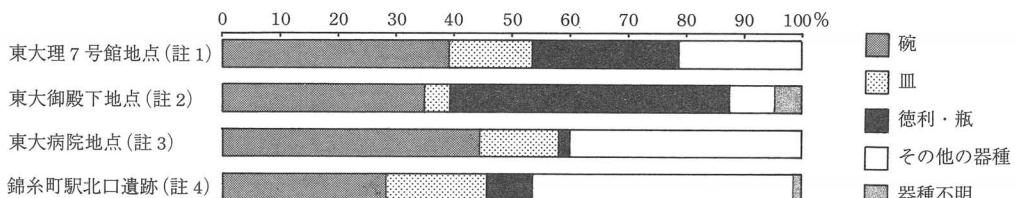


図75 江戸における18世紀中葉～後葉の陶磁器の器種組成

Fig. 75 Histograms of ceramics belonging to the middle-late 18th century from Edo sites

表19 江戸の18世紀中葉～後葉の一括資料における陶磁器の器種別出土点数

Tab. 19 Count of ceramics belonging to the middle-late 18th century from Edo sites by shape

出土陶磁器の器種別組成	碗類	皿類	瓶類	その他	不明
東大理7号館地点(※1)	44	16	28	24	0
東大御殿下地点(※2)	294	37	402	68	38
東大病院地点(※3)	256	78	10	232	0
錦糸町駅北口遺跡(※4)	76	46	20	120	4

(※1) 東京大学理学部7号館地点4・5地下式土坑出土陶磁器（東京大学遺跡調査室1989）
 (※2) 東京大学御殿下記念館地点416号遺構（東京大学埋蔵文化財調査室1990）
 (※3) 東京大学医学部付属病院地点E22-1とY34-4の両遺構出土陶磁器（同上1990）
 (※4) 錦糸町駅北口遺跡第61号土坑（池）出土陶磁器（同遺跡調査団1996）

は、東京大学理学部7号館地点4・5地下式土坑（以下「理学部7号館地点」と省略。註20）、同御殿下記念館416号土坑（以下「御殿下記念館地点」と省略。註21）同医学部附属病院地点E22-1・Y34-4土坑（以下「付属病院地点」と省略。註22）、錦糸町駅北口遺跡第61号遺構（以下「錦糸町駅北口地点」と省略。註23）の4資料である。なお、これらの資料については、性格の違いを明らかにするため、産地別組成に加えて、器種組成の検討も行った（図75、表19）。

東北地方では、江川鉄山跡と泉城跡の陶磁器の産地別組成が類似し、江戸では理学部7号館地点と御殿下記念館地点、付属病院地点と錦糸町駅北口地点が、それぞれ比較的近い組成を示す。大堀相馬の主要な流通圏内にある仙台城は、江川鉄山や泉城に比べ、大堀相馬の比率が高く、瀬戸・美濃や肥前産陶器の比率は低い。江川鉄山における肥前産陶器の比率は、仙台城や泉城に比べ高く、肥前産陶器の比率が高い東北北部の組成に近い様相を呈する。江戸遺跡から選んだ4資料に関しては、肥前産磁器が少なく瀬戸・美濃産陶器の多いものと、反対に肥前産磁器が多く瀬戸・美濃産陶器が少ないものに大別できる。器種組成との関係では、前者は徳利（瀬戸・美濃産の「貧乏徳利」や志戸呂産の「由右エ門徳利」）の出土量が目立ち、後者は器種が豊富で、特定の器種への極端な偏りが見られないという違いがある。また、同じ器種の材質を比較した場合でも、例えば、前者は圧倒的に瀬戸・美濃産の陶器碗が多いのに対して、後者は磁器碗も比較的多くみられるといった違いが認められる。陶磁器を出土した遺構の屋敷地内における位置（註20～23参照）や器種構成からみて、両者には、それらを使用した人々の階層差に由来する生活習慣の違いが反映されている可能性が考えられよう。取り上げた東北地方の3遺跡の陶磁器の産地別組成は、江戸遺跡のなかで、磁器が多く、瀬戸・美濃産陶器が少ないと近いといえる。東北地方で取り上げた3遺跡は、城館と製鉄遺跡であり、今後、城下町や農村部での調査例との比較を通して、陶磁器の使用に関する階層性についても検討して行かねばならない。

(4) 小結

近世初期の仙台城においては、日常の食器として、漆器の椀に陶磁器の皿といった組み合わせが用いられており、それは、東国の中世的供膳具の伝統を強く受け継ぐものであった。この時期、磁器は全て中国産であり、陶器は、茶陶を除くと、唐津が瀬戸・美濃を上回る量出土する。慶長から寛永期における陶器の産地別組成を全国的に検討した結果、江戸より西の地域では、二大窯業生産地である肥前地方と瀬戸・美濃地方からの距離によって、唐津と瀬戸・美濃の比率が決まること、東北地方は東海・江戸に比べ唐津の比率が高いことが判った。今後、文献記録等での検証を要するが、東北地方から出土する唐津の搬入経路としては、日本海ルート

が重要であろうとの仮説を呈示した。

漆器の椀に陶磁器の皿といった伝統的供膳具の構成は、遅くとも17世紀末には肥前産の磁器碗の普及に伴い崩れ、陶磁器中心の構成へと変化する。そのような変化が完成したのは18世紀前葉であり、それは、安価な「くらわんか手」と呼ばれる波佐見の磁器と、隣接する相馬藩で作られた相馬陶器（大堀相馬・小野相馬）が多量に流入するようになったことによる。18世紀代には、磁器は肥前、陶器は、高級品が京・信楽、一般普及品は相馬といった使い分けが確立している。18世紀後葉の一括資料を用いて、同時期の江戸の武家屋敷出土資料と、陶磁器の器種構成の比較を行った結果では、江戸遺跡の資料が、肥前産磁器が少なく瀬戸・美濃産陶器の多いもの（長屋等の「詰人空間」から出土）と、肥前産磁器が多く瀬戸・美濃産陶器が少ないもの（「御殿空間」から出土）に分けられ、仙台城の様相は後者に近いことが判った。

19世紀には、磁器は瀬戸が肥前を上回るほか、切込、平清水といった東北地方の小規模窯の製品が用いられるようになる。陶器に関しては、大堀相馬が供膳具を中心に前代に引き続き高い比率を占める一方、小野相馬は急激に減少し、代わって擂鉢・焙烙・甕といった調理具・貯蔵具では城下の堤が主体的となる。幕末の仙台城出土陶磁器に関して認められた、「器種の多様化」と「産地の地方化」は、この時代の全国的な消費動向に合致するものといえる。

（註1）大堀相馬産の土瓶は、比較的大型で器壁が薄いうえ、規格性が高く、個体の識別が困難である。したがって、それが主体的であるこの時期の袋物の割合は、実態よりも多めに算出してしまっている可能性がある。なお、19世紀になって江戸市場に流入する大堀相馬産陶器の大半が土瓶であることから、その当時、全国的にみても高い競争力を持った製品であったことが判る。

（註2）例えば、13世紀後半から15世紀前半の資料が主体の、仙台市若林区今泉城（佐藤洋ほか1983）の11号溝では、陶器の壺、鉢、甕が多く、土師質・瓦質土器を含め、やきものの全体を見回しても、碗・皿といった日常の食器に当たるものがほとんど見られない。一方で、11号溝からは漆椀がまとまって出土しており、これが日常の食器のなかで中心的な位置を占めていたと考えられる。同様の傾向は、仙台市太白区中田南遺跡（太田昭夫1994）などでも看取され、ある程度一般化できよう。

（註3）相馬藩領内で作られた施釉陶器の総称として、「相馬陶器」の名称を用いる。以前、これと同義で、「相双陶器」の名称を用いたが（年報7・8）、明治以降つくられた「双葉郡」の文字を含む名称は、江戸時代の遺物を対象とする歴史用語としては不適切であるとの認識から、今回改めることとした。この点に関して御指摘頂いた、大迫徳行氏、中山雅弘氏に感謝申し上げる。

(註4) 島根県能義郡広瀬町の富田川河床遺跡は、中世後期に尼子・毛利・堀尾氏の居城である月山富田城の城下町であり、寛文6年(1666年)の大洪水によって壊滅したとされる。`81IP区SB020砂層中から、寛永21年(1644年=正保元年)銘木簡と共に伴して、青花6点(碗3・皿3)、伊万里2点(碗)、唐津31点(碗1・皿16・鉢5・他9)、志野1点、美濃鉄釉碗1点、備前4点の陶磁器が出土している(村上勇1986)。

(註5) 堺環濠都市遺跡(SKT)78地点SB001・2出土資料。元和元年(1615年)の大火面の遺構であり、データは森村健一1984文献に拠った。

(註6) 名古屋城三の丸跡SK479出土資料。磁器は全て中国産で、錢貨は渡来錢のみである。陶器には、元屋敷窯に見られる織部や、赤津B窯等の大窯末期の製品を含む。これらの出土遺物から、土坑の年代は、名古屋城の造営が開始された慶長15年(1610年)から、寛永通宝の本格的な鋳造が開始され、普及し始めた寛永13年(1636年)までの間と考えられている(梅本博志編1990)。

(註7) 静岡県駿府城跡三ノ丸SX01(大井戸状遺構)では、元和3年(1617年)の刻銘のある木簡と共に伴して陶磁器が出土している(伊藤・岡村1990)。瀬戸・美濃製品と志戸呂製品の多くは、大窯V期から登窯I期に属し、志野・織部の両者を含む。唐津製品は胎土目である。磁器は全て舶載品で、伊万里は含まれない。組成比率算定に用いた数値は破片数であり、「同一層位中で複数の破片が接合したものについては全体で1つと数え、他層位間で接合したものについて各々の破片1点について1つと数えた」(伊藤・岡村前掲)。

(註8) 小田原城および城下町出土の遺物に関しては、小田原編年の第Ⅲa期(前期大久保時代)と第Ⅲb期(番城時代)の資料が比較検討の対象となる。年代的には、前者は1590-1610年代に、後者は1610-30年代にほぼ相当する。陶磁器との関係では、志野、唐津の出現をもって第Ⅲ期の開始とし、織部の有無でⅢa期とⅢb期に細分されている。陶器の産地別比率は、データの呈示がなされているⅢa期の三の丸箱根口3号堀跡出土資料(諏訪間・井上ほか1992)を用いた。同堀跡は、絵図との対比から寛永9年(1632年)以前に位置づけられ、慶長期の特徴を有する瓦が共伴している。報告者は、検出された堀は、慶長19年(1614年)の大久保忠隣の改易に伴う、小田原城の大破却の際に埋め立てられたと推定している。磁器は中国産の青花と白磁に限られ、伊万里は含まない。鉄絵草花文志野小皿を含み、織部は存在しない。

(註9) 数値データは、「個体数を比較すると唐津691点に対し、瀬戸・美濃132点である。しかし、唐津については底部が残存するもののみを計算した結果であり、実際の個体数は1000点を越えるものと思われる」(森毅1991)、「唐津焼は目積み痕が認められる299点の内、砂目は12点のみであった」(森毅1992)と公表されている。

(註10) 東京大学本郷構内薬学部新館地点SE67出土遺物(佐藤・遠藤・堀内1996)は、出土

した梅鉢文の瓦の存在から、廃棄された年代の上限を、前田家が本郷邸を拝領した、元和2～3年（1616～17年）とすることができる。点数が少なく磁器は出土していない。陶器は瀬戸・美濃主体で、鍔状口縁見込蘭竹文志野小皿、鍔状口縁総織部小皿、緑釉流し掛け笠原鉢等が認められる。擂鉢は瀬戸・美濃と丹波が確認できる。

(註11) 千代田区丸の内三丁目遺跡52号土坑出土遺物（東京都埋蔵文化財センター1994）。磁器は青花を主体とするが、吹墨技法を用いた初期伊万里の丸皿も伴う。陶器は、104点中、唐津は4点で、瀬戸・美濃中心。瀬戸・美濃産陶器には、天目茶碗、黒織部沓茶碗、鉄絵草花文志野小皿、鉄絵見込蘭竹文志野小皿、鍔状口縁部に織部釉を掛けた見込蘭竹文小皿、笠原鉢等が見られる。擂鉢は、瀬戸・美濃、丹波、備前が認められる。

(註12) 仙台市教育委員会の田中則和氏、佐藤洋氏の御厚意により資料を実見する機会を得た。元和の紀年銘木簡を出土した6号土坑からは、同一個体認定後の破片数にして57点の陶器が出土している。実見により、その產地別出土点数は、瀬戸・美濃50点（うち志野6点、織部20点、志野織部9点）、唐津4点、備前1点、產地不明2点であることを確認した。

(註13) 三春町教育委員会平田禎文氏の御厚意により、遺物を実見する機会を得た。天目では瀬戸・美濃以外に、福島県会津大塚山窯跡（石田明夫ほか1996）や静岡県初山窯跡の製品が確認されており注目される。

(註14) 八木光則氏の御教示による。

(註15) 分類基準については、年報8の34頁を参照のこと。

(註16) 小田原編年Ⅲb期の欄干橋町遺跡34号土坑出土資料（諏訪問順1993）を用いた。本土坑からは280点の陶磁器が出土しており、うち志野62点、織部15点、唐津4点が含まれている。

(註17) 岩手県下閉伊郡岩泉町に所在する製鉄遺跡。文献記録によって、鉄山の操業期間を1740年から1752年の間に限定できることから、陶磁器の年代推定上、重要な遺跡である（羽柴直人1994, 1996）。岩手県埋蔵文化財センターの羽柴氏の御厚意により、資料を実見する機会を得、基礎データ等の御教示を頂いた。集計値は、個体識別不能な細片を除いた個体数である。

(註18) 羽柴氏が大堀相馬に分類した陶器は、筆者のいう大堀相馬と小野相馬の両者を含む。

(註19) 「板倉伊豫守（荷）」と書かれた木簡と、「泉湊伊織」銘刻印の焼塙壺が共伴していることから、遺物の廃棄年代を、焼塙壺の年代の上限である1738年から、板倉氏が泉城を去った延享3年（1746年）の間におくことができる。なお報告書では、出土遺物について、板倉氏が泉城を去るに際して処分した可能性が指摘されている（中山雅弘1992）。

(註20) 報告書によれば、加賀藩前田家上屋敷のなかで、元禄以降幕末まで、「八筋」と呼ばれる江戸在住藩士のための御貸長屋が置かれていた場所にあたり、今回検討の対象とした4・5地下式土坑出土の陶磁器は、長屋に居住する上級家臣の家来や奉公人が日常使用・廃棄した

ものと考えられる。数値は、報告書に掲載されたデータのうち、「底部（ないし高台部）が1／2以上残存している資料の個体数」を用いた。

（註21）報告書によれば、加賀藩前田家上屋敷のなかで、馬場およびそれに附属する馬屋や「飼料所」がおかれていた場所にあたる。今回検討の対象とした416号土坑では、陶磁器は埋土の下部に多く、上部には「馬の飼料と推定される植物質の腐食した黒色土」が存在していたとの所見が得られている。数値は、鈴木裕子1990文献に掲載された破片数を用いた。

（註22）報告書によれば、中央診療棟E22-1遺構は、加賀前田家の支藩である大聖寺藩上屋敷の「御殿空間」の東北隅に隣接する地点に、設備管理棟Y34-4遺構は、同じく裏門東側の「詰人空間」部分に該当する。

（註23）報告書によれば、本遺跡は、元禄以降、北半分が旗本大嶋家の屋敷、南半分が信濃小諸藩牧野家の下屋敷に該当する。検討の対象とした第61号遺構は、大嶋家の屋敷地内で検出された横木と杭で護岸した不整形の池跡で、廃絶後にゴミ穴に利用されている。出土した陶磁器に、色鍋島の中皿、茶道具の磁器箸置き、クレイパイプといった高級品がみられる。大嶋家の知行地である美濃席田郡から送られた荷物に付いていたと考えられる「大嶋糸」銘の木簡が含まれることから、出土遺物は大嶋家で使用された品々であったと考えられている。なお、「大嶋糸」とは、安永7年（1778年）、23歳で家督を相続し、文化12年（1815年）に死亡した、7代大嶋織之助義順の可能性が高いことが指摘されており、資料に年代的な根拠を与えている。数値は、報告書にある「推定個体数」を用いた。

《引用・参考文献》

- 石田明夫ほか 1996 『会津本郷焼技術技法』 会津本郷焼事業協同組合
- 伊藤寿夫・岡村涉 1990 「駿府城跡三ノ丸SX01出土の輸入陶磁器について」『貿易陶磁研究』10 pp. 133～142 日本貿易陶磁研究会
- 伊野近富 1986 「京都・左京内膳町跡出土の「慶長九年」（1604）資料」 『貿易陶磁研究』6 pp. 57～60 日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1991 「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」
『関西近世考古学研究』 I pp. 56～74
- 梅本博志編 1990 『名古屋城三の丸遺跡（I）』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書15
- 太田昭夫 1994 『仙台市中田南遺跡』 仙台市文化財調査報告書182
- 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」 『国内出土の肥前陶磁』 pp. 152～157
佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』 考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社
- 小田原市教育委員会編 1990 『小田原城とその城下』
- 小野正敏 1997 「陶磁器からみる房総の城の生活と文化」（第6回「房総里見氏と稻村城をみつめる」講演

- 録) 『里見氏稻村城をみつめて』 第二集 pp. 86~117
- 佐々木達夫 1985 「物資の流れ－江戸の陶磁器－」 『季刊考古学13 江戸時代を掘る』 pp. 48~50
- 佐々木達夫 1987 「江戸へ流入した陶磁器とその背景」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 14 pp. 189~230
- 佐藤洋 1987 「仙台城三の丸跡出土の陶磁器」 『貿易陶磁研究』 7 pp. 41~48 日本貿易陶磁研究会
- 佐藤洋ほか 1983 『今泉城跡』 仙台市文化財調査報告書58 仙台市教育委員会
- 佐藤律子・遠藤香・堀内秀樹 1996 「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部新館地点SE67出土遺物の年代的考察」 『東京大学構内遺跡調査研究年報』 1 pp. 263~277
- 嶋谷和彦 1984 『堺環濠都市遺跡発掘調査報告－宿院町東4丁SKT14地点・調御寺跡－』 堺市文化財調査報告20 堺市教育委員会
- 嶋谷和彦 1986 「堺環濠都市遺跡（SKT14）出土の寛永4年～正保4年の陶磁器」 『貿易陶磁研究』 6 pp. 67~74 日本貿易陶磁研究会
- 白神典之・増田達彦 1991 「堺における近世の陶磁器と土器について」 『関西近世考古学研究』 I pp. 155~184
- 鈴木重治・橋本久和 1982 「堺出土の輸入陶磁器について」 『貿易陶磁研究』 2 pp. 97~104 日本貿易陶磁研究会
- 鈴木秀典ほか 1988 『大坂城跡Ⅲ』 大阪市文化財協会
- 鈴木秀典 1991 「大坂城跡の豊臣前期と豊臣後期」 『関西近世考古学研究』 I pp. 7~18
- 鈴木裕子 1990 「江戸の陶磁器」 『江戸遺跡研究会第3回大会 発表要旨』 pp. 9~22 資料編pp. 27~64
- 墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団 1996 『墨田区錦糸町駅北口遺跡Ⅰ・Ⅱ』
- 諫訪間順・井上由美子ほか 1992 『小田原城三の丸箱根口跡』 小田原市文化財調査報告37
- 諫訪間順 1993 『小田原城下櫛干橋町遺跡』 小田原市文化財調査報告書42
- 仙台市教育委員会 1985 『仙台城三の丸跡』 仙台市文化財調査報告書76
- 土山健史 1996 「堺出土の陶磁器組成について－SKT39地点の調査を中心に－」 『特別展 堀衆のやきもの 堀環濠都市遺跡出土の桃山陶磁』 pp. 40~43 土岐市美濃陶磁歴史館
- 東京大学遺跡調査室 1989 『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』
- 東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 1
- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院地点』
- 東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 3
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4
- 東京都埋蔵文化財センター 1994 『丸の内三丁目遺跡』
- 中山雅弘 1992 『泉城跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告31
- 成瀬晃司 1994 「江戸藩邸の地下空間－東京大学本郷構内の遺跡を例に－」 『武家屋敷』 山川出版社 pp. 93~121
- 西田宏子・大橋康二 1988 『別冊太陽 古伊万里』 平凡社
- 羽柴直人 1994 「東北地方北部における近世陶磁器の様相－1690~1780年代の消費状況の集成－」 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』 XIV PP. 95~118

- 羽柴直人 1996 『江川鉄山跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書237
- 平田禎文 1995 『三春城下近世追手門前通遺跡群B地点発掘調査報告書』
三春町文化財調査報告書22 福島県三春町教育委員会
- 松尾信裕 1993 『特別展 大坂出土の桃山陶磁 桃山の華』 pp. 31~37 土岐市美濃陶磁歴史館
- 三浦圭介・大瀬秀男 1984 『浜通遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書80
- 港区麻布台一丁目遺跡調査会 1986 『郵政省飯倉分館構内遺跡』
- 港区白金館址遺跡調査会 1988 白金館址遺跡
- 宮崎勝美・吉田伸之編 1994 『武家屋敷 空間と社会』 山川出版社
- 村上 勇 1986 「「寛永21年」銘木札を伴う陶磁—富田川河床遺跡`81IPSB020-」 『貿易陶磁研究』6
pp. 61~66 日本貿易陶磁研究会
- 森 育 1991 「元和6・7年銘の木簡を出土した魚市場跡の調査」 『発掘された江戸時代』
江戸遺跡研究会第4回大会発表要旨 pp. 3~20
- 森 育 1992 「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」 『難波宮址の研究』 9 pp. 358~372
大阪市文化財協会
- 森村健一 1984 「堺環濠都市遺跡出土の陶磁器の組成と機能分担」 『貿易陶磁研究』 4 pp. 41~49
日本貿易陶磁研究会
- 森本伊知郎 1989 「江戸における陶磁器の流通について」 『考古学の世界』
慶應義塾大学民族学考古学研究室 新人物往来社 pp. 93~114
- 森本伊知郎 1991 「江戸市中の物資流通と生活用具—遺跡出土の陶磁器からー」 『甦る江戸』
江戸遺跡研究会 pp. 141~180
- 八木光則・室野秀文ほか 1991 『盛岡城跡I—第1期保存整備事業報告書ー』 盛岡市教育委員会
- 柳内寿彦ほか 1986 『若松城三の丸跡発掘調査報告書』 会津若松市文化財調査報告書第11号

4. 仙台城における土師質・瓦質土器の変遷

(1) 検討の方法

土師質土器・瓦質土器は、陶磁器が製品によっては広域で流通するのに対して、各地方で生産され、比較的限定された範囲で流通した可能性が高いものと考えられている。そのため、各地域ごとの検討がまず必要と考えられるが、仙台藩領内では、これまでまとまつた近世土器類の出土が少なく、各時期の様相はあまりはっきりとしていない。そこで、仙台城出土の土師質・瓦質土器の変遷をまず整理することを、ここでの目的としたい。

その際、出土資料の大半を占める土師質土器の皿は、ミガキによる再調整を施すもの以外は、江戸時代の初頭から幕末に至るまで、手づくねのものは見られず、一貫してロクロ整形で回転糸切りのものであるため、時期ごとの特徴がつかみ難く、陶磁器と異なり、時期の異なる資料の混入を判断することが困難である。また、皿以外の器種についても、時間的な変化のみならず、どのような器種のものが存在するかについても、まだ十分明らかとはなっていない。よって、ここでは、仙台城跡出土の資料の内、出土状況から時間が限定される一括資料と認識できる資料を検討の対象としたい。それ以外の資料については、必要がある場合にのみ触れることとする。

(2) 一括資料の概要

これまでの仙台城二の丸跡の調査において、土師質土器・瓦質土器が比較的まとまって出土し、年代が限定できる資料としては、以下の資料がある。

資料1：二の丸跡第9地点 I期 17世紀初頭～前葉（1638年以前）

資料2：二の丸跡第5地点 V～VII層・4号土坑・15号溝

17世紀末～18世紀初頭（元禄年間）

資料3：二の丸跡第5地点 3号土坑 18世紀前葉

資料4：二の丸跡第9地点 15号・16号土坑 18世紀後葉

資料5：二の丸跡第9地点 2号池・3c層・3b層 18世紀末～19世紀初頭

資料6：二の丸跡第2地点 石敷遺構埋土等 19世紀中葉頃（幕末～明治初頭）

資料7：二の丸跡第5地点 2号土坑 19世紀中葉頃（幕末～明治初頭）

資料8：二の丸跡第9地点 1号池 19世紀中葉頃（幕末～明治初頭）

資料9：二の丸跡第10地点 III層 19世紀中葉頃（幕末～明治初頭）

6から9の資料については、厳密には一部19世紀の後葉にかかり、資料によっては19世紀の前葉を含むものがある。しかし、短い時間での変化を検討できるような状況ではないので、ここでは、全てまとめて検討したい。すなわち19世紀中葉を中心に、一部19世紀前葉または後葉

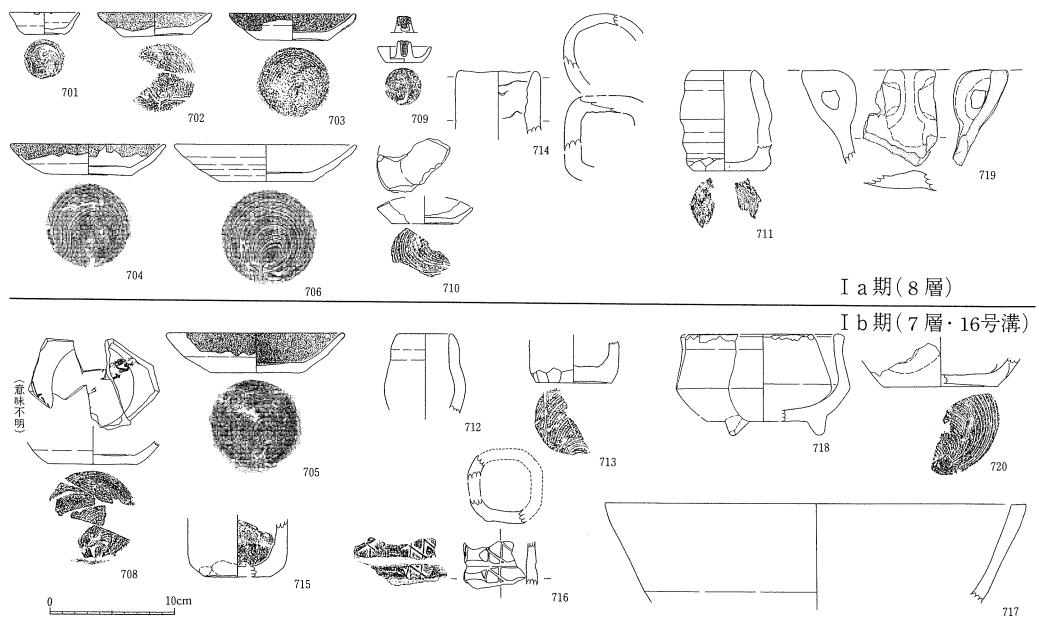


図76 仙台城二の丸跡第9地点I期の土師質・瓦質土器

Fig. 76 Ceramics of phase I from NM9

the end of the 16th century-
the early 17th century

を含む資料群となる。以下の記述では、煩雑さを避けるため、19世紀中葉頃と記述する。また、仙台城三の丸跡では、II区のI期の遺構群から、まとまって土器類が出土している（佐藤洋ほか 1985）。これも江戸時代初頭から、寛永15年頃までの間に年代が限定できる資料である。

(3) 時期ごとの出土状況の変化

最初に、土師質土器・瓦質土器の、時期ごとの出土量、確認できる器種の変化について、その概略を指摘しておきたい。

なお、土師質土器の皿については、灯明皿として使用されたり、あるいはお供えや酒杯として使用された場合も想定されるが、多くは正式の饗宴の際に使用された食器であったと思われる。その場合、一度に多量に消費されたと考えられる。実際の出土資料でも、膨大な量の皿がまとまって出土している場合が、資料4の15号土坑・16号土坑などで見られる。そのため、土器類の主体を占める皿の多寡については、出土した遺構の性格にも左右されることが予想され、ある資料の特徴が、その時期の一般的傾向を示すとは限らない。よってここでは、大まかな傾向を指摘するに留める。なお、第5地点出土の資料については、年報7でも一度触れているので、ここでは遺構・層ごとの集成図は提示しない。図87・90の編年図を参照されたい。

17世紀初頭～前葉の資料1（図76）では、土師質土器では、皿・耳皿・灯火具・焼塩壺・鉢？・内耳の部分と思われる破片や瓦質の火入が出土している。内耳の部分と思われる破片は

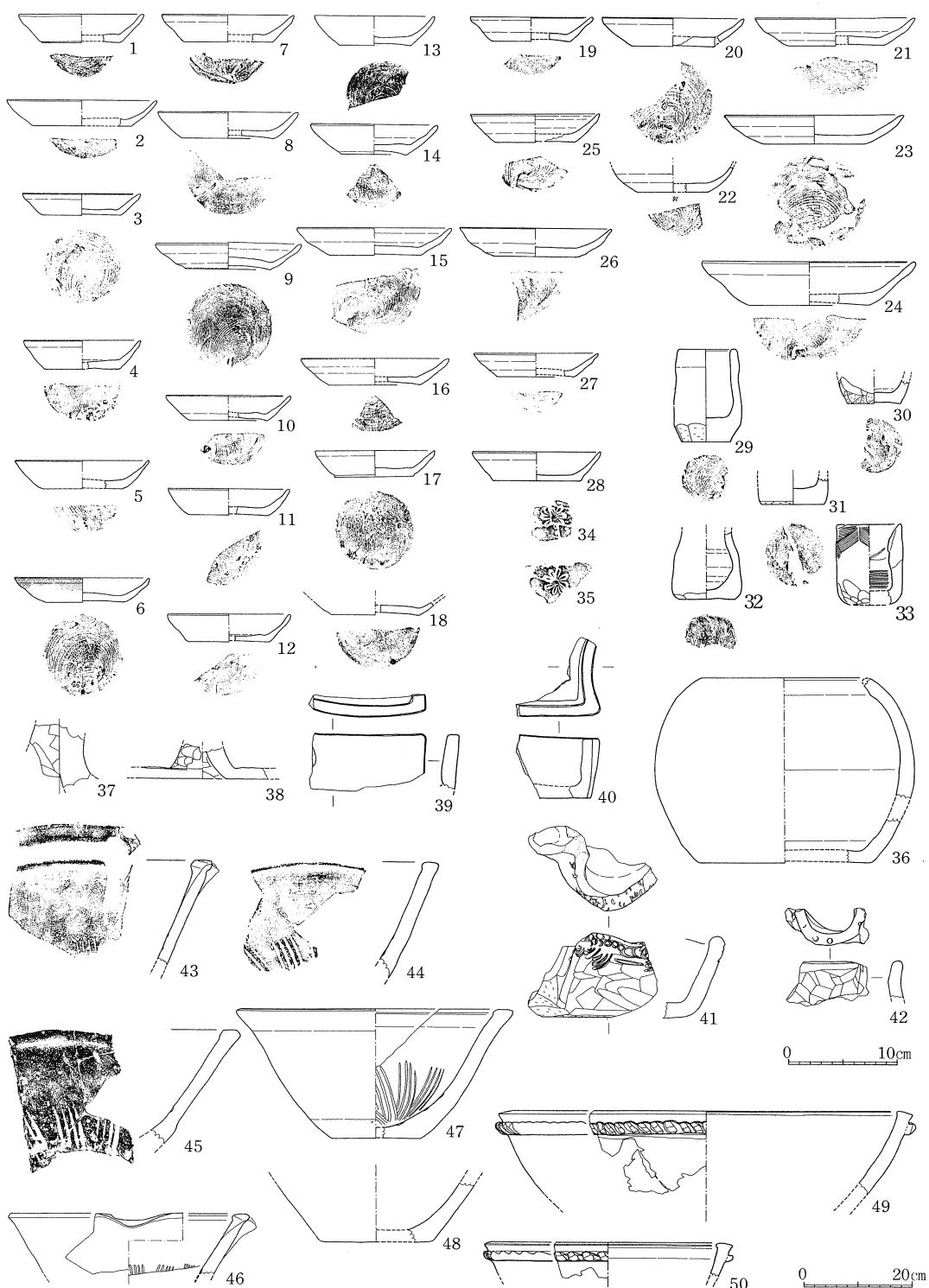


図77 仙台城三の丸跡Ⅰ期の土師質・瓦質土器

Fig. 77 Ceramics of phase I from the third citadel of Sendai Castle

the end of the 16th century-
the early 17th century

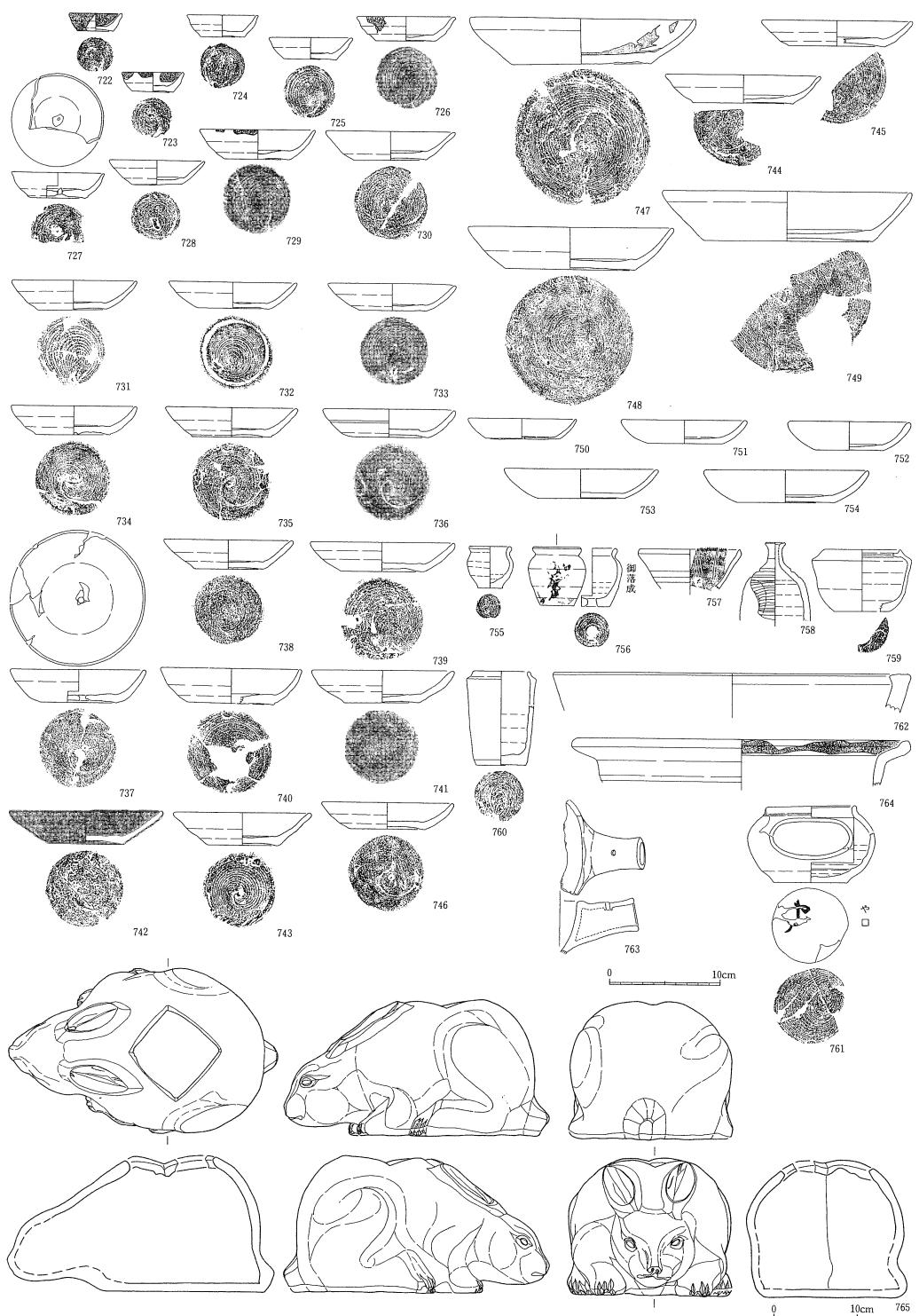


図78 仙台城二の丸跡第9地点16号土坑出土の土師質・瓦質土器

Fig. 78 Ceramics from Pit 16 at NM9

the late 18th century

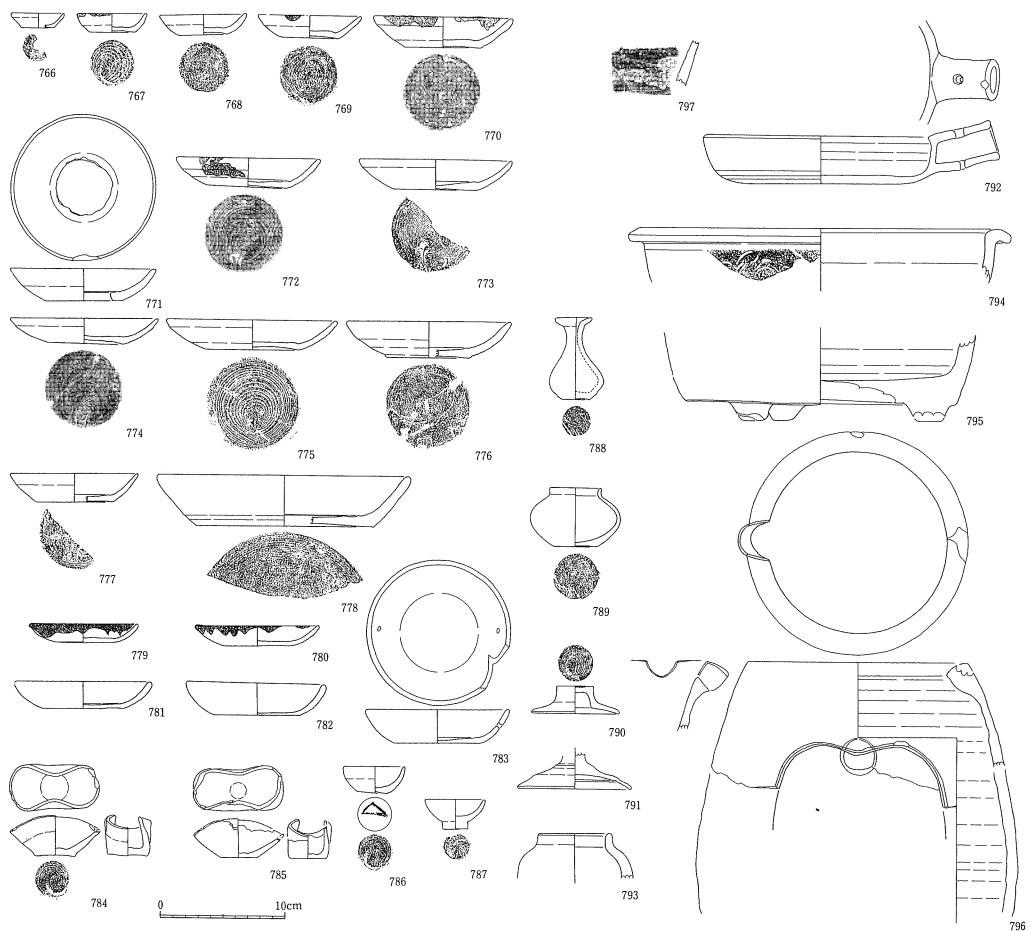


図79 仙台城二の丸跡第9地点15号土坑出土の土師質・瓦質土器

Fig. 79 Ceramics from Pit 15 at NM9

the late 18th century

(図76-719)、大きさから焙烙と見ることは難しく、どのような器種になるか不明である。土器類の出土量は少ないが、この時期の資料は、全体に遺物量がさほど多くない。ただし、元禄年間の資料より後の時期には、土師質土器の皿の出土量が、非常に多くなることと比べると、対照的である。ただし、三の丸跡のⅠ期の資料（図77）でも、6号土坑などからは、まとまって皿が出土しており、遺構の性格によって、出土量に変化があるものと思われる。三の丸跡の資料では、これに加えて、擂鉢・火鉢・変形鉢？・風炉？などが出土している。

陶磁器の項で指摘したが、東海から関東にかけての地域では、江戸時代初頭には瓦質土器は例外的な存在であり、仙台城の様相は特異である。擂鉢と火鉢については、前後の時期につながるため、地元産の可能性が考えられるが、その他の器種については、やや特殊なものが多い。三の丸跡のⅠ期の遺構は、茶室の可能性が指摘されており、変形鉢（図77-39～42）などは、

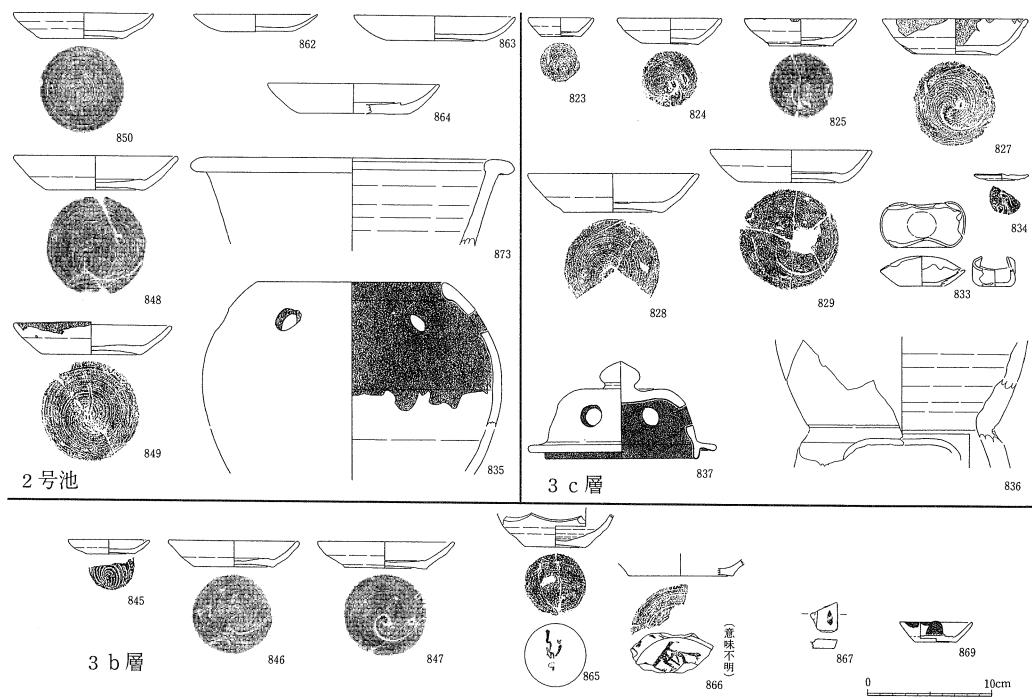


図80 仙台城二の丸跡第9地点2号池・3c層・3b層出土の土師質・瓦質土器 the end of the 18th century-the beginning of the 19th century
Fig. 80 Ceramics from Pond 2 and layer 3c, 3b at NM9

茶室などで使用された特殊なものであった可能性が高い。二の丸跡出土の火入も、現状では後の時期に類似したものが認められないため、地元で生産されたものか、あるいは他地域で生産されたものかは判別しがたい。

元禄年間の資料2では、土器類の出土量が大きく増加する。皿が圧倒的多数を占め、他には土師質土器の耳皿・焼塩壺・鉢?と瓦質土器の火鉢が認められるが、皿に比べると量はきわめて少ない。18世紀前葉の資料3でも、皿が大多数を占め、他には瓦質の火鉢が認められる程度である。

18世紀後葉の資料4（図78・79）では、皿が大多数を占めるることは変わりないが、器種が増加する。土師質土器では、以前から認められる皿・耳皿・焼塩壺・鉢?に加えて、焙烙やミニチュアと思われるものがこの段階には存在している。瓦質土器では、火鉢・手炙り・焜炉?が認められる。

18世紀末～19世紀初頭の資料5（図80）でも、皿が多数を占める。新たに、瓦質土器の蚊遣りと思われるものが出現する。

19世紀中葉頃の資料は、出土例が多いこともある、器種がさらに増加する。土師質土器では火消壺・五徳、瓦質土器では炭櫃・十能などが、この時期に新たに認められるものである。

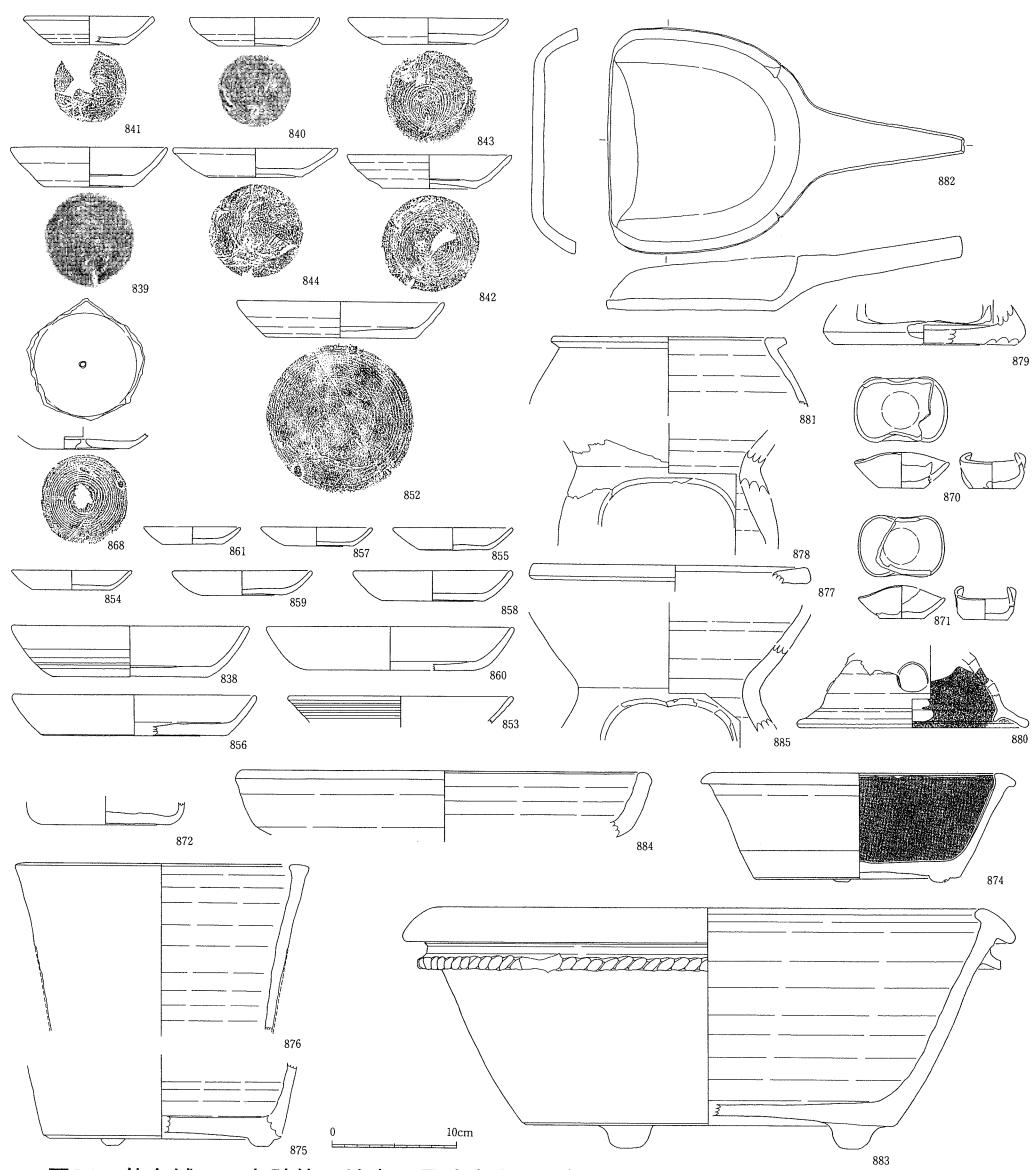


図81 仙台城二の丸跡第9地点1号池出土の土師質・瓦質土器

Fig. 81 Ceramics from Pond 1 at NM9

the early 19th century-
the middle 19th century

資料8（図81）では、皿が依然として多数を占めるが、資料10（図82・83）では、混入の可能性のあるもの以外には、皿は全く出土しておらず、火鉢や火消壺が主体を占めている。資料の性格の違いか、あるいは微妙な時間的な違いが反映している可能性がある。

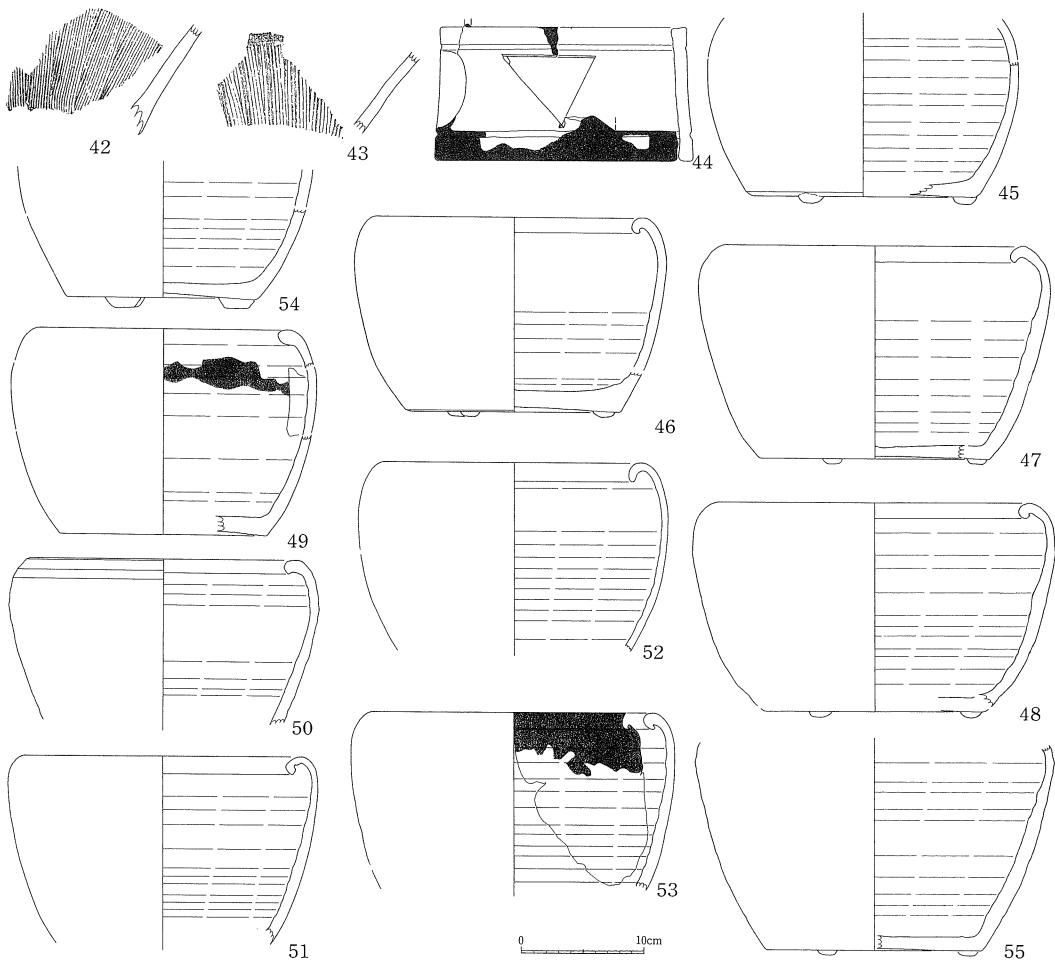


図82 仙台城二の丸跡第10地点III層出土の土師質土器

Fig. 82 Ceramics from layer III at NM10

the middle 19th century-
the late 19th century

(4) 各器種ごとの変遷

上記した一括資料中の土師質土器・瓦質土器を器種ごとに分け、年代順に並べたのが、図84と図90である。以下、この編年図に基づいて、各器種ごとの変遷について整理する。なお、皿・耳皿・焼塙壺・焰烙は、全て土師質土器であり、瓦質のものは確認されていないので、個々の記述では触れない。

① 皿

皿については、図化したものも含めて、口縁もしくは底部外周の6分の1以上が残存し、なおかつ器高が判明するもの、すなわち口縁端部から底部までが残っており、口径・底径・器高が計測できるものを分析対象として抽出し、以下に述べる分析に供した。口縁もしくは底部外周が6分の1以上残っているものを抽出基準としたのは、経験的に、これだけ残存していれば、

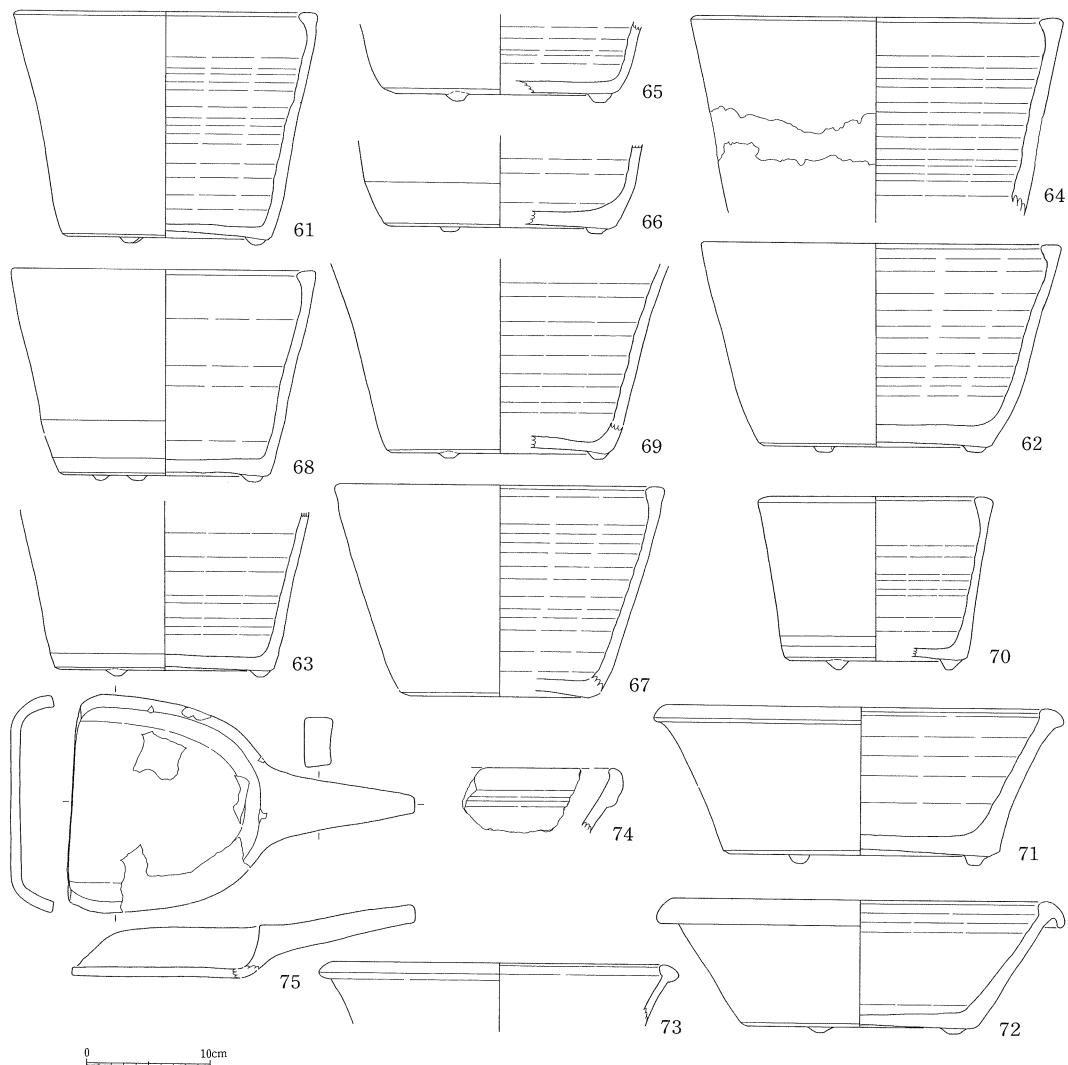


図83 仙台城二の丸跡第10地点III層出土の瓦質土器

Fig. 83 Fumed Ceramics from layer III at NM10

the middle 19th century-
the late 19th century

口径もしくは底径の復元が、安定した数値が得られるであろうという判断に基づいている。

A. 製作技法による大別

先述のように、皿には、口クロ整形で底部を回転糸切りするものが、江戸時代の初頭から、幕末まで一貫して存在し、手づくねのものは全く見られない。この口クロ整形で底部を回転糸切りし、再調整を施さないものをA類とする。口クロ整形の後、外面にミガキによる再調整を施すものをB類と大別する。

17世紀初頭～前葉の資料1では、B類のものは認められず、全ての資料がA類である。元禄年間の資料2の段階以降、A類とB類が共存するようになる。A類とB類の量的比率の変化に

	皿 A 類			皿 B 類	耳皿 A 類	耳皿 B 類	灯火具
	小 型	中 型	大 型				
17c. 初頭 →前葉	1 2	3 4	5 6		7		8
					1 ~ 4 · 7 · 8 : 二の丸跡第9地点Ⅰ期 5 · 6 : 三の丸跡		
17c. 末 18c. 初頭	9 10 11 12	13 14 15 16	17 18	19 20	21 22	9 ~ 22 : 二の丸跡第5地点 元禄年間の整地層・遺構	
18c. 前葉	23	24 25		26 27			
18c. 後葉	28 29 30	31 32 33 34 35	36 37 38	39 40 41 42	43	28 · 30 ~ 38 · 40 ~ 42 : 二の丸跡第9地点16号土坑 29 · 39 · 43 : 二の丸跡第9地点15号土坑	
18c. 末 19c. 初頭	44 45	46 47		48 49 50	46 ~ 50 : 二の丸跡 第9地点2号池 44 · 45 · 51 : 同3c層 52 : 同3b層	51	52
19c. 中葉頃	S = 1 : 8	53 54 55	56	57 58 59 60	61	53 ~ 62 : 二の丸跡第9地点1号池	62

図84 仙台城跡出土土師質土器皿類の変遷

Fig. 84 Chronological sequence of ceramic dishes from Sendai Castle

については、遺物集計の段階で、両者を区分して集計していないため、確実なデータは提示できない。抽出資料で比較すると、時期が下るとともにB類の比率が増加する傾向がある。図85・86には、A類とB類を区分して、抽出資料全てを記入しており、上記の傾向が読みとれるであろう。

B. 法量による分類と時間的変化

最初に、法量での作り分けと、その時間的変化を検討するために、図85・86に、上記した一括資料出土の皿の、口径と器高の法量分布を示す（註1）。

A類については、資料群によって明確でない場合もあるが、おおむね口径が10cmと15cmを境

として、小型・中型・大型に区分でき、いずれも17世紀初頭～前葉から19世紀中葉頃の資料まで、全ての時期に認められる。この内、口径15cmより大きい大型のものは、そもそも出土点数が少ないともあり、特に集中するところは認められない。そのため、以下では、小型と中型のものについて見ていくこととする。

17世紀初頭～前葉の第9地点I期の資料1は、出土点数が少ないともあり、法量分布で集中するところが読みとり難い。同時期の三の丸跡I期の資料では、小型の資料が見られず、少数の大型のものを除けば、中型のものに集中している。したがって、小型・中型・大型の作り分けが、存在するものと考えられる。中型のものの中では、口径11cm前後から12cmにかけてのものが、1グループにまとめられる可能性があるが、あまり明確ではない。

元禄年間の資料と18世紀後葉の資料では、小型と中型の区分は、明確になっており、小型のものは、さらに3群に分かれている。元禄年間の資料では、この小型の3群への分離は、あまり明確でないが、ほぼそのように考えて良いだろう。中型では、第9地点の15号土坑のものが、やや分布の中心がずれるが、いずれも口径12cm前後に1つの集中が見られる。しかも、各時期の皿の中で、この口径12cm前後のグループに、もっとも多数が集中する。この口径12cmというのが、土師質土器の皿で中心となった一群であろう。これより大きいものは、やや散漫な分布を示す。

元禄年間と18世紀後葉の間の時期である18世紀初頭の第5地点3号土坑の資料は、残念ながら、資料数が少なく、明確なグループ分けは難しい。ただ、中型の中に、器高が2cmに満たない、浅いものが少数ながら含まれている。同様の浅いものは、18世紀後葉の資料の中にも、少数存在する。

18世紀末～19世紀初頭の資料と、19世紀中葉頃の資料では、小型のものの数が少なく、その様相は良く判らない。中型のものでは、前者では、やや散漫な分布であるが、口径が大きめのものと、小さめのものに分けることができそうである。また、その分布の中心が、18世紀後葉のものより、わずかに小さい方へ移っているように見える。この傾向は、19世紀中葉頃の資料では、より明確になっている。中型のものが、大小2群に分かれ、特に小さめのグループでは、その中心が口径11cm前後のところに移っている。器高では、浅いものが前段階には少数見られたが、この両時期の資料では、中型のもの全体が、浅くなっていることが見て取れる。

B類は、元禄年間以降に出現するが、この時期のものは数が少ないとあって、明確な集中は認め難い。18世紀前葉の資料と18世紀後葉の資料では、ほぼ口径11～12cmのところに集中が見られ、各時期とも、もっとも多数が集中する。皿A類の口径12cm前後のグループと同様に、皿B類の中で中心となるグループであろう。これより小さいものは、数が少なく明確でないが、第9地点15号土坑では、口径9～10cmに、一つの集中が認められそうである。また、18世紀前

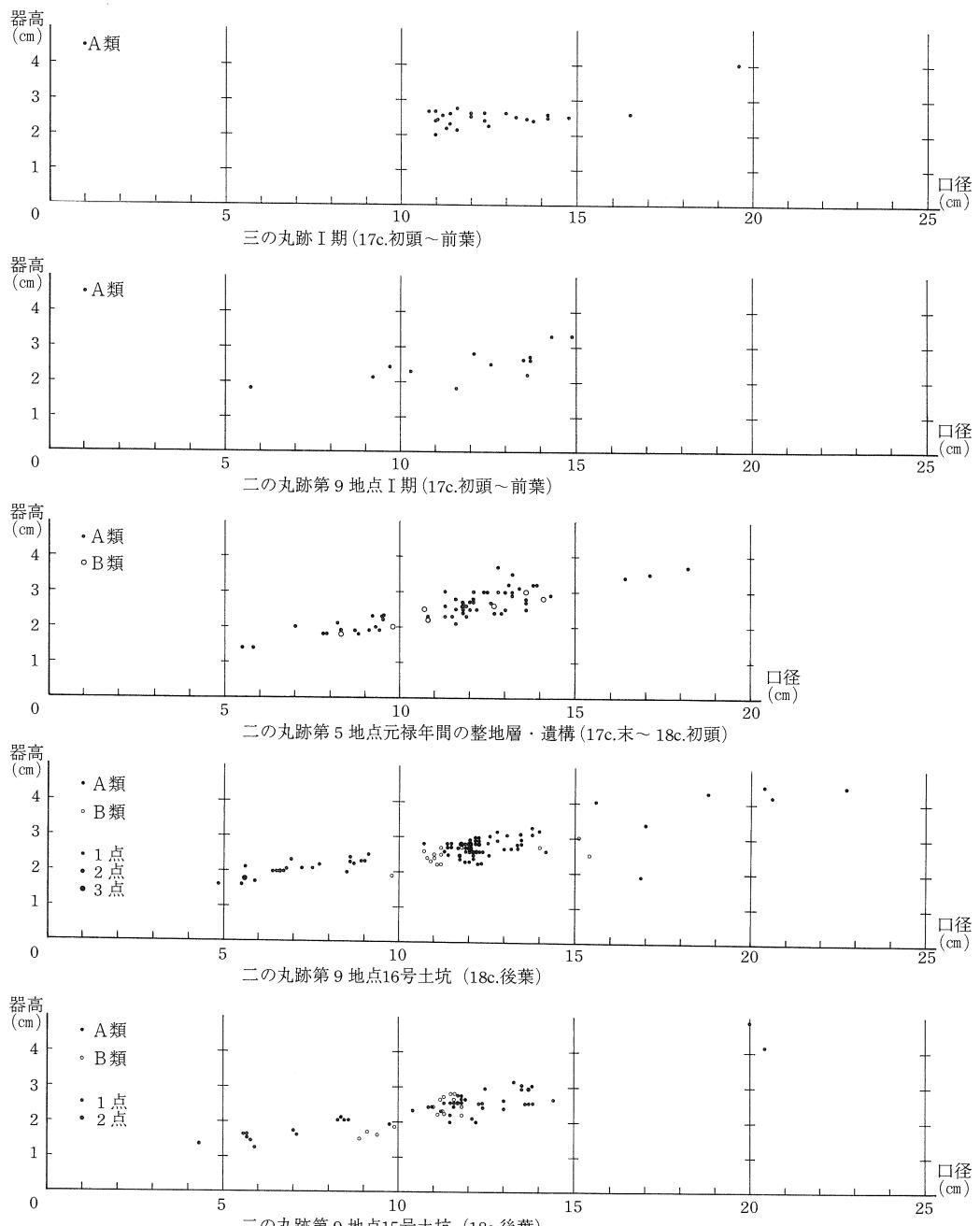


図85 仙台城跡出土土師質土器皿の法量分布(1)

Fig. 85 Scatter diagrams of size of ceramic dishes from Sendai Castle(1)

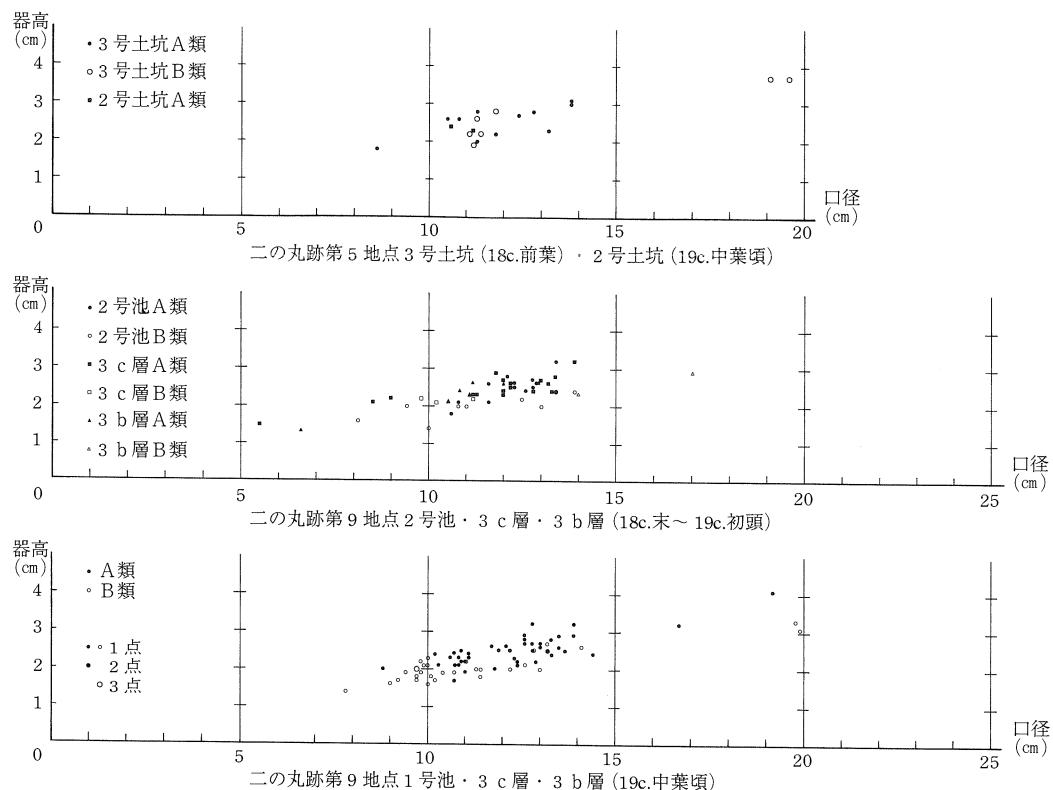


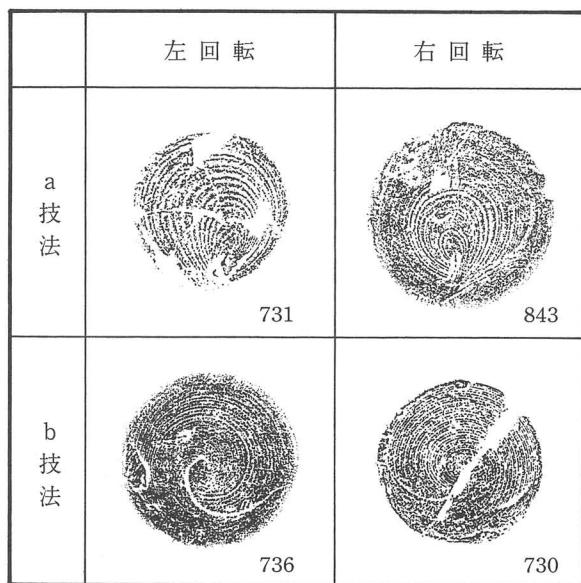
図86 仙台城跡出土土師質土器皿の法量分布(2)

Fig. 86 Scatter diagrams of size of ceramic dishes from Sendai Castle(2)

葉の資料には、口径が20cmに近い、大型のものもある。

18世紀末～19世紀初頭の資料と、19世紀中葉頃の資料では、分布の中心が、小さい方へ移動する。18世紀末～19世紀初頭の資料では数が少なく明確でないところもあるが、19世紀中葉頃の資料では、口径10cm前後のところに集中する。その数も最も多い、18世紀に口径11～12cmのグループが、小型化しここに分布の中心を移したものと考えられる。これ以外の資料は、散漫な分布をしめし、明確な集中は認めることは難しいが、19世紀中葉頃の資料には、口径20cmに近い大型のものが存在する。また、18世紀末～19世紀初頭の資料以降では、器高が浅くなっていく傾向が読みとれる。

以上の法量分布の移り変わりを見ると、確実でない部分も残るが、全体としては、元禄年間から18世紀後葉の時期に、法量での作り分けが明確になっていくことが見て取れる。また、18世紀末～19世紀初頭の資料以降、小型化が進んでいくとともに、全体に浅いものへと変化していることが明らかである。このような変化は、A類・B類の両方に共通して見られる変化である。



(拓本の番号は第9地点の遺物登録番号)

図87 仙台城二の丸跡出土土師質土器皿の糸切り技法と回転方向

Fig. 87 Variety of string-cut bases of ceramic dishes from the second citadel of Sendai Castle

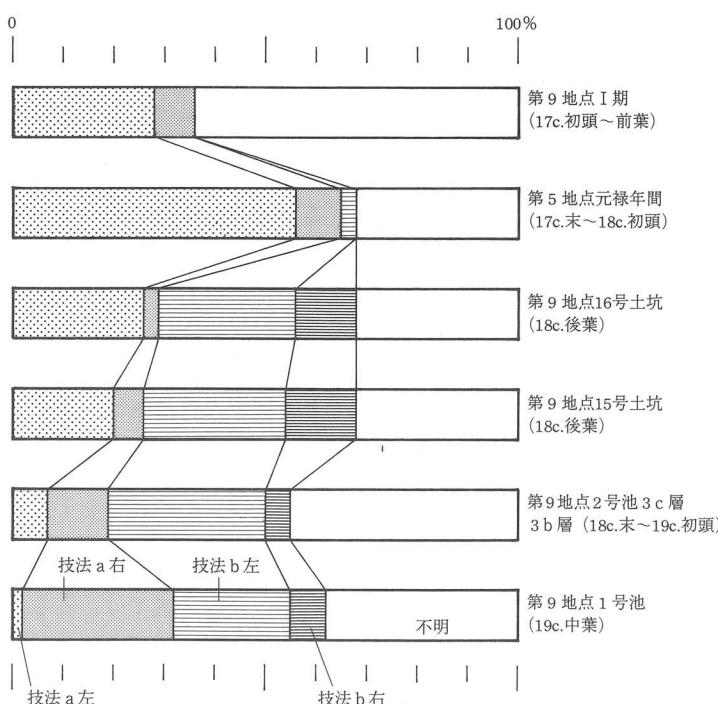


図88 仙台城二の丸跡出土土師質土器皿の糸切り技法と回転方向の比率

Fig. 88 Histograms of ceramic dishes from the second citadel of Sendai Castle by kind of string-cut bases

外面の再調整については、18世紀末～19世紀初頭の資料と19世紀中葉頃の資料では、ミガキ調整が丁寧でなく、その前段階に施された回転ヘラ削りの痕跡が観察されるものが多い。これらの時期より前のものでは、ケズリ調整の痕跡が認められる資料はほとんどない。このため、ミガキ調整の前段階にケズリ調整が行われていたかどうかは確定できないが、新しくなるとともに、ミガキ調整が雑になる傾向は指摘できる。

C. 底部切り離し技法と回転方向

皿A類について、底部の回転糸切りの技法と、回転方向の時間的变化を検討してみたい。技法aとしたものは、通常に見られる回転糸切りで、糸切り痕跡の中心が、どちらか一方向に片寄り、そこから外側に抜けていくものである。技法bとしたものは、中心が底面のほぼ中央に位置し、糸の圧痕かと思われるものが、この中心から弧状に伸びるものである(図87)。この糸切り技法の違いと、ロク口の回転方向の違いの割合

を、時期ごとに示したのが図88である。なお、第5地点の資料を整理した時点では、糸切り技法の違いを識別していなかったので、報告書に図示したものを再検討して、集計したものである。

技法bは、17世紀初頭～前葉の資料には見られない。三の丸跡I期の資料でも、報告された資料に限れば、全て技法aで占められている。技法bは17世紀末～18世紀初頭の資料で、少数出現し、18世紀後葉以降では、技法aとほぼ同じ割合を占めるようになる。

技法aの中での回転方向の違いを見ると、17世紀初頭～前葉から18世紀後葉では、左回転が多数を占めるのに対して、18世紀末～19世紀初頭の資料以降、逆に右回転のものが多くなる。ところが、技法bでは、18世紀後葉以降、19世紀中葉頃に至るまで、左回転が多数を占め、両者の比率はほとんど変化を見せない。単純にロクロの回転方向が移り変わっていくのではなく、糸切り技法によって、回転方向の変化が異なっている。

糸切り技法での違いと、法量や形態との関係については、小型のものには技法aが多いということ以外、明瞭な関係は見い出せなかった。また、色調や胎土の違いと、糸切り技法との関係についても、今回検討できなかった。糸切り技法の違うもので、明瞭な形態上の差が見い出し難いことや、回転方向の変化が技法ごとで異なることは、糸切り技法の違いが製作者の違いの反映である可能性を示唆する。

D. ススの付着割合

灯火具に使用した痕跡と考えられる、ススの付着の有無を、次に検討する。対象とした資料が、前述のように完形品ばかりではないため、煤の付着していない資料でも、破片の場合、本

当にススの付着が無いとは言い切れないが、おおよその傾向は示すであろう。図89に煤の付着した資料の割合を示した。

A類とB類での違いという点では、16号土坑を除くと、両者の付着率は、ほとんど変わらない。16号土坑でのB類の付着率の低さについては、その理由を十分説明できないが、資料群の性格による可能性が考えられる。16号土坑では、白木の箸が大量に出土しており、この16号土坑出土遺物の中に、饗宴などで使われたゴミが含まれていることは確実と思われる。B類の皿にススの付着するものが少

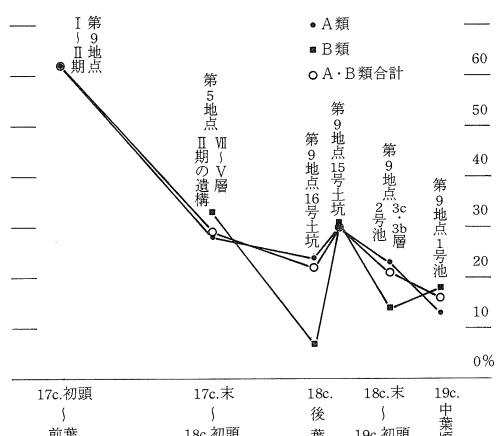


図89 仙台城二の丸跡出土土師質土器皿のススの付着割合

Fig. 89 Percentages of soot-covered ceramic dishes from the second citadel of Sendai Castle

ないことは、饗宴で使われ、灯火具として再利用されなかつたものに、B類の皿が多く含まれていたのかも知れない。

時期別に見ると、17世紀初頭～前葉の資料に、スヌの付着率が非常に高い。資料ごとでのばらつきはあるが、これ以降、時期が下るとともに、スヌの付着する割合は、減少していく。特に、19世紀中葉頃の資料での減少は明確であろう。19世紀になると、陶器の灯火具の出土が増加してくる。土師質土器の皿に、灯火具として用いたものの割合が少なくなっていくことは、陶器製灯火具の普及と裏表の関係にあると考えられる。土師質土器の皿の生産と使用は、大きく衰退することなく、幕末まで続いているが、陶器製の灯火具が増加するにつれて、灯火具として用いることは少なくなっている結果と推定される。

② 耳皿

耳皿にも、ロクロ整形で回転糸切り後、両側面を曲げるだけのものと、その後に外面にミガキによる再調整を加えるものがある。皿と同様に、前者をA類、後者をB類と大別する。17世紀初頭～前葉の資料には、破片資料なので確実ではないが、耳皿になる可能性のあるものが出土しており、再調整の無いA類である。元禄年間の資料では、A類とB類の両方が見られるようになる。再調整を施すものが、この時期に出現しているという点では、皿と同様である。

③ 灯火具

17世紀初頭～前葉の資料と、18世紀末～19世紀初頭の資料に、土師質土器で、皿に灯心を据えるための突起を付けたものが、それぞれ1点含まれる。灯心を据える突起は、前者が筒状であるのに対し、後者は舌状である。通常の土師質土器の皿で、灯明皿として使われたものの方が、もともと灯火具専用に作られたものより圧倒的に多い。

④ 焼塩壺

焼塩壺については、年報7において、仙台藩領内出土資料の中のロクロ整形のものが、地元で生産された可能性があることを指摘した。同様に、器形や製作方法から、畿内系のものと考えられるものと、地元産と考えられるものに大別した。畿内系と考えられるものは、17世紀初頭～前葉の資料から、18世紀後葉の資料まで含まれるが、残念ながら、いずれも刻印の部分が欠損しており、ここではこれ以上の細かな検討は行わない。

地元産と考えられる、ロクロ整形で底部を回転糸切りする焼塩壺は、17世紀初頭～前葉の資料から、18世紀前葉まで認められる。これらについては、以下の4類型に分類した（図90）。

A類：ほぼ直立する体部で、外面の底面付近をカットグラス状に削るもの。

B類：体部が波打つような緩やかな稜線を持つもので、2ないし3状の稜線がつく。外面の底部付近はカットグラス状に削られる。

C類：B類と同様の体部形態で、外面に格子タタキを施すもの。

D類：コップ状の形態で体部外面下半部に格子タタキを施すもの。

A・B・C類は、17世紀初頭～前葉の資料に見られるが、それ以外の資料には含まれない。一方D類は、元禄年間の資料から見られ、18世紀前葉の資料にも含まれる。そのため、17世紀初頭～前葉以後、元禄年間までの間に、地元産の焼塩壺はD類に統一されていくものと考えられる。A・B・C類の前後関係については、出土層位などからは確定できない。タタキを施す点で、後のD類につながる、C類が後出的な様相を持っていると考えることもできるが、確実ではない。東京都の汐留遺跡では、仙台藩の江戸屋敷の調査が行われている（福田・石崎編 1997）。この場所は、寛永18年（1641年）に伊達家が下屋敷を拝領し、延宝4年（1676年）には、上屋敷へと変わっている。この下屋敷期の遺構から、ロクロ整形の焼塩壺が出土している。体部がほぼ直立し、体部外面の底面付近にはカットグラス状の削りを施す点で、仙台城出土のA類に類似する資料である。ただし、体部の途中に付く小さな段が、仙台城出土のものは口縁部側が高くなるのに対して、汐留遺跡出土のものは、全て逆に底部側が高くなる。このような違いはあるものの、江戸の遺跡では、他にロクロ整形の焼塩壺が出土していないことから、これらの汐留遺跡出土のロクロ整形の焼塩壺は、仙台藩領内で作られ、伊達家下屋敷に運び込まれた可能性が考えられるであろう。そうであると、これらの資料は、仙台城で出土している17世紀初頭～前葉の資料より新しく、仙台城では既にA・B・C類が出現している。したがって、C類が後に出現するD類に続いていくものであると考えると、少なくともA類とC類は、一定期間併存していたこととなる。

これらのロクロ整形で地元産と考えられる焼塩壺は、18世紀前葉の資料までは確認できるが、それより新しい時期の資料には、今のところ確実に伴う例が無い。今後、出土する可能性もあるが、全国的に見てあまり例の無い、広域流通品でない地元産焼塩壺の性格とその背景を考える上で、終末の時期とその様相は、重要な問題であろう。

⑤ 焙烙

焙烙は、18世紀後葉の第9地点15号土坑・16号土坑で出土しているのが、今のところ、最も古い資料である。円形の本体部に、把手を受けた、フライパンのような形態をしている。把手の部分は中空で、端に近いところに、上下に小孔が開けられており、木製の柄をはめ込んで使用したものと推定される。この時期以外の資料は知られていないが、これまでの調査では、内耳の焙烙は出土していない。第9地点のⅠ期の出土例に、内耳のような破片があるが、大きさから見て、焙烙と考えるのは難しいだろう。

18世紀末～19世紀初頭になると、軟質施釉陶器とした、透明釉（鉛釉）をかけた焙烙が出現する。把手の部分のみの出土であるが、18世紀後葉の土師質土器の焙烙と、同じ形態を示す。軟質施釉陶器の焙烙は、19世紀中葉頃には、把手が長くなり、小孔を開けないものも出現する。

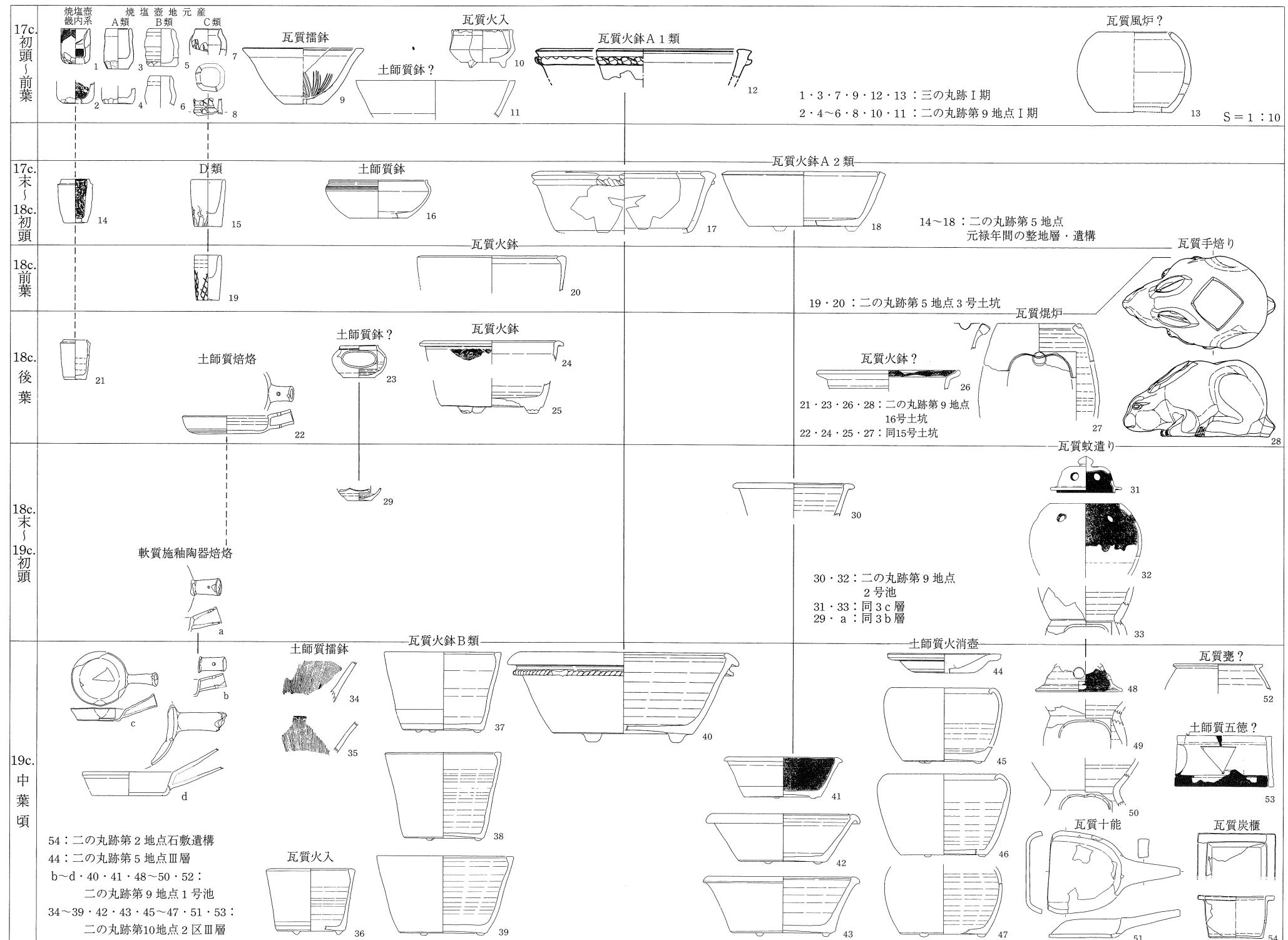


図90 仙台城跡出土の皿類以外の土師質・瓦質土器の変遷

Fig. 90 Chronological sequence of ceramics except dishes

この時期には、軟質施釉陶器の焙烙は、出土点数が増加する。なお、このような軟質施釉陶器の焙烙は、よく似た形態のものが、近年まで仙台市の堤において生産されていた。

⑥ 撲鉢

土師質のものと瓦質のものがある。瓦質のものは、二の丸跡では良好な資料に欠けるが、三の丸跡のⅠ期の資料の中に、比較的多く含まれている。これらのおろし目はかなり粗い。中世以来、作られてきたものの系譜を引くものであろう。二の丸跡でも、瓦質の撲鉢は18世紀・19世紀の遺構や層位からも少数出土しているが、いずれも小破片で、確実に年代が判明するような資料は無い。一方、土師質の撲鉢は、19世紀中葉頃の資料に確認され、全体の特徴は不明であるが、おろし目は密に施されている。

⑦ その他の土師質の鉢類

17世紀初頭～前葉の資料から、18世紀末～19世紀初頭の資料に、鉢と考えられる土師質土器が見られるため、図90に掲載しておいた。このうち、18世紀後葉のものは、扁平な体部に短く直立する口縁部が付くもので、体部側面には大きな窓が開けられている。用途は不明である。同様のものになると思われる破片が、18世紀末～19世紀初頭の資料にも認められる。

⑧ 火入

火入としたものは、17世紀初頭～前葉の資料と、19世紀中葉頃の資料に、瓦質のものがそれぞれ1点含まれるに過ぎない。両者は、形態的に差が大きく、相互の関連は考え難い。前述のように、17世紀初頭～前葉の資料は、他地域から持ち込まれたもの可能性も含めて、今後検討が必要である。

19世紀中葉頃の資料は、第10地点のⅢ層出土のもので、次に述べる火鉢のB類を小型にしたようなものである。法量の点から、火入と考えた。この第10地点出土の火入と同様のものは、19世紀初頭の佐沼城跡SK13土坑からも出土している（佐久間・小村田1995）。

⑨ 火鉢

今回、火鉢としたものは、全て瓦質のものである。口径に対して器高が浅く、体部の立ち上がりが緩いA類と、口径に対して器高が高く、体部の立ち上がりが強いB類に大別できる。

A類は、口縁部直下の外面に、縄目状の粘土紐を貼り付けるもの（A1類）と、なにも付けないもの（A2類）とに分かれる。いずれも、大きさにはかなりの幅があり、使われる場所によって、異なる大きさのものが使用されたものと考えられる。A1類は、三の丸跡Ⅰ期の資料の中に見られ、江戸時代初頭から存在する。口縁端部は、内側がわずかに突出する。元禄年間の資料には、A1類・A2類の両方が見られ、口縁端部は、いずれも内側だけが突出させられている。19世紀中葉頃の資料では、口縁端部が内外両側に突出させ、断面がT字状となっている。このように、火鉢A類の時間的変化の方向としては、上記した口縁端部の形状の変化が想

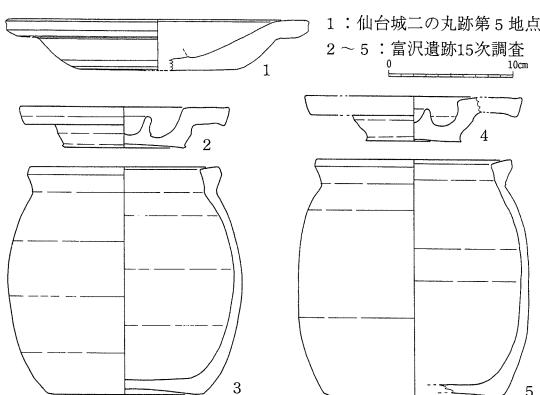


図91 火消壺の類例

Fig. 91 Similar examples of charcoal extinguishers

の資料には、口縁部を外側に折り返したようなものが出土している。また、小破片がほとんどで、全体の特徴が判明する資料は無いが、刻印を有する瓦質土器が、各時期に見られ、これらも火鉢になる可能性が残っている。

⑩ 火消壺

19世紀中葉頃の第10地点出土のものが、形態から火消壺と考えた。全て土師質土器である。法量で若干異なるものが出土している他、体部の張りが強いものがあるが、基本的な形態は共通する。また、第5地点で、これらの火消壺の蓋になると思われるものが出土している（図91-1）。第10地点出土のやや大型のものと、法量が一致する。

火消壺は、仙台市太白区富沢遺跡第15次調査において、身・蓋とも瓦質のものが出土している（図91-2～5、斎野裕彦ほか1987）。この内2号墓出土のものは、身に蓋をした状態で出土している。蓋をした状態から、火消壺で間違いないものと思われる。二の丸跡出土のものとは、形態上の差が大きく、瓦質である点でも、違いが大きい。富沢遺跡出土のものも、二の丸跡出土のものと近い時期と思われ、二の丸跡出土のものが、火消壺と考えて良いか、問題が残る。しかし、第5地点の蓋を含めて考えると、現状では、別の用途が想定し難いため、一応ここでは、火消壺としておきたい。

⑪ 蚊遣り

年報8で概略は指摘したが、図92に示した瓦質土器が、蚊遣りになるものと考えられる。類例は、宮城県志田郡松山町の上野館跡で出土しており（佐久間ほか1993）、円形の上半部と、逆台形の下半部からなる。底面には三足が付くものと、リング状にしているものがある。上半部と下半部の境がふさがれ、そこに小円孔が多数開けられた、作りつけのさなになっているものがあり、ここがふさがっていないものは、別に作ったさなを置いて使用したものと推定され

定される。ただし、第9地点Ⅲ期（寛永15年～元禄年間）に帰属する10号溝から、A 2類で口縁部の断面がT字状を呈するものが出土しており、問題が残る。

B類としたものは、18世紀前葉の資料に、その可能性のあるものが含まれるが、確実ではない。19世紀中葉頃の第10地点Ⅲ層では、A類をしのぐ数が出土している。

A・B類以外にも、火鉢になる可能性のある資料が出土している。18世紀後葉

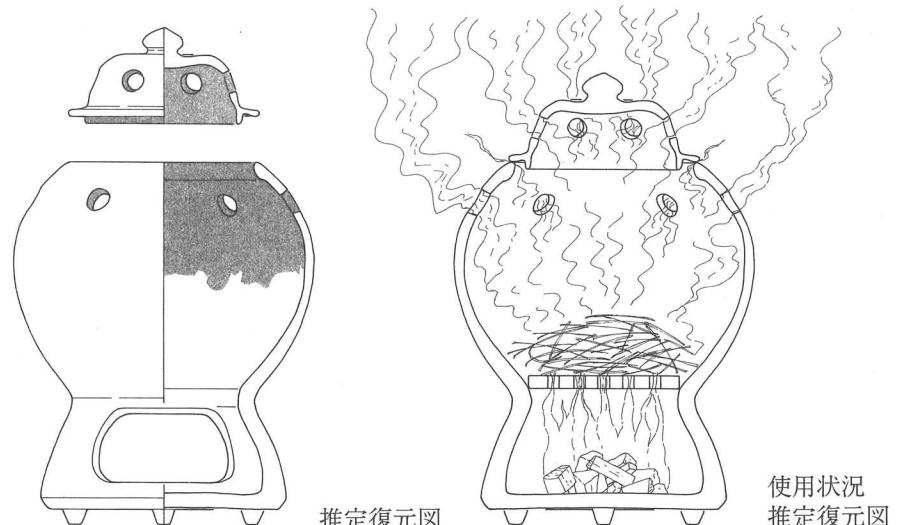
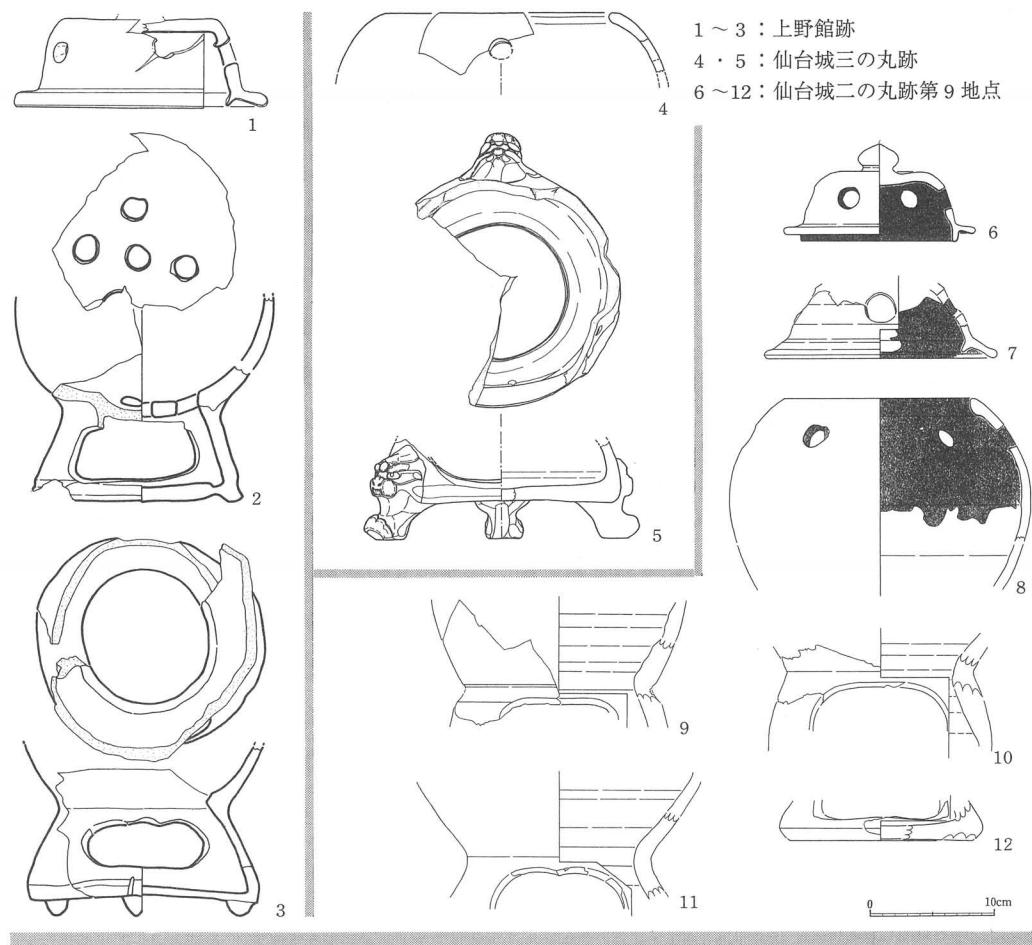


図92 蚊遣りの類例と推定復元

Fig. 92 Similar examples of mosquito-repellent utensils and the reconstruction of use of it

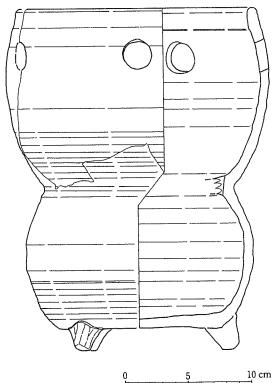


図93 佐沼城跡出土七輪

Fig. 93 The portable cooking stove from Sanuma Castle

して燻す構造と考えられる（図92）。18世紀末～19世紀初頭の資料から見られ、19世紀中葉頃にもほとんど同じ形態のものがある。

佐沼城跡のSK13土坑から出土した19世紀初頭の一括資料の中に、ここで蚊遣りとしたものに、比較的類似した形態の資料が見られる（図93、佐久間・小村田ほか1995）。土師質で、口がほとんどすさまらず大きく開いたままである。上半部と下半部の境は、作りつけのさとなっている。残存部分が少ないため確実では無いが、下半部には炭などを入れて火を燃やすための窓が開けられていたものと推定される。ただし、上半部の内面にタール状の付着物は見られない。この点から、先に復元した蚊遣りとは、異なった用途が想定される。報告書では、七輪とされている。基本的には同様の形態を取りながら、一部の形を変えることによって、様々な用途の道具を作り分けていた可能性が想定される。今後、良好な資料の蓄積を待って、個々の用途を検討していく必要があるだろう。

⑫ 煙炉・手炙り

18世紀後葉の瓦質土器には、煙炉としたものと、手炙りが含まれる。煙炉としたものは、上部がややすさまる円筒形のもので、本体の側面には、一方に大きな窓を、もう一方に小円窓を開ける。口縁部には、一ヶ所、切り欠いた部分がある。一応、煙炉としたが、全体の形態が不明であり、確証はない。手炙りは、兎を模したもので、特殊なものであろう。

⑬ その他の土師質・瓦質土器

これまでに述べた土師質・瓦質土器以外で、19世紀中葉頃の資料にのみ認められるものとしては、炭櫃・五徳・十能・甕？がある。

炭櫃としたものは、瓦質で、方形の箱形の本体に、水平に外側に突出する鍔状部を有するものである。五徳としたものは、土師質で、円筒形を呈し、円形と逆三角形の穴が開く。上端に突起がついていた痕跡があることから、これが土瓶などを掛ける部分の可能性を考えて、五徳

る。これらの資料の本体上半部と蓋の内面には、多量のタール状の付着物がついている。特に、本体上半部にあけられた円窓と、蓋に開けられた円窓には、外側に垂れるようにみ出すほど多量のタール状の付着物が認められ、多量の煙を出す用途が想定される。二の丸出土例の本体内側の底面中央付近には、火熱を受けた痕跡が認められる。一方、上野館跡出土例の、作りつけのさなになっている部分の上面では、小孔の周囲だけが火熱を受けており、火熱が小孔の下側からあたっていたことがわかる。本体上半部と下半部の狭くなった部分にさなを置き、その上に置いた植物などを、下半部に入れた炭で熱して、煙を出

る。本体上半部と下半部の狭くなった部分にさなを置き、その上に置いた植物などを、下半部に入れた炭で熱して、煙を出

とした。十能は、火を付けた炭などを運ぶための道具で、瓦質のちりとりのような平面形をしている。瓦質の甕は、鍔状に外側に突出する口縁部を有するものである。

⑯ ミニチュア

大きさなどから実用品とは考え難いものを、ミニチュアとしてまとめた。確認できる種類としては、甕・壺・擂鉢・杯・蓋などがある。18世紀後葉以降の資料に見られるが、この18世紀後葉の資料⁴で、まとまって多種多様なものが出土している以外は、ごく少数の出土で、時間的変化を検討できる状況には無い。

これらの中で、用途が判明しているものはほとんどないが、豆甕については、用途を推定できる材料がある。宮崎町切込焼記念館で所蔵している鉄軸をかけた陶器製の甕で、高さ7.0cmの小型の甕と、高さ3.1cmの豆甕である。宮崎町内切込地区の庄司家の旧家屋解体時に、藁づとに包まれた状態で発見されたものである。甕の中には米が納められていたという。庄司家の旧家は、慶応頃の建築と伝えられ、家の新築時に行われた風習と見られている（畠山静子ほか1994）。二の丸跡第9地点16号土坑出土の豆甕には、「御落成」との墨書が見られるものがあり（図78-756）、同様に、建物新築時などに使われたものと考えられる。また、19世紀の資料では、二の丸跡からも陶器製の豆甕が出土している。

(5) 小結

いまだ良好な資料に欠ける時期も多いが、仙台城出土の土師質土器・瓦質土器の変遷を検討してきた。この中で、大きな画期としてとらえられるのは、元禄年間の資料であろう。この元禄年間の資料から、土師質土器と耳皿に、外面にミガキの再調整を施すB類が含まれるようになる。これ以降、A類とB類が併存し、幕末まで至る。皿類は、土器類の中で、最も出土量が多く、この変化は重要であろう。また、地元産の焼塙壺も、D類に統一される。いわば、仙台藩での土器類の基本的な姿が、元禄年間までに確立していると言えよう。それ以降は、大型のものを中心に、随時器種が増加していく変化として見ることができる。このような変化が、何時の時点に起こるのかについては、17世紀中葉から後葉の資料が欠落している現在では、明確に指摘できる状況はないが、少なくとも元禄年間までに、このような変化が起きたことは明らかである。

（註1）仙台城三の丸跡出土資料については、報告書で図示されている資料について、観察表に記載された法量から分布図を作成した。

《引用・参考文献》

- 斎野裕彦ほか 1987 『富沢 仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴なう富沢遺跡第15次発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第98集
- 佐久間光平・佐藤憲幸ほか 1993 『上野館跡』
- 佐久間光平・小村田達也ほか 1995 『佐沼城跡』迫町文化財調査報告書第2集
- 佐藤洋ほか 1985 『仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第76集
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 『東北大学埋蔵文化財調査年報1』
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992 『東北大学埋蔵文化財調査年報4・5』
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 『東北大学埋蔵文化財調査年報6』
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1994 『東北大学埋蔵文化財調査年報7』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 『東北大学埋蔵文化財調査年報8』
- 福田敏一・石崎俊哉編 1997 『汐留遺跡I』東京都埋蔵文化財センター調査報告第37集
- 畠山静子・須田富士子 1994 『彩・切込～切込焼色釉の美～』
- 宮崎町ふるさと陶芸館（切込焼記念館）企画展示図録

5. 仙台城の瓦とその変遷

仙台城二の丸跡出土の瓦の整理は、年報4での第7地点の報告以来、目についた特徴的なものだけを抽出して報告するのではなく、なんらかの形で全出土資料の様相を把握し、抽出にも一定の基準を設ける必要があるとの考え方から、識別しやすいくつかの大別基準を設けて全出土資料を把握したうえで、一定の基準で抽出したものを細別・観察していくという方法を基本としている。

第7地点で分類した際には、どのような形態の瓦が存在するのかよくわからなかつこともあり、また、できるだけ簡単な基準で分類するようにしたことから、現在からみると枠組み自体の改善が必要となる点も存在する。これまでも、緩やかな弯曲のある平瓦と平坦な破片を一括していた点を、第5地点の整理の段階では平坦なものを「その他の瓦」として分離することにし、第9地点の整理の際にはそれらを平瓦2類として独立して集計可能にするなどの改善を加えてきた。

したがって、年報3までと年報4以降では瓦整理と資料提示の方法が基本的に異なっており、それ以降の場合も細部に変更があることになり、これまで報告されたデータのみで各地点の資料を同一レベルで論じ、比較をおこなうことはできない。

また、残されている問題点として、棟瓦類のなかに、一般的に棟瓦と呼ばれる丸瓦と平瓦を滑らかに合体させた形態のもの以外に、板状の棟をもつものや、板垢瓦のように平坦でかつ棟をもつものなどを含めてしまつており、一般的な棟瓦・板垢瓦・棟をもつ棟瓦などの分布を集計表から読みとることができない状況にある点などがある。

二の丸跡の調査も10地点を数え、形態を把握し得る資料の蓄積も進んだいま必要なのは、これらにどれほどの多様性が存在するのかを明らかにし、それぞれの製作・使用方法とそれが用いられる意味について考え、屋根葺きという特定の用途に限定される瓦のもつ特色を理解し、当時の社会を考える史料としてどこに着目すべきかを考えることである。そのような検討を経たうえで、調査においてどのように資料を採集し、分類し、提示していくかを考えていくことである。

このような問題意識のもとに、ここではまず仙台城の瓦の多様性を形態と法量に重点をおいて検討する。そして形態の特徴に基づいた使用方法の検討ができるかぎりおこない、またそれらの年代的な位置づけ（製作年代）について、層位的出土状況からその出現時期の下限をどこまで限定できるか、また限定できる時期における様相がどのように把握できるか検討してみることにしたい。

なお、用いている数値の計測部位については図96によっている。

二の丸跡では第5地点・第9地点において、層位的検討のできる良好な資料が出土しており、

これらを中心に検討していくことになるが、第9地点の7層以下出土品は、同地点のI期、二の丸の造営が開始される1638年以前に位置づけられるまとまった資料であり、コピキAの有無などについて、抽出資料のみでなく網羅的に観察する必要があると考えたことから、年報8での報告作成にあたり、他の資料とは別にまとめておいた。しかしその後、観察と報告書記載資料の登録の段階でこれらをぬかしてしまっていた。報告執筆の段階にはそのことに気づかなかつたため、集計表には記載されているが、7層以下の資料が1点も提示されないことになってしまった。これらは仙台城の瓦の変遷を考えるうえで欠くことのできない重要な資料であり、まず初めにその内容を明らかにしたうえで、上記の観点から仙台城全体の瓦のあり方について考えていくことにしたい。

(1) 二の丸跡第9地点 I期の瓦

ここで報告するのは、先述のように第9地点7層以下（7層、北区7a・7b・7c・7d層、8層、I期の遺構）の出土品である（南区7-①・②・③・④層からは瓦の出土がない）。

分類・集計の方法は年報8と同様であるが、二の丸では最も古く時期を限定できる資料であることから、年報8での抽出基準には適合しないものでも、形態の多様性を示すために特別に抽出・図化している。

今回改めて見直したところ、集計表（年報8表8・9）の分類と点数にいくつか変更がある。訂正した数値を表20に掲げている。

また、年報8本文中で第9地点全体の軒丸瓦類の出土点数を70点としていたが、これは7層以下を加えずかつ文様のわかるものののみの点数で誤りであった。正しくは総計82点で、そのうち瓦当文様の明かなものが72点となる。文様別出土点数は、三引両文・九曜文には変更がないが、連珠巴文と巴文が1点ずつ増えてそれぞれ10点と4点である。

7層以下の出土状況をみると、量的には少ないが、種類としては本瓦葺でひとつの屋根を葺くのに必要なものがひとつおりそろっているといえ、I期に組棟をもった瓦葺き建物が存在していた可能性は高いと考えられる。

次に形態ごとにみていきたい。

軒丸瓦類（図94、図版21、表21）

瓦当部分のみ2点ある。文様には三巴文（153）と連珠三巴文（154）があり、巴の巻はいずれも頭が右にくる。

軒平瓦類（図94、図版21、表21）

155はわずかに残る周縁と内区の存在から軒平瓦類と考えられる。軒平瓦類とみなせるものはこれ1点しかない。文様は不明である。瓦当が剥落した跡には、櫛状の工具による頭側の刃

に沿った平行沈線が認められる。平瓦部の調整をみると、凹面には側縁平行方向に凸形台の木目痕とみられる凹凸が顕著に認められる部分、それをなで消す部分、さらにその上からハケメ状の調整？が認められる部分もあり、単純ではない。凸面には砂粒が目立ち、軽くなでられてはいるようだが、全体にざらついている。

丸瓦類（図94・95、図版21・22、表21）

32点出土。完形を知り得るものはない。唯一頭幅を計測可能な160では、15.1cmをはかる。

凹面にはコビキ痕と布目痕をいずれも残すが、コビキ痕が浅く細く、部分によってはほとんど観察し得ないものもある。観察し得る限りでは、条痕が弧を描くコビキAであると断定できるものは認められない。布目も細かく、必ずしも全面に残らない。胴部には刺子の痕跡がないか少なく、玉縁部になると刺子が密になり目立つ傾向がある。157は吊紐痕と棒状圧痕を残すもの。159は垂れ下がる一単位の吊紐痕と粘土板の接合痕を残している。

161・162は、輪違いないし玉縁を段差をもって作り出さない形態の丸瓦の可能性も考えられる。凸面には残存部分の中程かやや下に稜線が形成されており、それを境として表面の調整に違いが認められる。

平瓦1類（図94、図版21・22、表21）

41点出土。完形を知り得るものはない。

163は小片だが、凸面に縦横に交差する数条の細い沈線が認められる。164も、側縁平行方向の細い沈線が、凸面に3～4cm間隔で3条確認できる。

165・166は凸面隅近くに弧をえがく断面V字形の沈線の認められるものである。

平瓦2類

図示できるものはないが、5点出土している。

熨斗瓦（図94、図版22、表21）

反りのある平瓦と同じ形態のものを割った痕跡のあるもので、分割線は焼成前に凹面側に入れられている。2点あるが、図示した167は、凹面に、幅1cm前後の深い溝が側縁平行に3cm前後の間隔で刻まれているものである。

輪違（図94、図版21、表21）

168は凹面にコビキ痕・布目痕・吊紐痕を残し、側縁と隅に面取りが施されたもので、輪違ないと考えた。側縁の面取りは凹凸両面の角をとっているが、二の丸跡で一般的なものに比べると幅が狭い。

その他の瓦（図94・95、図版22、表21）

169は平坦なもので、図での上側に櫛目状のきざみがあり、棟のようなものがはりつけられていたと考えられる。図の下側の欠損部にかけて、丸い平面形の釘穴が1ヶ所確認できる。板

埠瓦に近いものと推定される。

170～172は鬼瓦と考えられる。171は平坦な面をもち、裏側に取手状のものをつける。取手部分は縦方向になでつけられ断面は多角形に近い。170は平坦面の片側に丸いえぐりをつけ、裏面にはやはり取手状のものがついていた痕跡を残すものである。172は分厚い平坦部の裏側端部に板状の突帯をはりつけたもので、平坦部は鈍角の多角形を呈している。平坦部裏面の調整は、いずれも断面が深い凹形をなす不定方向の幅の狭い削りで、それ以上調整を加えていない。

三の丸跡Ⅰ期（1601～1637年）の8号土壙からも171と同様のものが出土しており、鬼瓦とされている（仙台市教育委員会1985）（図113－11）。また東京大学御殿下記念館地点にみられる鬼瓦に、背面に環状取手をつける例があり、同地点の瓦Ⅰ期（1650～70年ころ）、Ⅱ期（1730～40年を下限）に確認できる（東京大学埋蔵文化財調査室1990）。東大の例と比較して三の丸例・二の丸の170・171も環状取手をもつ鬼瓦と考えることができる。171のえぐり部分を、破風の押み部分の「隅巴」をまたいで据えるためのものとみれば、鬼瓦のひとつは「跨ぎ鬼」と称される形のものであったことになる。

表20 仙台城二の丸跡第9地点Ⅰ期の瓦集計表（改訂版）

Tab. 20 Corrected distribution of roof tiles belonging to phase I at NM9 カッコ内は重量kg

区・層・遺構	平瓦1類	平瓦2類	丸瓦類	棟瓦類	板埠瓦	軒平瓦	軒丸瓦類	面戸瓦	輪違い	その他の瓦	不明瓦
7層	3 (0.70)		3 (0.56)			1 (0.32)				2 (0.53)	
北区7a層	5 (0.96)		3 (0.19)				1 (0.20)				3 (0.06)
北区7b層	4 (0.52)		1 (0.20)							1 (0.30)	
北区7c層	7 (1.69)	1 (0.05)	2 (0.15)							1 (0.20)	2 (0.05)
北区7d層	7 (1.63)	1 (0.03)	6 (0.86)								1 (0.06)
南区7-①層											
南区7-②層											
南区7-③層											
南区7-④層											
8層	3 (0.31)		5 (1.83)							1 (0.06)	
4号建物跡											
5号建物跡	2 (0.31)	1 (0.14)	5 (0.79)								
6号建物跡											
17号柱列											
16号溝 埋1層	7 (1.30)	1 (0.14)	4 (0.58)						1 (0.16)	1 (0.67)	
16号溝 埋2層	3 (0.45)	1 (0.12)	3 (0.36)				1 (0.10)				2 (0.06)
17号溝											
18号溝											
その他のI b期のピット											
I b期の遺構小計	12 (2.06)	3 (0.40)	12 (L.73)				1 (0.10)		1 (0.16)	1 (0.67)	2 (0.06)
7号建物跡											
22号土坑											
19号溝											
20号溝											
21号溝											
その他のI a期のピット											
I a期の遺構小計											

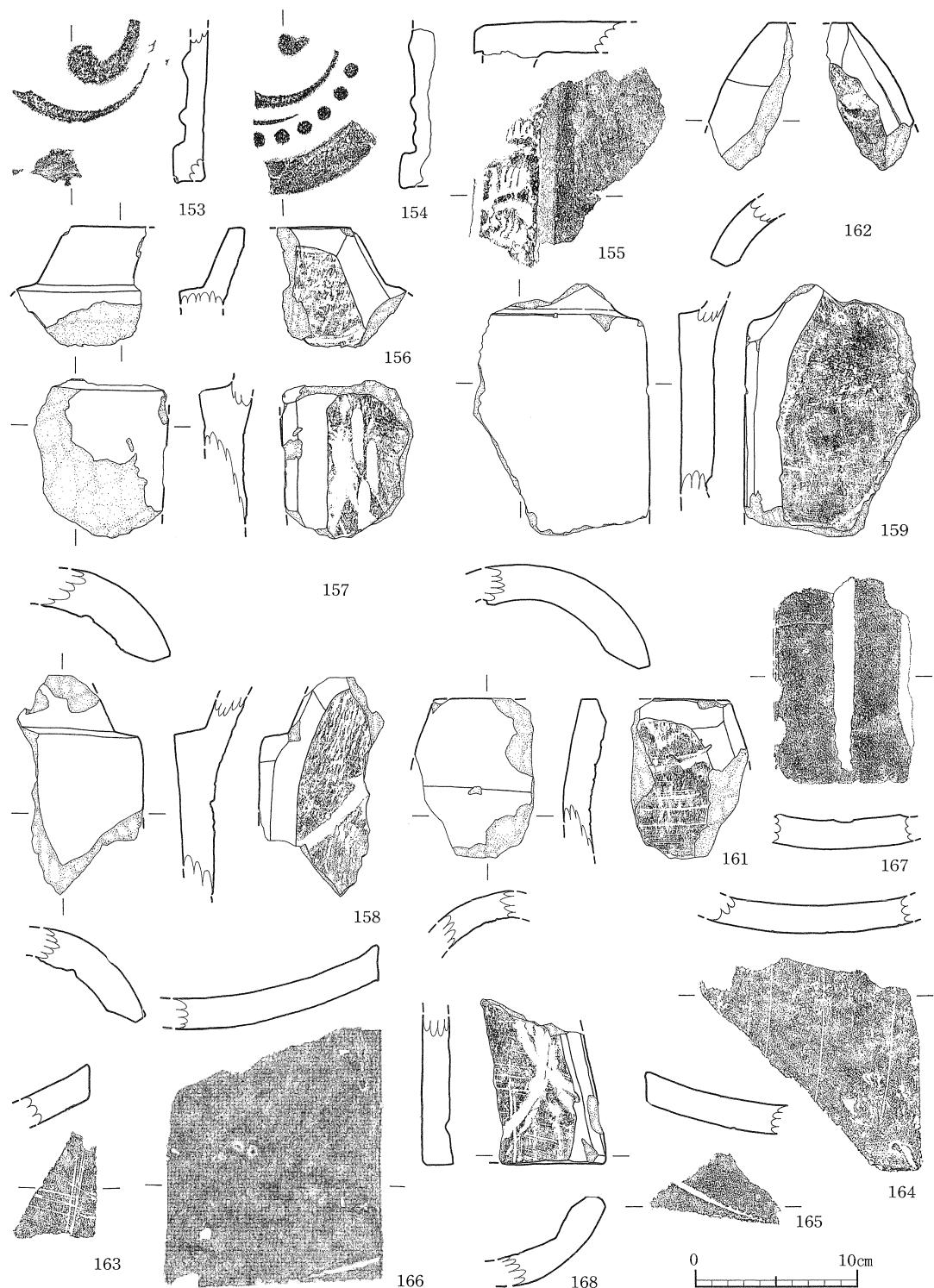


図94 仙台城二の丸跡第9地点I期の瓦(1)

Fig. 94 Roof tiles of phase I from NM9(1)

the end of the 16th century
the early 17th century

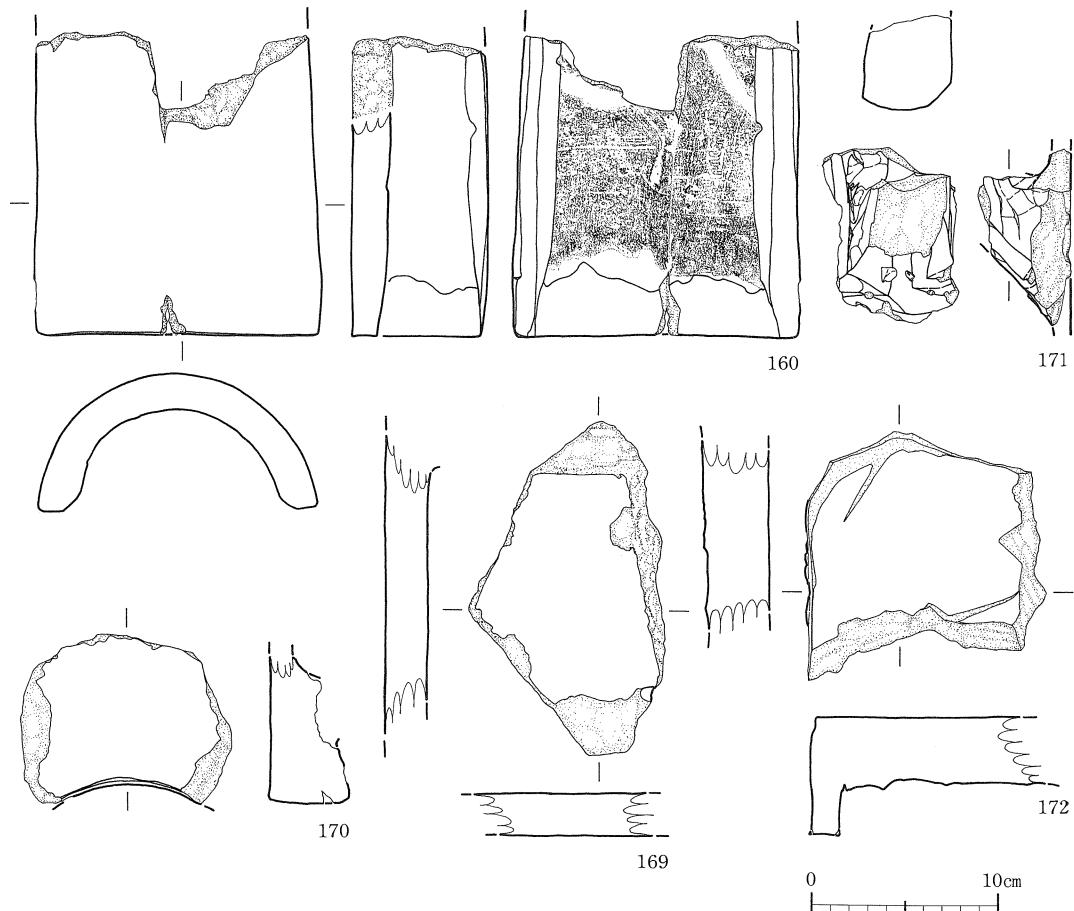


図95 仙台城二の丸跡第9地点I期の瓦(2)

Fig. 95 Roof tiles of phase I from NM9(2)

the end of the 16th century-the early 17th century

表21 仙台城二の丸跡第9地点I期の瓦観察表

Tab. 21 Notes on roof tiles of phase I at NM9

登録番号	出土場所	種類	特徴	図	図版
153	A C 7 7a層	軒丸瓦類	三巴文(左巻) 推定瓦当径16.8cm	94	21
154	16号溝 埋2層	軒丸瓦類	連珠三巴文(左巻) 推定瓦当径16.6cm	94	21
155	A E 7 7層	軒平瓦	文様不明 瓦当剥落部分に櫛目状の平行沈線	94	21
156	A B 3 7d層	丸瓦		94	21
157	16号溝 埋1層	丸瓦		94	21
158	A C 5 8層	丸瓦		94	21
159	A F 5 8層	丸瓦		94	21
160	A F 6 8層	丸瓦	頭幅15.1cm	95	22
161	A F 4 7d層	丸瓦類		94	21
162	16号溝 埋1層	丸瓦類		94	22
163	A E 7 7層	平瓦1類	凸面に沈線あり	94	22
164	16号溝 埋1層	平瓦1類	凸面に沈線あり	94	21
165	A C 3 7b層	平瓦1類	凸面に弧状沈線あり	94	21
166	A B 3 7d層	平瓦1類	凸面に弧状沈線あり	94	22
167	5号建物跡柱4	熨斗瓦	凹面に分割截線 側縁に平行する溝あり	94	22
168	16号溝 埋1層	輪違い		94	21
169	A E 7 7層	不明(板堀瓦?)	棟状のものが剥落した跡に櫛目状の平行沈線 釘穴1ヶ所	95	22
170	A C 3 7b層	鬼瓦	一辺が弧状にえぐられる 背面に取手についていた痕跡あり	95	22
171	A B 3 7c層	鬼瓦	背面に取手あり	95	22
172	16号溝 埋1層	鬼瓦		95	22

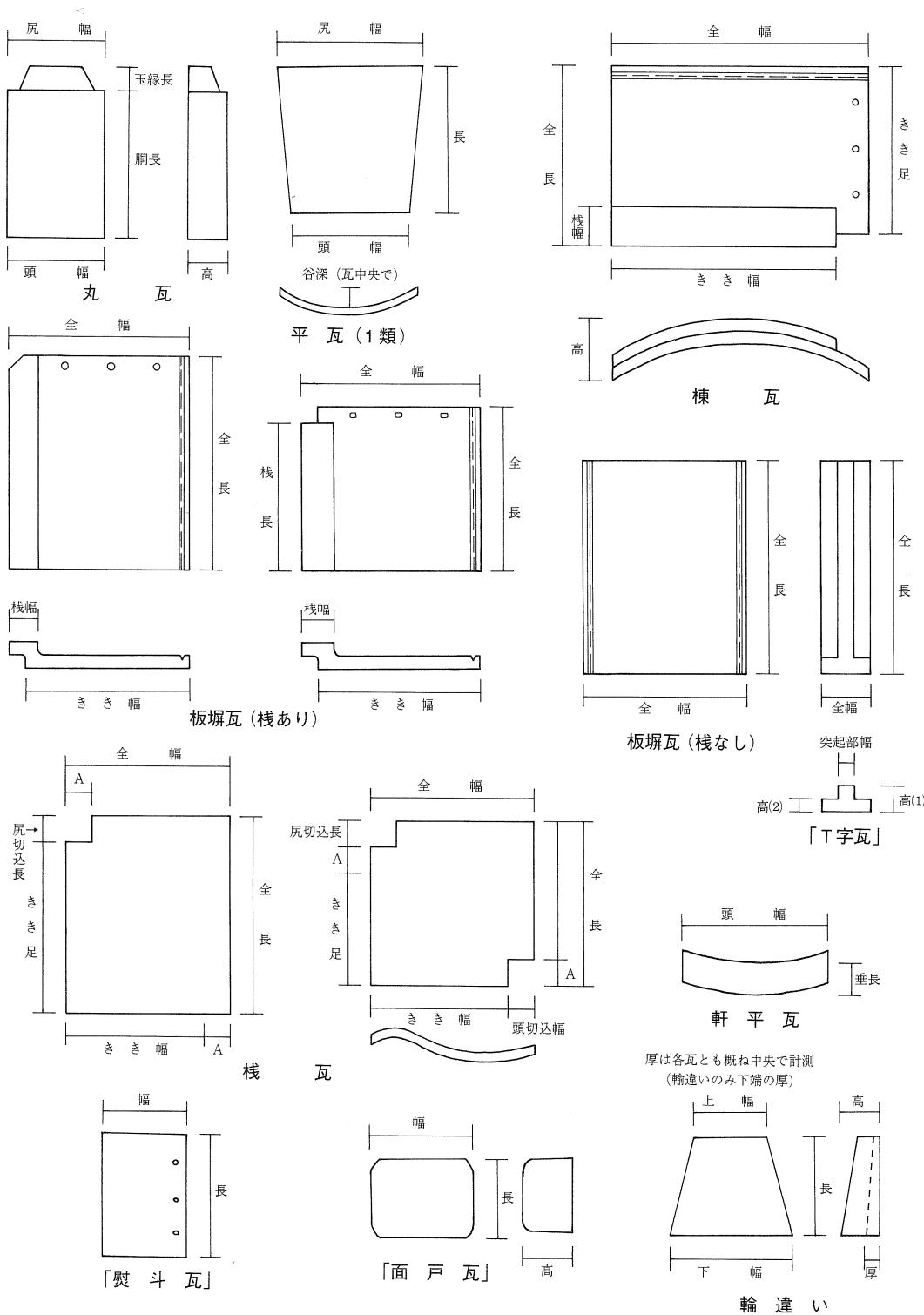


図96 瓦の計測部位

Fig. 96 Points of measurements on roof tiles

(2) 二の丸・三の丸跡出土資料の形態的特徴と変遷

① 軒丸瓦類（丸い瓦当をもつもの）・軒棧瓦小巴

A. 文様構成（図97・98）

二の丸・三の丸跡で検出された軒丸瓦類・軒棧瓦小巴の瓦当文様のモチーフには、中世以来の伝統文様である巴文、三引両文、九曜文、桐文、菊花文がある。

巴文には三巴文のみのものと、珠文をめぐらす連珠三巴文がある。巴の巻きの方向には左巻き（頭が右で尾が左に延びる）が多く、右巻きが少量認められる。

三引両文、九曜文は伊達家の家紋で、多数出土している。桐文、菊花文も伊達家の家紋に数えられる意匠だが、桐文は全形が不明な1点のみであり、またここでみられる菊花文は家紋として定型化したものとは異なるため、両者が伊達家の家紋に由来するのかどうかは不明である。

菊花文は棟込の菊丸瓦にのみ確認される（図98）。周縁がなく、花弁の表現に突線で輪郭を描くもの（A）と浮き彫り状のものがあり、後者には花弁端の形が角ばるC、切込みのあるBがある。

軒棧瓦の小巴には巴文、連珠巴文、三引両文、九曜文が用いられている。量的には巴文のほうが圧倒的に多く、ほとんど三巴であるが、三の丸では頭部に3枚の花弁状の突起のつけられる「二つ丁子巴文」とみられるものが1点ある（図97）。三引両文と九曜文は第9地点（以下二の丸跡各調査地点の記述に際しては「二の丸跡」を省略し、第～地点とのみ記述する）で1点ずつ確認されたのみである。

二の丸跡と三の丸跡を比較すると、種類だけをみれば基本的に同じ構成であるが、三の丸に

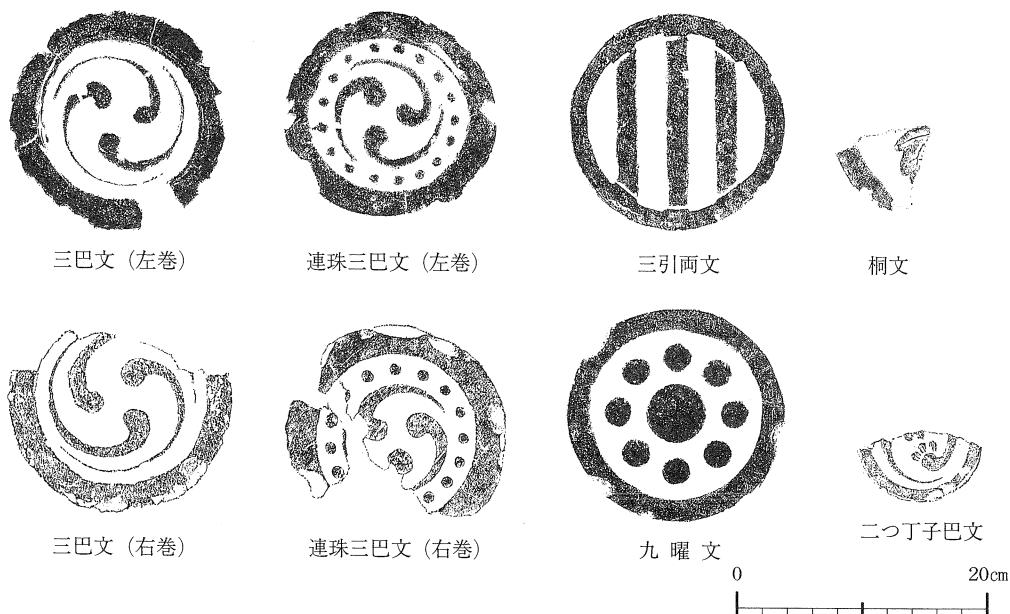


図97 仙台城跡出土軒丸瓦類・軒棧瓦小巴の文様

Fig. 97 Designs of round eaves tile and round shaped part of eaves pan-tile from Sendai Castle

桐文が認められない点、軒棧瓦小巴に「二つ丁子巴文」がみられ、三引両文・九曜文が認められない点が異なる。

B. 変遷

次にこれらの変遷について考えてみたい。第9地点では、7層以下の資料を含めて検討した結果、17世紀代には連珠巴文と巴文（以下両者をあわせて巴文系と称する）のみで、三引両文と九曜文（以下両者をあわせて家紋系と称する）が含まれていないことが明らかになった。家紋系が確実に出土してくるのは18世紀代の遺構からである。このことは江戸時代初頭に用いられた文様は巴文系のもので、家紋系を用いたものは遅れて出現した可能性を示している。

二の丸跡で家紋系として最も古く位置づけられるのは、第5地点 I a 期の南区3層、北区⑧層、13号溝から出土している三引両文8点、九曜文4点であり、両者が I a 期中には出現していることは確実である。また同期の遺構からは巴文系も相当出土しており、I a 期中にはこれらを用いた建物も存在していたはずである。このあたりを、今回確認された第9地点での傾向とあわせて考えると、第5地点においても I a 期の古い段階、西屋敷が創建された可能性の高い元和6年（1620年）頃には巴文系が用いられ、その後西屋敷が廃絶されるまでの間に家紋系を用いて葺替えないし建替えが行われたことが想定できる。家紋系の出現、あるいは巴文系から家紋系への「転換」は、元和6年（1620年）～寛文元年（1661年）の間で、その間に瓦の文様に影響を及ぼし得る出来事として最も可能性が高いのは二の丸の造営である。二の丸の造営が始まった寛永15年（1638）年頃に、周辺の既存の建物も整備したということも考えられよう。

これは三の丸跡の調査報告で指摘された、三の丸以前には巴文系しか出土しないという傾向にも合致している。

第9地点では家紋系が18世紀のIV期の遺構から出土するようになるが、17世紀代に家紋系が認められない点には、17世紀代の二の丸遺構が跡であることなど、検出されている遺構の性格の違いが反映している可能性もある。

中世以来の伝統文様である巴文系がまず使われ、遅れて伊達家独自の文様としての家紋系が創出されるという流れは全体として納得のいくものであるが、巴文系のなかで両者が全く同時に同じ屋根に用いられたのか、家紋系ができると巴文系は全く作られなくなるのか、また、家紋系のそれぞれがどのように使い分けられるのかということも考えていかなければならない問題である。

菊花文では、Cは不明だが、第5地点での出土層位より、Aは17世紀中葉までに、Bは元禄年間以前に出現していることがわかる。

C. 軒丸瓦丸瓦部の形態（図100）

丸瓦部の形態については年報7で一度述べているが、今回第5地点の資料を見直したところ、

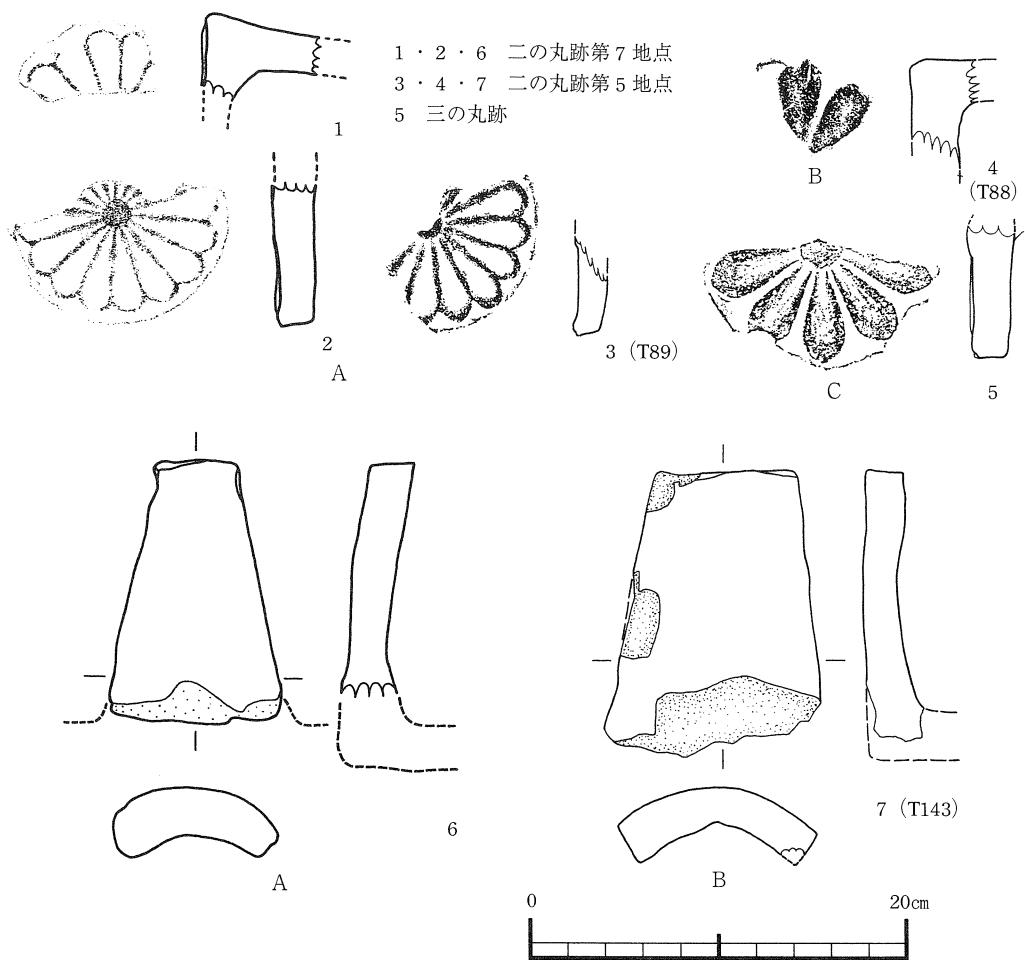


図98 仙台城跡出土菊丸瓦の文様と形態

Fig. 98 Designs and shapes of ridge decoration round tiles from Sendai Castle

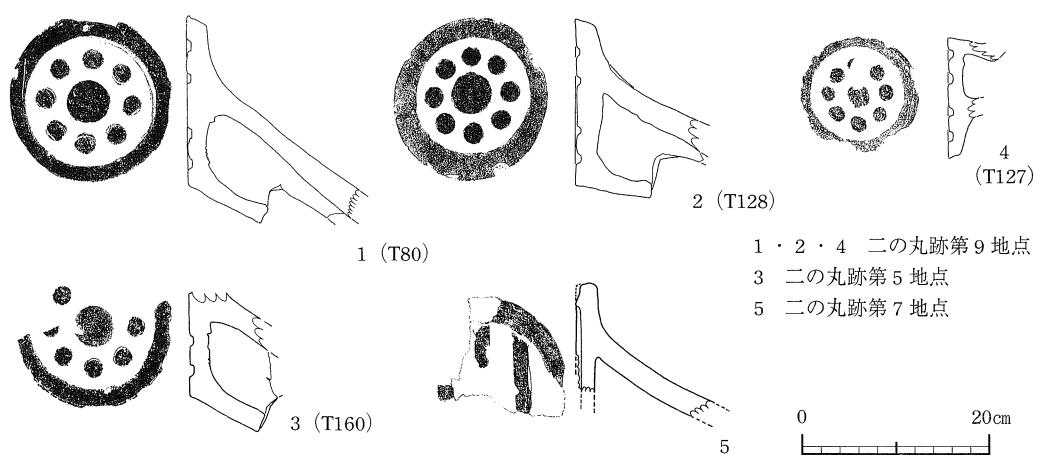


図99 仙台城跡出土鳥伏間の形態

Fig. 99 Shapes of bird perch tile from Sendai Castle

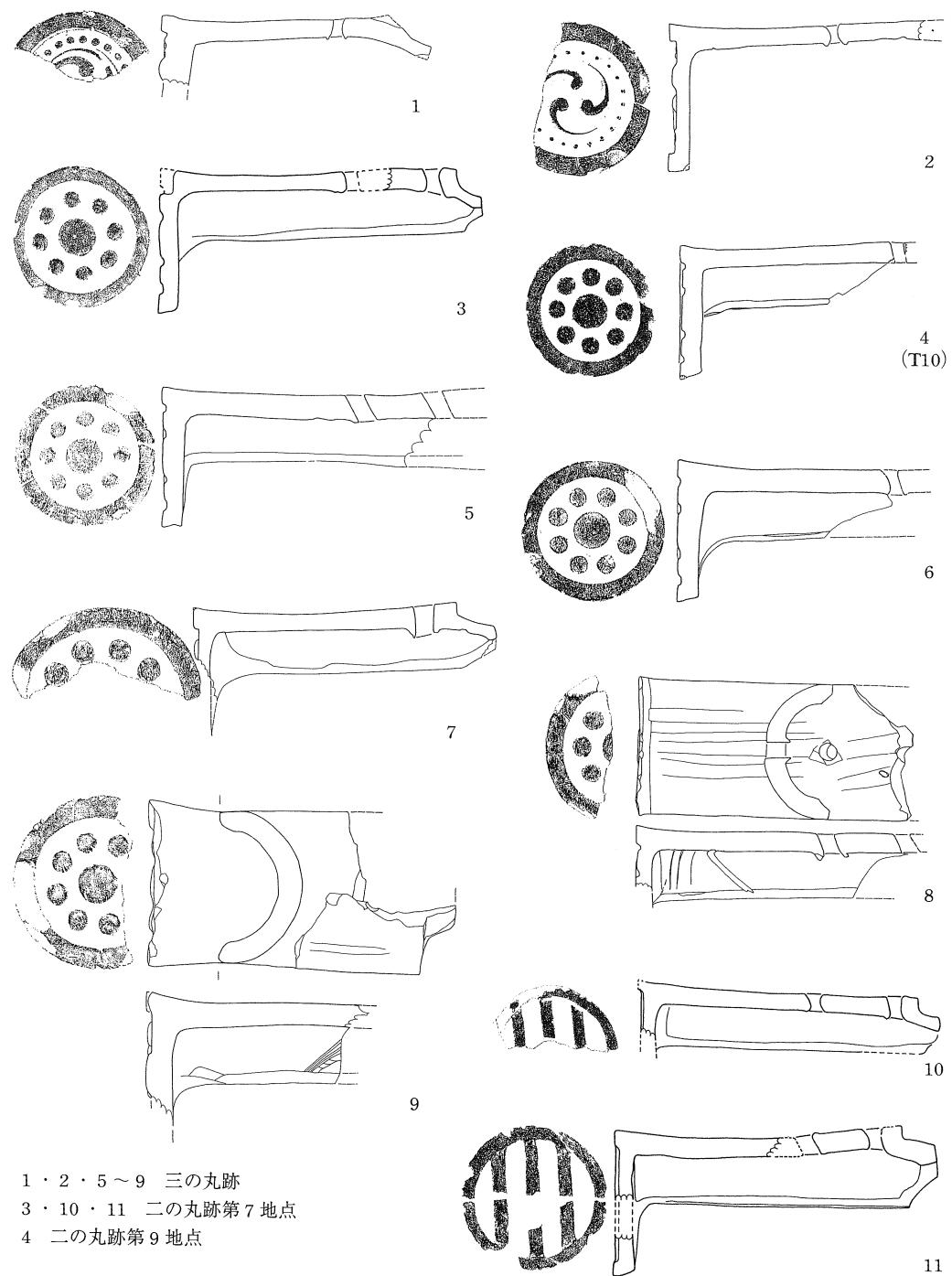


図100 仙台城跡出土軒丸瓦の形態

Fig. 100 Shapes of round eaves tile from Sendai Castle

三巴文（左巻）に伴う丸瓦部の完全な形のわかるものが1点出土していたことが明らかになった。時間の都合で実測図を掲載できなかったが、それは玉縁を段差をもって作りださず、尻部を丸みをもってすぼめるのみのもので、釘穴は1ヶ所である。瓦当部を含めた全長は29.8cmである。三の丸跡では連珠三巴文（左巻）に伴う丸瓦部のわかるものが1点あり、長さは一尺前後とされる。これは実見していないが、実測図をみると、胴部と玉縁の境界がなだらかになるようであり、一般的な形ではない可能性がある。三の丸例は三の丸以前のⅠ期（1638年まで）、第5地点例は17世紀中葉以前のものと考えられる。また、連珠巴文では残存部分だけをみても1尺より大きいとわかるものが他にあることから、長さが1種類でなかったことは確かである。

三引両文に伴う丸瓦部がわかるものは第7地点に2点あるのみで、2ヶ所に釘穴を有する。いずれも幕末～明治初頭頃に廃棄されたものらしい。

九曜文に伴う丸瓦部は長さがわかるものが二の丸・三の丸跡で3点あり、釘穴には1ヶ所と2ヶ所のものがみられる。図示したような、ある程度残存状況のよいものを含めてみても、瓦当直径と丸瓦部の長さは単純に相関するわけではないようである。これらも幕末からそれ以降に廃棄されたとみられるものばかりで、形態ごとの時期差などは検討できない。

D. 菊丸瓦の丸瓦部の形態

菊丸瓦の丸瓦部は瓦当との関係がわからないが、上面観では瓦当部に比べ尻部を幅狭く作る。幅の狭め方の程度に2種類が認められる（図98）。狭め方が小さいBは、第5地点の元禄期の盛土から出土しており、17世紀代には存在が確認される。Aは幕末～明治ころに廃棄されたものと考えられる。

E. 鳥伏間の形態

軒丸瓦類のうち、鳥伏間と考えられるものは5点出土しており、九曜文と三引両文がある（図99）。九曜文の瓦当直径17cm前後の3点（1～3）は同様の形態であるが、12.6cmの1点（4）はこれらとは異なる形態と考えられ、あるいは鬼瓦などの一部であるかもしれない。三引両文のもの（5）は1点で、推定直径17.2cmである。全体の形は不明だが、九曜文のものに比べると薄手の作りである。これらのうちでは九曜文小型の4が第9地点Ⅳ期出土で18世紀のもの、大型の1～3はいずれも19世紀に入ってからの遺構からしか確認されていない。三引両文は時期不明である。

以上の軒丸瓦類・軒棧瓦については、各文様の中での範の区別や、技術的な点の検討も行うべきであるが、今回はそこまで進めることができなかつたため、今後の課題としておきたい。

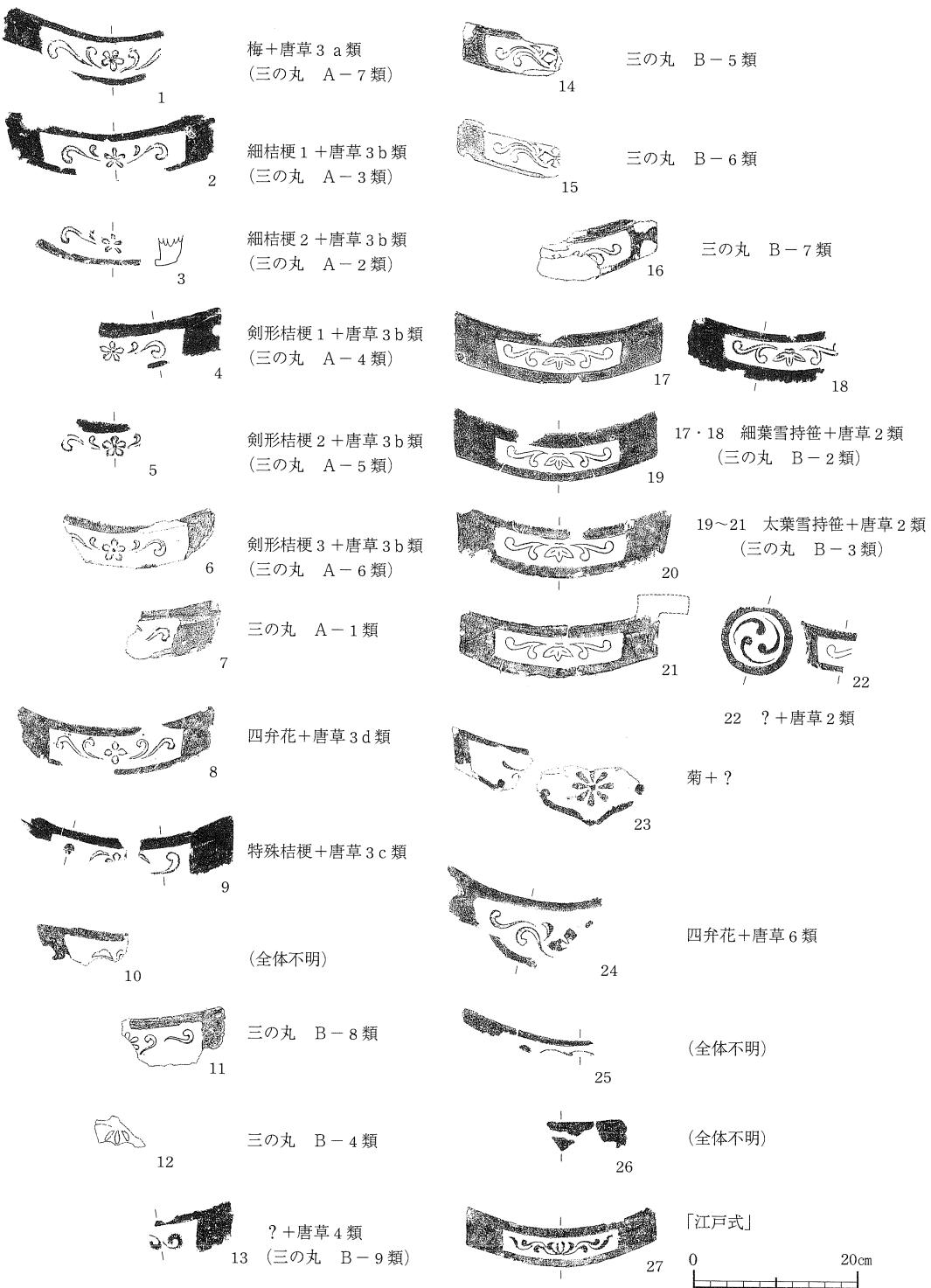


図101 仙台城跡出土軒平瓦・軒棧瓦の瓦当文様(1)

Fig. 101 Designs of flat eaves tile and eaves pan-tile from Sendai Castle(1)

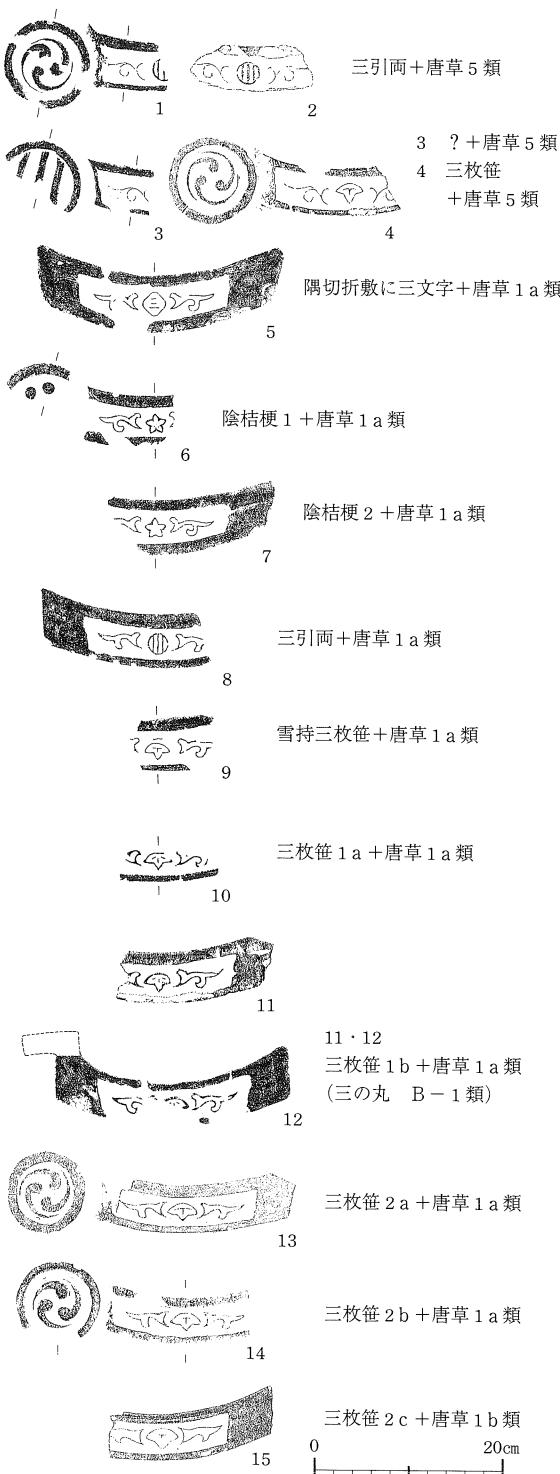


図102 仙台城跡出土軒平瓦・軒桟瓦の瓦当文様(2)

Fig. 102 Designs of flat eaves tile and eaves pan-tile from Sendai Castle(2)

② 軒平瓦・軒桟瓦垂れ部

A. 文様構成 (図101・102)

大別して、A – 中心飾りに花文・剣菱文をおき、各葉が独立した唐草文が左右対称に2~3単位展開するもの (図101-1~9・11・14~16・24)、B – 中心飾りに三枚セットの笠文・伊達家の家紋・その他の家紋をおき、各葉が独立しない唐草文が左右対称に展開するもの (図101-17~22、図102)、C – それ以外のもの (図101-27) に分けることができる。文様の分類名称は年報6のものを基準にし、それ以降確認されたものはそれぞれの報告に従っている。

文様の構成の方法からみた場合、A・Bのように各自独立した中心飾りと唐草文を組合せるものがほとんどである。1点のみ出土例があるCの図101-27は、中心飾りと唐草文が一体化して全体でひとつの文様をなすものであり、仙台城においては特異な存在である。この文様の系譜は江戸にあり (加藤晃1989・金子智1996)、1点のみにしろこれが存在する背景は今後究明する必要がある。

A・Bを構成する唐草文のうち、特に唐草1類 (図102-5~15) は唐草細部の形態に変異が大きく、組み合う中心飾りにも多様性がある。三枚笠、雪持三枚笠、三引両、陰桔梗、隅切り折敷に三文字がこれまで確認されている。検出数の多い三枚笠には、さらに葉形・葉脈の表現に細かな違いがある。葉脈の表現では、三枚分が独立しているもの (1a・b)、一体となるもの (2a)、一体となってT字形をなすもの (2b・c) がみられる。唐草2類 (図101-17~22) には雪持笠、唐草5類 (図102-1~4)

には、これまでのところ三引両・三枚笹が組み合うことがわかっている。唐草3類と6類、三の丸分類B-5・6・8類は梅・桔梗・四弁花・剣菱など比較的写実的な文様が組合う。

AとBを比較してみた場合、両者に共通する中心飾りはなく、Aは特定の家紋に限定されない比較的写実的な絵柄、Bは家紋か家紋の可能性もある様式化した笹文であるという違いが指摘でき、唐草文の違いも加え、全く系統を異にするものということができよう。

B. 瓦当の形態

軒平瓦・軒棧瓦垂れ部とともに、ほとんどは単純な弧状であるが、軒平瓦には、下端を垂下させ、くびれをもつ逆三角形に近くなる滴水瓦とよばれる形態のものが、第7地点と第9地点から1種類ずつ出土している。第7地点のもの（図101-23）は菊花文が中心飾りで、唐草はよくわからない。下側の周縁部のくびれにあわせて丸い突起を作りだしている。第9地点のもの（図101-24）は四弁花に3葉の独立した唐草文が展開するものであり、いずれも単純な弧状のものとは文様が共通しない。

C. 変遷

これらの変遷については、第5地点のまとめ（年報7）で若干の検討を行ったが、新たにいくつかの知見を加えることができた。

三の丸跡I期の遺構での出土状況から、三の丸造営以前に存在が確認されるのは、三の丸分類のA-2類（細桔梗2）、A-4・5類（剣形桔梗）、B-6・8・9（唐草4類）類であり、A-2・4類に類するものは第5地点でもIa期中の存在が確認でき、二の丸跡の軒平瓦類の文様のなかでは最も古く位置づけ得る部類に入る。A-7類に類するものも同様に位置づけられる。

唐草1類は最も新しいものであろうと推定していたが、1a類に伊達家とは異なる家の家紋を組み合わせたもの（図102-5・6）が、第9地点IV期の14号土坑から出土しており、唐草1a類は18世紀のうちには出現していると考え得る。年報7で想定したように、唐草1a類が5類を祖型とすると考えると、5類の出現がさらにさかのぼる可能性がでてくる。

唐草2類（図101-17～22）は第5地点Ia期、第9地点III期のうちには存在が確認でき、元禄年間以前には出現していたと考えられるが、三の丸I期には認められない。このことから、唐草2類の出現は17世紀初頭まではさかのぼらず、二の丸・三の丸造営から第5地点Ia期のうちに求められる可能性がある。唐草2類に組み合う中心飾りは雪持笹文に限定される。この笹文様の由来はまだ検討が必要であるが、伊達家の家紋の竹に雀に由来するものであるとすれば、軒丸瓦に家紋系が出現するのとほぼ軌を一にしていたことになり、またそう考えればその時期にこの類が出現することに必然性があることになる。

唐草1類・2類・5類（文様構成の大別B類）は軒棧瓦にも用いられており、出土量からみ

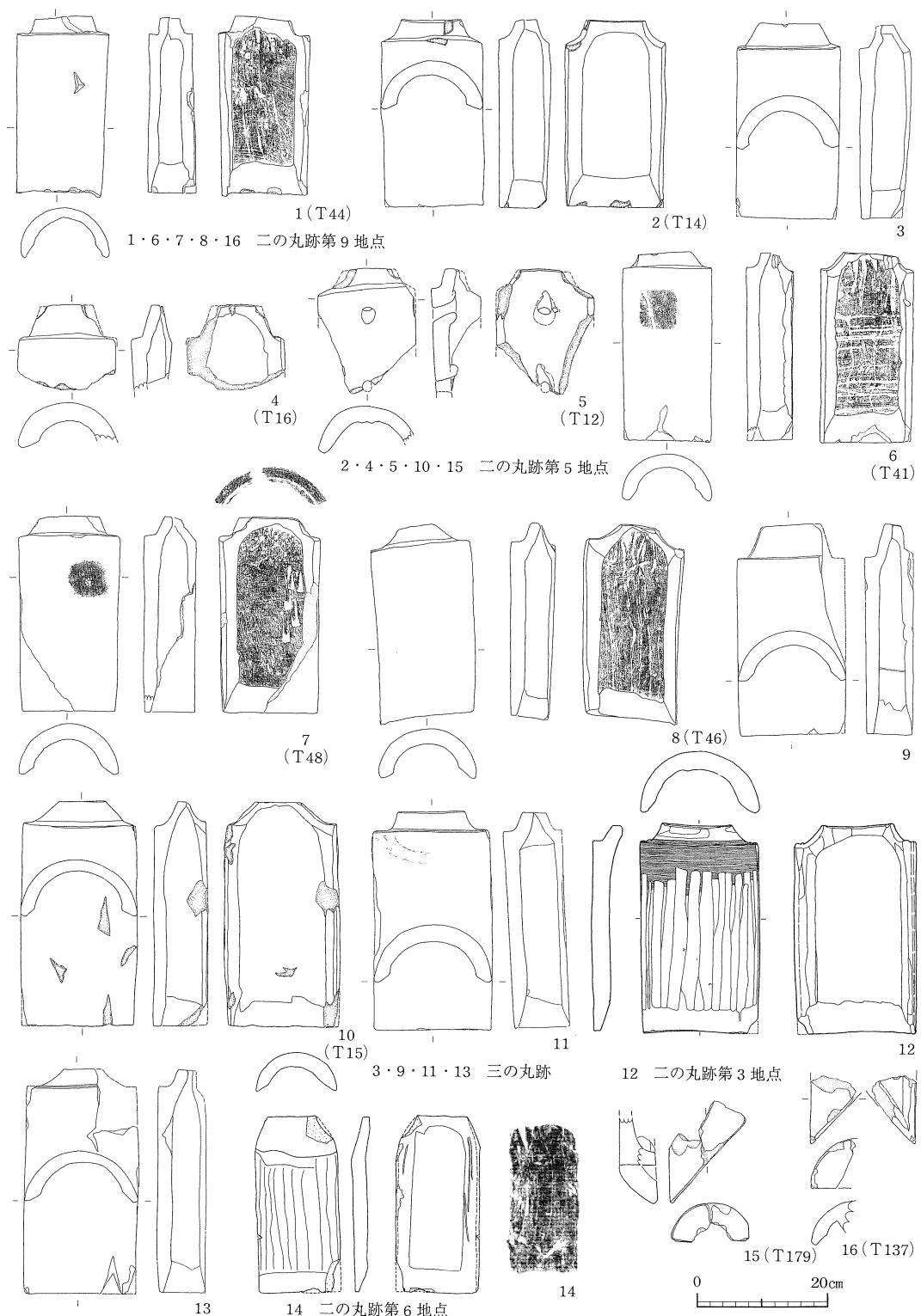


図103 仙台城跡出土丸瓦・谷瓦

Fig. 103 Round tiles from Sendai Castle

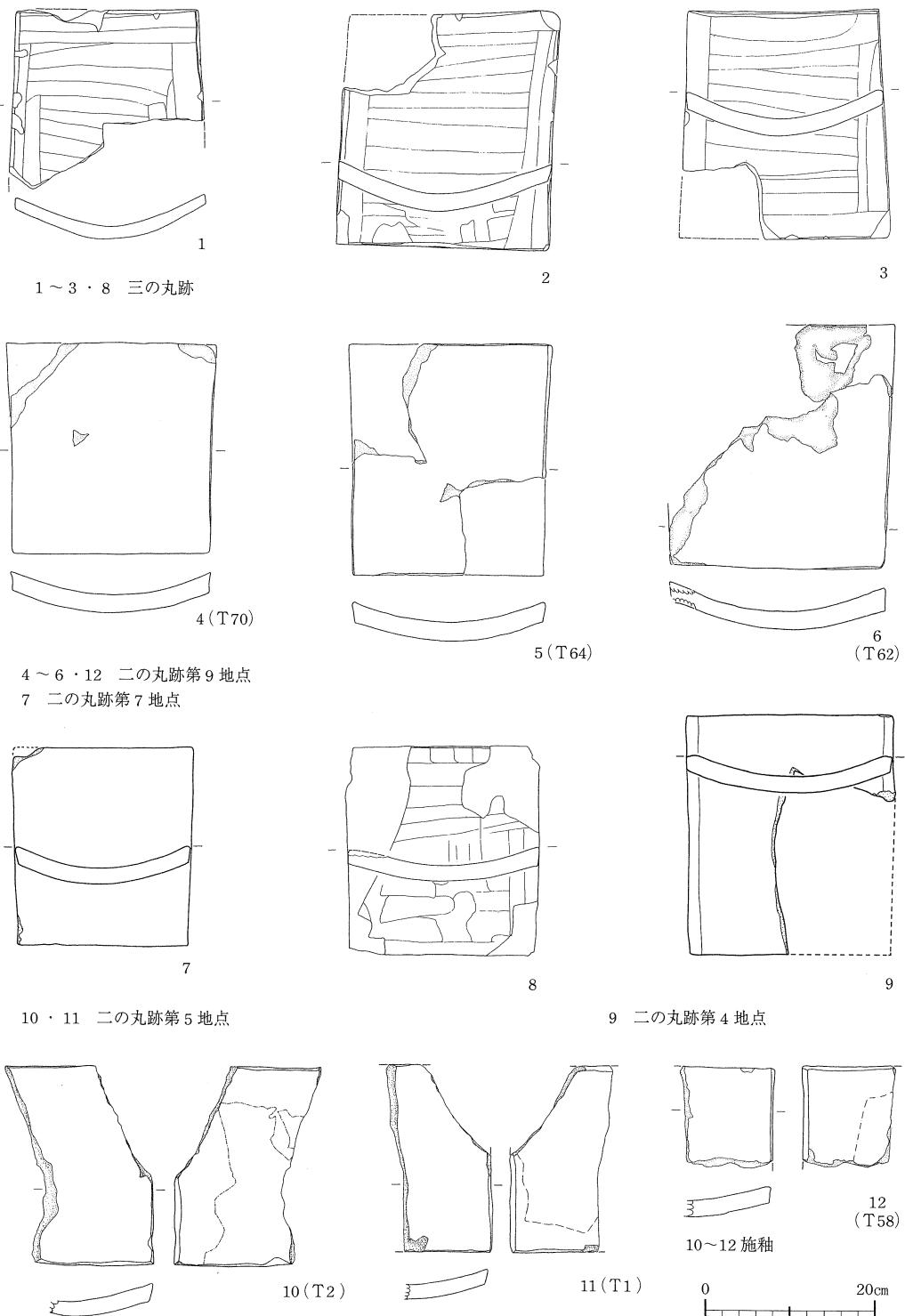


図104 仙台城跡出土平瓦
Fig. 104 Flat tiles from Sendai Castle

ても、棧瓦葺が行われるようになってからはこれらが主として用いられたものと考えられる。

③ 丸瓦（図103）

段差をつけて胴部と玉縁部を明確に区別するものが大部分であるが、尻部を丸くすぼめるのみのものが少量認められる。後者は第6地点西区石垣1層から1点出土があり（14）、軒丸瓦類の項で述べたように、第5地点北区⑧層出土の三巴文軒丸瓦にこの類の丸瓦部完形のものがある。第6地点例は年代を定かにできないが、第5地点例はIa期中のものであり、瓦当が三巴文であることからは、17世紀前葉にまでさかのほる可能性もある。

玉縁を明確に区別するものでは、形態と製作痕跡から細かく分類していくことが可能と考えられるが、今回は統一的に検討することができなかつたため、製作痕跡の詳細な検討とそれに基づく類型の設定は今後の課題としたい。

二の丸跡出土品では、玉縁長は2.1～5.4cm、胴長では21.0～32.0cmの幅があり、頭ないし尻幅では12.2～18.8cmで、14～16cm代のものが主体となっている。

④ 平瓦（図104）

平面形態をみた場合、頭側が狭く尻側が広い台形を呈するものがほとんどであるが、頭と尻で幅に差がなくほぼ長方形のものも認められる。

平瓦は、丸瓦と組み合わせる本瓦葺に用いられるものが大半と考えられるが、棧瓦葺においても、大棟に甍棟を組む場合、あるいは丸瓦と丸瓦の間や丸瓦と降棟の間などにも使われることがある点には留意する必要がある。実際それらがどのようにして区別可能であるかは検討しなければならないが、第4地点にみられる側縁を面取りする平瓦（9）は、後述するように板状棧の棧瓦と組み合わせたと考えられるものである。

形態の不明なものも含め（棧瓦の破片も含まれる可能性がある）、比較的データのある長さだけで検討すると、第5地点では元禄期以前に位置づけられるものは26.6～28.7cmに集中するが、18世紀に入ると21.5～23.1cmのものが加わり、明治期以降になると14.8～38.5cmの幅をもつようになる。三の丸跡でもI期のものは26.8～27.7cmであり、明治期以降には24.1～30.1cmになる。第9地点では18世紀以降のものしかわからないが、より古いIV期のものが27.2～29.0cmにまとまるのに対し、19世紀のV期では23.8～39.0cmの幅がみられるようになる。

これらのことから、17世紀代には長さ27cm前後のものが主体的に用いられており、18世紀以降さらに小さなもの及び大きなものも用いられるようになっていったことがわかる。

また、鉄軸を施釉したものも少量存在し（10～12）、第5地点では18世紀前～中葉、第9地点では19世紀の遺構からの出土である。

⑤ 棧瓦（図105）

出土資料を大別集計する際、これまで丸瓦と平瓦を合体させた形態のもののほかに、棧の

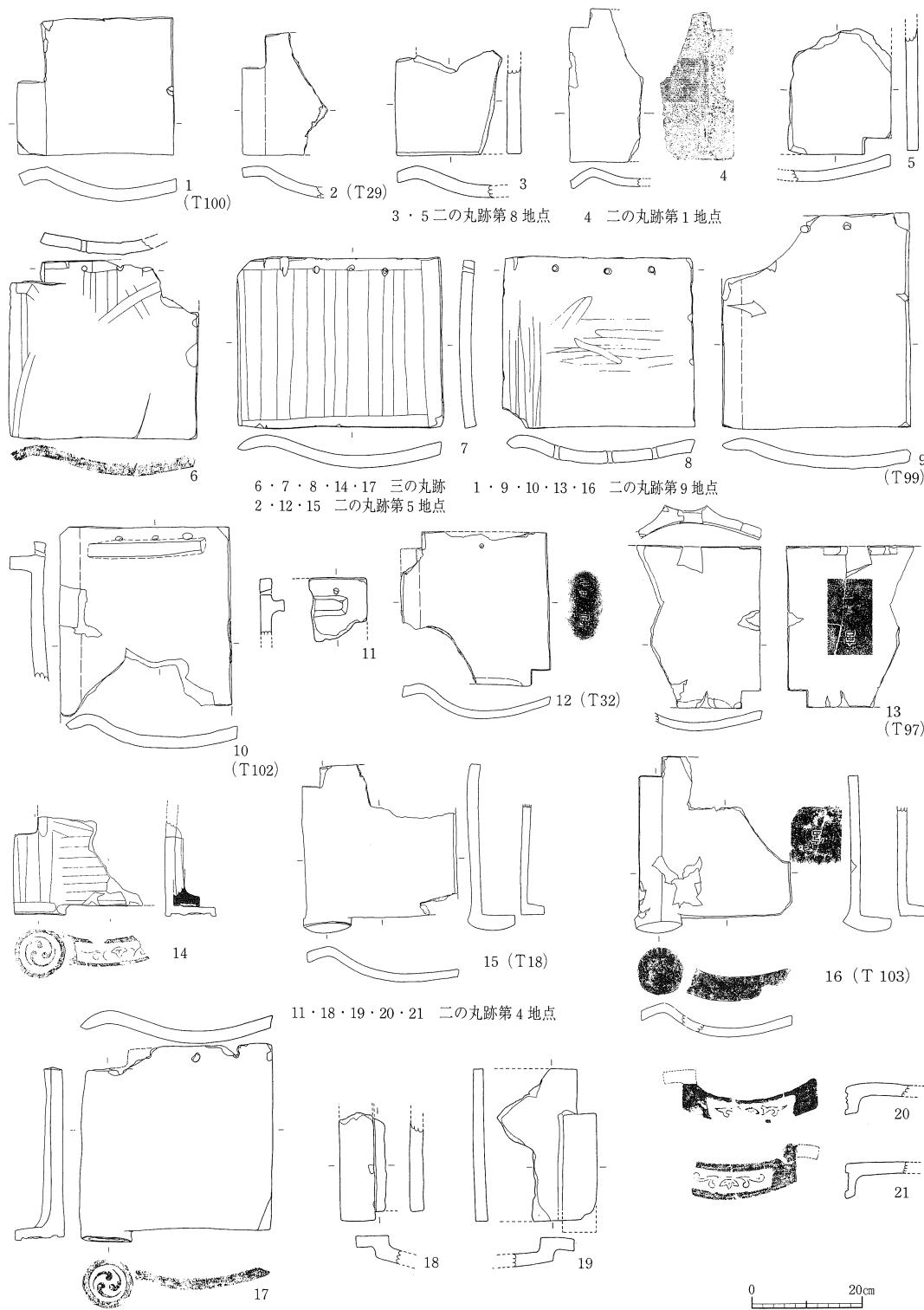


図105 仙台城跡出土棟瓦

Fig. 105 Various pan-tiles from Sendai Castle

形が板状になるもの、板塀瓦、棧をもつ棟瓦等、棧がつくものをすべて棧瓦類としてまとめていたが、ここでは前2者を棧瓦とよび、他については別項に分類する。

A. 丸瓦と平瓦をなめらかに合体させた形態のもの（一般的にいう棧瓦）（図105－1～17）

葺足をいくらにするかという点と、実際に屋根に葺く際の使用位置の違いを反映する形態の違いとして、理論上以下の4種の形態が区別される。

- A 頭と尻に切込みを有する
- B 頭にのみ切込みを有する
- C 尻にのみ切込みを有する
- D 頭・尻ともに切込みを有さない

切込みは、縦横に棧瓦を葺き重ねていくとき、重なる部分がかさ高になり隙間が生じることのないために設けられるものである。坪井氏の一連の著作（坪井利広1976ほか）に紹介されているのは頭・尻ともに切込みを有するAであり、現在ではこれが一般的な形態と考えられる。

A類を主に使う場合、屋根の妻や軒部分、および棟に接する部分以外は、必ずA類でなければ納まらない。このときB類は妻の片側と棟に接する部分、C類はB類とは逆側の妻、軒ならば使用可能な形態である。D類はB類の並びとC類の並びとが接する角にのみ使うことができる。ただし軒は別としても妻の片側や棟に接する部分にA類を使っても使えないことはない。

それ以外にB・C類を主とした使い方も可能である。とにかく隙間なく重ねられればよいならば、切込みは頭か尻のどちらかに一ヶ所あればよく、必ずしも2ヶ所である必要はない。この場合はA類を用いる場合に比べて葺足が短くなり、屋根全体に必要な瓦の枚数を減らすことができる。

差込み側と棧側のどちらに切込みをいれるかは、雨仕舞を考えれば、頭ならば差込み側、尻ならば棧側に限定される。棧瓦の左右の違いは、切込みの位置関係の違いと言い替えられる。上記の4種類のいずれにも左右の両者がありえる。

また、切込みは棧瓦だから必要な部分であって、平瓦には不要である。従って、反りのある破片で切込みのあるものは棧瓦もしくは棧瓦葺に伴う平瓦とすることができる、切込みの位置で左右を判別できることになる。

仙台城で出土している棧瓦の形態をみてみると、A類・C類・D類は存在するが、B類の確実な例は確認できない。また、棧側の尻に切込みを入れるのではなく、斜めに角を落とすものが認められるが、そのことにどんな意味があるのかはわからない。

特色ある形態として、1・2のように平瓦部分と棧部分との境に明確な稜線を形成するものが一定量認められる。普通の平瓦に棧を付け足したという作りのものである。切込みが長めであるのも特徴で、最も長い例では全長の半分に及ぶものがある。この形態のものは元禄期以前

から存在している。

6～9・17は12・15・16と比べると断面の屈曲が緩やかで、谷が浅い傾向がある。三の丸跡での出土層位から、17・7と同様のものは19世紀以前に存在していると考えられ、第9地点での例から9のような縦長形のものは19世紀中葉には存在している。6は明治以降の出土例しかないが、大きさや棟部の切込み際に段差を設ける点などの共通性から、17の類と組合うものと考えられるとすれば、19世紀以前に出現しているであろう。

12は頭と尻に短い切込みがあり、頭に面取りを施すもので、13は尻の切込みは不明だが、同様のものに引掛けがつけられるものである。両者に「宮」の字と漢数字を組み合わせた刻印がみられる。4は面取りはなく櫛目が施されるものである。

12・13・4に類するものはほとんどが明治時代以降の層から出土しており（第5地点で「宮」刻印3点が元禄期の盛土から出土していることになっているが、その他の出土状況からは混入の可能性が高いと考えられる）、引掛け瓦の考案が明治の初めであること（駒井1981）、引掛けと「宮」刻印が共存し、櫛目と「宮」刻印も共存することから、「宮」刻印・櫛目とともに、その出現はさかのほる可能性があるとしても、明治期以降の造瓦において用いられていたことは確実であろう。

第9地点出土の10は釘穴の頭側に背の高い板状の突起がつけられており、特異なものであるが、突起の上端は棟の高さに等しく、差込み側は垂直に途切れている。この形態ではこの上に葺き重ねることはできないため、これは棟際に用いられるものであることがわかる。とすれば、この突起は水を返すことはもちろん、面戸としての役割を果たすことを意図したものと考えてみたい。厳密には重ねられた棟の上部に隙間を少し残すことになるが、別に面戸をはめこむよりは手間が省け、脱落しにくい利点があつて工夫されたものではないだろうか。これもまた棟側の尻の角を斜めに落としている。11は、同じ形態の、突起がやや低いタイプであろう。また年報8で棟瓦として報告したT131も10と同様のものと考えられる。出土状況から、10の突起が高いタイプは19世紀中葉までに出現している。

以上、ある程度形態が判明する資料について、形態的特徴を概観し、その出現時期について検討してきた。次に、詳細な形態は不明でも一般的な棟瓦であると確認できる破片を含めて、仙台城においてそれがいつ出現しているのかについて検討してみたい。先述のように、年報4以来の分類・集計では、棟瓦類とされる分類には板塀瓦や棟瓦も含んでおり、集計表のみからはここで問題とする棟瓦の出現を検討することができない状況にあった。そこで今回は各地点でいわゆる棟瓦と確定できる最古のものを限定するため実物で再検討を行った。

層位的に棟瓦の出現について検討できるのは、第5地点、第9地点である。まず、年報8の瓦集計表では17世紀前葉の北区7a層から棟瓦類が1点出土していることになっていたが誤り

で、訂正しておきたい。現在のところ最古に位置づけ得るのは第5地点南区3層の3点で、現在想定している年代観では1661年をさかのぼる可能性が高いことになる。ただし第5地点の3層についてはうまく掘れていない可能性もあり、これを最古と断定するには不安が残る。それに続くものは元禄期の盛土である北区IV層・南区2d層から出土があり、南区3層のものが混入であったとしても、元禄年間には出現していたと考えられる。第9地点では元禄年間以前のものは確認されないが、IV期になると遺構から一定量の出土がみられるようになり、18世紀には確実に使用されている。

いわゆる棧瓦は延宝二年(1674年)に西村半兵衛が考案したとされる(駒井鋼之助1981など)。このときに考案されたものが現在棧瓦と呼んでいるものと同一であるのかという点に疑問も呈されており、また現存する例でこの時期のものは確認されていないようである。江戸遺跡の調査では、元禄期の17世紀末～18世紀初頭には出現していると考えられており(加藤晃1989)、仙台領でもそれに近い時期の出現が想定できることになる。

B. 板状の棧がつくもの(図105-18～21)

このタイプは第4地点でのみ確認されている。平瓦の片方の側縁に板状の棧をのせてはりつけたもので、寡聞にして類例を知らない。破片ばかりで完形を正確に知り得ないが、棧のはがれた痕のある1点では、棧がかぶさる部分にあたる側縁が水平に近くなるように面取りされている。この部分での面取りは、普通の平瓦には機能上不要であるが、板状の平坦な棧がつくことを考えると、凹凸なく葺き重ねるために必要となる。同地点でこれらと共に出土している平瓦には、両側縁を同様に面取りしたものがあり(図104-9)、これらとともに屋根の妻側の端に使われた可能性を考えておきたい。

⑥ 丸瓦と共通する素材から作られるもの

A. 面戸瓦としているもの(図106-1～11)

丸瓦の胴部と同じ形のものを、短辺に平行する方向で分割したものである。凹面中央には丸瓦凹面と同じ痕跡が残り、四辺に面取りが施される。吊り紐痕が認められるものもある。凸面は分割後には特に調整していない。短辺の形状にA—全体が強い丸みをもつもの(1～4)、B—直線的なもの(6～11)、C—四隅にのみ丸みをもたせるもの(5)、の3種類を認めることができる。

また、A・C類はデータが少なくわからないが、B類では、幅で111～132mm、141～162mmの2ヶ所に分布域が分かれ、4寸前後と5寸前後の2法量が存在することがわかる。断面形態を比較すると、この大きさの違いは大きいものを削ったという調整の程度差ではなく、素材円筒の径そのものの違いであるとみなせる。地点別にみると、第5地点では前者、第7・9地点では後者のみが出土するという傾向がある。長さでは幅ほど明確に分かれないと、第5地点では

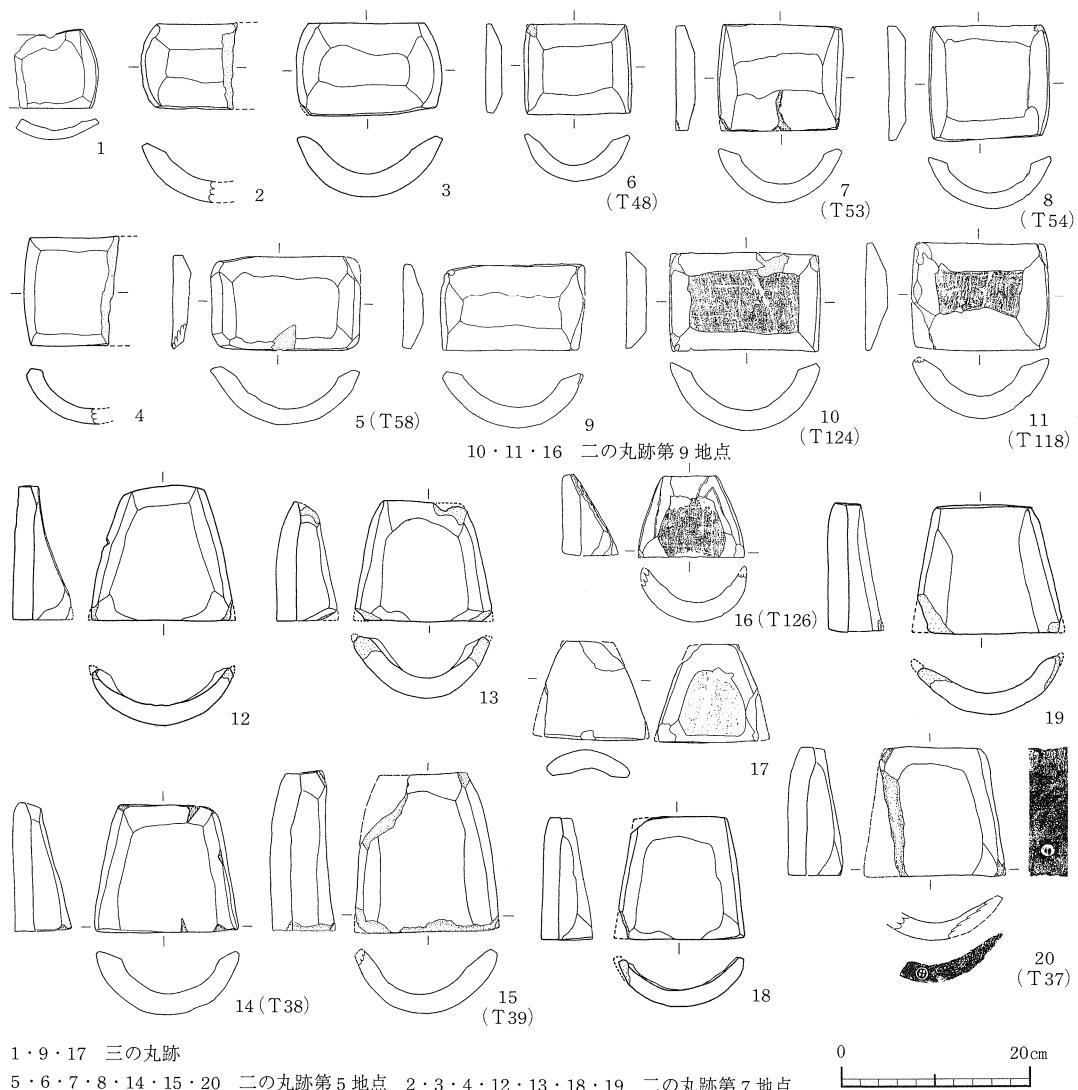


図106 仙台城跡出土丸瓦素材の小型製品

Fig. 106 Constructional roof tiles shaped half the same way with round tile from Sendai Castle

9 cm前後をピークとして8~10cmに集中し、第9地点では10cm前後を主体としている。

これらのうちA・B類は三の丸跡I期の遺構から出土しており、17世紀前葉から存在している。またC類も第5地点Ia期の例であり、17世紀中葉までには出現していたと考えられる。

このタイプのものは従来すべて面戸瓦と呼んできたが、単純に考えて、本瓦葺の棟と平瓦のすきまを隠すものとしては、どう用いても丸瓦との間にすきまが残り、あまり適當な形状ではないように思われる。各地の近世瓦の発掘報告では面戸瓦とする例が多いように見受けれるが、盛岡城の調査報告（盛岡市教育委員会1991）のように輪違いとする見方も提示されており、その用法は検討を要する。

坪井氏の一連の著作にはこの形状のものは紹介されていない（坪井利広1976ほか）。

本瓦葺の技術に限定してまとめられている井上氏（1974）がいう「丸面戸」が製作法としては最も近い。ただし江戸時代には丸瓦を焼く前に切るが切口になんら手を施さず、ただ切りっ放しにしたのがほとんどであるとされる。出土例は四辺を面取りするもので、切口に手を施していることになり、厳密には井上のいうものとは違うが、凸面側からみたかぎりでは何も手を加えていないと形は違わず、棟にはめこまれた状態では面取りの有無はわからなくなる。

また、形状から考えて、A類の短辺の曲線は、面戸として使用する場合に平瓦により密着できる利点がある。B類は凸面だけをみれば丸瓦を分割したそのままの形であることから、例えば丸瓦筋の長さを調整するため、棟に接する部分に使用するといった可能性も考えられる。この用法にはA類は適さない。

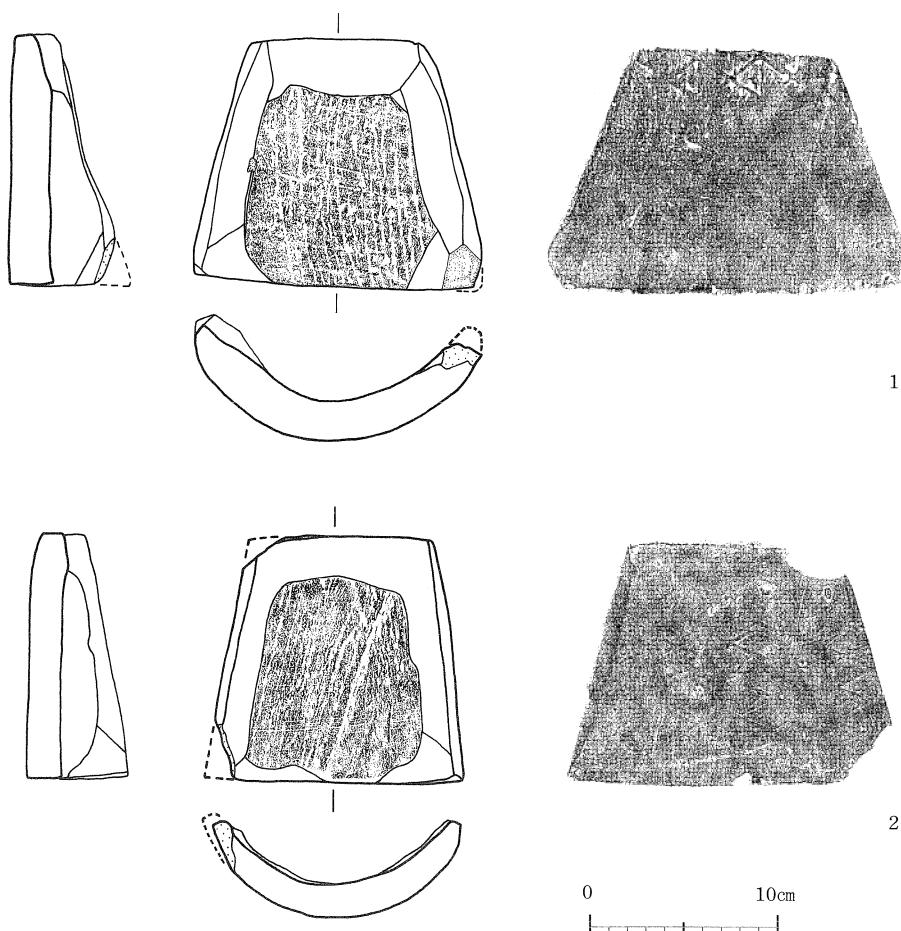


図107 仙台城二の丸跡第7地点出土凸面に叩きのある輪違い

Fig. 107 Ridge decoration tiles with impressions of lattice-incised paddle from NM7

輪違いとしてはどうかという点については、いずれも四辺に面取りを行っていて端面の幅が一定ではないため、組み合わせた時に均整を欠くことになると思われ、輪違いとするには適当でないと考える。

以上のことから、いずれも輪違いとしては適当でなく、この他に面戸として使用したと想定できるものを指摘できない現状では、A・C類はすきまが残るとしても本瓦葺の面戸として使われたものと考えておきたい。B類については更に検討が必要である。

B. 輪違い（図106-12~20）

丸瓦と同様の形態の素材を分割し、平面台形に作りだしたもので、凹面には面取りが施されており、その仕方には多くの種類がある。大小があり、大きいもののほうが出土量は圧倒的に多い。第5地点ではIa期から大きい類が出土しており、17世紀中葉までには出現している。

また、調整に格子叩きを使用したものが第7地点で2点確認できた（図107）。これらは凸面に斜格子状の叩きの痕跡を認めることができる。滴水瓦の集成を行った中井氏（1995）は、第7地点の例も含め、凸面に叩きの痕跡の認められる平瓦・丸瓦が滴水瓦の出土する遺跡で検出される傾向のあることを指摘し、明らかに朝鮮半島の製作技法の系譜を引くものであるとしている。ただ第7地点では叩きがあるのは平・丸瓦ではなく輪違いであるが、中井氏の集成例のなかでも愛媛県北宇和郡松野町河後森城跡出土例等は輪違いであり、平・丸瓦に限定されるものではない。

その他にも盛岡城でIIIb期（17世紀中葉から後葉を中心とする時期と推定されている）の輪違い5132（二の丸で面戸瓦と呼んできた形態のもの）に、1点のみであるが凸面に格子目の叩き痕の確認されるものがあることが報告されている（盛岡市教育委員会1991）。また実見させていただいたなかで、同城の施釉丸瓦凸面にも格子叩きのあるものを確認した。

これらの叩き技法の位置づけには、中井氏のいうように朝鮮との関係も考慮すべきと思うが、すべてをそう捉えてよいかどうかは慎重であるべきであろう。叩きの有無のみでなく、製作技法全体のレベルで検討していくことが必要であると考える。

C. 谷丸瓦（図103-15・16）

丸瓦の頭側を斜めに切り落とし、半円形の板で切口を塞いだ谷丸瓦と考えられるものが、第5・9地点で検出されている。15は幅が12cm程と推定され、仙台城出土の丸瓦類としては最も小さい部類に入る。16はそれに比べると大きめで、18世紀代の出土例である。

⑦ 平瓦と同様の素材で作られるもの

A. 熨斗瓦（図108-1・2）

A-平瓦と同様のものを分割したもので、熨斗瓦として棟積みに用いられるものと考えられる。焼成前に分割のための凹線をいれておき、実際屋根に葺く際に割って用いている。分割線

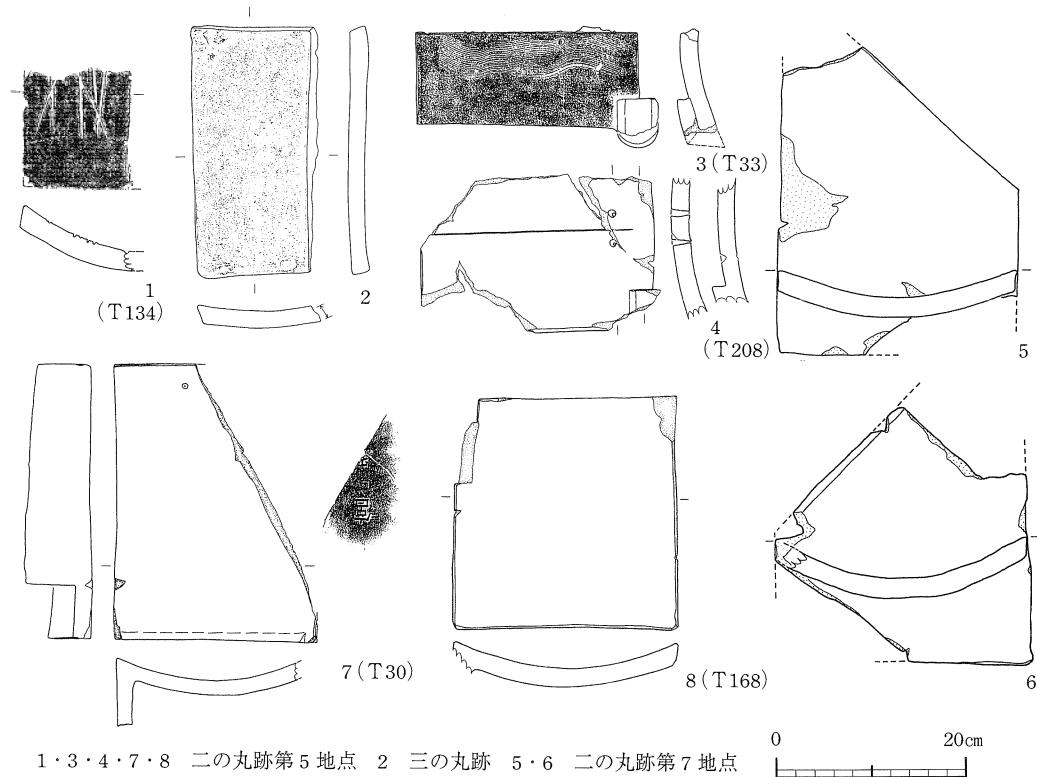


図108 仙台城跡出土平瓦素材の製品

Fig. 108 Various constructional roof tiles shaped half the same way with flat tile from Sendai Castle

は凹面にいれられる。滑り止めかと考えられる刻みが施されるものがあるが、いずれも凹面に施されている。

B－平瓦の隅に突起をつけるもので、「紐熨斗」と呼ばれるものである。凸面に分割線が入れられ、分割しないで使われたものもある。凸面に櫛目で波状文をいれるもの、釘穴が有るものと無いものがある。

A類では、凹面に幅広い削りによる平行線を刻むものが第9地点I b期の5号建物跡柱4、第5地点I a期の13号溝から出土しており、寛永15年（1638年）以前に存在が確認できる。同様の特徴をもつものが、仙台市若林城跡2号土壙から3点出土している（図109）

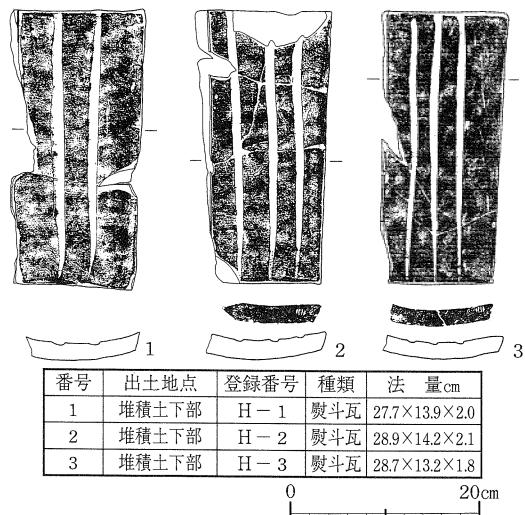


図109 若林城跡2号土坑出土熨斗瓦(佐藤1986より)

Fig. 109 Halved flat tiles stacked above the ridge from Wakabayashi Castle

(佐藤甲二1986)。同城は伊達政宗の隠居所であり、寛永5年（1628年）築城、同13年（1636年）廃城となっている。この土壙はこの調査で唯一若林城関連のものと考えられており、今回層位的に年代を限定できる仙台城の例が明らかとなったことで、この土壙出土例が若林城に用いられていた可能性がより高くなる。また、第5地点の元禄期以前に位置づけられる平瓦は、長さが26.6～28.4cmにまとまる傾向があり、若林城の例はほぼそれに近い値を示していることも、その傍証となる。

B類ではいまのところ江戸時代と確認できるものはみられない。

熨斗瓦の作り方として、分割線を入れるのが江戸時代と確認できるものではすべて凹面であり、刻みなどをいれるのも凹面であることが指摘できる。また二の丸跡出土例では、刻みないしへら描き沈線などが施される例はいまのところ元禄期以前に限定されている。B類の紐熨斗瓦では櫛目は凸面に入ることから、どこまでさかのぼるかは不明だが、ある時期にその原則が変化していることが考えられる。

東大の出土例でも熨斗瓦の櫛目はほとんど凹面にあり、江戸時代には一般的な傾向であった可能性がある。

B. 隅切り平瓦（図108—5・6）

平瓦の一隅を大きく斜めに切りとった形態のもので、第7地点8区IV層から異なる隅を切ったものが2点検出されている。素材の平瓦は台形ではなく長方形のものである。江戸時代と確認できるものはない。

C. 袖瓦（図108—7・8）

平瓦の片側の側縁に垂れをつけたもので、第5地点で2点出土している。7は頭に面取りが施されるもので、凸面には宮の字と漢数字が組み合う刻印が認められる。尻に一ヶ所釘穴がある。8は垂れが欠損しているが、剥落痕からみて、垂れの長さは全長の半分以下の11cm程になり、7に比べると袖ききがかなり短い。また、釘穴がなく、垂れのつく側の尻に切込みがあるのも7とは異なる。坪井氏（1977）が紹介しているものと比較すると、7は頭に切込みがないことを除けば面取袖瓦とされるものに最も近く、8は釘穴がないが、切込みの位置から刻袖瓦に近いものと考えられる。同書によれば、袖瓦は基本的に棟瓦葺に使用されるものようで、刻袖瓦のほうが高級な建物に使われるそうである。7は刻印が棟瓦と共に使用するものであり、そのなかでも頭に面取りのあるものと組み合わせて使用されたと考えられる。

いずれも明治期以降の層・遺構から出土しており、その出現がどこまでさかのぼるかは不明である。

⑧ 反りをもたない素材から作られるもの（及びそれと組み合わされるもの）

A. 板塀瓦（図110—1～15）

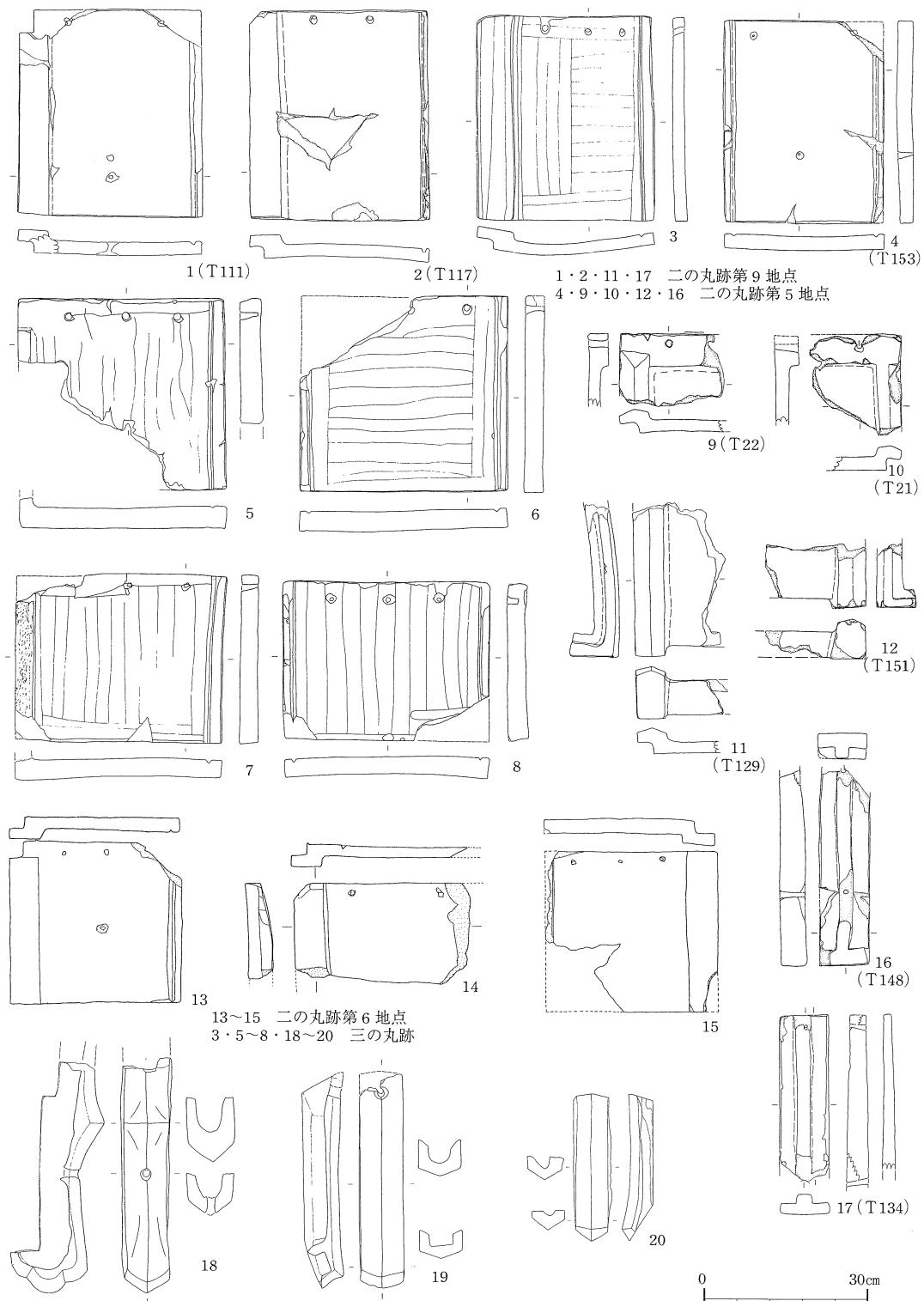


図110 仙台城跡出土反りをもたない製品(1)

Fig. 110 Various roof tiles shaped quite flat from Sendai Castle(1)

方形ないし長方形の平坦な板状の製品で、相対する 2 側辺に水切り溝を刻むのみのものと、棧や垂れをはりつけるものがある。棧の形状が判明するものでは板状と山形の 2 種類がある。

板状棧のもの（1～3・13～15）は、棧が本体よりやや短く作られ、尻に切込み状の部分が形成されるものと、棧は本体と同じ長さで尻側の厚みをそぎ一隅を斜めに切るもの、本体と同じ長さで前 2 者のような調整を加えないものがある。釘穴は切込みや面取りのある側に 2 個ないし 3 個穿たれるのが一般的で、それに加えて中央にも 1 個穿つものが少量存在する。

山形棧のもの（9～12）は完形品がないが、破片から推定すると、頭に垂れがつき棧は頭より少し突出する。尻際は厚みを増してあり、棧は全長より短いが隅は切込み状にされず、直角のままである。棧の尻側端部の形態に寄棟屋根形と切妻屋根形の 2 種類あり、現在の出土例では前者が右棧、後者が左棧に対応している。右棧のものが第 5 地点北区⑦層から出土しており、元禄期までには出現している。

三の丸報告で「駒の背のような形状の丸瓦が 2 本ないし 3 本連結した」「駒巴」形の棧が板状のものにつけられたと考えられている形態のものは、完形を知り得ないが、棧の部分だけでも他に比べかなり大型で厚いものである。三の丸報告では屏平瓦のⅢ類とされているもの（7）がその板状部分である可能性が考えられているが、棧が大きくバランスを欠くように思われ、異なる可能性もある。

全長と全幅でみた場合の法量には①長幅ともに 30cm 前後、②長 30cm 幅 38cm 前後、③長 38cm 幅 33cm 前後、④長 35cm 幅 38cm 前後の 4 種がある。山形棧・「駒巴」棧のものは法量のわかる例がない。

板状の棧をもつものは、坪井氏（1977）のいう板屏瓦に似ている。ただし坪井氏の例には切込み状部分のあるものもなく、棟に平行する方向に水返しがつけられている。また側縁平行の水切り溝がみられない。

切込み状の部分と棧の厚みをそぐのは、棟を覆う伏間瓦などが隙間なく密着するための細工の可能性が考えられる。その場合、棧を一部なくしてしまう前者は棟際が全く平坦となるので隙間をほとんどなくすことができるが、後者は若干の隙間を残さざるを得ず、その効果は小さいといえる。坪井氏の例であれば、その部分を水返しで埋めることができ、より効果的である。

棧をもたないものは、棧のあるものの②・③・④の大きさにそれぞれ対応するものがあり、棧のあるものと組み合わされたり、次に述べる「T 字瓦」や「駒巴瓦」と組み合わせて使われたものであろう。

B. 「T 字瓦」・「駒巴瓦」（図110-16～20）

形状から仮称している T 字瓦は完形品はないが、各部の破片から推定できる（16・17）。長

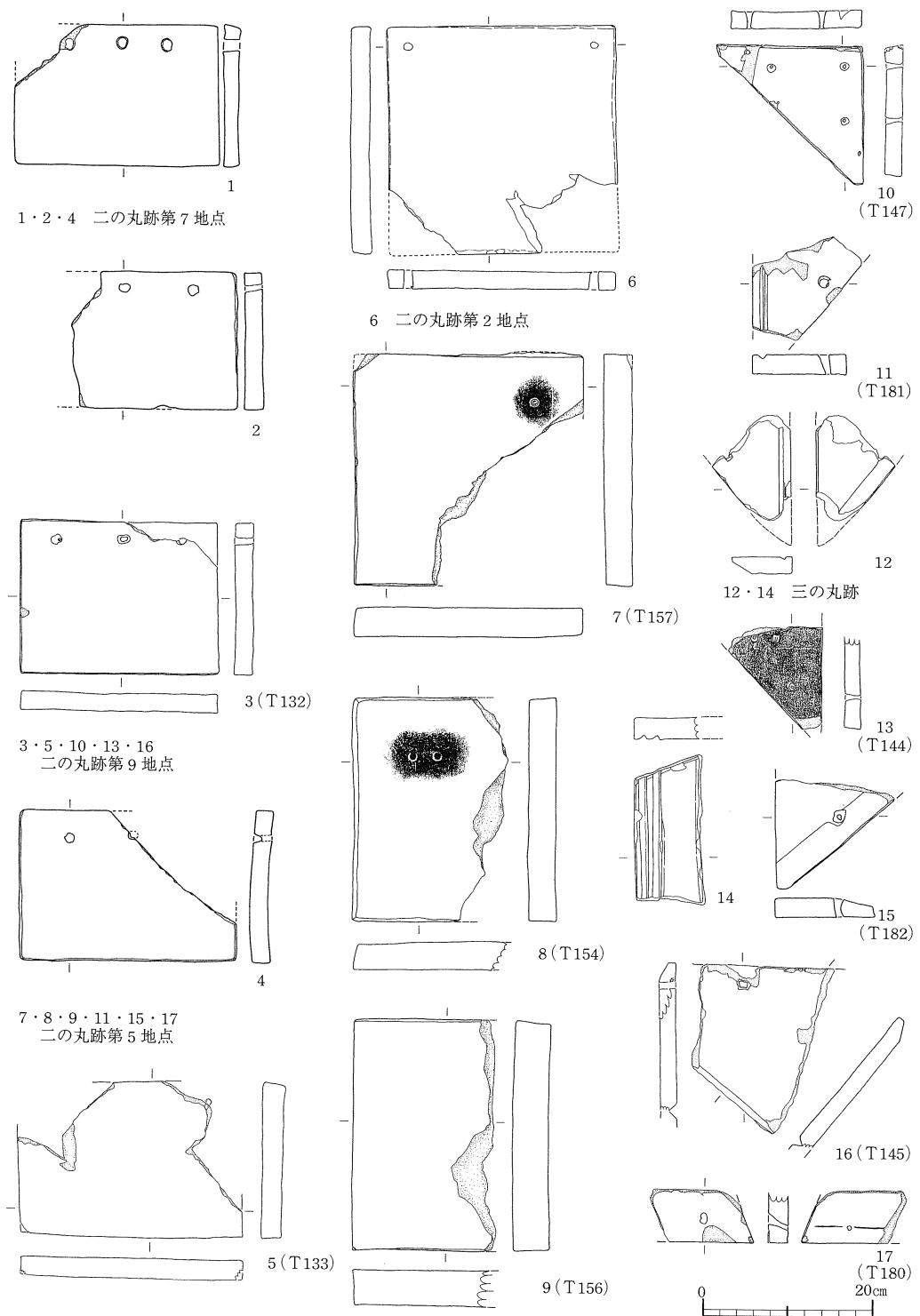


図111 仙台城跡出土反りをもたない製品(2)

Fig. 111 Various roof tiles shaped quite flat from Sendai Castle(2)

方形の板にちょうど「T」の字形に突起をつけたもので、T字の根本にあたる側の厚みを斜めにそいでいる。釘穴は突起部分に2ヶのもののみが確認できる。年報6で想定されているように、水切り溝のみをもつ平坦なものと組合せて用いられたものと推定している。第5地点での出土状況から元禄期以前の存在が確認できる。

駒巴瓦は、三の丸跡のみで確認されているもので、「駒の背のような形状の丸瓦が2本ないし3本連結したもの」で、「埠平瓦」と組合うものと推定されている(18)。6号土壙から出土しているとのことで、三の丸造営以前から存在する。

19・20は上面の凹凸がない形のものであるが、同様の使用法のものであろう。

C. 斜辺を有するもの(図111-10~17)

完形を知り得るものは1点しかなく、ほぼ直角二等辺三角形を呈し、3ヶ所に釘穴を穿つものである(10)。その他の破片資料でも、二等辺ではないが、三角形ないし台形を呈すると考えられる。一辺を面取りするもの、水切り溝をもつものなどがある。16はあらかじめ断面V字形に入れられた溝で分割したので、一辺には面取りが施されている。これらは鋭角部分の角度も各々まちまちである。

直角二等辺三角形の10は、方形のなまこ瓦を菱形がつながるように貼る場合の角に使われた可能性が考えられるが、組み合わせるのに適当な方形のものは確認されていない。

水切り溝のあるものは、板埠瓦と組み合わせて隅に使われるものなどの可能性があるが、もつと残存状況のよい資料の増加を待って検討したい。

D. 税斗瓦の一種としてきたもの(図111-1~9)

A-長方形 厚さ1.9~2.3cmで、釘穴が長辺の片側に間隔をほぼ等しくして一列に並ぶ。釘穴数を確認できるものはすべて3ヶで、不明のものでも最低2ヶはあることからほとんどは3ヶと考えられる。幅では16cm前後と18cm前後の2種があり、前者(1・2)は長さ24.2~24.4cmのものが確認され、釘穴の間隔からみてさらに長いものがあった可能性がある。後者(3~5)では3種類の長さのものが確認された。

B-正方形 a厚さ2.3cm 2ヶ所の隅近くに釘穴がある(6)

b厚さ4.4cm 釘穴はないものと推定される(7)

C-全形不明のもの 釘穴の有無は厳密には不明だが、無かった可能性が高いと考えている。厚さに2種類があり、いずれも厚手である(8・9)。

これまでこの類について税斗瓦の一種ではないかとしてきたが、少なくとも棟積みに用いる税斗瓦として諸書に挙げられているのは反りのあるものである。坪井氏(1977 p175)によれば、入母屋破風や千鳥破風の破風尻に用いる「破風台輪税斗」には反りのない税斗瓦を使うとされており、大規模な仏堂に用いられるとのことである。その形状は明らかにされていない

ものの、反りがないものも熨斗瓦と称されて使用される場合があり、着眼としてこれらを熨斗瓦かもしれないと思ったことは誤りではなかったが、単に熨斗瓦と称してしまったために、熨斗瓦として集計されているものが、反りのあるものなのかなものなのかな不明確になってしまったことになった。明らかに異なる形態のものに全く同じ名称をつけることは混乱の元でもあり、なんらかの区別をしておく必要がある。

形状からみるとB a類などはむしろなまこ瓦とされるものに類似しており、B b類は厚みがあり、釘穴がないとすれば磚の可能性がある。

A類は類似するものを寡聞にして知らないが、釘穴が片側では壁に留めにくく、磚であるなら釘穴は不要と考えれば、上記の破風台輪熨斗やさらに未知の用法を検討する必要がある。

A類は第9地点IV期のものがあり、18世紀代には存在している。B b類とC類の極厚手のものは第5地点の元禄期の盛土中から出土があり、17世紀のものである。

⑨ 棟瓦（図112）

棟のつくものでは角棟のみで、丸棟のものは確認されていない。

A一角棟伏間瓦（1～4） 法量に少なくとも2種類ある。棟瓦類としたものにこの類の破片もかなり含まれており、層位的な出土状況は検討できていない。

B一冠瓦（5～8） 小さな玉縁部をもち、対応する頭部の凹面が玉縁を受けるように薄く作られているもので、断面が角をもち箱形ないし中央が尖る形態を呈するもの（5～7）と、なめらかに弯曲するもの（8）とがある。

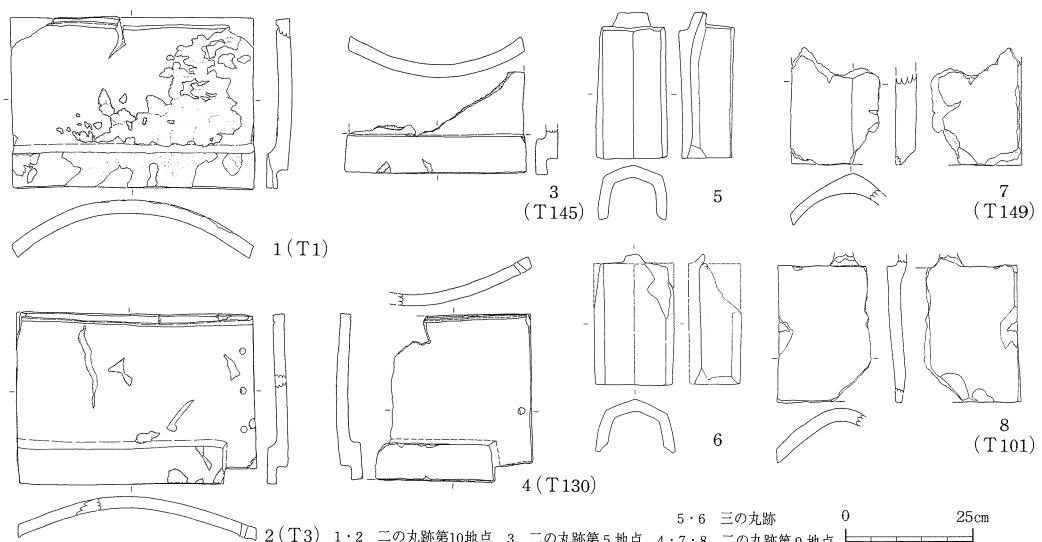


図112 仙台城跡出土棟瓦

Fig. 112 Ridge cover tiles from Sendai Castle

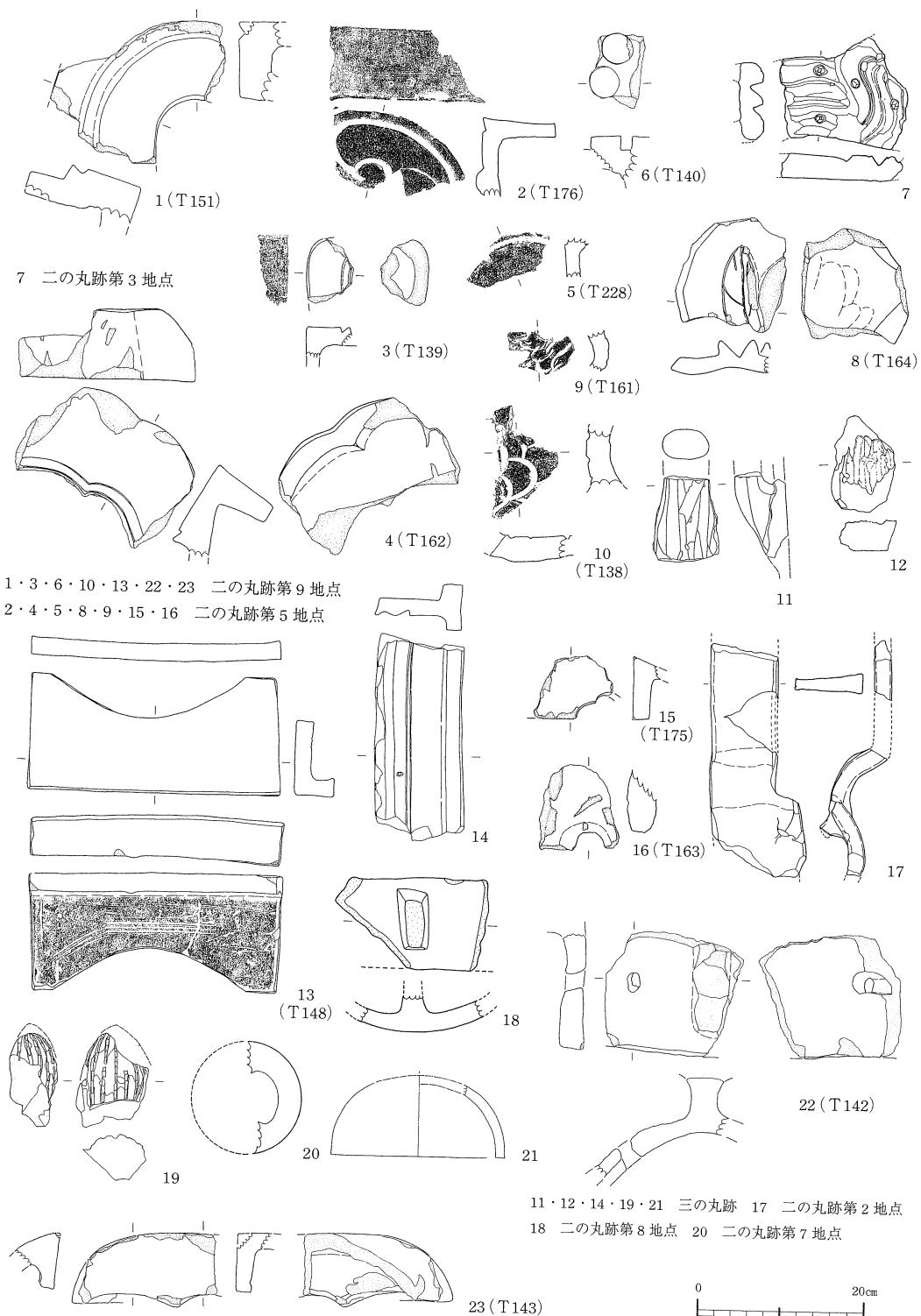


図113 仙台城跡出土その他の瓦

Fig. 113 Other various roof tiles from Sendai Castle

⑩ その他（図113）

A. 鬼瓦類（1～12）

沈線で鱗が表現された鰐の小片は出土しており、鰐があったことは確認できる（9・10）。

それ以外には、内区の文様は明らかでないが、雲形を呈し幅広い周縁部をもつもの（1・3・4）、雲形の文様をもつもの（2）、木の葉のような形あるいは円形の立体文様がつけられるものの（6・8）などがある。

文様は明らかでないが、背面に環状取手をもつものが第9地点Ⅰ期および三の丸Ⅰ期に確認され、いまのところ二の丸・三の丸造営より古い時期のもののみである。

B. その他（13～23）

鬼瓦の一部かと思われるもの（13・15・16）、留蓋（21）、降棟に立てられる飾りになるかと思われるもの（19・22）などがあるが、全形が不明なものも多く、類例を探しながら検討していく必要がある。

（3） 小結

第9地点下層資料の様相から、二の丸跡においても二の丸造営以前の軒丸瓦の瓦当文様は伝統的な巴文系であり、二の丸造営と前後して伊達家の家紋のうち三引両文と九曜文が採用されることが明らかになった。また、三の丸跡Ⅰ期での様相から、巴文系に伴って使われた軒平瓦の瓦当文様は、中心飾りに五弁の花文や剣菱文をもつもので、笹文のものは軒丸瓦に家紋系が出現するころにやはり出現している可能性が高いと考えられる。その後巴文が全く作られなくなるのかはわからないが、家紋と笹文が主流となり、棧瓦にも受け継がれていくことになる。

仙台城築城以前に当地周辺でどのような瓦が作られていたかはほとんど明らかになっておらず、築城期の瓦の系譜がどこに求められるのかは今後明らかにしていかなければならない。古い時期の熨斗瓦凹面に認められる削りや、平瓦凸面の弧状沈線などは、軒平瓦瓦当文様とともに、その技術系譜を検討していく手がかりになると思われる。

瓦当文様の面からは、二の丸・三の丸造営の時期が仙台城所用瓦の生産と使用における最初の大きな画期であったといえよう。

次に注目されるのは、丸瓦と平瓦をなめらかに合体させた形の棧瓦が、その考案からそれはど遅れない17世紀末までには仙台城でも使用されるようになったことである。

二の丸が拡張整備された18～19世紀のうちに使われた棧瓦には、多様な形態とサイズが認められる。このことは、一口にくくなってしまいがちな棧瓦も、その形態や製作技法は一通りではなく、必要に応じて様々なものが試され、改良を重ねてきたものであることを示していると考える。各地の江戸時代の棧瓦も詳細に観察を深めれば、地域性や時代性を示す多様性を見いだ

すことができる可能性があろう。

「宮」刻印以外の刻印については今回検討を加えることができなかつたが、同範関係や技術的な面を含めて今後の課題としておきたい。

《引用・参考文献》

- 井上新太郎 1974 『本瓦葺の技術』彰国社
- 加藤 晃 1989 「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開－軒平瓦・軒棧瓦の瓦当文様の変遷－」
『史学研究集録』第14号 國学院大學日本史学専攻大学院会 pp.43～61
- 金子 智 1996 「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』第101号 pp.144～160
- 駒井鋼之助 1981 『かわら日本史』雄山閣出版
- 仙台市教育委員会 1985 『仙台城三の丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集
- 佐藤甲二 1986 『若林城跡－平安時代の集落跡－』仙台市文化財調査報告書第90集
- 坪井利弘 1976 『日本の瓦屋根』理工学社
- 坪井利弘 1977 『図鑑瓦屋根』理工学社
- 坪井利弘 1979 『棧瓦屋根のデザイン』理工学社
- 坪井利弘 1981 『古建築の瓦屋根』理工学社
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『山上会館・御殿下記念館地点』
東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 1
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 3
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 4・5
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 6
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1994 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 7
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 8
- 東北歴史資料館 1990 『宮城県の諸職』東北歴史資料館資料集27
- 東北歴史資料館 1993 『宮城県の瓦職』東北歴史資料館資料集34
- 中井 均 1995 「滴水瓦に関する一考察－なぜ城郭建築に多く葺かれたか－」『織豊城郭』第2号
pp.64～98
- 盛岡市教育委員会 1991 『盛岡城跡 I－第1期保存整備事業報告書－』

6. 木製品・漆器

(1) 供膳具

① 漆器

漆は、仙台藩の重要な産品の一つであり、国産統制政策の対象品目であった。漆は単に器物や武器・武具に使われるだけでなく、建築資材としても重要である。実際、大崎八幡神社〔慶長12年（1607年）造営〕や瑞鳳殿〔寛永14年（1637年）造営〕といった、仙台藩を代表する近世初期の建造物には多量の漆が用いられている。そのため近世初期には、漆の植え付けが盛んに奨励されており、関連する文書も多く残されている（註1）。また、仙台藩には、扶持を給付された「御塗師」と呼ばれる職人が21名いて、主に武器・文具の製造にあたっていたとされる（山田揆一1917）。漆の他国への移出制限は、初期のものほど厳しく、寛永13年（1636年）の規定（註2）では、漆を原料に作られる蠟・蠟燭とともに、完全に「御とまり物」であったが、寛文9年（1669年）の規定（註3）では、「御境目他領へ不被相出物」であるが、「御割奉行書付」があればとの条件付きで他国への移出が一部認められた。しかしこのような保護・管理政策にもかかわらず、江戸後期には漆の栽培は低調となり、『封内土産考』（里見藤右衛門1798）の編まれた寛政期には既に自給不可能で、最上・米沢等から不足分を輸入する状態にあったようである。

仙台城二の丸跡からは、第5地点と第9地点の調査で、時代の異なるまとまった量の漆器が出土しており、これを基軸に、周辺の近世遺跡出土資料を補うことで、仙台藩領内での漆器の変遷を追うことが可能である（図114）。補足資料として用いたのは、下草古城跡（須田良平1993、須田ほか1994、天野順陽1995・1996）、仙台城三の丸跡6号土坑（仙台市教育委員会1985）、泉崎浦遺跡25号墓（吉岡・篠原1989）、八沢要害遺跡C平場1号井戸（小井川和夫1980）、佐沼城跡SK13（佐久間・小村田1995）、切込窯跡貯水池（佐藤広史ほか1990）、富沢遺跡88次調査第1土坑（太田昭夫1995）出土の漆器であり、それらについては次のような根拠で年代を推定できる。なお、仙台城出土の漆器の年代については、陶磁器を共伴しており、詳細は陶磁器の項を参照されたい。

宮城県黒川郡大和町鶴巣に位置する下草古城跡は、伊達政宗の三男、伊達宗清が、慶長15年（1610年）に宮城郡松森村から移り、吉岡に去る元和二年（1616年）まで居住したことで知られる。宮城県教育委員会の行った調査の結果、16世紀末にまで遡りうる町並み遺構が検出され、宗清の居住以前に、天正年間の文献記録に登場する「下草城」・「下草館」が存在していた可能性が指摘されている。漆器は、井戸跡（SE205, 206, 223, 311, 315, 322, 327, 353, 609, 611, 719914）、溝跡（SD360, 361, 608）、土坑（SK354）から出土している。下草古城跡からは18世紀以降の遺物も出土しているが、これらの漆器に関しては、出土遺構や共伴した陶磁

器からみて、全て16世紀末から17世紀初頭の年代を与えることができる。

仙台市太白区泉崎に位置する泉崎浦遺跡では、31基の近世墓が検出されており、その内の25号墓（桶棺）からは漆器が2点出土している。共伴遺物には、箸1膳、雁首1点、提灯底板2点、不明竹製品2点と6枚の錢貨がある。25号墓出土の六道錢は全て吉寛永であり新寛永を含まない。本墓壙を切って構築されている22号墓（箱棺）には享保11年（1726年）初鋳のマ頭通不旧手の新寛永が、同じく18号墓には天保4年（1838年）初鋳の背「千」新寛永が含まれている。また、本墓壙を切って構築されている11号墓（箱棺）からは、18世紀代の大堀相馬の灰釉丸碗が出土している。以上の点から考えて、25号墓の漆椀の年代は、17世紀後半頃に置くことができよう。

宮城県栗原郡築館町に位置する八沢要害遺跡では、C平場の1号井戸跡から2点の漆椀が出土している。井戸の年代は不明であるが、近くの平場の建物跡に伴う陶磁器の多くは18世紀後半以降のもので、特に19世紀代のものが主体的である。漆椀の型式学的特徴も考慮して、19世紀代の年代を与えた。

宮城県登米郡迫町に位置する佐沼城跡では、三の丸地区の25~30石取りの上位家臣屋敷が発掘調査されている。漆器の出土したSK13は、底面近くに灰層を含む互層状の水性堆積層や動植物遺存体が層状に堆積しており、生活排水や不要物を投棄したゴミ穴と考えられている（佐久間・小村田前掲）。漆椀に共伴した陶磁器は、19世紀初頭から前葉の時期に限定でき、該期の良好な基準資料となりうる内容を持っている。なお、出土した漆器には、宝暦7年（1757年）に佐沼に入府した亘理家の家紋である「三日月に九曜文」をもつ椀と、それに伴う蓋（図114-72・78）が存在する。

宮城県加美郡宮崎町に位置する切込窯跡では、宮城県教育委員会による調査において、中山窯跡下方の平場で検出された、貯水池構築時の整地層から、窯や工房からの廃棄物に混じって漆器が出土している。漆器の廃棄された時期は、共伴した磁器が切込編年（佐藤広史ほか前掲）の第Ⅰ期から第Ⅱ期に相当することから、窯が造られた天保年間から、生産不振に陥った慶応年間、即ち、1830年代から1860年代に限定できる。

仙台市太白区に位置する富沢遺跡では、第88次調査で検出された第1土坑（ゴミ穴）から漆椀の蓋が1点出土している。この資料については、皿と報告されているが、摘み（高台）内に桔梗が比較的大きく描かれていることから、椀蓋と理解した。共伴した陶磁器の多くは18世紀末葉以降のもので、特に19世紀代のものが主体的である。

以上の資料を年代順にならべ、器種毎の変遷を図114に示した。

次に器種分類について述べる。近世の椀は、飯、汁、平、壺の四ツ椀ないしはこれに腰高または坏を加えた椀揃えが一般的な形態だといわれている（中井さやか1992）。また絵画資料に

器種	椀身A類	椀身Bla類	椀身Cla類	椀身C1b類	椀身C2類	椀蓋
年代						
17世紀初頭	1 17	2 17	3 17	4 17	5 17	6 17
	7 17	8 17	9 17	10 17	11 17	12 17
	13 17	14 17	15 17	16 17	17 17	
	18仙台城一の丸跡 第5地点6号池	19、20、23、26、29、 32～34、36、37、41 42仙台城二の丸跡 第9地点8番・7 附16号溝	21、22、24、27、28、 30、31、35、38～40 仙台城三の丸跡 6号土塁	23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42	18仙台城一の丸跡 第5地点6号池	19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42
	19 17	20 17	21 17	22 17	23 17	24 17
	25 17	26 17	27 17	28 17	29 17	30 17
	31 17	32 17	33 17	34 17	35 17	36 17
	37 17	38 17	39 17	40 17	41 17	42 17
17世紀後半	43 17	44 17	45 17	46 17	47 17	48 17
	48 17	49 17	50 17	51 17	52 17	53 17
	54 17	55 17	56 17	57 17	58 17	59 17
	60 17	61 17	62 17	63 17	64 17	65 17
	66 17	67 17	68 17	69 17	70 17	71 17
18世紀後半	72 18	73 18	74 18	75 18	76 18	77 18
	78 18	79 18	80 18	81 18	82 18	
19世紀	68 19	69 19	70 19	71 19	72 19	73 19
	74 19	75 19	76 19	77 19	78 19	79 19
	80 19	81 19	82 19			
	0 cm	10 cm	20 cm	30 cm	40 cm	50 cm

図114 仙台藩領内出土の漆器の変遷
Fig. 114 Chronological sequence of lacquerwares belonging to pre-modern period from sites in Sendai-han

は、菓子椀という名称で蓋付きの大型椀が認められる。しかし、考古資料は勿論、伝世品に関しても、用途を特定することは困難な場合がある（松田・羽野1939）。さらにこれらの名称と用途が必ずしも一致するとは限らない。本稿では、椀を椀身と椀蓋とに大別し、前者を8類型に細分した。器高の低い椀身と蓋とは、形態上分別困難なものも存在するが、体部外面の文様の向きや高台（摘み）内の文様の有無などからできる限り両者の分別を行った。また、一緒に出土した漆椀の組み合わせから、器高の低い椀身なのかそれとも蓋なのか、判断可能な場合もある。椀以外の器種については、資料点数も少なく、現状で細かな検討を行うことは困難であるため、今回は資料の呈示にとどめ、分類は行わなかった。

椀身A類 口径と深さの比率が2：1より深めの椀。高台が高く、全体に大型である。胴部下半は膨らみを帯びているが、胴部上半から口縁にかけては直線的に立ち上がる。
高台内のロクロ挽き込みが極端に浅く、底部が厚い。

椀身B類 口径が深さの2～3倍の椀。A類に比して浅めであるが、口径は同じか、若干大きめの値をとり、A類同様、比較的大型の椀である。体部と高台の形状により、次の3類型に細分できる。

B 1a 類 体部に稜線を持たず、高台は、A類同様、高めでロクロ挽き込みが極端に浅い。

B 1b 類 体部に稜線を持たず、高台は低く底部も薄い。

B 2 類 体部下半に一段の稜を有する（「一文字腰」）。体部上半から口縁にかけては直線的に開く。高台は比較的高めである。

椀身C類 口径が深さの3～4倍ある浅めの椀。体部と高台の形状により細分できる。

C 1a 類 体部下半が膨らみ口縁の立ち上がりも急で直線的である。高台径は大きい傾向にある。高台は高めで、ロクロ挽き込みが浅く、底部が厚い。

C 1b 類 体部下半が膨らみ口縁の立ち上がりも急で直線的である。高台は低いが径は大きい傾向にある。

C 2 類 体部が筒状に短く直立する。体部の中位に、タガ状の隆帯や2条の稜線（「面取り」）を持つ場合がある。高台はいずれも低い。

C 3 類 体部のカーブは緩やかで、半球状を呈する。高台は低い。

次に、各類型の消長と変遷に関して年代順に述べる。

16世紀末から17世紀初頭の下草古城跡の資料（1～17）では、椀身に関しては、A、B 1a、C 1a、C 1b の4類型が認められる。なかでもC 1a 類とC 1b 類が主体を占めている点が特徴的であり、そこに本資料群の時代的特徴がよく現れていると言える。C 1b 類は、13世紀～14世紀に比定できる宮城県栗原郡高清水町観音沢遺跡出土資料（加藤・阿部1980）、13世紀後半～14世紀初の仙台市若林区今泉城跡11号溝底面・埋土下層出土資料（佐藤洋ほか1983）、14

世紀前半～15世紀後半の同溝埋土上層出土資料、14世紀末～15世紀前半に比定される仙台市太白区中田南遺跡8号井戸跡出土資料（太田昭夫1994）、同じく15世紀後半～16世紀の中田南遺跡61号溝出土資料、16世紀代と考えられる今泉城跡37号土坑一括出土資料（篠原信彦ほか1980）等で確認でき、少なくとも宮城県域では、中世全体を通じて漆椀のなかで最も主要な器種といえる。一方、A類・B1a類・C1a類は、高台が高い割にロクロ挽き込みが浅いという共通性があるが、このような特徴を有する漆椀は、宮城県域では、15世紀後半から16世紀に比定されている中田南遺跡第1号堀跡・第61号溝跡出土例が最も古い。全国的にみた場合でも、清洲城下町遺跡（鈴木正貴編1994）、一乗谷朝倉館跡遺跡（福井県教育委員会1979）、葛西城址遺跡（古泉弘編1983）等の16世紀代の漆椀の中には少量認められるものの、15世紀前半以前の確実な例は見いだせない。C1b類が13世紀以来の伝統的な器形であるのに対して、A類・B1a類・C1a類は16世紀になって出現した新しい器形と言えよう。また、後述するように、A類とB1a類は江戸時代を通じて変化しながらも、幕末まで存在していることが確認できるが、C1a類に関しては17世紀前葉以降の出土例が見あたらない。C1a類は、C1b類同様、体部については中世的な形態を有しており、高台については、先述の通り、近世的な特徴を有していることから、中世末～近世初頭の時期に年代を限定できる可能性がある。装飾との関係では、A類では内外両面黒地に朱で文様が描かれる（1, 2）のに対して、B1a類・C1b類や蓋は、内朱外黒地に朱で文様を描くものが多い（3, 7～13）。C1b類は文様を持たない。文様は、密な木の葉・植物文、線描きによる千鳥（鶴）文、三引両文の3種に大別でき、後二者は、後述する仙台城出土の17世紀初頭～前葉の資料との共通性が強い。下草古城跡・仙台城とともに、出土した漆器に使われている三引両文は、外側にしなった形の「しない三引」に限られるようである。「しない三引」は、二代藩主伊達忠宗が好んで用いた家紋といわれ（高橋あけみ1996）、忠宗の墓である感仙殿に副葬された遺品のなかには、表黒漆塗地に「しない三引」と九曜文を金蒔絵で散らした鞘を持つ糸巻太刀が見られる（伊東信雄編1985）。

17世紀初頭から前葉の仙台城出土資料（18～42）では、下草古城跡に存在していたC1a類が欠落し、新たにB1b類とC2類が加わる。中世以来の伝統的なC1b類は残るが、量的には激減する。C2類に分類した29の体部には、タガ状の隆帯が巡る。同様の漆椀は、江戸遺跡においては、千代田区都立一橋高校地点（都立一橋高校内遺跡調査団1985）の17世紀後半以降の資料や、港区増上寺子院群（安藤広道1988）の18世紀前半以降の資料に確認できる。江戸中期以前に製作されたとされる漆椀の伝世品を集成した『時代椀大観』（松田・羽野前掲）には、「淨法寺椀」として、体部にタガ状の隆帯が巡る「壺椀」と「平椀」が紹介されている（同書図版21の資料）。仙台城二の丸跡第9地点の出土資料は、このタイプの漆椀が確実に寛永以前に存在することを示す例として重要である。装飾との関係では、椀身・蓋とともに内外両面黒地

塗りのものが多い。これは、この時期の資料に限って、外面同様、内面にも朱漆により文様を描いたもの（18～20, 22～24, 30～33, 35・36）が多いことと関係すると考えられる。文様は、線描きによる千鳥（鶴）文と、伊達家の家紋の一つである三引両文が圧倒的に多く、器種との関係では、両方の文様がほぼ同じ様な使われ方をしている。この2つの文様以外では、蕪（30）や瓜（37）といった野菜文が見られる。家紋に関しては、器面に3単位配置する例が多いが、2単位の例も存在する。年代的に若干先行する下草古城出土例（13）は2単位であり、より後続する時期のものは3単位であることから、この時期に家紋を3単位に配置する構成が確立した可能性がある。線書きによる千鳥（鶴）文に関しては、「淨法寺椀」に類例が認められる（前掲『時代椀大観』の15の資料）。黒地に朱漆で向かい合う鶴と亀を描き、余白に細密線と松竹・千鳥を配置する構図は、22や31の出土遺物例に近似する。仙台城出土の漆椀の技術的系譜を考える際に、地理的にみても、淨法寺系の漆器との関連性は充分考慮すべき問題であり、今後、自然科学的手法を用いた分析により、使われている樹種の同定や塗りの工程を明らかにした上で、両者の比較を行う必要がある。

17世紀後半の資料（43～50）では、B2類が新たに加わる。B2類は「一文字腰」と呼ばれる器形であるが、江戸遺跡においては、17世紀後半の港区増上寺子院群出土例が古く、一般的になるのは18世紀以降であるとされる（中井さやか1992）。同様の傾向は、仙台藩領内の遺跡出土事例についても看取できる。文様に関しては、仙台城においても、伊達家以外の家紋をあしらったもの（49）が認められるようになり、本期以降、三引両文にとって代わり主体を占めるようになる。また、装飾に関して最も注目すべきは、高台内に、長方形あるいは橢円形の枠と文字を朱書きあるいは朱印した銘をもつ椀（43・45・46・48・50）が流行する点である。類例は江戸遺跡出土資料にも存在するが、ある時期に特別流行するといった傾向は認められないようである。同様の資料は、仙台城では二の丸跡第9地点の16号土坑出土資料にも存在しており（52）、17世紀末・18世紀初頭をピークとして18世紀後葉頃まで認められる装飾技法である。仙台市若林区北目城跡では、「障子」・「畝」状の防御施設を伴う大規模な堀の最下層から、万曆様式の青花と共に扇に「大町四丁目 作左衛門」の銘を高台内に押印した漆椀が出土している（金森安孝1996）。仙台城出土の漆椀の高台内の銘も、判明するものは、すべて人名と考えられる。北目城跡出土例とは年代的な開きがあるため、両者が直接関係するか否かは不明である。しかし、このような製作者に関わるようなブランド銘を記することで、その製品の付加価値を高めようとする手法が、17世紀末・18世紀初頭に流行する背景として、同様の手法が多用されていた京焼や肥前の陶磁器からの影響を無視するわけにはいかないであろう。材質の違いを越え、食器の差別化が一斉に進行した背景には、元禄期を中心とする時期の消費生活の質的向上があったと考えられる。

18世紀後葉の資料（51～67）は、仙台城二の丸跡第9地点の15・16号土坑から、まとまって出土している。中世以来の伝統的な器形をとどめたC 1b類は存在していない。蓋では、深さのある、椀を伏せた器形のもの（60～65）が主体を占め、前代とは様相を異にする。文様に関しては、江戸遺跡から出土する漆椀と共に多くの認められるようになる。

19世紀の資料（68～82）では、陶磁器の椀を写したと考えられるC 3類（74）が認められるようになる。この資料は、胴部下半の器壁が厚く、底部から口縁部に向かって次第に薄くなる。A類（68）やB 1a類（69～71）といった深めの椀も、胴部下半の器壁が厚く、底部から口縁部に向かって次第に薄くなるように作られている。このような特徴は、19世紀の漆椀の一部に顕著であり、時代的な特徴である可能性がある。蓋では、口縁部の立ち上がりが急な形態のもの（77, 80）が新たに見られるようになる。

以上、年代を追って漆器の変遷を概観してきた。陶磁器の項で触れたように、近世初頭の仙台城では、椀は漆器、皿は中国産磁器という使い分けがなされており、その時期、供膳具に占める漆器の位置はかなり重要であった。肥前磁器や相馬陶器が普及するにつれ、時代とともに、供膳具の主体は陶磁器で占められるようになり、漆器の出土量自体も減少する。出土した漆器の生産地については、自然科学的手法も用いた分析等で今後確定しなければならないが、冒頭で述べた、近世後期に領内で生じた漆栽培の低調化は、出土する漆器の減少と無関係ではないであろう。

② 箸

仙台城二の丸跡では、第5地点と第9地点の調査で多量の箸状木製品が出土している。第5地点から出土した箸状木製品の大部分は、二の丸が拡張される元禄年間以前に位置づけられる。第9地点では、箸状木製品は、17世紀初頭～前葉の8・7層および16号溝と、18世紀後葉のゴミ穴である16号土坑から出土している。箸状木製品とした遺物の用途や時期的な変化を検討するため、先端および断面の形状、長さ、使用痕跡等の観察を行った。

先端の形状は、特に加工を加えず切断面を残すもの（A類）、先細に作り出しが切断面を残すもの（B類）、先端を尖らし切断面を残さないもの（C類）、ヘラ状に作り出しどの（D類）に分類した。完形品での両端の形状の組み合わせは、10類型確認され、その結果を出土場所毎に表22に示した。なお、竹を素材とした串の可能性の高い資料は除いた。表に示した箸状木製品のうち、漆塗りと思われる資料は、第9地点16号土坑出土のAA類に1点のみられるのみで、残りは全て白木である。

量的に問題のある第9地点下層の資料を除き、先端および断面の形状では、両端ともに加工を加えず、断面が略円形のAA類が圧倒的に多い。文献に残された名称との対比では、AA類は、AB類、BB類とともに、「寸胴箸」と呼ばれるものに相当すると考えられる。

表22 仙台城二の丸跡出土箸状木製品の先端形状

Tab. 22 Count of chopsticks from the secondary citadel of Sendai Castle

箸状木製品の先端形状	AA	AB	AC	AD	BB	BC	BD	CC	CD	DD	合計
第9地点8・7層、16号溝 (17世紀初頭～前葉)	0	0	1 (1)	2	2	0	0	0	0	0	5 (1)
第5地点基礎9区VII層 (17世紀末葉)	138 (1)	8	6	0	3 (1)	1	8	1	2	0	167 (2)
第9地点16号土坑 (18世紀後葉)	370	1	3 (1)	3	0	0	0	0	1	1 (1)	379 (2)

カッコ内は断面が方形を呈するものの点数

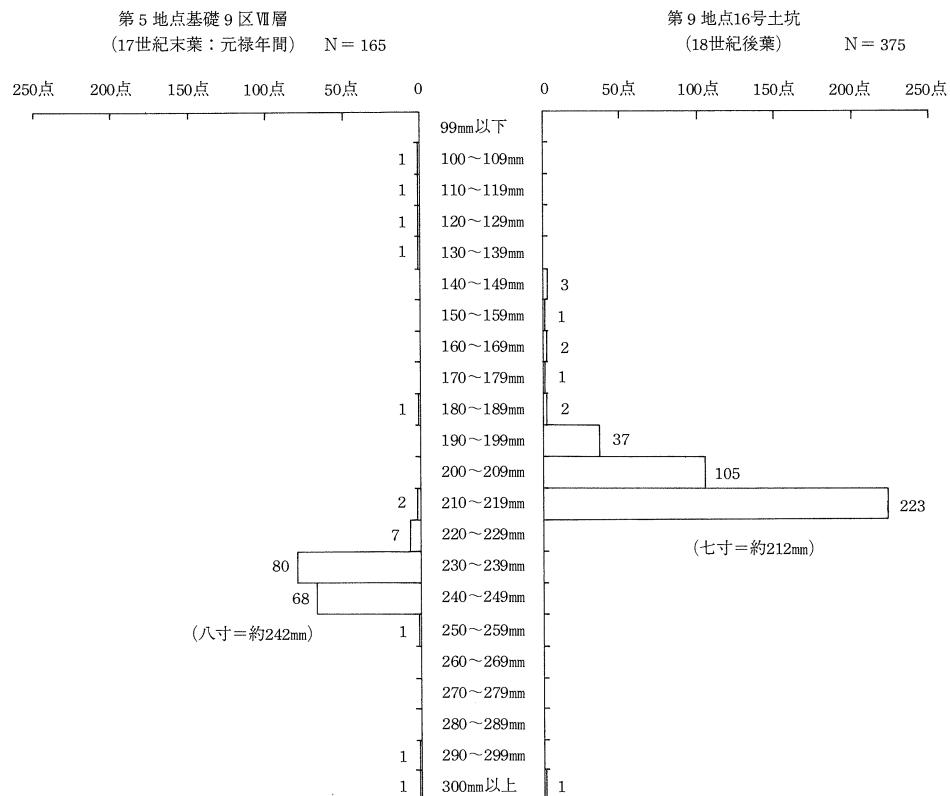


図115 仙台城二の丸跡出土箸状木製品の長さ

Fig. 115 Histograms for length of chopsticks from the second citadel of Sendai Castle

次に資料点数が多く、時期的にも限定できる、第5地点基礎9区VII層出土資料と第9地点16号土坑出土資料を用いて、両者の長さを比較する（図115）。その結果、前者は240mm前後に、後者は210mm前後に顕著な集中が認められた。即ち、17世紀末葉には8寸の箸が用いられ、18世紀後葉には7寸の箸に短くなっていることが明らかとなった。

17世紀初頭から前葉に比定できる第9地点8・7層および16号溝出土資料は、量的に限られるため検討できないが、三の丸跡の調査成果（仙台市教育委員会1985）を援用することでこの時期の様相を窺い知ることができる。三の丸跡出土の箸の約98%は、三の丸造営以前の遺構である6号土壙と9号土壙から出土している。三の丸跡では、長さ9寸から1尺の「中太両細」の箸が多く認められる。

今回検討した箸を出土した遺構や整地層からは、箸とともに多量の土師質土器の皿が出土しており、それらは、儀礼的色彩を帯びた宴会の席で使用された後、まとめて捨てられたものと考えられる。仙台城では、儀礼的な宴会等においては、かわらけとともに白木の箸も、ハレの場を飾る伝統的な供膳具として使われ続けるが、白木の箸の長さに関しては、時代が下るにつれ短くなる傾向にある。白木の箸が短小化する背景には、伝統的な儀礼が、形を維持しながらも次第に形骸化していくという事情が存在していたと考えられる。

（註1）例えば漆の栽培・採取を奨励した文書としては次のような史料がある。

- ・元和4年（1618年）「伊達政宗桑植付等黒印條目」（大日本古文書・家わけ第三・伊達家文書之二所収 八二九号文書）
- ・元和6年（1620年）「石母田宗頼他三名連署漆植付等條目」（同上 八三四号文書）
- ・元和7年（1621年）「伊達政宗漆植付等黒印條目」（同上 八四〇号文書）
- ・寛永3年（1626年）「伊達政宗漆搔等申付状」（同上 八七〇号文書）

（註2）陸前唐桑古館屋敷鈴木家文書第八二号文書（宇野脩平編1955の105～107頁所収）

（註3）斉藤報恩会所蔵の『相去御足輕方用法記』（司東真雄編1973の377～379頁所収）

《引用・参考文献》

- 天野順陽 1995 「下草古城跡」 『下草古城跡ほか』 宮城県文化財調査報告書 166 pp. 3～72
天野順陽 1996 「下草古城跡」 『下草古城跡ほか』 宮城県文化財調査報告書 169 pp. 9～90
安藤広道 1988 「(4)植物製品 容器 A漆椀類」 『芝公園一丁目増上寺子院群』
東京都港区教育委員会 pp. 320～362
伊東信雄編 1979 『瑞鳳殿伊達政宗の墓とその遺品』 瑞鳳殿再建期成会
伊東信雄編 1985 『感仙殿伊達忠宗・善応殿伊達綱宗の墓とその遺品』 財団法人瑞鳳殿
宇野脩平編 1955 「陸前唐桑の史料－日本漁村史料－」 『常民文化研究』 72

- 太田昭夫 1994 『仙台市中田南遺跡』 仙台市文化財調査報告書182
- 太田昭夫 1995 『富沢・泉崎浦・山口遺跡(8)』 仙台市文化財調査報告書203
- 加藤道男・阿部博志 1980 「観音沢遺跡」 『東北新幹線関係遺跡調査報告書IV』
宮城県文化財調査報告書72 pp. 131~347
- 金森安孝 1996 「関ヶ原の戦いの出撃基地北目城跡を掘る」 『仙台城 歴史群像名城シリーズ13』
学習研究社 pp. 44~47
- 旧芝離宮庭園調査団 1988 『旧芝離宮庭園』
- 小井川和夫 1980 「八沢要害遺跡」 『東北新幹線関係遺跡調査報告書IV』
宮城県文化財調査報告書72 pp. 351~398
- 古泉弘編 1983 『葛西城』 葛西城址調査会
- 佐久間光平・小村田達也 1995 『佐沼城跡』 追町文化財調査報告書2
- 佐藤洋ほか 1983 『今泉城跡』 仙台市文化財調査報告書58
- 佐藤広史ほか 1990 『切込窯跡』 宮崎町文化財調査報告書3
- 里見藤右衛門 1798 『封内土産考』 (仙臺叢書第3巻所収)
- 司東真雄編 1973 『北上市史 第4巻 近世(2)』
- 篠原信彦ほか 1980 『今泉城跡』 仙台市文化財調査報告書24
- 鈴木正貴編 1994 『清洲城下町遺跡IV』 愛知県埋蔵文化財センター
- 須田良平 1993 「下草古城跡」 『下草古城跡ほか』 宮城県文化財調査報告書154 pp. 7~68
- 須田良平ほか 1994 「下草古城跡」 『下草古城跡ほか』 宮城県文化財調査報告書160 pp. 1~129
- 高橋あけみ 1996 「Ⅱ章近世 四. 伊達家をめぐる美術 伊達家の漆工」
『仙台市史 特別編3 美術工芸』 pp. 259~276
- 中井さやか 1989 「一六世紀の漆椀」 『考古学の世界』 慶應義塾大学民族学考古学研究室編
新人物往来社 pp. 380~395
- 中井さやか 1992 「近世の漆椀について」 『江戸の食文化』 江戸遺跡研究会編 吉川弘文館
pp. 180~204
- 福井県教育委員会 1979 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告I 朝倉館跡の調査』
- 松田権六・羽野楨三編 1939 『時代椀大観 第一輯』 寶雲舎
- 山田揆一 1917 『仙臺物産沿革』 (仙臺叢書別集第2巻所収)
- 吉岡恭平・篠原信彦 1989 『富沢遺跡・泉崎浦遺跡』 仙台市文化財調査報告書126

(2) 下駄

下駄については、二の丸跡と三の丸跡から、いくつかのまとまった資料が出土している。まだ各時期の資料点数が少なく、これらの資料が、各時期の全体像を表しているとは限らない。おのずと検討にも限界があるが、ここにあらためて時期の判明する一括資料を提示するとともに、各時期の特徴について、いくつかの指摘できる点を整理しておきたい。

① 一括資料の概要

二の丸跡で、これまでに下駄が出土しているのは、以下の4群の資料である。これらは、年代が限定できる資料である。

第9地点I期（17世紀初頭～前葉）

第5地点元禄年間の整地層（17世紀末～18世紀初頭）

第9地点16号土坑・15号土坑（18世紀後葉）

第9地点1号池（19世紀中葉頃）

また三の丸跡でも、まとまって下駄が出土している（佐藤洋ほか1985）。三の丸跡では44点の下駄が出土しており、その内40点が、I期の6号土坑からまとめて出土している。図示されている資料は、全てこの6号土坑から出土したもので、寛永15年（1638年）以前の17世紀初頭～前葉に限定できる資料である。

② 分類基準

台部と歯の作り方から、連歯下駄・差歯下駄・無歯下駄に大別する。

連歯下駄は、一本から台と歯を切り出したもので、歯の作り方で細分される。独立した二枚歯をもつもの、前歯は台前端部から下りて独立せず後歯のみが独立するもの、前後とも台端部から続いて独立しないものが認められる。

差歯下駄は、別材で作った台と歯を組み合わせるものである。台の表に歯のほぞが露出する露卯差歯下駄と、台裏の溝に歯を差し込みほぞを持たない陰卯差歯下駄に分けられる。

無歯下駄は、歯をもたないもので、一枚板のものと、前後で分かれるものがある。

連歯下駄と差歯下駄の台の平面形態には、長円形のものと角形のものがある。なお、出土点数の比較にあたっては、差歯下駄の場合、台と遊離した歯を数えると、実際より多い数値となる可能性が高いため、台部の点数で数えることとする。

③ 各時期ごとの様相

17世紀初頭～前葉の第9地点I期では、8点の下駄が出土している（図116、年報8）。もう1点、下駄かと思われる資料があるが、確実ではないため除外した。全て白木の下駄で、漆塗りのものは無い。3点が連歯下駄、5点が露卯差歯下駄である。連歯下駄は、いずれも前後の歯が独立するものである。後ろの緒孔（横緒孔）は、全て後歯の前に開けられている。

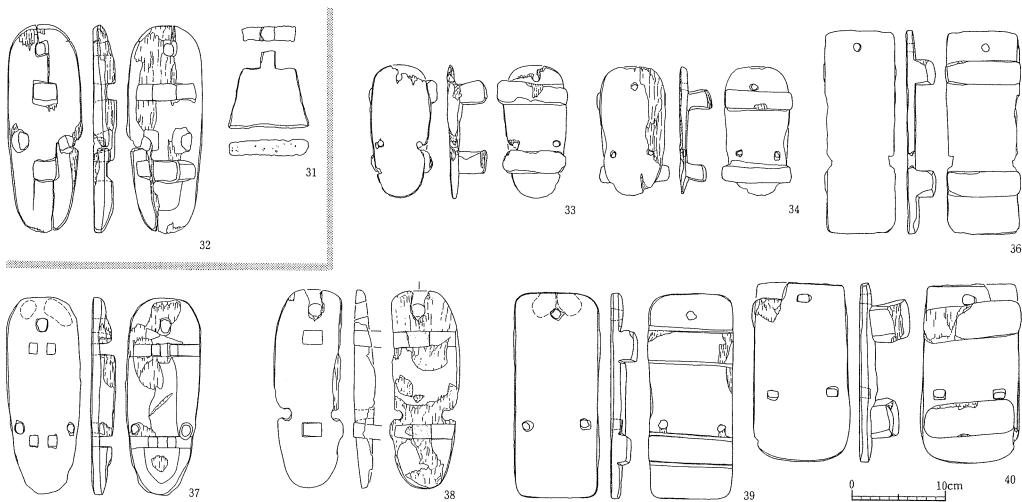


図116 仙台城二の丸跡第9地点I期の下駄

Fig. 116 Clogs of phase I from NM9

the end of the 16th century-
the early 17th century

同じく17世紀初頭～前葉の、三の丸跡I期に属する6号土坑出土の下駄は、34点が図示されている。差歯下駄の歯の部分だけのものが1点あり、それを除くと33点となる。図117には代表的な資料を集めて提示した。11など3点に漆が塗られている以外は、白木である。16点が連歯下駄である。そのうち14点が独立した二枚歯のものである。10は、前後とも歯が台端部から続いて独立しないものである。11は、前歯が台前端部から下りて独立せず、後歯のみが独立するものである。両者とも、前歯には、緒孔の部分にえぐり込みが見られる。露卯差歯下駄は13点出土している。無歯下駄は2点出土しており、一枚板のものである。いずれも前後の緒孔を開ける(19)。20は、前後に2個づつの釘孔が開いており、あるいは歯を打ち付けたものかも知れない。連歯下駄と差歯下駄の横緒孔は、全て後歯の前に開けられている。

二の丸跡第5地点の元禄年間の整地層からは、14点の下駄が出土している(図118)。連歯下駄が7点、露卯差歯下駄が4点、無歯下駄が3点である。連歯下駄は全て独立した二枚歯をもつものである。無歯下駄は3点とも、一ヶ所を分断し、前後に分けた「中折り下駄」である。表を打ち付けるための釘が残るもの(39・40)と、表を縫いつけるための小孔が見られるもの(38)がある。連歯下駄と差歯下駄では、連歯下駄に1点と差歯下駄に1点、横緒孔を後歯の前に開けるものがある以外は、後歯の後ろに緒孔が開けられている。

18世紀後葉の二の丸跡第9地点16号・15号土坑では、9点の下駄が出土している(図118)。連歯下駄が8点に対して差歯下駄が1点と少ない。出土点数が少なく、この比率を一般化できるかどうかは問題が残る。連歯下駄は7点が、独立した二枚歯をもつものである。もう1点の連歯下駄は、前歯が台前端部から続き、その部分が斜めにけずられている「のめり」があるも

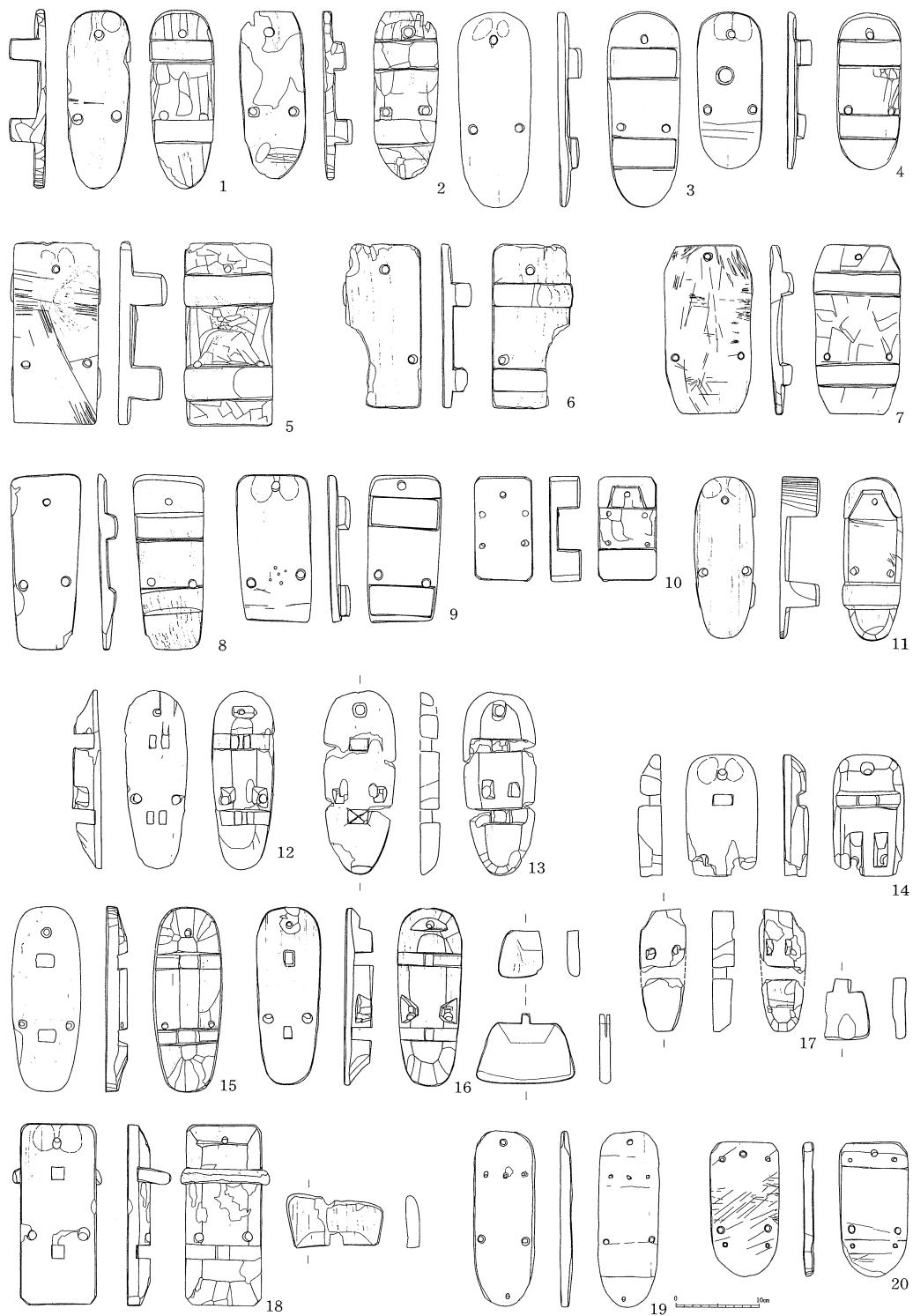
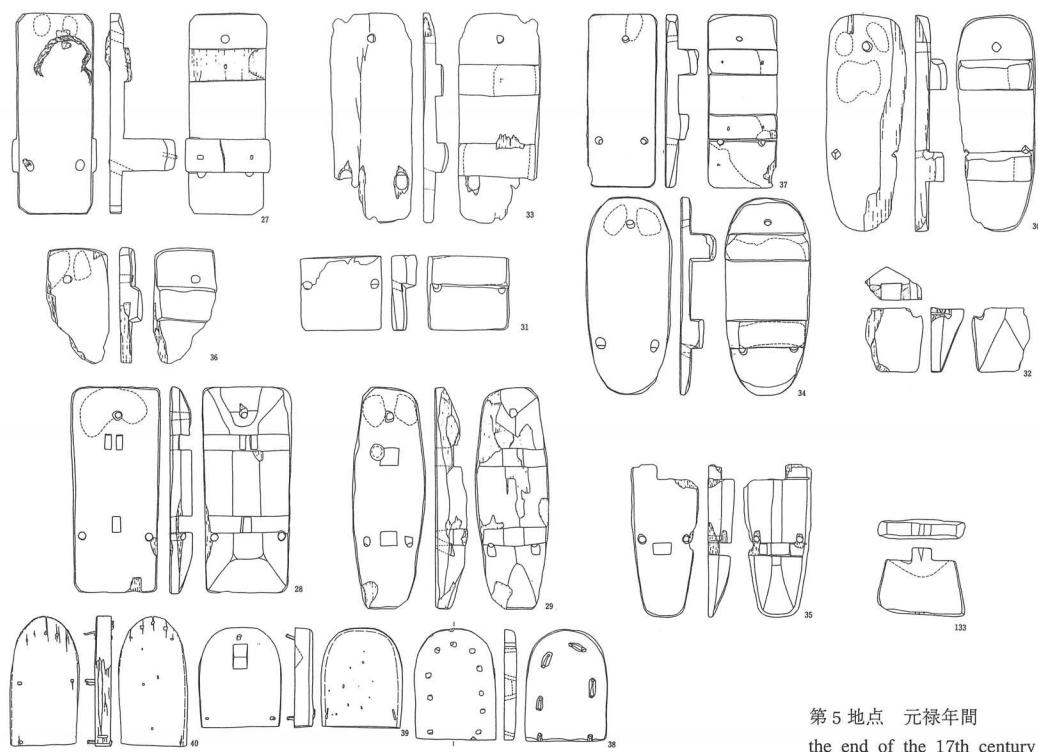


図117 仙台城三の丸跡 6号土坑出土の下駄

Fig. 117 Clogs from Pit 6 at the third citadel of Sendai Castle

the end of the 16th century-the
beginning of the 17th century



第5地点 元禄年間
the end of the 17th century

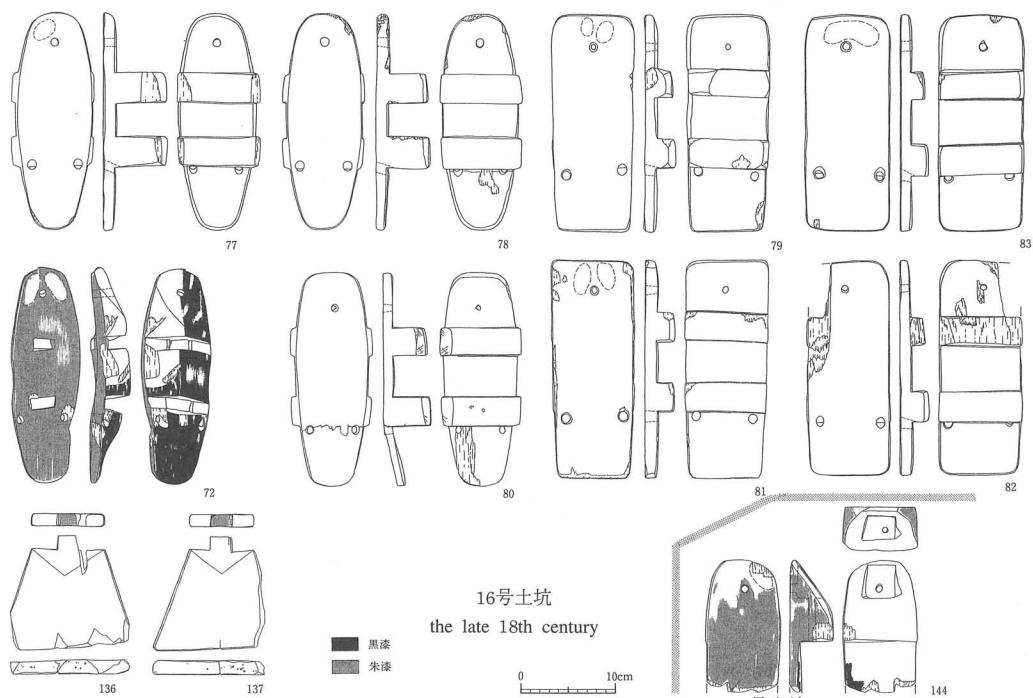


図118 仙台城二の丸跡第5地点および第9地点15・16号土坑出土の下駄

Fig. 118 Clogs from NM5 and Pit 15, 16 at NM9

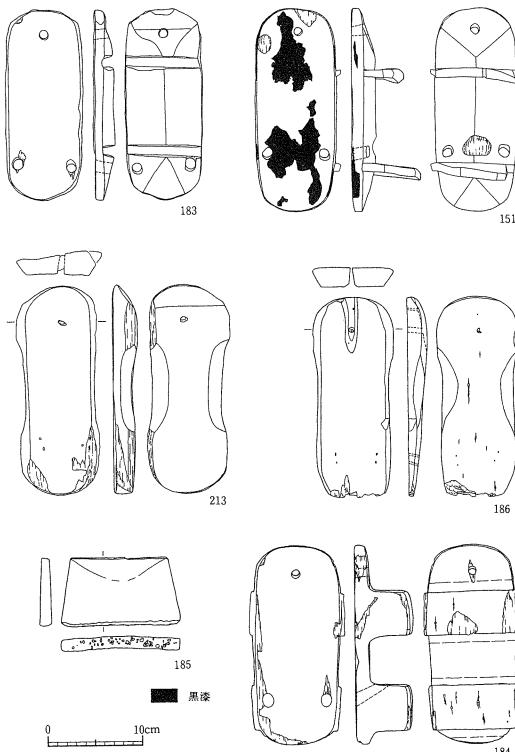


図119 仙台城二の丸跡第9地点1号池出土の下駄
 Fig. 119 Clogs from Pond 1 at NM9
 the early 19th century-the middle 19th century

歯の前に開けるもの（151・184）と、後ろに開けるもの（183）の両方がある。

④ 小結

最後に、各時期ごとの様相を、簡単にまとめておきたい。

出土点数が少なく、比率を細かく検討するのは困難であるが、17世紀初頭～前葉と元禄年間の資料では、連歯下駄と露卯差歯下駄が、それぞれ一定量存在する。確實にどちらが多いとは、現状では言い難い。一方、18世紀後葉の資料では、連歯下駄が8点に対して、露卯差歯下駄が1点のみと少ない。この時期の出土点数が少なく、これを一般化できるかどうかは問題があるが、特徴的である。細かな点では必ずしも一致しないが、江戸時代初頭から連歯下駄と露卯差歯下駄が併存し、次第に露卯差歯下駄が減少する一方で、連歯下駄が増加していくという点で大きく見るならば、江戸の遺跡出土の下駄の様相と共通する変化をたどっていると言えるだろう（古泉弘 1979）。

連歯下駄では、各時期を通じて、独立した二枚歯をもつものが多く、前歯あるいは前後の歯が、台の端から続くものは少ない。差歯下駄では、陰卯差歯下駄は19世紀中葉頃の資料でのみ認められ、18世紀後葉以前の資料には見られない。この点も、陰卯差歯下駄は18世紀後葉以前

のである（144）。差歯下駄は、露卯差歯下駄である（72）。この台部には、136・137の歯が伴う。漆塗りのものは、連歯下駄・露卯差歯下駄に各1点づつ認められる。横緒孔は、確認できるものは全て、後歯の後ろ側に開けられる。

19世紀中葉頃の二の丸跡第9地点1号池からは、5点が出土している（図119）。連歯下駄が1点、差歯下駄は2点、無歯下駄が2点である。差歯下駄は2点とも、陰卯差歯下駄である。これには漆塗りのものがある（151）。無歯下駄は2点とも一枚板のもので、台裏側の側面の中程を、半月形に刳る。前の緒孔だけが開けられ、後ろは両側それぞれに2個小さな釘孔が認められる。鼻緒は、前は孔に通し、後ろは小さな釘で止めたものと考えられる。連歯下駄と差歯下駄の横緒孔は、後

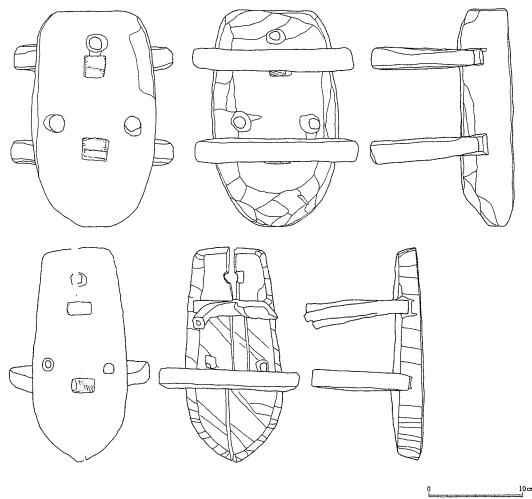


図120 下草古城跡出土の下駄

Fig. 120 Clogs from Shimokusa Castle
the end of the 16th century-the beginning of the 17th century

る。これまでの出土例では、18世紀後半に出現するとされており（市田京子1992）、これを遡る資料である。

連歯下駄と差歎下駄の横緒孔の位置については、17世紀初頭～前葉の資料が全て後歯の前にあるのに対して、元禄年間では後歯の前にあるものが少數となり、代わって後歯の後ろ側に開けるものが主体を占める。18世紀後葉には、後歯の後ろ側に緒孔を開けるものに統一されている。喜多川守貞の『守貞謾稿』には、江戸の下駄について、「近年、緒長キヲ好ミ、後歯ノ後ニ、二孔ヲ穿ツ。先年ハ、江戸モ後歯ノ前ニ穿ツ。京阪、今モアトバノ前ニ穿ツ。」とあり、緒孔の位置の変化はこの記述と一致する。ただし、仙台城の資料では19世紀中葉頃の資料に、再び後歯の前に緒孔を開けるものが見られる。この理由については明らかにし難いが、あるいは生産地による違いも考慮しておく必要があるかもしれない。

仙台城以外の仙台藩領内では、黒川郡大和町の下草古城跡の平成5年度の調査などにおいても、ややまとまって下駄が出土している（天野順陽ほか1994）。これらの下駄は、伊達政宗の三男である宗清が住んでいた慶長15年（1610年）から元和2年（1616年）の時期と考えられる遺構から出土している。連歯下駄と露卯差歎下駄が出土しており、基本的な様相は仙台城跡出土の下駄と共に通する。ただし、露卯差歎下駄の中には、前端が直線的で、台の後端が舳先のように尖る平面形のものがある（図120）。このような形態のものは、仙台城では出土していない。同様のものは、富沢遺跡86次調査においても出土している（佐藤甲二1997）。下草古城の報告では、歯の高さが12cm程と高いことと、前端が直線的で前屈みになりやすいことから、水仕事用や便所下駄などの特定の用途に使われたと推定している。

にはほとんど使用されていないとされる、江戸の状況と共に通する（古泉弘1979）。連歯下駄と差歎下駄の台の形状では、19世紀中葉頃の資料では明確ではないが、長円形のものと角形のものが、いずれの時期においても併存している。無歯下駄は、17世紀初頭～前葉・元禄年間・19世紀中葉頃の資料に認められる。19世紀中葉頃の資料は出土点数が少ないため確実では無いが、各時期とも無歯下駄の占める比率は、さほど大きくなかったものと思われる。注目されるのは、中折り下駄が元禄年間には出現していることであ

今回は詳しく検討できなかったが、仙台城出土の下駄にも、詳細に見ると様々な形態のものが含まれている。今後、用途の違いも考慮して、検討していく必要があるだろう。

《引用・参考文献》

- 天野順陽ほか 1994 『下草古城ほか』宮城県文化財調査報告書第160集
- 市田京子 1992 「江戸時代の下駄」『考古学と江戸文化』江戸遺跡研究会第5回大会発表要旨 pp. 237~255
- 喜多川守貞著、朝倉治彦・柏川修一校訂編集 1992 『守貞謾稿』第五巻 東京堂出版
- 古泉 弘 1979 「江戸の出土下駄」『物質文化』32 pp. 10~29
- 佐藤甲二 1997 『富沢・泉崎浦・山口遺跡(10)』仙台市文化財調査報告書第220集
- 佐藤洋ほか 1985 『仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第76集
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 『東北大学埋蔵文化財調査年報6』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 『東北大学埋蔵文化財調査年報8』

(3) 桶・樽類と円板状木製品

ここでは、平面円形の形状をもつ木製品（桶・樽・曲物など）について検討を加える。曲物や桶・樽類は、その構造上出土時には部材がばらばらになっていることが多く、出土状況に恵まれて復元できたもの以外は、個々の部材から推定していくことになる。出土資料の中で円板状に成形されたものの大半はそのような部材であると考えられる。

出土した円板状に成形されたものをみると、直径3.9～46.5cm、厚み0.2～1.9cmの様々なもの

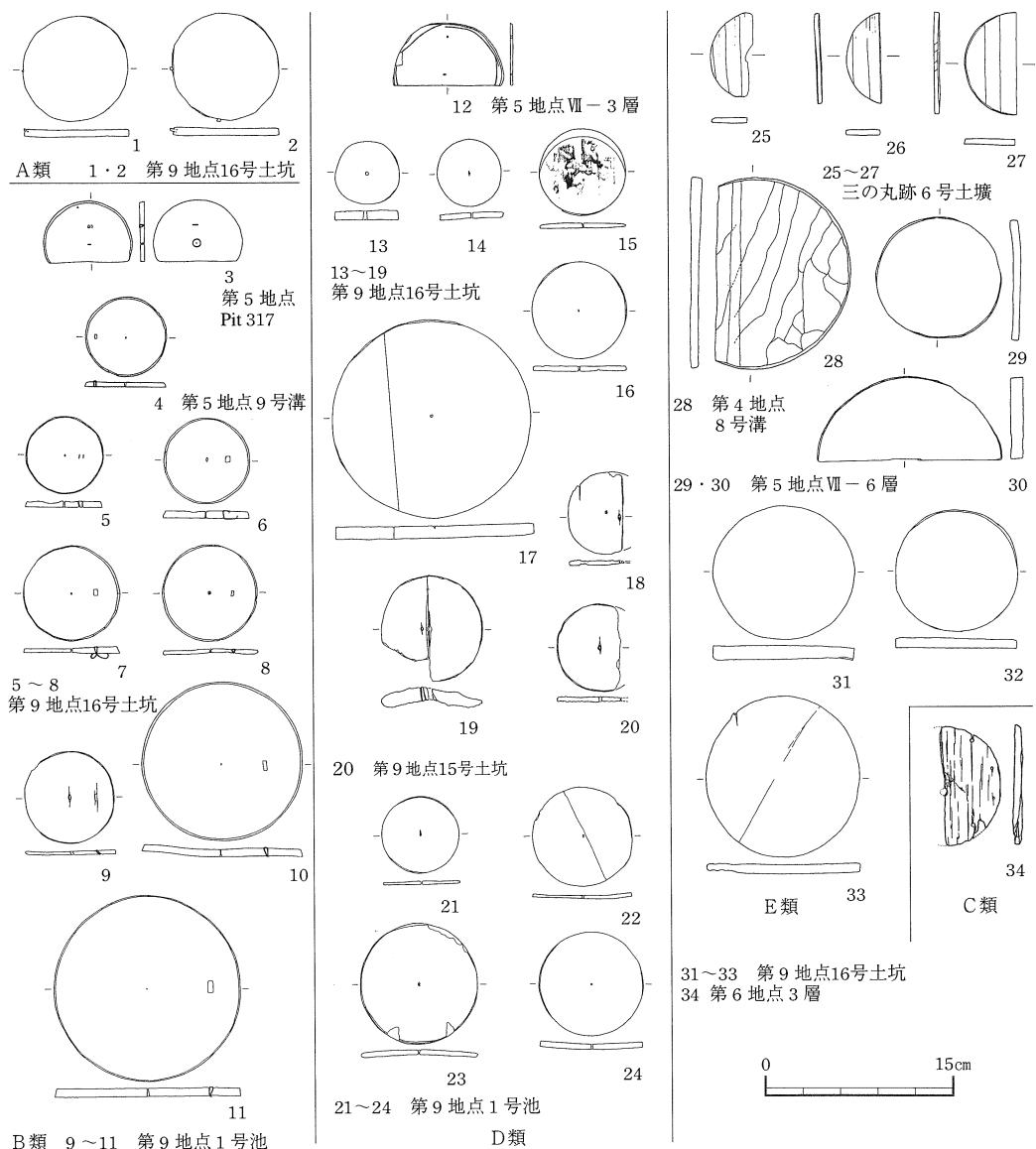


図121 仙台城跡出土円板状木製品

Fig. 121 Wooden implements shaped thin round board from Sendai Castle

がある。これらのうち、栓をはめ込んだとみられる穿孔のあるものや、持ち手をつけた痕跡のあるものは曲物ではなく桶・樽類の天板と考えられ、また、図123-1・7・8のように、周縁際に明瞭な段差をもたせたものは、天板・底板を側板にかぶせるタイプの曲物である。

それ以外のものについては、容器かどうかという点も含めて限定し難いが、直径と厚みに着目してみた場合、直径10cm以下のものに厚みが0.6cmに満たないものが多く認められ、そのように薄いものは直径16cm前後のものにまで散見される。これらは明らかに桶・樽類の部材とわかるものに比べると薄手であり、少なくとも桶・樽類ではなかった可能性が考えられる。これらは第9地点で多量に出土しており、以上の観点から「円板状木製品」として報告したものである。以下では、境界は便宜的であるが、上記の桶・樽類か曲物とみなせる以外のもので、直径17cm以下かつ厚みが1.2cm以下のものを「円板状木製品」とし、この数値からはずれるものは桶・樽類あるいは曲物の部材として検討してみることにした。

① 円板状木製品

第5地点の報告で桶や曲物の蓋、ないしそれに類するものという意味で蓋状木製品と呼んでいたものもこの類である。

第5地点では元禄期の盛土であるⅧ層から主として出土し、その前後の層からも少量出土している。第9地点ではほとんどが18世紀後葉の16号土坑と19世紀中葉の1号池からの出土である。三の丸跡では17世紀初頭～中葉の6号土壙から出土がみられる。

これらを詳細にみると、A—側面に木製ないし竹製の釘が2・3ヶ所認められるもの、B—中心と周縁との中間あたりに一ヶ所樹皮をくくりつけてあるもの、中心の小孔はほとんどあ

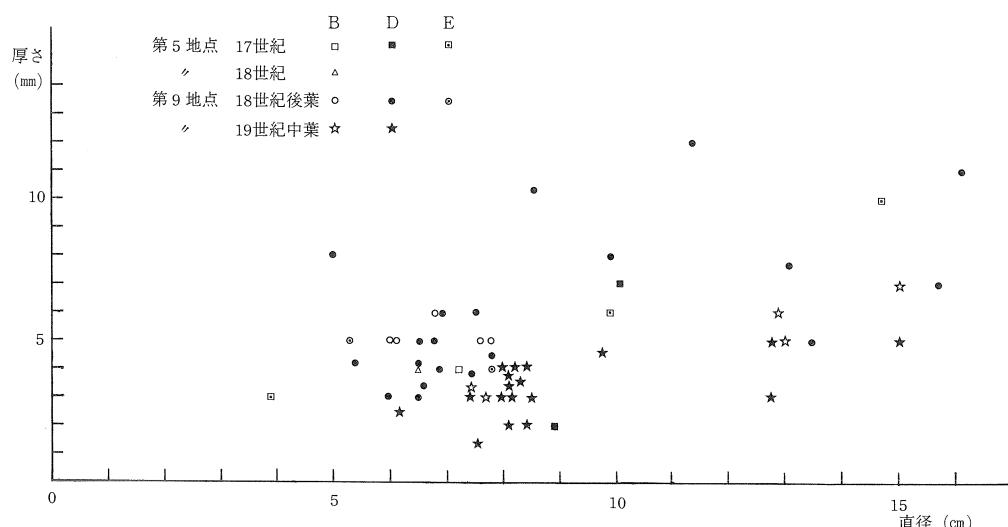


図122 仙台城跡出土円板状木製品の法量分布

Fig. 122 A scatter diagram about wooden implements shaped thin round board from Sendai Castle

るが、まれにないものもある、C—中心一ヶ所と周縁部に多数の小孔があけられるもの、D—中心に小孔のみが認められるもの、E—何の加工も認められないもの、が認められる。

Aは第9地点16号土坑から2点の出土がある。直径8.5~8.6cm、厚み0.6~0.7cmのものである。

Bは第9地点16号土坑・1号池で多く認められ、第5地点にもⅡa期（元禄年間）の出土例（図121-3）がある。直径は6.0~15.0cmの多様なものがある。

Cは第6地点で1点、直径9.5cmのものが出土しているのみである。

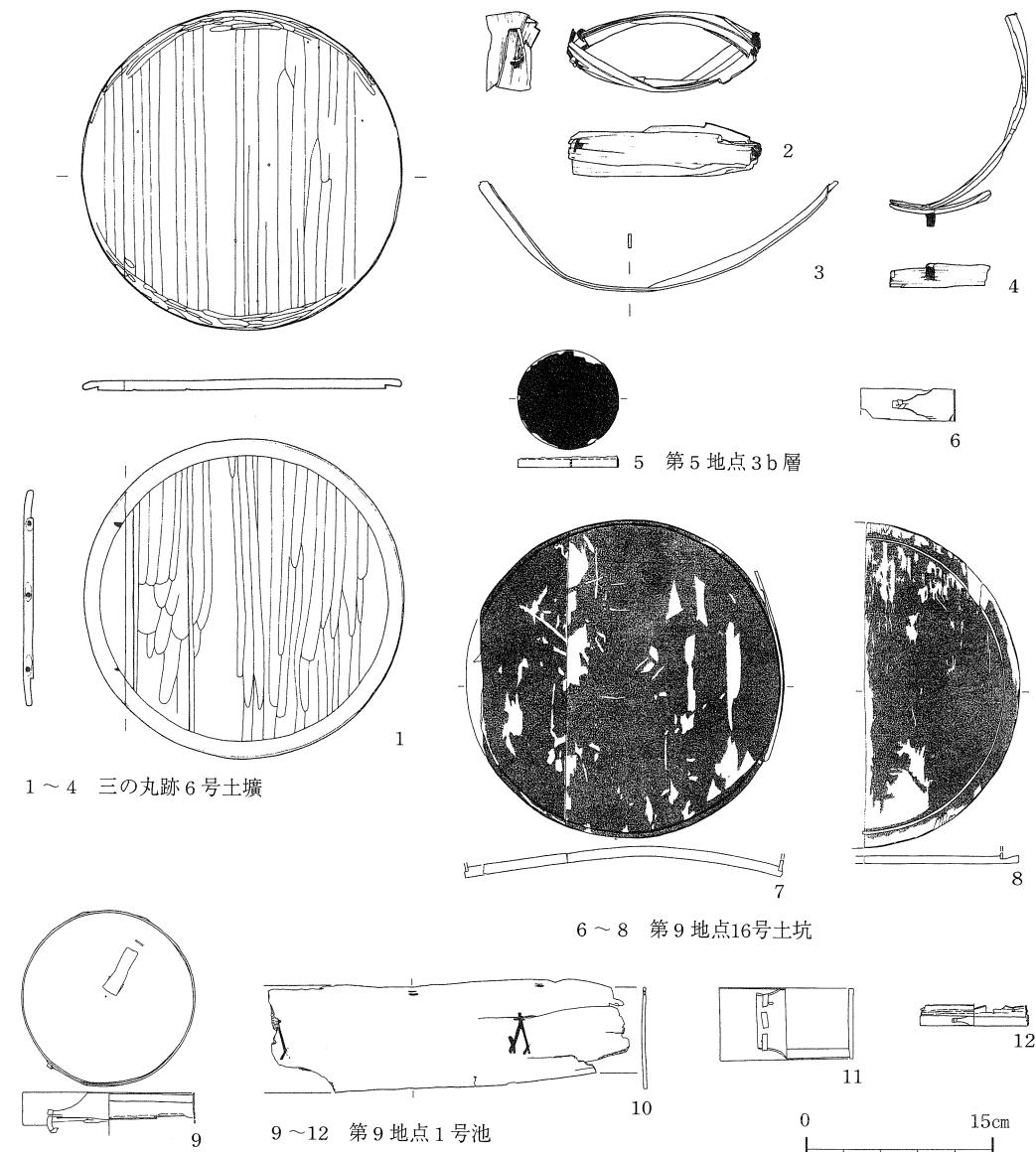


図123 仙台城跡出土曲物

Fig. 123 Round vessels shaped by bending and securing a thin sheet of cypress wood from Sendai Castle

Dは第9地点16号土坑・1号池で多く認められる。直径は5.0～15.0cmのものがある。

Eは第4地点の17世紀初頭～中葉の層と第5・9地点で少量出土している。直径3.9～14.7cmのものがみられる。

図122はこれらの直径と厚みの関係をプロットしたものである。

Bは直径6～8cm、13cm前後、15cmの3ヶ所に分布する。時期的にみると、元禄期・18世紀後葉には6～8cmのものしかないが、19世紀中葉になると13・15cmのものがみられる。

Dは直径5～9cm、10cm前後、13cm前後、15～16cmの4ヶ所に分布しており、時期的にみると、特に径の小さいものでは、元禄期から18世紀後葉にはより小さい方に分布し、厚みにもばらつきが大きいのに対し、19世紀中葉には径はより大きい方、厚みは薄い方に分布し、ばらつきが小さくなっている。より径の大きいグループについても19世紀中葉のものが薄くなり、数値のばらつきが小さくなる傾向が認められる。

これらは桶・樽の天板・底板としては薄すぎると思われ、容器状になるとすれば提灯や三の丸跡で想定されているような柄杓など曲物に使われたものであろう。B・D類の中央に認められる小孔は、円板に成形する際のコンパスの跡の可能性が高く、特にこれが用途に関係するものではないと考えられる。曲物として残存した図123-9の天板には中心に小孔があり、小孔があっても差し支えなかったことがわかる。したがってD類とE類とは、製作技法からみると異なるものかもしれないが、機能的には同等のものとみなしてよいであろう。C類の中心の小孔はB・D類に比して大きく、この孔に機能的意味があった可能性がある。

B類では、特徴的に認められるくくりつけられた樹皮が何のためのものかが問題である。先述の図123-9にも樹皮がくくりつけられているが、この場合は大きな輪を外側に作り出すように、円板には2ヶ所でつけられている点で異なっており、同様のものとすることはできない。図123-9のこの樹皮の意味についても、つまみとするには位置が中心でないことが実用的ではないように思われ、検討を要する。なおさらB類のようなあり方については良好な類例をさがすことが必要である。

側面に着目した場合、木ないし竹の釘が差し込まれているA類は、側板と組み合わされていたことが確実であろう。B・D・E類では側面に小さな段差をもつものや傾斜をもつものも認められ、前者は図123-12のように端部にタガ状のものが巻き付けられ、側板が段差をもって二重になるような組合せ方、後者は図123-11のような組合せ方が想定される。C類は円板が側板にかぶさるような組合せ方をしたものであろうか。

② 桶・樽類

桶・樽の天板・底板・側板と考えられるものは、大部分が第9地点1号池と16号土坑からの出土例である。第5地点ではI a期の3 b層、元禄期の盛土と遺構から少量出土している。

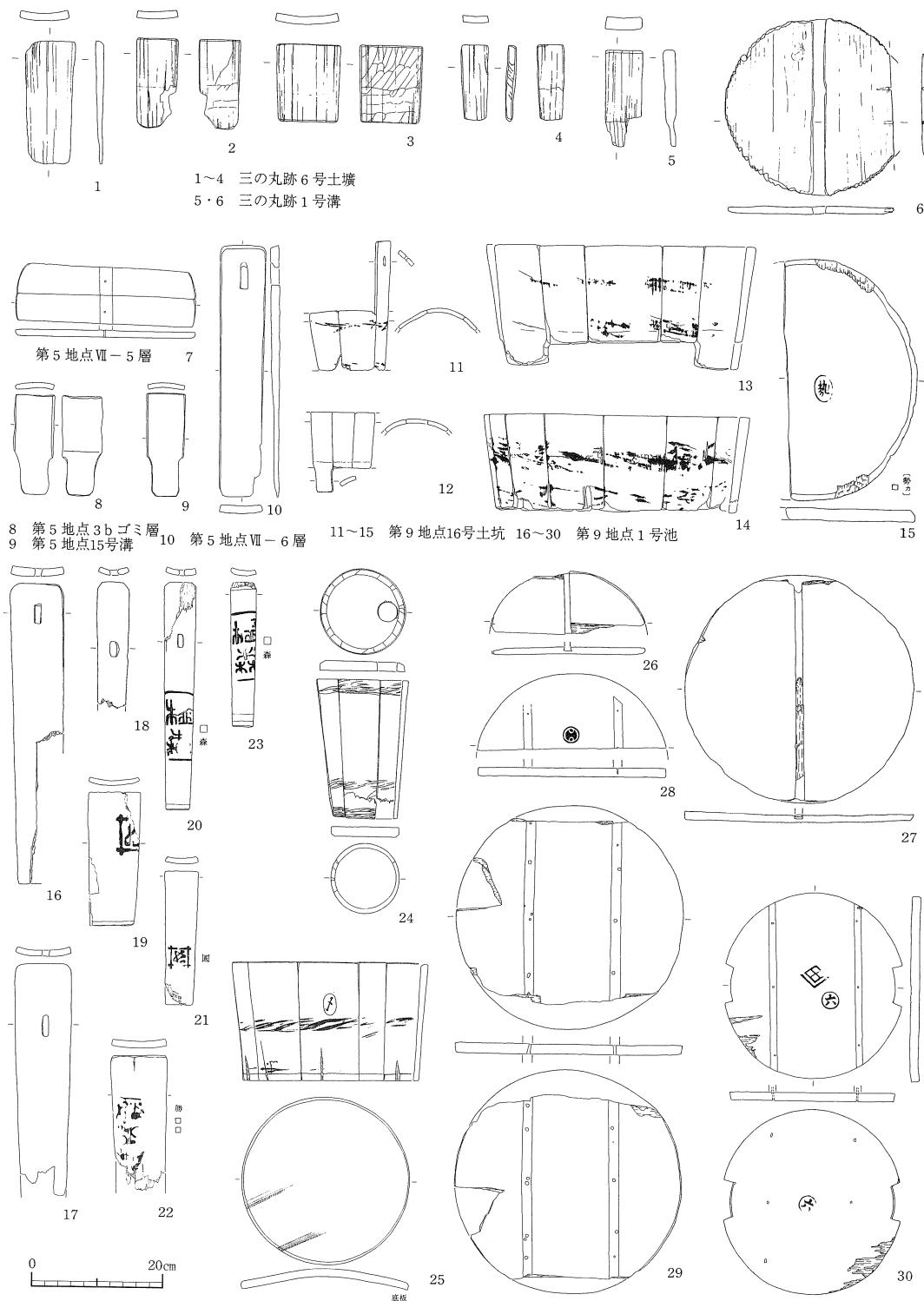


図124 仙台城跡出土桶・樽類(1)

Fig. 124 Troughs and barrels from Sendai Castle(1)

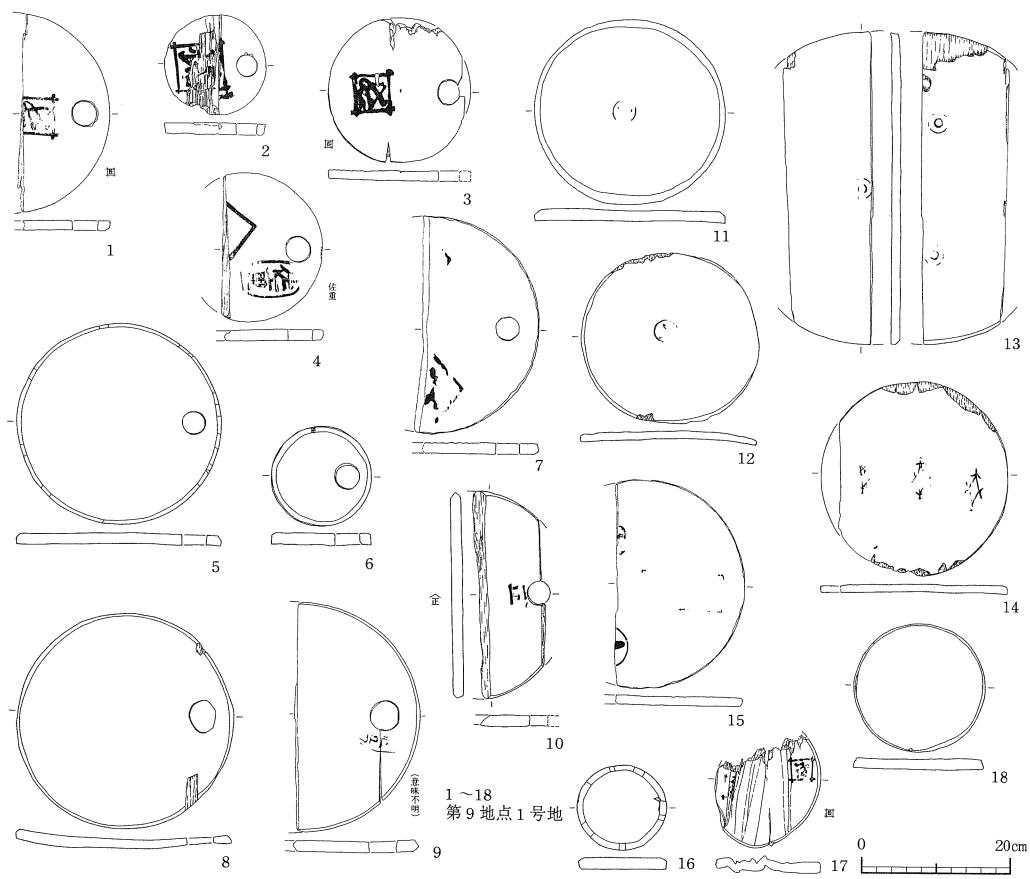


図125 仙台城跡出土桶・樽類(2)

Fig. 125 Troughs and barrels from Sendai Castle(2)

第5地点出土の17世紀代の側板の例は、直径は復元できないが、横木をわたす持ち手部分をもつもの、下半を狭めて足状の部分をつくりだすものと考えられる（図124－8～10）。

18世紀後葉の第9地点16号土坑からは、ある程度形態を復元できる図124－11～14が出土している。13・14は口径40cmをこすもので、前者は足がつかないが、後者は足がつけられる。

19世紀中葉の第9地点1号池からは、形態が復元できたものとして図124－24・25がある。

天板・底板の径には、10～42cmまで多種多様なものが認められる。一枚ないし二枚の板を平行して留めた痕跡のあるものは、持ち手がつけられた開閉式の蓋と考えられる。持ち手の留め方には、ほどにはめ込む方法と、竹ないし木製の釘で留めるものがある。前者は持ち手一枚の場合、後者はどちらの場合にも用いられている。図124－30は二枚の持ち手をもち、周縁の相対する2ヶ所が周縁にそってえぐり取られているものである。図124－29のように両面に痕跡があるものは、補強のため両側につけたものか、単純な蓋とは異なるもの可能性もある。

円形の小孔が周縁より一ヶ所穿たれるものは、小孔に木製栓がさしこまれるもので、液体

を入れたと考えられる。直径は数種類あるが、この類には井桁に「長」の字の焼印をもつものが目立つ（図125）。

19世紀中葉を除いては出土量が少ないことから、時期的な変化は検討できる段階にないが、19世紀中葉には多種多様なものが使用されていたといえ、特に今後焼印の検討などもあわせ行うことでの内容物との対応関係なども明らかにしていけると考えられる。

《引用・参考文献》

- 仙台市教育委員会 1985 『仙台城三の丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992 『東北大学埋蔵文化財調査年報』4・5
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 『東北大学埋蔵文化財調査年報』6
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 『東北大学埋蔵文化財調査年報』8

7. 総括

冒頭にも述べたが、仙台城二の丸跡の考古学的調査は、小規模な調査を除くと、1983年に東北大学埋蔵文化財調査委員会が設置されてから本格的に調査が行われるようになった。調査委員会による仙台城二の丸跡の調査のうち、江戸時代の遺物がまとまって出土している調査の報告については、本年報で報告した第10地点の調査をもって、一応報告の責を果たしたこととなる。複雑に重層する遺構の関係を整理し、膨大な量の遺物を整理・図化し報告書にまとめる作業には、多くの困難があった。予算面も含めて、整理作業体制も不十分な中、一方で発掘調査に追われつつ、報告書刊行まで思いもかけず長い期間を要した。この間、整理・報告が完了した第1地点から第10地点までの調査面積は合計3,353m²、遺物総量はコンテナ1,366箱、報告書において資料を提示した遺物は合計3,063点におよぶ。

この中には、年代が限定できる良好な一括資料も少なくない。近年大規模な調査が行われている江戸の遺跡と比べるとまだ少ないものの、東北地方の近世遺跡の調査としては、もっとも質量とも充実した内容となっており、基準資料の一つとなりうるものである。

本考察編においては、検出遺構と主要な出土遺物の検討を、仙台市教育委員会が実施した三の丸跡の調査による出土資料も含めて、まとめて検討した。詳細は各論考に当たっていただくとして、そのそれぞれについて繰り返すことは控えるが、検出遺構については、かなり高い確度で絵図との対比が可能な状況になってきている。また出土遺物についても、17世紀中葉から後葉の時期など、良好な資料に恵まれず様相が明確でない時期も残ってはいるが、江戸時代初頭から幕末に至るまでの各種遺物の変遷については、その基本的な状況は明らかにし得たものと考える。但し、本考察編では、仙台城出土資料の様相の整理に主眼を置いたため、出土資料そのものの検討にとどまっている部分が大きい。文献史料、絵図等の絵画資料、あるいは民俗資料などを総合して検討を加える作業は、一部を検討し得ただけで、ほとんどは今後の課題として残っている。

検出された遺構と出土遺物の関係を、総合的にとらえることも今後の課題である。それぞれの調査地点によって、場の機能は大きく異なっており、それに応じて出土遺物の内容も変わっている。検出遺構と絵図との対比が進んできたことによって、調査地点がどのような場所であったかについては、かなり明確にできるようになってきた。今後、出土遺物を、それが使われた場所との関係で検討を進めていくことによって、仙台城二の丸跡の理解を深めていくことが求められるであろう。仙台城本丸跡の調査も、現在仙台市教育委員会によって進められている。本丸・二の丸・三の丸の各調査地点で、場の機能を踏まえた比較研究も期待されるところであろう。

繰り返しになるが、仙台城二の丸は二代藩主伊達忠宗によって造営された後、仙台藩の中核

として幕末まで機能し続ける。二代藩主忠宗以降、本丸はほとんど使われなくなつており、三の丸は米蔵として使われる。そのため本丸・三の丸では、出土遺物の時期・内容にも一定の偏りが予想され、各時期の様々な資料をもとに研究を進めていく可能性は、仙台城の中では二の丸が最も有利な位置を占めている。したがつて、仙台城二の丸跡の調査は、仙台城だけにとどまらず、仙台藩全体の考古学的研究の上で、一つの核となりうる。本考察編で示したように、各種遺物の検討によって、17世紀末の元禄年間が、様々な画期となつてゐることが明らかになつてきた。近世初期の漆器の椀に陶磁器の皿という伝統的供膳具の構成が波佐見産の安価な磁器の普及と相馬産陶器の大量流入によって陶磁器中心の構成へと変化することや、在地産の土師質・瓦質土器生産の安定化などである。このような変化は、仙台城という武士階級の城館だけにとどまらず、城下あるいは農村での消費生活にも影響を与えたであろうことは容易に想像され、仙台城での研究をもとに仙台藩全体での変化を追求していく基礎となりうるであろう。このように仙台城だけにとどまらず、仙台城出土資料を核として、様々な性格の遺跡との比較研究に視野を広げていくことが必要である。一つの例として、東北地方の窯業生産の研究との関係で言えば、仙台城二の丸跡の年代の確実な出土資料を基準として、東北地方産陶器の消費地遺跡出土資料での編年が進んだことは、窯業生産地での採集資料に、年代を与えることを可能にした。このことを条件として、窯跡の踏査をもとに、窯業生産地の研究も進められている。窯業生産地での研究が進めば、東北地方における近世窯業生産の展開と製品の流通の研究で大きな進展が期待できるであろう。

また東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、1994年から1995年にかけて、仙台城二の丸の北方に展開していた武家屋敷跡の調査も実施し、現在整理作業が進行している。城館である二の丸跡と武家屋敷跡という、性格の異なる遺跡の間での比較という点も、今後重要な論点となってくるであろう。

主に1980年代以降、近世遺跡の調査は飛躍的に調査例が増加し、近世考古学も長足の進歩を遂げてきたが、その中心を担ってきたのは江戸城府における調査であろう。その一方で、地方の近世遺跡の調査は、近年調査例が増加してきたとはいえ、江戸と比べるとまだ少なく、地方の近世遺跡の調査から、江戸の近世遺跡をとらえ返していく作業が、今後必要とされるであろう。東京では、仙台藩の江戸屋敷の調査も進んでおり、国元の城館と江戸藩邸との比較研究も可能な状況が生まれている。他を抜きん出る世界屈指の人口を有し、政治・経済の中心であった江戸と、地方の比較研究が進めば、近世考古学の内容もより豊かなものとしていくことができるであろう。

これらの課題を要約するならば、仙台城二の丸跡の個別研究から、考古学資料以外の関連する資料を活用した、あるいは仙台城以外の遺跡の成果を活用した、比較研究・総合的研究へと

展開していくことが求められている。このような意味で、仙台城二の丸跡の考古学的研究も、本格的な近世考古学研究への出発点に立ったところと言えよう。

最後になったが、これらの研究を通じて明らかになってきたことを、今後の仙台城およびその関連遺跡の保護に活かしていくことがなによりも重要である。二の丸跡については、絵図との対比が進んだことにより、二の丸のどのような施設が、どこにあったかについては、ほぼ推定できるようになってきた。また、小規模な工事にも綿密に立会調査を忍耐強く積み重ねてきた結果、工事が行われる場所の地下の様相は、かなり予測がつくようになってきている。大学構内での施設整備については、限られた敷地の中で整備事業を行わなければならないという制約があり、あらためて歴史的遺産としての重要性が明らかになった遺跡・遺構に対しても、保護調整を取り得る方策に限界のあるのが常であるが、これまでの調査・研究の成果を活用し、できる限り遺跡の保護に努めていく必要があることは言うまでもない。

課題は多く残っている。そのことは同時に、今後の研究に期待される点が大きいこともある。課題の多さを確認し、今後の研究の進展を期して、総括としておきたい。

付編 文献にみえる仙台城二の丸修造関係記録

凡例

1. 本編は、『伊達治家記録』の一部、『紹山公略記』、『東奥老士夜話』、『仙台名所聞書』から、仙台城とその建築の造営・修築に関わる記録を、二の丸を中心に抜き出したものである。修築に関連するものとして災害による破損の記録、また直接建築物の破損には触れていないでも、建築にも影響を及ぼした可能性があるかなり大きな災害の記録も対象とした。
2. 『伊達治家記録』は、仙台藩の正史として、藩祖政宗の父輝宗の代から最後の藩主慶邦の代に至るまで14代のものが編纂されている。本編も各代を網羅したものが作成できれば望ましいことは言うまでもないが、そのためにはなお多大な時日を要する状況にある。今回収録できたのは、昭和47年～57年に仙台市の宝文堂出版販売株式会社から刊行された24巻に収められている分で、年代的には慶長5（1600）年の築城開始から、享保4（1719）年の4代綱村死去に至るまでである。配列はすべて年代順とし、内容による分類は行っていない。また何代藩主の時代かをわかりやすくするため、藩主の隠居・死去の記録も収録した。
3. 『伊達治家記録』以外には、仙台城とその建築の変遷を考える上で重要と考えられ、既刊の年報でも引用してきたものや、その他管見に触れたものを収録している。各々の出典は以下の通りである。

『紹山公略記』：仙台叢書第8巻（宝文堂）に伊達家譜抜粋として所収のもの。

『東奥老士夜話』：仙台叢書第8巻（宝文堂）所収のもの。

『仙台名所聞書』：仙台叢書第8巻（宝文堂）所収のもの。

4. 検索の便のため、文中修造の対象となった建築名は太字で示した。
5. ほとんどの旧字体は新字体に改めた。
6. 治家記録の場合は、各項の宝文堂刊本における所載巻と頁を、各末尾に（ ）にいれて付した。例えば2巻100頁は（2-100）と表している。治家記録としての本来の巻数ではないので注意されたい。その他の場合は仙台叢書各巻の所載頁を末尾に付した。
7. 時刻については、読者の便宜のため（ ）内に現在の何時にあたるかを付記した。
8. 人名や建築名の（ ）は原文の編者が付したものと今回付したものがあるが、特に区別していない。
9. 原文には訓点を付してあるものもあるが、省略した。

『伊達治家記録』

慶長5（1600）年

11月 最前山岡志摩ヲ上方へ差登サルノ節、宮城郡国分ノ内千代城ヲ再興セラレ、公御居城ニ成シ玉ヒタキ旨、本多佐渡守殿正信ヲ以テ大神君へ仰上ラル処ニ、普請セラルヘキ旨今度志摩下向ノ時仰下サル。（2-500）

12月24日 公、千代城へ御出、御普請御縄張始メアリ。文字ヲ仙台ト改メラル。（2-501）
晚、御普請初ノ御祝儀、御能五番アリ。（2-501）

慶長6（1601）年

1月11日 仙台城御普請始アリ。総奉行後藤孫兵衛信康・川嶋豊前景泰ナリ。御城下地形ノ絵図ヲ以テ諸士等ノ屋敷割仰付ラル。川嶋豊前・金森内膳諱不知是ヲ奉ル。（2-505）

慶長8（1603）年

8月 若君台徳院殿（徳川秀忠）ヨリ、公へ御帰國ノ御暇仰出サレ、仙台へ御下向、仙台城御普請既ニ成就シ、直ニ御城ニ御着、御移徙御祝儀等アリ此等ノ事其日并ニ委事不知。（2-526）

慶長15（1610）年

此年、仙台城大広間御造営成就ス。縦十七間半、横十三間半、北ニ長三間、広二間半、南ニ長七間半、広六間ノ曲屋アリ。（2-554）

慶長16（1611）年

10月28日 巳刻（午前10時）過キ、御領内大地震、津波入ル。御領内ニ於テ千七百八十三人溺死シ、牛馬八十五匹溺死ス。（2-563）

慶長18（1613）年

10月20日 巳刻（午前11時）、御下屋敷へ御出。（2-600）

元和2（1616）年

7月28日 巳下刻（午前11時）大地震、仙台城石壁櫓等悉破損ス。（3-316）

寛永10（1633）年

10月7日 戌上刻（午後7時）大地震、其後又少シ震ル、子刻（午前12時）大ニ震ル。
(4-149)

寛永13（1636）年

5月24日 公（政宗）御薨去、御年七十。（4-239）

寛永15（1638）年

7月16日 古河侍従殿（土井利勝）、若狭侍従殿（酒井忠勝）、阿部豊後守殿（忠秋）、松平伊豆守殿（信綱）ヨリ、連名ノ奉書来ル。是ヨリ前、公（忠宗）ヨリ仙台城山下ニ

御屋敷ヲ構ラレ、御作事被成タキ旨、并御弟兵部殿宗勝へ竹田法印ノ息女縁組仰付
ラレタキ由、仰上ラルニ就テ、御願ノ通ニ仰出サルノ旨ナリ。(後略) (4-431)

8月18日 是ヨリ前、御国奉行中ヨリ今度二丸地割致サセ、作事奉行横田権之助信ヲ差登セ、
御意ヲ伺ヒ奉ル。因テ御指図仰付ラレ、石母田大膳、古内主善、古内伊賀方ヨリ奉
書ヲ以テ申遣ス。(後略) (4-432)

9月4日 仙台ニ於テ、二丸御普請始アリ。(4-433)

10月13日 此日二丸屋形ノ地形取付ト云云。(4-435)

10月14日 此日二丸地祭、龍宝寺法印実雄執行セラル。(4-435)

12月14日 此日二丸屋形焼火間、虎間、御納戸茶道部屋、御鑓間上台所、御風呂屋、大台所、
小姓間、御用間、肴部屋、御鷹部屋、筭用屋、今日マテ段々上棟アリ。右御作事、
若林ノ屋形ヲ解シ用ラルト云云。(4-436) * 筋：そろばんのこと

寛永16（1639）年

2月27日 仙台二丸御座間地鎮。龍宝寺法印実雄執行セラル。(4-441)

3月28日 仙台二丸御座間、御寝所、奥方同御寝所、上棟。(4-441)

6月25日 辰刻（午前8時）二丸へ御移徙、御祝儀アリ、御家老及ヒ近習ノ面々何レモ太刀馬
代献上ス。(4-442)

12月20日 去ル五月廿六日ヨリ今日マテ、御藏、大手御門、大書院、大広間、舞台、御歩行門、
上棟アリ。(4-449)

正保3（1646）年

4月26日 辰刻（午前8時）大地震。(5-282)

4月28日 夜仙台ヨリ飛脚参着。去ル廿六日ノ大地震ニ、御城石壁數十丈頽レ、三階ノ亭櫓三
ツ顛覆シ、其外破損許多ノ由、註進アリ。白石城モ石壁櫓破損スト、云云。
(5-282)

正保4（1647）年

5月19日 （前略）此日河越侍従信綱朝臣、阿部豊後守忠秋朝臣、阿部対馬守重次朝臣ヨリ、
連署ノ書状両通進セラル。去年四月地震ノ節、仙台城所々并ニ白石城所々破損有リ、
御修復ノ御願、絵図ヲ以テ言上ニ就テ御願ノ如ク仰付ラル。書状左ニ載ス。
(5-302)

慶安元（1648）年

9月13日 此日仙台ニ於テ御城普請石壁成就ス。奉行ノ輩及ヒ石壁組足輕等ニ料理ヲ下サル。
(5-332)

慶安2（1649）年

1月6日 此日仙台ニ於テ、御本丸石壁普請始ル。(5-344)

2月28日 此日仙台御本丸石壁成就ス。(5-346)

承応3(1654)年

1月13日 未刻(午後2時)、大地震。(5-439)

万治元(1658)年

7月12日 辰刻(午前8時)公(忠宗)御卒去、御年六十、(後略)(5-522)

寛文8(1668)年

7月21日 此日申下刻(午後5時)仙台大地震、本丸石垣破壊ス。(6-390)

9月12日 去ル七月廿一日仙台大地震、本丸石垣破損ノ書立絵図及修補ノ事上達セラル。御口
状書且先年老中方ノ奉書共ニ公儀使ヲ以テ申次衆マテ達セラル、左ニ載ス絵図不伝。
(後略)(6-391)

10月12日 去ル七月廿一日仙台大地震、本丸石垣破損ニ就テ、修補ノ事、老中方ノ奉書、土屋
但馬守殿第二於テ公儀使ニ授ラル、左ニ載ス。(後略)(6-393)

延宝元(1673)年

12月2日 仙台城石垣普請ノ儀達台聞、無異儀奉書、島田出雲守殿ヨリ公義使ニ授セラル。
(6-541)

延宝3(1675)年

12月15日 辰刻(午前8時)感仙殿御参詣着衣、御一門以下参上。今度新ニ祠堂(因縁殿カ)ヲ
經營セラレ落成シ、(後略)(7-178)

延宝5(1677)年

5月25日 祠堂(因縁殿カ)修覆ニ就キ御神主仮宮へ移サセラル、(略)(7-428)

7月朔日 祠堂修覆成ル、酉上剗(午後5時)仮宮ヨリ移サセラル御参詣着袴、御吸物酒茶菓ヲ
供セラル、(後略)(7-437)

延宝6(1678)年

10月9日 去ル八月十七日仙台地震シ、東照宮瑞鳳殿感仙殿及ヒ祠堂破損ス、但木源左衛門久
隆太浪太兵衛ニ命シテ修復セシメ、功成ルニ因テ両人ニ時服各二領ヲ賜フ。
(8-178)

天和元(1681)年

8月朔日 祠堂修造ニ依テ御神主仮殿ニ移サル、酉刻(午後6時)祠堂へ御参麻上下給事者如例。
(9-251)

8月19日 祠堂修造御神主檟新造成リ今日遷シ奉ルニ就テ檟御覽ノタメ未上刻(午後1時)祠
堂御参麻上下、(後略)(9-263) * 檟(とく)：ふたのある箱あるいは棺のこと

9月22日 二丸新馬場馬御覽ノ座敷落成ニ因テ御出御膳^{二汁五鉢}、(後略) (9-285)

11月26日 今朝馬場ノ囲ニ於テ正則朝臣進覽口切ノ茶並肴賞味セラル、(後略) (9-314)

天和3 (1683) 年

閏5月22日 本丸修造成就ニ依テ御登覽、小役人ノ輩沢御門ノ外ニ於テ拝謁。(9-493)

8月27日 明日城中愛宕社遷宮ニ就テ、今夕ヨリ齋戒。(10-190)

8月28日 今朝愛宕遷座月耕和尚登城読經、將監殿柴田中務遠藤内匠佐々伊賀富田壱岐富塚長
門上郡山九右衛門吉内造酒祐片倉三之助等数輩拝礼。(10-190)

9月2日 辰刻(午前7時) 於万善堂^{祠堂ノ外別ニ屋形ニ属シ造営ス}満勝寺殿月忌御祭如例。(10-191)

10月5日 今朝丑刻(午前2時) ヨリ卯刻(午前6時)ニ及テ作事小屋焼亡。(10-201)

貞享2 (1685) 年

12月7日 辰刻(午前7時) 稲荷熊野弁才天三社遷宮ニ就テ裏門ヨリ御出^{數斗目}、御拝礼即御帰。
(10-456)

貞享4 (1687) 年

5月27日 御座間ノ囲普請初メニ就テ馬場屋敷へ御出、(後略) (11-190)

6月朔日 去ル廿七日御小座普請地鎮斬立ノ御祝儀調済ノ由、高泉筑後但木惣左衛門言上。
(11-193)

6月6日 西刻(午後6時) 馬御覽所ヨリ御座間ニ入セラル。(11-200)

元禄元 (1688) 年

8月13日 仙台城二丸御寝所屋根葺葺ニスヘキ由依御意屋根成リノ形入御覽、差下シ作事奉行
ニ奉命ノ由大町九郎上達。(11-475)

8月25日 仙台城二丸御寝所地鎮斬立礎小納戸風呂屋手付始日限ノ儀大町清九郎ニ命セラレ、
同役へ申遣シ龍宝寺へ問合書立ノ内去十三日吉日ニ就テ御寝所地鎮龍宝寺奥祐法印
六供伴ノ僧十二人召列卯刻(午前6時) ヨリ巳刻(午前10時)迄執行、斬立礎調済
并小納戸風呂屋手付始同日事調フ、松林仲左衛門本名九左衛門野村四郎右衛門以下
諸役人出仕首尾好調済ノ旨言上。(11-483)

9月18日 去ル十三日仙台二丸寝殿柱立上棟調済ノ旨上達。(12-105)

9月29日 於御国許旗本足輕ノ屋敷川内へ移シ居シムヘキ旨、命ニ依テ川内ニ於テ屋敷敷六十
八区割リ与ルノ旨上達。(12-109)

元禄3 (1690) 年

9月9日 新御寝所造作、来ル十一日ヨリ取付シムヘキ由、出入司へ成田即之充ヲ以テ仰出サ
ル。(14-362)

9月11日 巳刻(午前10時) 御寝所造作始ル。(14-364)

- 9月22日 今朝御普請木造初鋤初アリ。(14-380)
今朝卯刻(午前6時)木造始、辰上刻(午前7時)鋤初首尾好調済ノ旨上野蔵人上達ス。(14-381)
- 10月22日 辰刻(午前8時)御休息所安鎮(後略)(14-409)
申刻(午後4時)新造ノ御休息所へ御移徙(後略)(14-410)
- 10月25日 (前略)御座間鋤立ノ吉辰ヲ撰シメラル、地鎮ニ就テ龍宝寺登城、未刻(午後2時)地鎮始リ申刻(午後4時)調済。(14-416)
- 10月28日 奥方ノ家屋上棟調済ノ由上達。(14-417)
- 11月11日 辰刻(午前8時)御持仏堂(万善堂)木造始。(14-428)
- 11月13日 辰刻(午前8時)御持仏堂鋤初アリ。(14-430)
- 11月16日 辰刻(午前8時)御持仏堂地鎮龍宝寺執行、(後略)(14-432)
- 11月26日 御堂御仮殿成就ノ旨、出入司上達。(14-439)
- 12月13日 卯刻(午前6時)御座間御鋤初アリ。(14-451)
- 12月18日 奥方作事出来ニ就キ安鎮、(後略)(14-458)
- 12月27日 奥方安鎮龍宝寺執行、(後略)(14-467)
- 元禄4(1691)年
- 1月13日 辰上刻(午前7時)御座間地鎮。(15-155)
- 1月18日 御座間上棟、(後略)(15-161)
- 1月22日 奥方造営成就ニ因テ、(後略)(15-164)
- 1月25日 今日万善堂柱建調済ノ由、出入司上達。(15-166)
- 1月26日 今日新造ノ御座間上棟ト云云。(15-166)
- 3月9日 未刻(午後2時)樂寿園ニ御出、梅花ヲ賞セラレ於園中行厨ヲ開カル、(後略)(15-204)
- 3月26日 数寄屋造畢ノ賀儀、(後略)(15-216)
- 4月朔日 未上刻(午後1時)新造ノ御座間安鎮、(後略)(15-222)
- 4月26日 万善堂御安鎮、(後略)(15-244)
- 4月27日 今日御堂御遷座無礙関ヨリ、万善堂ニ入セラレ、仏前御焼香御拝御読経、畢テ御退出、仮御堂ヨリ新御堂ニ仏像祖像等御遷座(後略)(15-245)
- 4月晦日 新造ノ囲開アリ、(後略)(15-250)
- 5月25日 城中破損ノ所見分津田民部ニ命セラル、内蔵奉命。(15-276)
- 6月6日 本丸二丸普請所民部見分、且白石城破損ノ所二宮平内ヲ見分遣サル。(15-285)
- 元禄5(1692)年

4月16日 仙台城二丸上大所安鎮ノ吉辰（後略）（16—152）

9月23日 （前略）川内ノ茶屋普請場ニ御出、（後略）（16—242）

11月14日 申刻（午後4時）茶屋ニ御出、茶屋ノ御開アリ、（後略）（16—273）

元禄7（1694）年

4月27日 阿部豊後守殿へ浅井織部使者トシテ、仙台城先年ヨリ段々破損ノ所有之ト雖モ、奉書出サル儀ナレハ上聞ニモ達セラル義与ト思サレ、度々上達ノ儀憚ラレ扣ラル処、今度止置カレ難キ所有ルニ就テ上達セラル、此序残所言上セラル義ハ、箇條多ク紛敷ク且又普請モ大分ニ因テ、先此分願ハセラレ、此外ハ来年与來々年言上セラレ度思サル、尤ニ於テハ大橋石垣崩ル所間数等委ク改メラレ、追テ国元ヨリ伺ルヘシ、要害屋敷ノ儀、去冬ヨリ書付置ルト雖モ、豊後守殿御成以前取込ヲ察セラレ扣ヘラル由仰遣サル、且豊後守殿用人ヘ、織部告達ス、（17—232）

仙台城普請白石城普請、各御伺書要害屋敷并大筒稽古ノ儀ニ就テ、御書付八通織部相達ス、豊後守殿返答、廿日過ニ発行セラレ不苦間、緩々仕廻セラルヘシ
(17—232)

10月3日 城中新造ノ藏ヘ、御宝物等入始ニ就キ、於二丸良覚院祈祷ス。（17—419）

堀越右衛門屋敷前橋ヲ濱橋ト号シ、川向ノ坂ヲ新坂、大工橋ヲ中瀬橋ト名附ラル。
(17—419)

12月朔日 江府第御留守居ヨリ上達ノ趣、仙台城及ヒ白石城舟岡要害屋鋪御普請御伺ヒノ絵図、并阿部豊後守殿ヘノ御書、今度以定供差登サル、公儀使豊後守殿ヘ持参ス、熟覽重テ挨拶セラルヘシト云云。（17—470）

12月11日 仙台城并白石城舟岡要害屋敷普請御窺調済、老中奉書及覚書写左ニ載之。（後略）
(17—478)

元禄8（1695）年

6月23日 阿部豊後守殿ヘ、仙台城普請且白石城石垣修補等成就ノ事告達、使者公儀使。
(18—243)

元禄9（1696）年

6月29日 御用間造作斬始地形初アリ。（18—491）

11月14日 寅刻（午前4時）数寄屋屋敷地鎮安宅ノ祈祷千手院執行、作事奉行伺公。（19—180）
御出ノ刻数寄屋普請落成ニ就テ御出、（後略）（19—180）

12月29日 今晨内御対面所上段間成就安鎮儀法アリ、千手院修行此節近習等麻上下。（19—213）

元禄11（1698）年

1月27日 仙台二丸へ輪蔵造ラレ、去ル十八日巳刻（午前10時）鍬初調済ノ旨奉行衆上達。
(20-165)

2月2日 過ル二十三日、仙台二丸輪蔵木造始調済ノ旨奉行衆上達。（20-168）

3月7日 仙台城二丸輪蔵、去月二十六日柱立、同二十八日上棟調済ノ旨上達。（20-198）

6月2日 卯刻（午前6時）輪蔵安鎮供養龍宝寺執行。（20-263）

11月18日 御座間囲ノ繞小座敷直シ落成、御披アリ、（後略）（20-380）

元禄12（1699）年

2月6日 （前略）津田民部要害屋敷本丸詰ノ門外二間二十間ノ土橋如元懸直シ、右橋ノ土手ニ柱ヲ建、土手ヲ崩シ、如元筑ク事、本丸門北脇土手折回長二十二間四尺高七間ヨリ三間四尺ニ至リ崩ルニ就テ、如元筑直ス事、及本丸巽方土手長十七間二尺高六間四尺ヨリ五間五尺ニ至リ崩ルニ就テ、如元筑直ス事、右如願普請スヘキ旨命セラル、奉行衆奉書。（20-469）

元禄13（1700）年

2月18日 仙台奥方普請手斧始并造作、去ル九日調済ノ旨上達。（21-391）

3月10日 （前略）仙台奥方御物置地形始、去月十六日調済ノ旨上達。（21-399）

3月24日 御座間ニ御出、仙台城中愛宕社屋根替ニ就テ、正遷宮ノ御名代奉行衆宿老ノ内、仮遷宮ノ御名代若年寄ノ内、大猷院殿御法事ノ御名代伊達安房殿、（中略）勤ムヘキ旨、奉行衆ニ命セラル。（21-406）

5月25日 城中愛宕社屋根替ニ就テ、仮宮造立作事奉行濱田半九郎、作事本卜其外小役人等出。
(21-443)

6月2日 辰刻（午前8時）奥方御寝所地鎮安鎮ノ祈祷龍宝寺執行、西大條主計及作事奉行以下登城、（後略）（21-448）

御普請落成ノ賀儀、西大條主計ニ御着服（カ）帷ニ領於御前賜之（後略）（21-448）

6月10日 城中愛宕社屋根替ニ就テ、今晚仮遷宮龍宝寺実養法印執行（21-452）
仮遷宮ニ就テ、午上刻（午前11時）ヨリ服（カ）払。（21-452）

6月18日 申刻（午後4時）城中愛宕社正遷宮、及安鎮、龍宝寺執行、（21-457）
遷宮調済ノ旨壹岐披露、正遷宮ニ就テ午刻（正午）ヨリ服（カ）掃。（21-457）

9月28日 奥方造営落成、龍宝寺安鎮箱献上。（21-496）

元禄15（1702）年

6月28日 晩御休息所一畳半敷囲披カルニ就テ、芝多土佐高野主水勝田寿閑ニ茶ヲ賜フ。
(23-124)

元禄16（1703）年

3月22日 巳上刻（午前9時）嗣君御部屋普請場御見分トシテ御出ノ序、（中略）茶屋へ御出、
今日吉辰ニ就テ曹司普請ノ地、御用所并破損方小屋場御見分繩張錆始アリ、（後
略）（23-286）

8月25日（前略）巳刻（午前10時）嗣君（吉村）田村右京大夫殿相携御登城、於白書院如御願
(綱村)御隠居命セラレ、御家督御相違無ク命セラル旨上意ノ段、（後略）（23-372）

享保4（1719）年

6月20日 晓ヨリ尚更重ラセラル、（中略）巳刻（午前10時）眠玉フ如ク（綱村）御逝去、当
君甚夕御哀痛、（後略）（23-382）

『紹山公略記』

文化元（1804）年

6月24日 大雷雨。御国許所々雷落。昼八時（午後2時）御城御座之間へ雷落。雷火大風雨にて。詰之御門之内御殿中不残。御中奥迄御焼失。暮六時（午後7時）鎮る。（2頁）

『東奥老士夜話』

御二の丸御普請之事

一、貞山様御代には。御本丸に被成御座候故。御二の丸には。伊達三河守殿御やしき御座候義
山様御二の丸御取立之刻。三河守殿広間を御用被成。只今の御広間は。則三河守殿広間の由
堀江伝七と申者物語承候。伝七は七十六七にて。十ヶ年已前病死仕候。（87頁）

御西曲輪之事

一、貞山様御代。只今御中奥の所大竹林にて。只今御堀形有之分は。御堀に而御座候。御西様
被成御座候に付。竹被切払御作事御座候。土橋にて二三ヶ所御仕切被成候故。自然と御西館
の堀埋り。只今平地同前に罷成候。（87頁）

『仙台名所聞書』

慶長五年十月二十四日。政宗公名取北目の陣所より。御移はじめて御祖有之翌年正月十一日。
御錆立之御普請始り。同六年二月朔日より五月五日まで。（98頁）

仙台御二の丸御取立は。寛永五年八月より御普請。同六年忠宗公御移。（99頁）

或説に奥州宮城郡国分の内。千代之城再興は。政宗公御在城に被遊度。本田佐渡守殿を以權現
様へ言上仕候処。普請可仕旨被仰付慶長五年十二月二十四日御繩張始。仙台と改号遊され。翌
年より御普請。同七年成就仕候。（99頁）

REPORT
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF
TOHOKU UNIVERSITY

vol. 9 February 1998

The Archaeological Research Center
on the Campus, Tohoku University
Katahiracho, Aoba ward, Sendai 980-8577 JAPAN

Summary

Introduction

On the campus of Tohoku University, a lot of archaeological sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. Aobayama campus includes remarkable Paleolithic sites, some are dated to more than 100,000 years ago. In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. According to legal procedures, the commission for research, which was organized in 1983, carried out many salvage excavations for 11 years. It was reorganized into the Center in 1994 to improve conditions of research. The Center mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on the campus, analyzes those records and remains and publishes excavation reports. Conservation and exhibition of archaeological heritage, studies about structure of sites, artifacts, techniques of excavation and preservation are also important duties.

This is a report of two sites (i.e., NM10, TM2-3) excavated by the Commission of Buried Cultural Properties on Campus in 1991-92. The study of archaeological structures and materials found at the secondary citadel of Sendai Castle is also reported in this book. List of historic records about construction and mending of structures at the secondary citadel of Sendai Castle was inserted at the end of this book.

NM10 site (Loc. 10 of *Ninomaru*, i.e., the secondary citadel of Sendai Castle)

This site corresponds to the area sandwiched in between the center of the secondary citadel

and the rear gate of that. At this site, five trenches were excavated as a previous investigation prior to construction of outdoor lamps along Nakazen street. Various features such as the stone floor, a ditch lined with stone blocks and pits, and many artifacts were found in trench 2. By comparing the stone floor with the historical illustrations of Sendai Castle, it was revealed that the feature corresponds to the inner garden enclosed by corridors. Various artifacts from the landfill covering the stone floor are a good assemblage belonging to the time from the middle 19th century to 1882 when almost all of the structures of *Ninomaru* was lost in fire.

TM2 and TM3 sites (i.e., loc.2 and loc.3 of Asinokuchi site at Tomizawa campus)

A few features that could not be defined its dating and materials such as Jomon potteries, stone tools and Haji wares were found by two trial excavations enforced in 1989 and 1991. In the northern extremity of investigation area, the peat layer containing a lot of plants and insects were found under the surface of occupation from Jomon period on with sedimentary layer that was 1-1.5 meters thick between. The peat layer was dated to $33,290 \pm 2,080$ y.B.P. by carbon-14 dating. It is a matter for regret that we have found no artifacts from the peat layer.

Result of archaeological researches at *Ninomaru* since 1983

The main citadel of Sendai Castle was built in A.D.1600 by *Masamune DATE*, the first *daimyo* of *Sendai-han* (feudal clan comprising a governmental organization in *Edo* period) appointed by the *TOKUGAWA* shogunate. The main citadel is known today as the ruin of Aobajo which is located on a hill 120m above sea level. It was a strategic location because its eastern and southern boundaries were guarded by cliffs of 70m high.

However, when the age of war in Japan was over, the primary citadel on the high hill became useless, and in 1638, *Tadamune DATE*, the second *daimyo*, built a secondary citadel on a lower terrace which had been used as the house of *Muneyasu DATE* (4th son of *Masamune DATE*).

The *Ninomaru* had practically been the center of the government of *Sendai-han* for some 250 years until the *Meiji* Restoration. Although it was destroyed by earthquakes and fires a couple of times, it was quickly reconstructed each time.

In 1868, the *Tokugawa* shogunate was replaced by the new government of the Emperor (the *Edo* period was over and the *Meiji* period had begun). Japan put an end to 200 years of national isolation, and western culture was imported rapidly. Prefectures were established

instead of feudal clans, and the *DATE* family rule was over. In 1871, the *Ninomaru* was occupied by the Japanese Imperial army which had been newly organized in western style. In 1882, almost all of the structures of *Ninomaru* were lost in a fire, and its brilliant history was over.

The site continued to be occupied by the Imperial army, until the American army occupied it after World War II. The site area became the Tohoku University campus in 1957 and an organized excavation began in 1983. So far, 15 locations at *Ninomaru* and 4 locations at *samurai* residence beside north part of *Ninomaru* have been excavated by 1997.

Those researches brought us a lot of new knowledge for Pre-Modern era as follows.

① Archaeological features dating before 1638 when structures of *Ninomaru* began to be built were found at NM4, NM5 and NM9. NM4 and NM9 seemed to have been located at the area which was the northern part of the residence of *Muneyasu DATE* nearby the boundary line. NM5 was located at the inner part of the *Nishi-yashiki*, residence of *Iroha-hime* (the eldest daughter of *Masamune DATE*), where the space was used for a private zone.

② We have excavated several important features such as the gate at NM5 and the building constructed on foundation stones at NM2. The former corresponds to the rear gate on the north line of *Oku*; the private place for *daimyo* and his wives while the latter corresponds to the building located behind the ceremonial hall in the central part of *Ninomaru*. By overlaying the historical illustrated documents upon these features found at NM2 and NM5, we could know that NM9 had been located at the west side of *Daidokoromon*, the north gate of the *Ninomaru*. Now, it is possible to reconstruct the emplacements of structures of *Ninomaru* on the present map precisely.

③ People used wooden bowls with lacquer and ceramic dishes for ordinary table use at Sendai Castle in early *Edo* period. Those assemblage of tableware had been maintained since the late 15th century traditionally in eastern Japan. Ceramics, excavated from *Ninomaru*, belonging to early *Edo* period consist of Chinese Porcelains (many Jingdezhen ware and few Swatow ware) and glazed ceramics such as Karatsu ware, Seto-Mino ware (Sino ware, Oribe ware). As for glazed ceramics, Karatsu ware are more common than Seto-Mino ware except tea utensils at Sendai Castle in early *Edo* period. Research for producing district of glazed ceramics, belonging to early *Edo* period, from sites in Japan revealed that Karatsu ware were excavated more from the northeastern district of Japan than from Tokai or Kanto area. We think Karatsu ware from the northeastern district of Japan had been bought through "Sea of Japan Route"

④ By the end of the 17th century, the medieval tradition for ordinary tableware had been lost.

New ordinary tableware consisting of ceramic dishes and bowls was established in the early 18th century by spread of Hasami ware (cheap porcelains made in Hizen) and Ohbori-souma ware. In the late 18th century Souma ware (Ohbori-souma ware and Ono-souma ware) were used for cheap tableware, Kyoto ware were used for goods of higher grade.

⑤ In the first half of the 19th century, though Ohbori-souma ware were especially numerous and of good varieties, Ono-souma ware decreased rapidly and were superseded by Tsutsumi ware produced in Sendai, a castle town. Seto-Mino and the minor kilns in the northeastern district of Japan, such as Kirigome and Hirashimizu began to supply porcelains. It is possible to say that the variety of shapes and producing districts recognized about ceramics belonging to the 19th century from Sendai Castle is characteristic of ceramics at that time, and is directly linked to diversity in different lifestyles.

⑥ Most of unglazed ceramics from *Ninomaru* are in dish shape. Those dishes were made not by hand but by wheel. They consisted of three groups in size throughout the *Edo* period. On the whole, those dishes have a tendency to become smaller and lower with the change of time. Unglazed dishes outside of which were burnished appeared from the *Genroku* era (1688-1704).

⑦ Salt baking pots (called *Yakishio-tsubo*) made by wheel seem to be local produce. Though there were many kinds of salt baking pots, they were standardized to glass shape from the *Genroku* era. As far as the production of unglazed ceramics, the *Genroku* era was an epoch.

⑧ It was revealed that the round eaves tiles designed with the crest of the Date family had begun to be used at the time period around *Kan-ei* era (1624-1644) when the *Ninomaru* had been built by *Tadamune Date* by the analysis of roof tiles found from NM9.

⑨ Pan tiles which were produced by combining round eaves tiles and flat eaves tiles have appeared by the end of the 17th century at Sendai Castle. At the 18th-19th centuries many kinds of pan tiles were used there.

⑩ Analysis of wooden bowls with lacquer from Miyagi prefecture proved as follows. In early *Edo* period, wooden bowls with lacquer which had kept the medieval style since the 13th century, and those of pre-modern style which seemed to be connected with *Johhouji-wan* existed together in Sendai domain. In middle *Edo* period, wooden bowls with lacquer which had a signature on the inside of pedestal to make additional value increased under the influence of ceramics produced in Kyoto or Hizen. In late *Edo* period, cultivation of Japanese lacquer tree in Sendai domain was slowing down. Lacquerwares belonging to the 19th century from the sites are few.

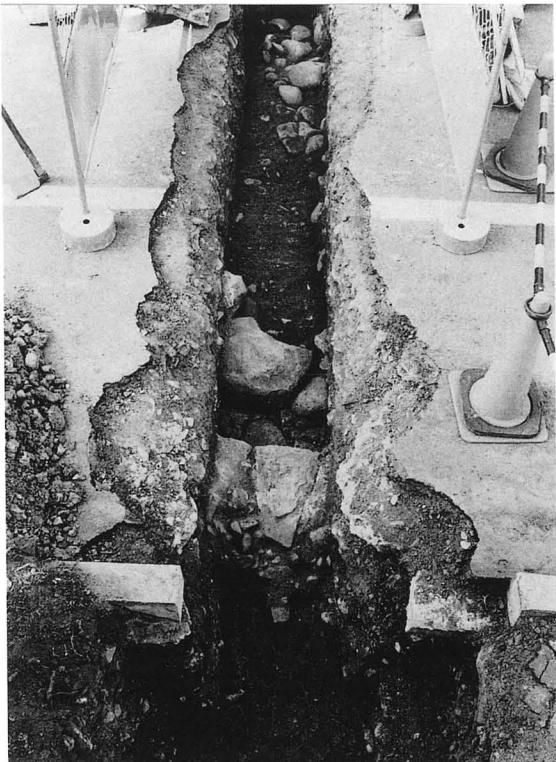
- ⑪ A lot of plain-wood chopsticks and unglazed dishes used as traditional tableware at courtesy banquet room are discovered from the Sendai Castle. Analysis of length of those chopsticks revealed that they became short with the times. Though the traditional courtesy of banquet continued ceremonial regulations seems to have been reduced in the Sendai Castle.
- ⑫ Through the study of clogs excavated from the Sendai Castle, it was revealed that they and clogs found at the Edo site have changed in the same way.
- ⑬ By analysis of round-shaped wooden implements excavated from Sendai Castle, it was revealed that they had been standardized from the 18th century to the 19th century.
- ⑭ Though we can't know the temporal change of troughs and barrels, the variety of them shows functional differentiation of these containers in the 19th century.

Conclusion

The archaeological study of a local castle town, Sendai, was promoted as a result of our previous investigations prior to construction works at the Sendai Castle.

The results have been very productive. Although there is a lot of information available in the archives, the results of excavation make many aspects of the material culture actually visible, and form in this way an autonomous source of visual representation. The field of Pre-Modern Archaeology is, however, still in its infancy and we anticipate that when the study of the excavated remains from Sendai and Edo city is coupled with existing documentary materials, it is possible to understand the history of relation between the provinces and the capital city.

写 真 図 版



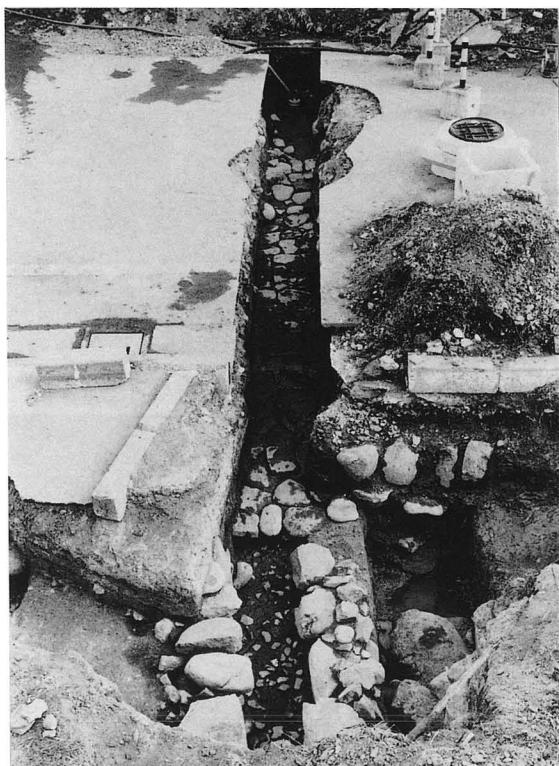
1. 1 A 区全景（東から）



2. 1 A 区石組溝（北から）



3. 1 A 区南壁セクション（北から）



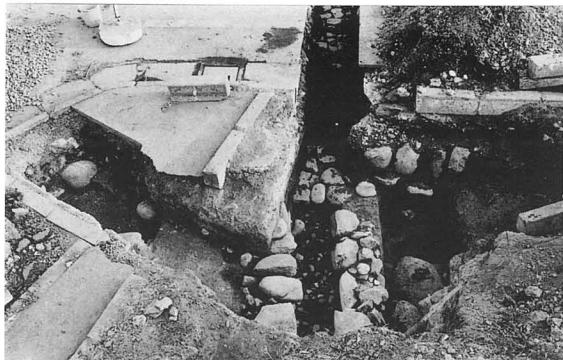
4. 2 区全景（北から）



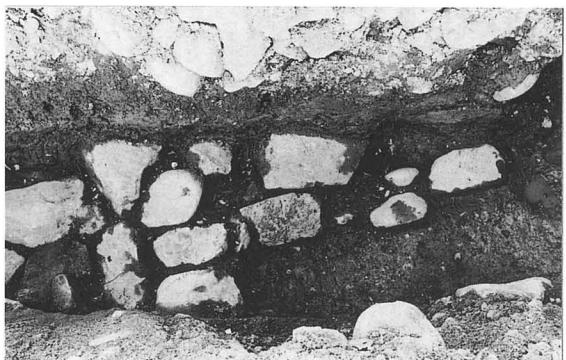
5. 2 区全景（南から）

図版 1 仙台城二の丸跡第10地点 1区・2区全景・遺構

Pl. 1 Views, feature and cross section of Grid 1, 2 at NM10



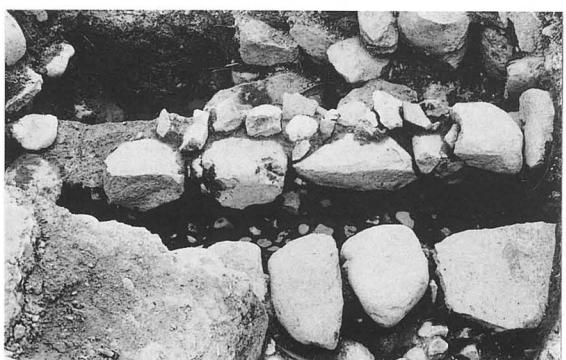
1. 2B～2D区全景（北から）



2. 2A区石敷遺構南端（西から）



3. 2B区石組溝（西から）



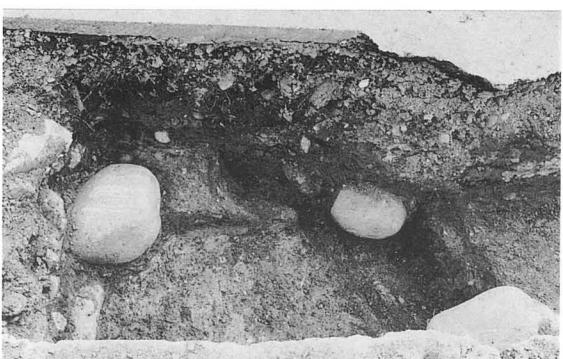
4. 2B区石組溝（東から）



5. 2B区石組溝の側石抜き取り状況（北から）



6. 2C区全景（北から）



7. 2D区全景（北から）



8. 2B区北壁セクション（南から）

図版2 仙台城二の丸跡第10地点2区遺構

Pl. 2 Features and cross section of Grid 2 at NM10



1. 2 B 区西壁セクション（東から）



2. 2 A 区西壁セクション（東から）



3. 2 A 区北半遺物出土状況（東から）



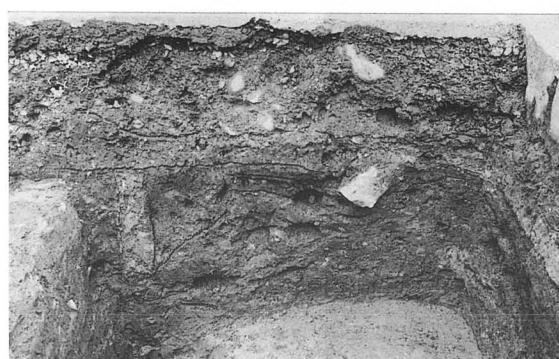
4. 2 B 区遺物出土状況（東から）



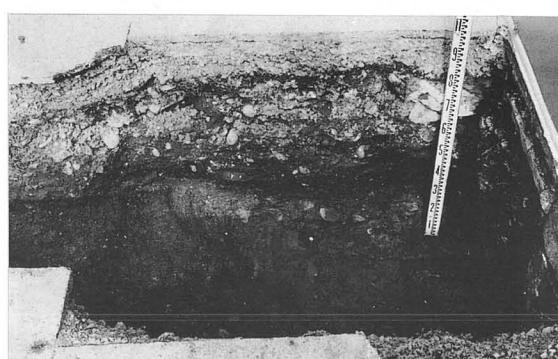
5. 3 区全景（東から）



6. 4 区全景（南から）



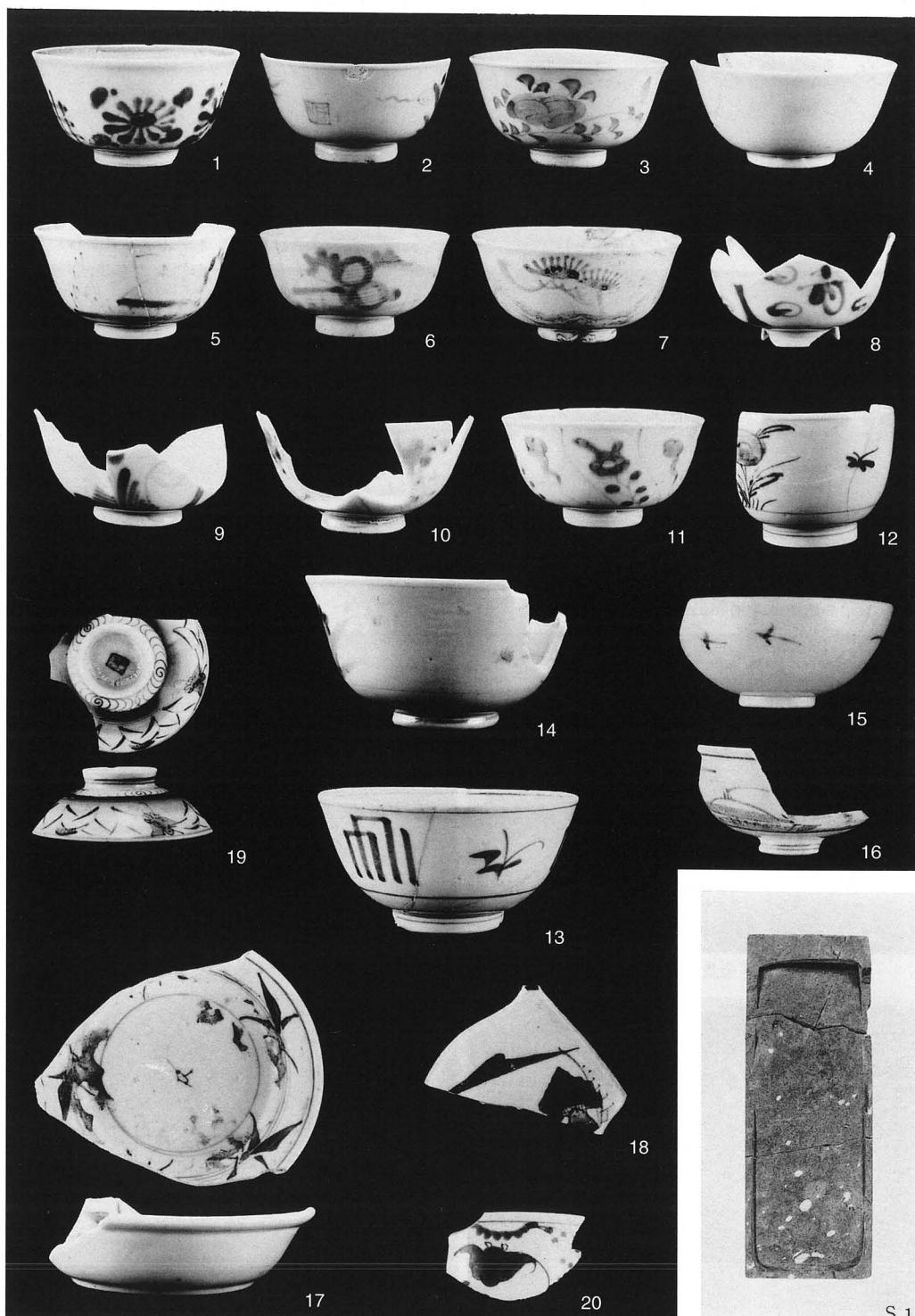
7. 4 区北壁セクション（南から）



8. 5 区全景（南から）

図版3 仙台城二の丸跡第10地点 2～5区全景・遺構

Pl. 3 Views, features and cross sections of Grid 2, 3, 4 and 5 at NM10



図版4 仙台城二の丸跡第10地点出土磁器

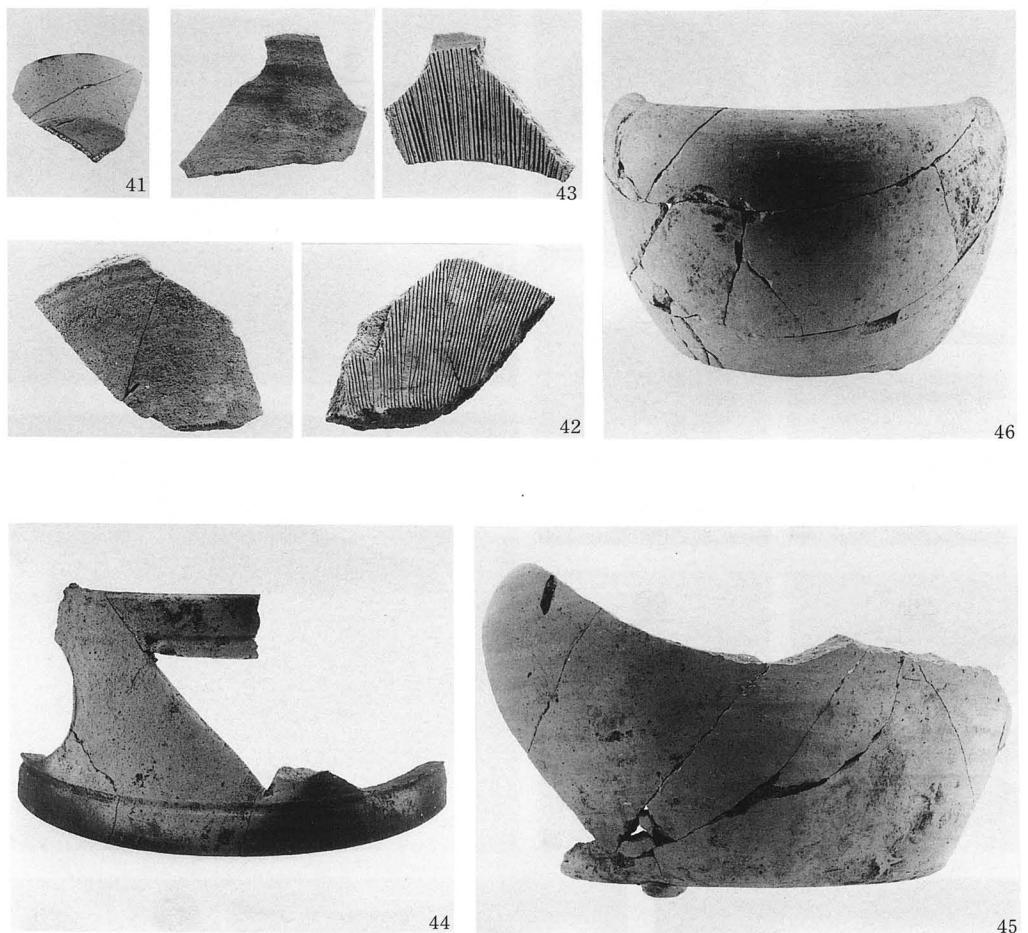
Pl. 4 Porcelains from NM10



図版5 仙台城二の丸跡第10地点出土陶器

Pl. 5 Glazed ceramics from NM10

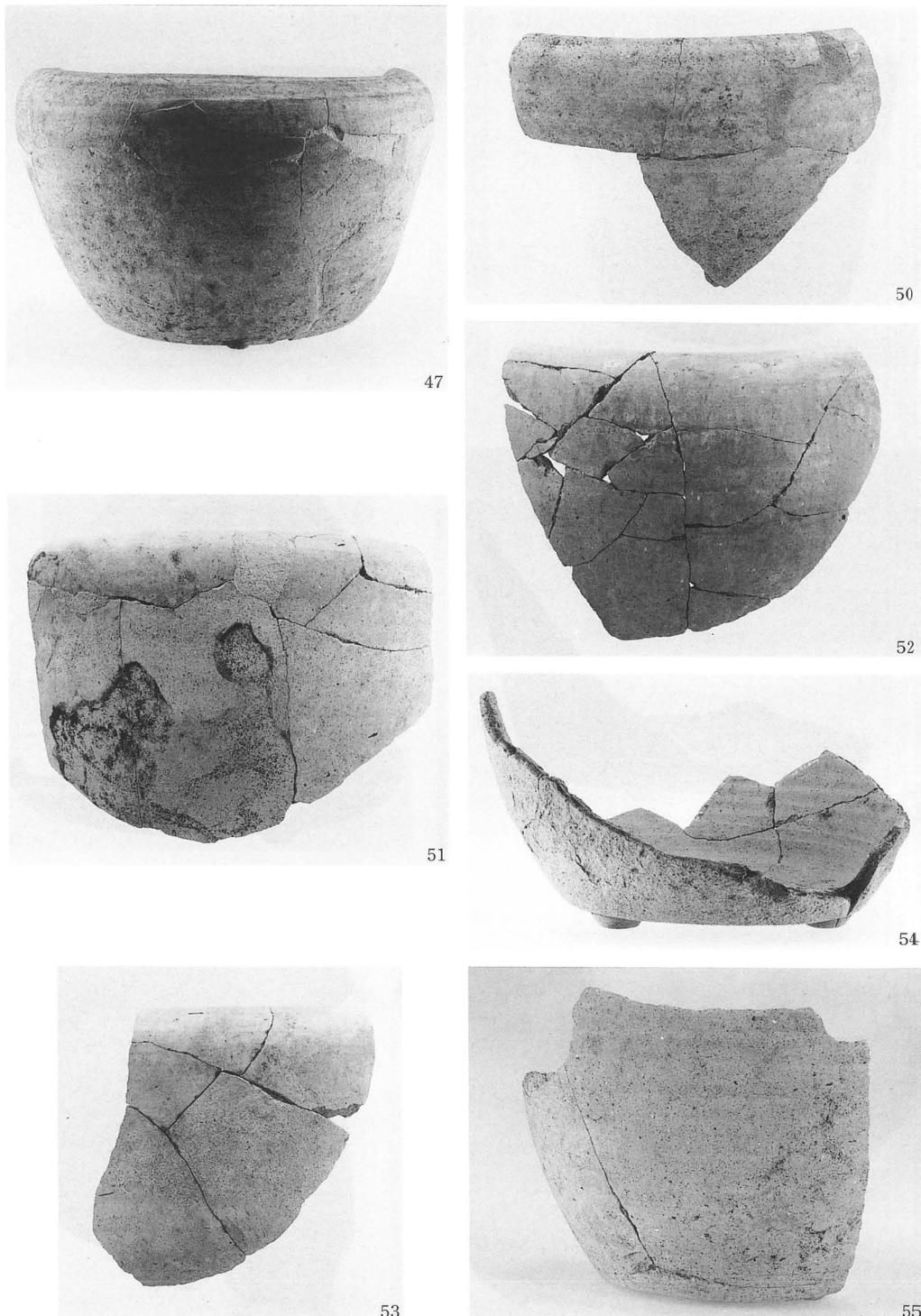
S = 1 : 3



図版6 仙台城二の丸跡第10地点出土土師質土器(1)

Pl. 6 Ceramics from NM10(1)

S = 1 : 4



図版 7 仙台城二の丸跡第10地点出土土師質土器(2)

Pl. 7 Ceramics from NM10(2)

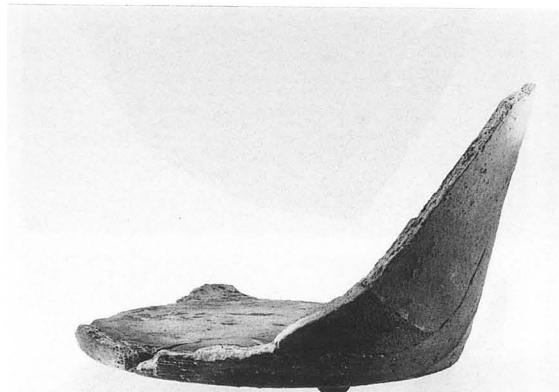
S = 1 : 4



61



62



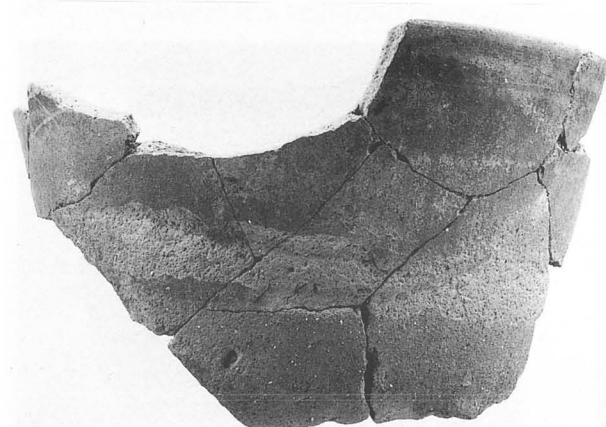
63



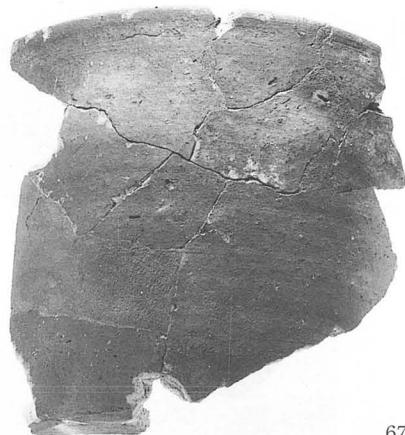
66



65



64

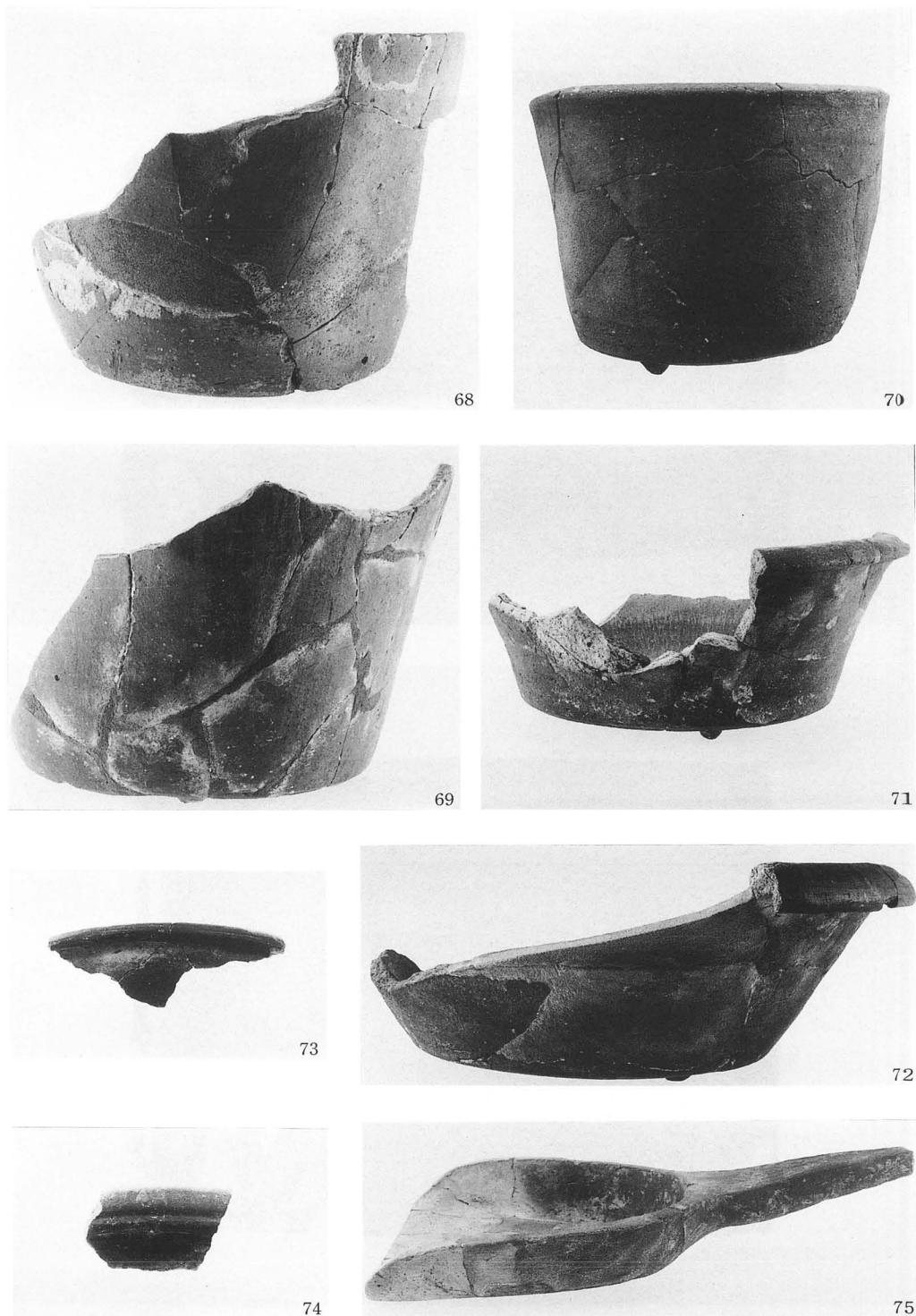


67

図版8 仙台城二の丸跡第10地点出土瓦質土器(1)

Pl. 8 Fumed ceramics from NM10(1)

 $S = 1 : 4$



図版9 仙台城二の丸跡第10地点出土瓦質土器(2)

Pl. 9 Fumed ceramics from NM10(2)

S = 1 : 4



1



2

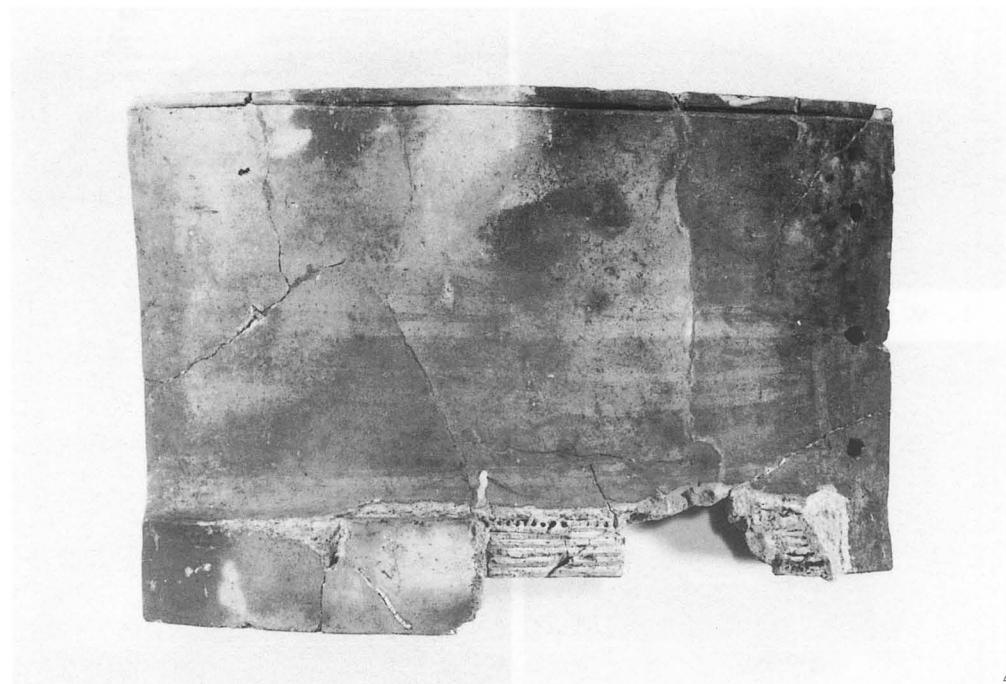
図版10 仙台城二の丸跡第10地点出土瓦(1)

S = 1 : 5

Pl. 10 Roof tiles from NM10(1)



3



4

図版11 仙台城二の丸跡第10地点出土瓦(2)

Pl. 11 Roof tiles from NM10(2)

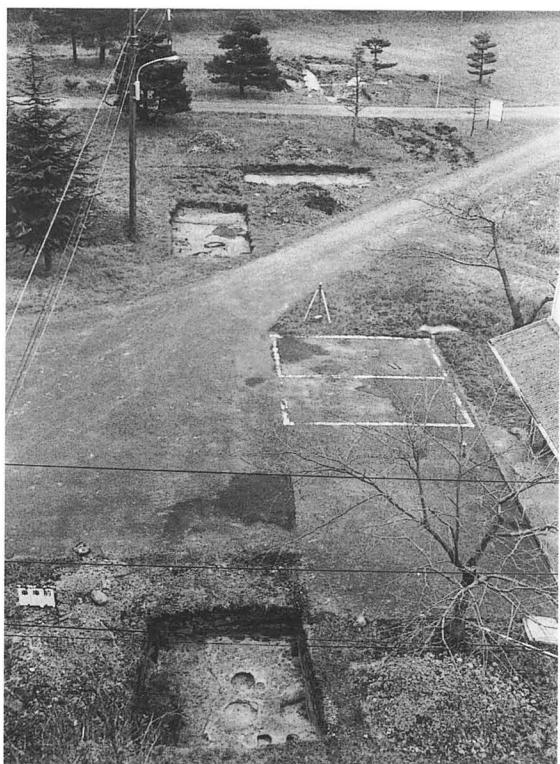
S = 1 : 5



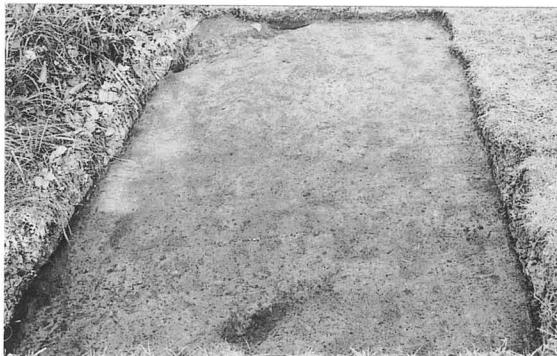
1. AC~AI列付近遠景（北から）



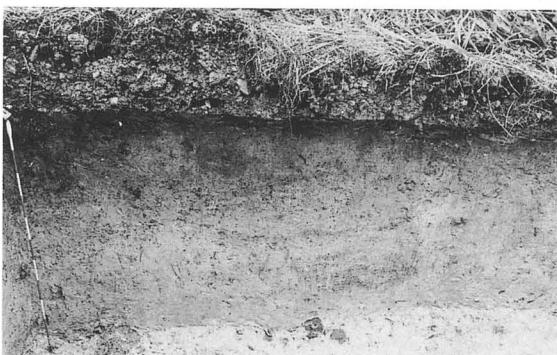
2. AS列以西遠景（北東から）



3. AR~BA列付近遠景（北から）



4. AC·D-6·7区全景（西から）



5. AD-6区北壁セクション（南から）



6. AI-7~17区全景（北から）

図版12 芦ノ口遺跡第2次調査調査状況(1)

Pl. 12 Views and cross section of Grid AC·D-6·7 and AI-7~17 at TM2



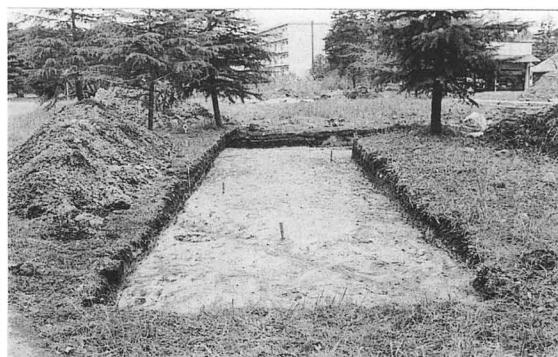
1. AI-7区検出遺構（東から）



2. AI-7区ピット1セクション（東から）



3. AI-14区東壁セクション（西から）



4. AF-18～AI-17区全景（南東から）



5. AI-21・22区全景（北東から）



6. AR-5区ピット1セクション（東から）

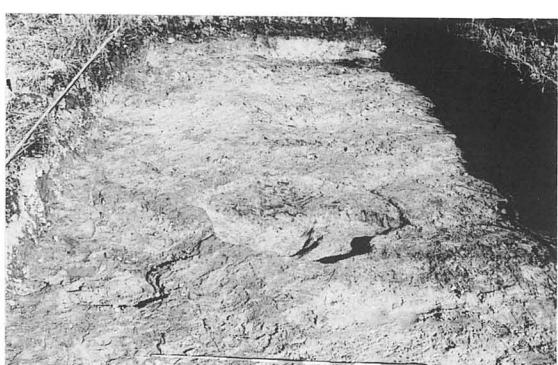
7. AR-5区検出遺構（南から）

図版13 芦ノ口遺跡第2次調査調査状況(2)

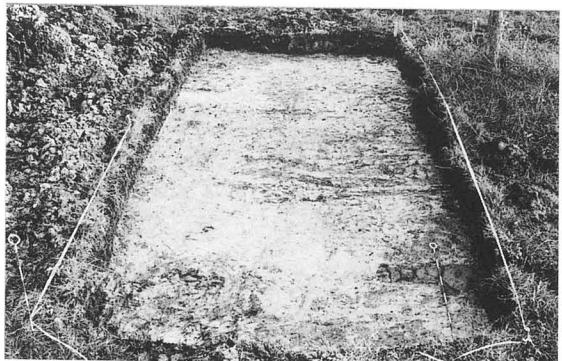
Pl. 13 Views, features and cross sections of Grid AI-7～AF-18, AI-21・22 and AR-5 at TM2



1. AR-12・13区検出遺構（西から）



2. AS・AT-15区全景（西から）



3. AU-21・22区全景（北から）



4. AU-22区西壁セクション（東から）



5. N 4・5区付近遠景（南西から）

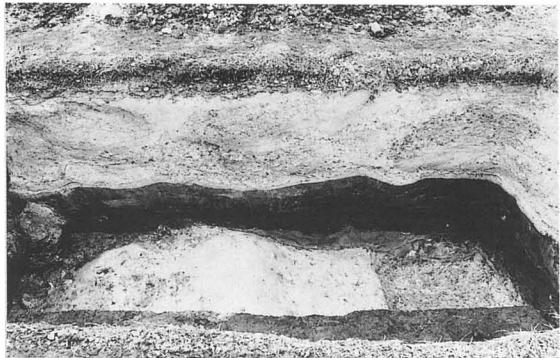


6. N 2区8層樹木出土状況（西から）

7. N 2区全景（南から）

図版 14 芦ノ口遺跡第2次調査調査状況(3)

Pl. 14 Views, features and cross section of Grid AR-12・13, AS・AT-15, AU-21・22 and N2 at TM2



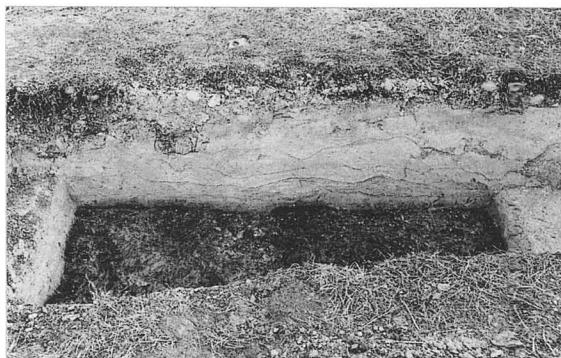
1. N 2 区西壁セクション（東から）



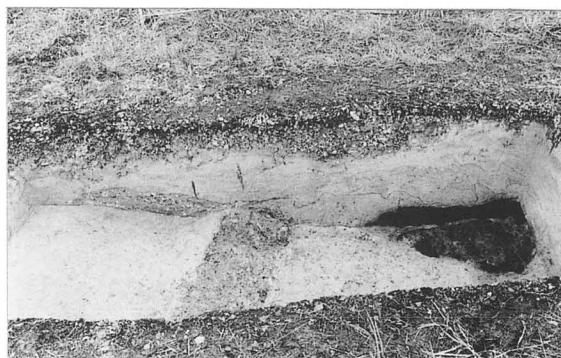
3. N 3 区全景（南から）



4. N 4 区全景（南から）



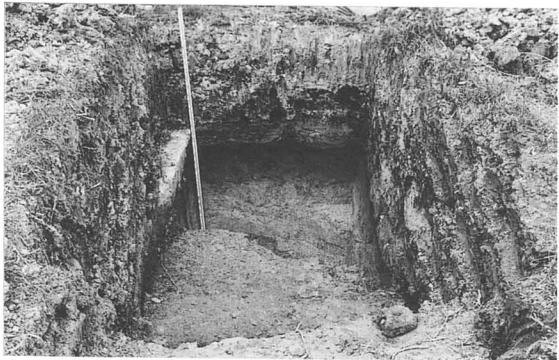
5. N 4 区西壁セクション（東から）



6. N 5 区西壁セクション（東から）

図版15 芦ノ口遺跡第2次調査調査状況(4)

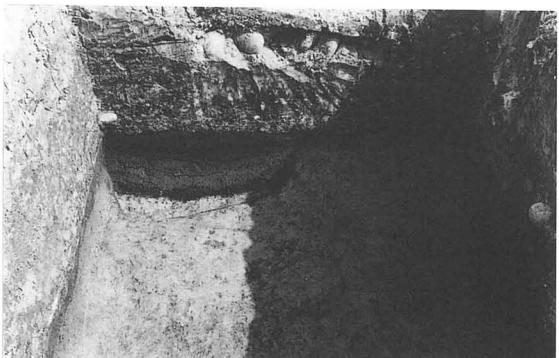
Pl. 15 Views and cross sections of Grid N2, N3, N4 and N5 at TM2



1. N 6 区全景 (西から)



2. N 7 区西壁セクション (東から)



3. N 7 区 1 号土坑 (北から)



4. N 8 区遺物出土状況 (西から)



5. N 8 区全景 (南から)



6. N 8 区東壁セクション (西から)



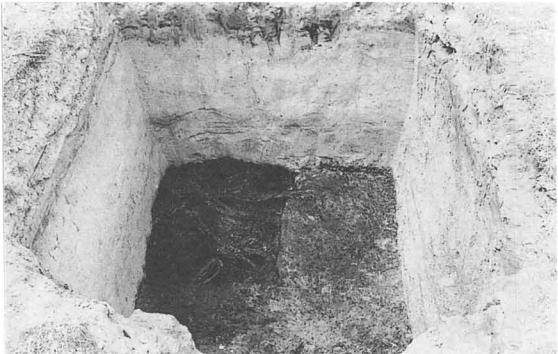
7. N 9 区西壁セクション (東から)

図版16 芦ノ口遺跡第3次調査調査状況(1)

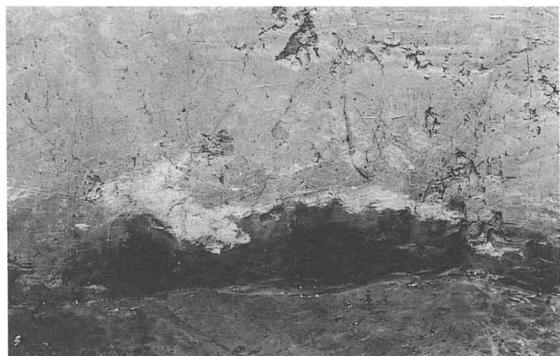
Pl. 16 Views, features and cross sections of Grid N6, N7, N8 and N9 at TM3



1. N10区全景（南から）



2. N11区全景（南から）



3. N11区西壁セクション（東から）



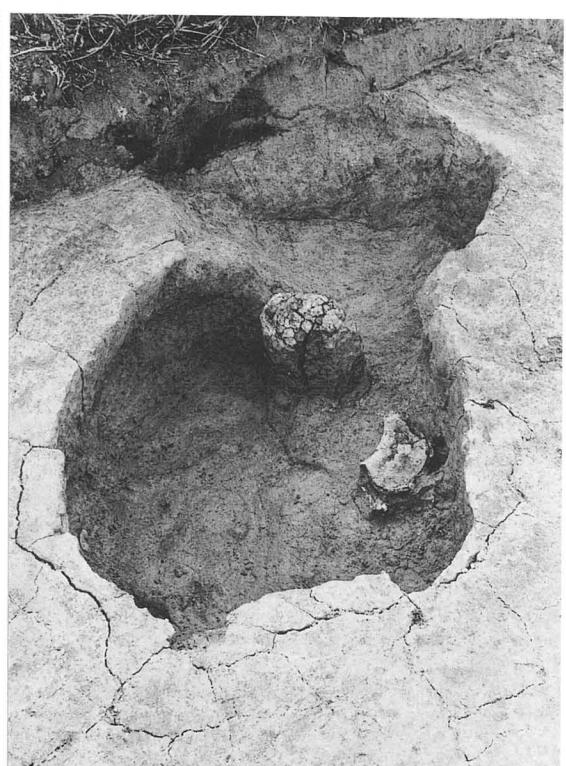
4. N11区泥炭層内根株検出状況（東から）

図版17 芦ノ口遺跡第3次調査調査状況(2)

Pl. 17 Views and cross section of Grid N10 and N11 at TM3



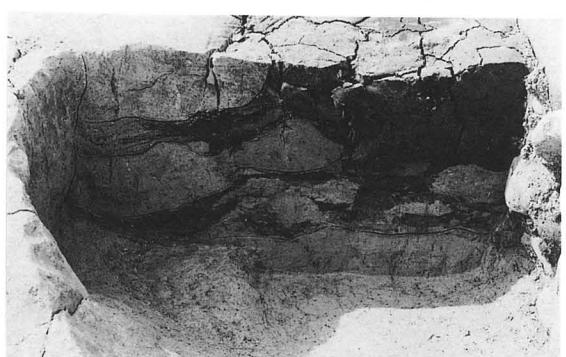
1. N12区全景（南から）



2. N12区 3号土坑（南東から）



3. N12区 6号土坑遺物出土状況（南から）



4. N12区 6号土坑セクション（南から）



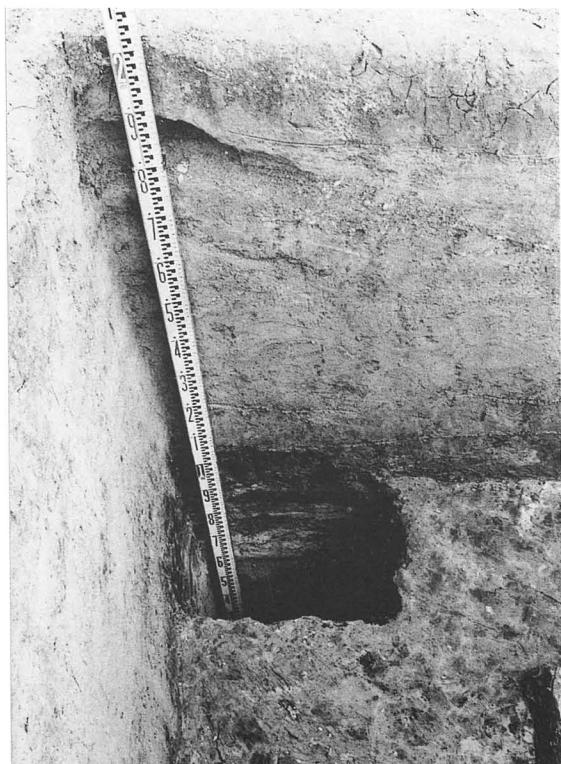
5. N12区 1号土坑セクション（南から）

図版18 芦ノ口遺跡第3次調査調査状況(3)

Pl. 18 View, features and cross sections of Grid N12 at TM3



1. N12区深掘西壁セクション（東から）



2. N14区深掘西壁セクション（東から）



3. N14区全景（東から）



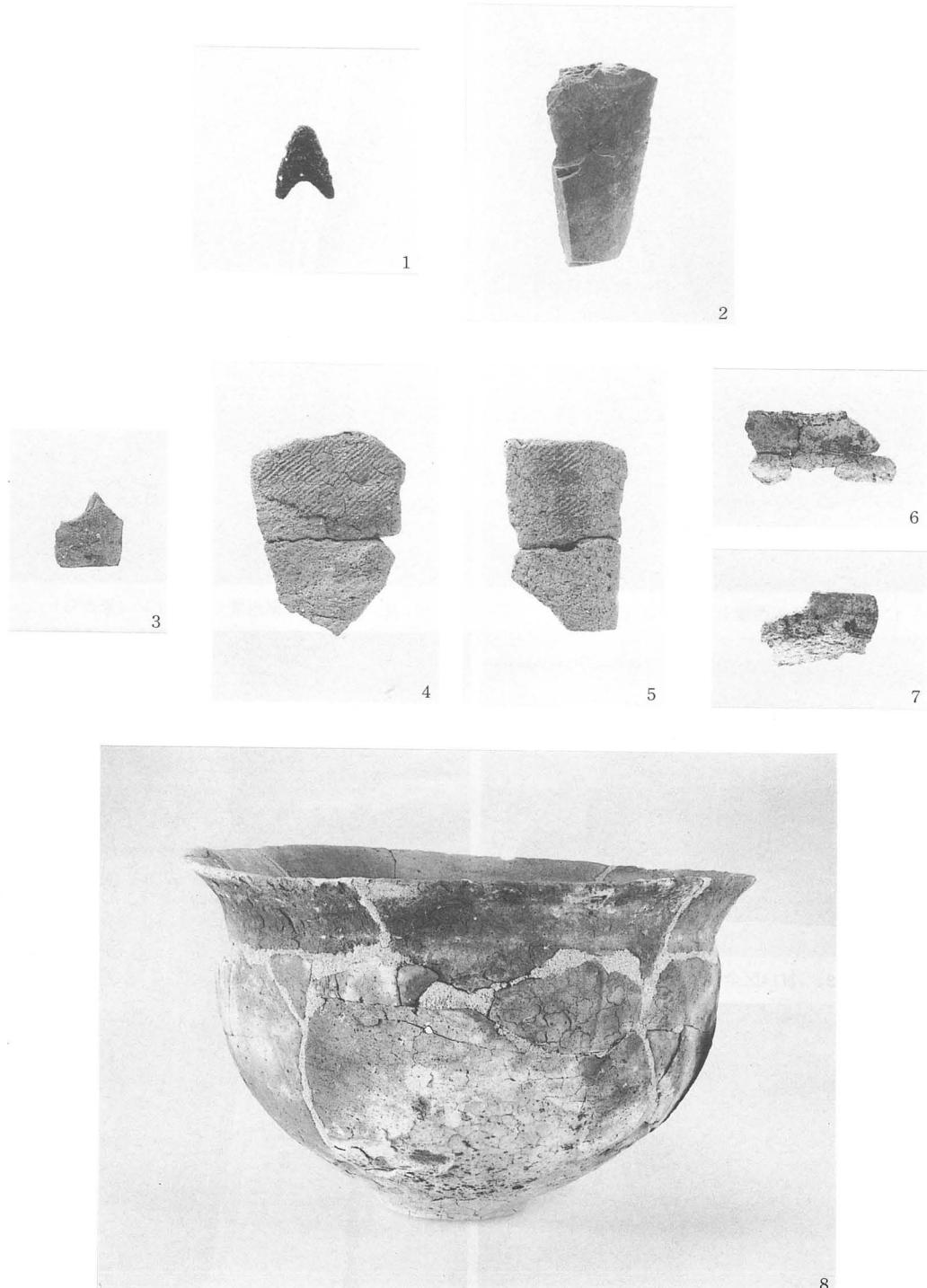
5. N15区深掘状況（南から）



4. N15区溝跡（南から）

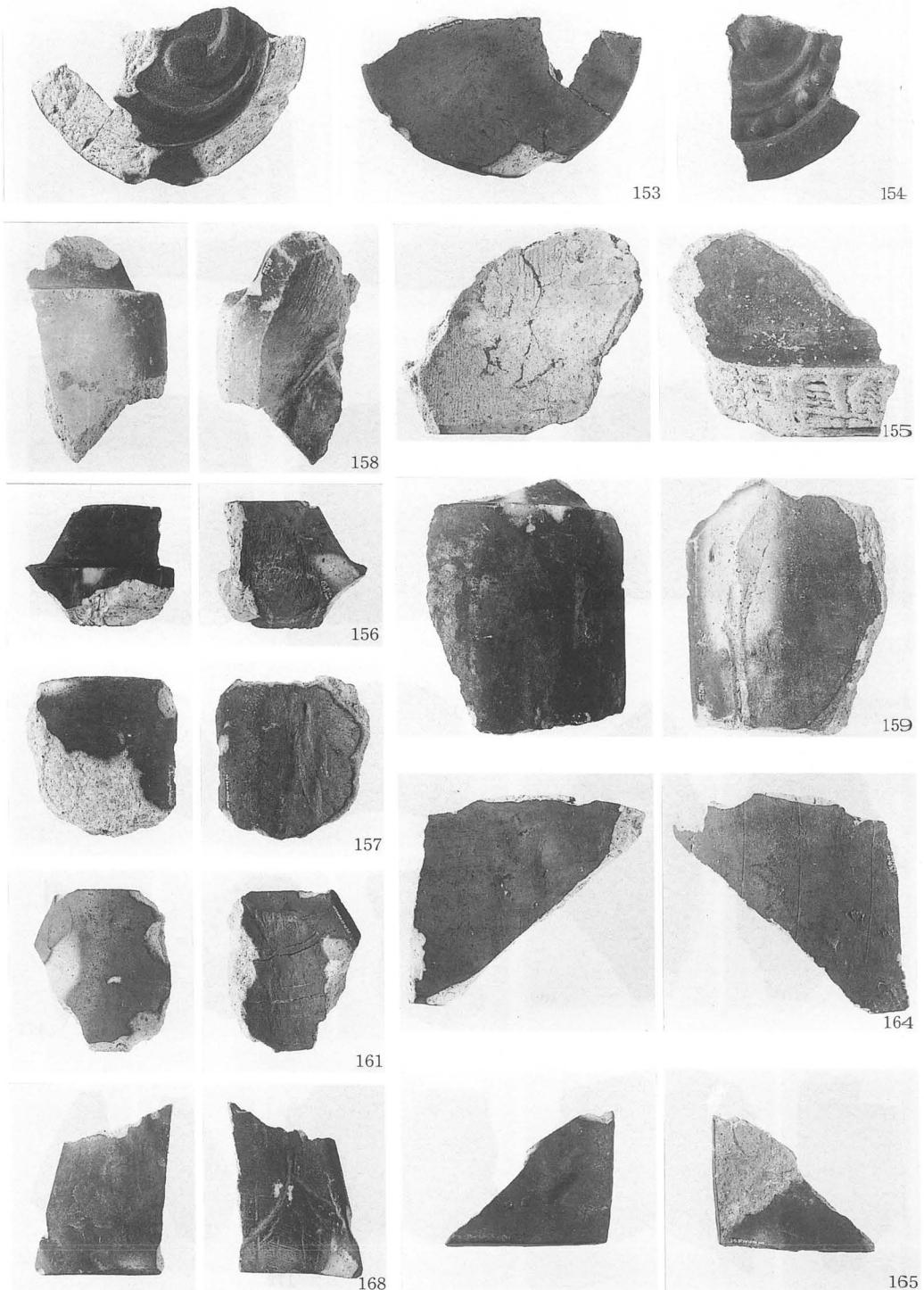
図版19 芦ノ口遺跡第3次調査調査状況(4)

Pl. 19 View, feature and cross sections of Grid N12, N14 and N15 at TM3



図版20 芦ノ口遺跡第2次・第3次調査出土遺物

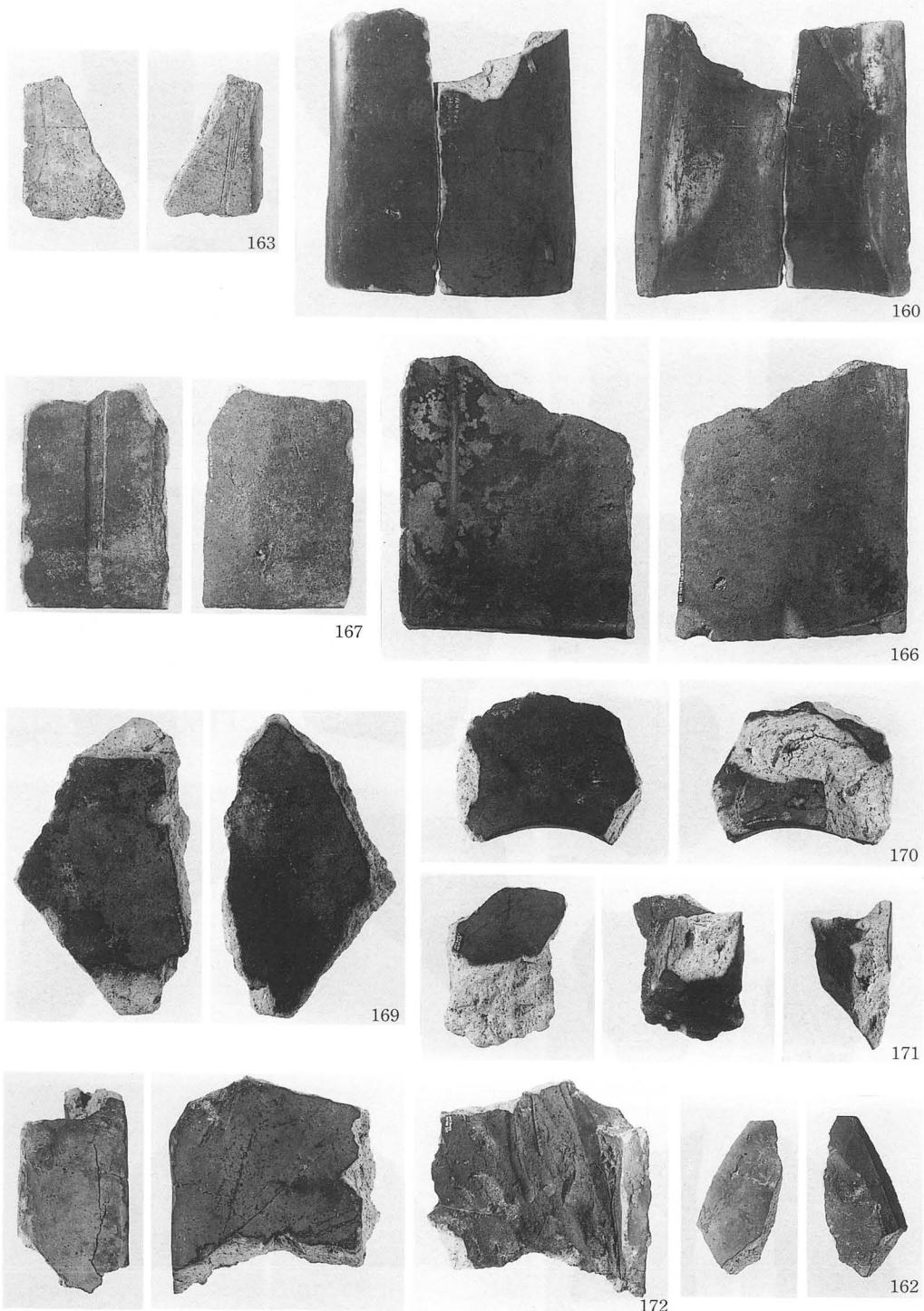
Pl. 20 Various implements from TM2 and TM3



図版21 仙台城二の丸跡第9地点I期の瓦(1)

Pl. 21 Roof tiles of phase I from NM9(1)

S = 1 : 4



図版22 仙台城二の丸跡第9地点I期の瓦(2)

Pl. 22 Roof tiles of phase I from NM9(2)

S = 1 : 4

報告書抄録

ふりがな	とうほくだいがくまいぞうぶんかざいちょうさねんばう							
書名	東北大学埋蔵文化財調査年報							
副書名								
卷次	9							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	須藤 隆・藤沢 敦・関根達人・菊池佳子							
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平二丁目1-1 TEL 022-217-4995							
発行年月日	西暦1998年2月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
仙台城跡	宮城県 仙台市 青葉区川内	市町村	遺跡番号					
		04100	01033	38° 15' 18"	140° 51' 23"	1992. 2.17 ~ 3. 5	10	学校施設整備 外灯取設に伴う事 前調査
芦ノ口遺跡	宮城県 仙台市 太白区 三神峯 一丁目他	04100	01315	38° 13' 25"	140° 51' 33"	二次調査 1989.10.23 ~ 11.22 三次調査 1991. 5.13 ~ 5.31	300 150	学校施設整備 原子核理学研究施設 電子ライナック施設 新設に伴う試掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
仙台城跡	城館	近世	石敷遺構 1基	陶磁器				
二の丸跡			石組溝 2条	土師質土器・瓦質土器				
第10地点			ピット	瓦・硯				
芦ノ口遺跡	集落跡	縄文 古墳	土坑 ピット 溝跡	縄文土器 石器 土師器	人工遺物は伴なわないが、約 3万3千年前と推定される泥 炭層が良好な状態で存在して いる。			

東北大學埋藏文化財調査年報 9

平成10年2月27日

発行 東北大學埋藏文化財調査研究センター
〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1-1
東北大學遺伝生態研究センター内
TEL 022(217)4995

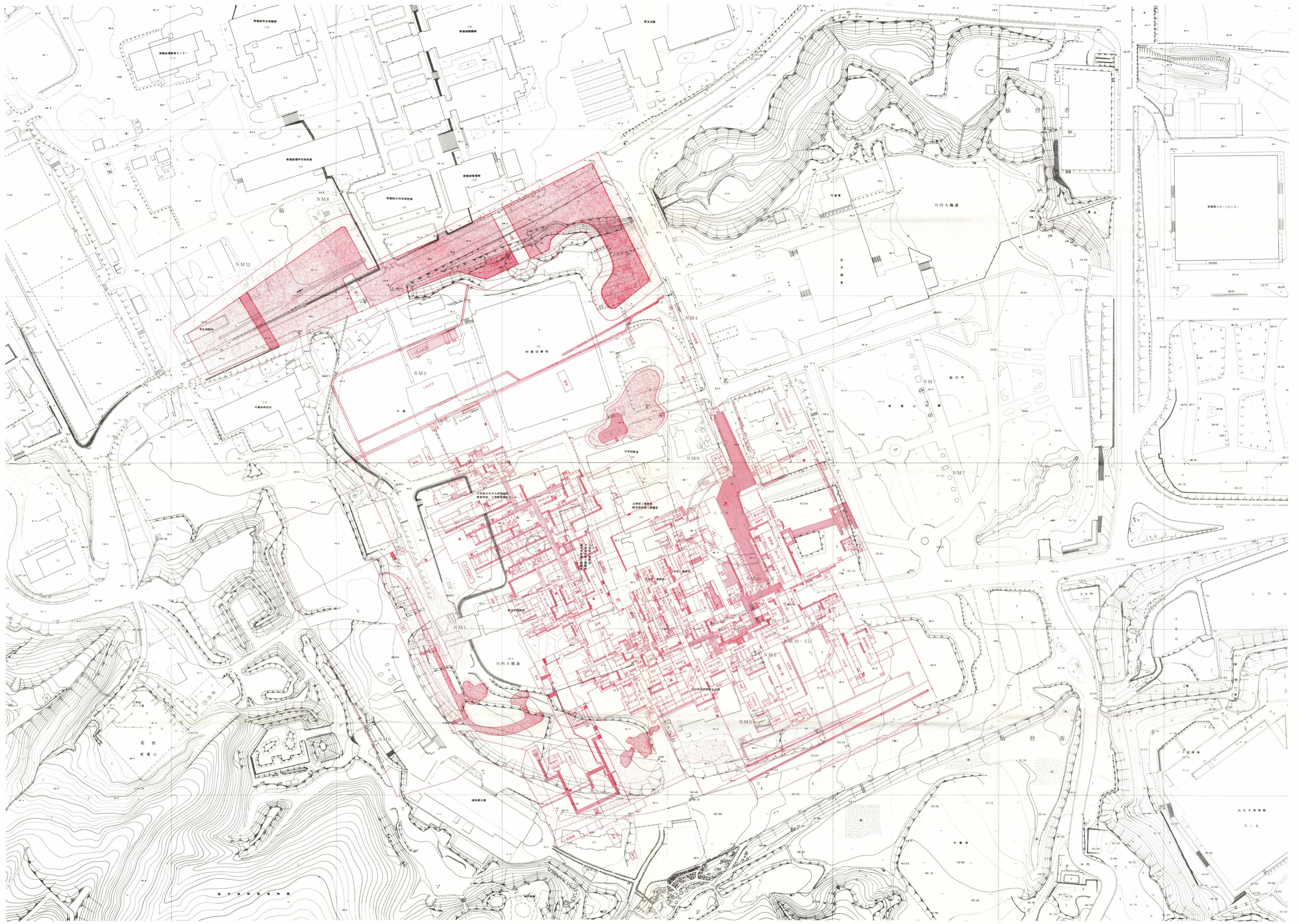
印刷 株式会社ホクトコーポレーション

東北大学埋蔵文化財調査年報 9 付図

付図 1 現況での仙台城二の丸跡建物の配置復元

付図 2 仙台城二の丸跡出土磁器の変遷

付図 3 仙台城二の丸跡出土陶器の変遷



付図1 現況での仙台城二の丸跡建物の配置復元

(縮尺 1 /1,000、建物部分の絵図は文化元年図を使用)

Attached fig.1 A illustration showing locations of structures of *Ninomaru* on the present map

年代	中 碗 類	小碗・小杯・猪口・鉢等	III 類	その他の器種	一括資料等
16世紀末葉～17世紀初頭	1		3, 4, 5, 6a, 6b, 7, 8, 9, 10, 11, 12	13	第9地点8層・7層 16号溝 〔3, 5, 6, 8〕
17世紀前葉～17世紀後葉	14, 15, 16, 17	18	19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43		1～13 中国産
17世紀末葉～18世紀初頭	44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55	56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64	65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74	75, 76, 77, 78, 79, 80	14～22, 24～43 肥前産 23 中国産 第5地点北区Ⅶ～V層 南区3層 4号土坑 〔46～56, 58～61〕 〔63, 64, 66, 70〕 〔74～76, 78〕
18世紀前葉	81, 82, 83	84, 85	86, 87	88	第5地点3号土坑 〔81～85, 88〕 81～88 肥前産
18世紀中葉～18世紀後葉	89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 113, 114, 115, 116, 117, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 124, 125, 126, 127				第9地点15, 16号土坑 〔89～120, 123～127〕 89～127 肥前産
18世紀末葉～19世紀初頭	128, 129, 130, 131, 132, 133, 134, 135	136, 137, 138	139, 140, 141	142, 143	第9地点2号池 〔129～131, 139, 143〕 128～143 肥前産
19世紀前葉～19世紀中葉	144, 145, 146, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 155, 156, 157, 158, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 165, 166, 167, 168, 169, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 182, 183, 184, 185, 186, 187, 188, 189, 190, 191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 199, 200, 201, 202, 203, 204, 205, 206, 207, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 214, 215, 216, 217, 218, 219, 220, 221, 222, 223, 224, 225, 226, 227, 228, 229			第9地点1号池 2号溝 1号井戸 第5地点1, 2号土坑 〔144～229〕 144～150, 156, 162, 164, 167～169, 172, 175, 177, 187, 189, 196, 197, 199, 201, 205, 208, 210, 212, 217, 218, 221, 223 以上 肥前産 153～155, 158～160, 161, 163～165, 171, 173, 174, 176, 178～181, 183, 185, 186, 188, 190～192, 194, 195, 198, 204, 207, 209, 213～215, 219, 220, 222, 225～229 以上 濱戸産 151, 206, 224 切込産 152, 157, 166, 200, 211, 202, 205 以上 平清水産 184 中国産（清朝） 216 関西産？ 159, 170, 182, 185, 193, 222 以上 地産不明	
19世紀後葉～20世紀初頭	230, 231, 232, 233, 234, 235, 236, 237, 238, 239, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246	247, 248, 249, 250, 251, 252	253, 254, 255, 256, 257, 258, 259, 260, 261, 262	263, 264, 265, 266, 267	第8地点堀埋土Ⅲ～V層 〔230～266〕 230, 232, 235～238 240～242, 245, 246 247, 263 以上 平清水産 233, 244, 248～252, 258 259, 265, 266 以上 濱戸産 231, 234, 239, 243, 255 260, 261, 263, 264, 267 以上 産地不明

付図2 仙台城二の丸跡出土磁器の変遷
Attached fig.2 Chronological sequence of porcelains from the second citadel of Sendai Castle

	供膳具(碗類・皿類・向付・徳利・土瓶等)	貯蔵具(壺・甕類)	調理・加工工具(鉢・擂鉢・鍋・湯通し等)	仏具・燈火具・喫煙具・化粧具・その他	一括資料等
16世紀末葉 ~17世紀初頭		30			第9地点 8層・7層 16号溝 1, 2, 6 ~ 9, 16 ~ 22 25 ~ 40
17世紀後半 ~18世紀初頭		53			第5地点 北区VII-V層 南区3層 4号土坑 42, 43, 45, 47 ~ 51 53, 58 ~ 64, 66 ~ 70
18世紀前葉					42 ~ 44 大堀相馬產 45 ~ 58, 65 ~ 67, 69 以上 肥前產 68 潟戸・美濃產 70 京・信楽產 59 ~ 64 产地不明
18世紀中葉 ~18世紀後葉					第5地点 3号土坑 71 ~ 73, 75 ~ 77 80, 81
18世紀末葉 ~19世紀初頭					第9地点 15, 16号土坑 82 ~ 95, 98 ~ 112 114 ~ 145, 147 ~ 164
19世紀前葉 ~19世紀中葉		230			82 ~ 100, 118 ~ 127 129, 134, 135, 137 ~ 140 150, 152, 155, 164 以上 大堀相馬產 103 ~ 112, 136, 159 以上 京・信楽產 113, 114, 116, 117, 128 149 以上 潟戸・美濃產 115, 131, 144 肥前產 130, 132, 133, 151, 153 154, 156, 160 ~ 162 以上 小野相馬產 101, 102, 141 ~ 143 145 ~ 148, 157, 158, 163 以上 产地不明
					第9地点 2号池 3号溝 166 ~ 176, 178 ~ 185 187, 189, 190 165 ~ 173, 178 ~ 182, 184 186, 188, 189 以上 大堀相馬產 174, 175, 177, 191, 192 以上 潟戸・美濃產 176 肥前產 183 京・信楽產 185, 187, 190 堤產
					第9地点 1号池 2号溝 第5地点 1・2号土坑 1号井戸 193 ~ 204, 206 ~ 208 210 ~ 214, 216 ~ 266
					193, 200, 209, 212 以上 潟戸・美濃產 194 ~ 199, 203 ~ 205 208, 211, 213 ~ 229 230 ~ 241, 243 ~ 247 249, 254 ~ 258 261 ~ 263 以上 大堀相馬產 201, 202 平清水產 206, 207, 266 以上 京・信樂產 210, 230 ~ 238, 242 250 ~ 253, 259, 260 以上 堤產 248 淡路產？ 264, 265 产地不明

付図3 仙台城二の丸跡出土陶器の変遷

Attached fig.3 Chronological sequence of glazed ceramics from the second citadel of Sendai Castle